
銀色の狭間

かわ ひらこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の狭間

【Nコード】

N7610K

【作者名】

かわ ひらこ

【あらすじ】

三十路も近い、OLの私。ある日の帰り、道端でものすごく汚れた大型犬(?)を拾い、数日間の奇妙な同居生活を送る。そのことが、その後の自分の世界との決別を意味しているとは思ってもよらずに……。犬だと思っていた銀の狼に無理矢理連れられ、異界の国メリトゥスに渡った私の日常、そして巻き起こる様々な事件を描いた作品です。異界での話がメインとなっております。

出会い 1日目

1日目

最初は黒いゴミ袋が2つほど並べて置いてあるのかと思った。

近くまで来て、それがようやく蹲った犬であることがわかった。

薄暗い夜道、近所のスーパーから歩いて自宅マンションまで帰る途中。

私は道端でぐったりした大型犬を発見したのである。

私はその犬をまじまじと観察した。

犬は雄で大きさから考えると推定2〜3歳。

土、もしくは乾いた泥のようなものでもの凄く汚れている。

土といえば、たしかにこの道の付近に小さな畑はあったけれど、それにしたってこれは酷い。

毛色は汚れが薄い部分から推測すると灰色っぽい気がする。

弱っているのはもしかして病気だから？

ハスキーにしてはちょっとガタイが良すぎる、シェパードか？

……と、そんなことを思いつつ、犬を眺める。

可哀想だが、私のマンションはペット禁止（そもそも大型獣は論外）のため、見捨てざるを得ない。

じっと見つめていると、犬の鼻がぴくぴくと動いた。

だがそれだけだった。

呼吸はしている。取り合えず生きてはいるようだ。

スーパーで生物も買っていたので、私は一度マンションに戻ることにした。

けれど道すがら、あの無残な姿が目奥でちらちらと蘇る。

私の頭の中は、いつの間にかあの犬のこれからの処遇に関する事でいっぱいになっていた。

きっと私でなくともほかの誰かがあの犬を助けるだろうか、もう誰かがとつくに通報していて、もうすぐ警察が来るだろうなどといった考えがぐるぐると渦巻いていた。

……だが僅かな逡巡ののち、結局私は元来た道を引き返したのである。

犬はまだその場所にいた。

動いた様子はない。

私は犬の正面に膝をつくと、スーパーの袋の口をしっかりと縛ってから、紐の部分を自分の右腕に通した。

そして、犬のその大きな体の下にそっと両手を差し入れ、ゆっくりと抱き上げた。

……重い。

だが私はその汚れた大型犬をしっかりと抱きかかえて、歩いて10分のマンションに連れ帰ろうと決心したのである。

保健所や警察への連絡を第一に考えないではなかったが、私はとにかく、今日の前にいるこの生き物を助けることで精一杯になっていた。

抱き上げたとき、服が思いっきり汚れたが、今更背に腹は代えられない。

抱きかかえている間、犬は一度も目を開けなかった。

時折鼻と耳をぴくつかせるだけだった。

そして犬はかなり重かった。

これは絶対40キロ以上はある。

この生き物を抱きかかえ、おまけにスーパーの袋を右手にぶら下げ
ての10分間の道のりは、正直もの凄くしんどかった。

いくら世の中広しといえども、薄暗い夜道を汚れた大型犬をかかえ
て、見るも無残な形相で歩いている28歳の女性会社員なんてな
かないわよね。

今なら突然現れた変質者とガチンコ勝負をしても勝てる気が……い
やそれはないか。

私のマンションは東京都郊外の某駅から徒歩で約15分、家賃共益
費込み6万5千円6畳1Kフローリング（風呂・トイレ別、室内洗
濯機置き場あり）の物件である。

この部屋の家賃で給料の約3分の1は飛んでいくのだが、トータル
面で手ごろな物件がこれだったのだから、まあ悪くはないだろう。

もつと都心に行けば、同じ条件でも家賃はさらに高くなるのだから。

周囲を見渡し、誰もいないことを確認すると、私は静かにマンショ
ンの階段を上り、自分の部屋へ入った。

まずは犬を狭い玄関にそっと置き、押入れから引っ張り出してきた
古い毛布を畳んで敷物代わりにする。

狭い廊下に敷いたその毛布の上に、持って来たバスタオルにくるんだ犬を寝かせた。

犬はまだ目を開けない。

体を拭いて手をよく洗い、食料品を冷蔵庫に詰め終わると、レンジの中に、買って来たばかりの鳥のささ身を耐熱皿に入れ、上からラップをかけたものを放り込んでチンする。

ささ身に火が通る間、犬に水をあげるとゆっくりだが全部飲んだ。

出来上がったささ身もちぎって少しずつ食べさせる。

これもゆっくりだが全部食べた。

よし、食欲があるなら回復の見込みはある。

取り合えず犬の顔と足だけは、お湯に浸して絞ったタオルで拭いておいた。

タオルで拭くと、犬の毛色が少しずつわかってきた。

思っていたよりも明るい灰色のようだ。

でも軽く拭いただけでは、顔の汚れはあまり取れず、洗面器のお湯も一瞬で真っ黒になった。

犬は本当にどこもかしこも汚れていた。

どうすればここまでぼろくそに汚れることができるのかというくらいに。

今日1日で着ていた服と毛布1枚とタオル大小2枚を通常使用不可能の状態にしたが、この生き物の命には代えられない。

タオルや服はあとで雑巾にしよう。

犬はやがて深い眠りについた。

まだ若いし、ガタイも良いのだから死ぬことはあるまい。

生きろよ、犬。

出会い 2日目

2日目

午前5時ごろ、トイレの水を流す音で目が覚める。

犬を看病しているうちに、どうやら床で寝てしまっていたようだ。

体がきしんで痛い。

……一応自己確認しておく。

この部屋にいるのは私と昨日拾ってきた大型犬だけだ。

まさかと思ったが、そのまさかだった。

毛布の上に犬の姿はなかった。

昨日の犬は、歩けるようになったのだ。

凄まじいほどの回復力である。

だが本当に驚くのはそこではない。

あの犬は俄かには信じられないが、人間用のトイレを使って、たっ

た今用を足していたようなのだ。

犬はどうやら前足でドアを開けてトイレから出てきた模様である。

その姿を見て啞然としたのだが、寝起きだということもあって、どう驚いていいのかわからない。

犬は私にはお構いなく、何事もなかったかのように毛布の上で丸くなった。

半信半疑で自分もトイレへ行く。

床や便座などは、犬の体の汚れが多少付いていたのでお世辞にも綺麗とはいえなかったが、少なくともトイレ自体は正しく使用できているようだった。

私はトイレトペーパーで自分が使うスペースを拭いて綺麗にしてから用を足した。

「しかしどうやったんだろう……」

まあ（体勢はさておき）、考えられるとすれば、以前はどこぞのお金持ちに飼われていたが、昨今の不況の煽りを受けて理不尽にも捨てられた犬だとか、優秀だが脱走癖のある犬（？）、といったところであろうか。

トイレから出た私は、そのような理論で半ば強引に自分を納得させてから、犬と自分の朝食作りに取り掛かった。

朝食は雑炊（みじん切りにしたにんじん、豚肉、グリンピース、ご飯）。

材料を入れて煮立たせた上で、先に味なしの状態のものを取り分けておく。

これが犬用で、犬にはこれがある程度冷ましたものを与える。

自分用の味付けはだしの素と塩胡椒少々。

この献立は、実は病気や年取った犬をメインに考えられたものである。

だが、この方が時間も手間もかからないし、何よりヘルシーだ。

それに、病み上がりかもしれない犬の健康を優先させることは、私にとって至極当然のことと思われた。

犬は昨日とは打って変わって旺盛な食欲を見せる。

これで病気ではないかという心配は消えた。

体を激しく掻く様子も見られないので、ノミや皮膚病などの心配も今のところはなさそうだ。

食後にはちゃんとトイレへ用を足しに行った。

器用な犬だ。

少なくとも、これでトイレシートを新たに購入したり、他の住人に見つかるリスクを侵してまで、用足しのための散歩に出ることは避けられた。

犬、偉いぞ。

……だが、トイレはあとでしっかり掃除しておこう。

大家さん、なるべく綺麗にしますから、取れなかった汚れはどうか見逃してください。

次に犬をお風呂に入れることにした。

この姿のままでこれ以上うつかれては、遠からず部屋中真っ黒になるのは必至だ。

被害を最小限に止めるべく、私が「おいで」というと、犬は素直についてきた。

狭い風呂場の床にお座りさせる。

犬、やっぱりでかい。

まずは温かいシャワーで一通りの汚れを洗い流す。

案の定、床一面真っ黒になった。

服は昨日汚したものをそのまま着ていたので、いくら汚れてもどうとでもないが、さすがに昨日自らこのぼろ雑巾のような塊を抱えて家まで運んできたのだということに驚愕する。

勢いって恐ろしい。

だが、この生き物を見捨てることを私の信念が許さなかったのだ。

私は小さいころに、飼っていたメイという名の柴犬を自宅で看取ったこともあってか、弱った生き物を見るとどうしても放っておけないような性格に育っていた。

ああ、思えば学生時代、自分の信念を貫くために、暴行されて弱っているいじめられっこを庇っていじめていた男子グループとガチでケンカしたこともあったわね……。

中2のときだったから、まだ私と彼らとの体格もさほど変わらなかったこともあってか、私はその男子グループに（奇跡的に）圧勝してしまったのである。

以来、助けた人からは救世主のように崇拜されてしまうわ、ほかの一般生徒（ごく一部の友人を除く）からは少し遠巻きに接されるわ、良くないグループの方々からは（アイツを怒らせると確実に血を見るぞ的な）変な意味で一目置かれるようになってしまうわという痛い思い出がある。

さすがに今はそうでもなくなったきたのだが、今回の件で「世話焼きの自分」というものを再確認したようにも思う。

変なところで不器用な私は、そのことでよく同姓の友人たちから「見た目と中身のギャップが激しい・良い意味で詐欺だ（どういう意味だ、詐欺って何だ）・こんなに男気溢れる人は見たことない（そんなに凛々しいのか）・私兄貴に一生ついていきます（決して姐御ではないらしい）・外見は安めぐみ等の癒し系、なのに中身はすでに人生を達観した枯れた中年男性、たまに変態エロ親父（貴様、うら若くはないけど一応乙女心は辛うじて持っている人間をつかまえてこれはなんという言い草か）・年齢性別詐称、整形疑惑あり（てかこれ言った奴ら全員ちよつとこっち来い）」などと揶揄されている。

……。

最初は私の信念についての回想だったはずなのだが。

それにしても私の友人たちは何か全体的にちよつと酷くないか。

いや、むしろこれは（特に後半）明らかにちよつとどころの騒ぎではないのではないか……。

……気を取り直し、作業に戻ることにする。

犬は床にじっと座って目を閉じている。

そういえば、まだ犬の目を正面からちゃんと見ていないことに気付く。

たしか、水色であったことはおぼろげに記憶しているのだが。

全身の汚れが水と馴染んできたころ、私は浴槽の縁に腰を掛けて、いくつかあるオーガニック石鹸の中からユーカリを選んで犬を洗いはじめた。

私はどちらかというと敏感肌なので、石鹸はオーガニック系のものを選んで使用している。

ちなみに、犬の皮膚は人間の5分の1の薄さであるため、人間用洗剤をそのまま使用すると、肌に負担をかけてしまうのだそうだ。

そのため、この石鹸は私と犬、両方にとって使いやすいものなのである。

さらにユーカリの成分には抗菌効果、脱臭効果、虫除け、ノミ取り効果まである。

犬、私が微妙に敏感肌で良かったな。

洗っては流してを何度か繰り返す。

最初は真っ黒だった泡も、回を重ねるごとにだんだんとグレーになり、ようやく今真っ白になっている。

犬は私に洗われている間、とても大人しかった。

時折気持ち良さそうにキュンキュンと小さな声で鳴く。

ちょっぴり調子に乗った私は、一旦犬の体から今の泡を洗い流すと、今度はラベンダーの石鹸を手に取り、それをふわふわに泡立ててから丁寧に洗い始めた。

（ちなみにラベンダーには洗浄効果、リラックス効果、痛み、痒みの消炎効果、傷、虫さされの治療効果がある。）

私はまるで、この犬が自分の大切なものであるかのように、犬の全身を丹念にマッサージしていったのである。

「そういえば小さいころ、メイにもこうやってお風呂でよくマッサージしてあげてたよなあ。最期も『死なないで、死なないで』って思いながら、一生懸命マッサージしてたんだよなあ」

はっと気が付くと、犬はとろんとした目をして、私の肩にくたつと頭を預けている状態だった。

風呂場にはラベンダーの香りが充満している。

私は慌てて犬の体から泡を綺麗に洗い流し、丁寧に濯いだ。

これで作業終了。

……しかし、ちょっとだけやり過ぎてしまった感は否めない。

私は一度何かに没頭すると、そのことに対し職人のように真剣に取り組む傾向がある。

今回もいつの間にか真剣に犬を洗ってしまっていた。

というか、あの体勢はまるで私がいたいけな家出少女に手を出した

最低変態エロ親父のようではないか。

いや、正確には家出少年もとい家出雄犬なのだが。

……。

……これ以上のこの件に関して言及すると、何か自分にとってとても大切なものを永遠に失ってしまいそうな気がするのでこれぐらいにしておく。

バスタオルでよく体を拭いた犬を先に浴室から出し、自分もTシャツとハーフパンツに着替えてから浴室の外へ出た。

気合を入れて犬の体を洗ったせいか、犬は見違えるほど綺麗になった。

灰色だと思っていた毛並みは艶々と輝く銀色で、ドライヤーで乾かすと、手触りのとても良いふさふさの毛並みになった。

犬の瞳はさながらブルートパーズのように澄んだ水色で、きらきらと輝いている。

このときになって、ようやく私はこの犬がハスキーやシェパードなどではないということに思い至った。

「まさか、狼？　あり得ないと言いたいけれど、この毛色とこの体格を持つ犬種はそうそう思い当たらないし……とにかく、何にせよ、この犬は間違いなく狼もしくはそれに準ずるイヌ科の動物の血を引いているわよね。もしも狼だしたらシンリンオオカミ、もしくはその仲間かしら？　あ、狼といえばたしかハイイロオオカミが2008年にアメリカで絶滅危惧種に再指定されたんだったわよね……っていや待て自分、そもそもこんな危ない生き物が日本の東京都郊外に放置されているのが何かの間違いなのだとすることに気付けよ。日本はいつから動物ワンダーランドに？　動物の輸入規制は……」

私はぶつぶつと一人呟いていた。

ここに来て、自分の浅慮が悔やまれる。

自分の取るに足らない信念で、こんな得体の知れない危険動物を家に上げ、寝床と飯の世話までした挙句、あまつさえたった今まで狭い風呂場でのんきに密着しながらわしゃわしゃと体なんぞを洗ってあげてしまっていたのである。

恐る恐る犬を見ると、残念ながら（？）もうすっかり気力・体力とも回復したようである。

犬はちょこんと床にお座りをして、尻尾をパタパタと振りながら、きらきらとした目でこちらを見つめている。

大きな体軀にも関わらず、その愛らしい姿からは凶暴さのひとつかけらも窺い知ることとはできない。

だが、この犬（？）が本当は脱走癖のある犬などではなく、「闇の違法ルートで密輸入されたのち、どこぞの豪邸から脱走してきた野生返りの狼」なのだとしたら、自分はいつ咬み殺されてもおかしくはない状況なのである。

「うう、私は普段から慎ましく生活する一般人なんだから。……嫌だ、もしも夕方6時のニュースで『速報です。今日午後5時、東京都郊外で28歳の女性会社員が大型肉食獣によって咬殺されているのをマンションの管理人が発見しました。なお遺体は死後1週間が経過しており、遺体の損傷も激しく……』なんてことになったら……」

自分の想像に思わず頭を抱えてひとしきり苦悩すると、私はもう一度ゆっくりと顔を上げ、犬（取り合えず、この生き物が何であれ、便宜上、犬だと思うことにした）を見た。

犬は相変わらずきらきらとした目でこちらを見つめている。

この狭い6畳の空間で、私と犬はしばらくの間じっと見つめあった。

(……しかしこの犬、本当に綺麗な目をしているわね)

この犬は本当は危険な肉食獣なのかもしれない。

でも、人に慣れているし、大人しいし、お利口だし、1人でトイレにも行けるし、大丈夫だよね、きっと。

そう結論付けた私は、「あとは野となれ山となれ」という不穏な言葉を思い出しながら、腹を括ることにした。

「たとえば私がこの犬に殺されたとしても、それは自業自得。人生、一瞬一瞬を大切に生きることが肝心よね」

私は肩の力を抜くと、犬の前にしゃがみこんで目線を合わせた。

「よし、君の面倒は私が責任を持って見ます。だから、飼い主が見
つかるまで、よろしくね」

そういうと私は犬に笑顔を向けた。

犬は一瞬目を丸くしたようだった。

その反応は犬というよりまるで人間みたいねと、私は思った。

犬はそのまま私の顔を見つめていたのだが、尻尾だけは嬉しそうに
パタパタと揺れていたのだった。

どうやらこの犬、人の気持ちがちゃんと解るみたいね。

僅かでも気持ちに通じて良かった、と私は心底思った。

（自分の中では）犬とそれなりに打ち解けたと感じた私は、遅ればせながら保健所と警察に迷い犬の連絡をした。

保健所からは犬の預かり承諾の連絡を受けたが、もし保健所に預けた場合、飼い主が見つからなければ一週間で処分されてしまうとのことだった。

そのため、ここに預けるのは最後の手段ということにした。

このほかネットでも迷い犬と里親探しを試してみた。

迷い犬を預かってくれる動物病院も探すが、この時点ではめばしいところは見つからなかった。

窓の外を見ると、とても良い天気だったので、次は洗濯と掃除をすることにした。

まずは溜めていた自分の洗濯物を片付け、その合間に掃除をする。

その間、犬は部屋の隅で大人しくしていた。

掃除機の音にも動じないところから、この犬はやはり以前どこかで飼われていたのだと見て間違いないと思われる。

ああそれにしても、社会人はこういう休みの日でもない満足に家事をする余裕がないから、洗濯物が溜まるのはどうしたってしょうがない。

……いや、単に私がずぼらなだけなのかもしれないが。

自分の洗濯物が一通り終わると、今度は昨日使った毛布とタオルを洗濯することにした。

洗濯機に入れる前に風呂場で手洗いしていたのが良かったのか、洗濯槽はそれほど酷く汚れることはなかった。

狭いベランダいっぱい洗濯物を干し、掃除もひと段落したところで、ちようどお昼の時間になった。

昼はブルーベリージャムを塗ったトースト2枚とコーヒーで済ませる。

犬にはささ身をレンジでチンしたものをあげる。

そうして昼食を終えると、私はこれからのことについて考え始めた。

「さて、どうしようか」

まず、この犬の体調管理についてだ。

今のところ、基本的な面に関してはほとんど手がかかっていない。

好き嫌いはしない、吠えない、噛み付かない、（お風呂に入りたてということもあるが）毛は抜けないし獣臭くない、トイレは人間用でOKだし……

こんなに良く出来た犬、初めて見た。

でも、動物なのだからやはり何かしらの運動は必要だろうとは思っている。外に出すのは他の住人に見つかる恐れがあるから、おいそれとは出来そうにない。

「でもずっと閉じ込めておくわけにもいかないし……ストレスだっ
て溜まるだろうしなあ」

そう思いつつと犬を見ると、犬はつけっぱなしのテレビにじっと見入っていた。

とても静かだったので、取り合えずそのままにしておいた。

（何だか私、育児をテレビに任せるダメな母親みたい……）

犬があんまり静かなものだから、ふと興味本位で犬の目の前にリモコンを置いてみた。

今までテレビを見ていた犬は、今度は「何？ 何？」とでもいうようにリモコンと私とを交互に見る。

「ほら、ここのボタンが電源。押すとテレビがついたり消えたりするの」

そういいながら犬の前で実際に操作して見せる。

「ここがチャンネルでここがボリューム。画面が変わるボタンと音量が変わるボタンね」

先ほどまでテレビに釘付けだった犬は、今は私の一挙手一足を食べい入るように見つめている。

そして、私がもう一度犬の前にリモコンを置くと、犬はしばらく躊躇ったあと、恐る恐る右前足を差し出した。

ぽち。

ヴン。

真っ暗になる画面。

目を丸くする犬。

「そう、それが電源。今のは君が自分で電気を消したのよ。同じボタンをもう一度押してみて」

私はさっき犬が押したのと同じボタンを指差した。

私の指と顔を見た犬は、今度は少しだけ慣れたように、そのボタンを押した。

ぽち。

ウン。

犬が先ほどまで見ていた番組が映った。

今度は少しだけ目を丸くする犬。

私は笑顔で話しかけた。

「そうそう、よくできたねー、その調子。こんな風にほかのボタンも押してみるといいわよ」

私がにこにこしたまましていると、犬は「本当にいいの？」とでもいうかのように首をかしげたあと、リモコン操作に再挑戦し始めた。

犬は最初リモコンの細かい操作に苦戦していたようだったが、程なくしてそれらのボタンを肉球と爪で器用に押す方法を編み出したようだった。

それからは嬉々としてリモコンを操作をしながらテレビに齧りついていたのである。

そんな犬の横顔をしばらく見ながら、私は眉根を寄せながら、ふと思いついたことをぼそりと呟いた。

「君がもの凄く手がかからなくて、理解力も高いことがわかったのだけれど……、君、本当に犬なんでしょうね？ 背中にチャックとか、頭に遠隔操作のリモコンとかついてないでしょうね？」

そんなことがあるはずのないことは、一応理解しているつもりではあるのだが、そう呟かずにはいられない私だった。

夕飯も雑炊（かぼちゃ、おくら、鶏肉、豆腐）にした。

（離乳食ってこんな感じかしら？）

自分用の味付けはめんつゆにした。

基本ずばらでめんどくさがりの私と、好き嫌いなく何でも食べるこの健康優良犬とは、どうやら相性が良いようだ。

「本当に、よく出来た子でお母さん助かるわ」

なぜか母親の感慨に浸る私だった。

食後の後片付けも終わり、私がお風呂に入ろうと浴室の前まで行くと、なぜか犬も一緒についてきた。

「君は今日の朝入ったし、十分綺麗だから今日はもう入らなくてもいいのよ。それに、犬の入浴は普通週1程度で十分なのよ」

そう言って私が犬の目の前で着ていたTシャツを脱ぎ始めると、犬はなぜか慌てて部屋のほうへ向かった。

だが犬は、私が浴室に入ってドアを閉めると、戻ってきてその前にちょこんと座りこんだようだった。

すりガラスの窓からは犬のシルエットがぼんやりと見える。

（ど、ドアの前で待ってる……もしかして、私が出てくるまでずっと待つつもりなのかしら）

埒が明かないので、取り合えず先に自分の頭と体を洗っておく。

一人分のスペースしかない浴槽に身を沈めると、私はすりガラスをちらりと見やった。

「うう……、まだ座ってる」

その姿に、ご主人様を待つ忠犬ハチ公を想像してしまい、私は何だ

か切ない気分になってしまった。

「犬、お前、思えば見知らぬ土地に一人で来て、右も左もわからなくて、きつと心細かったんだろ？うなあ……そんなときに衣食住を提供してくれる人がいたら、私だってきつと縋っちゃうよ」

そんなこんなで、私は結局犬もお風呂に入れることにした。

ドアを開けると、犬は私の姿を見てぎょつとしたようだった。

私は自分の格好をまじまじと見直す。

そしてあることに思い至る。

ああそうか、私は今まで風呂場でも服を着てたものね。

犬、人間の「毛皮」は着脱可能なだよ。

君が驚くのも無理はないな。

私はそう一人合点すると、犬に向かって笑顔で「おいで」といった。

犬は目を伏せながらも、尻尾はパタパタと振っており、しばらくそのままでの状態でいた。

ん？ 犬、もしかして照れてるのか？

一応雄だし？

変なところで遠慮しいなんだな。

……って、いや、そんなわけないか。

その数瞬後、犬は意を決したように顔を上げると、尻尾を振りなが

らそつと浴室に入ってきたのであつた。

犬の体は朝洗つたから、今回は浴槽に浸からせるだけにする。

何分、浴槽のスペースが一人分しかないので、必然的に私は風呂から出る事になった。

代わりに入った犬は、少し窮屈な浴槽の縁に顎を乗せ、目を閉じている。

なかなか気持ち良さそうだ。

犬は、お風呂が好きなのかしら？

何にせよ、清潔なのは悪いことではない。

お風呂嫌いの子供もいるなかで、うちの子は本当に手がかからないわね。

あ、それにこれで散歩に行けなくても、若干の運動不足解消とストレス発散にはなると思うし。

洗濯物は増えるけど、一石二鳥だわと前向きに考えることにした。

さらにせっかくだからと、風呂場で犬の歯磨きもしてあげることにした。

バスタオル一枚を巻いた姿で浴室から出ようとする、犬の目が開いた。

安心させるように「待っててね」と声をかけて出ると、私は少し大きめに切ったガーゼを持って再度浴室へと戻った。

犬はおあつらえ向きに浴槽の縁に顎を乗せたままである。

「ちょっとそのまま置いてね」

そういうと私はガーゼを右手の人差し指と中指に巻きつけ、左手で犬の上唇をそっと持ち上げた。

「わあ、鋭い歯なのねえ。大きさを差し引いても、うちのメイとはやっぱり大違いだわ」

そういいながら、私は犬の歯を磨いていった。

「意外と綺麗なのね。まあ、これは歯茎のマッサージも兼ねているからいいか」

私は犬の上顎を持ち上げて、奥の歯まで綺麗に磨いていった。

犬は私の為すがままである。

普通、狼のような動物が口や鼻、歯を相手に委ねるのは、相手のことをよほど信頼しているか、相手に対して服従しているかのどちらか、もしくは両方である。

……もし今この犬が口を閉じたら、私の指など簡単に喰い千切られてしまうだろう。

でもこのときの私は、この犬に咬まれるかも知れないという考えには終ぞ及ばなかった。

あとで思い返してみると、私の場合はきっと、この犬の窮地を救ったことによって、犬の信頼を僅かばかりでも勝ち得ていたからなのではないかと思われる。

というか、それ以外に思いつく理由が見当たらない。

犬の歯磨きが終わると、私は浴槽の栓を抜いて、お湯を捨てた。

犬はお湯が流れていく様を興味深げに見ていた。

お湯を抜き終わると、私は浴槽を仕切るカーテンを引いた。

「そこで水気を飛ばしてくれるかな？」

カーテン越しに声をかけると、犬は勢い良く身体を振るわせた。

浴槽から出た犬をバスタオルで拭きながら、私は前の飼い主のしつ

けの良さに感謝した。

今日の犬の寝床は、私のベッドの隣の床である。

昨日のように狭い廊下で寝てもらうよりも、居心地はきっと良いだろうと思つてのことだ。

洗いたての毛布の上で、犬は気持ち良さそうに体を伏せた。

私はベッドの上で、犬を拾ってから今までのことを反芻していた。

勢いで拾つて来てしまったが、この犬のしつけの良さは、きっと前の飼い主がとてもきっちりとした人、あるいはしつけのプロに頼んだお金持ちであるからに違いない。

どんな経緯であの場所まで来たのかは知るべくもないが、きつとな

にか尋常ではない理由があつたのだらうと推測する。

……犬はきつと今も不安なのではないかと思う。

でも、この私が犬に対して「責任を持つ」という約束をしたのだから、安心してくれていい。

きつと良い飼い主を見つけるからね。

犬を見ると、今は毛布の上で丸くなり、前足に顎を乗せて目を閉じていた。

私はベッドの上から手を伸ばし、犬の頭をそつと撫でた。

「ここは安全だから。安心して、ゆっくり休んでね」

優しく撫でていると、閉じた犬の目から一滴の涙がこぼれた。

涙はそれを皮切りに、閉じた犬の両目から止まることなく溢れてきたのである。

犬の前足と毛布は、犬の涙ですぐに濡れていった。

……28年間生きてきたけど、犬がぼろぼろ泣くところなんて初めて見た。

メイだって、最期の瞬間でさえもここまで泣いたことはなかったのに。

私は犬が泣き止んで寝付くまで、ずっとそうしていた。

出会い 3日目

3日目

今日も朝食は雑炊（鶏肉、豆腐、卵、カブの葉っぱ、ご飯、牛乳）。

自分用の味付けはチーズと塩胡椒にした。

あとはカブの酢の物も作った。

ちなみに作り方は、まず皮をむいたカブを半分に切って、平らな面を下にして半球状の上側に碁盤の目のような切込みを半分ぐらいの深さまで入れる。

次にそれらをいちょう切り（十字に包丁を入れて四分の一の大きさ）にする。

切ったものをボウルに入れ、軽く塩もみをする。

すぐに柔らかくなるので、あとは酢と砂糖を混ぜた液に軽く漬ければ完成である。

これは母に教えてもらったレシピなのだが、そんなに手間もかからず、すぐに食べられるし美味しく出来るので重宝している。

犬はこの酢の物に興味を示したが、これは人間用なので気にせず私が全部食べた。

犬にはテレビを見てもらって、私は家事をしつつネット検索に勤しんだ。

だがこの日も芳しい情報は得られなかった。

仕方ないので、作業を中断し、早めの昼食を作る。

犬には少量の豚肉をチンしたものを与える。

家庭犬の食事は、基本的には1日2食でいいので、昼に与えるこれはおやつ代わりである。

自分には思い立って、マーガリンを塗ったトーストの上に目玉焼きを乗せたものを作ってみた。

イメージは「ラピュタ」のアレである。

ただ、私は目玉焼きはしょうゆ派なので、黄身にフォークでぷすつと穴を開けたところに少しだけしょうゆを垂らして食べた。

「ふ……やはり私の嗜好を優先させると忠実な再現には至らない、か。……所詮邪道ね」

なぜだか自嘲する私であった。

「それにしても、食後の洗い物がお皿2枚だけ（自分と犬用）って本当に楽だわ。いいえ、どうせならこの世の中から洗い物なんて全部なくなっちゃえばいいのに。そうしたら環境汚染もかなり改善されると思うんだけどなあ」

……環境問題にかこつけたずばらの切なる願いである。

することがなくなったので、読書をすることにした。

本を読みながら、ふと思う。

（そういえば、せっかくの長期休暇なのに、私ったら何やってんだろう）

休みはまだ4日はあるけれど、この分では長い時間家を空けることはできそうもない。

何よりあと4日で犬の預かり先を見つけなくてはならない。

もし出来なければこの犬は確実に保健所行きだ。

それはなるべくしたくない。

「はあ……、どうしよう」

気付くと、いつの間にか、犬が私に寄り添って座っていた。

ベッドを背もたれにして、足を投げ出して床に座っている私の横に、ちょこんとお座りをしてテレビを見ている。

その横顔はとても凛々しい。

人間で例えたら確実にイケメンの部類には入ると思う。

今の私に彼氏がいたら、休日はずっとこんな感じになるのかな。

「でも、いくら格好良く見えても、犬を彼氏に例えちゃいかんだろう……」

悲しい、悲しすぎるよ自分。

思わずがつくりとうな垂れてしまった。

こんなとき、早く新しい恋でもして、良い相手を見つけないかとは思っているが、正直それが面倒くさくもある。

こんな性格なのだが、一応外見は平均女性並みなので、今までにも相手がいないわけではなかった。

一旦打ち解ければ気の合う人は男女を問わないし、一緒に飲みに行く男友達も少なくはない。

でも、それはあくまで「友達」の域を出ない付き合いでしかない。

この歳なので、そういうお酒の流れで相手と寝てみたこともなくはないのだが、そのような付き合いは長くは続かなかったし、今はそれすら面倒くさくなっている。

私は女として終わっているのだろうか？

正直、束縛の少ない今の生活はとても気楽だ。

ほどほどの収入、ほどほどの生活、ほどほどの自由。

でも、この生活がいつまでも続けられるわけではないということもわかっているつもりだ。

高校や大学時代の友人に会う度に聞く結婚の話。

左手に指輪をする同僚も増えた。

大したキャリアもない私だから、いつかは区切りをつけなければならぬ。

この先、人生で、きっとこの曖昧な自由時間を懐かしむ日々が訪れるのだろうと思っている。

でも、それまでは、もう少しこのままでもいいのよ……

そんな取り止めのない思考から覚めると、犬はいつの間にか私の太ももに頭を乗せてすやすやと眠っていた。

ちょっと舌を出した、無防備なその姿が以外に可愛かったので、起こさないように犬の体をゆっくりと撫でてあげた。

（まあ、こんな時間も悪くないか）

この日も一緒にお風呂に入る。

今日は浴槽の縁に顎を乗せてじっとこちらを見つめてくる。

髪を洗う姿を見るのがそんなに面白いのか？

でもお行儀は良い。湯を抜いている途中の浴槽の中で私に水がかからないように控えめに水気を飛ばしている。

試しに浴室内のカーテンを引いてあげると、思いっきり水気を飛ばした。

やはり、ちゃんと理解している。

（犬は毛艶も良いし、やはりお金持ちの家で飼われていたのだろう）

——昨日の歯磨きの一件で、根拠はまったくないのだが、なぜだか私には「この犬はもう私のことを絶対に傷つけることはないのだ」という確信めいたものを感じていた。

だが、そういった根拠のない自信を持って動物と接するのは実はと

ても危険なことである。

ベテランの飼育員が、馴れていたはずの猛獣に咬殺される事件は決して少なくはない。

相手は動物である。

人間よりも、より本能に忠実に生きている生き物なのだ。

単体では脆弱な人間など、隙を見ればあっという間に主導権を握られ、いとも簡単に捻り潰される。

生物の力関係とは本来そういうものであるのだ。

それに漫画や小説ならまだしも、これは現実だ。

それをわかっていてなお、「自分だけは大丈夫」などと感じるのはとても傲慢なことであると思う。

ということは、私の思考回路は所謂「お気楽能天気でお花畑」だということなのだろうか。

……おいおい、28歳にもなって、御伽噺の主人公気取りかよ。

まさか自分がそんな奴だなんて思いたくはないのだが、今のところ、この件に関しては確固とした否定ができそうにもない。

……私、結構残念な思考回路の持ち主だったんだな。

そう自嘲しつつ、この日は就寝したのである。

出会い 4日目～7日目

4日目

犬には留守番してもらって、食料の買出しに出かける。

（あと3日で預かり先を探さなくては。いくら手がかからなくて可愛くても、いつまでもこのままではいけない）

犬は今まで一度も吠えていない。

体格は大型犬そのもののなのに動きがしなやかで静かだ。

帰ると犬が玄関の前で尻尾を振りながらお座りをしていた。

お風呂は昨日と一緒の状態になってしまった。

（どんどん情が移っていく。早めに手放さなくては……）

5日目

犬の様子が落ち着かない。

朝からなんだかそわそわしている。

夜の帳が下りたところ、犬がドアの前でクウクウと小さく鳴き始めた。近づくとじっとこちらを見つめる。

ふいに、犬は元いたところへ帰るのだと解った。

犬の前に膝をついて目線をそろえる。

すると犬がほっぺたをぺろぺろと舐めてきた。

目を閉じる。

犬は温かい舌で顔中を丹念に舐め回した。

最後に優しく唇を舐めた。

唇に牙が軽く刺さり血が出る。

犬はそれを舐め取る。

目を開くと間近にブルートパーズの瞳があった。

しばらく見つめあったあとに、重い腰を上げてドアを開けると、犬はそこから音も無く外へと出ていった。

6日目

保健所や警察には探し主が見つかったと嘘の連絡を入れた。

ネットの迷い犬・里親探しの掲示板からは犬の情報を削除した。

部屋を掃除したあと、その日一日はぼんやりと過ごした。

7日目

何事もなかったかのように休みを謳歌する。

ショッピングをして、お茶を飲んで帰ってきた。

次の日から仕事が始まるのだから、気持ち切り替えなくては。

再会 1

季節は12月、クリスマスイブ。

あの不思議な日々から半年以上経った。

今ではあの日々は夢だったのではないかとさえ思う。

ゴールデンウィーク明けに突然母が倒れた。

術後に半身麻痺が残ったが、幸い程度は軽く、自宅療養に切り替えても1年で8割ほど回復することができるとのことだ。

その母の自宅療養中に介護と家事を担当するため、私は仕事を辞めて実家に帰ることにした。

妹は早くに結婚してすでに家を出ており、父はまだ現役で働いている。

実家の日々の生活費は今のところ父の給料で何とかなる。

そんな経緯もあり、私は今、母の介護に専念している。

私を気遣ってか、母は私の将来に関して何くれと無く世話を焼こうとする。

それはありがたくもあり、少々鬱陶しくもあるのだが、母親からの愛情だと思って黙って受け止めることにしている。

この日も、母のベッドの横で羊羹を切りながら話をしていると、いつもの話題になった。

「あなたのおかげで随分良くなってきたわ。このまま順調に行けば、あと半年もしたら元の生活に戻るんじゃないかしら。でも、やっぱりあなたがわざわざ仕事を辞めることもなかったのに」

「こんなときだもの、ちょっとは親孝行しなきゃね。それに仕事復帰だって、えり好みしなければ何とかなるわよ」

「そう、ありがとう……でもそれなら、早く良い人見つけて孫の顔でも見せてくれたらもっと嬉しいんだけどねえ」

「ははは、私の場合、まずは相手探しから始めなくっちゃ。でも言うっておきますけど、お見合い話は持つてこなくても結構ですからね。私にだって一応『タイプ』ってものがありますから」

「あら残念。でも三好さんの知り合いにちょうど良い人がいるって話を聞いたところだったのよ。あなたの高校の先輩で、今はあの四ツ橋グループの会社に勤務していらっしやるっていう」

「それってもしかして吉澤先輩のこと？」

「そうそう。彼、高校時代から秀才で有名だったわよね。あなた昔は憧れてたじゃない」

「やだ、お母さん、それってもう昔のことよ」

「とにかく、ちょっとしたでも気が向いたら声かけてね。もう三十路も近いんだし、これから先は相手に対してこだわってもいられなくなるから」

「わかってるわよ。まあ、この話に関しては多分無いと思うけれど、一応心の片隅で考えておくわ」

そう返事をしたのがいけなかったのか、お見合い話はあれよあれよという間に進んでいった。

久しぶりに会った先輩は、スーツがよく似合う大人になっていた。

何度かデートを重ねるうちに、なんとなく、このまま結婚してもいいかなと思うようになってきた。

正直、今の先輩に対して憧れや恋愛感情のようなものは無かったが、結婚してから徐々に育まれる愛もあるのだろうとは思っている。

先輩は頭が良く、優しい人だ。

確か高校時代には隠れファンクラブもあった。

きっと今の会社でもある意味「高嶺の花」のような存在なのだろう。

一度「そんな人がなぜ私とのお見合いを受けたのか」と聞いたら、

「君と一緒にいると安らげるから。幸せな家庭を築けそうだから」と言われた。

私は先輩が、私に対して癒し系女優のような役割を求めているのだ
と思い、少々幻滅した。

ああ、この人も世の男性と一緒に、と。

私の容姿は所謂安めぐみ系だ（あくまで『系』である。まったくも
って美人というわけではない）。そのため私の見た目しか知らない
周りからは家庭的でおしとやかで慎ましい女性だと誤解される。

でもそんなの幻想なのに。

私はそんな女じゃないのに。

本当の私はずぼらだし、中身はまるで枯れた中年男性のようなのに。

私は風呂上りに、Tシャツとスウェットを着て、お笑い番組を見な
がら缶チューハイを飲んで、するめいかを食べて馬鹿笑っている
ような女なのですよ。安らぐどころかさらに疲れが増しますよ。

そんな私を見たら先輩はきつと幻滅するでしょうねと言ったら、先
輩は一瞬きよとしたあと、顔を下に向け、腹を抱えて必死に笑
いをこらえていた。

ひとしきり笑いの発作と格闘したあと、先輩は目じりに涙を浮かべ
ながら子供のような笑みを見せた。

「よりにもよって枯れた中年男性とは。僕の予想は間違ってたなかつ
た。君とは必ず幸せな家庭が築けると思うよ」

そう言って先輩は私に優しいキスをしたのだった。

今日はクリスマスイブ。

世の恋人たちの例に漏れず、私と先輩も泊まりでデートだ。

多分、今日は最後までするのだろう。

今では先輩に対して昔のような憧れではない、仄かな好意のようなものも抱いている。

そう、きっと大丈夫。

多分、きっと大丈夫。

再会 2

目的地に行く電車の中で、携帯に先輩からメールが入った。

「ごめん、仕事が長引いて10分ほど遅れます。

外は寒いから近くの喫茶店で待っていてください。……僕の愛しい姫、この埋め合わせは必ず致しますゆえ、どうかご機嫌を損ねないでくださいね？」

最後の一文に思わずふっと吹き出した。

すぐに返信文を打ち始める。

「何ですかこの鳥肌もののくっさい台詞は。あまりにも信幸さんらしくなさすぎて、電車の中なのに思わず吹いちゃったじゃないですか」

律儀な人。

可愛い人。

この人は、私にとって本当に申し分のない人だ。

この人なら、ちゃんと愛せそうな気がする。

きつと穏やかに、幸せに、年を取ってゆくのだろう。

「わかりました。ツリーのそばにあるスタバで待ってます。

あ……でも、もしかしたらお姫様は王子様が来る前に悪いサンタさ

んに攫われちゃってるかもしれませんよ？

……嘘です。無理はせずに、お仕事頑張ってくださいね」

そう書いて返信ボタンを押したところで電車が目的地に着いた。

駅を下り、ターミナルを歩く。

ふと目端のショーウィンドウに人影が映った。

なんとなく目をやると、暗い背景のそこには一人の男性が映っていた。

黒いコート、少し長めに切られた銀色の髪、ブルートパーズの瞳。

その男性がじっとこちらを見つめていたのである。

ぎょっとして思わず真後ろを振り向く。

でもそこにはだれもおらず、あわてて前を向くとそこにはもう何も映ってはいなかった。

急に心臓が早鐘のように鳴り出す。

「な、何今の」

一瞬あの目に「殺される」と感じた。

いや、違う。

「喰われる」だ。

気を取り直して前方を向くと、一陣の突風が吹いた。

思わず目を閉じる。

すぐに目を開けると、そこは何もない真っ暗な空間だった。

「――！」

状況が飲み込めず、呆然としてしまう。

「立ち眩み？　　じゃないし、停電ではないわよね」

不安で手のひらに汗がにじんで、喉がからからになってくる。

と、目の前に薄ぼんやりとした人影が浮かぶ。

「何これ、ここはどこなの？」

声を震わせながら、思わず叫ぶように聞いてしまう。

突然、その人影が口を開いた。

「……4年間待った。俺にとっては気の遠くなるような永い時間だった」

「ようやくこの腕で、存分に貴女を抱ける」

そう言って近づいてくるその人影は、先ほど見たあの男だった。

「はあ？ あなた、何を言っているの」

どうしよう、こんな街中で、よりにもよって変質者に目をつけられ、あまつさえその人に自分は助けを求めてしまったのだ。

「異界で過ごしたあの日々を、忘れたことは一度も無かった」

しかし、息を呑むほどの美貌だ。

それは名だたる映画スターだって霞んでしまうくらいの。

「やだ、来ないで」

思わず口から拒絶の言葉が出る。

その言葉を聞いた男は一瞬驚愕に目を見開いたあと、その場に立ち

尽くした。

だが僅かな逡巡ののち、その瞳に宿るものは、圧倒的な熱。

「あの幸せな日々は、俺にとって聖域だった」

見たもの全てを石に変えてしまうゴーゴンに出会ったかのように、私は石のように立ち尽くしてしまった。

だめだ、弱みを見せては。

どんなに美しかろうと。

……ああ、そういえば前に何かの占い本に載っていたっけ。

「美しいものには注意しろ」と。

それってこれのことだったのかしら。

「この日をどんなに待ち焦がれたことか」

私のことなんかお構いなく、その美しい変質者はまたどんどん近づいてくる。

私のすぐ前まで来ると、男は私の手を取った。

「さあ、俺とともに」

獣の目。

ああ、でもなぜ気持ち悪いと思わないのかしら。

相手は変質者なのに。

それと、なぜだかもう「喰われる」という恐怖は湧き上がっては来ない。

未だに動けない私を見て、その男は悲しそうな顔をした。

だが、繋いだ手からははっきりと熱が伝わってくる。

「今の貴女の目には恐怖しか映らない。

それでも俺は、

俺は貴女を、連れて行く」

再会 3

——気がつく、そこはうつそうと覆い茂る森だった。

最初は何の音もしなかったが、慣れてくると、周囲の音がいつせいに聞こえてきた。

「何、これ」

私は今まで夜の都心のビル街にいて、こんな薄暗い森の中にいたんじゃないかった。

向こうの茂みからがさがさと音がする。

薄暗い森の中、一人立ち尽くす私。

「もしかしくとも、これは、ピンチってことよね」

がさがさという音はなおも近づいてきた。

恐怖で身がすくむ私。

ああ、案外短かったな、私の人生。

こんな得体の知れないところで何かに襲われてのたれ死ぬなんて。

しかし、茂みを掻き分けて現れたのは大きな銀色の犬だった。

「あ！ 君は！」

忘れるはずがない。

数日だけ世話したとはいえ、あの日々は私にとってかけがえのないものとなっている。

犬は私に近づくと私の目の前でお座りした。

上目遣いで私を見ながら、きゅうんと一声鳴いた。

思わず、服が汚れるのもかまわず、その場に膝をつく。

大きなその犬に、私は思いっきり抱きついた。

張り詰めていた緊張が解け、しゃくりあげながら犬の首にしがみつく。

「うつ、うつ……、どう、してっ、こんなことに」

犬は私の肩に頭を持たせかけ、顔を私に押し付けている。

どれぐらい長くそうしていただろう。

犬は私が落ち着くまでずっとその体勢でいてくれた。

若草のように香ばしい毛皮の匂いは、私の心の動揺を随分と和らげてくれた。

「ところで、ここはどこ？ 何で君はここにいるの？ ……って、言っても答えが帰ってくるはずないか。それに、さっきの変質者がまだどこかにいるとも限らないし、こんなところで油を売っていやいけないわよね」

そうときめたら実行に移すのが早い私は、その場から立ち上がると、膝の汚れを叩き落とし、辺りを良く見渡してみた。

明るい場所を目指し、歩いてゆく。

犬は私の後ろから付き従うように歩いてきた。

森を抜けると、そこには道が広がっていた。

よく見ると、自分が立っている場所は何かの街道のようである。

今時、コンクリートで舗装されていない道路なんて珍しいが、何かの車輪のあとが前後に真っ直ぐとつながっていることから、ここはちゃんと使われている道なのだということが分かる。

すると、今まで後ろにいた犬が、道に沿って歩き始めた。

パンプスの踵が時々土に埋まるのもかまわず、私は犬のあとを追いかけた。

しばらく歩いてゆくと、さらに開けた大きい道に出た。

そこは石畳の道であり先ほど通ってきた道の4倍ほどはありそうな広さだ。

今度はパンプスの踵がコツコツと鳴るようになった。

「何か、古代ローマのアッピア街道を髣髴とさせる作りね」

昔、大学で取ったヨーロッパ文学の授業を思い出しながら、私はひとりごちた。

そうでもしないと、この奇妙な展開についていけない気がしたからだ。

だって、私はさっきまで夜の都心のビル街にいた。

こんな晴れた青空の下、古代ローマの雰囲気醸し出すような場所に來た覚えは毛頭ない。

記憶がぶつ切りにされたような気分を味わった。

なぜこんなところにいるのだろう。

ふと見ると、遠くに巨大な建造物が見える。

「あれは、水道橋？」

遠くに、授業のスライドで見たものとそっくりの、だがしかしそれよりもはるかに大きい橋が見えた。

「どういうこと？ 私、本当に古代ローマにタイムスリップしちゃったの？」

展開についていけない私を、犬はじっと見つめていた。

すると、何かを察したかのようにこちらへトットツと近づいてくる。

犬は私の前まで来ると、くうんと鳴きながら、尻尾をパタパタと振りはじめた。

「ん？ どうしたの」

思わず前かがみになる私。

と、犬がいきなり私を押し倒すようにしながらの顔をべろりと舐めてきた。

「や、やめて、化粧が取れちゃう」

その場に尻餅をついた私に対し、犬は今度は私の口の周りを舐め始めた。

「何するの……っつ！」

その台詞を言おうと開いた口の中に、犬の舌がすばやく入り込んだ。

「ひよ、ひよっと！」

口を押さえながら慌てて犬を押し戻す。

が、時すでに遅く、私は犬の舌を咬んでしまったようなのだ。

口の中いっぱい金気が広がる。

瞬間、世界が反転したようにぐると回った。

「——契約は為された」

「えっ……」

その声を聞きながら、突然私の意識はだんだんと遠くなってゆく。

私は道端で気を失ってしまったのだ。

再会 4

——目が覚めて、最初に感じたのが「トイレに行きたい」だった。

人間の生理的欲求。

今まで、いくつものファンタジー小説を読んできたが、主人公は、いつ、どこで、どうやってコレを満たしていたのだろうと気になったものだ。

起き上がり、辺りを見回す。

自分が今寝ているところは、先ほどの街道などではなく、ちゃんとした寝台である。

体には毛布が掛けられ、靴もちゃんと脱がせられている。

木製のそれから降りると、私は辺りをうかがった。

窓のある部屋。

隙間から漏れる光が、未だ時刻は昼なのだということを伝えている。

この部屋はどうやら2階以上にあるようだ。

隣の部屋が何やら騒がしい。

トイレはまだ我慢できたので、私はパンプスを履くと声のするほうへ歩みよった。

数人の男の声がする。しばらくすると、その声の主たちは連れ立って部屋を出た。

こちらに来るのかと思ったが、それはなく、木製の階段を下りる音が聞こえた。

なぜ自分がここにいるのか、こんなところで寝ているのかがさっぱり分からなかった私は、意を決してこの部屋から出ることにした。

銅製の取っ手を引くと、階下は喧騒に包まれた食堂だった。

昼時は過ぎたようだったが、下にいる多くの男たちは何かを祝っているようだった。

驚愕した。

彼らは日本人ではない。

完全に欧風の顔立ちである。

さらに驚くのは彼らの風体だ。

皆、大きな麻布の袋をに切れ目を入れたようなものを頭からかぶり、腰紐を巻き付け、少し膨らんだ緩いズボンを穿き、皮で編んだサン

ダルを履いている。

弥生人の服装とも、古代ローマ人の服装とも違うその風体に私は眩暈を覚えた。

「私、こんな、どうして……」

思わず口元に手を当ててその場にうずくまる。

いくら三十路近いといっても、現代日本で暮らすいち一般人の私には、この現実はいあまりにもとっぴ過ぎた。

と、階下からでっぴりと太った女がふうふう言いながら上がってきた。

女は40代半ばか、その巨体を、これも大きな布を頭からかぶった服装で包んでいる。

彼女は大きな二重顎を揺らしながら、しかし人好きのする笑みでこちらに近づいてきた。

「あらあんな、部屋から出たのかい、調子はどうだね」

口を開くと、意外とよく通る良い声の持ち主だった。

「あの、私、お手洗いをお借りしたくて」

とっさに喋ってしまった。

「トイレなら、階段を下りて左に曲がったところにあるわよ」

女はそういうとまたふうふう言いながら階段を降りていった。

……あれ、おかしい。

何で私はあの人の言葉がわったんだろう？

それに、何であの人日本語をしゃべっているの？

それにトイレって、トイレっていったよあの人。

私は何だか狐に化かされているような気持ちになった。

何だ、ちゃんと日本語が通じるということは、ここは日本なんじゃないか。

途中途中の記憶がないけれど、それを差し引いても、言葉が通じるというのありがたい。

早くあのビル街へ戻らなくっちゃ。

……いや、それよりも何よりもまずトイレだ。

私は言われたとおりの場所に行った。

そこは男女共用のトイレのようだった。

おまるの中にはおがくずが敷き詰められ、臭いはほとんどない。

お尻を拭く紙はないが、かわりに大きく柔らかい葉が何枚も束ねて吊るされていた。

私はドアを閉めて用を足すと、その上に桶から柄杓でおがくずを取り、盛るようにかけた。

この形のトイレであれば農業用の肥料にも使えるなど考えながら、別の桶に入っていた水をこれもまた別の柄杓に取り、手を洗った。

全部済ませてからトイレを出る。

「これはきつと何かのアトラクションなんだわ」

そう思えば、僅かな心配はあるものの、少しだけ落ち着いて周りを見渡すことができた。

またさっきの部屋に戻ろうと階段を上がりかけると、背後から声が掛けられた。

「あんたが、お頭が連れてきたって女かい」

見ると白髪の偉丈夫が、腕を組み、階段の手すりにもたれかかりながらこちらを眺めていた。

その姿を見て、攻殻機動隊のバトーさんを若くしたみたいなんて思った私は、そこそのアニオタである。

「お頭？」

初対面のバトーさん（仮）に、私は若干の親近感と畏怖を覚えながら聞き返す。

「ああ、しかしあんたのその格好、ここじゃ思い切り浮いてるぜ。それと、聞くとところによると、あんたまだお頭に名前も告げてないっていうじゃないか」

そういうと彼はいぶかしげに目を細めながらこういった。

「まあ、お頭が選んだものに俺はケチはつけねえけど」

「はあ……」

いきなりこんなところに連れてこられ、けちをつけるだのつけないだの言われたってわかるわけがない。

あたふたしていると、階段の反対側から、ひょっこりと赤毛の少年が顔を出した。

「へえ、よく見ると可愛い顔してるじゃんこの子」

そばかすの浮いた少年の顔を見ながら私はきよんとする。

は？

この子ですって？

私のことよね？

「変な格好してるけど、毛艶は良いし、手肌は荒れてないし、どっかの国の裕福な子女だったたりして」

ああ、こんなところでも「東洋人は童顔に見える」パワーが発動したのか。

「ねえねえ、お頭なんか止めにして、俺んどここない？」

馴れ馴れしいその少年の後ろに影が差す。

殺気を感じたのか、少年がひっと後ろを振り向く。

そこにはあの銀髪の若者が佇んでいた。

「お、お頭！」

再会 5

「ルウ」

「は、はい」

ルウと呼ばれた赤毛の少年は、男を見て血の気が引いているようだった。

「この人は、俺の大切な客人だ。あまり手荒に扱ってもらっては困る」

「……すいませんでした」

男に恫喝されたわけでもないのに、ガチガチと歯を鳴らしながら、ルウは頷いた。

「それと、ガルディンもだ」

「俺は別にこの子でも構わないがね」

バトーさん（仮）の名前はガルディンだということがわかった。

ガルディンは片眉を上げながらそう答えると、お頭と呼ぶ男に対し目配せをした。

「やっと手に入れて嬉しいのはわかるが、お前こそ、手荒に扱うなよ」

「わかつている」

何やら、同じ空間にいるはずなのに、私の知らないところで知らない会話が続いているといったような感じだ。

「あの、すみません」

私のか細い声を聞いた3人は、会話を中断して私に向き直った。

白髪のカルデインが目を細めながら言う。

「契約者のお嬢さん、これから先の話は直接、お頭から聞くといい。俺たちは邪魔しねえから」

カルデインはそういうと、赤毛のルウを引き連れて奥のテーブルへと去っていった。

この場に残ったのは、お頭と呼ばれた銀髪の青年と私だけ。

「部屋へ行こう、話がある」

青年はそういうと、私に手を差し出した。

私は恐る恐るその手を握る。

やはり確かな熱を持ったそれは、私の手をぎゅっと握り返すと、階上へといざなった。

部屋に入ると、青年は部屋の鍵を閉めた。

そして、私をベッドまで連れてくる。

私をベッドに腰掛けさせた青年は、私から離れると、おもむろに上着を脱ぎ始めた。

「え、ちょっと、何をするんですか」

焦る私。

さっき手荒に扱うとか話していたのって、もしかしてコレのことだったの？

いくらなんでもこんな真昼間から、早すぎやしないか？

……じゃなくて、これはもしかしくなくても貞操の危機なのだろうか？

上着を脱ぎ終わった青年は先にサンダルを脱ぐと、今度はズボンの紐に手をかけた。

いや、だってさっき「話がある」っていつていたし、この展開はおかしすぎる。

内心あたふたしている私をよそに、均整の取れた肉体をほの暗い部屋で惜しげもなく晒しながら、彼は一糸纏わぬ姿になった、多分。

「多分」というのは、彼がズボンを脱ぐ前に、私が目を閉じて顔を

背けたからである。

しばらく沈黙の時間が続いた。

目を閉じ、顔を背けた状態から私は焦って聞いてみた。

「あの、もう目を開けてもいいでしょうか？」

「構わない」

いや、あなたが構わなくてもですね、いきなり初対面同様の青年にヌードを披露されちゃ、こっちが困るんですよ。

それでも、この状態では埒が明かないので、私は渋々目を開けた。

目を細めながら、ゆっくりと首を巡らす。

薄暗いその部屋には、誰一人いなかった。

——代わりに、別のものがいた。

「あ！ 君！」

思わず目を見開く。

そこには、きゅうんと鳴いて、お座りしながらパタパタと尻尾を振る、あの犬がいたのだ。

「どうしてこんなところに」

しかし、あの青年はどこに行ったのだろう。

自分の服だけ残して、この犬と入れ替わった……はずがあるのだろうか。

「名を、呼んで欲しい」

あの青年とそっくりの声が犬から聞こえた。

拉致・猥褻物陳列・強姦未遂……

認めたくない現実から目を背けるために、私はあの青年に関する罪状を心の中で思いつく限り挙げていった。

まさか、まさかですけど、私もうすぐ三十路の女ですよ？

こんなファンタジーな展開が自分の身に降りかかるだろうことはえ

え、一切、これっぽっちも、つゆほども思っではいませんでしたよ。
何がいけなかったのだろうか。

親の介護のために会社を辞めたこと？

妥協して付き合っていたはずの相手に好意を持つようになったこと？

それとも、この犬を拾ってしまったこと自体がいけなかったのだろうか？

私は今までの人生、それなりにやってきたつもりだった。

不器用な面はあるが、それは今まで培ってきた明るさや、社会に適応しようとする気持ちで何とかやってきた。

たまに何とかならないこともあったが、それは本来の不器用な自分なのだと慈しんで、友達とカラオケに行ったり、お酒を飲んだりなどして忘れていくよう努めた。

20代も後半に差し掛かると、仕事のことや人間関係で脛に傷を持つ身になってくるから、何かと諦めが付く。

また、さらに三十路が近づくと、焦る反面、もうこのままどうにでもなってしまう、といった楽な気分にもなってくる。

ああ、「かもめ食堂」のようなゆったりした時間を生きていきたいなあと思うようになったのはいつ頃からだろうか……。

そこまで考えると、私は一旦思考を停止して、今ある現実と向き合うようにした。

「今喋ったのって、君なの？」

「そうだ」

「さっきの男の人も、君なの？」

「そうだ」

「なぜ、私なの？」

「あの時、助けてくれた、そして貴女が俺の契約者だったから」
そこまで話すと、犬は今回の件についてぼつりぼつりと話し始めた。

「俺は、ある団体に目をつけられている。異界に渡ったのも、その団体との確執から止むを得ず起こったことだった。だが、そこで出会うとは思わなかったんだ、自分の契約者に」

「さっきも出たけれど、契約者って何？」

「自分の伴侶、半身」

「伴侶って、お嫁さんのこと？」

「そうともいえる」

そういうと、犬は尻尾をぱたりと振った。

「名を呼べっていうのは、何かの儀式なの？」

「昔からの慣わしだ。強い呪がある」

「私をここに連れてきたのも慣わしなの？　こういうことはよくあるの？」

「違う。俺たちがいる世界ではまず見かけない。俺の異界渡りは偶然だった」

そういうと、犬は何かに感づき少し焦ったようだった。

「早く俺の名を呼んで欲しい」

そういわれても、初対面の人(?)の名前なんか知るわけがないし、今まで心の中では「犬」、口に乘せるときは「君」としか呼んでいなかったのだから、いきなりいわれても困る。

私の逡巡を見て取ったのか、犬は励ますようにいった。

「俺の名前は」

そのとき、階下から大声が上がった。

「お頭あ！　奴らですぜ！」

犬は苦虫を噛み潰したような顔を見ると、私に向かっていった。

「ここで待っていて欲しい、すぐに戻るから」

そういうと、ドアのほうに歩み寄り、器用に鍵を開けて出て行ってしまった。

こんな再会の仕方ってあったのだと、半ば驚きつつ、私は部屋で待つようにした。

どこにも行けるところがないようだし、というより、本当に来てしまったんだ、私。

違う世界のことなんて、夢物語にしか思っていなかった私。

でも、年甲斐もなくどこかで憧れていた私。

そんなさやかな願いがこんな風にして叶うことになろうとは、正直思っても見なかったのである。

ふと、自分の名前を口にする。

「私の名は、タイラ・アンナ大良杏奈」

続けざまに浮かんできた言葉を何のためらいもなく口にする。

「彼の名は、ギルバート・ファーガス・チェーン……」

あれ、なんでまったく知らない人の名前が口から出てきたのだろう。

でも、この名前しかないような気がしてきた。

瞬間、階下で轟音がした。

ぎしぎしとゆれる部屋、階下からは怒声が飛び交っている。

それはまるで自分の回り中の音が、そこから一気に戻ってきたようだった。

再会 6

——しばらくすると、階下の音は止んだ。

何かが階段を上ってくる音がする。

すると、部屋の扉が空けられ、先ほどの犬もとい「ギルバート」が戻ってきた。

体には埃ひとつついておらず、表情は心なしかとても嬉しそうである。

「アンナ、俺の名を呼んでくれたのだな」

「ええ、でも何で私の名前を知っているの？」

「さっきアンナが教えてくれた」

名前を呼ぶということは強い呪がかけられているといったが、実際どんなものか漠然と知るには及ばなかった。

これが呪なのかと思う。

犬はもう喜びを隠そうともしない。

大きく尻尾を振り回すと、ベッドに座っている私の膝頭に顔をおもいっきり擦りつけてきた。

「ちょっと、ギルバート、くすぐりたいよ」

ギルバートはしばらく経ったあと、私の足の横で伏せのポーズを取った。

相変わらず、尻尾はぶんぶんと振ったままである。

「そうやって名を呼ばれるのは面映いものだな。我を忘れてしまうところだった」

「呪ってそんな効果もあるの？」

「契約者と獣は血の交換と名を呼ぶことによって完全に縛られる、タイラ・アンナ」

「あ、ギルバート、今私の名前フルネームで呼んだね。もしかして、契約が完全に成立したのって」

「今だが、何か？」

思わずオイと突っ込みたくなった。

「ところで血の交換って」

血の交換など、いつしたのだろうか？

「さっきは俺がアンナに。4年前はアンナが俺に」

さっきというのは金気が広がるべろチューのことだろうか。

前というのは、最後の別れのとくに流した唇の血、あれのことだろうか。

それにしても4年前？

ギルバートと出会ったのは、確か今年のゴールデンウィークのはずだが。

ちょうど半年経ったぐらいなのではあるまいか。

そんな顔をしたのか、ギルバートはすぐに答えてくれた。

「異界同士では時間の進み方が違う」

そういうもののなかと、半ば納得する。

そして、――知る。

私はもう元の世界からはみ出してしまったのだということに。

信幸さんとの結婚も、母の介護も、自分の将来からもすべてはみ出してしまったのだ。

そのことに思い至ると、愕然としてしまった。

もう戻れない過去、一瞬にして失ってしまった向こうの世界とのつながり。

知らず、手がぐくぐくと震えてきた。

手の震えを無理やり押し込めて問う。

「あの、異界渡りって何度でもできるものなの？」

「いや、前のときはある高名な術師によって無理やり飛ばされたに過ぎない。今回の俺は半分契約した状態だったから異界を渡ることができた。それすら稀だ」

やはり、「自分が元いた世界」に帰るのは無理ということなのか。

震えながら、しかしそれを心のどこかで諦めつつ納得している自分がいることに気がつく。

私は、元の世界から逃げたかったわけではない。

ただ、精神的なモラトリアムの期間を、少しだけ、ずるずると引き延ばしたかっただけなのだ。

……なんて、今さら気付いても遅いか。

自分の人生は、このギルバートたちによって狂わされてしまったのだろうか。

いや、私の人生なんて、世界の大きさから比べれば、なんともちっぽけなものだ。

それを後生大事に抱えて生きるより、今ある生を謳歌したほうが良

いのではないだろうか。

そこまで考えると、私の中にいる不器用な私がなぜだかゴーサインを出してきた。

「YOUやっちゃんなYO」

みたいな、変なノリで。

ああ、今まで慈しんできた甲斐があったわ。

我知らず、溢れる涙を止めようともせず、私はギルバートに微笑んだ。

ギルバートが心配そうに上目遣いで覗いてきた。

「すまなかった。でも、俺にはアンナがどうしても必要だったんだ」

それが例え愛情ではなくても、私は嬉しいよ、ギルバート。

変だね、出会ったばかりだというのに、あなたのことをとっても大切に思っている自分がいるよ。

さて、自分を哀れむのはもう終わり。

私はもう子供じゃないんだから。

「ええと、ということは、私はこれから何をすればいいのかな？」

それを聞くと、ギルバートはけろりとした顔で答えた。

「無論、常しえに、俺のそばに」

「なにそれ、口説いてんの？」

「そのつもりだが、何か？」

思わず、泣き笑いの顔になってしまった私だった。

階下へ行くと、そこは酷い有様だった。

テーブルは全てなぎ倒され、誰がここまでというぐらい粉微塵になっている。

そこでは白髪のカルデインや赤毛のルウほか、十数人の男たちが後片付けに精を出していた。

「この人たち、皆ギルバートの手下なの？」

「ああ。コレだけじゃないぞ。各支部に転々としている」

「支部って、どれだけいるの？」

「詳しいことはまだいえないが、この世界のどこかには必ず俺たちの仲間がいる。」

「仲間ってことは、皆ギルバートみたいに変身するの？」

「ああ」

この世界の常識はやはり自分がいたところとは大きく違うようだ。

「ギルバート、私にこの世界のことを教えて。歴史や、宗教や、地理や文化やいろんなこと」

そしたら私はこの世界に住人になるから。

「あと、私亭主関白は嫌いだから」

「ん？ テイシユカンパク？ ……わかった、努力しよう」

業火 1 ● (前書き)

※「●」は残酷表現を含むという意味のマークです。
(これ以降このマークに関する前書きは省略します。)

業火 1 ●

町の中央に大きく広がる円形闘技場は、巨大なドーム状で、さながら卵を模しているかのようだった。

その中央では、2頭の獣が今まさに雌雄を決せんとしているところだった。

片方は黒く毛艶の良い雄牛。

もう片方は虹色に輝く猫科の動物。

戦況は雄牛に優勢かに見えた。猫科の獣は足を引きずっており、さつきから闘技場の壁に添って這っている。

どうやら疲れているようだ。

だが雄牛はすでに慢心創痕であった。

体中の至るところから血を流し、相打ち覚悟で最後の一撃を決めんとしている。

猫科の獣は、いよいよ来る最後に備えているような素振りを見せた。

雄牛が近づいてきた。

至近距離から確実に仕留められるようにとさらに歩幅を寄せた。

だが、ある一線を越えようとはしない。

何か、その獣に近づくと良くないことでも起こるかのようなしぐさだ。

僅かな逡巡ののち、雄牛はその一線を越えることを決意した。

これが最後のチャンスなのだということは、自分の体でよく理解している。

雄牛はひずめ半歩分前に出た。

その瞬間、猫科の獣はにやつと笑った。

「ざぁんねえんでしたっ」

雄牛の体が沸騰した、かに見えた。

ゴボゴボと派手な音を立てて、雄牛は盛大に血を吐き出すと、もんどりうってその場に倒れた。

「勝者、キスキル・リラ!!」

闘技場全体から割れんばかりの拍手が響く。

雄たけびが轟き、地面が踏み鳴らされる。

勝ったのは、キスキル・リラと呼ばれた虹色の猫科の獣だった。

死んだ雄牛の血を浴びた猫はすぐさまその場で変身した。

一糸纏わぬ姿で、あどけない表情をしている少女が、未だ吹き出す雄牛の血を浴びて立っている。

かと思えば、その少女は素早く目のやり場に困るほど、扇情的なボディラインをした美女に変化する。

美女は、波打つ髪を両手でかき上げ、二の腕に付いた血をゆつくりと舐め取った。

最後に獣は、たおやかな乙女に変化すると、恥ずかしそうに自身の体をかき抱いた。

だがしかしその体は雄牛の血に塗れている。

冒瀆的なその姿に、しかし観衆は割れんばかりの拍手で応えた。

「見よ！ 強大な力を持ち、見るものによってその姿を変えらるという闇の申し子、キスキル・リラを！」

闘技場から引き上げる貴族たちは皆一様に興奮した面持ちで話し合った。

「それにしても、魔術師様はよくあの獣を捕まえなさった」

「先代が亡くなった直後だというのに、よくぞあの魔女めを捕まえたわい」

「今では完全に手中に収めているとのこと、今日の闘技で説くと堪能させてもらいましたぞ」

長いトーガを纏った貴族たちが興奮気味に話してゆく傍らを歩くのは、金髪碧眼の男。

真っ直ぐに背筋を伸ばし、落ち着き払った態度で、貴族たちの話を受け聞いていた。

この男こそ、稀代の魔術師エランディオールの子にして、虹色の獣キスキル・リラを使役する人でもあった。

名を、ウィリアム・シルフィードという。

金髪碧眼、肩まで落ちたその髪は、よく櫛が通っており、歩くたびにさやさやと鈴の音になるようだ。

硬く引き結ばれた唇は、今は何かを堪えているような印象を与える。

貴族たちはそれを見ると、次々に先代エランディオールの悔やみを言ってからその場をあとにした。

一人になり、闘技場から人の気配が消えるまで、ウィリアムは立ち

尽くしていた。

だが、ふと気付くと、知らず自分の口元に手をもっていく。

そこから漏れでたのは、押し殺した笑い声だった。

「キスキル・リラ」

「なあに、ウィリアム」

ウィリアムの甘い声に応えたのは、あどけない少女であった。

しかしその姿は見るものに禍々しさと冒瀆的な気持ちしか思い起こさせない。

「今日はよくやった。あの雄牛はあのタイミングでなくとも、すでに死んでいたのだろうか？」

「遅いのよ、あの子。あんなじらしちゃダメなのに」

このキスキル・リラという獣。

あるものにはいたいけな美少女、

あるものにはたおやかな乙女、

あるものには淫乱な美女に見えるという。

今まで人間を誑し込み、契約を結んでは、別の人間にその契約者を殺させるという悪行を繰り返していた。

先代のエランディオールに長年拘束されていたが、先だって彼が死に、拘束が弱まっているところを、彼の愛弟子である金髪碧眼のウィリアムによって再度捕らえられ、今はその使役下に入っている。

そのはずだったのだが。

キスキル・リラは、とろけるような声でにゃあんと鳴くと、姿を乙女に変えた。

「ウィリアムはなぜこんな茶番を起こしたのですか？」

するとウィリアムは当然だとも言わんばかりに、キスキル・リラに応える。

「全ては、あの銀の獣を手に入れるためさ」

キスキル・リラは少し驚いた風だった。

こんな茶番がなんの役に立つのかといった風情だ。

「ねえ、でも銀の獣は、まんまと契約者を見つけて帰ってきたわよ？ どうするの？ ああ、契約者を殺すんだったら私を使って下さいましね」

そういうと、キスキル・リラはその裸体のままウィリアムにしな垂

れなかった。

見た目はうら若き乙女、しかしてその実体は百年生きたとも千年生きたとも言われる奇妙な存在。

ウィリアムはしな垂れかかってきたそれを軽くいなすと、夕日が沈む彼方を見やった。

「もうっ、朴念仁は使えなくてよ?」

少し憤慨した様子のキスキル・リラだったが、再度ウィリアムの腕に巻きついた。

そのまま彼の腕に頭を寄せると、今度は拒まれなかったので、これ幸いと甘え始めた。

「ねえ、銀の獣の契約者はどうするの? 食べてもいいの?」

「いや契約者がいるのであればむしろ好都合だ。その女もろとも、我が手中に収めればいいだけのこと」

そういつて、一人と一頭は別々の面持ちで夕日が沈む空を眺めたのだった。

業火 2 ●

灰色の長髪、灰色の瞳、制服は白と灰色。

傍らに純白の獣スコルを従えるは、死の侍女、セルビアなり――。

「第1級特務規定により、その獣を機関本部まで連行します」

ここはとある農村地帯。

一見穏やかなそこでは、今まさに非情ともいえる決断が下されようとしていた。

泣き叫ぶ農民と獣。

「返しておくんなせえ、許しておくんなせえ、そいつがいねえと、うちの身代はまるつぶれですだ」

「おっとさあん、おっかさあん、ここから出してくだあさい、助けてくだあさい」

引き立てられる獣は、バッファローとヌーを掛け合わせたような姿をしている。

その獣が、馬車の格子戸から鼻を突き出し、必死に契約者の名前を呼んでいる。

農民は必死で懇願する。

しかし、にべもなく断られた。

「異種混合は法律で禁じられています。変り種を貴族に売ろうとしたのでしょうが、この生物は、ほかの大陸の生物の血が混じっているため許可できません」

「ほんなこといわれても、ここまで育てたわしらはどうすればええんじゃ」

「違法な取引をした罰により、罰金50ジルが科せられます」

「なんと無体な！」

「皇帝が御作りになられた法律は遵守されなければなりません」

そういうと、死の侍女らは最後の決断を下した。

「セルビア様」

「それならば今ここで、この生物を虚無へと返します。スコル？」

スコルと呼ばれたのは、巨大な大狼。

その姿は怖気をふるうような純白。

「行きなさい」

セルビアはそういうと、スコルを格子戸の中へと放った。

まもなくして、中から悲痛な叫び声が聞こえ、数瞬後、それはぴたりと止んだ。

それから先は、何かを引き裂く音、咀嚼する音だけが辺りに響き渡った。

「うわああああ」

発狂寸前になる農民を尻目に、セルビアとスコルたち死の侍女らはその村をあとにしたのだった。

移動する馬車の中で、セルビアらは次の獲物の連絡を待つ。

セルビアは程なくして飛んできた一羽の鳥を馬車の窓枠に止めさせると、その足についてきた羊皮紙を紐解いた。

「セルビアお姉さま、次はどこへ行くのですか？」

馬車の対岸に座っている、栗色の髪をした女が聞く。

「銀の獣の契約者のところへ」

「罪状は何ですか？」

「彼女には異界の禁術を使用した容疑がかけられています。本部へ連行し、確認し次第処遇を決定します。もし異界の術の使用が認められた場合、その場で即刻排除対象に認定されます」

セルビアとスコルら死の侍女は、こうやって日々淡々と自らの任務をこなしていくのだった。

――時は変わって。

ある日の午後、闘技場の裏にある小さな小屋のひとつに、二人のむさくるしい男が集まった。

一人は達磨に茶色い髭をつけたようなさまであるに対し、もう一人は髭をきれいに剃り、短く刈った頭には白いものが転々と浮かんでいるさまであった。

その二人は、ある計画に向けて着々と構想を練っていた。

「あの犬畜生、戻ってきたんなら、ここできっちり落とし前を、つけさせてくんなくちゃいけねえなあ」

「ああ、4年前に煮え湯を飲まされたこっちの身にもなれてんだ」
二人はそういうと固く握手を交わした。

「ところでウォルデイの旦那、お宅、この闘技場の熱気をどう読む

「？」

茶色い髭の男、ラカンは、ごま塩髪の男、ウォルディに問うた。

「こりゃああれだ、あの、銀の獣とキスキル・リラの決闘を、皆が待ち望んでいるってことじゃあねえのかい」

「当たり前だと思うぜ、ウォルディの旦那。あの犬畜生めがこのこと戻ってきたのが運の尽きってわけよ」

「しかしラカン、お前、聞くところによると、あいつは契約者を連れて異界からもどったって話じゃねえか。どうする？ 実力といい、権力といい、俺らに勝ち目は……」

「ハン、これでお貴族様と同じ身分ですだって？ 笑わせんな。そんなら、違法取引で契約者になった農民たちがごろごろお貴族様になってるだろうよ」

ウォルディの逡巡を鼻で笑い飛ばすと、ラカンはこれからの計画について話し始めた。

「まず、俺たちの計画は、4年前あいつに煮え湯を飲まされたことに対する復讐が主だ。手っ取り早く奴の契約者を殺しちまってもいいが、それではつまらねえ。どうせやるんなら、あいつをこの闘技場に引っ張り出して、キスキル・リラと壮絶な試合でもやってもらわにゃ、溜飲はさがらねえよ」

「俺もその意見には賛同する。だがしかし、今のあいつには契約者もいるし、下手すりゃこっちが捕まりかねえ。そこを打開するいい策ってのがあると聞いたから、俺はこうして真昼間からこんなむ

さくるしいところに足を運んだんだぜ」

そういうと、ウォルディは椅子の背にもたれた。

対してラカンが机の前に身を乗り出すようにして話す。

「一番簡単なのはな、あいつの契約者を罠に嵌めちまえばいいんだよ。お貴族様の身分って言ったって、そんなもん、皇帝陛下の法律の前ではちりも同じ。手も足も出ねえだろうよ」

「だが、そうすると俺たちだって危ない橋を渡らないわけにはいかないじゃねえか」

「そこは簡単さ、契約者は女なんだろう？ 若い男の一人や二人でもあてがえば、ころっと参っちまうよ。それと、俺たちがその女から信用されるってことが重要だな。害のないふりをして近づいて、最後の最後までだまくらかしてやろうじゃねえか」

「そう上手くいくかねえ」

「そこを上手くいかせるのが俺たちの腕の見せ所じゃねえか。そのためには、ウォルディの旦那、あんたの協力が必要なんだよ」

……その後、彼らの話は夜ふけまで続いたのである。

業火 3

——その部屋は、あまりにも殺風景だった。

巨大な大理石が敷き詰められた床はよく手入れが行き届いており、ちりひとつ見当たらない。

大きな彫像や彫刻の類はなく、あるのはこの部屋にしてはいささか簡素すぎるベッドと、テーブル、大きな鏡、いくつかの本棚、そして剣であった。

夜の帳が下りた頃、この部屋の主が帰ってきたようだ。

衣擦れの音がしゅるしゅると鳴る。

貴族たちが好んで重い布を選ぶのに対し、この部屋の主は、比較的軽い薄物の生地を選んで自らの衣服としているようだった。

部屋の明かりに照らされて、その影が浮かび上がる。

男のようだ。

背は2メートルには行かないものの、かなりの高さなのが伺える。

部屋にある大きな鏡に、その姿が映し出される。

年のころは30代前半か。

漆黒の髪は短髪だがゆるくウェーブがかかっており、彫りの深い顔立ちによく映えている。

琥珀色の瞳に映るのは、果てのない虚空であつた。

彼は部屋に入ると、ベッドの上に仰向けで寝転がった。

程よく筋肉の付いた胸板を上下させながら、その瞳に映るものはやはり虚空であつた。

「銀色の獣、か」

男がつぶやく。

それは4年前、確かに自分のものとなるはずだった。

エランディオールが邪魔しなければ、あれは今頃自分の手の内で大きな働きをしていたに違いない。

「主よ」

声のするほうへ目をやると、そこには巨大な金色の獣が佇んでいた。

流れる毛並みはとても手触りが良さそうで、見ていて飽きない。

だが、それだけ。

見栄えのいいただの張りぼてだ。

自分を見ているようで嫌になってくる。

「何だ」

「夜は冷える、掛け布団の中に入るといい」

獣の陳述は、今はそれほど鬱陶しくなくなっていたが、以前は癪に障ったものだ。

今、自分はこの獣の契約者だ。

多少なりとも情けはかけてやらねばと思う。

だが、この獣は自分に嫌われることを厭わないようで、召使のように何くれとなく世話を焼いてくる。

めったに人型にはならないが、気が付くと部屋の中がいつも綺麗なものは、この獣が自ら掃除をかってでているからなのだと知っている。

変わった獣だと思うが、それは、この獣がそのようなことによって自分の存在意義を確かめているのだとは思えない自分がいる。

今の自分と同じ、見た目だけの存在。

……しかし、腐った文官と、筋肉馬鹿の武官の争いはもう飽きた。
この獣も、彼らに贈られた、自分の権威を飾り立てるものでしかない。

まあ、奴らの目の黒いうちはせいぜい道化を演じなければ。

さらに自分の足場固めもしなければならない。

自分に付き従っているもの達の多くは、自分の背後にある、途方もない虚構の権力に対し、平伏しているに過ぎない。

圧倒的な力がほしいと何度願ったことか。

だからこそ、4年前、自分は銀の獣を求めたというのに。

今使える手駒は死の侍女とウィリアム・シルフィードぐらいのものだ。

だが、ウィリアム・シルフィードは何を考えているか読めないときが多い。

アレを手駒と考えるのは尚早か。

だが、死の侍女だけでは駒が足りぬ。

何とかして、使える人材を手の中に治めねば。

できることならば、あの獣をもう一度手中に収めたいと強く願う。

そう思っていたときに、独自に放っていた斥候から、銀の獣についての情報が入った。

獣はなんと、異界から契約者を連れて帰ってきたというのだ。

獣の契約者は若い女だという。

ふいに、その女に会ってみたくなった。

すぐさま死の侍女宛に手紙を書く。

おあつらえ向きの罪状もくつつけて。

部屋に召使が換えの明かりを持ってきた。

支度が整うと、召使は一言挨拶をしてから部屋を出た。

「お休みなさいませ、皇帝陛下」

皇帝ユリウス3世は、召使がいなくなると、そのまま静かにベッドの中へと潜り込んだのだった。

申請 1

私はギルバートの手下に混じって、無残な姿になった食堂の後片付けを手伝うことにした。

最初は「契約者であり、お頭の半身であるアンナさんにこんなことさせちゃいかん」なんて言われていたけれど、折を見てちょこちょこ手を出していたら、何とか即戦力として使ってもらえるようになった。

「アンナちゃんは働き者だねえ」

宿屋のおかみさんが、大きな二重顎を震わせながら言う。

「いや、何かしていないと申し訳なくて」

そう言いながら私はおがくず状になってしまった机の残骸を箒でかき集めた。

これ、さっきのトイレのおがくずとしても使えるわよね。

そのことは皆も思っているのか、かき集めたくずを大きな麻袋に詰め込んでいる。

「それにしても、おかみさんは大丈夫なんですか？ 自分の仕事をこんな荒らされて」

先ほどギルバートの血を取り入れたことによって、この国の言語が

わかるようになったのだと今ではもう気付いているが、吹き替え映画のようなこの情景には未だに慣れない。

「ああ、お金ならギルバートたちにしっかり払ってもらったから、心配することはないよ」

それにしたって私の感覚では、これは破格の待遇だと思う。

「あの、もしかして、おかみさんはギルバートたちの仲間なんですか」

「そうともいえるわね」

そういうと、でっぷりと太った腹の上で、丸太のような腕を組みながら、おかみさんは話した。

「この宿はね、私の旦那が息子にあげるために大枚はたいて建てたものなんだ。その旦那も息子も早くに死んだのだけれど、そのときに偶然あのお頭に出会ってねえ。あたしや自分の息子にできなかったことを、お頭に行っているだけに過ぎないのさ」

手際のいい手下たちのお陰で、程なくして食堂はだっぴろい広場へと変貌した。

「これで、新しいテーブルを買いに行くことができるようになったよ。何かを失うことは、そこに新しいスペースが出来上がるってことでもあるのさ」

そう言いながら、おかみさんはよっころしょと巨体を持ち上げると、「新しいテーブルを買いにいつてくるから」とだけ言ってその場を

後にした。

「アンナさん」

呼ばれて振り向くと、そこには赤毛のルウがいた。

「あの、さっきは失礼なことを言ってすみませんでした。でも俺、可愛いって思ったのは嘘じゃないから。それだけ言いたくって」

そう言うと、ルウはそばかす顔をほんのり赤らめながら私の言葉を待った。

「そう、わざわざ言いにくれたのね。ありがとう」

その言葉を聞いたルウは、顔を赤らめながらくしゃっと微笑んだ。

「あ、ギルバート」

見るといつ着替えたのか、人型になったギルバートがこちらへ近づいてきた。

「お頭、俺今アンナさんにさっきの非礼を謝ってたんです。やましいことは何にもしてません」

その言葉を聞くと、ギルバートは面白そうに目を細めた。

「ほう、……そうか。ではルウ、お前に頼みたいことがあるんだがいいか？」

「なんででしょう？」

「アンナにはこれから貴族院に行って一代貴族の申請をしてもらう。お前にその付き添いを頼みたい」

「え、俺でいいんですか？ ガルディンやハティの兄貴でなく、俺で」

「ああ。お前に任せる。俺はまだ外をゆっくりぶらつけるような身分ではないから。頼んだぞ」

「はいっ！」

意気込んでいるルウを尻目に、ギルバートは私に向き直った。

「アンナ、アンナにはこれから貴族院という場所に行って、とある申請をしてもらう。これは、アンナがこの国で生きるために欠かせない手続きであると同時に、アンナが自身を守るための手段でもあるんだ」

「貴族院ってことは、私、この国の貴族になるの？」

「ああ。そういうことになるな。一代貴族といって、契約者になったものは一代限りの貴族になることができる。身分さえ申請しておけば、どこの国でも行き来ができるようになる」

それって、つまり外国人がパスポートやビザを取るのと同じような感覚なのだな、と私は思った。

契約者というものに対する優遇措置が取られているということとは、

契約者自身が国に利益をもたらす存在なのか、はたまた契約者自体の数が少ないということなのか。

「……本当は俺がついていきたかったんだが、今回の一件で治安部のお小言を聞いてこなくちゃなくなってしまうてな。ここまです派手にやるつもりはなかったんだが、何分焦っていたのと、アンナに名を呼ばれるのを聞いて、我を忘れてしまいそうになってな」

そう言うと、ギルバートは少し照れくさそうに鼻の頭をかいいた。

まあ、美形って何をやっても絵になるんだわ。

そんなことを思いながらぼんやりしていると、外からギルバートを呼ぶ声がした。

声の主は、陽気なラテン系といったところか。

片手に大きな包みを持って、今まさに戸口をくぐろうとしているところである。

こげ茶の波打つ髪は後ろでひとくりに結ばれ、栗色の垂れ目は人好きのする笑顔にアクセントを添えている。

何だか茶髪のアントニオ・バンデラスみたいだと思った自分はそこそこの映画オタである。

アントニオ・バンデラス（仮）を見たギルバートは「ハティ」と声をかけた。

この人がハティなのね。

申請 2

ハティは「お嬢さん」と私のことを呼んだ。

持っていた包みを私に渡す。

「どうぞ、お嬢さん。これは貴女の服だ。市場で適当なものを見繕ってきたんだが、合わなかったら遠慮なく言ってほしい」

「お嬢さん」なんて言われた記憶は私の知る限りではほぼ無いに等しい。

何だかむず痒い。

ありがとうといってそれを受け取り、2階の部屋へと向かう。

すると、当然のようにギルバートもついてきた。

「何でギルバートがついてくるの？」

「貴族院に行くときは正装、つまりトーガを着る。初めは着方がわからないだろうから手伝ってやろうと思ってな」

しれっと言い返された。

だが、多分最初は一人で着られそうにも無いので、その申し出をありがたく受け取らせてもらった。

部屋に入ると、さっきハティからもらった包みをベッドの上で広げた。

包みの中にはTシャツのような厚い上着に長いスカートのような厚手の下着、それと藤色の大きな布が一枚とサンダルが入っていた。

女性の下着のようなものはどうやら無さそうだった。

ハティが買ってこなかったということも考えられるが、トイレや宿屋、おかみさんの服などの生活水準を見る限り、現代の下着のような概念はこの世界、少なくともこの国にはまだ無いのではないかと思う。

ということとは、今つけている下着をだめにしたら、もう一生ブラもパンツも着けない生活をするのだろうかということが想像できた。

現代の日本に生まれた自分には、これはいささか恥ずかしい。

それとこれは自分で言うのもなんだが、胸はわりと大きいほうだ。

市販のブラが中々見つからない苦勞をしなくて良くなったと思う反面、この先垂れたらどうしようと思ひ少しぞっとした。

そんなことを考えながら、ギルバートがいるのにも関わらず、私は服を脱ぎ始めた。

ギルバートはあの犬なんだし、「伴侶」なんてものなんだから別にもういいかと思う気持ちが私の行動を大胆にさせているらしい。

思い切って一糸纏わぬ姿になると、上着と下着をそれぞれ着けた。そのあと、藤色の大きな布を持って振り向く。

「ねえギルバート、これはどうやって着たら……」

見るとギルバートは少し顔を背けて赤くなっている。

「ここで全部脱ぐつもりだったのなら、最初からそう言ってほしい」

「あ、ごめんね」

ギルバートは初心なんだか手慣れているんだかわからない。

赤くなったギルバートに手伝ってもらいながらトーガを羽織る。

まず半円状の布をストールのように背中中で羽織り、その三分の一を左肩から垂らす。

三分の二は背中からわきの下を通して、胸を斜めに通ると、そのまま左肩の後ろへと垂らす。

これで完成のようだ。

私の髪の毛と瞳は生まれつきこげ茶がかっているため、その藤色のトーガがよく映えた。

「アンナ、よく似合っている。ハティに頼んだだけのことはある」

……ほう、そうか、ハティは色男なんだ。

だから女性の服選びに拔擢されたのね。

やはりアントニオ・バンデラスだけのことはある。

サンダルに足を通すと、これもまたぴったりだった。

私は足も大きいほうで、しかも外反母趾気味なので、毎回靴選びには苦勞しているのだが、このサンダルはそんな私の足にぴったりと合っている。

ハティ、侮れん。

自分の服は包みに入れておいた。

着替えも無事済んだので、下に下りていく。

そういえば混乱の中で忘れていたのだが、いつの間にか鞄が無くなっている。

思い返すところへ来たときにはもうすでに無くなっていたので、きっと異界の狭間で落としたのか、元いた世界に置き去りにしてきてしまったのだろう。

これからはもう現代のお化粧をすることも無い。

ファンデーションもマスカラもアイライナーも無さそうなこの世界で、私は生きていけなくちゃいけないのだ。

あとこの世界って毛抜きや剃刀はあるのかしら。ムダ毛の処理はどうしたらいいかしら。

ああ、あとはお風呂には入れるんだろうか。

巨大な水道橋があったから水には困っていないのだろうけど、この宿屋しか見ていないので、まだまだこの世界の生活水準を図りかねているというのもある。

そんな取り止めの無い、しかし私自身にとっては重要な事柄を心配していると、向こうから正装に着替えたルウがやってきた。

ルウは私の姿を間近で見ると、ぽかんと口を開けた。

「……こういうとき、何ていえばいいんだろう」

「素直に『綺麗です』でいいんじゃないかと思うよ」

傍に来ていたハティがルウに助言する。

「ルウ、お前もよく似合っているよ。馬子にも衣装とはこのことか？」

軽口をいうハティ。

戸口のほうでガルディンが私たちに声をかける。

「お前たち、馬車が来たぞ」

「馬車？ 馬車で行くの？」

思わず聞き返してしまう。

「ああ。この宿屋から貴族院までは、歩くには少し遠いから馬車を手配させておいた」

何だか、流石、としかいえない。

幌が付いた1頭立ての馬車にルウと二人で乗り込む。

馬車から宿屋を見ると、質素だが立派な門構えの、いい宿屋だということがわかった。

「いってきます」

「気をつけて」

そうして私とルウは貴族院へと赴いたのであった。

申請 3

馬車に乗ったルウと私は、お互いのとりとめのないことを話合った。

ルウは人懐っこくて、何だか弟みたいな存在だ。

この世界に来て、今まで嫌な人というのには会っていない。

この国の人は皆人がいいのだろうか、と思うが、先ほどの攻撃から考えると、そういうことでも無さそうだ。

少なくとも、ギルバートには「敵」という存在がいるのだということがわかった。

それだけでも気を引き締めるには十分に値する。

15分ほど馬車に揺られた頃だろうか。

象牙色の石でできた、立派な建物の前に着いた。

ここが貴族院なのか。

高校のときの資料集で見た、ギリシャ神殿のような作りをしている。

その建物の周りは静かで、人がゆっくりと出入りしている。

馬車から降りると、ルウと私は連れ立って中へ入った。

建物の中はいくつもの部屋に仕切られていた。

ルウはその中のひとつを選ぶと、扉の外で私を待たせた。

程なくして、ルウが出てくると、私を扉の中に招き入れた。

中に入ると、沢山の羊皮紙と巻物が積み上げられている机の後ろに、一人の男性が座っていた。

初老を迎えたぐらいか。

白髪交じりのその頭は、しかし知的な相貌を少しも損なっていないかった。

「さて、この少年から話は聞きました。お嬢さんは契約者だということですね」

「はい」

「では、ちょっと失礼して、血を見せていただきますよう」

「血を見る？」

私が訝しげにそう聞くと、初老の男性は針を手にとると席を立てて私の前まで来た。

彼は私の手を取り持ち上げると、素早く針を刺した。

「あっ！」

親指からぷっくりと血があふれ出してきた。

だが、何の効果か痛みは全く無い。

初老の男性は、その血を指で掬い取ると、ひと舐めして、口の中でワインのように転がした。

「間違いありません。貴女は契約者です」

初老の男性が今度は私の親指をとり、山と積まれていた無地の羊皮紙から一枚紙を抜き取ると、その左端に押し付けた。

「これで申請は終了いたしました。今日から貴女も貴族ですので、この指輪をつけて下さい」

というと、彼はルビーのような石がはめ込まれた、小ぶりの金の指輪を私に渡した。

私は少し面食らって聞いた。

「あの、手続きって、他には無いのですか？ 必要書類に記入するとか、身分証明書が必要だとか」

「申請なら、つい先ほど終わり、必要書類もこの通りそろっております」

そう言う、初老の男性が羊皮紙を持ち上げた。

するとその羊皮紙に青いインクで書かれた文字がみるみる浮かび上がった。

その羊皮紙の左端には、私の血の跡がついている。

「この紙には皇帝陛下の呪がかけてございます。水につけても、火であぶっても損なわれることはございません。ご安心ください」

そういうと、初老の男性は何事も無かったかのように机に戻り作業を再開した。

ルウと私は部屋を出た。

「申請って、あんな簡単にできちゃうのね」

「俺も見たのは初めてだったけど、こんなにあっけないものだとは思わなかった」

歩きながらぽつぽつと話す。

「これで私も貴族の仲間入りをしたとのことだけど、生活って何か変わるの？」

「うーん、一代貴族は一般人よりもかなりの優遇措置を取られていると思うけれど、金銭面の援助は無いから、贅沢をしようと思ったら自分で稼がなくなっちゃいけなくなはなるな。本当の貴族っていうのは、

稼がなくても一生遊んで生きていくだけの資産と地位を持っている人たちのことだから」

「そうよね。貴族って言う名前だけで国がお金を与えるはずは無いものね」

帰りの馬車は門の前で待っていてくれたので、ルウと私はそれに乗り込んだ。

馬車に揺られながら思う。

ここはなんとのどかな所なのだろうと。

誰にも迷惑をかけない場所で、悠々自適な生活を送りたいと思っていた私にとって、ここはまさに楽園なんじゃないのだろうか。

一代貴族などというものになってしまったが、慎ましく生活する分には事足りるようだ。

ならば、ギルバートと二人で、「お爺さんお婆さんになるまで幸せに暮らしましたとき」っていうエンディングを迎えられるかもしれない。

それならば、この世界に來たことも私にとって何らかの意味があるということなのかもしれない。

おぼろげにそんなことを考えながら、馬車に揺られる。

ルウは私の気分を察してか、黙って隣に座っていてくれる。

こういう沈黙はとてもありがたい。

馬車で揺られること約15分、宿屋が見えてくる頃になると、ルウがぴくつと反応した。

眉間にしわを寄せ、前方をにらんでいる。

「何かがおかしい、宿屋の前がざわざわしている。このまま帰るのは何だかまずい気がする」

「え、わかるの？」

「だって俺、元は狼だもん」

「……！」

何だか、今さらっと重要なことを聞いてしまったような気がするのだが。

今は気にせずに流すことにする。

馬車は歩調を緩めず、そのまま宿屋の前へと横付けする。

と、人だかりに混じって、見るからに高そうな馬車が停まっているのが見えた。

馬車の扉には何かの紋章が描かれている。

中をよく見ようと体を乗り出そうとしたところで、ルウの手が私の体を押し戻した。

「今出ちゃだめだ！」

押し殺した声で言うその視線は、人だかりの中を真っ直ぐに見つめている。

「この紋章つきの馬車と、この不穏な匂い、これってまさか……」

「お前ら、早く馬車から降りな」

小さい声でそうささやいたのはガルディンだった。

「まったく、一番まずいときに帰ってきやがった」

人だかりの中から凜とした声がする。

「第1級特務規定により、その女を機関本部まで連行します」

遭遇 1

人垣が左右に割れると、そこに一筋の道ができた。

現れたのは、灰色のトーガを身に纏い、これも灰色の髪を後ろに長く垂らした、美しい女だった。

だが彼女の周りの空気はどこまでも静謐だ。

曇り空のような瞳は、それを覗き込むものを震撼させる。

「げっ、死の侍女セルビア！」

ルウが囁き声でそうつぶやいた。

「死の侍女セルビア？」

私はルウの声音をいぶかしんで聞き返す。

「あの人はなんなの？」

ルウが怖気をふるうように言った。

「皇帝陛下直属の審問機関に所属する冷徹な女だよ。あの人の噂は生まれたばかりの乳飲み子だって聞いたことがあるといわれている。純白の獣スコルを引き連れた……」

「ルウ、今説明している時間はねえ。早いとこケリをつけねえと」

ガルデインがそう言うのと、戸惑っている二人を馬車から手早く降ろした。

「セルビアさんよ、うちのお嬢さんが何かまずいことでもいたしましたかねえ？」

ガルデインは二人をかばうように立つと、セルビアに問うた。

「彼女には異界の禁術を使用した容疑がかけられています。女、我々とともに速やかに本部へ同行しなさい。確認し次第処遇を決定します」

「あんた、女なのに強引だねえ」

「任務以外で論ずるのは無用なこと。あなたの後ろにいる女を私によこしなさい」

「嫌だといったら？」

「あまり事を荒立てたくはありません。大人しく我々に渡すことが賢明な選択です」

あくまで冷静に対応するセルビア。

その姿勢に業を煮やしたのか、ガルデインがどすの聞いた声で答えた。

「ハン、荒事だったらこっちも負けちゃいねえよ。さっきちいっと

運動したんで、腹が減ってかなわんなあ。今度も美味しく頂かせてもらおうかねえ」

ごきりと首を鳴らすガルディンに対し、セルビアは少しだけため息をついた。

「あくまで任務の邪魔をするというのであれば仕方ありません。こちらもそれ相応の処分を取らせていただきます」

そういうと、死の侍女セルビアは一步大きく前に出た。

「スコル」

まるで「しゅう」という冷気の音が聞こえたようだった。

人だかりの後ろで、ひいという声が上がる。

何かが宙を舞った。

その獣、スコルはひと跳びで人垣を飛び越え、セルビアの傍らに降り立った。

「契約者とその獣か。あんたたちほどその言葉に似つかわしいものはいねえな」

「褒め言葉と受け取っておきましょう」

純白の獣の瞳は濃い血の色だった。

「スכול」

「まっ、待って下さい!!」

私はそういうと、とっさに二人の前に立ちふさがった。

「あ のっ、私審問機関へ出向きます」

「お嬢さん!!」

「アンナ!!」

私は二人のほうに向き直って言った。

「要するに、私にかかっている嫌疑というのが晴ればいいんでしょう? 私はこの世界に来てまだ一日もたっていないし」

「もう二日経ってるよ」

「うそ!!」

思わず大声を上げてしまった。

「丸一日、契約の後遺症でアンナは眠りっぱなしだったんだよ」

ルウが手早く説明する。

「それは知らなかったわ……」

ルウは、今度はガルディンの前に進み出てセルビアに向かって言う。

「アンナはここに来たばっかだし、丸一日眠りっぱなしだったんだ。禁術なんて使ってる暇なんか無かったよ」

ガルディンとしてはせつかくの戦闘の出鼻をくじかれたような感じになってしまった。

「お前らなあ」

「ガルディンが焦るからいけないのよ」

「そうだよ、いつものガルディンらしくないよ」

「お前らいつの間にそんなに仲良しになったんだ？ ああん？」

このやり取りを見ていたセルビアはふうとひとつため息をつくとき、スコルの鬘を撫でた。

「わかりました。ですが、命令が出た以上、一度我々に同行し、本部まで来ていただく必要があります」

「そうですか。審問というのはどれくらいかかるのですか？」

私がセルビアにそう聞くと、ルウが大声を上げた。

「馬鹿っ、だから何強がってんだよ！ アンナは大人でも、この世界についてはまだ子供同然の知識しかないじゃないか！ それって物を知らない子供と一緒にってことだよ！」

ルウのその言葉に私は驚いた。

今日の帰りの、あの沈黙を、ルウはそうやって受け取っていてくれたのか。

「ルウの言うとおりで。お嬢さん、無理についていく必要なんてどこにもねえ」

ガルディンまで。

私、この世界に来て涙腺が弱くなったのだろうか。

今の二人の言葉で本当に癒されているよ。

「大丈夫、ルウ、ガルディン。これは強がりじゃないから。私行きます」

「アンナ……」

「お嬢さん……」

「疑いを晴らしたらすぐ帰ってくるから」

そう言う私はセルビアのほうに進み出た。

「それと、セルビアさん、私、女って名前じゃありません。アンナと言います」

「わかりました。ではアンナ、私たちに同行し、速やかに処分を受

けますね」

「ええ」

「では、そのものたち、道を開けなさい」

セルビアが言うと、自然に人垣が割れて道ができた。

セルビアはスコルを引き連れて先に歩いてゆく。

私はルウとガルディンのほうに向き直った。

「今日はありがとう。私、嬉しかったよ」

その言葉を聞くと、二人は少し慌てたようだ。

「お、俺は別に思ったことを言ったまででっ」

「俺はちよっと運動し足りなかったんでな」

二人のうろたえぶりが何だかおかしくなって、自然と笑みがこぼれてしまう。

これは、これからどのようなところに行くか知らないが故の余裕なのだろうか。

でも、彼らが待っていてくれるというだけで、今の自分には怖いものなんてないかのような気持ちになる。

足取り軽く、私はセルビアとスコルの元へと歩いていった。

遭遇 2

——お腹が空いた。

そういえば丸一日以上何にも食べていなかったんだっけ。

木製の二頭立て馬車に揺られながら私はそう思った。

喉も渴かなかったなあと思うと、急に水が飲みたくなってきた。

今までは驚きの出来事やらなんやらで、かなり気が張り詰めていたようだ。

馬車の中の椅子には比較的やわらかい敷物が敷き詰められていたのだが、あまり長時間揺られると流石に腰とお尻が痛くなりそうだ。

しかも馬車の中にはあのスコルともう一人女の人も一緒に乗っていて、微妙に……いやかなり狭くなっていた。

それに、このまま黙ったまま乗っていると初・「馬車酔い」というものも体験しそうである。

自分から申し出たことではあったが、私は早くも自分がやったことを後悔し始めていた。

しかし、宿屋の情景を思い浮かべてはたと思う。

あそこには若い女性はいなかった。

今馬車の中にはこの国の若い女性が二人座っている。

これは。

私にとってはある意味チャンスなのではないか？

ナンパの……ではなく、この国の同年代の女性に文化や風俗のことを聞くという。

そう思うと、この馬車の中が一気に自分の戦場に見えてきた。

自分の体を叱咤激励して、乾いた唾を飲み込むと、私は行動を開始した。

セルビアは背筋を伸ばし、じっと一点を見つめていた。彼女が座る椅子の上にはスコルも座っており、顎をセルビアの膝に乗せて目を閉じていた。

「あとう、セルビアさん」

「なんででしょう」

私はまずセルビアに何事かを聞いてみることにした。

「私はこの世界に来てまだとても日が浅いのです。もし良かったら、審問機関に向かう間にこの国の女性の文化や風俗について教えていただけませんか？」

セルビアは対岸に座っている私のほうに目を向けると一言こう言った。

「それを話すことによって私たちに何のメリットがあるのですか？」
にべも無い返しである。

予想していたとはいえ、やっぱりそう来たか。流石死の侍女。クルビューティー。

でも、その返しに簡単に折れる私ではないのだよ。ふふふ、会社で培ったプレゼンテーション能力を今ここで発揮しようじゃないか。

「あなたがたは皇帝陛下直属の機関に属する人々だとお聞きしました。そんなあなた方が、異界からやってきた、不穏分子になるかもしれない私をこのまま放っておく訳が無いということもわかっています。しかし、私はこの国で生きていくことを決めたものです。ここで、この国の生活習慣を教えていただければ、その通りに慎ましく生活するつもりです。皇帝陛下や、国に反逆するつもりは毛頭ありません。それに私は契約者です。契約者が担う責務などありましたら、早いうちに教えていただければその通りにいたします。契約者の恭順、それがあなたがたにとってのメリットです」

そこまで言うと、私は空唾を飲み込んだ。

「私は今、何も国家に関わる情報を知りたいと言っている訳ではありません。私という一人の女がこの国で慎ましく生きていくための情報を知りたいと言っているのです」

セルビアは私の真剣な眼差しを見て取り、少し考えたあとこう言っ

た。

「……いいでしょう。カエキリア、アンナが知りたいと思うことを教えてあげて」

「はい、セルビアお姉さま」

うわ、やった！　こんなにスムーズに行くとは思わなかった。

死の侍女、冷徹な女なんて言われていても、人の血はちゃんと通っていたということよね。

私はそれから「女性が一ヶ月この国で生活すると言ったとき、何が必要ですか？」という概念を元に質問することにした。

毎日のスキンケアはどうしていますか？

お風呂は週にどれくらい入れますか？

ムダ毛の処理はどうしていますか？

生理になったときはどう対応していますか？

気晴らしは何をして遊んでいますか？

化粧品、化粧道具はどのようなものを使っていますか？

などなど。

この数十分で、私にとっては有益な数多くの情報を手に入れることができた。

一時間後、私達は審問機関へと到着した。

あんまり張り切りすぎて、ちょっとばかりグロッキーになってしまった自分を叱咤し、馬車を降りる。

目の前には白亜の建物が聳え立っていた。

今日行ってきた貴族院とはまた違った作りの建物だ。

思った以上に威圧感がある。

窓の少ないそれは例えるならば、監獄要塞、が正しいような気がする。

「こちらへ」

同じ馬車に乗っていた茶色い髪の女、カエキリアが私に声をかける。

「ようこそ、審問機関へ」

そう言うと、カエキリアは私を引き連れて中へと入った。

彼女とはさきほどの会話で多少なりとも打ち解けたような気がする。

中は薄暗く、しんとしている。

日が暮れてきたせいもあるのだろうか、そこは一種異様な空気に包まれていた。

「何か出て来そうだわ」

とある部屋に連れて行かれると、そこで待つように言われた。

しばらく待っていると、セルビアが男の人を伴って入ってきた。

身長は180台後半、30代前半か。

ゆるくウェーブがかかった短髪に、琥珀色の瞳。

彫りの深い顔立ちは、ギリシャ彫刻を思わせる。

「この方は審問機関名誉顧問のルイウス様です。今回は特別に審問に立ち会われるとのこと。大変名誉なことです」

ルイウスと呼ばれた男性は、セルビアに言った。

「さあ、始めてくれないか」

遭遇 3

大きな机の前に私。

その反対側にセルビアとルイウスと呼ばれた男性。

これって、刑事ドラマでよく見る取調室の風景にそっくりなんじゃないだろうか。

はたまた企業の個人面接か。

「それでは始めます」

食料と水分を全く取っていない私には結構拷問の域に入るわ、この状況。

まったく、「快食・快眠・快便、衣食住の保障」は人間が生きていくために必要な最低限のものなんだから。

顔は化粧を落としていないから脂ぎっているだろうし、髪も心なしかしんなりしているようだ。

幸い、空気が乾燥しているせいか、日本のようにすぐにべとべとになるわけではないが、それでも今まで日本に暮らしていた身としては、ここで今すぐお風呂に入りたいという気持ちでいっぱいだ。

そういった点では元いた世界が非常に懐かしくもある。

こんな古代ローマみたいな場所で、拷問紛いの取調べだか面接だか

を受けるくらいなら、いつそそれが夢落ちであってほしいと切に願う私であった。

しかし、ここが第一の正念場なのかもしれない。

この拷問面接をクリアできたら、新しい生活が待っているのよと、自分に渴をいれ、椅子に座り直した。

「まず、あなたにかけられている容疑です。異界の禁術を使用したというものですが、これについて何か意見がありますか」

この拷問面接の口火はセルビアが切った。

お、意外と民主的じゃないか。容疑者の意見を取り入れるなんて。

「私はどうやらこの世界に来て二日目だそうです。この間にあの宿屋から出た記憶は、一代貴族の申請をしにいったことを除けばありませんし、禁術というものを使用した覚えはありません。また、私は元いた世界では何の力も持っていない一般市民でした。この国でもそうあるつもりですし、今の私は何の害も無い、無力な存在です」

ああ、いかん、早くもちよつとふらついてきた。

でも、「衣食住の保障」のために頑張るのよ私！

私のその言葉を聞いたルイウスという男性は少しだけ片眉を上げた。

……おい、何だその顔は。

まるで「君には失望したよ」とでも言っているかのようにじゃないか。
あんた、いくらイイ男だからって、女性が困っているところを片眉
上げて見物してんじゃないわよ。

ふん、そうかい、つまり名誉顧問様は哀れな一般市民が苦しんでい
る姿を高みの見物しに來たって訳かい。

これのどこが名誉なんだか。

見世物じゃないんだ、とつとと失せろ！

いつか私が皇帝陛下とやらに会うことがあったら、あんたのその態
度絶対訴えてやるから。

怒りを原動力にして、私は二人に向き直った。

ただ、今本当に水が飲みたい。

人間は1%の水分が失われただけで体のパフォーマンスが2%低下
し、2%以上の水分が失われると40%以上パフォーマンスの低
下が起こるそうだ。

今の私は多分確実に40%以上のパフォーマンスの低下が起こって
いるに違いない。

だが、いくらパフォーマンスが低下していようとも、やらねばなら
ないときがあるんだ。

今がまさにその状況なので、私はセルビアの言葉を待った。

「そうですか。あなたは元いた世界でも、何の力も行使していなかったという訳ですね」

そう言われると何だか悲しいが、実際仕事を辞めて専業主婦状態だったのだから間違っではない。

しかも私がいた世界は、魔法の類なんてものは御伽噺でしか登場しないもので、契約者だの呪だのといったものは元・一般市民の私からしたらかなりのカルチャーショックだったのである。

ああ、これまでで一番のカルチャーショックは獣が人に変身するところか。

「はい、そうです」

「そしてこれからも自分が持つ力を行使しないと言う」

「はい」

ああどうしよう、段々、返事するのがやっとの状態になってきた。

「それならば、今ここで力を行使しないと言う申請をしてください」

「申請、ですか。わかりました」

少しぼんやりする頭で何とか返事をした。

セルビアが無地の羊皮紙をもって席を立ち、机を回ってこちらに来

た。

「この羊皮紙には、皇帝陛下の強い呪が掛けられています。ここで申請を行えば、その後のあなたの身の安全は保障します」

よかった。これにサインだか何だかすれば、宿屋に帰れるんだ。

慎ましい生活万歳！

と、突然外が騒がしくなった。

「侵入者だぞ！」

「うわっ、目が、目があ！」

「気をつけろ！セルビア様のいる方へと向かったぞ！」

何者かが、こちらの部屋に近づいてきているようだ。

「スコル」

羊皮紙を手にとったまま、セルビアがスコルを呼ぶ。

音も無く、スコルが部屋に入ってきた。

「何かあっても、スコルと私がいいます。さあ、申請を」

セルビアはそう言うと、私に小さな針を手渡した。

この世界って、申請は血で行うのね。

じゃあ、皇帝陛下も血で呪を掛けているのかしら。

だったら大変ね。

しかしまあ、皇帝陛下ってまるで生き神みたいな存在なのね。

何でもかんでも「皇帝陛下、皇帝陛下」って言われて、うんざりしないかしら。

そう思いつつ、小さな針を指に刺そうとしたところで、いきなり部屋の中に何かが投げ込まれた。

ぱりんと何かが割れるような鈍い音がしたかと思うと、とたんに目がしょぼしょぼして涙が止まらなくなった。

「これは、催涙性の液体？」

ぼやけた目で見ると、部屋にいる二人も同じように目を押さえてうずくまっている。

さっき外で「目が」って騒いでいたのはこれのことだったのか。

そう考えていると、ふいに誰かに引っ張られて、そのまま肩に担がれた。

遭遇 4

「ぐえっ」

やばい、吐きそう。

肩に担がれたときにお腹が思いっきり圧迫されて、危うく死んでしまふかと思った。

しかも蛙がつぶれたような声を出しちゃったよ。

侵入者は私を肩に担ぐと、そのまま走りだした。

侵入者の息遣いと振動が体全体に伝わってくる。

これは、本当に死んじゃうかもしれない。

侵入者はその歩調を緩めることなく、どんどん走っていく。

するといきなり侵入者の体がぐんと沈んだ。

ぼやけた目に映る景色がとたんに遠のき、体全体に重力がかかった。

侵入者はどうやらものすごい跳躍によって監獄要塞（仮）の壁を乗り越えたようだった。

遠ざかる景色を見ながら、私の意識はそこで途切れた。

「ルウ、ガルディン」

「お頭……」

自分が帰ってくると、アンナの姿はもう無かった。

二人から事情を説明されたギルバートは、悔しげに顔をゆがめた。

「なぜこんなときに審問機関が来るんだ」

「わからないよ、いきなり来て『禁術の使用容疑』でアンナを連れて行ったんだもの」

「俺はお頭が戻ってくるまでにどうにかしようと思っていたんだが、お嬢さんが『自分が行けば事は収まるだろう』と思ってて自ら連行されたんだ」

彼らの話を聞くと、ギルバートは少し考えたあと、おもむろに目を閉じた。

数瞬後、ぱっと目を開けたギルバートは少しだけほっとしたような表情をした。

「アンナは無事だ。今馬車に乗って移動している」

「そうか、そりゃ良かったぜ」

「契約者と獣の力って便利なんだね」

「だがここでぐずぐずしている訳にもいくまい。アンナを迎えに行く」

「俺もついていくぜ。お嬢さんをみすみす相手に渡したのは俺の責任でもあるから」

「俺も行きたいです。アンナ、きっと一人じゃ心細いと思うよ」

「……わかった。三人でアンナを迎えに行こう」

そう言うとき、ギルバートは馬車の手配をした。

――気が付くと、そこは夜に支配されていた。

ぼんやりとした思考で、私はそう考えた。

真っ暗な部屋で、ベッドの上に横たわっている自分を感じる。

「私、生きてるの」

かすれた声でそうつぶやく。

ベッドの寝心地は決してよいとはいえなかったが、それでも休息で
きるだけありがたかった。

もう、ここがどこでもいいや。

休息できればどこでも。

しかしその休息時間は程なくして終わった。

「気が付いたのか」

声のするほうに目をやると、暗闇の中、そこには誰かが佇んでいるようだった。

「何か欲しいものはあるか」

声の主は男だった。

「水、水を下さい」

「わかった」

そう言うと、男は部屋を出ていった。

誰なのだろう、あの男は。

今までこの部屋にいたのだろうか。

気配と言うものが全く感じられなかった。

こんな暗闇の中でよく動けるわねと思ったが、戻ってきた男は別人だった。

この人はちゃんと気配があると感じたからだ。

別人の男は両手に陶器でできた灯籠と、水差しとコップが載った盆を持って入ってきた。

お陰で、彼が50代ぐらいの男性であること、短く刈った頭にはごま塩のように白髪が生えているのだということがわかった。

男は灯籠をベッドの脇にあったサイドテーブルに置き、水差しからコップに水を注ぐと私に渡した。

ベッドから起き上がり、コップの水を最初はゆっくり、最後は一気に飲み干す。

とても甘くて美味しい水だった。

「お水まだもらえますか？」

恐る恐る聞いてみた。

「ああ、好きなだけ飲むといい」

その言葉を聞いた私は、いささか乱暴に水差しを取ってコップに水を注いだ。

注いでは飲み、注いでは飲みを繰り返し、水差しの水が全部無くなったところで、ようやく人心地がついた。

「ふう……」

一気に水を飲んだので、多少の気持ち悪さと、酸欠状態のような眩

量はあるが、健康状態には何の影響も無いようだ。

だが、多分お腹には先ほど担がれたときにできたであろう痣があるに違いない。

「あの、ここは」

「ここは俺たちの隠れ家だ。あんたが捕まっていると聞いて、俺の手下を使って助けにいかせたんだ」

「どういふことですか？」

訝しげに聞く私を見て、男はこりやしまったと膝を打った。

「俺の名前はウォルディ。闘技場の元締めをしている」

「ウォルディさん、あの、なぜ私を助けてくれたんですか？」

私がそう聞くと、別の場所から声がした。

「こいつぁ、以前自分の娘を獣に殺されてな、それから獣を憎んでしまうようになった哀れな男だからさ」

そちらを見ると、達磨にもじゃもじゃの髭をつけたような形相の男が立っていた。

「俺はラカン。闘技場の獣を売買している商人だ」

この人も年の頃は50代ぐらいか。

そのラカンの後ろにはもう一人男が立っていた。

がっしりとした肩幅、巨体ともいえるその体はしかし少しも鈍重には見えず、俊敏さを兼ね備えているように感じた。

「こいつがお前さんを助け出した英雄さ」

そう言うと、ラカンと名乗った男は後ろに控えている男を前に押し出した。

「こいつの名前はティリウスという。お前さんの護衛として、好きに使って欲しい」

ティリウスと紹介された男は私に頭を下げた。

「先ほどは突然連れ出してすまなかった」

「いいえ」

思わず恐縮してしまう。

日本に住む一般人の性である。

遭遇 5

「アンナの気配が消えた」

「どういことだお頭」

「何者かがアンナを連れ去る気配がした。そのあとの気配が一切辿れなくなっている」

ここは馬車の中。

ギルバートら一行が馬車に乗って審問機関へと行く道すがらのことであつた。

「ということは、お嬢さんはもう審問機関にはいねえってことか」

「奴らの仕業かな？」

「多分そうだろう。こんなに素早く情報をつかむのは奴らしかいない。きつと俺とアンナを引き離れた上で、アンナを、俺達をおびき出す餌に使おうという魂胆だ」

表向きは冷静さを装うギルバート。だがその心中は決して穏やかではないということをガルデインとルウは知っている。

「じゃあ、これからどうするの？」

「お嬢さんの無事が確認できない以上、審問機関へ行っても無駄足になるんじゃないかねえ」

「それはない。獣としての正当な権利を行使し、契約者であるアンナを迎えに行く。それにはまず手続きと情報が必要だ」

その言い方にガルディンは少しイラついたようだった。

「ハン、手続き・申請・情報……お頭、あんたいつからそんなに堅物になった？ 欲しいものは力ずくでも奪うのが俺達の流儀じゃなかったか？」

そう言われても、ギルバートは顔色を変えようとはしない。

「これはこの国でアンナと俺達が幸せに生きていくために必要なことだ」

なおも冷静さを装うギルバート。

その姿に首をかしげながらルウが言う。

「確かにお頭が言っていることにも一理あると俺は思う。でも何も知らないアンナが今頃一人で泣いているかと思うと、俺、いたたまれない気持ちになってくるよ。お頭はそうじゃないの？」

その言葉を聞いたガルディンは思わず訂正する。

「ルウ、お嬢さんのことを一番心配しているのはお頭だぜ。今だって本当は獣の姿になって、一目散に駆け出していきたいところを必死で抑えているじゃねえか。だからこそ、お頭のその態度が俺には解せねえんだよ」

「わかってるよ。人の姿でいても殺気が伝わってくる。俺のうなじの毛だってそれを感じてものすごく逆立ってるもん」

二人の話を黙って聞いていたギルバートは口を開いた。

「お前達の気持ちもわかるが、ここは我慢して欲しい。俺達が下手に動くと返って混乱を招くことにもつながるし、奴らの思う壺だ。アンナを攫ったのが奴らであると仮定すると、アンナが生きている可能性は高い。大切な手駒なのだから手荒に扱われる心配もないだろう。それどころか奴らはアンナを取り込もうとさえするだろう」

「でも俺、そんな奴らがいる空気の悪いところなんかに、アンナを一日だって置いておきたくはないよ」

「ルウ、それは俺も一緒だ。だからこそ奴らの裏の裏をかいて、安全にアンナを助け出さなければならぬ。誰にも文句のつけようがないやり方で」

「裏の裏は表だぜ、お頭。まさか、お頭はあいつらの魂胆に乗っちゃもうつもりじゃねえだろうな」

「ガルディン、これは奴らの魂胆に乗るのではない。奴らの魂胆を俺たちの未来のために利用するのだ」

そう言うと、ギルバートはこれで話は終わったとでも言うように、腕を組んで静かに目を閉じた。

「わあ！　すごく美味しそう」

朝起きて、サイドテーブルにあったものを見て、私は思わず歓声を上げた。

いつの間にか部屋の隅にいたティリウスにも声をかける。

「ティリウスも一緒に食べよう」

「これはお嬢さんのために取り寄せたフルーツだ。俺は遠慮する」

「そう？　じゃ、遠慮なくいただきますよ」

3日ぶりの食料である。

「なにこの優しい味、葡萄みたい。こっちは林檎と梨を掛け合わせたようなもので、これは桃、こっちの赤い実は、うん、苺だわ」

山と積まれた色とりどりのフルーツから、適当に目星をつけて食べていく。

どれも私にとっては当たりの食材だった。

食後の水を飲み干すと、私はティリウスに質問した。

「そういえば昨日ラカンさんがあなたは私の護衛で、好きに使ってもいいって言っていたわよね」

「ああ」

「じゃあ、お言葉に甘えて、好きに使わせてもらうけれど、いいか

しら」

「構わない。それが雇い主との契約なのだから」

「ふうん、それじゃあ、この機に乗じて、やりたかったことをできるだけ試してみようと思うの。手伝ってくれるわよね？」

「俺の体でよければ存分に使って欲しい」

「ありがとう。じゃあまず……」

「おやおや、こいつは驚いた、もう話がついちまったのかい」

見ると、部屋にラカンが入ってくるところだった。

朝日の下でみると、達磨に茶色い髭のついたような形相が一層際立ってくる。

「あんた、見かけによらず、悪い女だねえ」

ラカンは下卑た笑みを漏らした。

「褒め言葉と受け取っておきましょう」

これは昨日のセルビアの真似である。

「こいつのことなら心配いらねえ、やりたきゃ一週間だって平気でやれる体をもっとる」

「え、何を言っているの？」

「はぐらかすなよ。どこまでも悪いお嬢さんだぜ」

……ああ、シモネタか。

糖分が入ってやっと頭の回転が良くなってきた私は、この勘違いをそのままにしておくことにした。

「じゃあ、今日は彼を外に連れ出したいのだけどいいかしら？」

「好きにやりな。但し、どこかへ逃げようなんて思わないほうがいいぜ。一番安全なのは俺たちのところなんだからな。早合点するんじゃないぞ」

「ええ、昨日は助けてくださって本当に感謝しています」

「物分りのいいお嬢さんで本当に良かったよ」

そういうと、ラカンが弾んだように部屋から出て行った。

私はラカンが部屋から出るのを確認すると、ティリウスに向かって言った。

「それじゃあ、付き合ってもらおうわよ」

遭遇 6

私は今、市場に来ている。

あの家で身支度を済ませると、私はティリウスを伴って、近くの市場へ出かけた。

市場へ行くにつれ人通りが多くなり、道も混んできたが、私はティリウスの広い背中にたどくつついて、ついていけばよかった。

目当ての店につくと、店内のものを物色する。

代金はもちろんティリウスが出してくれたし、荷物もティリウスに持ってもらった。

ああ、私の人生の中で「荷物持ち」という存在ができることは想像だにしていなかった。

こういうことは今までの人生にはなかったため、ティリウスに対し若干の罪悪感がないわけではないのだが、今は張り切って悪女を演じることにする。

市場に付くと、まずは丈夫な麻袋を大小一つずつ買った。

これから買う荷物をこの中に全部入れるためだ。

名づけて、「一ヶ月・お泊りセット」である。

小さい袋はバッグインバッグにするためのものだ。

このなかには化粧道具やその他こまごまとしたものを入れる予定である。

次に刃物屋に行った。

ここでは毛抜きと剃刀と鋏、爪切りとやすりと針を買った。

さっそく買ったものを、先ほど買った麻袋に入れて、口に通されている皮紐をきゅっと閉める。

うん、悪くない。

次は鏡屋に行き、手のひらぐらいの大きさの鏡を買った。

次は、石鹸とスキンケア用品を買いに行く。

石鹸は匂いの良いものを選んで買うことができたが、化粧水や乳液の類はどれを買っていいかわからなかったため、店員に聞いてみることにした。

「おや、ここは初めてのお客さんだね」

「はい、そうなんです」

「お客さんみたいなお若い子だったらこの化粧品で十分だと思うよ」

ここでも若い子って言われた。

もうこのまま年齢を詐称して生きてゆこうかと思ってしまった。
店員は無印良品で売っているような若草色の化粧水と乳液、クリームを手にとった。

「じゃあ、それをいただくわ。あとはそのレモン水もちょうだい」
これで支度の半分は整った。あとの半分に向けて、さらに市場をうろつく。

布屋を見つけた私は、そこで肌触りのいいコットン製の布を見つけて小躍りしそうになった。

これは下着と布ナプキンにするためのものだ。

下着の作り方なんて習ったことはないけれど、これからこの世界で生きていくためにはどうしても必要になるものだった。

早いうちに絶対に何とかしようと思っていたもののひとつを手に入られて、良かったとほっと胸をなでおろす。

近くに糸屋もあったので、合わせて買っておいた。

次は化粧品が売っている場所へと向かった。

数ある化粧品の中から、おしろいと、まゆずみ、アイシャドウを選ぶ。

これで欲しいものはほぼ一通り揃った。

満足して市場をあとにする。

次に向かったのは、公衆浴場だった。

ここはありがたいことに、右手の薬指につけている指輪を見せると、無料で入れるような仕組みになっているらしかった。

貴族っていうものはやっぱりこうでなくちゃ。

ここまでついてきたティリウスにも声をかける。

「私これからお風呂に入るのだけど、ティリウスも入ってきたらいいわよ。そのお金、ラカン達のなんでしょう？ 私が使いたいと思っているのだから、ティリウスも遠慮なく使って。私は逃げも隠れもしないから。何かあったら駆けつけてくれる（監視されている）のはわかってるわ」

そういうと私はティリウスの返事も待たずにさっさと浴場へと足を運んだ。

「やったー！ お風呂だー！」

心の中で喝采をあげると、昨日カエキリアに聞いた浴場のマナーや使い方を思い出す。

「ええと、ここに荷物を預けて、ここで服を脱ぐ。使い方は日本の

銭湯とあまり変わらなかったわよね」

必要な荷物を持つと、浴室へと向かう。

浴室には壁面一帯にフレスコ画で色とりどりの果物や花が描かれており、とても華やかだ。

浴槽にはタイルがモザイク状に張られており、それはさながら古代ローマの公共浴場を思い起こさせた。

今利用しているのは4～5人のため、浴室が広く見えたせいもあるのだろう。

景色に感動しつつ、さっそく洗い場に行き、体を洗うことにした。

最初に頭を洗う。

木でできた手桶で湯を掬い、頭からかける。

少々ぬる目のお湯だが、何分、3日ぶりのお風呂である。

ものすごい爽快感だ。

「あー、これこれ。やっぱり自分は風呂好き日本人なのだと再確認する瞬間よね」

持ってきた石鹸を泡立てて、頭をごしごしと洗う。

「あー、最高に気持ちいいー！」

頭を2回洗うと、今度は持ってきたレモン水をリンス代わりによく揉み込んだ。

「クエン酸リンスのこと知っていて良かったー」

リンスを流すと、今度は体を洗う。

手桶の近くにヘチマスポンジのようなものがいくつも並べてあるのを確認した私は、その中から一つとって使うことにした。

本当は自分用のスポンジが欲しかったのだけど、今日は背に腹は変えられないので、これを使うことにした。

石鹸をよく泡立てて体になすりつけ、その上からスポンジでごしごしと洗う。

体を洗っている泡で、顔と耳もよく洗っておいた。

「あーもう気持ちいいー」

こうして体を洗い終わった私は念願のお湯に浸かることにした。

「極楽〜!」

そのあと、この浴室の隣の部屋でエステとムダ毛処理を行っていたため、一も二もなく参加することにしたのは言うまでもない。

遭遇 7

公衆浴場で身も心もさっぱりした私は、外で先に待っていたティリウスを見つけると、それから二人でお茶に出かけることにした。

こんなに一日を満喫していてもいいのかと思うのだが、少なくともこの待遇にはきつとなにか大きな代償があるに違いないということは読んでいた。

だってあのラカンの胡散臭さといったら。

護衛と称した監視をつける……これのどこが本当の自由といえるのだろうか。

だが捕らわれの身の上であることを十分承知の上で、この国で生きるための情報を得よう、という思いが私にはあった。

それならば、この立場を大いに活用させてもらおう、と思ったのである。

ティリウスはちゃんとお風呂に入ってきたようで、こざっぱりとした見た目になっていた。

「ちゃんとお風呂に入ってくれたのね。私が逃げるとは思わなかったの?」

「もしお嬢さんがいなくなったら気配でわかる。そのときはその気

配を追えばいいだけのこと」

「そうなんだ。私のことは気にせずにお風呂に入ってさっぱりできたのならいいんだけど」

「俺のことを気遣う必要はない。それも契約の内だ」

「ふうん」

ふと、このティリウスという人物のことが気になったので、よく観察してみることにした。

濃度の薄い金色の髪の毛は、太陽に当たってきらきらと輝いている。

茶色い瞳と寡黙そうな顔は、その髪の毛と相まって見ていてライオンを思い起こさせる。

だがしかし、彼がなぜこのようなことをしているのかがわからない。

ティリウスのような人だったら、こんな仕事でなくとも、もっとほかにいい仕事が見つかりそうなものののに。

喫茶店の席につくと、ティリウスが飲み物を二つ注文する。

辺りをさりげなく見回すと、この喫茶店は街の少し外れに建てられているようだった。

喧騒から離れた、落ち着いた雰囲気の間は、一目で私のお気に入りになった。

しばらく風呂上りの心地よい倦怠感に浸ったあと、私はおもむろに質問した。

「あなたはなぜこの仕事を引き受けたの？ お金のため？」

「それはもちろんある」

ティリウスがそう言ったときに、タイミングよく二人の前にお茶が運ばれてきた。

そのお茶はミントティーのような清涼感があった。

緑色のレモンを浮かべると、その清涼感がさらに増した。

「センスのいいお茶ね」

「これは俺が気に入っているお茶だ」

この人のこういうさやかな配慮やセンスを感じるたびに、「解せない」という思いが募る。

「今の返事、できたら詳しく教えてもらえる？」

私はそのお茶をゆっくりと飲みながら聞いた。

「人型になれる獣は、畏怖されると同時に、社会的な差別も受けている。生きるための金を稼ごうと思うのは当然の心理ではないか？」

「確かにそうね」

「では逆に問う。お嬢さんはなぜ自分が捕らわれの身の上である
知っていないながら、ここにとどまっているのだ？　銀色の獣のためか
？」

ティリウスがこんな質問をしてくるとは思わなかったので、私はお
茶を飲む手を止めた。

「へえ、私の獣ってそんなに有名だったのね。それに、今では私も
ちょっとした有名人なのかしら」

生活水準から鑑みるに、情報インフラはまだ発達していないと思っ
たのだが。

この国の情報伝達速度は、現代日本と比べてもあまり遜色がないよ
うだ。

お互い、核心には触れないまま、午後のティータイムを楽しむ。

「あれえ、ウィリアム、見て」

鈴を転がすようなあどけない声。

その声にふと首をめぐらすと、淡い桃色のトーガを羽織り、こちら
に向かって全力でかけてくる人影が見えた。

「きゃあ」

そういうと、その小さな人影は何かに躓いて転びそうになった。

すかさずティリウスが手を差し伸べ、顔面着地を防ぐ。

その人物を間近で見たティリウスは思わず声を漏らした。

「お前は……」

「ああ、これは失礼した。私の獣を助けていただいて感謝する」

声の主は、ここからでもそうとわかるほど、質のいいブロンドの髪と、鮮やかな青い瞳を持った美丈夫だった。

よく通った鼻筋、引き結ばれた唇。

怜悯な表情は、私の世界にいたら絶対に「氷の王子」なんてネーミングをつけられるに違いないと思った。

（うわ、美形……！ でも、こういうコテコテの美形は私の趣味じゃないわね）

彼らは私の席の隣に腰を下ろした。

先ほど走ってきた人影は、まだあどけない少女だった。

だが、その年齢からは桁外れの美貌である。

しかも、その美貌は幼さと相まって、見るものに隠微な感情を思い起こさせる。

私は思わず息を飲んだ。

（この二人、何か危険な感じがする）

私はこの世界に来てから、人を見る目がかなり磨かれたようだ。

というより、以前よりも感覚的に「この人は信用できる」、「この人は危ない」ということがわかるようになったのだ。

これはもしかしたら契約者になったからなのかもしれないと思う。

それに気付いたか気付いていないのか、金髪碧眼の男は、氷が溶けたような柔らかい笑みを浮かべた。

「こんにちは。私の名はウィリアム・シルフィード、こちらは私の獣でキスキル・リラという」

そういうとウィリアムは私の手を取り、その甲にゆっくりと口づけたのである。

番外編 異界での出来事・ギルバート

夢の中で人の匂いを嗅いだ。

甘い匂いがする。

近くで生肉の匂いもかすかにする。

甘い匂いが遠ざかる。

捕まらなかっただけでも良かったのだと安堵する。

しばらくするとその匂いがまた近づいてきた。

自分のそばにくると膝をつき、何かの作業をしたあと、自分を抱え上げた。

体の匂いと柔らかさから、それが女であると分かった。

その女の匂いを嗅ぐとなぜだかとても安心した。

女はどこかの部屋に入ると、自分を柔らかい布に包んで毛布の上に寝かせた。

女は水をゆっくりと飲ませてくれた。

火の通った肉もちぎって少しずつ口の中に入れてくれた。

顔と足も柔らかい布で拭かれた。

この女はなぜこんなことをしてくれるのだろう。

だが、その女の気配に知らず安堵して眠りについた。

目が覚めると体の調子は良くなっていた。

親友の体はもうほとんど自分になじんだようだった。

半身を起こして辺りを見回す。

自分のすぐ近くで女が寝ていた。

あたりからは特に危険は感じられない。

空気の匂いもあの場所とは全然違う。

起き上がり、目の前にあるドアを前足で開けると、そこには親友の話で聞いていた水を使う機械の用足し所があった。

使い方はわかっているのです。それを使って用を足す。

用足し所から出てくると、女が起きていた。

こちらを見ている気配を感じていたが、目は合わせずに毛布の上へと戻る。

女は自分も用足し所に入り、そこから出た女は火を使って作業を始めた。

程なくして、自分の前には美味しそうな食べ物と水が用意された。

腹がものすごく減っていたので出されたものを全て食べた。美味しかった。

水も全部飲み干す。

食後、用足し所から出たあと、女が自分に声をかけた。

何を言っているかは全くわからなかったが、その女についていくと狭い空間の中に入った。

女は戸を閉めると、細長い管の先についた丸いものから温かい水を出して、それを俺の体に満遍なくかけ始めた。

この女は自分を洗おうとしてくれているらしい。大人しく従うことにした。

女は石鹸を泡立てると、それで俺の体を洗い始めた。

その泡は清涼感のある匂いだった。

温かい水をかけられ、体を洗うということを何度か繰り返した。

女が俺を洗うたび、俺の体は少しずつほぐれていった。

女の指が気持ちよくて、知らず喉から鳴き声が漏れる。

女は今度は別の匂いのする石鹸を泡立てて、俺の体を揉みほぐし始めた。

こんなことは生まれてから今まで一度もしてもらったことがなかった。

女からは温かい感情が伝わってくる。

自分の中に何か知らない感情が湧き上がってくるのを感じた。

親友に対して感じた感情とも違う。

まだ赤ん坊のころ、母親の乳を吸っていたころの、幸せな気持ちに似ているのかもしれない。

とても気持ちが良い。

気付くと女の肩に頭を乗せていた。

女はそれに気付くとはつとしたように作業をやめ、俺の体を丁寧に濯いだ。

もう少しあのままでいたかったのにと少し残念に思う。

体を大きな柔らかい布で綺麗に拭かれ、長い筒から温かい風を当てられ、体を完全に乾かされた。

体力も気力も完全に回復したようだ。

女を見ると一人で何かを呟いている。

どうしたのだろうと女の顔をじっと見つめる。

女は俺の方を見たあと、視線をはずすと頭を抱えながら何かを考え始めた。

女の顔には苦悩が浮かんでいる。

さっき、俺の体を洗っているときの女からは温かい感情が伝わってきただけに、この女が何を悩んでいるのかはうすうす感じ取れた。

どうやらこの女は、俺が何者だとか、俺を拾う利点だとか、そんなものはまったく気にせずに俺を拾ってきたようなのだ。

俺は、本当はここにいてはいけないのだ。

女はきつと今何かの禁を破って俺をここに匿ってくれているのだろう。

それなら俺のことなんか気にせずにさっさと放り出せばいいものを、この女は俺のことを気にかけて、苦悩しているのだ。

俺には今まで親友以外で、自分のことを気にかけてくれた人なんていなかった。

その親友ももうこの世にはいない。

俺が食べてしまったから。

この女は昨日あったばかりの俺にこんなに良くしてくれている。

なあ女、お前は何で俺にこんなに優しくしてくれるんだ？

そう思ったとき、まるでそれが伝わったかのように女がゆっくりと俺のほうを見た。

女が俺を見つめてくるので、俺も女を観察することにした。

俺の目は色を認識することが出来る。

女の澄んだ栗色の瞳も、手触りの良さそうな蝦茶色の髪も、柔らかそうな桃花色の唇も皆、鮮明に映し出す。

ああ、この女は何て美味しそうなんだろう。

女からはかすかに甘い匂いがする。

食べたらどんな味がするのだろうか。

あの柔らかい肌に牙を立てたら女はどんな顔をするのだろうか。

恐怖に歪むのだろうか、それとも苦痛に悶えるのだろうか。

でも、それでもきつと、この女は最後には俺を許すのだろうか。

なぜだかわからないが、そんな気がする。

そう思ったときに、女は何事か口を開いた。

二、三言葉を継いだあと、女は俺に向かって笑いかけた。

俺は思わず目を丸くした。

この女、本当は俺の心が分かるのではないか。

まるで「いいよ」と許すように、その女は微笑んだのだ。

こんな女、今まで見たことない。

いや、これから先も、こんな女に出会いかどうかすらわからない。

そう思ったときに、突然、俺の中である感情が湧いた。

「欲しい」と。

そう思った自分自身に驚いた。

それは今までの「食べたい」とは全く別の感情だったから。

だが、その感情にどこかで納得している自分もいた。

そう、俺は。

俺は、この女が、欲しい。

たった今、新しく湧いたその感情を胸に抱きながら、俺はこの女をずっと見つめていた。

舞台 1

ああ、金髪碧眼のお兄さんから、手の甲にちゅうされちゃったよ。

なんだこの国は。

女性に対して優しいんだか優しくないんだかまったくわからないぞ。

このままここにいたら、このウィリアム・シルフィードという気障な名前の男から、反吐が出そうなほど甘ったるい言葉を吐かれるのではないかと懸念し、私は席を立った。

「お会いできて良かったわ、ウィリアム・シルフィードさん。またどこかで会うこともあるでしょう」

「こちらこそ、そう願いたいものだ」

「お姉さん、もう帰っちゃうの？」

「ええ、あなたにも会えて良かったわ、（確か）キスキル・リラちゃん」

……我ながらちょっと酷い女なのではないかと思う。

でも、社会人になると、こうやって心の中にある感情を押し隠して、上辺を取り繕うことが上手くなっていくのだ。

その場で会計を支払い、私とティリウスは喫茶店をあとにした。

「ねえティリウス、また市場に寄ってもいい？ スポンジと歯磨きセットと小物類を買いたくて」

「わかった」

もうすっかりティリウスが傍にいることになじんでしまった私は意気揚々と市場へと向かった。

その後姿を見送る二人。

「あの女、動じなかった」

「ウィリアムみたいな顔は趣味じゃないんじゃないの？ プライド傷つけられた？」

「いや、別にそんなことはないが」

「嘘ばっか。少しだけ殺気を感じるよ」

「黙れ。これは殺気などではない」

どすの聞いた声で低く静かにそう言うと、ウィリアム・シルフィードは頼んだお茶には手もつけずにその喫茶店を出た。

よたよたと、頼りない足取りで、しかしどこか面白そうに少女のキスキル・リラが問う。

「ねえ、ウィリアムが怒るんだったら、あの契約者いらないでしょ？」

「あれを喰らうことは私が許さない」

その台詞を聞いたキスキル・リラは目を丸くした。

「ウィリアム、もしかして一目ぼれ？」

「まさか。ああいう手合いには少し調教が必要だと考えていたところだ」

「へんたゝい」

「獣のお前にはわかるまい」

その台詞を聞いたキスキル・リラはにやつと笑った。

「わかるよ、ウィリアムのその気持ち、『執着』っていうんでしょ？」

「好きなように取るがいい」

その言葉を聞いたキスキル・リラは人が見ているのも構わず乙女に変化した。

子供用に作られたトーガを、はちきれんばかりに着こなしている。

すらりと伸びた太ももが、道行く男性の視線を釘付けにする。

「もうっ、私の歩幅も考えて歩いていただきたくってよ」

「焼いたのか？」

「まさか。ウィリアムの今まで見たことのない表情を引き出したあの女に、少し興味を惹かれただけですわ」

そして契約者と獣は雑踏の中へと消えていった。

——ここは審問機関。

その一室では、いま一つの契約が交わされようとしていた。

申請者はギルバートである。

彼の前には、セルビアと名誉顧問のルイウスがいる。

ギルバートの血のついた契約書を受け取り、それを読み上げるセルビア。

「汝の契約者であるアンナ・タイラの搜索と、契約者を拉致したものを捕縛する権利をそなたに与える」

「謹んで承る」

「皇帝陛下の名において、見事任務を遂げた暁には、この国での永住権を約束する」

「ありがたき幸せ」

「これで申請は終わった。では、疾く行け」

「はっ」

言い終わるや否や、足早に建物を出たギルバートはすぐさまルウとガルデインにこのことを伝えた。

「へえ、捕縛ってことは、生かして捕らえにやなんのか。面倒くせえな。お嬢さんを攫った奴らなんぞ、生かしておく価値もねえのに」

「でもこの仕事をやり終えたら、俺達誰にも文句を言われずに、この国で暮らすことができるんだよ。これってアンナのおかげとも言えるのかもしれない」

ルウはそう言うのと、にこっと無邪気に笑った。

「ルウ、まだ任務を承ったばかりだ。気が早いぞ」

「でもお頭、俺何だかワクワクしてきた。アンナを悪い奴らから無事助け出せたら、俺達の幸せな生活が待っているなんて、最高に面白いことになってきたと思ってるよ」

「さしずめ俺たち正義の味方って訳かい。悪くねえな」

「では、仲間たちに連絡を取ろう」

そう言うと、ギルバートは親指と人差し指で輪っかを作り、それを口にくわえてピイツと吹いた。

すぐさま、遠くのほうから同じような音が返ってきた。

「これでアンナの居場所がわかる。俺達は堂々とアンナを助けに行くことができる」

「やあっとお頭の本領発揮だぜ」

ガルデインはほっと胸をなでおろすかのように言った。

「手っ取り早く終わらせて、お嬢さんをいろんなところに連れて行ってやろうぜ。この国のことを、俺達のことを好きになってもらえるように」

「俺はアンナと一緒に舞台を見に行きたいな」

「お前が楽しんでどうするんだよ」

「だって俺、アンナみたいなお姉ちゃんがいたらいいなってずっと思ってたんだ」

「最初はお嬢さんのことをナンパしようとしていたくせにか？」

「あれは無しっ！」

そのやり取りを尻目に、ギルバートはどこかへと思いを馳せるのだった。

「アンナ……」

ギルバートが出ていった審問機関では、セルビアとルイウスが言葉を交わしていた。

「良いのですか、陛下。あのものに永住権など与えて」

「セルビア、ここでの私はルイウスという男であると言ったはずだが」

「失礼致しました。ですが、ルイウス様」

「これ以上の話は無用」

「はっ」

ルイウスこと皇帝ユリウス3世は、ギルバートが出て行った方を見やった。

「あの獣の目はどこまでも本気だった。……面白い」

舞台 2

市場でスポンジと歯磨きセットと小物類を買った私は、今度はウィンドウショッピングをすることに決めた。

私の後ろにはパーソナルスペースを侵さない程度の距離で、ティリウスがついてきている。

この状況は意外と苦痛ではなく、「私、今一応捕まっているんだよな」と絶えず再確認しないと、「なんかこのままでもいいかも」と流されてしまいそうになる。

そんなことを考えていると、誰かが私に声をかけてきた。

「可愛いお嬢さん、これを受け取ってください」

さらりと渡されたので、思わず受け取ってしまう。

渡されたのはなにやら小さなペンダントだった。

それを渡してきたのは意外にも見知った顔だった。

「あ、あなたはアントニオ・バンデラス……じゃなくてハティ！」

ラテン系色男のハティと遭遇した私は、昨日の出来事をすっかり忘れていたことに気付く。

「ハティ、皆はあのあと大丈夫だったの？」

「ああ、お嬢さんのおかげで誰一人傷つくことはなかったよ。お嬢さんこそ元気そうで良かった」

胸をなでおろす私とハティ。

「お嬢さん、いい匂いがするね」

「さっきお風呂に入ったの」

「じゃ、好都合だ。このペンダントの中身にはちよつとした香りがつけてあってね、肌身離さず身に着けておいてもらえると嬉しいな」

うわあ、ハティから粹なプレゼントをもらってしまった。

ハティと出会ったことにより、急に皆のことが懐かしくなってきた。

少ししかいなかったはずなのに、なぜかあの場所に戻りたくなっている自分がいる。

でも今の私は一応捕まっている身なのだ。

下手に動けばどんな報復があるかわからないし、護衛と称した監視がティリウス一人だからといって全く油断できない状況であることに思い至った。

ふとハティが私の後ろにいるティリウスを見る。

「お前、獣だな」

そう言ったのはハティ。

言われた方は私の後ろに控えていたティリウス。

ティリウスは全く動じたそぶりを見せずに、ハティの質問に答えた。

「そうだが。それとお前も獣だろう」

私を挟んで視線の応酬をする二人。

間に挟まれて気まづくなった私はハティに声をかける。

「あの、ハティ、私大丈夫だから。元気でいるって皆に伝えてくれるかな？」

ハティは視線の応酬を止めて、私を見てくれた。

「ああ、わかった。それとお頭も心配していたよ」

そう言うとハティは私たちの傍から離れ、雑踏の中に姿を消した。

ギルバートは元気だろうか。

ルウやガルディンや他の皆はどうしているだろう。

日も落ちてきたので、私はあの家に帰ることにした。

家に着くや否や、ラカンが私たちを出迎えた。

「おう、やっと帰ってきたか。夕食を一緒にとろうと思ってな、待

ちかねたぞ」

ラカンが太鼓のように突き出た腹を掻きながら私に近づいてきた。

「お嬢さん、2階の部屋に衣装が置いてあるから、それを着て降りてくるといい」

時間が経つごとに、私はこのラカンのことが正直嫌いになっていった。

品のない風貌、下卑た想像、だらしない仕草。

でも、ここでその嫌悪を相手に悟られる訳にはいかないと思った。

日本の会社で培った社交辞令スマイルを存分に披露してやることにする。

「まあ嬉しい！　新しい衣装ですって？　ありがとうラカンさん、楽しみだわ」

「素直な女は嫌いじゃないぜ」

「あら、私も羽振りのいい男は嫌いじゃなくてよ」

「今日はこれから俺と楽しんでもらうことにするからな」

「ラカンさんったら悪い人」

そう言って、私は2階へと上がっていった。

「……げええ、鳥肌見られなくて良かった」

そうひとりごちると、私は用意してあった衣装に袖を通した。

「よく似合っているじゃないか」

2階から降りてきた私にラカンが声をかける。

今の私は市場で買っておいたヘアピンで髪を編みこんでアップにし、
鼈甲色のカチューシャを頭につけている。

トーガの色はワインレッド。

これはラカンの趣味なのだろうなと思った。

薄暗い部屋で、僅かな明かりの中で化粧をしたのだが、それほど崩れてはいないらしい。

「それでは行こうか」

そう言うと、ラカンは私の手を取り馬車へと案内した。

こいつ、私を娼婦か何かだと思っているんじゃないだろうか。

いや、娼婦という職業を侮蔑するつもりは一切ないのだが、このラカンと言う男に触られるのがこんなに気持ち悪いと感じることは想像だにしていなかった。

セクハラという概念はどうやらこの世界にはないらしい。

一見親切そうに振舞いながら、その下には隠しきれない下心が見えているのを私に気付かれているのを、この男は知っているのだろうか。

ラカンとは私とティリウスが「楽しんで」きたのだと露ほども疑っていないように見える。

こちらの世界にきてから、私が周りの人からお嬢さんだの若いだの言われてきていたことから推察するに、この男はかなりの年下好みなんだろう。

だがラカン、私はね、こっちの世界ではまだヴァージンなんだよ！

あんたにほいほい抱かれてやるほど安くはないんだから。

ラカンに食われる前に、絶対にここから逃げ出してやると誓った私であった。

舞台 3

ティリウスと私はラカンに馬車で10分ほど揺られたところにある料理屋へと連れて行かれた。

瀟洒な作りのそこは、今は上品な貴族たちで溢れかえっていた。

カエキリアに聞いたところによると、この国の住人は地位や財産がある人ほど、普段は自分の家で食事を摂ることが多いらしい。

召使を雇い、毎晩豪勢な食事をとるのが慣わしのようだ。

それがなぜこのような料理屋に集まっているのだろうかといぶかしんでいると、それを察したのか、ラカンが説明してくれた。

「今日はこの店で面白い見世物をやるという話があつてな、お嬢さんにも見せてやりたいと思つて連れてきたのだよ」

あら、ラカンって割と良い人なのかしら？ 下品だのなんだの疑つた私ってちょっと酷い人？

と、ラカンの左手が私の腰をぐいと引き寄せた。

荒い息が頬にかかる。

「それが終わったら、お嬢さんと二人で、朝まで楽しくやろうじゃないか」

……前言撤回！ ナニを朝まで楽しくやろうだって？ 舐めんじゃ

ないわよこのエロ親父！

しかしそんな感情はおくびにも出さずに、私は笑顔で答えた。

「ええ、私も楽しみにしているわ」

うわあん！　だれか助けてー！

料理屋に入ると、すでに席が予約しており、労せず食べ物にありつくことができた。

しかもほどなくしてウォルディもやってきたので、4人で料理を食べることとなった。

ラカンが赤ワインを注文し、食事が開始された。

最初は前菜。

白いアスパラガスのようなものにパセリの葉っぱを乗せたようなものが陶器のプレートに乗って出てきた。

用意されてあったナイフとフォークを使い、それをいただく。

食べてみると、あっさりと洋風のダシがきいていて、とても美味しかった。

思わず「美味しいーコレ！」と叫ぶ、某芸能人出演の自腹料理番組を思い出してしまった。

しかし、そういえば、この世界から帰れないということは、もうテレビもパソコンもアニメも映画も漫画も小説も全部見られなくなってしまうということなのだとはたと思い至った。

それは私にとってかなりきつい。

もうYouTubeもニコニコ動画もtwitterもmixiも見ることができない。

アマゾンや楽天で買い物をすることもできない。

この世界で生きるということは、そういうことなのだがっくりきてしまった。

しかし食べ物美味しいし、新種のアトラクションだと思えば今はまだ耐えられるので、気を取り直して食事を再会することにした。

次に出てきたのは、名づけるならば「フォアグラとトリュフとフルーツ」である。

お皿の上に乗っているものは、そうとしか形容できない。

真ん中にフォアグラ、そのうえにスライスした黒トリュフが乗っており、周りにはフルーツが添えてある。

フォアグラには酸味のあるソースがかかっており、これも美味しくいただくことができた。

次はスープが出てきた。

コーンスープのようなそれはお腹に優しく入っていった。

次は魚のグリエだった。

塩味の焼き魚の上に、水菜のようなものと、紗に透けた揚げ春巻きのような皮のようなものが乗っており、とても美味だった。

「美味しい」

思わずそう漏らす私。

「気に入ってくれてよかった」と、ウォルデイが言う。

もしかして、このセンスの良さはウォルデイが選んだからなのかもしれないと思った。

次にやってきたのはフルーツのシャーベットだった。

もう終わりなのだろうかと思ったが、次のメインディッシュに向けた口直しとのことであったので、「これって差し詰め本格フレンチみたいね」と感動した私であった。

メインディッシュは牛肉のステーキだった。

赤ワインのソースで煮込んだそれは口の中で蕩けるくらい柔らかかった。

付け合せは小さな白かぶと人参とブロッコリーだった。

「贅沢だわ」と心の中でひとりごちる。

周りを見ると、ラカンとウォルディは二人で赤ワインを一本空けていた。

ティリウスは酒には手をつけず、料理を上品に食べている。

すると、ティリウスを見ていた私をラカンが見た。

「おいおい、お嬢さん、こんなところで今日の『お楽しみ』を思い出しているんじゃないだろうな」

しつこいおっさんだわ。

「あら、恥ずかしいわ」

「なあに、恥ずかしがることなんてないんだ、もうすぐ良くしてやるから待ってろよ」

そう言うと、ラカンは私の膝に手を置いてきた。

そのままゆっくりと上にずらす。

足の付け根に来たところで、今度はそこをもみしだくような仕草をした。

背筋がぞっとしたが、私は努めて冷静に振舞うことにした。

持っていたナイフとフォークを置き、太ももの付け根を触っていた

手を両手で握った。

そのまま笑顔で「ここじゃ恥ずかしいわ」と小声で返す。

ラカン満足したような笑みを漏らした。

危ない危ない、以前テレビで「ホステスが伝授するしつこい客のか
わし方」なるものを見ていて良かったと心底ほっとした。

ふと前を見ると、ティリウスがじっとこちらを見つめていた。

ああ、多分ティリウスはいざ私が貞操の危機に陥っても、きっと助
けてはくれないだろう。

そんな「進退窮まる」とはこのことだ」と思った私の前に、羽で作ら
れた仮面をつけた、一人の男が近づいてきたのである。

舞台 4

仮面の男は私の席まで来ると、優雅な仕草で手を差し出した。

思わずその手をとる私。

すると、仮面の男は私を伴って舞台へと上がった。

どこからともなく音楽が鳴り始める。

「紳士淑女の皆様方、今宵は我々とともに一夜の夢を見ようではありませんか」

よく通る声でそう言うと、仮面の男は私の耳元で何事かを囁いた。

「え？」

思わず聞き返す私。

仮面の男はもう一度囁いた。

「最後まで信じて」

そう言うと、仮面の男は客席に向き直った。

「今宵、最初に行う出し物は、このレイディに手伝ってもらうことに致しました」

客席から沸きあがる拍手。

少しばかりうろたえる私。

いきなり舞台の上に連れてこられて、何をすればいいというのだろうか。

すると、舞台の上に人が一人入れるくらいの大きな箱が現れた。

「この箱の中にこのレイディを入れて、魔法をかけると、あら不思議、レイディはあっという間に消えてしまうという手品を披露致します」

客席からまた拍手。

「それでは始めさせていただきます」

男はそういうと、私の手を取り箱の中へと誘導した。

箱の中に入ると、外から戸を閉められたので、中は一瞬にして真っ暗になった。

と、足元からトントンとノックの音がする。

えっと思ってしゃがんでみると、床が少し開いて光が漏れてきた。

声が聞こえる。

「アンナ、俺だよ、ルウだよ」

「ルウ！」

小声だがしっかりとしたルウの声に、私も小声で囁き返す。

「アンナは口を押さえて板の上に座っていて」

「わかったわ」

私はルウの言うとおりに、箱の床に座り込むと口を両手で押さえた。

瞬間、板がすつと外れた。

落下する浮遊感に背筋がぞくりとしたのもつかの間、私は誰かの逞しい腕にしっかりと抱き止められた。

「アンナ！」

「ギルバート?!」

私を離すまいとしっかりと抱くのはギルバートだった。

「アンナ！無事で良かった」

「ギルバート、どうしてここに」

「必ず助けるから、今はこの板に乗って」

そういうと、ギルバートは私を抱いたまま、先ほどはずしたのと同じような板の上に私を乗せた。

「え、あの、私重いから……」

「そんなことはない、アンナは羽のように軽い」

横を見ると、ルウが先ほどの板を抑えており、客席からは「おおー！」という歓声が聞こえてきた。

ばたんという音がして、箱のドアが閉められるのがわかった。

「さあ、行くよ」

そういうと、ギルバートは片手で軽々と私が乗った板を持ち上げた。

何なのこの怪力は！

これって獣の力なの？

箱の内部に入れられ、再び真っ暗な空間に戻る私。

はっと気付いて思わず立ち上がる。

その瞬間、箱のドアが勢いよく開けられた。

「おおー！」

まぶしさに目を細めたその先では、観客たちが席を立て拍手をしている姿があった。

「さあレイディ、こちらへどうぞ」

手を引かれて舞台から降りる。

客席からは割れんばかりの拍手が聞こえている。

さっきの出来事がまるで夢であったかのように、私は席へと誘導された。

「ご協力ありがとうございます」

そういうと、仮面の男は私の髪に一輪の花を挿した。

「今宵の余興、ゆっくりとお楽しみください」

そうして、仮面の男はまた舞台へと戻っていった。

客席に戻った私は、ラカンから「今のはどういう仕掛けだったのだ？」と聞かれたのだが、「まるで夢見たいな一瞬でした」と言うだけにとどめた。

デザートはミルフィーユだった。

お皿の上で一口大に切られたそれを、ゆっくりと食べる。

最後にハーブティーを飲む。

このハーブティーには気を落ち着かせる効果があったのか、私は少しだけ冷静になった。

舞台を見ると、軽快な音楽に乗せて、3組の男性がダンスを披露していた。

エグザイルのように、縦一列に並んでぐるぐると回る動きをしたかと思えば、リンボーダンスのように上半身をゆっくり後ろに倒す動きを披露する。

観客は面白がって手を叩き、曲が終わりになるころには、舞台の上に飛び入り参加者も出たほどだ。

しかし、さっきまでは胸の鼓動が、早鐘を打っているようだった。

あの逞しい腕と、優しい声と、若草のような香りを思い出すたびに胸が締め付けられるようだ。

私どうしちゃったのかしら。

出し物はまだまだ続いているというのに、全然頭の中に入ってこない。

そうか、今まで気を張り詰めていたから、その反動が出てしまったのだ。

そう考えると、さらに冷静になれた。

いくらギルバートに会えたからって、この状況はまだ変わってはいない。

早合点するんじゃないのよ私。

貞操の危機は未だそこにあるのだから。

もう一度舞台を見ると、出し物はそろそろクライマックスに近づいているようだった。

「それではついに最後の出し物になりました」

客席はもう十分に温まっているようで、歓声や拍手で埋め尽くされている。

仮面の男が手を叩く。

「紳士淑女の皆様方。今宵の出し物は楽しんでいただけましたでしょうか？ 次にお見せするのが、最後の出し物となります」

客席からはええーと言う声と、待つてましたと言う声がない交ぜになる。

「それでは、その前にしばし、皆様のために作った、物語をお聞きください」

仮面の男がそう言うと、明かりが落ち、音楽の音色もかすかになった。

舞台 5

「昔々あるところに、悪漢に捕まった捕らわれの乙女がいました。乙女は気丈に振舞っておりましたが、悪漢の方は、早くこの乙女を食べたくて仕方がありませんでした」

観客はこれから何が始まるのだろうとワクワクしながら仮面の男の話に聞き入っている。

悪漢に捕らわれた乙女ですって？

それってもしかして……。

「捕らわれの乙女は契約者でした。街行く乙女の美しさに目が眩んだ悪漢は、乙女を強奪することに決めたのです」

客席からは「可哀想な乙女」「なんと卑劣な悪漢なんだ」というような声が聞こえてくる。

「乙女の家族は嘆き悲しみました。乙女の獣は、悪漢から乙女を救出すべく、一人果敢に立ち向かっていくことにしました」

観客は「いいぞ、流石契約者と獣だ」というような声援を送っている。

酒が程よく回り、余興で気持ちが高まっていた観客達は、単純とも思える話でもすんなりと受け入れる体勢になっているようだ。

「獣は皇帝陛下の名においた契約を交わしに行きました。契約は見

事交わされ、その獣は一目散に乙女の元へと向かいました」

この話、多少脚色が入っているものの、今の私の状況とぴったり合致する。

しかも、ギルバートたちがこれからやろうとしていることは正当な手続きを踏んでいるのだということを、観客に話しているようではないか。

「今日はその悪漢がこの広間に来ています。呼んでみましょう」

……何だそのふりは。

ああそうか、これは何かのアトラクションなのだな。

というかそう思わないと、これから先起こることについていけそうもないと私は思った。

観客達は途端にざわざわした。

今まで物語だと思っていたことが、一気に現実となって現れてきたからである。

「悪漢はどこだ」

「乙女はどこにいる」

観客が躍起になって辺りを見回している中、ラカンとウォルディは心なしか顔色が変わっているようだった。

まさか獣が正当な手続きを踏んで自分たちを捕縛しに来ると思っても寄らなかったのだろう。

ウォルディは恐怖で顔を青くし、ラカンが憤怒で顔を赤くした。

「さて最後の余興です。今から観客の皆様へ、生の捕り物劇をご覧に入れることに致しましょう」

わああと沸く客席。

ラカンは怒りでぶるぶると震えている。

「お前、今日は何をしていたんだ」

ラカンが押し殺した声でティリウスに問う。

「俺は契約通り、お嬢さんの護衛と監視をしていた」

ああやっぱり、監視も契約に含まれていたのね。

「このでくの坊が！」

声を荒げ、席を立つラカン。

ウォルディがそんなラカンを必死に押しとどめる。

「ラカン、ここで騒いでは俺達が悪漢であるといっているようなものじゃないか」

「おや、呼ばずとも自ら正体を現してくれましたね」

この機を逃さずに、すかさず声をかける仮面の男。

「これは陰謀だ！ 契約などまやかした！ 観客の皆さん、この仮面の男の話を信じてはいけません！」

必死にそう言い募るラカン。

しかし観客は最後の余興が始まることを楽しみにしているようで、誰もラカンの言葉には耳を貸そうとはしない。

「往生際の悪い悪漢には、少しお灸を据えてやる必要がありますね」

仮面の男はそういうと舞台上上がった。

「それでは皆さん、今から乙女の獣を呼び出します！ とくにご覧あれ！」

「出でよ獣！」

仮面の男がそういった瞬間、舞台の端から何かがゆっくりと歩き出てきた。

優雅な歩調のそれは、獣の姿になったギルバートだった。

オレンジ色の明かりに照らされ、毛皮が夕日が落ちた湖面のようにきらきらと輝いている。

観客達は、その美しさに感嘆の声を上げた。

ギルバートはゆっくりとした足取りで舞台から降りると、一步一步確かめるように歩いてきた。

歩くたびに筋肉が躍動し、力強い鼓動が聞こえてくるかのようだった。

程なくして、ギルバートは私たちが座っている席へとやって来た。

観客の視線を一身に集めながら、しかし優雅な足取りで、私の前まで来ると、ギルバートはすっとお座りをした。

尻尾はパタパタと振られている。

その姿はまるで自分の契約者を見つけて無邪気に喜んでいるといった風情だ。

おおと観客から声上がる。

ラカン是我慢でなくなったのか、ナイフを握ると、私とギルバートをにらみつけた。

「俺を愚弄しておって！　こんなに恥をかかされて、何もしないと思ったら大間違いだ！」

ラカンは私の手を乱暴に掴むと、食いと引き寄せて羽交い絞めにした。

酒臭い息が顔にかかり、思わず顔を背ける。

と、顔の前にナイフが突きつけられた。

「お前ら、今の言葉を撤回しないとこの女の顔に傷がつくぞ」

周りからひっと息を飲む音がする。

公衆の面前で醜態を晒され、理性的な判断を失った人間が取る行動としてはあまりにもお粗末であるが、ラカンはそのことに全く気付いていない。

しかし、仮面の男は仮面の下で一瞬にやっと笑ったようだった。

「拉致・恫喝・暴行未遂容疑で、お前を捕縛する」

その瞬間、どこから出てきたのか、あの宿屋にいたギルバートの手下たちがラカンと私の周りをざっと囲んだ。

舞台 6 ●

「寄るな！ この女の命がどうなってもいいのか！」

ラカンがさらにナイフを突きつける。

観客からは野次が飛ぶ。

「お前が悪漢か」

「その女の子を離せ」

「捕まえろー！」

まるでここが闘技場にでもなったかのような歓声だ。

ラカンは自分が見世物になっていることに未だに気付いていない。

期せずして、それはラカンとウォルディが考えていた「銀の獣を闘技場に引っ張り出す」という状態にふさわしいものであった。

ラカンは、顔から火でも噴くような勢いで、唾も飛ばさんばかりにわめき散らした。

「お前ら、俺が闘技場の獣を売買している商人だと知っての狼藉か！ 獣の分際で、人間に楯突こうなどというのはもっての外だぞ！ ええい、忌々しい獣の癖に、よくもこんな茶番ができたな！」

ラカンは「怒り心頭に発す」といった体で、ぶるぶると震えている。

私の顔の近くにあるナイフもぶるぶると揺れていて、あと数センチもすれば皮膚に達するような勢いだ。

お願い観客の皆さん、ラカンをこれ以上刺激しないで！

これ以上頭に血が上ったら、絶対この人私を刺すよ。

そう思った瞬間、私の目の前に銀の湖面が浮かび上がったかに見えた。

ギルバートがさっと飛び上がり、ラカンのナイフを持った手を食いちぎったのだ。

絶叫するラカン。

ラカンは私を思い切り突き飛ばし、地面でのた打ち回ったあと、勢い良く血が噴き出している、先の無くなった己の手首を呆然と見つけた。

ラカンの血が、私のワインレッドのトーガにかかる。

血の、金気のある生臭い臭いに思わずふらつく私。

と、私は誰かに抱きとめられた。

見るとそれはティリウスだった。

「ティリウス……！ あなたこの人たちの仲間じゃなかったの？」

「俺の契約はお嬢さんの護衛と監視だ。まだ契約は切れていない」
それを聞くと、床で自分の手首を押さえながら、齒を食いしばっているラカンが絶叫した。

「け、契約なんぞ知ったことか！ ティリウス、殺せ！ そいつらを皆殺しにしろ！」

「ラカン、俺との契約を破棄すると？」

「殺せ！ 殺せえっ！」

「埒が明かない。誰か、俺と新たな契約を結ぶものはいないか」

目の前で人が怪我をしているのに、誰も動こうとはしない。

それどころか、ギルバートの攻撃に大喝采の観客である。

「……異常だわ」

「お嬢さん、もしこの状態を異常だと思うなら、俺を雇う気はないか」

「え？」

「一代貴族であるお嬢さんならば、雇われてもいいと思っている」

「でも私お金持っていないし」

「金ではなく、その指輪の権利の一部共有が契約条件だ」

「権利ね、それならいいわ」

「契約成立だな。俺はお嬢さんの護衛を続け、お嬢さんは俺とその指輪の権利の一部を共有する」

「ええ。ではティリウス、早速だけど私をここから連れ出して」

「わかった」

そういうと、ティリウスは私を横抱きにして、ひと跳びで料理屋から出た。

料理屋では、未だ大きな拍手と歓声が続いている。

外に出て、夜の涼しげな空気を吸い込んだ私は少し気持ちが落ち着いていた。

人の手が実際に食いちぎられるところなんて初めて見た。

でもこれがこの国の常識なのだとしたら、少なくとも当分は慣れそうにないと私は思った。

捕り物劇は、その後、右手を失ったラカンと、青ざめているウォルディを捕まえて幕を閉じたそうだ。

私はティリウスに抱えられながら、夜の道を静かに歩いていた。

すると、どこからともなく人が集まってきて、私とティリウスを囲んだ。

「おいお前、お嬢さんを返してもらおうじゃねえか」

「あんたが大事そうに抱えているそのお嬢さんはな、俺たちのお頭の大切な人なんだよ」

その言葉を聞いたティリウスは、全く動じるそぶりを見せずに、私を地面へと下ろした。

「お嬢さん、俺のことをこの人たちに説明してはくれませんか」

ティリウスに促され、恐る恐る声を出す私。

「あの、皆さん、この人はさっき私の護衛になった人で、怪しい人じゃありません」

私のその態度を見ていぶかしむ周りの人たち。

「お嬢さん、まさかそいつに脅されているんじゃないやありませんよね？」

「おいお前、お嬢さんに手出ししたら俺達が只じゃおかねえからな」

一触即発の空気に身震いする私。

そのときである。

「アンナ」

呼ばれたほうに目を向けると、獣の姿のギルバートがこちらへ歩いてくるところだった。

「遅くなった。あの宿屋に帰ろう」

「ギルバート……」

私はギルバートのところへ駆け寄ろうとした。

だが、足が動かない。

「あ……。私、どうしちゃったんだろう、足が、竦んで」

「ギルバート、という名前なのか」

ティリウスが言う。

「俺は先ほど、このお嬢さんに新たに雇われた護衛のティリウスという。お嬢さんは気分が悪いそうなので、俺が抱きかかえて連れて帰るが、それでもいいか」

「なっ、お前、新参者の分際で何を言うか」

「お嬢さんはお頭の大切な人なのだと聞かなかったか？」

「黙っている」

仲間の言葉を制するギルバート。

「でもお頭、こんな胡散臭い奴にお嬢さんを任せておいてもいいんです?」

「今は仕方あるまい。テイリウス、アンナを頼む」

そういい残すと、ギルバートは先頭に立って歩き始めた。

「ついて来い、宿屋まで案内しよう」

舞台 7

宿につくと、ティリウスが私を抱きかかえたまま2階へと上がり、案内された部屋へと入った。

その部屋のベッドに私を座らせると、ティリウスは「お嬢さんのお頭と話があるから」と言って、下の階に下りていった。

私は血のついたトーガと、サンダルを脱ぎ捨て、髪の毛についていた一切合財を取ると、ベッドに横たわった。

階下ではギルバートがティリウスを待っていた。

しばらく無言で佇んだあと、先に口を開いたのはギルバートだった。

「お前は、無音の獣だな」

「いかにも」

大した動揺を見せずに頷くティリウス。

「アンナのことは、ペンダントと花の香りでようやく識別できた。お前ほどの力を持つものが、なぜあの二人に組していたのだ」

「それが契約だったからだ。だが今はあなたのお嬢さんと新たに契約を交わしている」

「なぜあの二人と契約を交わした？」

「勘、だろうな」

そう言い放つと、ティリウスは話を続けた。

「心配せずともお嬢さんの護衛は全うする。その方がこちらとしても都合が良いからだ。ただし、お嬢さんとした契約は『指輪の権利の一部共有』というものだ。それに関してはこちらの好きに使わせてもらうこともあるだろう」

「わかった。お前が言っていることに矛盾がないと言うことは理解している。だが、もしもこれから先、アンナを傷つけるようなことがあれば、そのときはお前を殺す」

感情を見せずにそう言ったギルバートに対し、ティリウスも同じように返した。

「了解した。自分の持てる力の全てを使って、あのお嬢さんを守ることを約束しよう」

——夢を見た。

私は元いた世界に戻っていた。

タイムラグはなく、今までどおりの生活に戻れたようだ。

せっかくなので、自分のやりたいことをやってみることにした。

まずは本屋さんへ行く。

行きつけの本屋さんなのだが、ここは私好みの本が充実しているのだ。

雑誌をパラパラと立ち読みしたあとは漫画コーナーに行く。

ああ、末次由紀の「ちはやふる」の新刊が出ている。

あと田村由美の「7SEEDS」の新刊も出たのか。

やったー、ラッキー！

「ちはやふる」は少女マンガの域を超えたスポ根かるた漫画、「7SEEDS」は少女マンガの域を超えたサバイバル漫画だと思っているのだけど、認識は間違っていないわよね。

あ、これは「HUNTER×HUNTER」の新刊だ。

富樫義博の漫画はやっぱり面白いわ。

わあ、惣領冬実の「チェーザレ」も幸村誠の「ヴィンランド・サガ」も出ている。

よし、5冊とも買うのを決定！

しかしこの本屋さん、小説でもファンタジーやSFが充実している飽きないわー。

ジョージ・R・R・マーティン、マーセデス・ラッキー、上橋菜穂子、沖方丁、荻原規子、……。

今日は何か良い日だわ。あ、漫画は今全部買って、家に帰ってからゆっくりと読もう。

今度は、携帯でmixiを見てみる。

わあ、「一件の日記にコメントがついています！」だって。すぐに返信しなきゃ。

次は友達とカラオケに行った。

「あー、久しぶりに会うわねえ。皆がちょうど、仕事が休みの日で良かったわ」

カラオケで3時間ほど熱唱する。

美空ひばりの「川の流れるように」を歌ってシメとした。

今度は信幸さんと会うのだ。

そういえば、この間は信幸さんとのデートすっぱかしちゃったんだっけ。

ゴメンねと謝る私を、信幸さんは笑って許してくれた。

美味しいフレンチを食べる。

あ、フレンチと言えば何だか嫌な思い出が湧き上がってくるのだけ

ど、それが何かわからないうちに、記憶の奥底に沈めてしまおう。

そう言えば私、何でこの間のデートをすっぱかしたんだっけ。

よく思い出せない。

でも今日は美味しい料理を食べて、友達と遊んで、好きな本を買って、充実した一日を送れたのだからいいか。

それに今日は本当に、良いこと尽くしだわ。

妹の由香に二人目の子供が生まれて、母の体が良くなって、父は健康で、信幸さんとはラブラブで。

ああそうだ、私はもうすぐ結婚するのだ。

妹の子供のほうが年上だなんて、なんだかしっくりこないところもあるけれど。

……あれ、どうして涙が出るんだろう。

泣いていたら、周りの人たちから変な人って思われちゃう。

信幸さん、由香ちゃん、お父さん、お母さん……。

——ごめんね。

——目覚めると、涙がぼろぼろと溢れている最中だった。

「うえっ、えっ」と思わずしゃくりあげる。

もうこんな日々は戻ってはこないのだということを再認識する。

何で私、こんなところに来てしまったのだろう。

こんなところ、来るんじゃないかった。

ベッドの脇の床では獣姿のギルバートが眠っていた。

そつとサンダルを履き、カチューシャをつけ、用を足して外に出ることにした。

そう言えばこんな朝早くに、公衆浴場ってやっているのだろうか。

とにかくお風呂に入りたい。

化粧を落として、腫れぼったい顔を洗い流して、しゃっきりしなくては。

ああ、自分の服と「一ヶ月お泊りセット」は、ラカンの家においてあるんだっけ。

それを取りに行ってから、お風呂に入りに行こう。

外に出ると、後ろから声がかかった。

「お嬢さん、どこに行くんですか」

後ろを見ずとも、それがティリウスだとわかる。

「ラカンの家に。荷物を取りに行こうと思って。それとお風呂に入りに行こうと思って」

「俺もついていきますよ。護衛ですから。何だったら、跳んで行きましょうか？」

「じゃあ、お願いするわ」

私は振り向いた。

2階の部屋では、ギルバートが薄く目を開け、ため息を一つついていた。

番外編 4年前の出来事 ●

――4年前。

俺は、森で捕まった。

一瞬の隙を突かれたのだ。

俺のほかにも捕まった仲間が沢山いたが、そいつらがどこに連れて行かれたのかは知る由もない。

いろいろな種類の獣が、一つの馬車の中に詰め込まれた。

イラついて周りの獣に手当たり次第に噛み付いている獣がいたので、二度と噛み付くことができないような姿にしてやった。

俺達は皇帝への献上品として、中規模の円形闘技場で、最後の一頭になるまで殺し合いをさせられた。

ルールは、最初に何グループかに分かれて乱戦、その中から生き残ったものを集めてトーナメントをし、最終的に頂点になった獣を皇帝に献上するというものだった。

俺達は、相手を食べることによって、相手の能力を取り込むことができる。

それを人間は「融合」と言っている。

この「融合」の最中は拒絶反応が起こり、ほとんど動けなくなる。

だが、相手の力を取り込んだものほど強くなるため、決闘はどちらか一方が相手を喰らい尽くすまで、止めることはなかった。

この様子は見世物として成立していたため、獣を売る商人たちは十分元が取れたのだそうだ。

俺は、その闘技場で一人の親友と出会うことになる。

その親友には以前契約者がいたが、その契約者が死んだあと、この闘技場に無理やり連れてこられたというのだ。

親友は俺に話す。

「わかるんだ、あのひとの絆が少しずつ消えていくのが」

「俺とあのひとの絆が消えないうちに殺してくれ」

「俺がもし死んだら俺の体をお前に全て食べてほしい。他の誰にもやらないでくれ」

親友とは他にもいろんなことを話した。

親友の契約者は異界の住人だったこと。

その異界は、鉄の馬車が走り、蒸気船という名前の、大きな鉄でできた船が川や海を渡っていたということ。

異界での生活習慣や食べ物のこと。

親友の契約者とその夫は、この国で一代貴族の申請をしたあと、皇帝陛下に謁見し、この国に知識という恩恵を授けることを約束させられたことなどである。

周りの獣は一頭減り、二頭減り、そうして、どんどん数が少なくなっていた。

時が経つのは早く、俺と親友は暇を見つけては時間を忘れて話をした。

最後の一人にならないよう、一日でも長く生き延びられるよう。

だが、ついに親友との決闘の日が来た。

闘技場は歓声に沸いた。

この試合に勝った方、俺と親友のどちらか一方が皇帝に献上されることになっていたからだ。

死闘の末、俺は親友の息の根を止める。

親友の体は、俺が、血の一滴も、骨のひとかけらも残さずに喰らい尽くした。

「おお、無二の親友とまで呼んだ仲間を貪り食っておるわ。あれも所詮獣だな」

「見ろ、地面についた血まで、跡も残さず綺麗に舐め取っておるで

はないか。よほど腹を空かせていたのであろう」

その後、俺は皇帝の元へと運ばれる。

その途中、俺は自力で檻から抜け出したのだ。

親友との死闘後、ずっとぐったりしていたので、商人たちはまさかこんなに早く動けるとは思っていなかったらしい。

ある日の深夜、突然拒絶反応が治まったのだ。

親友や、喰われていった皆の遺志かもしれない。

俺は鎖を食いちぎり、檻も引きちぎって脱走した。

「あの状態で、この檻を壊して逃げ出しただと？融合中で動けないはずではなかったのか！」

「草の根分けてでも探し出せ！」

だが、逃げているうちに治まっていた拒絶反応がまたぶり返してきた。

後ろからは人の声が聞こえる。

そう遠くない。

限界が近づいたとき、急に足元の大地がなくなった。

地面の裂け目に落ちたのだ。

体をあちこちぶつけながら落ちていると、一瞬何もない空間に放り出された。

そして、俺はその空間から抜けると、見たこともない平らな地面の上に落ちた。

あたりは薄暗く、全く知らない風景が広がっていた。

そのままその地面にうずくまると、俺は深い眠りについた。

――その4年後、俺は新たな仲間を見つけ、大切な人と穏やかな日々を過ごすことを目標に、日々を生きることとなる。

――最初は夢だと思った。

なぜ自分がこんなところにいるのかわからなかった。

窓の外を見ると、見たことのない景色が広がっていたからだ。

私の名前はエランディオール・セメネス。

オックスフォード大学で細菌の研究をしていた。

愛する妻マリアと、二人でこの家に暮らしていたのだ。

最初に異変に気付いたのは妻だった。

「あなた、見てこの景色！」

外に広がる景色は古代ローマのそれに似通っていた。

帰りたい、そう思ったが、愛する妻と一緒にあったので、故郷に対して惹かれるということはさほどなかった。

この国に来て、最初は言葉がわからず苦労したが、持ち前の根気と、社交的な妻のおかげで、なじんでいくことができた。

ある日の夜、妻が一頭の子犬を抱いて帰ってきた。

嬉しそうに妻が言う。

「あなた聞いて！ 私、この子の契約者になったのよ！」

私達はその子犬を育てるようになった。

それはまるで自分達の間にか可愛い子供ができたかのようにだった。

ある日、審問機関というところから、一代貴族の申請の話がやってきた。

もちろん、すぐさま承諾した。

妻は子犬の契約者になってから、この国の言葉がわかるようになっていったといっって喜んでいた。

私はそんな妻から言葉を教えてもらうのを楽しみにしていた。

数年後、私は一人の弟子を取った。

弟子の名前はウィリアム。

その響きは、イギリスにいたことを思い出させた。

ウィリアムは飲み込みが早く、私の研究内容についても、ほとんど理解しているようだった。

妻と、犬と、息子のようなウィリアム。

思えばあのころが一番幸せな時間であつたかもしれない。

妻が死んだ。

流行り病にかかつてあつけなく死んでしまった。

私はそのころキスキル・リラという獣を捕まえたことによって、貴族たちの間でもはやされており、少し我を忘れていたところがあつたのかもしれない。

だが、稀代の魔術師などと言われていても、実際は何の変哲もないただの人で、この国に未来の知識を持ってやって来たに過ぎないのだ。

絶望に駆られ、私は細菌の研究を止め、異界の扉を開く研究に没頭し始めた。

そのころからだろうか、あんなに私のことを慕っていたウィリアムが私と距離を置くようになったのは。

妻が死んでから、私は人が変わったようになったとウィリアムが漏らしていたと風のうわさで聞いた。

そうして、やっと開いた「裂け目」に入ってしまったのがあの獣だった。

私はまた絶望に駆られた。

「裂け目」の底からうつすらと見える異界の景色は見知ったものは全く異なっていた。

私は知る。

もうこれで二度と故郷に帰ることはできないのだと。

だがもう自分の運命を呪うことはなかった。

これでやっと開放されると思った。

――3年後、エランディオール・セメネスは流行り病にかかってこの世を去ることになる。

謁見 1

公衆浴場は朝早くから開いており、荷物を取りにいった私は、その足でお風呂に入った。

湯船に浸かりながら、私はこれからのことを考えていた。

ここはなんて野蛮な国なのだろう。

人が怪我をするシーンを見世物のように扱うこの国で、私は生きていかなければならないのだ。

日本でも、プロレスやボクシングなどの血を見る戦いはあったが、殺し合いや傷つけあうことを目的とした娯楽は公共放送ではタブーだった。

いくら護衛がついているとはいっても、私の心まで守ってくれるというわけではない。

自分の心は自分で守らなければ。

そう決心すると私は風呂から上がった。

ティリウスは昨日のように先に出て外で待っていてくれた。

「お嬢さんの指輪のおかげで、俺も無料で風呂に入れましたよ」

そう言うティリウスは心なしか爽やかな表情になっている。

私はあることに気付いていぶかしんだ。

「ティリウス、何だか私に対する接し方が昨日と少し変わっていない？ 何で敬語なの？」

「今俺と契約しているのはお嬢さんですから。あなたに対する礼儀だと思ってください」

「ふーん、そうなんだ」

この国では契約というものがかなり重視されているらしい。

それとも、私が出会った人たちが、そのような人たちばかりだったのだろうか。

昨日のラカン「契約なんて知ったことか」と騒いでいたし。

ああそうだ、傷害事件があったのは昨日のことなのだ。

それなのに、変に実感が湧かない。

この国で生きるとするならば、今まで持っていた常識を一度改める必要があるそうだ。

ルウの言うとおり、私はこの国では何も知らない子供と同じなただから。

私はティリウスを伴って歩きながらそんなことを考えていた。

……ファンタジー小説で「なぜトリップするのは少女が多いのか」がわかったような気がする。

少女のほうが、順応性が高いからだ。

三十路も近くなってくると、自分が今まで生きてきた世界の常識に捕らわれてしまい、異世界に順応するのにかなり時間がかかる。

子供ではいられないということがこんなにも煩わしいものだとは思わなかった。

日本にいたころは、早く大人になって、社会に順応して、誰にも迷惑かけずに穏やかな生活を送りたいと思っていた。

その努力が、一瞬の出来事で全て無駄になってしまったかのようなのだ。

それに私には、自分が大人であるというプライドもある。

日本の常識を必死で当てはめようとしているのは、自分がこの世界ではまだ子供同然なのだということを認めたくないが故なのかもしれない。

この世界を拒絶したって何の徳にもなりはしないのに。

受け入れなければ。

「お嬢さん、今日も喫茶店へ行くんですか？」

ふと気付くと、目の前には昨日訪れた喫茶店があった。

「ティリウスお金持ってる？」

「はい。昨日の分がまだいくらか」

「じゃあ、ちょっと寄り道してはいかがしら」

私は喫茶店に入ると昨日と同じお茶を注文した。

早くこの世界に慣れなくては、早く受け入れなければと焦っていた私の心は、一杯のお茶によって少しばかり癒された。

「こんにちは」

誰かに声を掛けられて、はっと振り向く。

見ると、昨日ここで出会ったウィリアム・シルフィードという名前の男が、乙女を傍らに従えて立っていた。

「こんにちは、ウィリアム・シルフィードさん。またお会いしましたね」

「私の名前を覚えていてくれたのですか」

「ええ、昨日お会いしたばかりですもの。ウィリアムさんもお茶を飲みにいらしたの？」

「はい、と言いたいところですが、実はあなたにお会いしたくてここまでやってきてしまいました」

「あら、お上手ですね」

こんなやり取りをするのも、自分が大人の仮面を被っているからなのかもしれない、と思った。

「今日のあなたは何だか浮かない顔をしていますね。何があったのか、私でよければ話し相手になりますよ」

ウィリアムにそう言われ、思わずはっとした。

会って二度目の人にいらぬ気を使わせてしまった。

いけないわ。この憂鬱な気分、もしかしてPMSかしら。

「いえ、大丈夫です。ちょっと湯あたりしたのかもしれませんが」

「そうですか。それならばよいのですが」

「ウィリアムさんは優しいんですね。ところで、そのお隣にいる女性ウィリアムさんの恋人ですか」

ウィリアムは少しだけ片眉を上げたあと、合点したように答えた。

「彼女は私の獣のキスキル・リラです。紹介が遅れてしまい申し訳ありません」

「えっ！ その彼女、昨日の女の子と同一人物なんですか？」

驚く私に対して答えたのはキスシル・リラだった。

「そうですわ。私、いろんな姿に変化することができますの」

そういうと、キスシル・リラはその場で少女に変化した。

来ていたトーガがあっという間にだぼだぼになる。

「お姉さんには昨日この姿で会ったのよね」

ああ、この口調は昨日の少女のそれだ。

続けてウィリアムが口を開く。

「実は今日ここに来たのはもう一つ理由があるのです」

「どんな理由ですか？」

「実は私は、皇帝陛下のお傍近くに住んでいるものなのです。その皇帝陛下から、あなたへ直々のお達しがあることをお知らせしに来たのです」

謁見 2

「ウィリアムさんってそんなに偉い人だったんですか？」

驚く私を見たウィリアムは少しばかり面白そうな表情で言葉を継いだ。

「私の名前は呼び捨てで構いませんよ。ええ、自分で言うのもおかしいかとは思いますが、それでも私は、この国ではちょっとした人物なのですよ」

「これは大変失礼を致しました」

思わず恐縮する私に対し、ウィリアムは微笑みながら言った。

「そんなに恐縮なさらないでください。私にとって、初対面のあなたの印象はとても強烈だったのです。どうかそのままのあなたでいてください」

「そのままの私って……、私昨日あなたに何か失礼なことをしてしまったのでしょうか」

「ええ、私の誘いを、動じた素振りを見せずに断ったのはあなたが初めてでしたよ」

誘い？ 誘いなんて受けた覚えは……。

昨日のウィリアムの行動を反芻する。

一つだけ、思い当たることがあった。

「あ、あのキスは挨拶じゃなかったんですか？」

「私にとっては立派な求愛の仕草です」

知らなかった。この国では、手の甲にキスをすることが愛を語ることにつながるなんて。

いやまて、そのルールはこのウィリアム独自のものかも知れない。

ああ、異世界の常識を知らないってもどかしい！

ふと隣に座っているティリウスを見る。

あ、そうか、わからないことがあったらティリウスに聞けばいいんだわ。

私はこれまでだってそうしてきたじゃない。

自分が素直な気持ちで行動を起こしたから、カエキリアにこの国の女性の生活習慣も聞けたのだし。

自分が大人だというプライドを捨てさえすれば、「大人になると面の皮が厚くなる」という利点が残るんだわ。

昨日この二人から感じた危険な感じは今もまだあるけれど、少なくとも、この二人は悪い人では無さそうだわ。

そうだ、女は度胸よ！

私は現実に戻るとウィリアムに言った。

「あの、今日は何だかウィリアムのおかげで、忘れかけていたものを思い出したような気がします。今はとっても晴れやかな気分です。ありがとうございました」

そういうと私はウィリアムに向かって微笑んだ。

ウィリアムは怪訝そうな顔をしたが、何も言わずに黙っていた。

「そうだ、そろそろあなたの名前を覚えてもらえないだろうか」

そういえば、ウィリアムに対しまだ名乗っていなかったことに気付く。

「失礼しました。私の名前はアンナといいます。こちらにいるのが、私の護衛のティリウスです」

「アンナ、良い名前だ」

「ありがとうございますウィリアム。ところで、皇帝陛下からのお達しって、いったいどのようなものなのかしら」

私の質問にウィリアムが答える。

「近いうち、新たに一代貴族となったアンナさんを皇帝陛下が城に呼び出し、勅令を授けることになっている。その勅令を受けて初めて、アンナさんのこの国における貴族としての身分が確立するのだよ」

「そうだったの。実質その勅令を受けるまでは、本当の貴族と名乗ってはいけなかったのね」

この世界では、元いた世界と同じくらい申請や手続きがあるようだ。但し、そのやり方は元いた世界とは大きく違っているが。

しかもファンタジーでよく見かけるような魔法はないけれど、この国には得体の知れない力が渦巻いているようだ。

羊皮紙に浮かび上がる文字とか、生き神みたいな皇帝陛下とか。

そもそも、獣が人になる仕組みっていったいどうなっているのだろう。

また没頭しかける思考を無理やり引き剥がすと、私はウィリアムに向き直った。

「いろいろとお話をありがとう。今日は私、これで失礼させていただきますね」

そういうと、私は席を立ち、ティリウスに会計を払ってもらい、帰路についた。

「あはは、ウィリアム、また逃げられちゃった」

キスキル・リラにそう言われても、ウィリアムは動じなかった。

「あれはおかしな女だ。私のどこにあの女を元氣付ける要素があっ

たのか全くわからない」

「あの人って、結構自己完結しちゃうところがあるんじゃないのかな？」

「お前はそんなことを考えていたのか。それはあの女の悪口では？」

「聞こえていないなら何を言ってもいいんだよ」

「悪行を繰り返しているうちに、脳まで腐ってしまったか」

「あれ、ウィリアムはあの女のことを庇うの？ やっぱり惹かれて
いるじゃない」

ぶう、とむくれるキスキル・リラ。

「そうではない。お前の子供のような言動に少しだけ嫌気がさした
だけだ」

「子供が嫌なのね」

そういうと、キスキル・リラはその場で妖艶な美女へと変化した。

黒々と輝く、波打つ髪を背中に払い、右手で頬杖をつき、足を組んで
いる。

たわわな胸をさりげなく押し出すようなポーズで、挑発的にウィリ
アムを見る。

「これでお気に召すかしら」

キスキル・リラは顔を傾け、右手の小指を軽く噛んだ。

「それは私に対する嫌がらせだな？ お前は私が昼間、公衆の面前でその姿をとられることをよくは思っていないのを知っていて、わざとそうしているだろう」

「うふふ、そんな気はないわよ。あなたが子供は嫌だといったから、この姿をとったまでのことよ」

「お前の好きにはさせない。私はいつでもお前を捕らえる用意ができているのだからな」

「それってエランディオールの真似？ あの爺さんも腐った脳みその持ち主だったわね」

「お前に侮辱されるほどあの人は落ちぶれてはいなかった」

ウィリアムのその台詞を聞くと、キスキル・リラはいぶかしげな顔をした。

「何なの？ あの爺さんに未練があるんだったら、なぜ離れたりしたの？」

「未練などではない。お前にはわからないだろう。郷愁というものが」

そういうと、ウィリアムはしばしの間遠くを見つめたのだった。

謁見 3

宿屋に向かう間、私はティリウスから、「手の甲にキス」の仕草の意味はウィリアム独自のものだというのを聞いた。

危なかった、そのまま聞かずに放っておいたら間違った認識をしてしまうところだった。

宿につくとルウが出迎えてくれた。

「アンナ、待ってたよ！ 部屋で一緒に甘いもの食べよう」

「ありがとうルウ。じゃあお誘いについていただくわ」

私はルウに連れられて2階の部屋へと向かった。

ルウの部屋はこざっぱりとしていて、必要なもの以外は何も置かれていなかった。

ルウは私を椅子に座らせると、自分は窓枠に腰掛け、麻袋に手を突っ込みごそごそと何かを探した。

程なくして、綺麗な布に大事そうにくるまれた何かが出てきた。

「これ、俺が好きな焼き菓子なんだ」

布を開くと、香ばしい匂いとともに、大きなクッキーが3枚現れた。

ルウはその中の一枚を私に渡すと、自分は違う種類のものを取った。

「アンナに渡した焼き菓子は俺が一番好きなやつなんだ」

そういうルウの目は期待に輝いている。

私はそのクッキーを一口頬張ってみた。

「サクサクしていて美味しいわ」

「ねっ！ いけるでしょ」

そういうとルウは満足げにクッキーを食べだした。

何だかルウは本当の弟みたいだ。

それに無邪気にじゃれる犬みたいだと思ったとき、私はこの間のことを思い出した。

「そういえばルウって、本当は狼なの？」

「うんそうだよ」

あっさり首肯されてしまった。

私のぼかんとした表情に何を思ったのか、ルウは少しだけ慌てた。

「もしかして、アンナは俺が狼じゃ嫌だった？　ちゃんとした人間のほうが良かった？」

そういうと、ルウは一瞬しゅんとしたあと、上目遣いでこちらを伺

ってきた。

その様子は何だか可愛らしく、まるでしょげた耳が見えたような気さえした。

「そんなことないわよ。ルウは可愛いなあ」

ルウはおかしさに笑った私に対してぶすくれた。

「えー俺、可愛いじゃなくって、格好いいがいい」

「もう少しルウが成長したら、きっと可愛いじゃなくって格好いいって言うようになるわよ」

それを聞いたルウはパツと顔を輝かせた。

「アンナ本当？　じゃあ、俺、お頭みたいに早く格好よくなれるように頑張る」

「そうね、楽しみにしてるわ」

「お前ら、こうやってみると雰囲気が本当の姉弟みたいだな」

「ガルディン！」

いつの間にかガルディンが傍にやってきていた。

ルウの近くにあったクッキーをひょいと摘んで口に入れる。

「あー！　それも俺の好物だから最後に食べようと思ってとお

いたのにい！」

「ああ、悪い悪い」

「ガルディン、本当は全然悪いなんて思ってないだろ」

クッキーを頬張りながらガルディンは言う。

「ああ、悪い悪い」

「酷いよーガルディン！」

ルウが渾身の右ストレートを打ち込もうとするが、ガルディンにあっさりかわされてしまった。

微笑ましいその光景に思わず顔が緩む私。

「そうやっているガルディンとルウは本当の兄弟みたいね。ルウ、私の食べかけでよかったらこれあげるわ」

本格的な臨戦態勢に入ろうと思っていたルウはパッとこちらを向く。

「えっ！ いいのアンナ？」

「どうぞどうぞ」

「わーい」

無邪気に喜ぶルウが私のクッキーに手を伸ばし、いざ食べようと口に持っていったところで、これもいつの間にか背後に立っていたギ

ルバートがルウの手を後ろから掴んだ。

掴んだ手をそのまま上に持ち上げると、ギルバートはそのクッキーをぱくりと一口で食べた。

「うん、これはなかなかいけるな」

「うわあお頭！」

自分の好物を食べてしまったのが、自分の敬愛するギルバートであったため、ルウは握ったこぶしを震わせながらおろおろしている。

「ガルディン、ギルバート、ルウをあまりいじめないでやって」

「いじめたつもりはないのだがな」

「ルウがお嬢さんを独り占めしようとするのが悪いんだぜ」

そういつてにやりと笑ったガルディンはギルバートに声を掛けた。

「そーいやお頭は何でここに？」

「アンナに話があつてな。今日一代貴族の皇帝陛下謁見の通知が届いた」

「その話なら知っているわ。皇帝陛下に謁見することによって、初めて正式な貴族であると証明されるってやつでしょう」

「耳が早いな。アンナ、その話をどこで聞いた？」

「今日、ウィリアムっていう何だか偉い人から」

「ウィリアム・シルフィードに会ったのか！」

「ええ、でもそれって何かあるの？」

「ウィリアム・シルフィードはこの国きっての魔術師だ」

「あの人そんなに有名な人だったのね」

そういったときに、ふとあることに思い至る。

それならばあの場にいたティリウスも知っていて良さそうなものなのだが……。

きつと周知の事実であったからこそ、ティリウスは伝えるのを忘れてしまったのだと考えることにしたが、やはりなにかがしっくりこない。

これからは鬱陶しいかもしれないけれど、なんでもティリウスに聞いてみようと思った私であった。

「謁見は明日の午後、行われる。明日の服はハティが買いに行ってくれたので、アンナは今日、ゆっくり休むといい」

そういうとギルバートは一足先に部屋を出て行った。

「ギルバートはいつも忙しそうにしてるのね」

そういえばあまりギルバートと話す機会がなかったなと思った私は、

今日はギルバートとゆっくり話しあってみようと思ったのであった。

謁見 4

「ねえティリウス、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「なんなりと」

ルウの部屋から出ると、私はティリウスに聞いた。

「ティリウスはウィリアムのことを知っていたの？」

「ああ、知っていました」

やはり聞いてみてよかった。ティリウスはウィリアムのことを知っていて黙っていたのだ。

「何で私に教えてくれなかったの？」

「俺が言わずとも、遅かれ早かれ知ることだと思ったからですよ」

そういうティリウスの顔は、普段と変わらないように見える。

「そうだったの。でもティリウス、今度からはこの世界の知識を私に教えてちょうだい」

「わかりました。それがお嬢さんの望むことならば」

そういうとティリウスはにやりと笑った。

「何を教えて欲しいですか？ 望むなら、一週間だって、つきつき

りで教えてあげますよ」

ああ、これはラカンの言葉のパロディーか。

「そうね、今は特に知りたいことはないから、別のときにするわ」

「了解しました」

このティリウスという男、なかなか読めないな、と私は思った。

大きな力を持っているにもかかわらず、私ごときの護衛でおさまっているなんて。

私には「自分に魅力があるから」という自惚れた思いは全くといっていいほどなかった。

それどころか先ほどの感覚を信じるとすると「解せない」という思いのほうが募る。

あのときの契約の状況を思い出してみる。

確かティリウスは「この状態が異常だと思うなら、俺を護衛に雇え」といつていた。

また「一代貴族になら雇われてもいい」とも。

きっと、一代貴族の指輪の権利を介さねば成し遂げられないことでもあるのだらうと思った。

この共生関係は今のところどちらにとっても利益があるものなので、ティリウスのことは、油断はせずに、信頼しようと思った私であった。

その日の午後、宿屋に大きなテーブルセットがいくつも運ばれた。

「これでやっと仕事が再会できるよ」

おかみさんはそう言って、机の上を雑巾で綺麗に拭き始めた。

それを手伝おうとすると、

「あんたはいろいろあったんだから、今日ぐらいはゆっくりしていな」

といわれ、部屋に戻されてしまった。

することがなく、手持ち無沙汰になった私は部屋で昼寝をすることにした。

久しぶりにこんなにゆったりとした時間が取れたのだと思うと、何だか贅沢な気分になってくる。

ふああとあくびをかみ殺すと、私はベッドの上にぼすんとダイブした。

今この部屋には私一人だ。

気配は感知されているだろうけど、それを気にしなければ、全くの

自由ではある。

それに、異世界に来て、最初から言葉が通じていてよかったと心底思った。

意思が通じることの喜びを私はベッドの上でかみ締めた。

意外にも、本当に疲れていたようで、そのあと3時間ほどぐっすりと眠ってしまった。

起きると、ちょうどよくドアがノックされる。

「はい、どうぞ」

入ってきたのはティリウスだった。

「夕飯の支度ができました。きょうはおかみさんが奮発してくれたので豪勢ですよ」

「ありがとう、今行くわ」

階下へ行くと、そこには新築パーティーでもするかのような賑わいだった。

大量のマッシュポテト、白身魚のムニエル、人参とカリフラワーとパセリのサラダ、鳥の丸焼きなどなど。

「すごい！　こんなに沢山の料理どうしたの？」

その言葉におかみさんが答える。

「近くの料理屋に頼んだのさ。ただ、運送費はあんたのお頭の若い衆に運んでもらったので、少々負けてもらったがね」

「でもこんなに沢山の料理、お金はどこから出ているの？」

「金ならあんたのお頭に宿代としてたんまりもらってあるから、遠慮しなくてもいいんだよ。自分のもんだと思って食べとくれ」

そういわれれば、遠慮はすまい。

私はどの席につけばいいのだろうと辺りを見回していると、ルウが、「こっちだよ」と呼んでくれた。

それはちょうどお誕生日席の、向かって左側だった。

「え、私この席についていいの？」

「ここはアンナの席だから」

そういうとルウは自分の席へと戻っていった。

ティリウスもルウと近い席へと移動する。

ええー？ これってもしかして狼の集団だけに、ちゃんと序列とかあるのかしら。

そう思いながら隣を見ると、ちょうどギルバートが席につくところだった。

「それでは、おかみさんの商売繁盛を祝して」

音頭を取るのはガルデインだった。

「乾杯！」

心地よい喧騒の中、食事が始まった。

料理は、ハティが皿に取り分けて入れてくれた。

食べるときに最初は人目が気になったが、お腹が空いていたので、すぐに周りの視線というものは気にしなくなった。

「うん、美味しい」

夕食をたらふく食べて、一息ついたところで、私はあることに思い至った。

「そういえば、ギルバートたちって何の仕事をしているのかしら」

これだけのお金を稼ぐ仕事っていったい何？

まさか、お頭だけに盗賊の類なんじゃないでしょうね？

でも、申請やら契約手続きやらに厳しいこの国で盗賊なんてしていたら、絶対に捕まるはずだと思う。

「これは、今日の夜、絶対に聞いてみなくっちゃ」

一人意気込む私であった。

謁見 5

夕食後の食堂は穏やかな時間が流れていた。

皆思い思いにくつろいでいる。

木で作られたトランプのようなカードゲームに興じるもの、すぐろくのようなもので遊ぶもの、ゆったりと語らうもの、夜の街に繰り出すものなど様々だ。

私は食堂の片隅で羊皮紙に書かれた文字を読んでいるギルバートを見つけると、傍に寄って行った。

「ギルバート、今時間ある？」

ギルバートは私を見ると、手に持っていた羊皮紙を腰にしまった。

「ああ。どうしたアンナ」

「ちょっと聞きたいことがあって」

「なんだ？」

私はそこで一呼吸置いた。

「ギルバートたちってどんな仕事をしているの？」

ギルバートは一瞬何事かという顔をしたが、すぐにまた穏やかな表情に戻った。

「俺達がやっている主な仕事は、水道橋の管理、運営、警護、修繕だ」

「そうなんだ。ちなみにギルバートは『お頭』って呼ばれているけれど、その現場監督のようなものをしているの？」

「まあ、そうだな。あとはこの群れのリーダーでもあるからな」

ギルバートは現代日本で言うところの「水道局の人」というわけだ。それとやっぱりこの屈強な男性方は皆狼だったというわけだ。

盗賊の類でなくて良かったとほっとする反面、水道局の仕事ってそんなに儲かるのかしらと私はいぶかしんだ。

私の疑問を見て取ったギルバートは、安心させるようにいった。

「俺達は最近新しい水場を発見したので、その功績を称えて国から報奨金が出たところなんだ。だから今のところ、金には余裕があるんだ」

遠くから水道橋を使って水を引いているこの国では、新しい水場を発見すれば報奨金もらえるのだということに合点がいった。

「そうだったんだ。ごめんね、なんか変な質問しちゃって」

「いや、アンナが俺達のことを興味を持ってくれて嬉しいよ」

「じゃあ私、部屋に戻るね」

「ああ。あとで俺も部屋に行くがいいか」

「もちろん」

私は一旦部屋に戻ったあと、洗面用具を持って下にいき、顔を洗ったり歯磨きをしたりするなどの身支度をしてから、部屋に戻った。

部屋のベッドで寝転んでいると、ドアをノックする音がした。

返事をすると思えばギルバートが入ってきた。

「ギルバート」

「アンナはそのままでもいい」

そういうと、ギルバートは部屋にあった椅子に、足を組んで座った。

そのあと何枚かの羊皮紙を取り出し、そこにかかれた内容を黙読し始めた。

私はしばらくその姿を見つめたあと、おもむろにギルバートに話しかけた。

「お仕事大変なの？」

「仕事はそれほど苦痛ではないよ」

「今読んでいるものって重要な書類？ 声に出して読んじゃ駄目な

もの？」

「いや、そんなことはないが」

「じゃあギルバート、ここにきて」

そういうと私はベッドの片側をぽんぽんと叩いた。

「ギルバートは文字が読めるみたいだけど、そこに書かれているものって私にも読めるの？ 私も見たい」

ギルバートは片眉を上げたあと、すぐににこっと笑うとサンダルを脱いで私の隣に寝転んだ。

二人で寝転びながら同じ羊皮紙を見る。

「あー、やっぱりだめだわ。言葉はわかるけれど、字は読めない」

「俺も最初は読めなかったが、勉強と慣れで読むことができるようになった」

「そうなんだ。私も読めるようになりたい」

そういうと、私はギルバートを見つめた。

ギルバートも私を見つめ返す。

その瞳には確かな熱が宿っていた。

「アンナならできるさ」

「本当？」

「ああ」

そういいながら私たちはお互いにゆっくりと近づいていき、人間の姿では初めてのキスをした。

「野暮なことはしなさんなよ」

階下ではガルディンとティリウスが酒を飲み交わしていた。

「野暮とは？」

そう尋ねるティリウスはどこまでも飄々としている。

「あんた、無音の獣だろう。ハティから聞いたぜ」

「そのような通り名などいらなかったのだがな」

「微細な振動を発し、対象物と自分の気配を相殺することによって周囲の追っ手を撒く」

「よくご存知で。それではその対処法も知っているのだろうか」

「遠距離では目視の確認のみ、中・近距離では匂いで判別することができる」

「よく調べてある」

「さらに対象物の微細な振動を感じ取り、相手の動きが手に取るようにわかる」

「俺は覗きの趣味はないのだがね」

「でもあんたは、ちよいと気が向けば一人の人間のプライバシーなんて簡単に覗けちゃうってわけだな」

「まあ、そういうことになるな」

「お嬢さんを傷つけたら、俺が地の果てまでも追いかけていって必ず制裁を加えてやるから、楽しみにしてな」

そういうと、ガルディンは酒を一気に飲み干した。

「ガルディンといったか。お前のその忠義に溢れる心、覚えておこう。しかし、お前といい、ギルバートといい、よく会ったばかりの異界人に入れ込めるな」

「お前にはわかるまい。俺達の気持ちなぞ」

「お前たちが大切にする、あのアンナという女、それほど大事なら、なぜ俺が護衛になるのを黙認した？　俺が何物か知っていながら」

「お嬢さんには俺達ではない導き手が必要だ。それは俺達のエゴでもある」

「俺にはわからんが。まあ、おいおいわかってくることもあるのだ」

ろくな」

そういうとティリウスは手持ちの酒をあおり、夜の街へと出かけていったのであった。

謁見 6 ■ (前書き)

※R15相当の描写が含まれています。

謁見 6 ■

一度キスをしたら、止まらなくなった。

「んっ……」

最初は浅く、角度を変え、次第に深く。

息をするのももどかしい。

小鳥が啄むようだったそれは、噛み付くようなそれへと変わり、舌を喉の奥まで絡みつかせるようなそれへと変わった。

逃げようとした後頭部をがっしりと掴まれ、舌を抜かれるくらいに吸われた。

「はあっ、あっ」

ようやく開放され、荒い息をつく。

顔はほてり、目じりには涙が浮かんだ。

「アンナ……」

気がつくときルバートに組み敷かれていた。

ギルバートが上半身の服を脱いだ。

均整の取れた肉体、厚い胸板。

息をするたびに上下するそれを、陶然と見つめた。

綺麗だと思った。

乱れた銀の髪が顔の前にかかり、彫刻のような肉体は明かりの中に浮かび上がっている。

「あ、明かりを、消して」

「待てない」

「お願い」

「すまない」

そういうとギルバートは私の服をやや性急に脱がし始めた。

抵抗はしなかった。

熱に浮かされていたせいもあるが、この先を、もっと見てみたいと思ったからだ。

ギルバートは私の服を脱がすと、首筋に口付けた。

くすぐったくて、気持ちが悪くて、ぞくぞくして、思わず声が出る。

「ああ、はあっ」

「綺麗だよ、アンナ」

ギルバートはそのままあらわになった胸元へと顔をうずめ、左の胸へと頭をずらした。

そのままゆっくりと口に含み、舐めて、転がして、味わった。

思わず小さな嬌声が上がる。

ギルバートの左手は私の右胸へと伸ばされた。

そこを揉みしだくようにされて、くすぐったくて思わず体をねじる。

だが、ギルバートの腕の中から逃れることはかなわない。

ギルバートはしばらくそうしたあと、顔をお腹へと下ろしていった。

へその周りを丹念に舐めあげながら、ギルバートは私の体の具合を確かめるように、手をそこへと持っていた。

そこは先ほどの熱と刺激によって十分に潤っていた。

ギルバートは私の足を開かせると、壊れ物を扱うかのように優しく愛撫した。

体の奥底から、快楽があとからあとから湧き出してくる。

悲鳴を上げそうになり、手の甲で必死に口を押さえた。

指と舌を使って優しく愛撫された私は、久しぶりの絶頂を迎えた。

荒い息をついていると、ギルバートが自身を穿ってきた。

何かにしがみつきたくて思わずシーツを掴む。

その手を、ギルバートが上から握り締めた。

思わずすがりつくようにして手を握り返す。

そうしてそのまま一つになった私たちは、果てのない快樂へと身を投じたのだった。

朝起きると、ギルバートの腕の中にいた。

身じろぎしながら、ギルバートの胸板へ顔を擦り付ける。

すると、ギルバートが柔らかに抱きしめてきた。

大きく一つため息をついた私は、そのまどろみの時間をもう少しだけ味わうことにした。

しばらくそうしていると、頭上から声がかかった。

「おはよう、アンナ」

上を見ると、ギルバートが微笑みながらこちらを見つめていた。

「おはよう、ギルバート」

そういつて微笑む。

ギルバートが言った。

「アンナと、このままずっとこうしていたいな」

そういうとギルバートは私の頭に顔をうずめてきた。

私は昨日の感想を素直に述べた。

「昨日は楽しかったし、本当に気持ちよかった」

「俺もこんなに気持ちのいい時間を過ごしたのは初めてだ」

「以前はどうだったの？」

「昔無理やりさせられたことがあったが、全くいいとは思わなかった。ただ自分の欲望を吐き出す行為にしか感じられなかった。でも、昨日は違った」

「私も、人生の中で昨日が一番素敵な日だった」

「こういう素敵な日なら、これから沢山できると思うが」

「それは私も賛成だわ」

そういうと、ギルバートと私はくすくすと笑い出した。

本当はずっとギルバートとゆったりしていたかったが、そういうわけにもいかず、私はベッドから起き上がった。

服を身につけた私は、公衆浴場に行くことにした。

ティリウスの姿は見えなかったが、私は気にせずに見知った道を歩いていった。

彼のことだ。きっと私がどこにいても探し出すに違いない。

そのまま公衆浴場の入り口に歩いて行って、いつもの通り、管理人に指輪を見せる。

脱衣所で服を脱いでいると、後ろから声がかかった。

「あなたは、アンナ？」

見るとそこにはカエキリアが立っていた。

「カエキリア！」

「聞いたわ、あなたのこと。大変だったわね」

「ううん、そんなこと」

そういつて裸になった私の体を、カエキリアはまじまじと見つめた。

「あら、昨日は、楽しんだようね」

「ええ、まあ」

カエキリアも服を脱いだ。

すると、彼女にも同じような痕がいくつもついていた。

「カエキリア、あなたもね」

「ええ、まあ」

そういうと、私たちはしばらくお互いを見つめあったあと、ぷつと吹き出した。

浴場の洗い場で体を洗いながら、私はカエキリアに聞いてみた。

「カエキリアの相手ってどんな人なの？」

「優しい人よ。私のことをいつも気遣ってくれる。アンナは？」

「私もそう。昨日はとても素敵だった。この国の男性って皆そうなの？」

私がそう聞くと、カエキリアは首を振った。

「そんなことはないわ。私たちが偶々幸運にめぐり合っただけよ」
そういつて、カエキリアは一足先に浴槽へ浸かりにいったのであった。

謁見 7

公衆浴場で他愛のない話をした私とカエキリアは、連れ立って近くの喫茶店へと入った。

私は今日の予定を反芻する。

「そういえば私、今日の午後、皇帝陛下に謁見するのよ」

「まあ！ そうだったの。じゃあ、こんなところでお茶している場合じゃないわね」

「多分大丈夫、それにきつともう少ししたら私の護衛が迎えに来ると思うから」

果たして、予想通りティリウスがやってきた。

「じゃあ、カエキリア、お先に失礼するわね」

「ええ、楽しかったわ、アンナ」

カエキリアと別れた私は、傍について歩くティリウスに話しかけた。

「ティリウスは皇帝陛下の顔を見たことがある？」

「いや、遠くから見たことはありますが、間近でお会いしたことはないですよ」

「なんだか、皇帝陛下下って生き神みたいな扱いをされているわよね」

「それは、実際そうですから。皇帝陛下がおられるおかげで、この国が回っているといっても過言ではありません」

「そうなんだ、それじゃあ皇帝陛下下って普段どうやって生活しているのだろう」

「それは、これから一代貴族として謁見していく中で、見えてくることもあるかと思いますよ」

「そうね」

そこまで話すと、ティリウスは提案するように言った。

「そうだ、お嬢さん、ここから宿屋まであなたを抱えて跳んで行ってもいいですか？」

「いいけど。もしかして時間が間に合わないの？ 私は今日の午後としか聞いていなくて」

「そんなことはありませんが、今なら宿で遅い朝食を取っているころだと思います。それに間に合わせようと思ひまして」

「ありがとう。じゃあ、お願いするわ」

私を抱きかかえたティリウスは何度か跳躍して、宿屋に帰った。

宿では「水道局」の皆が遅い朝食を取っていた。

「あ、アンナお帰り」

「ルウ、ただいま」

ルウが、昨日と同じお誕生日席に私を案内してくれた。

「はい、アンナはここに座って。料理は俺が取り分けるから」

私を席に座らせたルウは、甲斐甲斐しく料理を取り分け始めた。

「ルウ、私のこと、そんなに丁寧に扱ってくれなくてもいいのに」

「これは俺がやりたくてやってるの。だからアンナは気にしないで」

「わかったわ」

お皿の上に綺麗に盛り付けされた朝食が並ぶ。

朝食は、昨日の残りのマッシュポテトとパセリ、それとウィンナーのようなもの、とろけるようなスクランブルエッグ、それにライ麦パンのようなものである。

「はい、どうぞ」

ルウに差し出されたそれをいただく。

「この卵料理、塩味が効いていて美味しい。火加減もちょうどいい。この腸詰もスパイスが効いているわ」

「その卵料理は今朝おかみさんが作ったんだ。腸詰は昨日の料理屋

が届けてくれたんだ」

「へえ、そうなんだ」

おかみさんの絶妙な腕前に感心する私であった。

ところでこの腸詰から推察するに、この国にはハーブなどの香辛料が豊富にあるようだ。

そのため、料理にも幅が出ている。

以前、自宅で鶏肉を焼くときに胡椒とともに乾燥したセージを刻んだものを入れてみたことがあるが、そのときもよい風味がついて美味しかったことを思い出す。

パンもあることから、小麦粉のようなものもあるのだろう。

それにもしこの国にバターがあつたら、ルウやギルバートたちのためにパウンドケーキを作つてあげようと私は考えた。

パウンドケーキは、私が覚えている数少ないお菓子のレシピの一つだ。

今度おかみさんに調理器具の使い方を教えてもらおうと、そこまで考えて、はっとあることに思い至る。

もしかしてこれらの知識は、もともとこの国で生み出されたものではなく、異界からの知識なのではないかと。

クッキーが売られていたり、料理屋のメニューでミルフィーユがあ

ったりしたのは、もしかして私のほかにも地球から来た異界人がいるためなのかもしれないと思った。

今もいるのかはわからないが、できることならば、その異界人に会ってみたいと私は思った。

考えながら食事をしていたので、いつもより時間がかかってしまった。

もともと食べるのはあまり早いほうではなかったのだが。

食べ終わり、身支度を済ませたところで、宿の前に一頭立ての馬車が止まるのを確認した。

「アンナ、行こう」

そういったのは獣の姿のギルバートだった。

「ギルバートは人型にはならないの？」

「契約者の獣は、獣の姿で謁見するというのが慣わしだ」

「そうだったの」

銀髪と金髪の男性を従えて謁見することを想像していた私はちよつと拍子抜けした。

「アンナが先に乗ってくれ」

馬車に乗り込むと、ギルバートがさつと飛び乗ってきた。

「あれ、ティリウスは？」

「ここにいる」

その声のするほうを見た私は驚いた。

金色の巨大な豹がゆっくりと近づいてきていたのだ。

「もしかしてティリウスなの？」

「この姿でお嬢さんの前に現れるのは初めてでしたね」

「ええ、とても綺麗だからびっくりして」

「お褒めに預かり光栄です」

そのやり取りを聞いていたギルバートは、自分の頭を私の膝の上に乗せると、少しだけふて腐れたように、上目遣いで凝視してきた。

「もしかしてアンナは誰にでも綺麗というのか？」

「そんなことないわ。それと、私の一番はギルバートだから」

そういつて頭を撫でると、ギルバートは気持ち良さそうに唸ったのであった。

謁見 8

今、一頭立ての馬車の中はある種不思議な状況となっている。

座席の一番右端には私、真ん中にはギルバート、そして下段左端にはティリウスがそれぞれ座っている。

但し、私以外は獣の姿をしているので、はたから見ると「動物好きの女性がお出かけのお供に可愛がっている猛獣を連れてきてしまったよ!」という図になっている。

ギルバートもティリウスも窮屈じゃないだろうかという思いもありつつ、小さいころテレビで「ムツゴロウ王国」を見て育った私としては、この状況に少しばかりの幸福感さえ感じていた。

私の膝では、ギルバートが顎を乗せてまどろんでおり、撫でてやると、ときおり気持ち良さそうに大きなあくびをする。

それを見たティリウスは「いいですね、仲睦まじくて」といいながらこれもまた大きなあくびをした。

あくびってなぜだか知らないけれどどうつるのよね。

ただ、銀色の狼と金色の豹を連れた、若い（といっても本当はそこまで若いわけでは無いのだけれど）女性は好奇の的のようで、道行

く人々がちらちらと馬車の中を覗き込んでいる。

「なんだか、見世物にでもなった気分だわ」

「俺は構わないが」

「はあ、いたたまれない気持ちになってくるのはなぜかしら」

「獣の俺と一緒にでは嫌か？」

「ううん、そんなことないわ。ギルバートと一緒にならどこへだって行けそうな気がするもの。ただ、道行く人達からじろじろ見られることにちよつと辟易したの」

私のその台詞に対して下段のティリウスが答えた。

「お嬢さんが望むなら、次に馬車に乗るときは二頭立ての大きいものを用意させますよ」

「でもティリウス、そこまでしてくれなくてもいいのよ。これは私の慣れの問題だから。それにしても、次なんてあるのかしら？ 謁見は何度もあるものなの？」

「いえ、謁見は一度だけです。ただ、俺の勘では、次また何らかの理由で呼び出されるような気がしてならないんですよね」

そのティリウスの答えに言葉を継ぐギルバート。

「ティリウスの勘がそういうのならば、それもありえるのかもしれない。」

そうやって馬車に揺られて30分ほど経ったころだろうか。

目の前に大きな円形の建物が見えてきた。

ギルバートが言う。

「あれが円形闘技場だ」

それは5階建ての巨大な建物だった。

石で作られたそれは周りの建物と比較してもあまりにも大きかった。

「皇帝は、民衆に娯楽を与えることによって初めて真の皇帝であると認められる。アンナが毎日通っている公衆浴場も今の皇帝が作られたものだ」

「へえ、そうだったの。じゃあ、皇帝陛下には感謝しなくちゃいけないわね。ちなみにこの円形闘技場は誰が作ったの？」

「3代前の皇帝であると聞いている」

闘技場に近づけば近づくほど、その圧倒的な大きさを肌で感じるることができる。

その闘技場を横目で見ながら、私はふと嫌な予感に体を震わせた。

「嫌だ、ギルバートがここで誰かと戦うところを想像しちゃった。お願いだから決して危ないことはしないでね」

「ああ、俺はアンナを悲しませるようなことはしないと誓おう」

そういうとギルバートは私のお腹に頭を擦りつけた。

「そういえば、私がここへ来て二日目なのに、ギルバート達は誰かから襲撃されたじゃない？ あの手撃の首謀者は誰だったの？」

ギルバートの喉元を撫でながら、以前から気になっていたことを聞いてみた。

それに対して淡々と答えるギルバート。

「俺達獣は、人間から重宝がられると同時に差別されてもいる。俺達が水道橋の仕事に携わってからというもの、そのことを妬んで襲撃してくるものも少なくはない。ただ、あの日の襲撃は獣を売買する商人連合が関わっていると踏んでいる。商人連合は、最初街のごろつきを雇っていたが、この前襲撃に来たのは荒事の心得があるものたちだった。相手が本気で俺達を潰そうとし始めたのかもしれない」

「酷いわ。ギルバート達は真面目に仕事をしているだけなのに」

あの襲撃のせいで、おかみさんは数日営業ができなくなったのだ。それにギルバートたちが無事だったから良かったものの、いつまた襲撃があるとも限らない。

ギルバートの契約者となった自分は、思っていたよりも不安定な環境で生活することを余儀なくされていたのだと気付いた。

だからこそ、ギルバートはティリウスを護衛につけることに反対し

なかったのかもしれないと思いつた。

さらにしばらく行くと、遠くに白亜の建物が現れてきた。

「あれが皇帝陛下の住まう場所だ」

街の中央に聳え立つ大きな建物は大理石できており、長い階段を登った先には、大きな門が待ち構えていた。

門の前に立っている警備の人に指輪を見せると、「心得ております」と返事をされた。

建物の内外にある沢山の柱や壁面には、様々な動物のレリーフが彫られていた。

動物の彫刻もあり、それはさながら生きているかのようなだった。

案内係のような人に先導され、私と2頭の獣はその広い建物内を歩き、今回の謁見の間である大広間へとたどり着いた。

大広間には大きな石でできた椅子が一つ置いてあった。

私たちはしばらくその広間の中央で皇帝陛下を待ったのである。

謁見 9

大広間で待つこと5分少々、広間の中に続々と貴族らしき人々が集まってきた。

皆、座る場所が決められているのか、整然たる行列を作り、部屋へと入ってくる。

普通、訪問者って最後の一つ手前ぐらいに登場するものじゃないのかと思ったが、ここでは訪問者が一番先に部屋に入り、それから貴族、最後に皇帝陛下という順番で入室するらしいということがわかった。

「ねえ、ティリウス、私謁見の作法なんて何にもわからないわよ。お辞儀とか、返事とかどうするの？」

私は傍に控えるティリウスに小声で聞いてみた。

ティリウスは安心させるように言った。

「お嬢さんはただ立ってそこにいればいいのです。それと、礼儀作法はほとんど要りません。貴族たちがお辞儀をしたら一緒にお辞儀をすればいいのです」

「そんな簡単でいいの？」

「口上はすべて契約者の獣であるギルバートが承ります。だからお嬢さんは安心してここにいればいいのです」

「そうなんだ、何か難しいことをしなければいけないのかと思ってちょっと心配しちゃった」

そんな会話を交わしているうちに、貴族たちは全員着席したようだ。

私はごくりと唾を飲み込んだ。

「皇帝陛下、ユリウス3世の御成」

さっきの案内係のような人が、よく通る声でそういうと、左右に座っていた貴族達が一斉に立ち上がった。

思わず緊張する私。

皇帝陛下ってどんな人なのだろう。

貴族達が頭を下げたので、私も一緒に頭を下げる。

ギルバートは私の左側にお座りして控えており、ティリウスは私の右斜め後ろに、これもまたお座りして控えている。

衣擦れの音と、サンダルが大理石の床を踏む音がして、誰かが部屋に入ってくるのが伺えた。

その音は、先ほどの石でできた椅子の前にたどり着くとそこで止まった。

誰かが椅子に座る気配がする。

ああ、ついに皇帝陛下のお顔を間近で見ることができるのだ。

一体どんな人なのだろう。

「一同、面を上げよ。着席」

案内係のような人が言う。

あ、あの役目って結構オイシイかも。

だって、自分の号令にエライ人たちが皆従うのだから。

そんなことを考えながら顔を上げた私は、皇帝陛下の顔を間近で見
て、「あ」という声にならない叫び声をあげた。

皇帝陛下の顔は、以前審問機関で出会った、あのいけ好かないルイ
ウスという名の名誉顧問の顔と瓜二つだったのだ。

「それではこれより謁見を執り行う」

案内係のような人が羊皮紙に書かれた口上を読み上げ始めた。

私は驚愕の面持ちで、自分の目の前にいる皇帝陛下を凝視した。

今さっき、皇帝陛下の名前はユリウス3世と紹介されていた。

私が出会った名誉顧問の名前はルイウスというものだった。

もしかして、皇帝は双子なのではないか。

それにしても、あまりにもよく似ている。

私がそうやってずっとぼかんとしていると、皇帝陛下ことユリウス3世は顔色を変えずにいった。

「この度は重畳である」

はっとして意識を現実に戻す。

ユリウス3世の言葉に、ギルバートが答える。

「皇帝陛下におかれましては、わが契約者であるアンナ・タイラを一代貴族に奉じ奉り、謹んで御礼申し上げます」

なんだこの口上は。時代劇的一幕か？

「私はギルバート・ファーガス・チェーン、後ろに控えておりますのは、わが契約者の護衛、ティリウスと申します。重ねてご配慮いただきたく存じ奉ります」

「よろしい」

そういうと、ユリウス3世は席を立ち上がった。

「皇帝陛下御退座」

……えっ、これで終わり？

だが、周りに控える貴族たちは皆立ち上がり一様に頭を下げている。

私も慌てて頭を下げた。

皇帝陛下ことユリウス3世が退出し、頭を上げたあと、貴族たちが整然と退出する姿を見ながら、私は狐につままれたような気持ちになった。

今の謁見にどんな意味があったのだろうか。

貴族たちが皆退出し、大広間には私と2頭の獣が残った。

案内係のような人が近くにきて話しかける。

「これで貴女様も正式に貴族の仲間入りをさせていただきます。それにしても貴女様の獣は賢いですね。皇帝陛下にご自分と貴女様だけではなく、傍に控えていた護衛の権利までも約束させました」

「そうなの」

え？ 今のギルバートの口上って、そんなに重要なものだったの？

心の中でいぶかしむ私に対し、案内係のような人は続けて言う。

「ええ、貴女様はこの皇帝陛下の住まう建物に自由に出入りできる身分となられたのですよ。それはとても名誉なことです。そしてその獣達もたった今、同様の権利を与えられたのでございます」

そうだったのか。

あの「重ねてご配慮いただきたく存じ奉ります」にはそんな意味があったのか。

それにしても、この国は手続きが複雑なんだか簡単なんだかいまいちよくわからない。

「いろいろ教えていただいてありがとうございます。今日はこれで退出させていただきたいのですが、どちらから出ればよろしいのかしら」

「私のご案内いたします」

案内係に連れられ、馬車が止まっているところまで連れて行ってもらった。

「それでは良い時をお過ごしください」

「ええ、ありがとう」

そうしてそのまま私達は馬車に乗ってその場をあとにしたのだった。

謁見 10

馬車に揺られながら、私は少しうとうとしていた。

昨日のギルバートとのことはもちろんあるのだが、先ほどの場の空気に無意識のうちにあてられていたようなのである。

頭は冴えているが、体は眠いといった状況なのだ。

それに、膝に乗っているギルバートのぬくもりが気持ちよくて、どうしてもまぶたが落ちてきてしまう。

ギルバートの頭を撫でながらうつらうつらしていると、下段に座っていたティリウスが声を掛けてきた。

「お嬢さん、眠いのであれば遠慮なく眠るといいですよ。まだ道のりはしばらくあるのですから」

「ええ、そうするわ。でもなんだか頭が冴えちゃって」

「では、帰りに喫茶店にでも寄りましょうか？」

「そうしようかしら」

そういうと私は目を閉じ、しばしの休息を取るよう努めた。

喫茶店につくと、そこにはウィリアム・シルフィードとキスキル・リラが座っていた。

「やっぱり来た。ウィリアムったらすごいね」

「我々はすっかりこの喫茶店の常連になってしまったな」

「こんにちは、ウィリアム、キスキル・リラちゃん」

キスキル・リラは銀の獣と巨大な豹を見ると目を輝かせた。

「わあ、今日は銀の獣も一緒なのね。護衛の豹も銀の獣もきれいねえ。食べちゃいたい」

「お前は余計なことを」

「いいんです、ウィリアム、気にしないで。綺麗って言うてくれてありがとう、キスキル・リラちゃん」

「あなたもおいしそう。ねえ、ちょっと味見させてもらえない？」

「止めないか！ キスキル・リラ」

ウィリアムの制止と、2頭の獣が低く唸り声を上げるのは同時だった。

……今日のキスキル・リラちゃんはなんだか変な発言をするわね。

私はそのちよっとおかしい空気を打開すべくこう言った。

「キスキル・リラちゃんはお腹が空いているのね。あ、そうだ、もしよかったら、今度お菓子を作って持ってきてあげるわ。一緒に食

べましょう」

「本当？　嬉しい！　じゃあ、私のことリラって呼んでもいいよ」

「リラちゃん、私のこともアンナでいいわよ」

「ありがとう、アンナったら優しいのね」

「いいえ、可愛い子にはサービスしたくなっちゃうもの」

そこで私は一旦話を中断し、いつものハーブティーを注文した。

「そういえば、ウィリアムは今日の謁見の場所にいた？」

「ええ、私も曲がりなりにも貴族ですからね」

「気付かなかったわ。ウィリアムがいるってわかっているのだった
ら少しだけ落ち着くことができたのに。そうだ、ウィリアムは『ル
イウス』という名の、審問機関の名誉顧問のことを知っている？」

「ルイウス、ですか。その名前は聞いたことはありません。まあ、
もともと審問機関とは距離を置いているので、内部情報はよくわか
らないのですが。それが何か？」

私はこの話をしようか一瞬迷ったが、意を決して話してみることに
した。

「あの、変なことを聞くようだけど、皇帝陛下って双子だったりす
る？」

「いや、そのようなことはありませんが。そのルイウスという人物と、皇帝陛下が双子だという話はどのような関係があるのですか？」

「あの、実は、ルイウスという人物と、皇帝陛下のお顔がそっくりだったんです。だから、皇帝陛下には双子の兄か弟がいらっしゃるんじゃないかと思ったの」

それを聞くと、ウィリアムは興味深げに目を開くと言った。

「現皇帝陛下には双子がいらっしゃるという話は聞いたことがないし、名誉顧問のルイウスという男にはあったことがない。これはもしかすると、ルイウスという男は皇帝陛下ご自身の可能性があることになる。珍しいな。皇帝陛下がそのようなことをなさるなんて」

ウィリアムはそこでハーブティーを一口飲んだ。

「皇帝陛下ってどのような人なの？」

「普段は寡黙なお方だ。ご自分の呪の力をよくわかってらっしゃる」

「呪の力？」

「ええ。皇帝陛下の言葉には強力な呪の力が宿っている。そのため、代々の皇帝陛下はご自身が話される言葉を何よりも重視されているのですよ」

「知らなかったわ。そんなことがあったなんて。だから、皇帝陛下って生き神みたいな扱いをされているのね」

「とはいっても、呪の力はいつでも有効であるというわけではない。

ある一定の儀式、しきたり、基準にのっとつてのみ、その効力を發揮するのだがね」

「そうだったの。それより今の話、私なんかに教えていい話だったの？」

「問題ありませんよ。この話は国民も知っている話ですからね」

ウィリアムはそう話すと、皇帝陛下がどうやって決められるのかという話をした。

「これも国民ならば誰もが知っている話なのだが、次期皇帝陛下を選ぶ儀式というものがある。……この国のモネという名の村には、モネの湖と呼ばれる聖なる湖と、切り立った崖の真下にあるユウキアの木立とよばれる聖なる木立がある。木立には聖なる樹が生えており、この樹の枝は誰も折ってはならないとされていたが、例外的に次期皇帝の座を望むものだけは折る事が許されている。森の神をたたえたこれらの聖所には、普段は何人たりとも立ち入ることが許されないのだが、皇帝の素養を持つものは立ち入ることができるという仕組みになっていた。皇帝になるには二つの条件を満たさねばならない。第一の条件はユウキアの枝を持つてくる事であり、第二の条件は現在の皇帝陛下を儀式にのっとり殺す事である」

これとほとんど同じ話を、私は大学のヨーロッパ文学の授業で聞いたことがあった。

「この話はまさか……『金枝篇』？」

商人連合 1

「『金枝篇』とは？」

ウィリアムが興味深げに聞く。

「なんでもないの。それより、話を聞く限りでは、現皇帝陛下も即位するときには前皇帝陛下を、その、殺したの？」

「ええ。皇帝即位の儀式は民衆・貴族が見守る中で行われます。それは国を挙げての一大行事となるのです」

現代日本の常識で考えると、この儀式は相当野蛮なものだ。

この国の国民は死という概念に抵抗がないのだろうか。

人の死をあたかもショーかなにかのように扱うなんて。

それとも、この国に渦巻く得体の知れない力が、その血と熱狂を欲しているのだろうか。

「そういえば森の神ってなんなの？ この国の信仰対象なの？」

「ああ。それは古くから信仰されているものです。その森には金色の獣がおり、神と、樹と、湖を守っているといわれています」

「そうなんだ。ありがとうウィリアム、こんなに沢山教えてくれて」

「いえ、構いませんよ。私はあなたと話がしたくてこの喫茶店に通

うようになつたのですから」

「そんな、気を遣ってくださらなくとも結構ですのに」

「私は本心を述べたまでですよ」

そういつて、ウィリアムは私の顔をじっと見つめた。

そのとき、私の足元で寝そべっていたギルバートがのそりと立ち上がり、私の膝に顎を乗せた。

「どうしたの？　ギルバート」

「アンナ、そろそろ帰ろう」

「そうね、そうするわ。ウィリアム、リラちゃん、今日も楽しかったわ」

そういつて懷からお金を取り出し、会計を済ませると、私は止めておいた馬車に乗り込んだ。

馬車が行ってしまうと、キスキル・リラは椅子の上に体を投げ出すようにして座った。

「はああ、つかれたあ」

「どうしたキスキル・リラ、今日はやけに彼女に突っかかるじゃないか」

「アンナって本当に優しいのね、反吐が出るくらい」

「虫の居所でも悪いのか？」

ウィリアムの質問に、キスキル・リラは憤慨した。

「そうだよっ！ あの女ばかりおいしそうな獣を手に入れちゃって、貴族の仲間入りなんてしちゃって、ああ本当に鬱陶しくって嫌になりそうだから食べたくなくなっちゃった」

「短気を起こすな」

「ウィリアムだって、最初はあの女のことを手に入れるって言っていたのに全然手に入れないじゃない」

「やり方を変えたのだ。彼女は普通の女とはどこか違う」

「ハン、『彼女』なんて、あの女には過ぎた呼び名だよっ」

「口を慎め、キスキル・リラ」

「ウィリアム、ちょっとは世慣れたかと思ったら、やっぱり本質は研究馬鹿の朴念仁だったんだね。あんな女のどこがいいのさ。今日は銀の獣が傍にいたのに、ウィリアムはそちらのほうには全然興味が無かったじゃない。もしかして、あの女を通して爺さんのことを思い出してたの？」

「銀の獣はいずれ手に入れようと思っている。その前に契約者を取り込めば、おのずと獣もついてくるだろう」

「つていうことは、ウィリアムはあの女と結婚でもするつもりなの？」

「そういう選択肢もあるな」

「嫌っ！」

そういうとキスキル・リラは手足をばたばたとさせた。

「絶対反対っ！ ウィリアムと二人がいいっ！」

しばらくそうしたあと、キスキル・リラは目に大粒の涙を浮かべて、ウィリアムを見つめた。

「ウィリアムはリラを捨てるの？」

「そんなことはない」

「ずっといっしょにいる？」

「ああ、ずっと一緒にいるとも」

「本当ね、約束ね」

そういうとキスキル・リラは、今度は花が綻んだように微笑んだのだった。

「契約者と獣は貴族になった」

「獣が貴族だと？ 笑わせる」

「我らの手の届かぬところへ行ってしまう前に、手筈をつけねば」

——ここはとある宿屋。

その一角にある広いぶちぬきの一部屋を使って、ある会合が行われていた。

「ラカンとウォルディの二人は早まったな」

「ああ。ウォルディはいい資金源だったのに。ラカンは使いどころを間違えたな」

「おかげで獣に手首から先を持っていかれちゃった」

「なあ皆、いくら4年前のことがあるからといって、これ以上あの獣達に関わるのはよしたほうがいいんじゃないか。そうじゃないと俺達の首がまとめて飛んじまうぜ」

「なにを弱気になっているのさ、あたしたちが被った損害のことを考えれば、獣に死んでもらうくらい、安いもんよ。獣を捕まえるのがどんなに大変なことかってぐらい、あんたにだってわかっていてしょうが」

「まあ、そう急くな。わしらはこれまで通り、あの宿屋を監視しつつ、やつらの隙をうかがえばよいではないか」

「なんなら俺が皇帝陛下におとりなししていただくよう頼んでみよ

うか」

「おめえじゃ無理だよ。ま、俺もだがな」

「そんなところで馬鹿笑いしてるんじゃない。おい、エールをもつとくれ」

「お前さんは飲みすぎだよ」

そんな喧騒の中、一人の男が手を叩いた。

周りで騒いでいた人々は皆一様に黙った。

手を叩いた男は、傍らに一人の男を従えていた。

「獣商人のラカンと闘技場の元締めであるウォルディは今獄中だ。ラカンの代わりは、このマルコシアスが務める」

そういつて紹介されたのは、左頬に、何かに引き裂かれたような痕のある男だった。

その場に集まっていた人達はいっせいにざわざわと騒ぎ出す。

「マルコシアスって……、おい、そいつは獣じゃねえか」

「しかも、そいつあかなりの危険種じゃないのかい」

さきほどこの場を統括した男が言った。

「そうだ、だが、獣には獣を。この方法でやつらを一網打尽にする

の
だ
」

商人連合 2

宿屋に帰った私は、調理器具の説明を受けようと思い、おかみさんを探した。

だが、みつけたおかみさんは宿屋の仕事を忙しそうにしている。

私はこのことに対して思うところがあった。

ラカンからもらった（パクったともいう）お金には限りがある。

この世界で生きていくためには何か仕事を見つけて稼がなくてはいけない。

手が空いている私。

忙しそうにしているおかみさん。

……これだ！

私はおかみさんの傍へ寄ると、手早く質問した。

「あの、おかみさん、今少々お時間ありますか？」

「なんだいアンナ、改まって」

おかみさんは前掛けで手を拭くと、その丸太のような手を腰に当てた。

私は単刀直入に切り出した。

「私をこの宿屋で雇ってはくれませんか？」

「急にどうしたね？」

「私はもうすぐ一文無しになります。そのことで、ギルバートやほかの皆に迷惑をかけたくないんです。それに、自分のものは自分が働いたお金で買えるようにしたいんです」

おかみさんはしばしの逡巡ののち、こう答えた。

「そうかい……わかったよ。ちょうど人手が足りなかったところだしね。しかしアンナ、アンナは貴族なんだし、働くならもっと別の場所があるんじゃないかねえ？」

「いいえ、私がいる場所はギルバートがいるところなんです。ここで働かせてもらえたら、ギルバートの帰りを待つことができます」

その台詞を聞くと、おかみさんはかすかに涙ぐんだようだった。

「アンナ、あんた健気だねえ。なんだか昔の自分を思い出すよ」

こうして私はおかみさんの宿屋で働くことになったのであった。

まずは宿屋の掃除から始めることにした。

布で頭と鼻から下を覆い、箒を持って、目に付くところを掃除していった。

その姿を見たティリウスは「よくやりますねえ」といいながら、私の手の届かないところなどを手助けしてくれた。

「ありがとうティリウス。でもティリウスまで働かなくてもいいのに」

「俺はお嬢さんの護衛ですから、お嬢さんの身の安全は守らせていただきますよ」

「そういわれるとなんだかお姫様にでもなったような気分だわ」

「本当の姫ならばこんなことはしませんよ。俺はお嬢さんのそういうところ、割と気に入っていますよ」

「そう？　ありがとう」

そんな会話をしながら、私とティリウスは掃除を進めていった。

おかげで、大まかにではあるが宿屋内部の掃き掃除をすることができた。

「今まで私一人だったもんだから、どうしても手が足りなくてねえ。二人増えるとやっぱり違うもんだねえ」

おかみさんに褒められて、まんざら悪い気はしない私とティリウスだった。

それから私はおかみさんについて行って厨房へと入らせてもらった。

厨房はタイルを貼った台所、石でできたかまど、そして大量の木皿で埋め尽くされていた。

「うちは、料理は近くの料理屋から出前で取ることが多いのさ。一人だと何分人手が足りなくなってるね」

「そうですね。でもそんなデリバリーみたいな仕組みがあるって便利ですね」

「ほう、デリバリーってのは向こうの言葉だね。こういう出前のことを言うんだね」

「あ、そうです。正式な意味は『1、貨物・郵便物の配達・配送。2、荷などの引き渡し。受け渡し』って意味らしいですけど、私がいた国では『食事の配達・出前』のことを指していました」

「へえ、アンナは物知りなんだねえ」

「いや、それほどでも」

以前おかみさんとの会話の中で「トイレ」という横文字が通じた。しかしどうやら、概念がない、はつきりしない言葉は、最初は通じないようだということをこの会話で学んだ私であった。

「今日は夕飯を作るのですか？」

「いや、今日も出前を取る予定だよ。どうしたアンナ、なにか作りたいものでもあったのかい？」

「ええ、もしできるのであれば、お菓子を作ってみようかと思った

のですけれど、材料とか、調理器具とかがわからなくて」

「そうかい、じゃあ、アンナでも使えるものがあるのかどうか一緒に探してみようかね」

「ありがとうございます」

そうして、あれでもないこれでもないと探して見つかったのが次の品である。

・ 木べら

・ 木製のボウル

・ 鉄のような金属で出来た四角い型

・ 秤

・ 小麦粉のようなもの

・ 卵

・ 砂糖

・ バターのようなもの

「よし！ これでパウンドケーキが作れるわ！」

俄然張り切りだす私であった。

まず、バターのようなものと砂糖、小麦粉のようなものをそれぞれ秤に乗せて計る。

秤の数字が読めないので、目分量と勘で決めた数字を元にそれぞれの重さをそろえる。

次にバターのようなものを熱で溶かす。

かまどの使い方はおかみさんに聞いていたのだが、いちいち火を消したりするのが面倒くさいので、もうずっと熱していようということになった。

木製のボウルに入れたバターのようなものを熱で溶かし、その中に砂糖を入れる。

木べらで手早くかき混ぜると、中の物体が黄色から象牙色に変わった。

少し冷ましている間に、四角い型の内側に少量のバターを塗っておく。

先ほど混ぜたものの中に卵を割り入れ、手早くかき混ぜる。

さらに小麦粉のようなものを入れる。

木べらでざっくりと混ぜ、ダマを潰したあと、型に流し込む。

そのあと、かまどに入れ、完成を待ったのである。

商人連合 3

火の番をしていると、外から、一日の仕事を終えた「水道局」の仲間たちが帰ってきた。

「わあ、なんだかい匂いがする。これってなに？」

「ルウ、おかえり。今焼き菓子を作っている最中なの」

「ええっ！ アンナ、お菓子を作れるの？」

「かまどは初めて使うから、出来上がりがうまくいくかはわからないのだけれど」

「でも、すっごくいい匂いだよ」

「ルウ、料理屋からの夕食がもうすぐ届くから、手を洗って待っているといいわよ」

「アンナ、本当のお姉ちゃんみたい」

「それはどうも」

果たして、料理はすぐに運ばれてきた。

今日の夕飯は、ハムやアボカドのようなものが入ったポテトサラダ、あとはワインとピザのようなものである。

私は木皿を机に並べるのを手伝った。

ティリウスも私と同じように木皿を机に並べる。

その姿を見た私は少し申し訳無さそうにティリウスに言った。

「さっきも言ったけれど、ティリウスにも手伝ってもらっちゃって悪いわね」

それを聞いたティリウスは少しばかり目を丸くしたあとこう答えた。

「お嬢さんがそんなに恐縮することはないんです。俺もここでは居候の身ですから。いい暇つぶしになっています。それに、お嬢さんが働いているのに、俺だけふんぞり返っているわけにはいきませんよ」

「ティリウスはきっといい旦那さんになるわよ」

「それは買い被り過ぎですよ」

そんな会話をしながら、私とティリウスは手早く作業を進めた。

そのあと全員が席につき、昨日と同じように食事が始まった。

食事の最中、私はかまどのパウンドケーキが気になっていた。

ちゃんと焼けているかしら。火加減は強くなかったかしら。

気もそぞろで食事を終わらせた私は、かまどの前に陣取ることにした。

しゃがんで火の番をしながら見つめていると、ギルバートがやってきた。

「アンナは何を熱心にかまどを見つめているんだ？」

「今、焼き菓子の焼き加減を調節しようと思っていたところなの。でも、よくわからなくて」

「それなら俺が見てやろうか」

「えっ、どうやって焼き加減を調べるの？」

「匂いで焦げているか焦げていないか判断する」

「す、すごいね」

ギルバートは私の横にしゃがみこみ、ゆっくりと空気を吸い込んだ。

「香ばしい匂いがする。美味しそうだ。でも中心にはまだ火が通っていないようだ。水っぽい匂いがする」

「そんなことまでわかるの」

「ああ。俺達狼は鼻が利くからな」

「あとどれぐらいで火が通りそうかわかる？」

「夕食の後片づけが終わるころにもう一度見てみるといいかもしれない」

「へえー、便利ねえ」

そんな話をしたあと、私は食堂へ戻り、おかみさんとティリウスと一緒に夕食の後片付けをした。

片づけが終わったあと、私はギルバートに言われたとおり、かまどの様子を見てみることにした。

私では焼き加減がわからなかったのだが、さっきのギルバートの言葉を信じるとすると、ちょうど頃合になっていると思ったので、私はいよいよかまどからパウンドケーキを取り出すことにした。

かまどを開けると、厨房一杯に香ばしい匂いが充満した。

布巾を何枚も重ねたものをなべつかみ代わりにして、ゆっくりと取り出す。

そのあと、これもまたあらかじめ敷いていた布巾の上に乗せる。

「わあ、本当にギルバートの言ったとおりだったわ」

狐色に焼きあがったパウンドケーキに達成感を覚える私であった。

そのあと、粗熱を取って食べられるようになったそれを、スティック状に切って宿屋の全員にいきわたるようにした。

私が作った試作品の味は上々で、「また作ってください」と何度も言われた。

調子に乗った私は、パウンドケーキを二つ焼くことにした。

一個半は宿屋の皆に、もう半分はウィリアムとキスキル・リラにある。

気が付くと、夜も随分更けていた。

私は二つのパウンドケーキを焼き終えると、両肩をぐるぐる動かし
たり伸びをしたりしながら体をほぐした。

パウンドケーキに布巾を掛け、寝る前の身支度をして、部屋に戻ろ
うと思ったとき、どこからともなく人の気配がした。

「ティリウス？　ギルバート？」

名前を呼ぶが返事がない。

「誰かいるの？」

少しだけ声を潜めて聞いてみる。

だがその声に返ってくるものはない。

「……気のせいね」

そうひとりごちると、私は部屋へと戻った。

部屋に戻る私の後姿を、どこからか一對の瞳が見つめていたのだが、

私はそれに気づくことはなかった。

部屋に戻りサンダルを脱いで、ベッドに横たわる。

今日私の隣にギルバートはいない。

そのことを少しばかり寂しく感じる自分がいることに驚いた。

獣の姿でもいいから、同じ部屋にいてほしいと思う私は、元いた世界の人々を切り捨てた薄情者なのだろうか。

だが、私はもう元の世界に戻ることは出来ないのだ。

それならば、この世界に根を張ってもよいのではないか。

今の私には幸いにもギルバートやほかの皆がいる。

話し相手だって、ウィリアムやカエキリアがいる。

地球や、日本にいるときでさえ恵まれない子供達というのはいた。

そういう人達の境遇と比べてみたら、今の私はとても恵まれた環境にいるのだと感じる。

だが、やはり寂しさは募る。

こんなときに今朝のギルバートの優しい腕の中を思い出し、一人悲しみに耐える私であった。

商人連合 4

次の日、私はティリウスを伴って喫茶店に行った。

「今日はウィリアムとリラちゃんに昨日作ったパウンドケーキをあげようと思うの」

「お嬢さんが作った焼き菓子は、それはもう大好評でしたから、彼らもきつと喜ぶでしょう」

「そうであれば嬉しいわ」

昨日の気配のことは、聞くべきかどうか迷ったが、何事も「報告・連絡・相談」だと思った私は一応聞いておくことにした。

「ねえ、ティリウス、昨日の夜のことなんだけどね、なにか外で妙な気配を感じた気がしたの」

「それはいつごろですか？」

「もう夜も更けたころよ。皆が寝静まって、私が作業を終えて寝ようとしたときに」

それを聞くと、ティリウスは少し険しい表情をした。

「それは、もしかしたらギルバート達を狙う団体の気配かもしれない。お嬢さん、報告してくれてありがとうございます。俺もより周囲に警戒して護衛を続けます」

その台詞を聞いた私は慌てて手を振った。

「でもなんだか悪いわね、もしかしたら私の気のせいかもしれないのに」

「お嬢さんは契約者となったことで普通の人間よりも感覚が鋭敏になっているんです。気のせいだとは言いきれませんよ」

私はちよつとほつとしたように言った。

「ええ、わかったわ、ありがとうティリウス」

私とティリウスは喫茶店に着くと、ウィリアムとキスキル・リラを待ちながらお茶を飲んだ。

「私、すっかりこのお茶のファンになっちゃったわ。美味しい飲み物を紹介してくれてありがとう」

「お嬢さんは異界のものをどんどん受け入れていつていますね。頼もしいですよ」

ティリウスの言葉に、私は明るく答えた。

「そうするようと努めているだけよ。昨日なんかちよつとホームシックにかかっちゃって、梅干食いたいなあとか、白米食いたいなあとか、お味噌汁飲みたいなあとかそんなことばかり考えちゃった」

「全部食べ物じゃないですか。その食べ物はそんなに美味しいんで

すか？」

「あはは、私って食い意地張ってるから。今のは、私がいた国のソウルフードって感じね。長期海外旅行のお供には必須よ」

半分嘘で半分本当だった。

昨日のような感情は、まだティリウスにもギルバート達にも話せそうにない。

むしろ、心配を掛けさせないために話さないほうがいいのかもしれないとすら思う。

私の感情を知ってか知らずか、ティリウスはそのあと黙ってお茶を飲んだ。

程なくして、ウィリアムとキスキル・リラが喫茶店にやってきた。

「はい、リラちゃん、これが昨日言っていたお菓子よ」

「うわあ、アンナありがとう！」

キスキル・リラはそのお菓子を見て歓声をあげた。

「わー！ いい匂いがする」

「食べやすいように一切れずつ切っておいたから、良かったら感想を聞かせてくれると嬉しいな」

「わーい！　じゃあいただきますーす」

そういうと、キスキル・リラはパウンドケーキを一切れ掴み、口の中に入れた。

「こ、これは……」

「どう？」

キスキル・リラは両手をふるふると握り締めると、真剣な顔をしていった。

「……リラが認める。アンナ、ウィリアムのお嫁さんになって」

「ええ?!」

「アンナがウィリアムのお嫁さんになったら毎日このお菓子を食べられるんですよ？」

「そ、そんなに気に入ってくれたのね、嬉しいわ」

「昨日はアンナのことを食べようなんて言ってごめんなさい。アンナのことを食べちゃったら、もうこのお菓子食べられなくなっちゃうもんね」

「あ、はは、それはそうね」

楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

私とティリウスはウィリアム達と別れると、家路に着いた。

「二人ともお菓子を気に入ってくれてよかったわ」

「お嬢さんにはこんな特技があったんですね」

「特技って言えるほどのものではないわよ」

「でも、人を喜ばすことが出来る、立派な特技だと俺は思いますよ」

「ティリウスに励まされちゃった」

そう言ったとき、私はまた、昨日の妙な気配を感じた。

何気ないふりを装って、ティリウスに小声で聞く。

「ねえ、ティリウス、昨日感じた気配、今日もするんだけど」

「本当ですか。ちょっと探ってみます」

そういうとティリウスは何事もなかったように歩き始めた。

私も歩きながらその気配を追う。

それはどうやらつかず離れずついてきているようだ。

なぜこんな気配を感じたのかというと、その気配の対象が自分に絞られていると感じたからである。

しかも、私を害そうとしている気配では決してない。

そのため、ティリウスは気が付かなかったのかもしれないと思った私である。

「ありますね、妙な気配。ものすごく僅かだが、お嬢さんに対して興味を持っている気配だ」

「やっぱり気のせいじゃなかったのね。でもなぜ私なんかのことを見ているのかしら」

「お嬢さんは気付いていないのかもしれませんが、お嬢さんの容姿はこの国では目立つんです。それに、相手はもしかしたら、銀の獣の契約者を一目見ようと思ってやってきた奴かもしれませんよ。一応、あぶりだしてみましよう」

自分の容姿が目立つなんて終ぞ考えたことはなかった。

だが、はっきりした顔立ちが多いこの国では、私の顔立ちは「逆に」目立つのだらうなと変に納得した私であった。

商人連合 5

私とティリウスは宿には戻らず、そのまま道を歩き続けた。

あの気配は相変わらずついてきている。

「じゃ、お嬢さん、ちょっとだけ囿になってください」

そういうとティリウスは「俺、宿に戻って荷物を取りにいつてきます」というと、私から離れた。

道を一人で歩き始めた私は、何気ないふりを装って、気配を観察することにした。

どうやら気配は私のあとをついてきているようだ。

いったい何者だろうと思った矢先、背後から「ひゃああ」という情けない声が聞こえた。

振り向くと、道のと真ん中で木の棒切れを持ったへっぴり腰の男と、巨大な金色の豹が対峙しているところだった。

「うわああ、なんだ、寄るなっ」

ぐるると唸っているのは獣の姿になったティリウスだ。

「あなた、誰なの？」

私は恐怖に顔を引きつらせているその男に尋ねた。

「え、え？ 僕ですか？ 僕は治安部に所属しているフィリップと
いいま……うわああ」

「諜報部員の真似事でもして、何か見つかったか？」

「アンナさん、この獣、どけてくださいっ！」

「……ティリウス、この人、危ない人じゃ無さそうだから、そのく
らいにしてあげて」

そういつて、ティリウスの傍に寄った私は、目の前の男をまじまじ
と見つめた。

年の頃は20代前半、猫っ毛の赤みがかった金髪はくしゃくしゃと
跳ねており、瞳は青空のような水色だった。

だが、一見整っているように見える容姿は、目の前のティリウスを
前にして情けなく歪められていた。

「それで、治安部のフィリップさんが私に何の用なの？ 私の名前
を知っているところからすると、何か特別な用事でもあるのかしら」

私のその質問に、待ってましたといわんばかりに食いつくフィリッ
ポ。

「あの、僕は、あなたを守りに来たんです」

そういうとフィリップは、ティリウスに怯えながらも事の全容を話
した。

「この前、あなたの獣のギルバートが治安部に呼ばれ、市街地での戦闘行為に対して厳重注意を受けました。そのときに、僕は商人連合と獣との確執を知ったのです。それで、契約者であるあなたの身が危ういと思った僕は、あなたをかげから守り、いざって時には飛び出せるように準備をしていたのです」

そこまで話したフィリップの瞳は、きらきらと輝いて、真っ直ぐに私を見つめている。

……うん、こいつあちよつとしためでたい人なんだわ。

そう納得した私はフィリップに話しかけた。

「つまり正義感溢れるフィリップさんは、ご丁寧に私の動向を監視して、獣達と商人連合の争いに私が巻き込まれないようにしてくださろうと奮闘していたのね」

「察しが良くて助かります」

「でも、生憎だけど、護衛ならば間に合っているし、私なんかに関わらなくとも、街の平和を守るためならばいくらでもお仕事があるんじゃないくて？ それとも、商人連合との確執というのは大手柄に繋がるものなのかしら？」

それを聞くと、フィリップは少しだけ憤慨したようだった。

「アンナさん、それは誤解です。確かに、最初は自分の手柄とか、この街の治安維持だとかっていう大義名分がありました。でも今は違います。あなたのことを本当に心配するようになったのです」

……そうか、こいつぁ私のストーカーか！

こんな道の往来で、自分がストーカーだと告白するようなやつに、私は守られたくなんかない。

なんだか変なのに好かれてしまった。

「私をかげながら守ってくださったことには感謝します。でも、私には今ご覧になっているような頼もしい護衛がいますし、何の不由もあります。だから、安心してお引取りください」

そういうと、私はとびっきりの社交辞令スマイルを浮かべた。

フィリップは私のその顔をしばらく見つめたあと、肩をがっくり落とし、意気消沈した面持ちで元来た道を帰り始めた。

しかし、途中で振り向くと、私に向かって懇願するようにいった。

「あの、今度、アンナさんの手隙なときに伺いにいってもよろしいでしょうか？　あと、昨日作っていた焼き菓子、とっても美味しそうですね」

「え、ええ、かげからではなくて、ちゃんと正面からいらしてくださいよ、お話の相手ぐらいいは出来るかと思えますよ」

それを聞いたフィリップはパッと顔を輝かせた。

「本当ですかアンナさん！　僕、毎日通います！」

「あの、毎日は私がちょっと厳しいので、週一ぐらいにしていただけですか？」

「ええ、わかりました！」

そういうとフィリップは意気揚々と元来た道に戻っていったのだった。

「お嬢さんは変なのによく好かれますね」

「う、それはあんまり嬉しくないわ」

宿に向かう帰り道、私は獣になったティリウスの服を抱きかかえて戻った。

「ティリウスが獣になってくれてよかったわ。じゃないと、あのフィリップって人、納得して帰ってくれなさそうな雰囲気醸し出していたもの」

「ああいう手合いはしぶといですからね」

「でも、悪い人じゃなさそうだっていうことは伝わってきたわ。お金持ちのお坊ちゃんみたいな感じだったからかしら」

もし本当にお金持ちのお坊ちゃんだったら、今度食事でもおごってもらおうかなと考えた、ちょっとしたたかな私であった。

商人連合 6

「皆、大丈夫?! どうしてこんなことに……」

――少し前、宿に帰ってきた「水道局」の獣達は皆一様に怪我を負っていた。

昨日と同じように私とティリウスは宿屋での雑事を済ませ、皆が帰ってくるのを待っていた。

皆が帰ってくる頃になって、ティリウスが急に眉根を寄せた。

「おかしい、扉のほうから血の臭いがする」

木皿をテーブルの上に用意しながら扉を見た私は、その一種異様な光景にぞっとした。

扉から次々として入ってくるのは、負傷した「水道局」の皆だったのだ。

「皆、大丈夫?!」

慌てて駆け寄る私に、皆は大丈夫です、へっちゃらですと気丈に振舞ってはいたが、その笑みはどこかぎこちなかった。

幸い重傷のものはおらず、簡単な手当でだけで済んだのだが、皆の表情は一樣に冴えないものだった。

「いきなりやってきたんだ」

夕食を食べたあと、仲間の一人がポツリポツリと話し始める。

「今日、俺達はいつものように水道橋の管理をしていました。すると、遠くからマルコシアスの一団がやってきたんです」

「マルコシアス？」

「俺達と同じ獣です。左頬に深い引っかき傷の痕があるんですが、誠実なやつです」

その情景をまとめるところだ。

「水道局」の皆は、いつものように仕事を行っていた。

すると、遠くから人狼の一団がやってくるのが見えた。

仲間だと思い、彼らは仕事を続けていた。

ところが、無抵抗な彼らを、その一団は問答無用で襲い始めたのだ。

乱戦となったが、地理をよく把握している「水道局」の皆のほうに僅かに利があり、辛うじて重傷者を出すことを免れたのだ。

「なんだあれは」

「きっと商人連合の奴らの差し金だろう」

「獣同士ならば、なにをさせてもいいのかよ！」

そういったのは、ブルーノという名の青年だった。

「俺達はただ真面目に仕事をしていただけなんだ。それを、白昼堂々襲撃しやがって」

「俺達は確かに人間とは違う。この国での永住権を取得したからといって、お頭が貴族と同等の権利を持ったからといって、所詮獣は獣でしかないのか。偏見は変わらないのか」

これはカルロという名の壮年の言葉だ。

「獣同士に戦わせておけば、人間様には何の被害もねえってことか」

比較的軽傷のガルデインがいう。

「酷いよ、俺なんてもう少しで橋から落ちるところだったんだ」

ルウが体を震わせた。ルウは奇跡的に無傷で帰ってこられたようだ。

「悲しいことですが、これからは仲間といえども迂闊に信用しないほうがいいのかもしれないね」

ハティが辛そうにいう。

縄張り争いや、食べ物の取り合いならばまだしも、これは完全に人間のエゴによる無益な殺生でしかない。

皆自分と同じ種族からの無体な攻撃に、精神的に参っているようだ。

ギルバートはかすり傷程度だったが、その表情は険しかった。

「皆、これからも気を引き締めて仕事に取り掛かってほしい」

「でも、奴らがこれぐらいで手を引くはずがねえ。次は獣の姿になってやってくるんじゃないかねえか？」

「今日はお互い人型だったからまだ加減がきいたが、獣の姿になったら、今度こそ死傷者が出るんじゃないかと思うぜ」

ガルディンほか、数名が今後の事態を懸念する。

「仲間同士での無益な殺し合いなんてむごすぎるわ。どうしたら止められるのかしら」

私はこの予期せぬ被害にどう立ち向かえばいいのか考えあぐねていた。

「マルコシアスといったな。それならば、ひとつ手があるぞ」

この事態を傍で聞いていたティリウスが口を開いた。

「マルコシアスが以前仕えていた主人にとりなしを求めてみてはどうだろうか」

「そうか、グレモリー様か！」

ブルーノが叫ぶ。

「グレモリー様ならば、この酷い状況を何とかしてくださるかもしれない」

「だが、グレモリー様は温和で争いを好まれないという。また使者に遣わされるものは機知に富んでいなくてはいけない」

その話を聞いていたギルバートは、暫し逡巡したあと、私に向かってこういった。

「アンナ、こんなことをいうのは心苦しいのだが……アンナにひとつやってもらいたいことがある」

私はギルバートを見ると、ひとつ大きく頷いた。

「ええ、心得ているわ。そのグレモリー様に会って、こんなばかりの争いを止めさせるように頼みに行けばいいんでしょう」

「ああ。同じ人間同士のほうが、話が通じると思ったのでな」

「話し合いで解決できるのであれば、いくらだって協力するわよ」

自分は決して機知に富んでいるわけではないが、自分が動くことによって周りの状況を変えられるのであれば、惜しげもなく協力しようと思った私であった。

「なぜその場でギルバートを殺してこなかった」

そういったのは、昨日会合で皆をまとめていた男である。

傍で控えているのは、マルコシアスと呼ばれた、左頬に傷跡のある男。

「闘技場送りになるところだったお前を助けてやったのは誰だ？
この私だ」

マルコシアスは微動だにしない。

「私に恩があるお前は、私の言葉に従わなくてはならない。次は必ず殺して来い。そして、銀の獣の体を私の元へと持ってくるのだ」

商人連合 7

次の日の朝、自分の部屋で身支度をしていると、おかみさんが部屋に入ってきた。

おかみさんは小脇に籐製の籠を5〜6個抱えている。

おかみさんは籠のひとつを私に渡しながらこういった。

「アンナ、洗濯物はあるかね？ 今、洗濯屋が来ていてね、洗い物があるんだったら、この籠に入れておくれな」

「洗濯屋……はい、洗い物は結構溜まっています」

私は、この世界でまだ一度も洗濯をしたことがなかった。

湿気が少ない気候ということもあるのか、着ているものに不快感を感じることはあまりなかった。

だが、それでも汚れはするのだ。

手持ちの服を交互に着まわしていたのだが、そろそろどうにかしたいなあと思っていたところだったのだ。

しかしまさか料理屋に続き、洗濯屋があるとは思っても見なかった私である。

「どうしよう、私の服は2着しかないし、でも、ここで洗濯に出しておいたほうがいいわよね」

逡巡した私は、この世界の服の一切合財を籠に入れ、元いた世界の服を着ることにした。

しかし、この世界に来てまだ数日しか経っていないのだが、私の心の中で元いた世界の服を着るということに幾許かの違和感があることに気付いたのである。

「何だか恥ずかしいわね。この服を着て外に出るかと思うと、落着かない気分になっちゃうわ」

これはこの世界に自分の心が馴染んできたというある種の「進歩」の証なのだと思っておくことにした。

コーディネートの問題から、今日はサンダルではなくパンプスを履いた。

下着も着けた。

ジャケットに袖を通し、自分の姿を確認する。

「ああ、最初にガルディンに会ったとき、『その格好浮いてるぜ』と言われたのが今ではよくわかるようになったわ」

だが、せっかくの洗濯の機会なのだ。この世界の服を洗ってもらってすっきりするほうがいいと腹を括った私は、元いた世界の格好で階下に下りることにした。

そんな私の姿を見たティリウスが、訝しげに聞いてきた。

「お嬢さん、その格好はどうしたんですか？　まさか、異界へ帰るなんて言い出したりしませんよね？」

「そんなことはないわよ。手持ちの服を洗ってもらおうと思ったのだけど、代わりに着る服がなかったから、しかたなくこれを着たの。でもやっぱりこの世界じゃ、この格好は浮いているわよね」

スカートから覗く足が何だかスースーして、落ち着かない気分になる。

「じゃあ、こうしましょう。今日はその格好でいいとして、おかみさんにお給料を前借させてもらって、市場に行きましょう。そこで新しい服を買うんです」

「この格好で外を出歩くのは結構勇気がいるわね。でも、その提案が一番いいと思うから、そうすることにするわ」

そのあとおかみさんからお給料を前借して市場に行った私達は、それぞれ自分の服を買ったのである。

市場から帰ってきた私は、まだ日が高いうちにやっつけてしまおうと思っていたことが一つあった。

下着作りである。

自分の部屋に入ると、鍵を閉め、手早く服を着替えた。

「うん、こちらのほうがなんだか落ち着くわ」

脱いだ下着を手に取り、以前買っておいたコットン製の布の上に置き、型を取る。

その型通りに鋏を入れ、三通りの型を切り取った。

久しぶりの針仕事である。

元いた世界ではボタン付けすら面倒くさくてやるのを渋っていた私が、月のものどきに穿く下着作りとは。

市場ではゴムを売っている店はなかったので、細めに切った布をウエストの部分に通しておいた。

これならばずり落ちる心配はない。

環境が変われば、心構えも変わるものなのだなとしみじみ実感したのであった。

下着を3着作り終えると、今度は布ナプキン作りに取り掛かった。

一番簡単な四角い布ナプキンを作ることにした。

まず正方形と長方形に切った布（長方形の幅が短い部分と正方形の端の部分がぴったり重なるようにする）を用意する。

次に正方形の真ん中に長方形を乗せ、両方が重なっている部分を縫っていく。

これで完成である。

この布ナプキンが4つ作った。

初めて作ったので、吸水性や使い勝手がいまいよくわからなかったため、多いにこしたことはないと思ったのである。

出来上がったものは「一ヶ月お泊まりセット」の中に入れておいた。

これで、この世界で暮らすための大抵のものは揃ったことになる。

「女性ってなにかと大変だわ。でも、この世界で生きていくためには必要なものよね」

そうひとりごちると、私はおかみさんとティリウスを手伝いに食堂へと下りたのであった。

次の日、グレモリー様への面会の承諾が取れたという知らせが入った。

日時は今日の昼過ぎとの事だ。

「新しい服を買っておいてよかったわ。あー、でも緊張する。ティリウス、グレモリー様ってどんな方なのか知っている？」

「グレモリー様は広大な敷地を擁する大貴族です。貴族の夫が亡くなって、その莫大な財産を引き受けた未亡人なのです」

「えっ、グレモリー様って女性だったの！ 名前から、てっきり厳ついおじさんを想像していたわ」

「マルコシアスは、彼女によく仕えていたと聞いています。小さいころに拾われ、育ててもらった恩義があるのだとか」

「そうなんだ。じゃあ、それならどうしてグレモリー様の元を去ったのかしら」

「その話は、グレモリー様から直接伺うといいでしょう」

こうして、私とティリウスはグレモリー様の屋敷へと向かうことになったのだった。

商人連合 8

グレモリー様の屋敷は大邸宅だった。

未亡人が暮らすにはかなり広すぎるその邸宅の前についた私は、大きく深呼吸した。

「ふー、私が動くことでこの事態を打開することが出来るのならば、やってやろうじゃない」

「お嬢さん、少し肩の力を抜いたほうがいいですよ。でないと、お嬢さんのよいところが損なわれてしまいます」

「ありがとうティリウス、いい助言だわ」

「だからその人の首を取りに行くような形相をやめてください」

私とティリウスは、迎えに来た召使のあとについて屋敷の中へと入った。

屋敷の中にはいろいろな頻度品で埋め尽くされていた。

狼の置物、狼の彫刻、狼の器、狼の織物……

「なにこれ、狼に関連する調度品がいっぱいある」

「グレモリー様は、昔からマルコシアスをよく可愛がっていらしたそうです。この調度品は、マルコシアスとの思い出にグレモリー様が買い求めた品だと聞いております」

「ティリウス、よく知っているのね」

「この話も有名なのですよ」

有能な護衛を持ってよかったと思う私であった。

客間に通されると、すぐにお茶が運ばれてきた。

お茶を飲もうか飲むまいか考えているときに、さやさやと衣擦れの音がするのが聞こえた。

そちらに目をやると、白いドレス状の服を着た、ギリシャ彫刻もかくやと思わせるような美人が登場した。

ゆるくウェーブのかかった黒髪を頭の上で一つにまとめ、豊かな胸元には金でできた豪華なネックレスをさげている。

しかしそのネックレスよりも美しいのは、彼女の菫色の瞳であった。アメジストのようなきらめきを持つその瞳は、今は私に向かって真っ直ぐに向けられていた。

だが、その瞳の奥に愁いを見てとった私は、この未亡人にはなにがある、と感じたのである。

私は席を立つと、グレモリー様に向かって挨拶した。

「はじめまして、私はギルバートが主、アンナ・タイラと申します。こちらに控えておりますのは、私の護衛のティリウスと申します。

この度は面会を心よく承諾してくださってありがとうございます」

「はじめまして、わたくしはこの屋敷の主、グレモリーですわ」

そういうとグレモリー様は優雅な仕草で椅子に腰を下ろした。

「わたくし、皇帝陛下の謁見のときにあなたをお見かけしたわ。とっても素敵な賢い獣を連れていたことを覚えているわ」

「それはありがとうございます。覚えていただいたこと、光栄に思えます。……早速ですが、実は、今日はグレモリー様にあるお話があつて参ったのです」

「ええ、そうだったわね。聞かせてくれるかしら」

私は一昨日の事件のことをかい掴んで話した。

「ということは、わたくしのマルコシアスが、あなた達の仲間を襲ったということなのね」

「ええ、そうなのです。でも、マルコシアスが本当に望んでしていることなのかはわかりません。無理やりやらされているのかもしれない」

「そうね、あの子が自分から誰かを傷つけることはないもの。いつも、誰かのために何かをするような子だったわ」

「そうなのですか」

私は今の会話で少し気になることがあった。

グレモリー様は、マルコシアスのことを「わたくしのマルコシアス」と呼んだ。

一度自分の元を去った獣に対し、「わたくしの」などというのだろうか。

「グレモリー様はマルコシアスのことを今でも大切に思ってたっしやるんですね」

「ええ、あの子はわたくしが幼いころにみつけてから、今まで一緒に育ってきましたの。わたくしにとっては弟同然のような存在ですわ」

「でも、それならばなぜ今マルコシアスはここにおられないのでしょうか」

「それは、その話は少し長くなるわね」

そういうと、グレモリー様はご自分の過去にまつわる話を始めたのだ。

「あれはわたくしが10才のころだったわ。召使を連れて、闘技場の近くを歩いていると、なにかの泣き声が聞こえたの。そちらへ歩いていくと、小さな黒い狼の子供をみつけましたの」

——グレモリー様とマルコシアスの出会いは、グレモリー様が10才のころに遡る。

闘技場の近くで見つけた子狼を、グレモリー様はマルコシアスと名づけ、自分の弟のように可愛がった。

マルコシアスはグレモリー様によく懐き、どこへ行くにも一緒だった。

やがて、大人になったグレモリー様には、その美貌から求婚者が引く手あまただったそうだ。

グレモリー様は、数ある求婚者の中から、一番温厚で、自分のことを愛してくれる貴族を選び、結婚した。

しかし、新婚生活は長くは続かなかった。

夫が急な病で倒れ、帰らぬ人となったのだ。

悲しみに暮れるグレモリー様だったが、夫の莫大な遺産を引き継ぎ、その暮らしぶりは裕福だった。

そんなグレモリー様を狙って、何人もの男が夜這いを掛けるようになった。

グレモリー様の美貌と、莫大な財産を狙ってのことである。

ところが、ある時期からそれがぴたっとなくなった。

代わりに、今までグレモリー様に対し求婚していた貴族が次々と惨殺されるという事件が起こったのである。

「そう、それはある寒い雨の日のことだったわ」

商人連合 9 ●

ごきり。

骨を砕く音。

ぱり。

骨を食む音。

びちゃびちゃとした地面で、その獣は一心不乱に何かを貪っていた。

頭は最初に。

素性がわかる部位から食らっていった。

あまり抵抗をされないように襲った。

どの貴族も、退廃と脂肪の味しかなかった。

……今までに沢山の貴族を食らった。

市中で「貴族殺し」「危険種の獣」などと評されていることは知っていた。

正体を暴かれるのは時間の問題だ。

だが、闘技場送りになる前に、一人でも多くの貴族を殺さねばならない。

あの人を守るために。

あの人 の 傍 に いる ため に 。

——それは寒い雨の日のことだった。

その貴族は武術の心得があつたようで、抵抗された。

顔に傷を作ってしまった。

もうあの人 の 前 に 姿 を 見 せ る こ と は 出 来 な い 。

だが、最後にもう一度だけ、あの人 に 会 い に 行 こ う 。

屋敷に帰ると、あの人 が 慌 て た 形 相 で 駆 け 寄 っ て き た 。

「どうしたの！ 酷い怪我じゃない！ なにがあつたの？」

ああ、優しい私の愛しい人。

そんなに涙を流さないで。

あなたの笑った顔を最後に覚えておきたいんだ。

——マルコシアスは、獣の姿で、ずぶぬれのまま帰ってきた。

グレモリーに抱きしめられたあと、前々から言おうと決めていた台詞を吐き出す。

「私にははいられません」

マルコシアスがそういうと、グレモリーは目を見開いた。

「どうしてなの？ マルコシアス」

「自分のために、人を殺してしまったからです」

濡れた毛皮に構わず、まとりつくグレモリー。

「あなたは優しい子なのよ。あなたがそんなむごいことをするはずがないもの。よしんば、あなたが『危険種の獣』であったとしても、わたくしは変わらずあなたの傍にいるわ」

「あなたは私のことを誤解しています」

「いいえ、あなたは人のために何かをしてくれるような心根の優しい獣よ。誰かに脅迫されたの？ そうなのね？」

「違います。これは、私がしたくてやったこと。私は、あなたを愛しているからやったのです」

「わたくしだってあなたを愛しているわ」

その台詞を聞いたマルコシアスは自嘲気味に笑った。

「あなたの愛と私の愛とは質が違うのです。知っていますか？
私が今までどんな思いであなたを見つめていたかを。あなたが結婚
するといったとき、私がどんな気持ちになったか理解できますか？
あなたは私のことを弟のようだった。だが、私はあなたのこ
とを姉だと思ったことは一度もありません。出会ったその日から、
私にとってあなたは特別な存在でした」

それを聞くと、グレモリーは口元を押さえて後ずさりをした。

その姿を見たマルコシアスはこれでよかったのだと自分を納得させ
た。

「私を庇い続ける訳にはいきません。遅かれ早かれ、私は闘技場送
りになるでしょう」

マルコシアスがそういうと、震える声でグレモリーはいった。

「そんなこと、わたくしがさせないわ」

「あなたのほうこそ心根の優しい人だ。私はそんなあなたのことを
愛していたのです。出来ることなら、常しえに、あなたの傍にいた
かった。でも、私のせいでああなたが非難されるくらいならば、私は
喜んで闘技場へ行きます」

菫色の瞳には、憂いが宿っている。

そんな顔をさせたいわけではなかった。

最後にあなたの笑顔を見たかったのに。

うまくいかないものだな。

だが、あなたと過ごした日々は、私にとってかけがえのないものとなった。

最後に抱きしめてもらえたことを感謝しよう。

私は、その足で治安部へと出頭しようとした。

その途中、あの男に出会ったのだ。

——あの、ライモンドという名の男に。

「わたくしが知っているのは、マルコシアスが治安部へと出頭する際に姿をくらましたというところまでよ。マルコシアスの行方がつかめたのであれば、わたくしはあの子に会って話をしなければなら
ないわ。とても大事な話を」

グレモリー様は、事の顛末を話し終わると、ほうと長いため息をついた。

その顔からは疲労が見え隠れしていた。

私はそんなグレモリー様の姿を見ていられなくなって、思わずこういった。

「グレモリー様、私とティリウスもお供させてください。私はギル

バートの契約者です。何かお役に立てることがあるかもしれません。この護衛のティリウスも、ギルバートも頼れる存在です。もしかしたら、マルコシアスの行動を止められるかもしれません」

「ええ、ありがとうアンナ。では明日、わたくしと一緒に水道橋へいってくれるかしら？」

「喜んで」

こうしてグレモリー様との面会は終わった。

帰る道すがら、私はティリウスに尋ねた。

「私、ちゃんとやれたかしら？ 機知に富んだ発言なんて全然出来なかったわ」

「そんなことはありませんよ。お嬢さんの誠実さが伝わったから、グレモリー様もお嬢さんを同行するのに是といったのですよ」

「それならいいのだけど。それと、グレモリー様とマルコシアスの関係は私が最初思っていたものよりずっと深かったのだということにはわかったわ。あの二人には幸せになってもらいたいと思うのは私のエゴなのかしら。死んでいった貴族には申し訳ないけれどね」

「それは俺もそう思います。獣が人間を殺すなど、本来あってはならない事態だとされています。人間に怪我をさせたかどで闘技場送りされた獣は数多くいるのです。しかし、人間が獣を殺しても罰金だけで済むのです。資源と財産の違いなのですよ」

そういったティリウスの表情は、かつて見たことがないほど険しい

ものだった。

商人連合 10

今日、私はグレモリー様とともに水道橋へ出向くことになっている。とはいっても現地集合なので、行きのお供はティリウス一人だけである。

無益な争いを止めさせるために、グレモリー様の想いをマルコシアスに伝えるために、私達は水道居へ赴くのだ。

身支度を済ませると、私とティリウスは一頭立ての馬車に乗った。

ティリウスは今獣の姿になっている。

ティリウスがいつでも戦えるようにという準備をしていることに、私は身震いした。

「水道局」の皆は今日も無事なのだろうか。

マルコシアスの一団は、一度襲撃して、それで終わりということとは考えられない。

必ずもう一度やってくる。

そしてそのときは死傷者が出るに違いないと私は思った。

「お願い、誰も死なないで。誰も傷つかないで」

馬車の中で祈るように手を組むと、それを見たティリウスがいった。

「お嬢さん、ひとつ頼みがあります。もし、お嬢さんに危険が及ばないことがわかったら、俺もギルバートたちと一緒に戦ってもいいですか？」

「ええ、それでギルバート達が助かるなら、お願いするわ」

「お嬢さん達の身の安全は保障します。俺の力で、居場所を探られないようにします」

「わかったわ。私達は相手に見つからないように行動すればいいのでしょうか？」

「はい。それと、グレモリー様も護衛をつけてこちらに来るはずです。彼らが使える人材であることを願います。もし頼りにならないとわかった場合は、お嬢さんの身の安全が最優先ですので、基本的にはお嬢さんとともに行動します。安心してください」

「ティリウスの良いようにしてちょうだい」

「話のわかる雇い主で、俺としては嬉しいですよ」

そんな話をしているうちに、私とティリウスは一足早く水道橋へとたどり着いた。

今日も見渡す限りの快晴である。

ブルーの背景に、黄土色の煉瓦で作られた巨大な水道橋が聳え立っている。

「ああ、こんなにいい天気なのだから、お弁当持ってくればよかったわ」

「確かに景色はいいですよ。今度、ギルバートたちに差し入れでも持っていきましょうか？」

「ティリウス、それってすごくいい考えだわ」

他愛のない話をしながら、これから起こるであろう惨劇に対する心の準備をしておく。

まもなくギルバート達が働く姿が見えてきた。

高度50メートルほどの場所で、命綱一本を頼りに修繕作業をしているものや、橋の一番上に立って哨戒しているものの姿が見える。

「うわあ、あんなに高いところにのぼって、怖くないのかしら。あっちではブルーノが修繕作業を行っているわ。皆毎日こんな仕事をやっていたのね」

「俺も彼らの仕事を初めて見ましたが、こんなに危険な仕事をやっているのだとは思わなかったですよ。命綱をつけているとはいえ、前回の襲撃の際によく一人の死者も出さなかったと感心しますよ」

「今回は一人の負傷者も出さないといいのだけど。誰も傷ついてほしくないっていうのが本音だけど、そうもいかないわよね」

そんなことを話し合いながら、私とティリウスは茂みの中へと身を隠した。

「ここにいれば、見つかる心配はないと思います」

「この茂みからだど、みんなの姿がよく見えるわ。風下で、しかも水道橋の上部とは随分離れているから、匂いを辿られる心配もないわけね」

「はい。あとはマルコシアスの一団とグレモリー様が来るのを待つだけです」

ほどなくして、グレモリー様が数人の護衛を引き連れて、馬車に乗ってやってきた。

グレモリー様は目の覚めるような純白のドレスを着ており、青い空の下で、その姿はひととき目立っていた。

私とティリウスはグレモリー様に近づいた。

「グレモリー様、お待ちしておりました」

ティリウスがこれからのことを説明する。

「まず、グレモリー様にはご不便かと存じますが、隠れ場所として、あちらの茂みでお待ちになられるようお願い申し上げます。もし彼らが現れた場合ですが、合図をするまで、護衛を伴ってこの茂みで隠れていてください。グレモリー様達の身の安全を確保するためです」

「わかりましたわ。こちらこそよろしく願いますわ」

こうして、私達は茂みに隠れてマルコシアスの一団を待ったのである。

「グレモリー様はマルコシアスと出会ったら、なんとおっしゃるつもりなのですか？」

私は同じ茂みで隠れているグレモリー様に尋ねた。

グレモリー様は僅かな逡巡ののち、答えてくれた。

「わたくし、昨日一晩考えましたの。マルコシアスに会ったら何とおうかと。いろんな言葉が浮かんできましたわ。なぜ貴族を殺してしまったのとか、なぜわたくしの元を離れたのとか。でもどれもふさわしい言葉ではなかったわ。そんなときに、わたくし自身の気持ちに、素直に向き合ってみることにしましたの。それでわかりましたわ。私が望むことはただひとつ、マルコシアスが、もう一度わたくしの元へ戻ってくることに、それだけだったのですわ」

「そうだったのですか。グレモリー様は、マルコシアスのことを本当に愛してらっしゃるのですね」

私のその言葉に、グレモリー様は、それは見事な笑みでもって応えとした。

そのとき、遠くから「来たぞ！」という誰かの声が聞こえた。

そちらに目をやると、マルコシアスを先頭にした、獣の一団がこちらに来るのが見えたのである。

獣対獣。

澄み切った青空の下で、獣の姿を取ったギルバートとマルコシアスは互いを認知した。

マルコシアスの一団が来ることを察知すると、「水道局」の皆は戦闘態勢を取った。

それぞれ手に獲物を持ち、ギルバートの援護をする構えだ。

水道橋の上で、対峙する狼と人型の獣の一団。

と、「水道局」の皆の中から、獣の姿を取ったギルバートが前へ進み出た。

そのまま一団から抜け出ると、獣の一団に向かって話しかけた。

「マルコシアス、お前が狙っているのは俺の仲間ではなく俺一人だろう。だったら、俺がお前達全員の相手をする」

低く唸るギルバート。

銀の獣を目にしたマルコシアスの一団は、僅かな畏怖を含んだ唸り声をあげた。

「水道局」の皆は、ギルバートを助けに行けるよう、臨戦態勢を取っている。

「いいだろう。但し、お前が死んだらその体、我々が貰い受ける」

マルコシアスがそう答え、ついに戦いが開始された。

橋の上でマルコシアスの一団は扇状に広がった。

ギルバートは体を低くし、いつでも攻撃できる準備をしている。

周囲の獣たちは一斉に威嚇し始めた。

ギルバートは唸るだけで微動だにしない。

我慢しきれなくなったのか、一頭が飛び掛ってきた。

ギルバートはそれを体当たりして跳ね飛ばした。

それがきっかけとなったのか、周りの狼たちも攻撃を始めた。

飛び跳ね、咬み付き、それを交わしてまた咬み付く。

青空の下、黒と銀のコントラストが鮮やかで、それは戦いというより舞を舞っているかのようにだった。

「ギルバート……」

茂みの中から心配そうに見上げる私の気持ちを知ってか知らずか、ギルバートの舞はより鮮烈に、美しくなっている。

「これが銀の獣か」

傍らでつぶやく、巨大な豹。

気が付くと、ギルバートは周囲を狼の一団に囲まれていた。

そこで動きが一旦停止する。

膠着状態になった円の中に、マルコシアスが飛び入った。

獣の柵で囲まれたギルバートとマルコシアスは一騎打ちの様相を呈した。

お互いに間合いを取って、じりじりと円の中で移動する。

周囲の獣はギルバートを威嚇し、あるものは口から涎をたらし、あるものは牙をガチガチと鳴らしている。

と、二頭が同時に飛び上がった。

黒と銀が混じりあい、ボールのように転がった。

それを合図と見たのか、周囲の獣たちは一斉にそのボールへと飛び掛った。

「なんだと?! マルコシアスもろとも食い殺すつもりか?」

ガルデインが言うが早いか、獲物を持ってその塊に飛び掛っていうとした。

そのとき、ボールの端々から、無限の銀の針が伸びた。

「なっ！」

ガルデインが立ち止まったその数ミリ先に、鋭く太い針の先端があった。

「これは、なんだ？」

ガルデインが視線を移動すると、そこには地獄絵図のような光景が広がっていた。

そこは、時間が止まっているかのようにだった。

ボール状になった獣の一団が、鋭く太い無限の針で内側から刺し貫かれていたのだ。

そのおぞましい光景に、ガルデインほか「水道局」の皆はその場に射すくめられたようになった。

「……こいつぁ、ひでえぜ」

反則技ともいえるその光景に、一同は戦慄した。

「これもお頭の方だったのかよ」

剣山に串刺しにされた状態になっている獣の一団は、皆痙攣しており、戦闘続行は不可能のように見えた。

するすると剣山が縮んでゆく。

黒い塊の中から、銀の獣が現れた。

その体には傷ひとつついていない。

「殺した、んですか？ お頭」

ガルデインが聞く。

「いや、急所は外した。だが、一週間は動けんだろう」

ほっと胸をなでおろすガルデイン。

その光景を茂みから見ていた私達は呆然としていた。

今のは一体なんだったんだろう。

ギルバートがボールに取り囲まれたと思ったら、無数の銀の針が出てきて、一瞬にして戦闘は終わった……。

獣たちは死んだのだろうか。

なんだか、CG映画を見ているようで実感がわからない。

そう思ったとき風上から濃い血の臭いが漂ってきた。

思わず吐きそうになる。

横を見ると、グレモリー様が立ち上がって、橋の下へ駆けていくところだった。

「マルコシアス！ マルコシアスっ！」

そう呼びながら、グレモリー様の瞳からは大粒の涙が溢れていた。

「わたくし、あなたにまだ大切なことをひとつも言っていないくてよ！ こんなところで命を落とすなんてあんまりだわ！ あなたも、夫と同じようにわたくしを置いて先に行ってしまうの？ わたくしはまた一人ぼっちなの？」

グレモリー様がそういったとき、黒い塊がもぞもぞと動き出した。

塊の中から現れたのは、無数の箇所から血を流したマルコシアスだった。

「マルコシアス！」

口を両手で押さえ、だが、生きていることに安堵するグレモリー様。

マルコシアスは這って橋の端まで行くと、そこから身を乗り出すようにしてグレモリー様を見つめた。

グレモリー様は声の限りに叫んだ。

「戻ってちょうだいマルコシアス。わたくし気付いたの。あなたを、愛しているって。気付かないふりをしていたわ。わたくしを欲するあなたの目を。わたくしは温和でも争いを好まないわけでもないの。ただ、あなたの目から逃げたかっただけなの。一度受け入れてしまったら二度と戻ってこれなくなりそうで怖かったの」

マルコシアスは橋の上から声を振り絞った。

「私にそのような資格はございません。あなたの傍ににいるには、私は汚れすぎてしまった。ですが、あるいは、あなたにこうして会えることを、私は期待していたのかもしれない」

溢れる涙を止めようともせず、グレモリー様は微笑みながらいった。

「二人で逃げましょう、マルコシアス」

商人連合 12

——ここは宿屋の一室。

ぶちぬきのその部屋にはいつかと同じように、さまざまな商人たちが集まっていた。

しかし彼らの表情は一樣に険しいものとなっていた。

「聞いたか？ 銀の獣がマルコシアスを下したってのを」

「ああ、なんでも、銀の獣は針山見てえな格好になって、ほかの獣を戦闘不能に陥らせちまったって話だぜ」

「おお、なんとおぞましい。ああ、グレモリー様とマルコシアスは手に手を取ってトンズらしちまったっていうオチだそうじゃないか。だから今グレモリー様の屋敷はもぬけの殻だって話じゃないか。本当にもったいないねえ」

「グレモリー様のお屋敷は皇帝陛下に還元されるんだろう？ 恵まれない俺達に少しは分けてもらいたいもんだぜ」

「皇帝陛下の懐も潤って、危険種の獣は彼方へ旅立って、あちらさんとしちゃ万々歳じゃないか」

「おいお前、皇帝陛下のことを悪し様にいったらばちが当たるぜ」

「ああそうだわ。しかも、忌々しいことに、銀の獣はマルコシアスを下したかどで正式に貴族として生活するって話じゃないか。獣の

分際で、なに不自由なく暮らせるって訳かい」

「これであの獣と契約者に手を出すことはますます困難になっちゃまったよ」

商人の一人が戸口の前で佇む男を見た。

その目には怒りが籠っている。

「これも皆、ライモンド、あんたのせいだぜ。あんたがマルコシアスを使って、獣を一網打尽にしようとしなければ、獣は俺達の手に入っていたかもしれねえのに」

「あんた、俺達に何か隠し事をしているんじゃないだろうねえ」

そういわれたライモンドという男は、戸口から部屋の中央に移動すると、皆に話しかけ始めた。

「始まりに帰ろう。確かに獣を捕まえることは失敗した。だが俺達商人連合の力を持ってすればいくらでもやりようはある。やはり、人間を取り込むほうが俺達の理に適っている」

「でも相手は両方とも貴族様になっちゃまっているんだぜ？ どうするんだ？」

「つてはある。そのときまでしばし身を潜めよう」

それを聞くと、商人連合の面々は、一人、また一人と闇の中へと消えていった。

「ええっ！ ティリウス、今なんていったの？」

ここは宿屋の食堂である。

今日は「水道局」の皆の快気祝いと、ギルバートの貴族就任祝い、それに「水道局」のお頭後任にガルディンがなったことも兼ねて、おかみさんから豪勢な料理が振舞われていた。

「お嬢さんの護衛は続けます。ですが、宮殿に入るとき、俺は別行動を取らせてもらいます」

先ほど私が驚いたのは、ティリウスのこの発言である。

急な離別の言葉に私は言葉を失った。

ティリウスは続ける。

「実は、別枠でやらなくてはいけないことがありましてね。これはお嬢さんと以前契約していた指輪の権利の一部共有に関することです。今は詳しくはいえませんが、とはいってもお嬢さんと約束した自分の責務は全うするつもりです。お嬢さんの身の安全は保障します」

「そんな、ティリウスは今までずっと一緒にいてくれたから、安心して市中を歩けたのに」

「お嬢さんには、これからはギルバート様がいつも傍にいていてほしいわ
でしょう」

「でも、ティリウスがいなくなると寂しいわ」

気心の知れた仲間であっただけに、ティリウスの不在は胸に応えるものがあつた。

そんな私を安心させるようにティリウスがいう。

「俺はこれからも皆とともにこの宿にいます。ギルバート様が宮殿へ入る権利を約束して下さったおかげで、仕事がやりやすくなりましたし、あなた方には恩義を感じているんですよ。金輪際会えなくなるって訳じゃありませんよ」

「そうだよアンナ、俺達だって変わらずこの宿にいるんだから、いつでも遊びにきてよ」

どうやらこの国では貴族になると皇帝陛下のお傍近くで生活する慣わしとなっているらしい。

貴族として宮殿に上がるということは、「水道局」の皆とおかみさんとの別れも指しているのだ。

「しかし、お頭……ああ、いやもうお頭じゃなくてギルバート様なんですわね。ギルバート様の出世ぶりには目を見張りますよ。これも皆、お嬢さん、いやアンナ様のおかげでしょうか」

ハティが、そうギルバートにいう。

皆、ギルバートが貴族になるということに、まだ慣れてはいないようだ。

「でも獣で貴族っていったら、皇帝陛下の金色の獣と並ぶ地位です

よ」

ブルーノがいつて、嬉しそうに酒をあおる。

ガルデインはそんな中、少しだけしかめっ面をしていた。

「俺にとっては、お頭はお頭です。俺が後任を引き受けるのは、お頭に対する敬意です。貴族になっても、俺にとってのお頭はギルバート様、あなただけです」

「なーにしかめっつらしているの？ ガルデイン、泣きそうだよ？」

「ルウ、お前だって本当は今にも泣きだしそうな顔をしているじゃねえか」

ガルデインにそういわれたルウは途端に顔をくしゃっと歪ませた。

「だって、お頭やアンナが遠い世界の人になっちゃったようで、俺、寂しいんだよ」

そういうとルウはぐすつと泣き始めた。

「湿っぽいのは、俺は好かねえ。だから今日は笑ってお頭の貴族就任祝いをしようと思ったのによ」

自分でけしかけておいたくせに、ルウの泣き顔を見て鼻をすすするガルデイン。

その光景を見たギルバートは苦笑した。

「ルウ、ガルディン、今生の別れというわけでもないのだから、悲しまないでくれ。俺自身はなにひとつ変わるわけではないし、それはアンナだってそうだ。それと、貴族になってからも、お前たちに頼みごとをするかもしれない。そのときは手伝ってくれるか？」

「もちろんです！」

ルウとガルディンの息の合った返事に、和まされる皆であった。

宮殿 1

——さあ、今日から私は皇帝陛下の傍近くに侍る、貴族の一員となるのだ。

昨日は宿屋での最後の晩餐だった。

ルウやガルディンが泣き笑いをして、ハティが優雅な仕草でダンスの相手をしてくれたり、それを見たギルバートが自分も「一曲踊ろう」なんていって、私をリードしてくれたりした。

踊りなんて生まれてこのかたフォークダンスぐらいしか踊ったことがないけれど、男性陣のリードが上手かったのか、くるくると回るように踊ることが出来た。

その輪の中にはおかみさんも加わって、果ては皆で踊りだす始末だった。

「水道局」の皆って基本的に心根の優しい、いい男ばかりだったのよね。

皆笑顔で、歌って踊って遊んで、楽しかったなあ。

それと、昨日は久しぶりにギルバートと一緒に寝た。

広い胸板と力強い腕に抱きしめられて、夢も見ずに深く眠ったのだ。

異界に来て、無意識のうちに不安を抱えていた私の心は、ギルバートの温かさによって、かなり癒されたみたいだ。

朝起きると、獣の姿になったギルバートがベッドの横を占領していた。

ふかふかの毛皮に思わず顔を埋める。

「うーん、いい毛艶。手触りも抜群だし、ずっとこうしていたいな。それにしても、なんで今日は獣の姿なの？」

「最初はこの姿で行こうと思ってな」

「最初？　じゃあ、宮殿で生活するときは人型になるの？」

「基本的にはそういうことだ」

私はちょっとばかり戦々恐々とした。

だって、獣のギルバートならまだしも、人型になったギルバートの姿を見たら貴族の女性陣がなんというか。

客観的に見ても、ギルバートの顔は美しい。

銀糸のような髪の毛、ブルートパーズのような瞳、すっと通った鼻梁に紅を刷いたような唇。

なんだこのお人形さんは、と思わないでもないが、その瞳に宿った確かな熱がその全体の雰囲気がいい意味で裏切っている。

もちろん、獣のギルバートだってイケメンですよ。でも、世の女性は人型のギルバートを見たらどんな顔をするのだろうと、今からち

よっぴり不安、大いに期待をしている私だった。

そう、これからは、ギルバートと生活するのだ。

貴族のしきたりや生活に慣れようと思って意気込んでいる私を見て、ギルバートはふっとかすかに笑った。

「アンナ、最初からそんなに意気込んでいては疲れるだけだぞ」

私は握りこぶしをぐっと作りながらいった。

「でも、私は元いた世界では一般庶民だったし、この世界でもまだ子供同然の知識しかないし、ギルバートに恥をかかせないようにしなくちゃと思って意気込んでいるのよ。ギルバートこそ、なんでもそんなに余裕なのよ？」

するとギルバートは尻尾をぱたりと振っていった。

「俺にはアンナがいればそれでいいからだ。この数日、仕事をしているときもアンナのことが頭から離れなかった。これでも苦勞しているんだぞ？」

「ええっ?! それにしては随分と素っ気なかったじゃない」

私はびっくりした。それは始めて聞くギルバートの告白だったからだ。

ギルバートは続けていった。

「それは……アンナが『テイシュカンパクは嫌』だといったからだ」

確かに、最初るとき、私はそんなことをいった。

それをこのギルバートは律儀に守ってくれていたのだ。

「あの、ギルバート、それは、私の意見を聞いてくれない男性が嫌だっていうことで、ギルバートに触れられたくないって意味ではないのよ。私は、私のことを尊重して付き合ってくれる男性がタイプなの。ギルバートは十分私のことを尊重してくれているわ」

ギルバートはきよんとした。

しばらくそうしたあと、ギルバートは盛大なため息をついた。

「なんだ、そうだったのか。俺はてっきりアンナに内心は嫌われているのかと思ったぞ」

「どうしてそう思うのよ？ 私、好きな人とじゃないとあんなことしないもの」

ちよっぴり憤慨した私がそういうと、ギルバートは一呼吸置いてから話し始めた。

「俺にはアンナの存在が必要だったから、アンナを異界から無理やりこの国へ連れてきてしまった。そのことで、アンナを悲しませたのは知っている。アンナを不安がらせていることも。アンナは一人で泣いていたこともあっただろう？ だから俺はアンナの思うところの存在になろうと思ったんだ」

そういうと、ギルバートは目を潤ませながらキューンと鳴いた。

……え、ギルバートは今なんていった？

私のために、我慢をしてくれていたですって？

「そ、そんな、全然知らなかったわ」

意表を突かれたのは私のほうだ。

ギルバートがそんな思いで接してくれているなんて全然気付かなかった。

しかもなんて健気なのギルバート。

主人の思うとおりの存在になろうなんて、今時中々ないわよその忠義っぷり。

しかもちよつと、その目は反則でしょう！ 私はそういう弱いものが放つオーラに弱いんです！

「好きならちゃんと愛情表現はしてくれていいのよ？ それはエゴじゃないもの」

それを聞いたギルバートは尻尾をぶんぶんと振りながら応えとした。

「よかった、アンナとちゃんと話すことが出来て。俺は今までアナの言葉を誤解していたようだ。自分の欲望を押し付けてはいけないと思い、我慢を重ねてきたが、それをしなくてもいいということなのだな？」

「え、ええ、まあ、そういうことになるのかしら」

それを聞くと、ギルバートはにやりと笑った。

ん？ にやり？ なんだか怪しい予感がする。

このときの私の予感の間違ってはいなかったということを、私はあとで思い知ることになるのだが、それはもう少し先の話である。

宮殿 2

貴族になるには第一に住居の移動から始まる。

私とギルバートはその日のうちに引越しをした。

宿屋の前に紋章つきの二頭立ての馬車が停まったときにはちよつとびっくりした。

中から審問機関のセルビアが出てくるのかと思ったのだ。

しかし、そこから「我が家」の召使なるものが降りてきてさらに驚いた。

私達の荷物は、私は「一ヶ月お泊りセット」を、ギルバートも僅かな小物と服だけだったので、馬車の中はがらがらだった。

その馬車に揺られながら、私はギルバートにこれからのことを聞くことにした。

「私、貴族がどういうものか全くわからないのだけど、ギルバートは貴族についてなにか知っている？」

馬車の中は広いにもかかわらず、私の隣に座って頭を膝の上に乗せているギルバートが答えた。

「俺も貴族の内部情報に詳しいわけではないのだが、貴族といっても大きく3つにわけられるそうだ。貴族はそれぞれ、上流・中流・下流にわかれ、それは財産をどれだけ持っているかでわけられてい

るそうだ」

「へー、意外と単純明快なのね。じゃあ、私達は今回その中のどの地位に分類されるの？」

「俺達はグレモリー様の財産の一部を譲渡されたので、下流貴族に属されることになった」

「ということは、グレモリー様は少なくとも中流以上に属していたってことよね」

「ああ、あの方は上流貴族だった」

そんな話をしていると、馬車がある家の前で停まった。

2階建てのその家を見た目こそ何の変哲もなかったが、中は贅を凝らした調度品で溢れかえっていた。

「あ、この置物、グレモリー様の屋敷で見たことあるわ。財産の譲渡ってこういうものも含まれていたのね」

しげしげと調度品を見回す私。

「そうだアンナ、ひとついい忘れていたことがある」

「なに？」

「これから行く宮殿では、俺以外のものを誰も信用するなということだ」

私は調度品から顔を上げてギルバートのほうを見た。

「なにそれ、物騒ね」

「貴族の世界というものは、一種独特なものがあると聞く。庶民の感覚では図れないその世界に、これから俺達は行こうとしているんだ。それくらいの用心はしておいたほうがいい」

「今はまだ実感がわかないけれど、心に留めておくわ」

そんな会話をしたのが30分ほど前、今私達は宮殿の前に立っている。

宮殿には、謁見のときに来た場所とはちょっと違う入り口から入った。

そのアーチ状の門をくぐると、色とりどりの花が植えられている庭園があった。

庭園の中の歩道は綺麗に磨かれた大理石で、土は全く乗っていないかった。

これも大理石で作られたベンチでは、2、3人の貴族が何事かを語らっていた。

歩きながら、私は心の中でつぶやいた。

「さあ、これから新しい生活が始まるんだわ！貴族ってどんな性格の人がいるのかわからないけれど、私の持ち前の誠実さと根性できっと仲良くなってるわ。ああ、入学式とか、入社式のときを思

い出すわ。うー、どきどきするー!」

と、前から貴族の女性が二人歩いてきた。

とりあえず会釈をしておく。

すると、その貴族の女性たちは、私のほうを見ようともしせずに通り過ぎていった。

通り過ぎたあと、私の後ろで起こる奇妙な笑い声。

「なに、今のは。無視された？ 気のせいよね」

ちよつとだけ釈然としない気持ちで先に進む。

やがて、私とギルバートは貴族達がくつろいでいる一角へと足を踏み入れた。

うん、全く勝手がわからない。

とりあえずほかの貴族達を見ると、思い思いにゲームに興じたり、お酒を飲んだり、果物を食べたり、いたって自由な雰囲気にくつろいでいるように見える。

と、その一角でひそひそとささやきあう貴族達がいるのが見えた。

その貴族達は扇で口元を隠しながら、こちらを見て笑ったり、指を指したりしている。

そのうち、その貴族達は私のほうに近づいてきた。

これ幸いと挨拶をすることにした。

「あの、こんにちは」

またも無視である。

しかもそれだけではなくその貴族達は、すれ違いざま、私に対し「みすばらしい」といいながら去っていったのだ。

ええと。

なんなのよその陰険な空気は。

気のせいではないことを確認するために、テーブルの上においてあった飲み物を手に取り、近づきやすそうな貴族のグループがいなかどうかを探してみる。

でも、貴族達は一見楽しそうに談笑しているように見えて、その実一部の隙もなかった。

なんだこれ、いじめか？

しかも無視とか悪口とか、小学生レベルじゃないの。

あ、それとも、新参者に対する通過儀礼とか。

いや、それにしただって、雰囲気悪すぎよここ。

笑顔の下に、なにか得体の知れないものが渦巻いているのを感じる。

そりゃあ、私だって最初から上手くいくわけがないってわかってた。
それでもちよっと期待してしまった。

貴族っていうぐらいだから、懐と心に余裕があって、そう、グレモリー様みたいな人が一杯いるんだと思ってた。

確かに、貴族の顔立ちは皆上品で整っている。

でも、そんなの、性根がひん曲がっているんだったら何の得にもない。
りはしない。

確かにね、ぽっと出の異界人なんか貴族になって、我が物顔で廊下を歩かれちゃ気分悪いでしょうよ。

……でもねえ、こっちだってこれからの生活ってもんがかかってんだからね！
おいそれと怯んだりなんかしないわよ！

貴族の世界は一筋縄ではいかないということを、肌でもろに感じた一日だった。

宮殿 3

家に帰ってきて、どっと疲れがでた。

ああもうなんなのよ宮殿でところは！まるで針のむしろだったわ。

あのあと、いたたまれなくなった私は、早々にその場から去り、宮殿内を散策することにしたのだ。

どずどずと足音も荒く宮殿内を歩き回る私に、ギルバートは少しおかしそうにいった。

「怒っているのか？」

「怒っている？ そうね、これは怒りだわ。あんな小学生レベルのちんけな嫌味に屈して部屋を出てきた自分に対しても怒っているし、新人いじめだかなんだか知らないけれど、全員で寄って集って人の存在を無視するなんてあんまりだと思っているんだわ」

「アンナは無視されたことに対して怒っているのか。それならば、誰もアンナを無視できないようにしてやろうか」

「なにそれ？ どういうこと？」

髪を振り乱さんばかりに歩いていた私はそこで立ち止まった。

「俺はなんにでもなれる。アンナのためならばな」

そういうと、ギルバートはにいと笑った。

唇が捲れ上がり、鋭い牙がぞろりと見えた。

「ちょ、ちょっと待って、その提案が悪魔の囁きに聞こえるのは気のせいかしら。ギルバートがそういったら、本当になにかしちやいそれで油断できないわ。でも、具体的に何をするの？」

「俺は姿形を変えられる。闘技場にいかなくとも、あの部屋で貴族一同の関心を買うことが出来るぞ」

そういうと、ギルバートは自分の尻尾を銀色の蛇へと変化させた。

その蛇はまるで生きているかのように、ギルバートの背中できぐるを巻いた。

ギルバートのその姿を、道行く貴族達がものめずらしそうに見ていることに気が付いた私は、慌ててギルバートに止めるようにいった。

「ありがとう、でも今はいいわ」

そういった瞬間、ギルバートの尻尾は元通りのふさふさの尻尾に戻ったのである。

私は息を整えると、自分の気持ちを整理した。

「でもそれってなんだかギルバートを使ってずるをしているみたいで私は嫌だわ。それに、私はギルバートを見世物になんかしたくないの。どうせやるんだったら正攻法でいきたい」

そうよ、あんなふうに人の尊厳というものを踏みにじられて、黙っ

ていられるもんですか！

「ふむ、そうするといろいろと下準備が必要だな。人脈の確保や、貴族たちの情報収集などが」

「ええそうね。じゃあギルバート、悪いのだけど、貴族たちの情報収集をお願いできないかしら」

「わかった」

その話し合いでちよっぴり溜飲が下がった私は、改めて散策を続けることにした。

よく見れば庭園の花々は美しいし、青空の下、気持ちよさげに日光浴している貴族たちのなんともくつろいだ様子はここが楽園なんじゃないかと思わせるかのようだ。

そうだ、それに私は一人じゃないんだ。

ギルバートはこれからいつだって傍についていてくれる。「水道局」の皆や、おかみさん、テイリウスだっている。今日は見かけなかったけれど、貴族の仲間にはウィリアムだっているし、最近ではフィリップなんていうちよつとストーカー気味な若者とも親しくなった。

私がこの世界に来てからもう2週間近く経っているけれど、私にはこんなに素敵な仲間が出来たのだ。

こうなったらやってやろうじゃない。貴族の皆さんを正攻法でぎゃふんといわせてやるんだから！

息巻いて家に帰ってきた私は、疲れをおして、その足で真っ直ぐに自分の部屋に行ってみた。

2階のその部屋は、手入れが行き届いており、ベッド、テーブルセツト、衣装棚はどれも品のいい作りだった。

椅子の縁に彫られている唐草文様のような模様を撫でながら、私はこの椅子の前の持ち主であるグレモリー様のことを思い出した。

今頃どうしているのだろう。

愛する獣のために上流貴族の地位を捨て去った強くて優しい女性。

今日会った貴族達がみんなグレモリー様のような人だったら良かったのに。

「ああいけない、ないものねだりをしている場合じゃなかったわ」
気を取り直して、私は衣装棚へ向かった。

その扉を開けると、私の目に色とりどりの衣装が飛び込んできた。

それはグレモリー様の持ち物であることは確かだった。

これは、相当お金がかかっているわね。

「すごく綺麗。こんな素敵な衣装、この世界に来てから初めて見た」
試しに一着取り出してみる。

そのドレスはギルバートの瞳の色と同じブルートパーズで、深く開いた胸や、袖の部分には細かなスパンコールがあしらわれていた。

鏡の前に立ち、ドレスを胸に合わせてみる。

「うん、何とかいけそうだわ」

衣装棚の下についている引き出しを開けると、衣装に合った靴やアクセサリーが入れられていた。

今持っている水色のドレスに合う靴とアクセサリーを探し、ベッドの上に置いてコーディネートを確認してみる。

なかなかいいわね。

それらの衣装を身に着けると、私は1階の客間に足を運んだ。

「ギルバート、ねえ見て、これグレモリー様の……」

私に呼ばれて姿を現したギルバート。

しかし、その姿を見て、私はぽかんと口を開けた。

「どうやら、俺とアンナは同じことを考えていたようだな」

そういったギルバートは、グレモリー様の元夫のものであろう衣装を身に着けていた。

濃紫のトーガを羽織ったギルバートは「威風堂々」という言葉がぴったり合った。

「アンナ、その衣装、よく似合っているぞ」

「ギルバートこそ、全然見違えちゃった」

口をパクパクさせている私に対し、ギルバートはにっと笑った。

「明日は貴族たちをたっぷりと驚かせてやろう」

宮殿 4

「貴族の皆さんをぎゃふんといわせてやろう作戦」のために、私とギルバートはあれやこれやと作戦を練った。

「今日見た限りでは、ほとんどの貴族は俺達に関心がないように振舞っていた。アンナに対して暴言を吐いていた女達も、直接的になにかを仕掛けてきたというわけではない。ただ、嫌味を言って通り過ぎただけだ」

「私、貴族ってもうちよつと器の大きい人たちかと思っていただけに、あの態度にショックを受けたんだわ」

「あの女達にはいつか俺から制裁を加えてやろうと思っている」

「せ、制裁？」

「もちろん、貴族なりのやり方だな」

「うわ、それってなんか嫌な予感がぷんぷんするわ」

そういいながら、私の溜飲がどんどん下がっていることをギルバートは知っているようだ。

中学生のときに一般生徒から遠巻きに接せられて過ごした過去を持つ私は、こういう人の大切さというものをよくわかっている。

あのときも、屈託なく話しかけてくれる一部の友人たちがいてくれたおかげで、随分と救われたものだった。

過去の回想に浸っていると、ギルバートが言葉を続けた。

「今回の貴族の態度は、裏を返せば、あの場所で好き勝手になにかをやっても誰にも咎められないということなのではないかと俺は思う。それならば、逆にこちらでも好き勝手にやらせてもらえばいいのではないかと思うのだ」

「そうね、無視されているってことは、自分の存在を放つといてくれていると捉えることも出来る訳ね」

「それにアンナは一人じゃない。俺がいつも傍についている。だからこれで、あの場所でのアンナの仲間は二人になる」

「うわ、グループ作りなんて何年ぶりかしら。中高生のときはそういうものに一喜一憂していたけれど、まさかこの国に来てそういうことをするとは思わなかったわ。でも、結婚して子供を生んだ友人がママさんグループの存在について愚痴をこぼしていたこともあったから、いつの時代でも、そういうのってなくならないのねえ」

しみじみと感じる私だった。

「俺達はこれから陰口など立てられないような存在になればいいのだ。思ったよりも簡単じゃないか？」

「うーん、それがねえ、『人の口に戸は立てられない』というから、そういうのは簡単にはなくならないとは思うわ。……でも、『三人寄れば公界』ともいうしね。だから、あともう一人ぐらいいは人材として欲しいわね」

「ウィリアムを巻き込んでみてはどうだ？ あの手はアンナに対して執心ではなかったか？」

私はその提案にちよつと目を丸くした。

「え、でもギルバートはいいの？ 私たち以外のほかの人が仲間になるのって」

「アンナのためならばな」

「そう。でも、ウィリアムならば頼りになりそうね」

そんな話をしているときに、召使が来客を知らせた。

「来客って誰かしら？ 私達、この近くに知り合いなんていないはずだけど……」

するとギルバートが「通してくれ」といった。

戸口をくぐって現れたのはハティだった。

「ハティ！ どうしてここに？」

私がそういうと、ハティは微笑みながら話し始めた。

「少し前にギルバート様から依頼を受けましてね、貴族の内情を探ってきてくれというものだったのですが、割合簡単に事が済んでしまったので、こうしてお二人の前に直接出向くことにしたのですよ」

「えっ？ いつそんなことがあったの？」

「少し前に遠吠えで連絡があったんですよ。ちなみに私の元に情報が集まる時にはかなりの量になっていましたよ」

「遠吠えね……」

「俺達の連絡手段の一つです。俺達にとっては、確実に早いものが遠吠えなんです」

すると、ハティは懷から一枚の羊皮紙を取り出した。

「この中には貴族の地位と、どの派閥に属しているか、派閥の中で順位はどのようなものかなどということが書かれています。お納め下さい」

ハティはそれをギルバートに渡すと、「では仕事をやり残してきたので」といつて去っていった。

すごい、なんだかハティが有能な間諜に見えてきたわ。というより、実際そうなのね。

ギルバートはその羊皮紙にざっと目を通したあと、私に向かっていった。

「アンナ、明日からのことなんだがちょっといいか」

「なあに？」

「突然だが、アンナは俺がいう通りの芝居が出来るか？」

「芝居って、どんなことをするの？」

私がそう聞くと、ギルバートは人の悪い笑みを浮かべた。

「冷酷で妖艶な女主人の芝居だ」

「はあ？　なにそれ」

思わず顔が歪む私である。

ギルバートは私のその顔を面白そうに見つめたあと、こう続けた。

「あの場所では、一種のカリスマ性が必要とされる。ほかの貴族たちに侮られないようにするには、そうやって自衛をすることも必要だ。アンナにはそれが出来るか？」

「自衛手段としてなら、やってやれなくもないわよ」

「ふうん？　できる、というのだな？　では今ここで実践してみてはくれないか？」

そういうと、ギルバートは私の隣に座り、私の手を取った。

「ああ、氷のようなわが主よ。私に、お慈悲をお与え下さい」

宮殿 5 ■ (前書き)

※R15相当の描写が含まれています。

宮殿 5 ■

ギルバートがそういつて私の手の甲に口を付けたとき、背筋にざあっと鳥肌が立った。

それは決して気持ちの悪いものではなく、ものすごい羞恥心からくるものだった。

ぽっと耳まで赤くなる感覚が自分でもわかった。

……どうしちゃったの私！ 以前は「人類皆兄弟」の精神で、キスの一つや二つで動じたりなんかしなかったじゃない！

音を立てて唇を離すと、ギルバートは悩ましげな表情で私を見据えた。

「アンナ……」

私は思わずのけぞるようにして体を後ろに引いた。

なにこのものすごい色気！ 名前を呼ばただけで、なぜだか泣きそうになっちゃったじゃない！

む、無理無理無理！ さっきは出来るかもとかいったけれどやっぱり私そんなこっぱずかしいこと絶対に出来ないわよー！！ 第一私が育ってきた日本っていう国は恥とわびさびの文化でそんないきなり冷酷で妖艶な女主人とかああもう私のキャラじゃないってばー！！！！

ギルバートはそんな私の内面を知ってか知らずか、体を引いてしまった私を優しく抱き寄せ、そのまま私の顔の横に手を伸ばし、髪の毛を耳にかけた。

顔がゆっくり近づいてきたと思ったら、左の耳に唇を押し付けられた。

その場で吐息とともに囁かれる。

「アンナ、早く応戦しないとこのまま食べてしまうがいいか？」

かすれた声でそういわれ、思わず背筋がぞくりとする。

「は……あ」

だめだ、力が抜ける。

私は以前自分が女として終わっているのかもなんて思ったときがあったけれど、この魅力には絶対に逆らえないっていう感覚を今味わっている。

だって、今、左右の肩を大きな手で掴まれて、左の耳をゆるゆると舌で、まるで溶かすようになぞられながら「アンナ、早く……」なんていわれた日には、もう演技とかそんなことを考えている余裕はなくなってしまうもの。

でも、今ここで上手く演技が出来なかったら、本番はもっと緊張して台無しになってしまう。

こ、ここはやるのよアンナ！ あなたなら出来るわ！ 千の仮面を

被るのよ!!

そう自分を叱咤激励して、努めて冷静に声を発する。

「下がちなさい」

そういうと、ギルバートは名残惜しそうに耳朵を食んでいた唇を外し、私の顔を見た。

すると、一瞬止まったあと、ぷっと吹き出した。

「アンナのそんな追い詰められた顔、初めて見た」

そういうと、私の肩を抱いたまま、ギルバートはくつくつと笑い始めた。

「悪かったわね、これでも頑張っているほうなんだから。あー、やっぱり私冷酷で妖艶な女主人の役なんて無理だったわ。なにか別の役を考えましょう?」

「そうだな、アンナにはまだ向いていなかったのかもしれないな」

そういうとギルバートはおかしそうに私を抱きかかえた。

「じゃあ、こういうのはどうだ? 『献身的な下僕と優しい女主人』
というのは」

ギルバートったら絶対私で遊んでるんだわ。そうとしか考えられない。

だって、こんな意地悪で楽しそうな彼の顔、初めて見たもの。

「う、それならば妥協できるかも。それで『優しい女主人』は何をすればいいの？」

私がそう聞くと、ギルバートは私の髪に顔を埋めながら囁いた。

「何も。ただ俺の手の中で快楽に溺れていればいい」

そういうと私の後頭部を掴み、頬に唇を落としてきた。

「や、あ」

思わず口から声が出る。

ギルバートは私の顔中にキスの雨を降らすと、ゆっくりと口付けてきた。

舌を絡め、唇が離れたときには二人の間に銀の糸が辿った。

いつの間にか、ギルバートの手が私の胸を柔らかく揉みしだいている。

「だめ、こんな」

「可愛い声をもっと聞かせて？」

「そ、そうだわ、『献身的な下僕』の設定はどこにいったのよ？
これは下僕じゃなくて獣のすることです！」

「アンナは上手いことをいう。本物の獣に向かってそのようなことをいって」

ああそうか、ギルバートは狼だったわよねなどと変に余裕な思考で今の状況を俯瞰しようとしたけれど、それはあっけなく水泡に帰した。

結局、そのあと私はギルバートに美味しく頂かれてしまいました。

「もう、酷い」

「何が？」

「ギルバートがこんなことするなんて思わなかった」

いつの間にかベッドの上まで抱きかかえられて、そこで本格的にいたした私達は、今抱き合って横たわっている。

「だって、アンナはいったらどう？ 好きならちゃんと愛情表現はしてくれていい、触れてもいいと」

「でも、こんなに、その、濃厚だとは思わなかったんだもの」

ギルバートの顔を見ると、ものすごく満足そうな顔をしている。

「ギルバート、でもこれって、明日もするの？ 貴族達の前で」

そういうと、ギルバートは驚いたようにいった。

「まさか。アンナのあのときの顔は誰にも見せたくない」

私の髪をすきながら、ギルバートはさも当然のようにいった。

「じゃあ、今日の予行演習はなんだったのよ？」

「今日のはこんな案もあるという一例だった。だが、アンナが可愛くてつい手を出してしまった」

「もう、こういうところは本当に獣なのね」

「好きな相手になら、誰だって獣になると思うが」

そういうと、ギルバートは私の頭に優しいキスを落としたのだった。

宮殿 6

ああ、そうなのだ。さっきのは、ギルバートの枷を外してしまった私のせいだ。

彼を獣呼ばわりした私だけど、彼はどこまでも優しい。

私を満足させて、大切に扱ってくれるその様は本当に「献身的な下僕」のようだった。

でも、元いた世界では私のことをここまで大切に扱ってくれる人なんていなかった。

ギルバートが優しいのは、私がギルバートの「契約者」だから？

契約者って、獣にとってどのような存在なのだろう……。

結局、ギルバート相手ではまともな演技が出来ないと思った私は、自分で自衛策を考えることにした。

確かに貴族達の無視という状況を有効に使い、あの場所で好きなことをやって周囲を気にせず過ごしていれば、それで事は足りるのかもしれない。

でも、あんな針のむしろみたいなのは、笑顔の下に何かが渦巻いているような場所で、ゆったりとくつろげるはずがない。

これからは宮殿で生活するのだから、あのサロンでなくともくつろ

げるような場所を見つけなければならぬし、あの貴族達に目に物を見せてやりたいという思いはまだ十分にある。

そういえば、あの場所にはウィリアムはいなかった。

偶然かもしれないけれど、あの場所にウィリアムがなくてほっとしている自分がいる。

あんな空気の悪いところ、まともな人ならば一秒だっていたくないわよね。

でも、貴族達が嫌だといって逃げてばかりもいられない。

ここはなんとかしなければ。

そう思っていたとき、召使が来客を告げた。

「アンナ様への来客です」

そう召使にいわれて、階下に下りていくと、そこには意外な人物がいた。

「あら！ フィリップじゃないの！ どうしてここへ？」

そこには正装のフィリップがいたのだ。

「アンナさん、お久しぶりです。今日はアンナさんにお話があって伺わせてもらいました」

そういうフィリップの顔は心なしか凜々しい。

赤みがかった金髪をなでつけ、青空のような瞳を私に向けると、フィリップは決意したようにいった。

「アンナさん、僕は明日から宮殿に上がることになりました」

「え、ええ?! いきなりどうして?」

突然の告白に口をぽかんと開ける私。

しかも今、フィリップは宮殿に上がることに「しました」といっていなかったか?

どうしてそんな言い回しをするのだろうといぶかしんだ私に対し、傍に寄って来ていたギルバートがフィリップに声をかけた。

「これはこれは、フラウティス家の嫡男がおいでとは。わが主も隅には置けないな」

ギルバートの姿を認めたフィリップは軽く会釈をした。

「あなたがアンナさんの獣のギルバートですね。こうやってお会いするのは初めてですね。僕の家名を知っているとは、流石に銀の獣だけのことはある」

「フラウティス家ほどの家柄ならば、貴族であれば知らないものはおるまい」

腕組みをしてそういったギルバートに対し、フィリップは背筋を伸

ばして答えた。

「アンナさんが宮殿に上がると聞いて、僕、いてもたってもいられなくなっただんです。僕は今日、治安部を辞めてきました。その足でこの屋敷に伺っただんです」

フィリップの目はどこまでも真剣だった。

ん？ んん？

私、この状況にいまいちついていけません。

……話の内容を総合すると、私のストーリーカードと思っていた治安部のフィリップが、実は名門といわれるフラウティス家の嫡男であるということなのだ。

しかもフィリップは私のために治安部を辞めて、宮殿で私の味方になってくれるということなのだ。

「アンナ、これで三人集まったな」

ギルバートがどこか誇らしげにいう。

私と、ギルバートと、フィリップ。

これが宮殿内での新たな派閥となるのだろうか。

その夜、私はギルバートと一緒にお風呂に入ることにした。

この家にはいつでもお湯の出る広い浴槽があつて、私としては大感激だった。

しかも、石鹸やタオルなど、アメニティグッズも豊富に取り揃えられており、風呂好きな私の心を大いに満足させてくれたのである。

「そういえば、人型のギルバートとはまだ一緒にお風呂に入ったことがなかったわね」

そういいながら服を脱ぐ。

体を見てみると、先ほどの情事のあとが鮮やかに残っていた。

「アンナは俺を誘っているのか？」

「え？」

服を脱いだギルバートが、私の体をじつと観察していることに気がついた。

「アンナの体は不思議だな。何度も貪りたくなる」

「『貪りたく』って、そんなに大した体じゃないわよ」

「自分の魅力をわかっていないところがまたそる。恥らっているのかと思えば、こうやって急に大胆になる。アンナの心が読めないところにも興味を惹かれる」

「あら、私が考えていることなんて結構単純よ。『お風呂は気持ちいい、二人で入ったらきつと楽しい』ほらね？」

「ふうん、じゃあ、もっと楽しくしてやろうか」

そういうとギルバートは私をぴったりと抱きしめると、私の額に口付けをした。

触れている滑らかな肌の感触が心地よい。

「アンナ、貴族どもを驚かせる策が出来たぞ」

「どんなもの？」

「あの場所で、アンナを思いっきり大切に扱うことにする」

そういったギルバートは面白い遊びを見つけた子供のように微笑んだのだ。

宮殿 7

次の日、私は人型のギルバートを伴って宮殿へと出向いた。

アーチ状の門をくぐり、庭園を歩く。

今日も花々は美しく、手入れも行き届いており、見るものの目を楽しませてくれる。

道行く貴族達が、私達の姿を見て、少しだけ目を丸くする。

私とギルバートは昨日選んだ衣装を身につけ、庭園を散策していた。

外でくつろぐ貴族達が、こちらを見てなにかを囁きあっている。

「あの、ギルバート、これは少しくつつきすぎじゃない？」

「なにがだ？」

「庭でくつろぐ貴族達がこっちを見ているんだけど。あ、また。こっち見んな！」

「見たい奴には見させておけばいい」

どういう状況か説明すると、ギルバートの片手が私の腰に回されており、本当に「べったり」くっついて歩いている状態となっているのだ。

私たちはそのままサロンへと足を踏み入れた。

すると、サロンの中に人だかりが出来ていた。

「どうしたのかしら？」

見ると、その輪の中心になっているのはフィリップだった。

「あら、私のときとは随分対応が違うじゃない」

「フラウティス家は上流貴族だからな。対応が違うのも頷ける」

サロンの入り口に立っていた女性たちが、ギルバートの姿を認めると、ぽかんと口を開けるのが見えた。

すぐさまざわざわとし始める入り口部分。

フィリップに群がっていた貴族達が何事かとこちらを振り向く。

そして皆一様にあんどり口をあけた。

皆、特にギルバートの姿を見て驚いているのだということがわかった。

へへん、私のことは無視出来ても、ギルバートのこの姿は無視出来まい。

貴族っていうものはいつの時代でも美しいものが好きだからね。

ギルバートは私の手を取り、クッションの敷かれた大理石の椅子に私を座らせた。

「アンナはここで少しだけ待っていて。今フルーツを取ってくるから」

そういうとギルバートはテーブルのほうへと歩いていった。

「アンナさん！」

見ると人垣から抜け出たフィリップがこちらへ歩いてきていた。

フィリップは、自分の周りの取り巻き連中には目もくれずに、一目散に私のほうへと向かってきた。

「ギルバートはどうしたんですか？」

「今、フルーツを取りに行ってくれているの」

「そうですか」

すると、フィリップは声をひそめていった。

「アンナさん、こんな危ない場所で、絶対に一人になってはいけません。僕が護衛になりましょう」

そういうと、フィリップは私の左隣に座った。

フィリップの取り巻き連中は、私の姿を見て、近づくのを躊躇っている。

な、なんで私そんなに嫌われているんだろう。

私になにか悪いことをしたのかしら。

程なくして、お皿に山盛りのフルーツを載せたギルバートが帰ってきた。

当然のように私の右隣に座る。

両脇に金と銀の男性を伴って座る私に対し、貴族達は顔には出さないものの困惑した雰囲気醸し出している。

私もこの状況にちょっと混乱し始めてきた。

ギルバートは「お待たせ」というと、フルーツ皿を椅子に置き、私を抱きしめた。

そのあと、ギルバートは持ってきたフルーツを手ずから私に食べさせ始めた。

ギルバートの指が、私の唇を優しく撫でる。

「アンナの唇は柔らかいな」

そういつてギルバートは周囲が息をのむほど美しく笑った。

「ちょっと、ギルバート、これやっぱりものすごく恥ずかしいんですけど」

「少しの辛抱だから我慢して？」

囁き声でそういわれば、頷くしかない。

すると左手を誰かに取られた。

なにか柔らかいものに触れる。

見ると、フィリップが私の手を取り愛おしそうに自分の頬に当てているところだった。

「あの、フィリップ？」

私が小声で囁くと、フィリップは真剣な眼差しで囁き返した。

「アンナさん、ちょっとだけ我慢して下さい」

と、その手を唇まで持っていていき、口付けを落としたのである。

その光景に、周りの貴族達はひそひそと何事かを囁きあっている。

いーやー！　なにこれ、見ないでええ！！

ギルバートだけじゃなく、フィリップまでどうしちゃったの？！

しばらくそうしたあと、二人とも、なにかを希うように、切なげな表情でこちらを見つめてきた。

……あ、もしかしくとも、これってお芝居？

そう思ったら、少しだけ落ち着いた。

二人に向かっていう。

「私の頬に口付けを落とすことを許すわ」

そういうと、二人は待ってましたとばかりに、私の頬に唇をつけた。

二人は貴族達のほうを一切見ず、しかし決然とした声でいった。

「この方は俺の愛しい主だ」

「彼女は僕の大切な人です」

その光景を見た貴族達は、一人、また一人とその場を離れていった。

貴族の取り巻きが一人もいなくなるまで、その愛撫は続けられた。

「あ、あの、私、お手洗いに行ってくるわ」

そういつて私はそそくさと席を立ち上がった。

努めて冷静に振舞いながら、部屋をあとする。

少しばかり火照った体を外の風に当たらせた。

うわああ、なんだったんだ今のは！

例えお芝居だったとしても、二人の男性から真っ直ぐに告白されちゃったよ！

しかも公衆の面前でいちゃいちゃしちゃったわ。

私、もうちょつとでおかしくなるところだったわよ。

でもそう、これは役得って奴なのよね。

それにしてもこの国の貴族って態度で示すのがマナーなのかしら？
といぶかしむ私であった。

宮殿 8

サロンに戻ると、二人は果物を食べながら談笑していた。

外からの柔らかい日差しを浴びて、きらきらと輝く銀糸と金糸の髪。

ブルートパーズの瞳と、青空のような瞳は、二人がまるで対であるかのような錯覚さえ起こさせる。

美しい唇に似つかわしい小振りの果物。

その様は実には一幅の絵画のように周囲の光景からひとときわ際立っていた。

その周りには群がる貴族達。

貴族達はこの短時間で「どこにそれだけいたんだ？」というぐらいに集まっている。

ちょっと……私は除虫菊かなにかだったのかい！

ああ、貴族の皆様はなんて素直なのかしら。

きっと私がいなくなった途端、二人の周りに集まったのだということが容易く想像できる。

しかし自分だけがハブにされる原因がさっぱりわからないわ。

そんなガードの固い貴族の輪から 二人を遠巻きに眺めようと思っ

ていのだが、ギルバートに目ざとく気付かれてしまった。

すぐさま席を立つ二人。

「どいてください」

フィリップが周囲の貴族達にいう。

人垣がざっと左右に分かれると、そこから悠々とギルバートが、次いでフィリップが出てきた。

「アンナ、道に迷わなかったか？」

「アンナさん、変な人に絡まれたりはしませんでしたか？」

なんですかさっきから二人の私に対するこの過保護な対応は！

でも二人の表情は本当に心配している人のそれで、どこまでも真っ直ぐだ。

この表情はどうやら演技ではなさそうだ。

私は周囲の痛い視線から逃れようと身を縮めた。

「ここは人多すぎるな。どこか別の場所へ行こう」

「そう遠くないところに図書館があります。そこへ行きませんか？」

「それがいい」

あれよあれよという間に、私は二人にサロンの外へと連れ出された。図書館に着くと、フィリップは羊皮紙の巻物が山と積まれた棚を通り過ぎ、つきあたりの一角にある個室状のスペースへと私たちをいざなった。

「ここならば誰にも邪魔されずに話ができます」

私を挟んで、両隣にまるで騎士のように佇む二人。

「あの、二人ともありがとう。二人がいなかったら私あの場所できっといたたまれない気持ちになっているところだったわ。それにしても二人の演技はとても上手ね」

とりあえずお礼をいっておく。

それを聞くと二人は一瞬驚いたあと、なんともいえない表情をした。

「アンナさんは……」

「役得と思っておけばいい」

「え？ 私になにか変なこといったかしら？」

「フィリップ、これで気付いていないのだから落としがいがあるだろう？」

「僕はそんなアンナさんを守るために今ここにいます」

話の见えない私をよそに、金と銀の男性はどこかおかしそうに顔を

ほころばせた。

「アンナがいなくなったあと、フィリップから面白い話を聞いたぞ」

「どんな話？」

「アンナが避けられている理由だ」

それならば是非聞きたい。なぜ自分だけが貴族達から避けられているのか不思議でなかったのだ。

「アンナさんは、先だってグレモリー様の財産を譲渡されましたよね。そのことで、貴族達から反感を買っているのです」

「どういうこと？」

「貴族社会で、財産を増やすための一番手っ取り早い方法は、ほかの貴族の財産を吸収することなのです。グレモリー様は上流貴族で、しかも彼女の亡夫の財産も相続されていたので、ほかの貴族達としては、グレモリー様の財産はまさに狙い目だったわけです」

目をしばたかせる私に対し、ギルバートが続けている。

「ところが、その財産は国とアンナに取られてしまった。皇帝陛下に恨み言をいうわけにはいかないから、貴族達の鬱憤の矛先が全てアンナに向かったというわけだ」

「……はああ？　なにそれ。それじゃ、私はグレモリー様の財産を頂いたかどで、貴族達の妬みと逆恨みを一身に受けることになったって訳だったのね」

「ええ。しかも、アンナさんの地位は下級貴族なので、どの地位の貴族達もアンナさんのことを気にせずに嫌がらせができるというわけなのです」

「なんなのよその子供みたいな理由は」

「この国では戦争が起これると武官が活躍し、功績は全てそちらに持っていけます。また、新たな政策を作るのは文官なので、その制作にかかる費用の管理などは全て文官が取り仕切ります。だから貴族達が自分の財産を増やそうと思ったら、自分で事業を始めるか、ほかの貴族の財産を何らかの形で吸収するしかないのです」

「じゃあ、貴族はなんのために存在しているの？」

「有体にいえば、この国の礎となる皇帝陛下の呪の力の強化のため、というのが正しいでしょう。貴族はまた神官の役割も兼ねていますです」

「随分俗物的な神官ですこと」

「僕もその通りだと思っています。僕はそんな貴族同士の醜い争いが嫌で、今まで宮殿に上がることを避けていたのです。でも、今回アンナさんのために僕は宮殿へ上がることにしたんです」

「そうだったの。フィリップの友情に感謝するわ」

「アンナさんってやっぱり鈍いんですね」

「ん？ 鈍いですって？ ストーカーのフィリップにはいわれたく

ないわよ」

「ストーカーってなんですか？」

「あ、こっちの話」

とりあえず、自分が避けられている原因がわかり、納得はしないものの理解は出来た私だった。

宮殿 9

「貴族の皆さんをぎゃふんといわせてやろう作戦」は、期せずしてフィリップが私たちの仲間に加わってくれたことによってやりやすくなったことは事実だ。

この機を逃してはならないと、私は大いに張り切ることにした。

「ねえギルバート、昨日の話なんだけど、『献身的な下僕と優しい女主人』って題名の芝居、さっきの続きとしてもう一度サロンに戻ってやつてもらってもいいかしら？ もちろん、昨日のようなことはナシで。それでフィリップにも手伝ってもらって」

「いいだろう。それで貴族達を牽制出来るのならばいくらでも」

「アンナさんのためなら僕はなんだってやりますよ」

「ありがとう。貴族達が私を避けている理由がわかった今、いろいろ対策も取れそうね」

そのあと私達は図書館で作戦の大枠を話し始めたのである。

――さて、これから作戦開始である。

先にフィリップにサロンへ戻ってもらって、私とギルバートは時期を待った。

「この作戦、上手くいくかしら？」

少しだけ不安になった私に対し、安心させるようにギルバートがいう。

「フィリップが協力してくれるのだから必ず成功する」

「彼を巻き込んでしまつて、なんだか申し訳ないわ」

「そう思うのであれば、このあとの演技をしっかりとこなして、フィリップの努力に報いることだな」

「そうね。それにしても、どうやって時間を潰そうかしら？」

私がそういうと、ギルバートはにやりと笑った。

「愛しのわが主よ。一番楽しい時間の潰し方を教えて差し上げましょう」

その声はどこか楽しそうで、まるで面白い悪戯を見つけた子供のようだった。

ギルバートはすつと両腕を伸ばし、私をその腕の中に閉じ込めた。

「ちょっと、ギルバートったら！　こんなところで抱きつかなくとも」

「こんなところだからいいんじゃないか」

そういうとギルバートは私の髪に顔を埋めた。

「優しい女主人は、その柔らかな心で下僕の枷を溶かしてしまった」
その声は甘く、聞いているこちらが蕩けてしまいうくらいだった。

「もう！ でもこんな堂々とした下僕はいないんじゃないかしら」
そうはいっても、ギルバートの腕の中は心地よくて、思わずうつとりと目を閉じてしまう。

ほうとひとつため息をつく、ギルバートの腕に力がこもった。

「ああ、そんな悩ましいため息をつかれたら、もっといろいろして差し上げたくなくてしまふではありませんか」

ギルバートはそういつて私を抱え上げると、近くの机に私を座らせた。

自分はその足元に跪き、私の足を片方抱えると、あらわになったふくらはぎに優しく口づけをした。

足先からふくらはぎまでを辿るように舐められる。

「ちょっと、くすぐったいわ」

ここが図書館ということもあってか、私の声は知らず小さくなる。

私の膝頭にキスを落とすと、ギルバートは上目遣いで私を見た。

「愛しております、愛しのわが主」

ああ、またこの感じ。

逆らえない魅力。

魅了しているのはどちら？

「ええ、わたくしも愛しているわ、ギルバート」

グレモリー様を思い出しながら、私は流されないようにと言葉遣いを改めた。

――私はギルバートを伴ってサロンに入った。

ギルバートは私の手をそれはうやうやしく取り、先ほどの椅子へと案内する。

「平常心、平常心」と自分に言い聞かせる。

椅子に座ったところを見計らって、フィリップが大勢の貴族を引き連れてこちらへやってきた。

色とりどりの衣装を着た貴族達は、さながら孔雀の群れのようにだった。

見るとその中には昨日すれ違いざまに私を笑った貴族や、「みすばらしい」といった貴族も混ざっている。

ふん、そのあんなたち、フィリップが上流貴族だからって、あからさまな色目を使ってんじゃないわよ。

フィリップはそれがどういうことにつながるのか、ちゃんとわかっているんですからね！

ギルバートが抱きかかえるようにして私の髪をすき始めた。

その奉仕を受けながら、私は努めて冷静に笑みを浮かべるとフィリップを見やった。

「あらフィリップ、先ほどは楽しかったわね」

「ええ、僕も大いに楽しませてもらいました」

そういうと、フィリップは自分の後ろに控えている貴族達を手で指し示した。

「ああ、紹介が遅れましたね。こちらにいるのは先ほど僕の友人になった方々です。皆、中流以下の貴族達ですが、アンナさんに挨拶してもらおうと思って連れてきてしまいました」

その言葉に、後ろに控えている貴族達は驚いた。

フィリップに取り入って、手の届かないほかの上流貴族たちとのつてを作ろうと思っていたようなのだ。

それが、紹介されたのは今まで取るに足らない存在だと思っていた下級貴族の私なのである。

内心侮辱されたことによる怒りで一杯であるにもかかわらず、貴族達は皆努めて笑みを浮かべていた。

「まあ、アンナさんとおっしゃるのね？　初めてお目にかかりますわ。わたくし、ミアーシャと申しますの。フィリップ様のご友人だなんて存じ上げませんでしたわ。これから、仲良くいたしましょう？」

そう名乗ったのは、私のことをみすばらしいといった貴族だった。

へえ、ミアーシャっていうんだ。

でも、忘らいでかその顔！

あんたの侮蔑と嘲笑が入り混じった笑顔はね、昨日からボーっとすると私の頭の中でずっとリフレインしてたんだからね！

さぞや悔しかろう！　紹介されたのが、上流貴族ではなくこの私で！

私はその場にいた全員ときっちり挨拶を済ませると、最後にこういった。

「わたくし、覚えが悪いので皆様のお名前を忘れてしまうかもしれませんの。そのときは、もう一度挨拶をしていただいてもよろしいかしら？」

この場ではもちろんですと答えるしかない貴族達だった。

宮殿 10

「ありがとう、ギルバート、フィリップ」

サロンからの帰りに、二人に対して礼をいった。

今日の一件で、サロンの貴族達はどんな形であれ私の存在を認知した。

二人のおかげで、今後の貴族社会での生活が格段にやすくなったのだ。

でもギルバートとフィリップはどうして私なんかに優しくしてくれるのだろう。

ギルバートは私が契約者だからということが理由としてあげられるけれど、フィリップはどうして私のことを守りたいなんて思うようになったんだろう。

その気持ちを素直に聞いてみると、フィリップは「アンナさんは酷いですね……」といったきり黙ってしまった。

「アンナの持つ魅力に惹かれたということだろう」

ギルバートがそういっても、中身は枯れた中年男性であると思っ
ている私にとってはいまいちぴんとこない。

「私の持つ魅力ってなんなのかしら？」

そう呟くと、それを聞いたフィリップがいった。

「アンナさんの魅力は、相手に対して柔らかな空気を作り出すところですよ」

「それって癒し系ってこと？」

「あ、そうです。わかりやすい言葉ですね」

もう、対外的な自分の代名詞はなぜだか知らないけれど「癒し系」なのだと半ば諦めの境地で受け入れるしかないと思った私だった。

今日の功労者である二人を労うために、私は新居でお茶と軽食を出すことにした。

ハーブティーに手製のホットケーキをつけて、客間のテーブルに出す。

私の手製のお菓子を食べたフィリップは「……幸せです。ギルバートと代わりたいたい」といったきり、また黙ってしまった。

「そんなにお菓子が気に入ったのなら、いつでもサロンに持って行くわよ」

「いえ、それは駄目です！ このお菓子はアンナさんの家でアンナさんと一緒に食べるからこそ美味しさが増すんです！」

打って変わって力説するフィリップだった。

「フィリップ、今日はフィリップのおかげで貴族社会に認知されることができたわ。こんなものでよかったですらまた食べにきてね（それと今までストーカーとかいってごめんなさい）」

心の中でフィリップに謝ると、私は残りのホットケーキを清潔な布に包んでフィリップに渡した。

「これ、荷物になるようだったら置いていってもらっても構わないんだけど……」

「いえ、是非持って帰らせて下さい！」

フィリップはその「手土産」を大切そうに抱えると、馬車に乗って帰っていった。

「フィリップは報われんな……、いや、一応満足はしているのか」

「え？」

ギルバートがそう呟いたのを聞き返す私であった。

サロンでの私達の影響力は日を追うごとに増していった。

ギルバートとフィリップはその容姿と地位で、確実に賛同者や崇拝者を増やしていき、私はいつの間にか「獣の契約者」ではなく「ギルバートの主」として認知されるようになってきたのだ。

それというのも、二人の男性がこの上なく丁寧に私を扱ってくれるので、周囲も自然とそのような雰囲気になってきたのである。

そんな、あからさまな態度で嫌悪感を表されることがなくなった私は少し気が緩んでいたのかもしれない。

その日私達は図書館へ行くことにした。

文字の勉強をしたくて、ギルバートとフィリップに先生役を勤めてもらおうと思ったのだ。

フィリップとギルバートに巻物を選んでもらっている間、私は窓辺に座って外の景色を眺めていた。

ぼんやりと外を眺めていると、図書館の一角からひそひそとした声が聞こえてきた。

耳をそばだてたわけではないが、自然と聞こえてくるのは契約者であるがゆえか。

「……そうよ、このままあの女の好き勝手にさせていいと思いい？」

「新参者の癖にねえ。貴族のしきたりも何もかもがめっちゃくちゃだわ」

「大した容姿でもないのに、よくあの二人を侍らせていられるわよね」

自分のことだと思った瞬間、胸がぎゅうつと詰まった。

心臓がどくどくと早鐘のようになり始めた。

冷水を浴びせかけられたかのように、自分の顔から血の気が引いていくのがわかる。

ああ、やっぱり表面だけ取り繕っても、人の心に住まう感情というもの、そうたやすくは変える事が出来ないのだ。

貴族の皆さんに受け入れてもらえているような気がしていたのは、やはりギルバートとフィリップの力があってこそだったのだ。

これって虎の威を借る狐状態じゃない。正攻法でぎゃふんといわせられたなんて内心調子に乗っていたけれど、そんなの錯覚だったんだわ。

私はその場から動けずにいいた。

声の主達はやがて図書館を出ていき、入れ違いにギルバートとフィリップが私の元へとやってきた。

「アンナさん、この巻物ならば初心者でも読みやすいかと思えます。内容は簡単な地理と、この国の生活習慣についてです。勉強も出来て、文字も読めるようになって一石二鳥ですよ」

「そう、ありがとうフィリップ」

「……どうしたアンナ、顔色が優れないぞ」

「ああ、なんでも無いの。ちょっと貧血起こしたみたいで」

「大丈夫ですかアンナさん？ 今日はこの巻物を持って早めに帰宅したほうが良さそうですね」

「ええ、今日はそうさせてもらおうわ」

駄目だわ私、全然強くなんかない。

それにこの人達の前で弱気になってはいけない。

せっかくよくしてくれているのだから、その気持ちに報いなくては。

これは、どこかの神様が「調子に乗るな」と警告してくれたのだと思うようにしようと努めた私だった。

番外編 ある朝の出来事 ▲（前書き）

※「▲」はR12相当の描写を含むという意味のマークです。
（これ以降このマークに関する前書きは省略します。）

番外編 ある朝の出来事 ▲

今日も日差しが心地よい。

ベッドの中でうーんと体を伸ばすと、私は隣で寝ているギルバートを見つめた。

朝の光を浴びて、きらきらと輝く銀糸の髪は、毛皮のときと同じように手触りがいい。

歳をとったらどんな風になるのだろう。

ロマンスグレーになるのか、それともガルディンみたいに綺麗な白髪になるのか。

私が異界に来ることになったのは、このギルバートと出会ったからだ。

ああ、思えばあのころがなんだか遠い昔のようだ。

家族は皆元気になっているかな？ 友人達や信幸さんはどうしているだろう。

私が手放したもの。もう二度と触れられないもの。

……私は情が薄いのだろうか。

こうやって時々思い出さないと、それらの記憶が水になって流れて

しまいそうになる。

だから手放さないように必死で縋り付いているのかもしれない。

……いけないいけない、でもこれ以上考えると、今度は手に入らないものに焦がれてしまいそうになるんだわ。

人間の感情ってなかなか上手くはいかないものね。

もう戻れない過去に想いを馳せたことに対する罪悪感を打ち消すため、私はギルバートに擦り寄った。

「う……ん、アンナ」

ギルバートの寝言なんて珍しい。

きつと半分起きているのね。

ふふ、そうだ、いつも気が付くとギルバートのペースにはまっている私だから、今日は私からちょっかいかけてみようかな。

ギルバートが私にいつもしてくれることを、私もちょっとだけ返してみよう。

ギルバートを起こさないように、そっと髪をすいてみる。

さらさらと指の間から零れ落ちる銀糸の髪は、絹のような手触りで、ずっと触っていたいぐらいだ。

そのまま顔がよく見えるように髪の毛を耳にかける。

すぐにぱらぱらと落ちてくる癖のない髪の毛にちよつと羨ましさを覚える。

私の髪の毛は、細くて猫っ毛で、量が多くてすぐ絡まる。

茶色っぽいその髪は、学生時代頭髮検査に引っかかることもよくあった。

幸い、素行の面で差っ引いてくれたので、いつもお咎めなしだったけれど。

美容院に行ってもよく「染めてるんですか？」と聞かれるのだけけれど、そこまで明るいとは自分でも思っていない。

って、自分の回想に浸っている場合ではなかったわ！

今日はサービスデーなのよ。

ギルバートが私にされるがままなのをいいことに、私は彼の顔に手を添えて、おはようのキスをすることにした。

少し開いた唇に軽く触れる。

と、ギルバートの腕ががっしりと私の体を掴んだ。

「あ？ 起こしちゃった？」

「まだ寝ている」

「起きてるじゃない」

「まだ夢の中にいる」

「ふふ、そうなの。じゃあ、これも夢の中の出来事ね」

そういうと私はギルバートに自分から舌を絡ませた。

舐るように、丁寧に。

ギルバートが私を抱いたままごろりと仰向けになる。

私はそのまま彼に深く口付けた。

するとギルバートが私の上着の中に手を入れてきた。

そのまま背中を辿られる。

「もう、寝ているんじゃないの？」

「まだ目は開けていない」

「それはもう起きてるっていうんです」

私は身を乗り出してギルバートのおでこにキスをした。

「それじゃあ、この続きは夢から覚めてからしてくれるかしら」

「そうしよう」

そういうとギルバートは薄く目を開けて、天使もかくやと思わせるような微笑みを浮かべたのだった。

——薄目を開けて、朝日に透ける蝦茶色の髪を眺める。

起きていることをアンナに悟られぬようにそつと。

その柔らかい髪に顔を埋めるのが好きだ。

アンナの匂いはとろりと甘い。

どうしようもなく魅了されるのだ。

アンナが俺の契約者となってくれたことは、まるで奇跡のようだと思う。

こんなに愛おしい存在はほかにみつからない。

アンナは、俺がアンナに対して優しいのは「契約者」という枷に縛られているからなのではないかと思っているようだが、それは違う。

俺は自分の意志でアンナの元へ行ったのだ。

決して契約者だからだというわけではない。

むしろ、契約者が異界にいてくれたほうが都合が良かったのだが。

俺は出来ることならアンナを俺で雁字搦めに縛って、俺の手の中で

いつまでも愛でていたいとすら思っている。

朝も夜もなく、ずっとこの腕で抱いていたい。

本当は誰にも触らせたくないし、誰にも見せたくない。

俺の、俺だけのアンナでいて欲しい。

でもそれは俺のエゴだから。

愛情表現を間違えないように。アンナの翼をもがないように。

大事に大事にゆっくりと捕らえていくのだ。

そのうち俺なしでは生きられなくなるように。

もっと俺を欲しがって。

もっと俺を愛して。

こんなにも苦しい想いは誰にも見せられないな。

芝居に紛れて愛を乞うのは卑怯だと思う。

でもアンナは気付いていないから。

自分が俺にとってどのような存在なのかを。

契約者だから惹かれたんじゃない。アンナだから惹かれたんだ。

この気持ちを上手く伝える術を俺はまだ知らない。

だから何度でも貴女を愛そう。

俺から逃れられなくなるぐらいに。

アンナが俺の髪の毛を触るのが気持ちよくて、思わず手を出してしまいそうになる。

でもまだだ、まだ早い。

アンナが俺にキスをしたら、そのときはアンナを捕らえよう。

どこへも行けないようにしっかりと。

さあおいで、俺の愛しい主。

甘くて柔らかい俺の愛しい人。

どうか常しえに、俺の枷の中に。

獣狩り 1 ▲(前書き)

※月経に関する描写が含まれています。

獣狩り 1 ▲

――上司から叱責された夢を見た。

それは自分としては珍しいミスだった。

取り次がなくてはいけない電話の内容を放置したばかりか、取引先の連絡先を聞かずに電話を切ってしまったという痛恨のミスだった。

自分の仕事を立て込んでいたということは言い訳にはならない。

何であるときメモをちゃんと取っておかなかったのだろうか、相手が名乗らなかったからって、そこはちゃんと聞いておくのがマナーだろうとか、上司と上手くタイミングが合わなかったからって、連絡を放置しておいていいはずがないのに、と悔やんでも後の祭りだ。

これは上司の机の前で「君は何年社会人をやっているんだね？この程度のことも出来なくて、今までよくこの会社にいられたね」といわれた苦い思い出なのだ。

その次は高校のときの部活の夢だった。

私は吹奏楽部に所属していたのだが、そのときいきなり舞台上に上がらなければならないという内容だった。

私は譜面を読むのが遅いので、初見で演奏できるはずがない。

それなのに本番は刻一刻と近づいてくる。

頭の中は真っ白で、今すぐこの場から逃げたいと思っているのだが、体が上手く動かない。

ああどうしようどうしようと思っているときに、夢から覚めた。

体中、じつとりと汗をかいている。

やばい、私、今すぐくネガティブになっている。

そう思っていたときに、もしかしてと思いつくことがあった。

あの日が来たなとピンと来たのだ。

隣で寝ているギルバートを起こさないように、そっと布団から抜け出す。

お手洗いに行つて、事前に持ってきておいた布ナプキンと下着をつけた。

よかった、服を汚す前に間に合つて。

私はあの日が近くなるとネガティブになる。

今までは気を張っていたためあまり意識していなかったのだが、昨日図書館で聞いた陰口に心と体が反応したようなのだ。

貧血っぽかったのは、どうやら本当らしいと、ふっと笑いが漏れた。

早めに起きてしまったので、昨日借りてきた巻物を見るときもなしに広げた。

この国の文字はアルファベットとほとんど同じだ。

ところどころ装飾されてはいるものの、文字を読むだけならば何の苦勞もなさそうだ。

だが昨日の今日なので、まだ字が読めるはずもなく、私は巻物の上で踊っている文字を目で追いながら、この国の地図を見たり、人体の絵や、硬貨の絵、闘技場や服の着方などの絵を見ていった。

フィリップが選んでくれたこの巻物は、今の私にとって必要な情報がぎっしり詰まっているようだった。

それだけに、文字が読めないのはもどかしいなと思っているときに、ギルバートが起きてきた。

「アンナ、今日は早いな」

「ええ、ちょっと早く起きちゃって。そうだギルバート、今時間ある？」

「どうした？」

ギルバートは私の隣の椅子に座ると、腕組みをしながら巻物を覗き込んだ。

「アンナは勉強熱心だな」

「そんなことないわよ。ただ、少しでも早くこの国に馴染もうと思
って……そういえば、私この国の名前って一度も聞いたことがな
かったなあって思ったの。よかったら、教えてくれる？」

私がそういうと、ギルバートは大きく伸びをしたあと、椅子の背も
たれに両腕を置いた。

「お安い御用だ。この国の名は『メリトウス』という。今よりもっ
と古い時代にこの地にやってきた、ある異界人の一団が名付けたと
いわれている」

「へー、異界人って結構前からやってきていたのね。もしかして、
この国にいる人間て皆、その異界人の一団の子孫だったりして」

「それはありうるぞ」

「ええ?! あてずっぽうでいったただけなんだけれど……」

私が驚くと、ギルバートは面白そうに唇の端を上げた。

「この世界にいる人間の割合は実はとても少ないんだ。あとは俺達
みたいな獣が大半だ。ほかの国では、人間が全くいないところもざ
らにある」

「この世界では人間よりも獣のほうが多いのね」

意外だったというべきか、さもあらんというべきか。

「ああ。だが、この国での地位の比率は人間＞獣になっている。獣
は基本的に奴隷階級として扱われている。ただ人間がごく僅かし

いない国ではこの限りではないがな」

「そうだったの。でも、なんだか変な感じ。そんなに獣が多いのであれば、この国もほかの国のように獣の権力の方が強くてもおかしくないわよね……」

いぶかしんだ私に対し、ギルバートはちょっと声を落とし、秘密を打ち明けるように話し始めた。

「それは、人間はユウキアの木立の聖なる樹の影響を受けないとされているからだ。ユウキアの木立は、年に2度花粉を飛ばす。その花粉が風に乗って世界を回り、獣を狂わせるので、国の発展が遅れるのだ。このメリトウスという国は、人間の力による発展を選んだある種特異な国といわれている」

この世界の仕組みを聞いた私はある疑問を問うた。

「ユウキアの花粉ってスギ花粉みたいな感じなのね。でも、狂うって一体どうなるの？」

「それは獣によってまちまちだが、その個体が持つ欲望を増幅させる機能が聖なる樹の花粉にはあるらしい。ただ契約者の獣だけは例外となる。多分、人間の血を取り込むということが関係しているらしい」

「ギルバートはよく知っているのね」

「ああ。アンナに会えない4年間で、契約者と獣についていろいろ調べたからな」

そういって、ギルバートはどこか遠くを見つめるような仕草をした。

獣狩り 2 ▲(前書き)

※冒頭、月経に関する描写が含まれています。

獣狩り 2 ▲

そのギルバートに、私は今気付いたある頼みごとをすることにした。

「そうだギルバート、私ね、そろそろ月のものが来そうなの。それでフィリップに『今日から一週間ぐらい体調不良でサロンにいけません』って連絡を取りたいのだけど」

ギルバートはこちらを見ると、心得たというように頷いた。

「それは俺の仲間に連絡させよう。アンナは安心して休むといい」

その日のうちにフィリップが家に来て、「アンナさん、体調不良で大丈夫ですか?!」と慌てたが、月のものだとすると、なぜだか耳まで赤くなって口元を押さえながら「いえあの、僕に連絡をくれてありがとうございます」といって早々と去っていった。

「もしかして、月のものの話ってこの国じゃタブーだった?」

「いや。しかしフィリップは何を想像したのやら」

少し慌てる私に対し、余裕綽々の体で構えるギルバートだった。

「え、同時多発消失事件?」

ここは私とギルバートの新居。

私は昨日から月のものが来てしまったので、自宅で安静にしているところだ。

ギルバートに文字を教えてもらっている最中、ちょうどルウとガルディンが仕事休みで遊びに来たので、気分転換にと一緒にお茶を飲むことにしたのだ。

「そうなんだよ。今市中はその噂で持ちきりだよ」

ルウが先ほど焼いた私お手製の焼き菓子を食べながら話す。

「最近奇妙な事件が連続して起きているんだ。まず、第一に闘技場の獣の消失。闘技場に送られるはずだった獣が毎回必ず2、3頭いなくなっている。第二に契約者の獣の消失。黄昏時になると、契約者の獣、今は主に農民の獣が誰かに連れ去られる。この2件の消失事件なんだけど、市中では新たな『危険種の獣』の出現を指してるんじゃないかって噂が真しやかに囁かれているんだ」

ルウは目をくるっと回すと、「不思議だよねー」といって一人で推理を始めた。

「『危険種の獣』ってなに？」

私のその質問にガルディンが答える。

「『危険種の獣』っていうのは、手っ取り早くいえば、人を喰っちゃった獣のことを指すんです。マルコシアスも『危険種の獣』って呼ばれていましたよ」

「どうして人を食べると『危険種の獣』って呼ばれるの？」

「それは俺が話そう」

ギルバートが少し身を乗り出した。

「この呼び方は本来人間がつけたものなのだが、それには理由がある。俺達獣は人を喰うと体の内部が『変容』するらしいのだ。獣を喰えば『融合』することが出来るが、人を喰うと本来の獣ではなく『妖獣』となってしまう。『妖獣』になると、凶暴性が増し、残忍な性質になる。だから『危険種の獣』と呼ばれる。ちなみにマルコシアスも、獣ではなく『妖獣』になってしまったから、あの戦いのときも一頭だけ這い上がることが出来た。それとマルコシアスの場合はグレモリー様という強固な心のよりどころがあったから正気を保っていられたのだ」

「ええと。つまり、獣が人を食べると凶暴で残忍な『妖獣』ってものになっちゃうってわけね。『変容』については言葉からおぼろげながら把握できたわ。もう、以前の自分とは違うものになっちゃうのでしょうか？ 『融合』っていうのは、あの水道橋のときのギルバートの姿や、尻尾を蛇に変えてくれたときのことを指すのよね。それは自分自身の内面が変わるというわけではないのね。ああそれと、契約者の獣は『変容』してはいないの？」

「血の交換程度ならば『変容』には至らない。だが人の血というものは俺達獣にとっていろいろな作用を及ぼす」

私は腕組みをしながら考えた。

「皇帝陛下の呪といい、血の力といい、ここは私がいた世界とは随

分違うのね。私には元々そんな力なんて備わっていなかったはずなのに」

「多分、アンナは4年前に俺の体についていた聖なる樹の花粉を吸ったことによって、異界にいながらにしてこの世界の住人となる素地が出来上がっていたのではないかと思う」

そうなんだと納得する私であった。

続けてガルディンに質問する。

「なぜ獣の消失と『危険種の獣』の出現が一緒にたに取り沙汰されるの？ 『危険種の獣』ならば人間を襲うはずじゃないの？」

「人を喰っちゃった獣は、その獣自身が一番望むことをするようになるんです。ちょうどユウキアの花粉で狂っているのと同じような感じだな。あれを10倍ぐらいに強めたのが『危険種の獣』ってわけです」

「ユウキアの花粉っていつ飛ぶの？」

私の質問に今度はルウが答える。

「ユウキアの花粉が飛ぶのは2の月から4の月と、8の月から10の月までだから、もうそろそろ飛び始めているころだと思うよ。俺はなんだかそわそわするもん。でも、自分の欲望と正面から向き合えるから、精神鍛錬にはもってこいだと思うよ。ただ日常生活にはどうしても支障が出ちゃうけど。ブルーノなんか、この前花粉が飛んだときは唱館に入り浸って帰ってこなかったもん。おかげでその3ヶ月分の給料が全くないから苦労していたよ」

「へえ、そうなんだ。じゃあルウも唱館に入り浸っちゃうかもしれないの？」

「俺はそんなことしないよ！……あ、でも、今年はアンナ様の家に入り浸っちゃいそう。今俺、美味しいお菓子とアンナ様の甘い匂いにすっごく惹かれてるもん」

「あらそうなの。ルウだったらいつでも来てくれていいわよ」

私がそういったとき、目の前でごちつと鈍い音とともにガルディンの鉄拳がルウの頭上に落ちた。

「痛てっ！　なにするんだよガルディン！」

「アンナ様はユウキアの花粉の威力を知らないからそんな呑気なことがいえるんですよ。俺達獣が本気を出したら、アンナ様なんてあっという間に食われちゃいますよ」

「ガルディン下品だよー！　それに、アンナ様にはギルバート様がいるから大丈夫だよ」

「今優しい俺が、お前がギルバート様に殺されるのを救ってやった事にも気付かんのか」

「うわあん、ガルディンにまた殴られたー」

「はいはい、仲がいいわねー」

そのときの私は、ユウキアの花粉の真の恐ろしさをまだ知らなかった

たのである。

獣狩り 3

それから一週間、私はギルバートにつきっきりで文字の読み方を教えてもらった。

おかげで、数字と硬貨の名前、年月の名前、体の部位などの基本的なことは一通り読めるようになった。

そして月のものが終わり、私はまたサロンに通うようになった。

今日もギルバートとフィリップに付き従われながらサロンでくつろいでいると、貴族達が話しかけてきた。

「アンナ様はお聞きになりました？ 今市中で持て囃されている噂」

「『危険種の獣』と、消失事件の話のことかしら」

「まあ、お耳が早いだね。今私達の間でもその話で持ちきりなんですのよ」

ええまあ、耳が早いっていうか、遠吠えやらなんやらで情報は一応掴んでおります。

しかし、市中の噂がこんなところにまで届いているということとは、この話はよっぽど有名なのね。

「アンナ様もお気をつけ遊ばせ。ギルバート様が狙われる可能性だってなくはないのですから」

「そうね、相手がどんな意図を持っているのかわからない以上、注意したほうがいいわよね」

ギルバートはこの話に薄く目を細めるだけであとは何の反応もしなかった。

貴族達がどこかへ去っていくと、フィリップが口を開いた。

「この件に関しては治安部も動き始めっていると聞きます。獣はこの国にとっての貴重な資源なのですから」

「資源、ねえ。それってまるで獣が物かなにかのように聞こえるわ」

「ええ、でも実際にこの国の社会や経済を回しているのは獣あつてのことですから。ちなみに人間は財産と呼ばれているのですが、これは数が少ないからです」

「そうなの。あ、そういえば、噂では農民の獣が消失するって聞いていたわよね。どうしてなのかしら」

私の質問に、考え込みながらフィリップが答える。

「農民は他国からの移住者が多く、違法取引で契約者になるものも少なくはありません。そのことが関係しているのかもしれませんが。それと、もしかしたら、今回の『危険種の獣』は人為的に作られた可能性が高いかもしれません」

「どうということ?」

「闘技場に行くはずだった獣、違法取引で貴族に献上されるはずだ

った獣、この二つの共通点は、力と因子です。闘技場送りになる獣は一から十までありますが、人を喰らうという大罪を犯した獣は確実に闘技場送りになります。今回いなくなっている獣は、そうした残忍な性質を持つ獣が多いと聞きます。また、農民が違法取引で手に入れた獣は別の大陸の獣の因子が多く混じっています。『融合』する際に、不規則な因子を受け入れて強くなりたいと思う、若しくはそのように画策する輩がいなくても限りません」

「そうなんだ。それにしてもフィリップはこの噂についてよく知っているのね」

「まがりなりにも元治安部ですから」

少しばかり胸を張っているフィリップである。

「それにしては獣のティリウスと出会ったときに結構驚いていたじゃない？」

「あ、あれはティリウスがいきなり獣の姿で出てきたからです！普通の人間だったら誰だってびっくりしますよ」

「ごめん、今のはちょっと意地悪な返答だったわね」

「いえ、……アンナさんにならないんです」

なぜそこで恥らうかなあ？

フィリップの私への好意はまるで刷り込みみたいねと思っていると、ギルバートが口を開いた。

「フィリップのいつていることは大筋では間違っていないと思う。この消失事件は誰か人間が裏で糸を引いている可能性がある。もしかしたら商人連合の奴らかもしれないが、自分たちの利益をわざわざ損なうようなことをするとも思えない。また、闘技場送りにされた獣が脱走しているとあつては、治安部の威信にも関わるし、違法取引された獣がいなくなったのでは審問機関の顔も潰れるだろう」

「へえ、これって結構大事だったのね。じゃあ、いったい誰が裏で糸を引いているのかしら」

「それはわからない。だが、間違いなく雲行きが怪しくなっていることは事実だ」

「そうね。だってもしそんな獣が街に解き放たれてもしたら、国中がパニックになるわ」

これってバイオハザードよねと思う私をよそに、フィリップがはたとひざを打った。

「アンナさん、今の意見は正しいですよ。これは、本当はかなり危ない事態なのではないかと思います。もうすぐユウキアの花粉が飛ぶ季節になりますよね。もし何者かが、その時期を狙って街に獣を放ったら、未曾有の大災害になります。一刻も早く消えた獣たちの行方をつかまなくてはなりません」

「この間ルウが、花粉が飛び始めているっていつていたから、あんまり猶予はないわね」

「ええ、その前に消えた獣たちが見つかるといいのですが……」

一抹の不安を覚えながら、私達はサロンをあとにした。

「ねえ、ギルバートはどう思う？」

身支度を整え、ベッドに横になろうとしていた私は今日の話の続きをギルバートに聞いてみた。

「俺とアンナは二人ともユウキアの花粉の影響を受けない。だが、この国で動ける人材は皆狂った獣の力に圧倒されてしまうだろう。アンナの身は俺が必ず守るが、この国を混乱に陥れようとする奴がいる限り、俺達の平安な生活は絶えず脅かされるというわけだ」

「ねえ、ギルバート、この話、私たちも独自で調査してみない？ 花粉の影響を受けないのであればなおさら。ウィリアムとリラちゃんや、セルビアとスコルもきっと動き出しているはずよ」

「アンナの身を危険に晒したくはないが、宮殿での生活も少し飽き飽きしてきたところだ。いいだろう、アンナが常に俺の傍にいと約束するなら」

「よし！ 決定ね！」

そういつて、私はギルバートとがっちりと腕を組んだのであった。

獣狩り 4

次の日、私とギルバートは市中見物と称して、噂の内情を探ることにした。

フィリップには今日もサロンに行ってもらい、貴族達の噂話を収集してもらうことにした。

石畳の上を、ギルバートと二人、並んで歩く。

周囲には商店がずらりと立ち並び、私達に威勢のよい掛け声を放っている。

そういえば、人型のギルバートと市中を歩くのって初めてかも。

これってなんだかデートみたいね。

そう思っていた矢先、広場のほうでやんやと騒ぐ声がした。

「なにかしら」

「いってみよう」

二人で広場まで歩いてゆくと、巨大な円形の噴水の周りに人だかりが黒々とできているのが見えた。

「なにをやっているのかしら」

見ると、その円の中心では純白の狼と、灰色の長髪の女性と、数人

の男が対峙していた。

観衆と化した周囲の人達はこの成り行きを遠巻きに見守っている。

「セルビアとスコル！ どうしてこんなところに？」

セルビアは手に羊皮紙を持っており、どうやらついさっきそれを声に出して読み終わったところのようである。

その内容に関して抗議の声を上げたのがこの数人の男性のようだ。

「獣狩りだと？！ そんなこといわれても、俺達は獣で飯を食っているんだ。俺達の商売を潰す気か？」

「そうだ、商人連合が黙ってはいないぞ」

セルビアはそれらの声には全く動じずに言葉を投げた。

「その商人連合から罪人討伐の依頼が来たのです。私達は正当な権利をもって、闘技場、及び違法取引で入手された獣を一斉摘発します。なお、罪人がいた場合を想定して治安部への協力を要請します」

あくまで淡々と語るセルビア。

それに対し、数人の男性は語気を荒げる。

「確かにもうすぐユウキアの花粉が飛ぶ時期だ。だからってそこまですぐに獣狩りを行われちゃ、俺らの商売はあがったりだぜ！」

「そうだ、お得意様にも顔向けできねえよ！俺達の仕事をなんだ
と思っっているんだ！」

どうやら男たちは個人規模の獣商人であるようだった。

確かに疑わしいものを全て罰しているようでは商売自体が立ち行か
なくなるだろう。

そのことを十分理解しているのだろうが、しかしセルビアは冷静に
言葉を紡いだ。

「依頼は受理され、一斉摘発は決定事項です。反論あるものは反抗
者とみなし、重ねて摘発します」

「流石死の侍女セルビアだ」

人だかりの中から朗々と響く声が聞こえた。

その声に観衆が振り向くと、そこから一人の男性が進み出てきた。

金髪碧眼、傍らにはたおやかな乙女を連れている。

「あ、あれはウィリアム！」

見ると人垣からウィリアム・シルフィードとキスキル・リラが進み
出てくる場所だった。

意外ともいえる顔合わせに驚きつつ興奮する観衆。

セルビアとスコルはウィリアムの登場を無表情で眺めている。

「いいぞウィリアム様！ セルビアにもう一言言ってやってください！」

「俺達の商売を邪魔されて困っていたんです！」

にわかに活気付く獣商人たち。

だが、ウィリアムは笑みを浮かべると、獣商人に向き直った。

「私は君たちの加勢をしにこの場に出てきたのではないよ。名高い死の侍女セルビアに挨拶をしようと思って出てきたに過ぎないのだ」

「そんな……」

ウィリアムは獣商人達の落胆の色を見て取ると、くすりと笑った。

「だが、君達がそのように困っている姿を見過ぐす私でもない。君達に一週間の猶予を与えてもらえるよう、上に助言をしてあげよう。そのあいだに荷物をまとめて身を潜めなさい。ユウキアの被害が終わるころに、また戻ってきて商売を始めたらいいでしよう」

「ですがそれはあまりにも酷です……」

「おいお前、一週間ありゃ、家財道具をまとめてどこかへ身を潜めることができるぎりぎりの時間じゃねえか。ウィリアム様の温情に文句を言っちゃあいけないよ」

「そうだが、しかし」

「俺達罪人の濡れ衣を掛けられたくねえだろう？　じゃあ、ウィリアム様のいう通りにして、ほとぼりが冷めるまで待ってればいいんだよ。この際、多少の損害はしょうがねえ」

「しかたねえな。……おいセルビア様よ、人ってのはこうやって動かすもんなんだよ」

そういうと、数人の男たちはその場を去っていった。

残ったのはウィリアム、キスキル・リラ、セルビア、スコルである。

観衆は未だ輪を解かない。

先に口を開いたのはセルビアだった。

「なんのつもりです？」

「なにとは？」

「命令は遂行されなければなりません。邪魔するというのがのであれば、いくらウィリアム・シルフィードといえども容赦はしません」

氷のようなセルビアの言葉に、ウィリアムはまったく動じた素振りを見せずに答えた。

「先ほどの獣商人がいつていただろう。人を動かすのは命令だけでは無理だと。申請は私からしておく。ああ、決してあなたの顔を潰そうと思ったわけではないよ。私はその命令に対し異を唱えただけなのだから」

そういうと、ウィリアムとキスキル・リラはその場から去っていった。

そのあと、セルビアとスコルもその場から立ち去り、観衆もばらけていった。

私はいつの間にか詰めていた息をほうつと吐き出した。

「ついにセルビアら審問機関と治安部が動き出したのね。期日はユウキアの花粉が本格的に飛来してくる前まで。審問機関は疑わしい獣の一斉摘発を、治安部は裏で糸を引いている人物がいらないかというあぶり出しをするわけね。でも、こんな大々的にやって、相手が姿を隠したりしないかしら」

私のその言葉にギルバートが続ける。

「今回重要なのは、ユウキアの花粉の時期を避けること。審問機関と治安部で威嚇をすることが主だと思われる。だからこの手法は決して間違っているわけではない」

「でも、こんなの一方的過ぎるわ」

「今回は噂が流れた時期が時期だったからな。こういう手段をとらざるを得ないのだろう」

そういうとギルバートと私はきびすを返した。

獣狩り 5

気を取り直して、私とギルバートは市中を見回ることにした。

ギルバートは私の歩調に合わせて隣を歩いてくれたので、私は疲れることなく市中を見て回ることができた。

宝飾店の前を通ったとき、店頭で綺麗な細工が施された銀の髪飾りを見つけた。

なにかの花をあしらったそれは、手の込んだ装飾で目にも楽しい。

「綺麗、なにかしらこの花」

「お客さん、それは聖なる樹に咲く花ですよ」

店の店主が手ずから取って渡してくれた。

「この下の葉は、皇帝陛下の即位式のために、頭に被るものです。この上の花は普段はなかなか見ることができない花なのです。花粉は大量に飛んでくるのですけれどね」

「葉っぱは月桂樹みたいな形をしているのね。でも花は椿みたい」

「花言葉もありますよ。葉は『勝利・栄光・栄誉』、花は『誇り・完璧な魅力』です」

「まあ、素敵な花言葉なのね。思わず欲しくなっちゃうわ」

「お連れ様に頼んでみてはいかがでしょう」

私はギルバートを見た。

ギルバートは腰に手を当てたあと、にっこりと笑った。

「その聖なる樹の花の花言葉はまだある。『私は常に貴女を愛します』というものが」

「へえ、よく知っているのね」

「今日の記念に、この髪飾りを買うとしよう」

そういうと、ギルバートはその髪飾りを買い、その場で私の髪につけてくれた。

長い指が髪の毛を掬い取り、束ねる。

その指が気持ちよくて、往来なのに思わず目を閉じてしまいたくなる。

その誘惑に必死で戦っていると、髪留めを留め終えたのか、手が離れる。

名残惜しく思わず後ろを振り向くと、そこには満足げな顔をしたギルバートが立っていた。

「アンナ、よく似合っているぞ」

「あ、ありがとう」

あれ、私なんで今後ろなんか振り向いちゃったんだろう？

しかも頬なんかほんのり染めちゃって。

ちょっと周りの目を気にしなさすぎじゃない？

ああ戻ってこい本来の私！

なんだか、花言葉とか聞いちゃったもんだから、ちょっと乙女モードになっちゃったみたいだわ。

いかんいかん、私の中身は中年男性のようなものなのだから、このギャップが気持ち悪いでしょうが。

そうは思いつつも、そっと髪飾りに手を伸ばす。

銀色のそれは、綺麗に留まっているようだった。

「お客さん、よくお似合いですよ」

「ありがとうございます。いい買い物をしたわ」

宝飾店をあとにすると、私達は喫茶店へと向かった。

お茶を飲んでいると、そこにハティがやってきた。

「アンナ様、その髪留め、綺麗ですね」

「ありがとうハティ、これさっきギルバートに買ってもらったの」

私がそういうとハティは少しだけ目を丸くした。

「ギルバート様が、ですか」

ギルバートは我関せずといった体でお茶を飲んでいる。

気をとりなおしたハティがギルバートに情報を伝える。

「審問機関が動き出しました。農民の獣が速やかに徴収されているとのことですよ」

「そうか。獣狩りが始まったか」

「5日程度で、農民の獣で疑わしいものは全て捕らえられるでしょう。審問機関としては今回の『危険種の獣』の騒動は都合がよかったのかもしれませんが」

二人が話している中、私はあることが気になったので尋ねてみることにした。

「そういえば気になっていたのだけど、ギルバートやハティと、捕らえられる獣たちの違いってなんなの？ 同じ獣なのに、対応や認識が違うなあ、なんだか変だなあと思っていたのよ」

その質問にハティが答える。

「それは国に登録されているか否かということなのです。国に登録されている獣にはれっきとした市民権があります。しかし、登録されていない獣は基本的に奴隷階級として扱われ、多くはこういった

摘発で捕っています」

つまり国籍を登録した外国人と不法入国者の違いというわけであるらしい。

これは一見閉鎖的な政策にも見えるが、国にも容量があるため、全ての獣を受け入れていはいは立ち行かなくなってしまうからなのだと納得した。

「それにしても、奴隷階級として扱うことをほかの国は了承しているのかしら？」

ギルバートが手に持っていたカップを置き、答えてくれた。

「ほかの国からこのメリトウスに来る理由は大きく二つある。ひとつはこの国が裕福だから、ほかの国で暮らすよりも、あえてこの国での奴隷階級を選ぶ獣がいるということ。もうひとつはほかの国ではいられなくなり、この国に逃げ込んできたものがいるということだ。どちらとも望んで自分の国を離れ、この国にやってきたという時点で前の国との関係は絶たれているから、ほかの国との不和が生じるということはあまりない。それにこの国はやってきた獣たちを奴隷階級として使うことで成り立っている面もあるから、どちらの国にも損失が出ないような仕組みになっているのだ」

「じゃあ、この国にはそんな奴隷階級が集まる貧民街とかがあったりするの？」

「ああ。この西側の地域がそうだ。だがそこは治安部と審問機関が厳しく取り締まっているので、暴動が起きるといったことなはい」

この国の暗部を少しでも垣間見たような気がした私だった。

「それじゃあどうやったらこの国の市民になれるの？」

「この国で三年以上就労し、国に貢献することによって市民権を得られる。さらにいくつかの基準に合格すれば、永住権を取得できる仕組みになっている」

そういえば「水道局」の皆は永住権を取得していたんだったわよね
と思い出す私であった。

狂乱 1

審問機関が獣狩りに台頭して一週間、ついにユウキアの花粉が飛来してきた。

対する治安部の成果は芳しいものではなかったが、それでも得体の知れない何者かに対し牽制をする意味では役立っているといえよう。

――2の月から4の月と、8の月から10の月には上空で強い風が吹くため、メリトウスの一部地域に生息している聖なる樹の花粉がこの世界全体に行き渡るのだそうだ。

花粉は微量でも強い効果を及ぼすため、花粉の飛来が収まるまでは各国とも気が抜けないのである。

聖なる樹はこの国の根幹に関わる重要な植物なので、今まで伐採しようという意見が出たことはない。

他国も、それをすればメリトウスとの全面戦争は避けられないものとわかつているため、あえて手出しはしてこないのである。

私はユウキアの花粉が獣達にどのような作用を及ぼすのか、まだ身をもって体験したわけではなかったので、比較的吞気に構えていた。

そんなある日のことである。

「……アンナ様、俺、来ちゃった」

突然ルウがやってきたのだ。

「あら、ルウ、今日はどうしたの？ ガルデインは一緒じゃないの？」

ルウは戸口の前に立って顔を少し赤らめながら下を向いている。

「俺、もう一人前だし。ガルデインがいなくとも一人でやっていくよ」

私はルウを客間へと案内した。

ギルバートは上の階におり、この階にいるのは私とルウだけとなっている。

ルウにお茶を出すと、私は隣に座った。

「今日はどうしたの？ 熱でもあるのかしら、顔が赤いわよ」

ルウは私を見ると真摯な表情で何事かを呟いた。

「え？ なんていったの？」

「俺……、いてもたってもいられなくなっちゃったんだ。アンナ様に、会いたくて」

「そうなの。私もルウが会いに来てくれて嬉しいわ」

私はルウに微笑んだ。

するとルウがいよいよやをするように首を振った。

「違うんだ、アンナ様、これは違うんだよ。ああくそっ！　なんで俺なんかをこの部屋に入れちゃったんだよ！　今がどんな時期かわかっていなかったの？」

「どんな時期って、ユウキアの花粉が飛んでいる時期でしょう？　確か獣の欲望が強くなるとかなんとかで。でもそれって個人個人でどうにかなるものなんでしょう？」

「ならない時だって、あるんだよ」

そういうルウの顔は辛そうだ。

何かを必死で耐えているようにも見える。

そしてルウは私が息を飲む告白をした。

「どうしよう、俺、アンナ様に欲情しちゃった」

「……ええ?!　私に?!」

思わず仰天する私に対しルウは言葉を続ける。

「うん、こんな気持ち、今までなかったことない。切なくて、苦しくて、どうしようもなく、どうしても欲しくて。俺どうかしちゃったんだろうか」

ルウの手は両膝の上で、爪が食い込むくらい固く握られている。

「だから今日は、アンナ様にこれから3ヶ月間会わないって言いに来たんだ。なのにアンナ様がそんなに無防備だから、俺今どうしようもなくアンナ様が欲しいよ」

今まで子供だと思っていたルウの告白にあっけに取られていた私はそこで初めて我に返った。

「ル、ルウ、これは大変だわ！ 私達の友情のために、そうね、これから3ヶ月は会わないほうがいいわよね！ じゃあ、このまま気をつけて帰るのよ！ 今日はわざわざ足を運んでくれてありがとう！」

そういうと、私はルウを半ば追い出すような格好で外に出した。

「ごめん、アンナ様の優しさにつけ込むようなことをして。でも俺が自分を抑えきれなくなったら、迷わずギルバート様を呼んで？」

そういうとルウは別れ際、私の頬に素早くキスをした。

「俺頑張るから。俺が正気に戻ったら、また会いに来てもいいかな？」

「もちろんよ！ ルウは私にとって大切な仲間だもの」

「ありがとう、アンナ様のその言葉を胸に、俺、絶対耐えるから」

そういうとルウは走り去っていった。

「今ルウが来ていたな」

後ろを振り向くと、いつの間にかギルバートが立っていた。

「え、ああ、来ていたわ」

「聞こえていたぞ？　ルウもようやく大人になったというわけだな」

「びっくりしたわ。だってルウがあんなになるなんて思わなかったんだもの」

「アンナはこれから用心したほうがいい。ルウに限らず、自分の欲望を抑え切れなくなる獣は少なくはない。俺がいるとはいえ、アンナはもつと自身を把握したほうがいい」

「把握って、なにを？」

「アンナが持つ魅力についてだ」

そういわれるとなんだか気恥ずかしいが、これはまごうことなく貞操の危機なのだ。

恥らっている場合ではない。

「私はなにに気をつければいいの？」

「アンナは無防備だ。それにつけ込もうとする奴らが必ず出てくる。行動面では、まずは往来だな。この時期は、特に女性は必ず護衛を伴って市街を歩く。次は暗い道には決して入らないこと。一瞬にしてさらわれる可能性が高い。これらの件に関しては俺が傍について

いるから心配はいらないと思うが、アンナも十分に用心してくれ」

「そんな物騒な時期が3ヶ月も、しかも年に2回もあるなんて、国の発展が遅れるはずだわ」

「ただこの時期は種まきと豊穰の時期と重なっている。一種の祭りの時期でもあるのだ」

そういうとギルバートは見るものが蕩けてしまうような笑みを浮かべたのだ。

「アンナ、今日はサロンに行くのを止めて、家で、二人でゆっくりしよう」

狂乱 2 ■ (前書き)

※R15相当の描写が含まれています。

狂乱 2 ■

「ええ、わかったわ。今日はサロンには行かないのね」

私はお茶を用意しようときびすを返した。

するとその手をギルバートに掴まれる。

「なに？ ギルバート」

ギルバートは蕩けるような笑みを浮かべたまま囁いた。

「アンナが自分の魅力というものをわかっていないというのなら、俺がじっくり教えてやる。今日はそのための日にする」

「えっ、それってどういう……」

私の返答を待たず、ギルバートは私の手を握ったまま歩き始めた。

有無を言わず2階へ連れて行かれる。

ベッドの傍まで来ると、ギルバートは私の手を離した。

「どうしたの？ これって一体なんなの？」

わけがわからず聞く私に対し、ギルバートはベッドの上に腰を下ろしてこちらを見上げた。

私もベッドの上に腰をかける。

どうしちゃったのかしら。ギルバートは花粉の影響を受けないはずなんだけれど。

ぽかんとした表情でギルバートを見つめていたのだろう。

こちらを見ているギルバートの顔はなんだかおかしそうだ。

「どうしようかと思ったが、やはりアンナの魅力を一つ一つ丁寧に教えていったほうがよさそうだな。アンナが納得するまで」

そういうとギルバートは私の顎に手を当て、親指の腹で私の頬を撫でた。

「ではこれから、俺が感じているアンナの魅力を一つ一ついつていこう」

そういうとギルバートは私の頬をゆっくりと撫で始めた。

「まずアンナの魅力で特筆すべきところは、その匂いと雰囲気だ」

ギルバートは私の頬の感触を楽しむようにゆっくりと指を動かす。

「アンナの匂いは、俺達獣にとって惹かれるものがある。契約者というものがそうなのか、アンナだからそうなのかはわからない。だが、セルビアからはこのような匂いはしなかったから、やはりアンナは獣を惹き付ける何かを持っているのではないかと思う」

指の感触が気持ちいい。

ああ、この人はどうしてこんなに、私にやさしく触れるんだろう。

「そんなこと初めていわれたわ」

「かすかな匂いだから普段は気付かない。だが、それを感知できるものにとってはこの上なくかぐわしいものとなる。特にこの時期の獣は感覚が鋭敏になっているので、アンナの魅力に気付くものも多くなると思う」

次にギルバートは私の唇を指の腹でなぞるように触り始めた。

「それとアンナが持つ雰囲気は、周囲の空気を和らげる作用がある。それは獣でなくとも感じるものだ。現にフィリップもアンナの魅力としてあげている」

ギルバートはそのまま唇をいとおしむかのように撫で上げると手を離れた。

「私、そんなこと思ったこともなかったわ」

ギルバートに与えられたゆるゆるとした愛撫に少しだけ眠くなる私。

瞼を伏せようとする私を見て、ギルバートはいった。

「そうだ、それとこの無防備さだ。男に付け入ってくれといわんばかりの無防備さに、男は惹かれてしまうのだよ」

眠くなりそうな私は、その言葉にちよつと反応した。

「なんだかそれって私が何にも考えていないみたいじゃない？」

「そういう意味ではないが、まあ、当たらずとも遠からずだな」

「まあ、ひどいのね」

ふふと笑う私に対し、ギルバートはこちらに体を向けて腕を伸ばし、私の腰の後ろで両手を組んだ。

ギルバートの腕の中に閉じ込められた私は、先ほどの言葉を反芻する。

「ええと。私の魅力っていうのは、匂いと、雰囲気と、無防備さなのね。無防備なのと雰囲気は、努力で何とかできるとして、匂いのほうは、外に出るときは気をつけなくてはいけないわね。ほかに気をつけるところってある？」

「たくさんあるぞ」

「どんなこと？」

「アンナの髪は柔らかくて手触りがいい。顔を埋めるとアンナの甘い匂いがする」

そういうとギルバートは私の頭上に口付けを落とした。

その感触に思わず背筋に小波が走る。

「アンナの肌は滑らかで、柔らかくて、ずっと触っていたくなる」

ギルバートは、今度は私のおでこに口付けをする。

思わず目を閉じた私の面の瞼にも、ギルバートは口付けをした。

「ああ、アンナの魅力はまだあったぞ。恥らっていたかと思えば、急に大胆になるときの変化の様子だ。俺が体を重ねたとき、最初は恥らっているのにどんだん大胆になっていくその様が見ていて気持ちがいい。もっと貪りたくなってゆくのだ」

「そういうことをいわないで、なんだかとっても恥ずかしいから」
耳を染める私に対し、ギルバートはその耳朵をやわやわと食んだ。

「この感じやすい耳も好きだよ」

「ああ、あ」

「ふふ、もうよくなったの？」

その愛撫にかすれた声しか出せなくなっている私に構わず、ギルバートはさらに言葉を継いだ。

「あとはそう、この桜花色の唇も好きだ。『もっと』と乞われると、際限なく食んでしまいそうだ」

ギルバートは耳から頬、そして唇へとキスの雨を降らせた。

「はあ、んっ」

「その鼻に抜ける声も好きだ。ねえ、もっと泣いて」

「いや、だわ。だつ、て、こんな昼間、から」

「もっと溺れたいんだ」

溺れるのはどちらだろうか。

ギルバートは私を優しく押し倒すと、本格的に愛撫をしにかかった。

「やあ、あつ、どうしちゃったの？ ギルバート」

「今欲しい」

そういうと、ギルバートは私の胸に顔を埋めた。

「アンナ、愛している」

「私も、よ?。」

そうしてそのまま私とギルバートはベッドの上で体を重ねたのだった。

狂乱 3

朝起きると、そこは白銀の世界だった。

外は白い雪のようなユウキアの花粉が舞い、一面の雪景色であるかのようだ。

さらさらとした粉雪のような花粉が、曇った空からあとからあとから舞い降りてくる。

降り積もるそれは、どこにこんなに大量の花粉があったのかというくらいである。

「ああ、これでは外に出られないわね」

「そうだな」

私とギルバートはベッドの中で丸くなった。

ひらひらと舞う花粉を目で追いながら、私はギルバートに聞いた。

「こんな花粉、肺に入ったらどうするの？ 粉塵で肺炎になったりしないのかしら？」

「それは心配いらない。花粉は一週間程度で完全に土と混ざるだろう」

「そうなの。それじゃあ3ヶ月も効力なんてないんじゃないかしら。それに、雨が降れば花粉は流れるはずよね？」

「この花粉の効力は強い。水で流れた花粉は湖に溶け、俺達獣の体内に入る。降る量はさほどでもないのだが、3月の間、その威力を発揮するのだ」

花粉には麻薬のような成分が含まれているのかしら？ と私は思った。

ギルバートがいった通り、それから一週間で白銀の世界は元通りになった。

ところがである。

街の雰囲気さがらりと変わっていたのだ。

まず大きく変わったのが商店だ。

店の正面はまるで檻の中にあるような状態になっている。

どの商店も頑丈な柵を閉め、その中から商売を営んでいる。

街行く人々の雰囲気も変わった。

皆、特に女性は護衛を傍につけ、足早に市中を歩く姿が見かけられるようになった。

よく観察すると、護衛をつけているのは皆人間の女性のようなのである。

護衛をつけずに歩くのは獣の女性であるようだ。

その獣の女性たちも、周囲を警戒しながら歩いているのである。

ユウキアの花粉が飛ぶ季節はそんなに危なくなるのだろうかと思っ
たが、まだ実害は出ていないので、いまいち実感がわかない。

それに、護衛をつけてでも女性が出歩けるというのは、治安の面で
いえば、まだ安全であるといえるのではないかと思われたのである。

サロンに向くと、その雰囲気も変わっていた。

アーチ状の門の前には左右それぞれに門番がつけられていた。

格子状の門は閉められている。

私が貴族の証である、赤い石がはめ込まれた金の指輪を見せると、
門番達は心得たといった表情でその門を開けた。

中に入ると、貴族達はいつもどおりくつろいでいたが、あちこちで
「この季節がやってきましたわね」「早く終わらないかしら」とい
うような会話を交わしていた。

サロンへ行くと、フィリップが大勢の貴族達に囲まれて座っていた。

私達が近づくと、フィリップは自分の隣の席を指し示した。

「お久しぶりですね。貴族達の噂では『危険種の獣』についての情
報は芳しいものはありませんでした。それとこの一週間、アンナさ
んに会えなくて寂しかったですよ」

そういうとフィリップはほうと大きなため息をついた。

「僕は、アンナさんのことが心配で、あまり眠れていないんです。頑張ったご褒美にアンナさんの膝枕で少しだけ眠ってもいいですか？」

「ええ、いいわよ」

私が快く頷くと、今度はギルバートがはあと大きなため息をついた。

「アンナ、そういうところが無防備だといっているんだ。フィリップだからよかったものの、ほかの男にそういうことをしたら、勘違いされるのは必至だ」

「フィリップだから許しているのだけど、駄目かしら？」

そういうと、ギルバートはぐつと詰まった。

「それがアンナのしたいことなら俺は止めない。でもアンナ、俺が嫉妬するとは思わないのか？」

「ギルバートが嫉妬？　なんだか想像つかないわ」

「俺はそこまで心は広くないぞ？」

そういったときに、一週間前のギルバートの様子を思い出した。

あれ……？

もしかして、ギルバートはルウに焼いていたのかしら？

だから少し様子がおかしかったの？

まさかという思いとそうだったのねという思いが交錯する。

そんなことにも気付かないなんて、私って恋愛偏差値はかなり低いほうなのかしら。

というより、今までまともな恋愛をしてきていないからそのつけが回ってきたのね。

……そうなのだ。

実は、不器用な私は今までちゃんとした恋愛というものをしてきたことがなかったのだ。

確かに恋人というものはいたし、それなりに経験は積んできたつもりだ。

でも、一人の心に深く入り込むような恋愛は今までしてきたことがなかった。

別れるときも、取り乱したりなどせずに、冷静に行ってきた。

それが大人の対応だと思っていたし、結婚を意識する相手だって信幸さん以外はいなかった。

恋愛と結婚は別だと思っていたし、その恋愛に関してもどこかドライな、傍観者のような恋愛しかしてこなかったのは事実だ。

もし今ギルバートがほかの女性に膝枕をされたらと思うと、胸の奥がぎりつと絞られたような感覚が起こった。

もしギルバートが、私を愛しているといってくれなくなったら。

もしギルバートが私を捨てて別の女のところへいったとしたら。

私はそのとき耐えられるのだろうか。

多分表面上は大人の顔をして取り繕うに違いない。

でも、心の中では、もうこの人がいないと毎日が楽しくなくなると知っている。

それでも無防備なのはなぜなのだろうと自分で自分をいぶかしんだ。

狂乱 4

とりあえず、フィリップの要望に対し「うん」といつてしまったので、彼をクッションの敷いてある大理石の長椅子の上で横にして、自分の膝の上に彼の頭を乗せた。

ギルバートは隣で椅子の背もたれに寄りかかっていたが、「ちょっと外を歩いてくる」といってサロンを出てしまった。

入れ替わりにフィリップが私の顔を下から見上げてきた。

「あの、アンナさんの膝枕、柔らかいですね」

そういつて、フィリップは照れたように顔を背けた。

ちょ……いい逃げか！

しかも自分でいつて自分で恥らうな！

こっちもなんだか恥ずかしくなってくるじゃないの。

私はさっきギルバートの気持ちを慮って「やっちゃったな自分」と反省しているところなんだから。

ええそうですわ、それに私の脚には脂肪が一杯ついているんですよ。

はは、さぞかし気持ちよからう。

そんなことを考えている間に、本当に疲れていたのだろう、フィリップはすうすうと寝息を立てて眠ってしまった。

フィリップの少し赤みがかった金色の髪の毛がはらりと顔に落ちる。

よく見ると、目の下にうっすらくまが出来ているのがわかった。

私のことを本当に心配してくれたんだと思うと、むげに扱うことは憚られる。

私はフィリップの頭をゆっくりと撫でてあげた。

すると、顔の表情が穏やかになってきた。

……それにしても、フィリップの髪の手触りは気持ちいいな。

私はフィリップが眠っているのをいいことに、髪の毛をすいてみることにした。

赤みがかった金色の髪の毛が、私の指を通り抜けてはらはらと落ちる。

わー、流石上流貴族のお坊ちゃまねー、髪質が全然違うわ。

日差しに透ける髪の毛がとっても綺麗。

フィリップは顔立ちも整っているし、いくらでも素敵な人が見つかりそうなものなのになあ。

なんで私なんか好意を寄せてくれるのだろう。

私はフィリップの頭を撫でながら、ぼんやりと思考の海を漂った。

そういえば……。

フィリップは、本当は嫌だった宮殿に、私のために上がってきてくれたのだ。

一人で貴族の噂を収集することだって、骨が折れたに違いない。

「あ……」

それに気付いた途端、突如として自分の中に罪悪感が浮かび上がってきた。

なんで私、フィリップの好意を当然のこととして受け止めていたんだろう。

彼はいつだって真っ直ぐに私に向かい合ってくれた。

その気持ちに気付かなかったはずなのに、今まで心の中で茶化してしまっていた。

どうしよう、私はこれで二人の男性の心を踏みにじったということになるんだ。

以前フィリップから「アンナさんは酷ですね」といわれたことがあったけれど、それってこの鈍感ともいえる無防備さから来ていたんだわ。

最低だ、私。

でも、自己嫌悪したって、私がやってきたことは何一つ変わることはないのに。

どうしたら彼らに対し誠実に向き合うことが出来るのだろう。

そんなことを考えながら、私の思考は次第に白く塗りつぶされていった。

どれくらいそうしていただろう、気が付くと私は誰かの肩に寄りかかって眠っていた。

顔を上げて、横にいる人物を見る。

それはさっき出て行ったギルバートだった。

「ギルバート、ごめんね」

「どうした？」

寝起きということもあってか、上手く声が出ない。

でも、私は謝らなければいけないと思ったのだ。

「私、鈍感で、ギルバートの気持ちやフィリップの気持ちを足蹴にしてしまっていた。それを自分がやられたら、きつととても傷つくだろうということが想像できたのに。……こんなこと、今更謝って

も遅いかな？」

すると、ギルバートは困ったなあというように苦笑した。

「ああ、そうだ、アンナの魅力がもうひとつ見つかったぞ。アンナは誠実なんだ。俺やフィリップ、ルウやガルディンやハティ、皆に対して誠実なんだ。だから憎まれない。だから大切にしたいくなる」

そういうと、ギルバートは片手で私の頭を寄せた。

「もう少し眠るといい。俺も先ほど頭を冷やしてきたところだ。まったく、どうしようもないことをいって、アンナを困らせたから謝ろうと思ったのに、アンナに先に謝られてしまっっては立つ瀬がないな」

私はギルバートの顔を見上げてふるふると頭を振った。

「そんなことないわ！ 私こそギルバートに謝られては面目ないもの」

そういつてギルバートの肩に自分のおでこを押し付けた。

「だって、私、ギルバートの気持ちも、フィリップの気持ちも、全然考えていなかった。自分の行動が相手にどんな作用を及ぼすのかなんて、全然」

「アンナ、自分を責めないで。誰も悪くないのだから」

そういうとギルバートは私の頭を引き寄せた手に力をこめた。

私が眠りに落ちるのと、フィリップが目を開けるのは同時だった。

「起きていたのか」

「ええ」

フィリップは顔をくしゃつとゆがませた。

「……僕のほうこそずるいですよ。アンナさんにはギルバートがいるのに、このぬくもりから離れられない自分がいる。このぬくもりを手放したくない自分がいるんです」

ギルバートは、前を見つめながらゆっくりといった。

「俺はそんなに心が広いほうではないが、お前になればアンナを託すことが出来る。お前はアンナを裏切らないから」

私が寝ている間、そんな会話が交わされていたということに、私は終ぞ気付くことはなかった。

狂乱 5

目を開ける。

部屋には西日が差し込んでいた。

大きくうーんと伸びをする。

「ああ、よく寝た」

欠伸を手で隠しながら、辺りを窺う。

私の膝の上にはもうフィリップはおらず、私の隣でいつの間にか持ってきていた巻物を読んでいた。

「フィリップ、よく眠れた？」

巻物を読んでいたフィリップは私のほうを向くと微笑んだ。

「ええ、ぐっすり眠らせてもらいましたよ。アンナさんも、ギルバートの肩を枕にしてよく眠っていましたね」

そういわれ、隣を見ると、ギルバートが腕組みをしながら目を閉じていた。

腕にそっと触れる。

するとギルバートが薄目を開けた。

「アンナ、起きたのか」

「ええ。あの、時間がちょうどよい頃合だからそろそろ帰ろうかな
と思って」

周囲を見渡すと、貴族達の数がごく僅かになっている。

「そうだな、もう退出する時間だな」

私達はサロンをあとにし、フィリップと別れたのだった。

夕焼けの落ちる通りを見るときもなしに眺める。

……そういえば、黄昏時になると、契約者の獣が消失するんだっ
たんだっけ。

そんなことを考えながら、通りをギルバートと二人歩いてゆく。

すると、通りの向こうから、女の人の子かな悲鳴が聞こえた。

ギルバートと目配せをすると、私たちは走って現場に駆けつけた。

すると、そこで見たものは、ある種奇妙な光景だった。

道端に座り込む女性。

3人の男性。

一頭の得体の知れない異形のもの。

そして、異形のものにくわえられている一人の男性。

「な……！」

異形のは、私達の姿を認めると、そのままものすごい跳躍で家々を飛び越えてどこかへ去っていった。

あとに残ったのは、3人の男性と、道端に座り込む1人の女性である。

「何が起こったんだ?!」

ギルバートの問いに、傍にいた男性が答える。

「あ、あいつが、いきなりやってきて、この女の護衛をくわえて」

少し気を取り直した別の男がこの話を補強する。

「俺達は、この女とちょっと楽しもうと思っていたんだ。それが、突然音もなく空からあの異形のものがやってきて、この女の護衛をくわえたんだ」

「あああ、私の獣が……」

女性はどうやら恐慌状態に陥っているようだ。

歯をガチガチと鳴らしながら、異形のものが去ったほうを見つめている。

一瞬ではあったが、私達は異形のものの姿を捉えていた。

体長は2メートル強、頭から背中にかけて生えているヤマアラシのような毛、頑丈な顎、ぞろりと生えた牙、カンガルーのような巨大な脚、そして、爬虫類のような縦に長く伸びた瞳孔。

男達はどうかやらユウキアの花粉の影響で、この女性を使って自分たちの欲望を満たそうとしたらしい。

だが今、命の危機に晒されて、防衛本能が欲望に打ち勝ったようだ。

正気を取り戻した男達は、その場から走り去ってしてしまった。

私達は男達を無理に追いかけて、恐慌状態に陥っている女性を助けるように近づいた。

すると女性は「こないでえ!」と金切り声をあげたかと思うと、その場に倒れ伏してしまった。

「困ったわ、この女性をこのままここにおいて置くわけにもいかなしいし……」

そのとき、私達のうしろから声がかかった。

「その女性なら俺が治安部まで運んでおきますよ」

聞き覚えのあるその声に私たちが振り向くと、そこには見知った人物が立っていた。

「まあ! ティリウスじゃないの!」

「こんなところで会うとは」

私たちが驚いていると、ティリウスはふっと笑った。

「お久しぶりですね。お二人のことは風の噂で聞いていましたよ。俺は今、お二人がさっき出会った異形のことを追っているところなんです。あれがどこから来たものか、突き止めようとしているんです」

「そうだったの」

「でも、先ほど対象物の気配はつかめたので、あとはそれを泳がせて捕まえるだけです」

ティリウスは倒れている女性の元に近づいた。

「ティリウス、じゃあ、さっきの獣を追っているところ悪いのだけど、この女性のこと、お願いできるかしら」

「ええ、まかせて下さい」

ティリウスはそういうと、気を失った女性を軽々と抱えて、治安部がある方角へと去っていった。

「そういえば、私達は異形のものを目撃者だから、治安部に行かなくてもいいのかしら？」

「なに、ティリウスが動いているのならば心配あるまい」

「そうね、彼ならば大丈夫よね」

そのまま家に帰る私達は、自分たちの背後で一對の目がじっと動きを追っていることには気付かなかった。

家に帰り、夕食を済ませ、身支度をした私は、1階の客間にいた。

フィリップが選んでくれた巻物の内容を復習しようと思ったのだ。

巻物を繰り、ギルバートに教えてもらった事柄の復習をする。

巻物を読んでいくうちに、ゆるゆると睡魔が訪れてきた。

瞼が落ちる、まどろみの感覚を楽しみながら、私は椅子の上で舟を漕いでいた。

すると、背後でしゅうという息遣いが聞こえた。

「うん？ ギルバート？」

私の呟きにその気配は答えない。

何者かの手が伸び、後ろから私の頬をゆっくりと触るのを感じた。

その感触に私は覚えがなかった。

思わず目を開けて、頭を動かさないようにその手をじっと見る。

ギルバートだと思ったその手には、鋭い鍵爪がついていた。

狂乱 6

やっ……！ なんなの？！

声を出そうと思ったが、今自分の真後ろにいる何者かを刺激してはいけないと思い、ぎゅっと目をつぶって堪えた。

背後にいる何者かは、私の頬の感触を楽しむように、何度も撫でさすっている。

嫌、怖い……気持ち悪い！

そのうち、背後の手は私の頬を触るのを止め、手をゆっくりと引っ込めた。

ほっとしたのもつかの間、その何者かは、今度は私の髪を両手で持ち上げ始めた。

しゅうという音が何度も何度も聞こえる。

これって、私の匂いを嗅いでいるの？

そう思った瞬間、全身に鳥肌が立った。

助けて！ ギルバート！！

「アンナ？」

背後の気配はすつと息を詰めたようだ。

ギルバートの足音とともに、背後の気配は私の髪から手を放すと音もなく消えていった。

「こんなところにいたのか。上で寝ないと風邪を引くぞ？」

ギルバートの声に、こんなにも安堵したことはない。

ギルバートの姿を見た途端、堪えていたものが一気に崩壊したのか、私の目からは大粒の涙がいくつもいくつも溢れ出てきた。

「どうした……?!」

ギルバートが駆け寄ってくる。

私は彼の温かい腕の中にしっかりと抱きとめられた。

「怖かった……！ 今ね、何か、得体の知れないものが、私の頬と髪を触ったの」

「なんだと？ ……本当だ、アンナから僅かではあるが別の匂いがある」

私はそれだけというと、ギルバートの腕の中でぼろぼろと泣き始めた。

泣き疲れたあと、私は気を失ってしまったようだった。

朝起きると、私はギルバートの腕の中で眠っていた。

一晩中抱きしめていてくれたのかと思うと、ほっとする。

……ああ、顔腫れちゃったな。

瞼が重い。

顔を洗ってこようとギルバートの腕をそっとはずす。

起こさないように、足音を忍ばせて、洗面所へと向かった。

よく磨かれた鏡の前で自分の顔を再確認する。

うわあ、やっぱり腫れちゃっている。

こういう日って憂鬱なのよね……。

そう思いながら、ばしゃばしゃと顔を洗う。

タオルを取ろうと手を伸ばすと、その手が何かを触った。

思わず顔を上げてそれを確認する。

それは、ヤマアラシの毛のようなものだった。

無造作にタオルの上に置かれたそれは、私に昨日の情景を思い起こさせた。

「ひっ……!」

思わす手を引っ込める。

私は乱暴に手を洗い、新しいタオルを使って顔を拭いた。

ヤマアラシのような毛と、それが乗っていたタオルは、まとめてくるんで、2階の部屋に持っていった。

「ギルバート、起きて。ちょっとこれ見てもらえないかしら?」

私はギルバートを起こすと、タオルにくるんだ何者かの毛を見せた。

ギルバートはむくりと起き上がると、その物体を手に取りしげしげと眺めた。

「これは、昨日アンナに触れた奴の毛だな? これをどこで見つけた?」

「洗面所で見つけたの。このタオルの上にあったからくるんで持ってきたの」

私は怖気を振るった。

「あの異形のものはいつからこの家にいたのかしら? 全然気付かなかったわ」

「……俺も気配をたどることは出来なかった」

そういうと、ギルバートはおもむろに上着を脱ぎ始めた。

「今日から俺は獣の姿でアンナに動向する。なにかあったとき、この姿のほうが都合がいいからな」

ギルバートは獣の姿に変化すると、体を家のさまざまな支柱にこすりつけ始めた。

「この家全体にマーキングをしておく。それが僅かでもこの異形のものに対する牽制になればの話だが」

こうして私達は今日もサロンへと向かったのだ。

サロンにいるフィリップにこの話をする、フィリップはぞつとしたような顔をした。

「そんなことが……。アンナさん、もしよければ、僕の別荘へ来ませんか？　そこでならアンナさんの家より警備も厳重ですし、僕もアンナさんを守ることが出来ます」

「でも、悪いわ。こんなことでフィリップの手を煩わせるなんて」

「いいんです。今日は先に帰りましょう。ここにいる限りは皇帝陛下の呪で守られています、帰り道に、またその異形のものに出会わないとも限りません」

フィリップはそういつて、私達を自分の馬車に乗せた。

こんなことがなければ、フィリップの家に行くのは大賛成だったのだが、私は陰鬱な気持ちで馬車に揺られていた。

「ごめんなさい、こんなことに巻き込んでしまつて」

「いいんです、これは、僕がやりたいからやっているんです」

「そうだぞアンナ、ここは遠慮せずにフィリップの厚意を受けておくほうがいい」

やがて、馬車は立派な豪邸へとたどり着いた。

「着きました。ここが僕の別荘です」

それはギリシャ風の建物を思わせた。

門の柱には大理石のレリーフが所狭しと彫られており、頑丈な鉄製の柵がはめ込まれている前には、二人の門番が立っている。

その門をくぐると、目の前に現れたのは巨大な庭園だった。

庭園の中央にはドーナツ状の池があり、その池の中央には色とりどりの花が咲き乱れる小島があった。

小島には四方から渡れるようにと道が作られている。

池の周りに沿った中庭にあるアーチ状の列柱には、等間隔に大理石

で彫られた彫像が並んでいる。

「すごいわ、ここはまるでサロンの庭園みたい。これがフィリップの別荘なの？」

流石上流貴族だわと思っている私は、その別荘の中に入ってもっと驚いた。

まず目に飛び込んできたのが、よく磨かれた大理石の床と、その床や壁に、所々にはめ込まれている鮮やかなモザイク画だった。

フィリップの足元にはユリの様な花のモザイク画が埋め込まれていた。

屋敷の中にも、沢山の彫像や壺、陶器などが品よく並べられている。

「なんだか圧倒されちゃうわ」

「どうぞ、ほとぼりが冷めるまでこの別荘でくつろいで下さい」

そういうと、フィリップは私達を部屋まで案内したのだった。

部屋には必要最低限の家具しかなかった。

だがそれはこの部屋の景観と機能性を損なわないためであり、決して貧相に見えることはなかった。

部屋の壁には美しい女性や花々のモザイク画がはめ込まれており、テーブル上の花瓶にはバラの様な花が飾られ、馥郁とした香りが漂っている。

ソファには手触りのよさそうな布がかけられ、ベッドのマットレスは程よいクッションが効いているのが窺えた。

「なんて素敵な部屋なの」

私は感嘆の面持ちでこの部屋を見渡した。

「気に入って頂けて嬉しいです。この部屋も、別荘全体も、好きに使ってください」

「フィリップはどうするの？」

「僕は別の部屋で休みます。なにかありましたら、召使に声をかけてください。アンナさんの望むように手配させます」

そういうとフィリップは手を2回叩いた。

するとどこからともなく召使が現れた。

初老の彼は寡黙で勤勉そうな顔をしている。

「わからないことがあったらこのスラに聞いてください」

スラと呼ばれた召使は私達に向かって丁寧に頭を下げた。

うわあ、フィリップって本当に上流貴族のお坊ちゃまだったのね。

人を使い慣れているし、ここでのフィリップはものすごく堂々として見えるわ。

あ、私がただ単にこの別荘に圧倒されてしまっているからそう見えるだけなのかもしれないけれど。

でもこんなところが別荘だなんて、本宅はどれだけ大きいのかしら。

私は自分が狙われているかもしれないことを忘れてこの別荘に見入っていた。

「ギルバート、さっきの庭園に行ってみない？」

「アンナはここが気に入ったのだな」

「ええ、こんな家、今まで見たことないわ」

私はギルバートを連れて中庭の庭園へと赴いた。

池の周りの列柱に等間隔に置かれた精緻な彫像は、皆池のほうを向

いている。

彫像の背後まで手ばかりなく彫刻されているその様を見る。

「まるで美術館にでも行ったみたいだわ」

私はそのまま池の中央にある花が咲き乱れる小島へと渡った。

一見花で埋め尽くされているように見えたそこには、細い小道と、小さな椅子が置かれていた。

その椅子に座った私は、そこから屋敷全体の景色を眺める。

「やっぱり上流貴族は持っているものが違うのねー」

「そうだな、我々とは次元の違う豊かさだな」

「アンナさん、お茶にしましょう」

フィリップが対岸から声をかける。

「ええ、今行くわ」

私達はその小島から離れたのだった。

それからの私は、フィリップの別荘と、サロンを行き来する毎日となった。

別荘ではまるで上質なホテルにでも泊まっているようなもてなしを

受け、私は少しばかり恐縮しつつ日々を過ごしていた。

「こんなに贅沢してもいいのかしら？ この贅沢に慣れてしまったらと思うとちょっと怖いわ」

「心配せずとも、アンナは変わらないと思うぞ」

そのような台詞を交わしながら、今日も馬車に揺られて宮殿からの帰る途中のことであった。

順調に走っていた馬車がいきなりガクンと止まった。

私達はどうしたのかといぶかしんだ。

すると御者が「危ないのでお出にならないように」と声をかけた。

窓から見てみると、ちょうど道の真ん中で人だかりが出来ているのが見えた。

「なにかしら？」

「血の匂いがする。どうやらユウキアの花粉で狂った獣が戦闘を行っていたらしい」

「戦闘?! 喧嘩じゃなくて？」

「ああ。この時期は街の区画ごとに対立している仲間たちが寄り集まって戦闘行為を行うのだ」

ギルバートが訳知り顔でいう。

「それって治安部や審問機関は動かないの？」

私のその質問にはフィリップが答える。

「毎年のことで、治安部も手を焼いているんです。ただ、獣たちを抑圧するとその弊害がどこに出るとも限らないということで、事実上黙認している状態です。街の市民には、季節ごとの災害だと思ってもらっている状態です。ですが、彼らが人間に危害を加えた場合はこの限りではありません」

「そうだったんだ」

そんな呑気に構えていた私は、戦闘行為がどのようなものであるかを見て、啞然とした。

円の中央で戦っているのは、4対4の獣達だった。

獣に変化した彼らは、それぞれ相手に飛びつき、喉元に牙をつきたてているものもあれば、体中からだらだらと血を流しているもの、片方の前脚を欠損したものなどがある。

「ちょっと！　これって完全に殺し合いじゃない！　どうして周りの人達は助けないの？」

「周囲の奴らは皆彼らの仲間たちだ。どちらか一方が死ぬか、戦闘不能になるまでそれは続けられる」

私はぞっとした。

「なぜそこまでしないといけないの」

「あの真ん中で戦っている奴らは、贅であると同時に戦いで死ぬ栄誉を与えられた戦士でもあるからだ。全員が戦うのではなく、あえて人数を絞って戦うところに、この戦闘の意味があるのだ」

地面にはすでにおびただしい量の血が流れている。

獣の戦闘行為を満たすために贅になる獣。

「ここは闘技場でもないのに……」

しばらくすると、戦闘行為は終わったようだ。

立っているものはほとんどいなくなった。

そのあとの光景は私が今まで見た中で一番恐ろしいものとなった。

戦いで敗れた獣たちは、息絶えているもの、瀕死の状態のものがほとんどだ。

そのなかで、比較的軽傷のものがいた。

その獣はほかの獣たちの間をゆっくりと行き来した。

すると、ある一匹の獣の前で止まる。

その獣は虫の息だったが、眼光だけは鋭く、軽傷の獣をにらみつけている。

と、軽傷の獣はその獣の息の根を止めた。

そのあと、軽傷の獣は死んだ獣を貪り始めたのだ。

「なっ！ なにを、しているの？」

私は思わず口元に手を当てて後ろへ下がった。

「あれが『融合』です、アンナさん」

フィリップがしまったというような顔をしていった。

「獣達はああやって強くなるのです」

そういうと、フィリップは馬車のカーテンを引いた。

「アンナさんには少し刺激が強すぎたようですね。僕は毎年のことなので、この光景をアンナさんに見せるのがどのようなことか、考えが至りませんでした。少し感覚が麻痺してしまっているようにでした」

フィリップは後悔したように謝った。

「いいのよ、フィリップが謝ることじゃないわ」

やっとそれだけ口に出して、私はギルバートの毛皮にしがみついた。

狂乱 8

だめだ、やっぱり私はまだこの世界の常識に馴染めそうもない。

屋敷に帰った私は、夕飯を辞退し、早めに風呂を借り、ベッドの中にもぐり込んでいた。

今日見た光景を思い出さないようにすればするほど、血の臭いや、喧騒がよみがえってくる。

あんな惨たらしい戦いが、一般的なものだとしたら、私の神経は早晩磨り減ってしまうだろうと思った。

日本ではあんな光景は縁遠いものだった。

殺人事件もテレビの中の出来事だったし、動物が轢かれることだって東京都の郊外に住んでいればめったにお目にかかることはなかった。

それなのに、あんな光景がこの世界では3月ごとに行われているのだ。

しかも、全員で戦いたいところを、人数を絞って戦っているのこのためのだから、その規制がなくなったらどんな惨状になるのかということがたやすく想像できた。

それに、獣が獣を食べるということが、どうしても受け入れられない。

そうすることによって自分の力が強くなるということや、それがこの世界での常識なのだということは頭では理解していたつもりだった。

だが、実際に目にするのではまるっきり訳が違った。

ユウキアの花粉が飛ぶということが、こんなに恐ろしい季節になるのだということなんて思わなかった。

それに『融合』という言葉には、このような背景があったのか。

ということはギルバートも以前ほかの獣を喰ったことがあるのだと思ひ、私は体を震わせたのだった。

「アンナ、起きているか？」

ギルバートが心配してやってきてくれた。

大理石の床に爪が当たってカツカツと音がする。

尻尾を控えめに振りながら、ギルバートはベッドの横までやってきた。

それを薄目を開けてみながら、私はなぜ今ギルバートが人型ではないのかということ思った。

本当は今すぐギルバートの腕の中に飛び込みたい。

その体で温めてもらいたい。

でも、あの異形のものの脅威が去ったわけではないので、迂闊なことはない。

私の中のジレンマを知ってか知らずか、ギルバートはベッドの傍まで来るとそこにうずくまった。

「アンナには俺がついている。今日のようなことにはもう巻き込まないと約束する」

ギルバートはそんな私の目を見て力強く約束した。

私は手を伸ばしてギルバートの背中の毛を撫でた。

手触りのよいその毛は、幾ばくかの不安を和らげてくれた。

「いいのよ、そんなに無理しなくて。これがこの世界の常識だというのなら、慣れなくちゃいけないのは私のほうなんだから。ただ、今はちよつとショックが大きかったので休んでいるだけ。だから大丈夫よ」

私はギルバートを安心させるようにいった。

ギルバートはきゅうんと鳴くと、頭を前足の上に置いた。

その晩、私はなかなか寝付けなかった。

何度か寝返りを打って、気を紛らわそうとする。

それでも上手いかず、水を飲もうと起き上がった。

部屋履きに足を通し、テーブルの上に置いてあった水差しから水を汲んでゆっくりと飲み干す。

人心地ついたところで、私は部屋から外の景色を眺めた。

この部屋からは庭園が見渡せる。

月明かりに照らされ、庭園は青白く光り輝いていた。

どれくらいそうしていただろう。

肌寒くなったので、窓から離れて寝ようと背を向けた。

そのとき、窓から差し込む光が一瞬暗くなった。

「え?」

いぶかしんだ瞬間、私は何者かの腕の中にいた。

声は出さなかった、というより出せなかった。

私の背後から私を抱きしめるその腕は、以前私に触れたものと同じものだったからだ。

全身が恐怖で総毛立つ。

「あ、あ、ギル、バート」

喉から搾り出すように、声を発する。

すると、ベッドの反対側からギルバートがむくりと起き上がる気配を感じた。

「助、けて」

私がそういった瞬間、体が窓の外に引っ張られるのと、ギルバートが飛びかかってくるのが同時に行われた。

うしろの何者かは私を抱いたまま窓の外へ着地しようとする。

それを追ってギルバートも窓から飛び出してきてくれた。

唸るギルバート。

月明かりの下、ギルバートとその何者かは対峙した。

私は背後の何者かに抱きかかえられ、宙吊りになっている状態だ。

耳元でしゅうしゅうという吐息の音がする。

「嫌っ！ 離して！」

私はようやくそこで大声をあげることが出来た。

身をよじろうとばたばたする。

しかし頑丈なその腕はびくともしない。

それどころか、ますます拘束がきつくなる。

「痛いわ、離して！」

私のその願いは聞き届けられなかった。

しばらくじたばたしたあと、私は大人しく後ろの何者かにされるがままになった。

そのとき、屋敷の明かりが付き始めた。

何事かと外に出てきたのはフィリップだった。

「アンナさん！」

フィリップが叫ぶと、ギルバートと対峙していたその何者かは、私を横抱きに抱えなおして一気に跳躍した。

屋敷の塀を超え、地面に着地すると、ものすごいスピードで走り出す。

背後でギルバートの唸り声も聞こえてきた。

どうやら追ってきてくれるらしい。

そうしてそのまま、私達は夜の街を疾走したのだった。

狂乱 9

しんと静まる闇の中、私達の追いかけては続く。

風当たりがあまりにもきつくて、私はぎゅっと目を閉じた。

走るたびに、体が触れている部分から異形のもの、筋肉の躍動が感じられる。

そのとき、ああ、異形のものといっても、このものはちゃんと生きているんだと思い、なんだかおかしくなった。

異形のもの、腕の中でこんなことを考えている私は、ショックでどうかしてしまったのだろうか。

もしかしたら、このものに食べられてしまうかも知れないのに。

どれくらい走っただろう、気が付くと、だだっ広い野原へ出ていた。

その野原には、誰か人が立っていた。

異形のものはその人の前で足を止めると、私を地面にそっと置いた。

立って逃げようとしたが、膝と腰が笑って立てない。

私は月明かりの下でその人の顔を眺めた。

その人は男で、薄笑いを浮かべていたが、月明かりに照らされた目

は笑っていなかった。

「ご苦労だった、『危険種の獣』よ。銀の獣が手に入れば、この女はお前の好きにしていいい」

それを聞いた異形のものは、私をまた横抱きに抱きかかえると男の後ろに控えた。

私はそのとき初めてその『危険種の獣』の顔を仰ぎ見た。

青白く光るその獣の瞳孔は縦に長く、爬虫類を思わせた。

恐竜のような顔をしており、ヤマアラシのような毛が、今は少し逆立っている。

ああ、私死ぬんだな、と、そう思ったときだった。

「アンナを返せ！」

追いついてきたギルバートが叫んだ。

唸り、体を低くし、いつでも飛びかかれる体勢になっている。

「おっと、銀の獣よ、それ以上近づくと大事な契約者が『危険種の獣』の餌食になるぞ」

薄笑いを浮かべたその人がギルバートを牽制する。

ギルバートはきらきらとした毛皮を逆立たせ、びりびりと殺気を送っている。

眉間と鼻の頭にしわを寄せ、牙を全部むき出しにして立っている。
だがしかし跳びかかっては来ない。

「ギルバート！」

私は『危険種の獣』の腕の中から思わず叫んだ。

すると、獣の拘束がまたもきつくなった。

「なぜ？ どうしてなの？ なぜ私を捕まえるの?!」

私はその獣に問うた。

答えは期待していなかったが、返ってきたのは意外な言葉だった。

「欲シカッタカラ」

「え？」

私は思わずその獣の顔を見た。

片言で喋る獣はなおも言葉を継いだ。

「イイ匂イ、美味シソウ、柔ラカイ、食べテミタイ、欲シイ」

「私が、美味しそう？」

「デモ、食べタライナクナル。ダカラ食べナイ」

会話が噛み合っていないようでいて、獣がいたいことは伝わってきた。

「どうやら、この『危険種の獣』は、最初私を食べようと近づいたらしい。」

ところが、気が変わったのか、私を食べないという。

命がつながってありがたいと思ったのもつかの間、私は未だ威嚇を続けているギルバートを見た。

「それじゃあギルバートはどうなるの？」

「アノ獣、ライモンドが使う」

「ライモンドってこの男の人のこと？」

「ソウ」

「使っていてどういうこと？」

「闘技場ニ」

「『危険種の獣』よ、そのくらいにしておけ。この女を可愛がる時間はあとでたっぷりとくれてやろう。今は銀の獣を捕獲するのが先だ」

ライモンドと呼ばれた男は、獣に向かってそういうと、今度はギルバートに向き直った。

「ああ、聞いていたか銀の獣よ。この女が大事ならば、大人しく俺の元に下るのだ。そうだ、取引をしようじゃないか。もしお前が俺の元に下り、闘技場で全ての獣を討ち果たすと約束するのならば、この女の命は助けてやろう。だがもし断れば、この女の息の根をこの場で止める」

それを聞いた瞬間、ギルバートと、私を抱いていた獣が同時に唸った。

「オレハコノ女食ベナイ」

「おや、『危険種の獣』よ、俺の手駒はお前だけではないのだぞ」

それを合図としたのか、周囲からどこからともなく異形のものたちが現れてきた。

皆それぞれ姿は違えども、一様にヤマアラシのような毛と、鋭い眼光、ばねのある脚を持っていた。

ライモンドはその獣たちを見て満足そうにいう。

「ここまで育てるのには苦勞したぞ。大陸から取り寄せた無害な獣を最初は鎖で繋ぎ、闘技場の獣を食べさせた。そのうち、契約者とその獣の味を覚えさせ、さらには農民の獣を襲わせた。この短期間で闘技場に出してもおかしくないほどの力をつけさせたのだ。人を喰わせるのは少々手間取ったが、そのおかげでこれらはすべて『妖獣』となった。今では人など、躊躇なく殺せるぞ。最近では自分から食糧確保に農民の獣や契約者の獣を襲いに行っているのだ」

そういうライモンドの表情はどこか得意げだ。

「なぜそんなことを？」

「すべては銀の獣を手中に収めるためだ」

当たり前でもというように、ライモンドは胸を張った。

ライモンドはギルバートに話しかけた。

「女の命は保障しよう。この女から譲り受けたお前の権利を使って、闘技場で沢山稼いでもらうぞ」

「私はまだ返事をしていないわ！ それに誰があんたのような人にギルバートを渡すもんですか！！」

「お前に拒否権はないのだぞ？ 生きていたかったら、大人しく俺の言うとおりにしろ！」

どすのきいた声で私を黙らせると、ライモンドは悦に入ったように話を続けた。

「俺はこれでも商人連合のなかでは発言権があるのでね、俺に疑いがかからないようにいろいろと手を回すことができるのだよ。まさか、罪人討伐を依頼した張本人がその罪人だとは審問機関も治安部も気付くまい。そうだ、お前が闘技場で戦っているところをこの女にも見せてやることにした。そのかわり、お前が負ければこの女は死ぬ。どうだ、こちらのほうが楽しいだろう？」

そういうライモンドの目はだんだんと狂気に光ってきた。

狂ってるわ、この人。

ユウキアの花粉は人に作用しないっていつていたけれど、これじゃあどちらが狂った獣かわからないわ。

「ほう、そういうことだったんですか」

場の空気を支配していたライモンドは、その台詞に一瞬興を削がれたようだった。

「今の声は誰だ?!」

暗闇から現れたのはティリウスだった。

「ライモンド、あんたが今回の事件の黒幕だったって訳だな。その獣の気配を追ってきたらこんなところまでたどり着いたんだが、さあて、どうしたものかねえ」

ティリウスが指し示したのはギルバートを囲んでいる獣の一体だった。

その獣はどうやら以前、黄昏時の道で遭遇した獣であるようだった。

ライモンドは一瞬言葉に詰まると、語気を荒げてこういった。

「証拠がなければ何もなかったのと同じこと。そいつは殺せ! 銀の獣は捕獲しろ。多少の傷は構わん!」

それを聞いた周囲の獣はざっと散ると戦闘体勢を取ったのである。

鋭い咆哮があちこちから聞こえる。

しゅうしゅうという呼気の中で、ギルバートとティリウスは互いに間合いを取った。

「ティリウス、獣にならなくてもいいのか？」

「俺はこいつらの習性を利用させてもらいますのでね、こちらの姿のほうが、都合がいいんです。ただ、数がちよっと多いので、ギルバート様にも手伝ってもらうことになりますが」

「どういうことだ？」

「まあ、見てください」

そういうと、ティリウスは無造作に前へ進み出た。

そのうちの一头と対峙する。

ティリウスは腰から短剣を取り出し、右手に構えた。

今度はもう一方の手で、懷から小さな筒のような笛を取り出すと、それを口に当てて吹いた。

それは全く音がしないように見えた。

しかし、ティリウスが笛を吹いた瞬間、獣たちはのた打ち回り始め

ただ。

私を抱いていた獣も私を取り落として自分の耳をふさいでいる。

私はその隙にはいつくばって少しでも獣から離れようとした。

ティリウスは一番近くでのた打ち回っていた獣を短剣で突き刺す。

だが、その外皮は硬いようで、なかなか剣が刺さらない。

しかもティリウスが笛を吹くのを止めた一瞬の隙を突いて、その獣は起き上がりうしろに跳躍した。

「ああ、やっぱりこの短剣じゃだめでしたか。では戦いはギルバート様にお任せしますよ」

そういうとティリウスは後方に下がった。

ギルバートは唸り声を上げて近くの一頭へ飛びかかった。

すぐさまティリウスが笛を吹くと、獣たちがまたのた打ち回り始めた。

ギルバートは獣の喉下に喰らい付くと、強靱な顎でそれを噛み碎いた。

ばきゅっという音がして、くわえられている獣が痙攣したかと思うと動かなくなった。

「ひっ……!!」

自分が息を呑んだということを、ぼんやりと知覚する。

その声に我に返ったライモンドが、私のほうにずかずかと歩いてくると、乱暴に引き立たせた。

「銀の獣おお！ この女がどうなってもいいのかあ!!」

「痛っ！ やめてえっ！」

男に腕を後ろ手にぎりぎり引き絞られ、悲鳴を上げる。

う、腕が折れる！ 肩が外れる！

痛みによる生理的な涙がぼろぼろと溢れる。

今までこんな痛み味わったことがなかった。

遠くでティリウスが口から笛を放したのが見えた。

獣たちはまだ痙攣している。

それは一瞬の出来事だった。

ギルバートがこちらに向かってくると、背後から何者かが飛びかかってくるのは同時だった。

ばしゃりと背中に温かいものがかかる。

頬を伝ってぼたぼたと地面に落ちたそれは暗い色をしていた。

「あ、……？」

「アンナ、見るな！」

掴んでいた腕ごと何者かに引き落とされる。

私はライモンドと一緒に地面へ倒れた。

「痛ったあ……一体何が」

顔を上げて、私は見てはいけないものを見てしまった。

倒れたライモンドは、首から上が、なかった。

「っ……！ きゃあああああ！！」

喉をふり絞って、声の限りに叫ぶと、私は意識を手放した。

——それからどうなったかは知らない。

気が付くと、私は体を清められ、衣服も着替えさせられて、ベッドの上にいた。

朝日の差し込むベッドの上でぼんやりとまどろむ。

「アンナ！」

「アンナさん！」

声のするほうに目をやると、心配そうな顔をしたギルバートとフィリップが覗き込んでいた。

「よかった、気がつかれたんですね」

「あ、私……」

「アンナは一日中眠りっぱなしだったんだ」

「私なにをして……」

途端に映像が鮮明に浮かんでくる。

記憶喪失なんて都合のいいことは起きなかった。

……人が殺されるところを初めて見てしまった。

ぼうつとすると、切断面まで鮮明に思い出しそうで、慌てて記憶を封印しようとする。

あれが月明かりの下でよかった。

もし昼間だったら、一生その映像に悩まされていたかもしれない。

「あのあと、どうなったの？」

恐る恐る聞くと、ギルバートが答えてくれた。

「あのあと、『妖獣』達は散り散りになって逃げていった。その行方は審問機関が総力をあげて追っているところだ。治安部はこの件に関しては、ライモンドが飼っていた獣の暴走として処理するらしい」

「どうして？ 物的証拠が無いから？」

「そうだ。罪人討伐の依頼を出したのも、自分の獣が手に負えなくなっていたためということにつじつまを合わせるそうだ。これは住民に余計な不安を与えないためでもあるそうだ。まあ、死人に口なしといったところだな」

「そんな、それじゃあ、私達が被った被害はどうなるの？ 私達、仮にも貴族なんでしょう？」

「それは、騒ぎ立てしないほうが身のため、ということだそうです」
フィリップがギルバートの言葉を継いだ。

「ことが公になったら、住民からの不安だけでなく、この国の治安、威信に関わることにつながるのだそうです。だから、例えば貴族であろうとも、泣き寝入りをするしかないのです」

「じゃあ、命があっただけでも良かったってことなの？ 私やギルバート達が死んでいたら治安部は、国はどうしてくれるつもりだったの？」

「それも、切り捨てられるでしょう。皇帝陛下は、そういった面で

は国民を守ってはくれませんか」

皇帝陛下とやらは、国民の権利は守っても、国民の安全までは守ってくれないのねと私は思った。

祭り 1

——ユウキアの花粉が飛ぶ季節が終わりに近づいてきた。

あれから『妖獣』達は審問機関によって狩られ、起きたかもしれない生物災害を食い止めることが出来た。

街の獣たちも段々と本来の自分を取り戻しつつあるようだ。

それは獣たちを実際に見ればわかる。

歩き方や目の色、発する空気が、花粉の全盛期とは比べ物にならないぐらい穏やかになってきたのだ。

どの獣も、段々と落ち着きを取り戻しているようで、以前のように戦闘行為を行うもの、道行く女性を襲おうとするものが格段に減ってきた。

商店でも、未だ柵がはまってはいる店もあるが、段々と元通りの風景に戻ってきており、柵をはずしても商売に関しては支障がなくなってきた。

それに伴い、近頃街の光景は打って代わってわくわくしたものとなっていた。

護衛をつける女性の姿は見る間に減り、代わって自分のパートナーや友人と歩くものが多くなった。

その女性達が、あるものをこぞって買い始めたのである。

それは乾燥した花束と鮮やかな布だった。

商店で売っているそれを沢山の女性達が買っていく。

家々の軒先にはその乾燥した花束が飾られ、布を垂れ膜状に張って玄関を綺麗に飾っている。

フィリップの別荘から自分の家に戻った私は、その光景を興味深げに見た。

「最近、街の雰囲気が華やいでいるようだけれど、何かいいことでもあったのかしら」

人型のギルバートが答える。

「ああ、これは、ユウキアの花粉が終わりに近づいてきたときにいう祭りの準備だ」

「祭り？ そんなものがあったのね」

驚く私にギルバートが説明する。

「獣達が本来の自分を取り戻しつつあるときと、農民の農作業が一段染したときがちょうど重なるので、この祭りが行われる。ちなみにこれは聖なる樹と皇帝陛下を祭るためのものでもあるのだ」

「へえ、ここでも皇帝陛下の呪の力っていうものが働くのね」

そういいながら、私は少しだけ顔をしかめた。

最近の私は皇帝陛下に対してちよつと思ふところがあつた。

散々、呪だの血の力だのと聞いてはいるものの、皇帝陛下の存在意義と、その力がどのようなものなのかがいまいちぴんと来なかつたのだ。

先の事件で、皇帝陛下は自分たちの安全は守ってくれないのだという思いがくすぶっていたからなのかもしれない。

それと、最初の人に、一代貴族の申請をしにいったきっかけが契約者であるということだったのだが、なぜ異界の契約者が一代貴族になれるのかがいまいちよくわからない。

呪の力となにか関係があるのだろうか。

自分の家でお茶を飲みながら、私はまずは契約者についてギルバートに聞いてみた。

「そうだ、前から思っていたのだけれど、私が最初に一代貴族になったきっかけが私が契約者だったからじゃない？ それってなぜなの？ 前にこんな会話をしたわよね」

『アンナにはこれから貴族院という場所に行つて、とある申請をしてもらう。これは、アンナがこの国で生きるために欠かせない手続きであると同時に、アンナが自身を守るための手段でもあるんだ』

『貴族院ってことは、私、この国の貴族になるの？』

『ああ。そういうことになるな。一代貴族といって、契約者になつ

たものは一代限りの貴族になることができる。身分さえ申請しておけば、どこの国でも行き来ができるようになる』

ギルバートは私が作ったホットケーキを食べながら答えた。

「ああ、それは、契約者はこの国に益をもたらすからだ。益とは、獣と血の契約を結び契約者になることが、皇帝陛下の呪の力の強化につながるということだ。呪の力が強化されれば、この国の安寧につながる。一方、異界からのものはこの国に変化をもたらす。良いにつけ悪いにつけな。だから優遇措置を取ることによってこの国に縛るのだ」

「それって、前にセルビアが異界の禁術を使用した容疑で……とか何とかいっていたけれど、それととにかく関係があるの？」

「有体にいえば、異界からの知識だな。この国、メリトウスに住む人間の話は前にしたと思うが、異界からやってきたものはこの世界や国に変化をもたらす。時代が変われば、その力を必要とするものも出てくるだろうが、今の皇帝陛下と国民はこの国に安寧を求めているから、余計な変化はいらないのだ。だから監視の名目もあり、アンナのような人物を一代貴族として手元においておこうとしたのだ」

「そうなんだ。つまり、契約者は国の活力となる。で、異界の知識はこの世界や国を揺るがすかもしれないから、異界からのしかも契約者である私のような人物は手元において厳重に管理する、ってことなのね」

「そうだ」

「ふうん、でも一代貴族の申請だけなら、農民達だってすれば良いんじゃないのかしら？」

私はお茶を飲む手を止めた。

「農民たちが申請をしないのは、その多くが違法に契約を結んだものであるからだ。呪の力というものは、きちんとした手続きを持つて、初めて発動するらしいのだ」

「そうなんだ。じゃあ、農民でもちゃんとした手続きさえ取れば一代貴族になれるってことなのね」

「ああ。実際、数は少ないが農民出身の一代貴族はいるぞ。あの、ミアーシャとかいったか、あれも農民出身だ」

「そうだったの？ よく知っているのね」

「フィリップに教えてもらったのだ。ただ、あのものの家は農民とはいっても裕福なものであるらしいがな」

私は最初に嫌がらせをしてきたミアーシャが農民出身だと聞いて少し意外に思った。

ああいういけ好かない感じって貴族っぽいと思っていたからだ。

「ああそれと『呪の力』ってよく聞くけれど、本当のところはどういったものなの？ 私、いまいちぴんと来なくって。だって、皇帝陛下に守られている実感なんてあまりないもの」

私はお茶を飲み干すと膝の上に両手を置いた。

「俺にも詳しいことはよくわからないのだが、貴族と皇帝陛下は、この国ではある種の人柱になっているそうなのだ。貴族も皇帝陛下も、この国を守る呪術を支えるために欠かせないものなのだそうだ。だからこの国は人を頂点においても瓦解せず、むしろ外敵に対して強力な防御を誇っているとのことなのだ」

「でも私、人柱になっている実感なんてないわよ？ 私がやっていることといえば、毎日宮殿に行って、お喋りしたり、食べ物を食べたり、ゲームをしたりして寛いでいるだけなのだけど」

ギルバートはホットケーキを食べ終わるとテーブルの上で両手を組んだ。

「あの建物で生活することによって、目に見えないところで呪の力は吸い上げられているらしい」

「流石のギルバートも、この話に関しては『らしい』が多いのね。それほど説明されていない事柄だってことなのかしら」

「そのようなことは疑問に思わないほど、この国は安定を保ち続けてきたからだと思うぞ」

そう言うとギルバートは脚を組んで体勢を崩したのだった。

祭り 2

「そうだったの。でも『外敵に対して』って、ほかの国ってそんなに危ないの？」

「危ないわけではないが、メリトウスよりもはるかに好戦的な国が多いな。それに近隣にあるダキアやヌミディアといった国は、皇帝陛下の呪がなければ、この肥沃な土地と呪の力を狙って真っ先に侵攻してくる国でもあるのだ。呪の力は特定の条件化で、特定の場所でなければ発動しないが、それさえあれば、外敵に襲われる心配はないからな。貴族と皇帝陛下は殺さず、傀儡政権として自分たちが実権を握る腹積もりでいるらしい」

「呪の力の発動条件ってこの国の場所も関係しているのね。外敵の侵入を防ぐって、具体的にはどんなことをするの？」

「このメリトウス全土には呪によって見えない壁が張られている。敵だと認識した者は壁を通り抜けられない仕組みになっている」

「へー、便利なのね」

「あくまで敵だと認識した者なので、ほかの国の間諜や商人などを阻むことは出来ない」

「うーん、あんまり融通が利かないのね。でもその大きな力によって、メリトウスは今まで敵の侵攻を防いでこれたのね」

これは日本という鎖国状態なのかと想像する私だった。

日本の場合は時代の流れと外国からの侵入を許してしまったことで鎖国は解かれたけれど、この国の場合は少なくとも物理的に外からの侵入を阻むことが出来るので外国からの脅威に怯える心配はないわけだ。

呪の力についてはおぼろげにわかったが、やはり実際に目にしていないのでまだ実感がわかない。

そんなことを考えていると来客を告げる知らせが入った。

「だれかしら」

戸口まで行くと、そこには久しぶりの顔ぶれがいた。

「ルウ！ ガルデイン！ ハティ！」

「アンナ様、お久しぶりです」

ハティが丁寧に挨拶をする。

「どうぞあがってちょうだい！ 今日はまだ、三人とも決まっているわね！ なにかあったの？」

三人はそれぞれ正装をして、身なりをきちんと整えているようだ。

それぞれ自分の髪の色に合ったトーガを着ている。

ガルデインは白、ハティは茶色、ルウは赤である。

見ると、ガルデインとハティにはさまれて立っているルウが、綺麗

な乾燥花束を持っていた。

「アンナ様、これ、俺達からの花束です。どうか受け取って下さい」
ルウが少し顔を赤らめながら手に持っていた花束を差し出す。

私はそれを少しばかりいぶかしがりながらも受け取った。

「まあ綺麗！ でも、この花束どうしたの」

「ルウ、いくら緊張しているからって、説明もなしに渡しちゃ、アンナ様が驚くだろう」

ガルディンに諭され、ルウが顔を上げていう。

「この花は、その、なんていうか、俺達からの気持ちなんです。この祭りでアンナ様に花を贈ろうって、皆で決めたんですが……」

「あーじれってえな、ハティ、説明してくれ」

「祭りには花を贈る習慣があるのですよ。お世話になった人や、親しい人、愛する人に。これは、俺達皆がアンナ様に気持ちをこめて贈る花です」

「私に？」

驚く私にガルディンがやりとしていった。

「ええ。俺達皆を代表して、ルウがアンナ様に花束を贈ろうということになったんです」

ガルディンとハティはにこしながら話し始めた。

「ルウはこの2月半で随分大人になりましたよ」

「そうそう、仕事中、ため息なんかついたりしてな」

「遠くの空をぼうっと眺めているのを何度も見かけましたよ」

「なんだか色気づいちまってなあ？」

ルウが慌てて止めに入った。

「やめてよガルディン、ハティ。俺、別にそんなじゃなかったよ」

そういうとルウはぶすくれてしまった。

私はルウをまじまじと見る。

なんだか顔立ちが大人びてきているみたい。

声も心なしか低くなったようだし、体格まで変わったように見えるわ。

でもこういうところはいつものルウなのね。

私がルウを観察していると、ハティが胸に手を当てながらいった。

「見てるこっちがはらはらしたんですが、この季節を無事に乗り切ったということで、栄えある花渡し役を、ルウに譲ることにしたん

です」

そういうと、ハティは私にそっと耳打ちした。

「ルウを大人にしてくださいとあってありがとうございます」

「ええ?! あ、私何もしていないのだけれど……」

にっこりと笑うハティ。

「アンナ様の存在そのものがルウを大人にしたのですよ。まだ先のことだと思っていたのですけれどねえ」

「ちょっと、ハティ、アンナ様の前で恥ずかしいこといわないでよ。俺本当に苦労したんだから。その、いろいろと」

「はいはい。ああ、ユウキアの花粉の季節はまだ終わってはいませんでしたよね。要らぬ刺激を与えては、抑えていたはずの熱が再燃するということですね。俺にも経験があるからわかりますよ?」

「わかるんだったら放つといってくれないかなあ? 俺、今ちょっと気持ちがいんどいんだから」

「おや、ご機嫌斜めにさせてしまいましたね」

そういうハティの顔はどこまでも嬉しそうだ。

「でも、私がそんな素敵なものをもらってもいいのかしら?」

私は振り返ってギルバートを見た。

ギルバートが腕組みをしながら問う。

「ところでこの花の意味はなんだ？」

「もちろん『愛する人へ』といたいところですが、ギルバート様の前でそれはどうでしょうということで、『親愛なるアンナ様へ』ということにしました」

「さりげなくいつているじゃないか。しかも全員まとめてか」

「ええ、全員まとめてです」

ギルバートは無表情だったが、私はその顔を見て噴き出しそうになるのを必死でこらえたのだった。

祭り 3

「そうだ、皆がせっかく正装してきたのだし、これから街に出かけてみるなんていうのはどうかしら？ 私、皆にこの花束の御礼がしたいし」

私のその提案にガルディンが乗っかってきた。

「そりゃいいですね！ めかしこんだ甲斐があるってもんです。ほかの皆はどうだ？」

「俺も賛成ですよ。ルウはどうかかな？」

「俺も街に行きたい！」

三人の快い返事を受けて私はギルバートに尋ねた。

「ギルバートはどうする？」

「もちろん行くとも」

こうして私達は連れ立って街へと繰り出したのだった。

街の景色はさらに彩を帯びるようになっていった。

街路では人の大きさほどの装飾された植木が並べられ、中には様々な動物の形に整えられているものもあった。

商店では飴細工や花輪、色とりどりの宝飾品、目だけを隠す仮面や香水などが売られている。

それらの店頭では、宝飾品や仮面を真剣に選んでいる男性の姿がちらほら見かけられた。

皆、品物を手に取り、十分に吟味しているようだ。

街を歩いていた私はその光景に興味を惹かれた。

「あの人達はどうしてあんなに真面目に買い物をしているのかしら」

「それは、あの贈り物と仮面が自分の恋の行方を左右することになるかも知れないからですよ」

ハティが手近にあった仮面を二種類手に取り、目の前に掲げている。

「獣達にとっては、年に二度ある恋の季節ですからね。ちなみに俺が持っているこの仮面には『私には意中の人があります』という意味も込められているですよ」

よく見ると仮面のこめかみの部分には、ユウキアの葉と花を模した飾りがつけられている。

椿のようなその花は淡い桃色で、白銀の花粉まで精巧に模してあることがわかった。

ハティがこめかみの花を指して解説する。

「このユウキアの花がついている仮面は、『自分にはもう意中の相

手がいる』という証なんです。この花がついていない仮面は、『独り身、相手がいない』という証になるんです。祭りの本番は皆この仮面をつけるのですよ」

その言葉を受けてガルディンが続けて説明する

「主に女性がこの花のついていない仮面をつけることが多いですよ。で、男性は花のついた仮面をつけることが多いですね。こりゃ、男性のほうが女性よりも惚れっぽいつてことなんでしょうかねえ」

頭をかきながらそういったガルディンを見て、私はふと思ったことをいった。

「ふうん、そんなものがあるんだ。あ、ちなみにガルディンたちはどちらの仮面をつけるの？」

「俺はもちろん花のついた仮面ですよ。ハティもルウもそうだよな？」

「ええ。誰とはいいませんが、俺にも意中の人はいますのでね」

ガルディンとハティはにこにことしている。

まるで秘密を共有するかのようなその二人の笑みに私は首をかしげた。

「皆の意中の人ってどんな人？ 私会ったことあるかしら？」

「はい、アンナ様はよくご存知の方ですよ。おおらかで、誠実な人ですよ。ねえルウ？」

「いつも明るくて、周りの人たちを包み込んで、一緒にいると癒されるんだ。俺、その人のために花の仮面をつけるよ」

私は頭をひねって考えた。

「ええと。おおらかで誠実な人……」

三人はどこか固唾を呑むような表情でこちらを見つめている。

「それって、おかみさん？」

三人は一瞬ぽかんとすると、盛大なため息をついた。

「……うーん、アンナ様はときどき変な方向に考えが飛びますよね」

「それがまた愛嬌があるってことですがね」

「変に聡いかと思えば、こういうところで鈍感なんだよね」

「え？ ええ？ どうしたの皆？」

「ふっ、お前たちも報われんな」

なぜかため息をつくハティ達を見ていぶかしむ私だった。

そんな話をしながら、私達は喫茶店へと入った。

「あの、やっぱり私ガルディン達皆に御礼がしたいのだけれど、ど

んなものがないのかしら」

席につくなりそう切り出した私に対し、ルウが助け舟を出した。

「アンナ様が心を込めて考えてくれたことなら、俺達どんなものだって喜びますよ」

「そう、でも、もらった気持ちが嬉しかったから、なにか記念になるようなものと思ったのだけど……」

「アンナ様がそういうのならば、パレードで返してくださいってはいかがですか？」

「パレード？」

「ええ、この祭りのメインはパレードといっても過言ではありません。このパレードには主に貴族が参加するのですが、街道を練り歩く御輿の上にアンナ様が乗って、こちらに手でも振って下さったら、俺達にはいい思い出になりますよ」

私は傍らに座っているギルバートに聞いた。

「ギルバート、パレードってどんなものなの？」

ギルバートは椅子に深く腰かけなおすと説明した。

「祭りの最後に、街道を、明かりを灯した御輿が何体も練り歩くのだ。その前後には仮装した人々が連れ立って歩くようになっていて、御輿には貴族が乗り、仮装した人々は武官が勤める。ちなみにこれは、この国の呪を強める働きがある。御輿が街道を練り歩くことが、

呪を行き渡らせる仕組みになっているのだそうだ」

「へえ、そうなんだ。やっぱり祭りの最後はそういう呪の力っていうものが出てくるのね」

「御輿が通ったあとは見ものですよ。街道が呪の力で白銀に光って、光の川が流れているようになるんです」

以前に「貴族は神官の役割も果たしている」という話を聞いたことがあるが、こんなところで貴族が国の役に立つ行事に参加するのだとは思っていなかった私だった。

祭り 4

喫茶店を出たあと、私達は闘技場へ行くことにした。

ルウがはしゃいだ声でいう。

「今、闘技場では、サーカスが行われているんだ。大陸からの珍しい獣や、面白い芸をする獣が集められているんだって。料金もパン1斤の値段で見られるらしいよ」

ガルディンがルウの頭をくしゃっと撫でた。

「ルウはサーカスを見るのが初めてだからな。よかったな、今日皆で一緒に出かけられて」

「ガルディンだって嬉しそうじゃないか。久しぶりだもんね、こうやって出歩くの」

いつも真面目に仕事をこなしている「水道局」の皆は、たまの休みにこうやって出かけることで気晴らしをしているのだそうだ。

私は今の会話の中でふと気になったことを聞いてみた。

「そういえば、獣の中には人型になれるものとなれないものがあるの？」

ハティが振り返って答える。

「ええ。俺達が住んでいる大陸では多くの獣が人型になることがで

きますが、別の大陸では人型になることができない獣もいます」

「そうなんだ。私はてっきりこの世界の獣は皆人型になれるのだとばかり思っていたわ」

「そうだったのですか。この世界では、鳥類や一部の四足獣、家畜の一部は人型になることができません」

「ああ、だから馬はずっと獣の姿のままだったのね」

納得する私であった。

ただ、よくよく話を聞いてみると、サーカスで登場する獣は人型になることができる獣も含まれているそうなのだ。

そこのところを聞いてみる。

「同じ人型になれる獣なのに、どうして見世物にできるの？」

私のその質問にはギルバートが答えた。

「人型になれる獣でも、珍しいものということには変わりはないかな。それに、そういった獣たちは、そのようにして自らを売り物にすることによって、サーカス団から割合多くの給金をもらっているとのことなのだ」

つまりこの国のサーカスは私達の世界でいうところの「見世物小屋」のようなものも兼ねているのだと解釈した。

「そんなビジネスがあるのねえ……」

闘技場につくと沢山の人で賑わっていた。

ここで私は列を管理している係りの人に貴族の指輪を見せた。

すると係りの人が私達一団を一番下の席に案内してくれた。

「闘技場の席は、一番下の部分が貴族、その上の部分が文官と武官、その上が市民、そして一番上の部分が獣の席となっております。皆様は貴族の一団とのことですから、一番下の席へお渡り下さい」

そういわれて、一番下の席へ行くと、ショーを間近で見ることができた。

今やっているのは、二頭の虎が金属で作られた巨大なドラム缶のような円柱の上を、バランスをとりながらごろごろと転がして走っているところだった。

それが終わると、今度はライオンがめらめらと燃えている火の輪っかに飛び込んでいき、見事くぐり抜けるといふ芸を披露した。

その周りでは、檻に入れられた沢山の珍しい動物が、あるものは殺気立ち、あるものは寛いでその中に納まっていた。

その姿は奇妙なもので、体は熊、顔は狼のようなもの、鹿と馬を混ぜたようなもの、双頭の犬、蝙蝠のような翼の生えた巨大なトカゲ、獅子の頭と前足、山羊の頭と後ろ足と胴、蛇の尾を持つ、双頭の火を吐く獣などがいた。

「うわあ！　ものすごい迫力だよ！」

「俺もこんな近くで見たのは初めてだぜ」

「俺達の身分では、本来ならば市民の席に座らなくてはいけないのですが、アンナ様のおかげで、とてもいい席でショーを見ることができますよ」

私はちょっとだけ嬉しくなった。

「喜んでもらえてよかったわ。せっかくこんなに仲間が集まったんだから、なにか楽しみがなきゃと思っていたところだったの。身分の差で強引に引き剥がされなくて本当によかったわ。でももしそうになったら、私は喜んで市民の席に行くわよ」

「頼もしいですね。でも、そうなった場合は、俺達は潔く市民の席に行きますよ」

ハティがそういうと、ふと遠くの貴族の席に目を移した。

「あれ、あそこの席に座っているのは、ウィリアム・シルフィードではありませんか？」

目を凝らしてよく見てみると、確かに身なりのいい、金髪碧眼の男性がそこに座っていた。

ウィリアムはこちらに気付いたようだ。

席を立って、近くまで移動してきた。

「やあ、アンナさんお久しぶりですね」

「あら、ウィリアム。ウィリアムもサーカスを見に来たの？ それに今日は、リラちゃんと一緒にじゃないの？」

私がそう聞くと、ウィリアムは笑みを崩さずにいった。

「キスキル・リラならば、今狩りの最中ですよ。私はここで次の獲物を見定めているところですがね」

「狩り？ 獲物？ それってどういう……」

「その文字の通りですよ。『融合』するための餌を探しているのです。次の戦いが近いですからね」

「次の戦いって、もしかして、リラちゃんを闘技場に出しているの？！」

驚く私に対し、ウィリアムはこともなげにいった。

「ええ。私のキスキル・リラは今のところ全戦全勝ですよ。もしよければ、いつかアンナさんの獣と戦ってみたいものですね」

そういうとウィリアムは席を立った。

「それでは私はこれで。もう見るべきものはあらかた見てしまいましたから」

ウィリアム・シルフィードは風のように去っていった。

「ねえ、今の話は……」

私はギルバートの腕を掴んだ。

「もしかして、宣戦布告ってやつじゃないわよね？ ウィリアムがそんな……それに、リラちゃんが闘技場で戦っているなんて知らなかったわ」

「ああ、今のは挨拶だと思っていいだろう。キスキル・リラは確かに今現在闘技場の戦いでは全戦全勝だと聞いている。それと、俺がアンナを置いて闘技場で戦うなどということはありえないし、狩りに行くなどということもないから安心してくれ」

ほっと胸をなでおろす私だった。

祭り 5

祭りの前のうきうきとした雰囲気は貴族のサロンにも伝わってきた。

ユウキアの花粉の全盛期には「嫌ですわ」「早く終わって欲しい」などといった貴族達だったが、祭りが近づいてくると、「パレードのときはどんな衣装を着ようかしら」「私、今回は花のついた仮面を被りましてよ」などと話し合うようになった。

貴族達もこの祭りの準備に浮かれているようだ。

「衣装選びねえ……」

私は貴族達のはしやぎようを少しだけ遠巻きに見ていた。

私が今回パレードに参加するのは「水道局」の皆のためと、皇帝陛下の呪の力の強化のためで、それ以外は特に取り立ててわくわくするようなことはない。

獣達の恋の季節といっても、私にはギルバートがいるし、改めてなにかどきどきするようなこともない。

なんだか、私一人だけテンションがついていないなあとぼんやりと思っているときに、フィリップが話しかけてきた。

「アンナさんは僕と同じで今回のパレードが初めてでしたよね？
ところでアンナさんは、衣装はどうされますか？」

「衣装？ ああ、グレモリー様の衣装からそれなりに華やかなもの

を着ていくつもりだったのだけれど」

私がそういうとフィリップはちゅちゅと指を振った。

「アンナさん、このパレードにはいくつかの意味がこめられているのですが、その中のひとつに、貴族の財力の誇示というものがあります。国民にこの国が豊かな証拠を見せるために、貴族は着飾らなくてはいいけません」

「ええ？ そうだったの？」

驚く私である。

「うーん……、困ったわ。私が持っているグレモリー様の衣装は、確かに品がよくて綺麗なものが多いけれど、そういう見栄えという面ではもうひとつ足りないものがあるのよね」

「そこで提案なのですが」

フィリップは私の両手を取るときゅっと握りながら力強くいった。

「アンナさんのその衣装、僕に作らせてはくれませんか？」

「えっ？ フィリップが?!」

「ああ、作るといっても僕自身が針仕事をするというわけではありません。僕がアンナさんの出資者となって、見栄えのする衣装を作らせて下さいといっているんです」

「そうだったの。でも、それってなんだかフィリップに悪い気がする

るのだけれど……」

「僕は、アンナさんが着飾ったところが見てみたいです。そうだ、ギルバートの衣装も一緒に作らせましょう。そうしたら僕達三人で、揃いの衣装が着れますよ」

「ギルバートはどう思う？」

私は傍らにいるギルバートに聞いた。

「フィリップがそういうのなら、その厚意を受けさせてもらおうではないか。俺も、アンナが着飾ったところが見たいしな」

二人の男性にこういわれては、うんと頷くしかない私だった。

それにしても、フィリップはまるで私のパトロン状態だわ。

いくら私に好意を寄せてくれるからって、こんなに至れり尽くせりでいいのかしら。

考え込む私をよそに、ギルバートとフィリップは当日の衣装のことについてなにやら打ち合わせを始めたのだった。

有言実行のフィリップは、次の日私達を別荘に招待した。

召使のスラに私達のもてなしをさせながら、一方で仕立て屋を呼んでいたのである。

やってきた仕立て屋は、私達三人の寸法を測ると、色とりどりの端

切れを顔の下に当てて、顔映りを確認した。

「皆様のお衣装は、このち3日で仕上がります。楽しみにしてくださいませ」

その自信たっぷりの仕立て屋が帰ると、私達はスラが淹れてくれたお茶を飲みながら一息ついたのである。

「わあ、このお茶美味しいわ。でも貴族っていろいろと手間がかかるのね」

「その手間を楽しめるようになって、本当の貴族になるのです」

「そういうものなのかしら」

「そういうものなのですよ。それにしても、アンナさんの衣装が楽しみですですね」

フィリップの話にギルバートが頷く。

「私は二人がどんな格好をするかのほうが楽しみだわ」

「では、お互い楽しみは3日後まで取っておきましょう」

そういうと、フィリップは手を叩いた。

すると数人の召使がいくつかのトレイを持って部屋に入ってきた。

トレイの上には見目麗しい沢山の仮面が並べられていた。

どれも精緻な細工が施された逸品である。

「どうぞ、アンナさん、ギルバート、手に取ってみてください」

「わあ！　すごいわ！　こんなに沢山どうしたの？」

「これは以前僕が外遊に行ったときに取り寄せたものです。こんなところで役に立つとは思いませんでしたが。3日後にお見せしようと思ったのですが、せっかくですので今日お二人の前に出すことにしました」

私はその仮面をひとつとってしげしげと眺めた。

「綺麗ねえ。このユウキアの花をかたどっているものは宝石かしら？　仮面の周りから出ている羽も、赤や青、緑に黄色と鮮やかだわ」

私は手に取った仮面を戻すと、そのきらきらと光る宝石箱のような仮面達を見つめた。

私のその様子にどこか満足げなフィリップを見て、私はふとあることを思い出した。

「そうだ、そういえばどうしてフィリップは以前治安部に所属していたの？　外遊なんかに行くぐらいだから、元々は貴族として生きていくつもりだったんじゃないかったの？」

私のその疑問に対し、フィリップはこう答えた。

「ええ。僕は、生まれてこのかた自分は貴族として生きていくものだと思っていました。でも、外遊をしたことによって、果た

して自分はこれでいいのか、このまま貴族として生きていってもいいのかという疑問がわいてきたのです。それから、改めてこの社会を俯瞰してみると、社会の暗部や抑圧されたものが見えてくるようになったんです。その様に段々憤りを感じるようになった僕は、治安部に入り、社会貢献をすることによってこの国と関わろうと思ったのです」

「そうだったの。なんだか立派ねえ。フィリップがそんな思いでいたなんて全然知らなかったわ」

フィリップは貴族の道楽で治安部に所属していた訳ではなかったのだということに、驚きと一種の尊敬の念を感じる私だった。

祭り 6

3日後、フィリップの別荘に行った私は、驚愕した。

トルソーに着せかけられている衣装のあまりの派手さに、ちょっと引いたのだ。

圧倒的な威圧感と、可愛らしさが混在するその衣装に、3日でこんな作ったのかい！ と、心の中で妙な突っ込みをいれてしまったのである。

そのドレス全体にはユウキアの花やバラの花を模した飾りが所狭しとつけられている。

薄いピンクやオレンジの花は、白銀の花粉まで丁寧に再現されている。

胸元は斜めに流線型を描くように花がつけられ、アンシンメトリーの袖は、右肩がノースリーブで、左肩が肘まであるひらひらとしたものになっている。

長さの違う白い手袋でその腕を隠すようだ。

襟ぐりは大きく開き、かつ襟のうしろは大きな扇状に立たせられている。

ふんわりと広がった長いスカートの中からは絹のような素材でできたパニエがちらりと覗き、足元を隠している。

これはあれね、某鼠が住んでいる御伽の夜のパレードにも引けを取らない出来なんじゃないかしらと思いつつ、私はフィリップに恐る恐る聞いてみた。

「え、ちよつと、フィリップ、私こんなの着るの？」

「ええ。これぐらいのものでないと、パレードでは見栄えがしませんから」

元々派手なものには縁遠く、コスプレ願望もあまりなかった一般市民に、いきなりこんなものを着ろというのは酷だと思いませんか……？

「わああ……。作っていただいたのはありがたいので、その気持ち分、努力して着ます」

だが、よく見ると愛着がわからないでもない。

最初のインパクトが去ると、手の込んだ意匠や、丁寧な作りに感嘆するようになった。

よし、ここは己を捨てて道化に徹しようと、腹を括ることにした。

ギルバートとフィリップの衣装はそれぞれ瞳と髪の色に合わせたものとなっていた。

ギルバートの衣装は灰色の長いコートのようなトーガに、胸元にはブルートパーズをはめ込んだ巨大なメダリオンが縫い付けられている。

そのトーガには銀糸で唐草文様のような複雑な絵柄が刺繍されており、トーガの下に着るのは白い仕立てのよい、一枚つながった長い厚めの肌着だ。

フィリップも赤みがかった卵色のトーガに、アクアマリンをはめ込んだ巨大なメダリオンが縫い付けられており、肌着の色はこれも白だ。

このトーガにも、金糸で複雑な刺繍が施されている。

「なんだか、男性陣の衣装はわりと控えめなのね。でも手は込めるわ」

「これは真ん中に立つアンナさんの衣装を目立たせるための工夫ですよ」

そういうと、フィリップはにこにこしながらいった。

「ああ、2日後が楽しみですよ」

ギルバートが壁に寄りかかり、腕組みをしながら話す。

「俺は、今年は御輿の上に乗るのかと思うと、なんだか不思議な感覚がするぞ」

「私なんか、どんなものが想像がつかないから今からどきどきしているわ」

本番を2日前に控え、ちょっぴり緊張と、だがそれにも負けず劣ら

ずわくわくし始めた私達だった。

祭り本番。

砲が打ち鳴らされ、青空の中、ひらひらと沢山の乾燥した花びらが撒かれる。

朝から商店は活気に溢れていた。

もう格子や柵をはめている商店はなく、ここがかきいれどきだとばかりに声を張り上げる店の店員がそこにはいた。

私とギルバートは、午前中は「水道局」のいつものメンバーと遊び、3時過ぎには衣装がえのためにフィリップの別荘に行く予定になっていた。

「水道局」のメンバーに囲まれ、私とギルバートは露店を冷やかした。

私の髪には以前ギルバートに買ってもらった銀の髪飾りが付けてある。

ギルバートはそれを見ると満足げに微笑んだようだった。

「楽しみだなあ、アンナ様がどんな衣装を着てくるのかが」

ルウが手に杏飴のようなものを持ちながら喋る。

「俺、目がいいから、アンナ様の姿を遠くからでも見つけられるよ」

「そう？　じゃあ、ルウが手を振ってくれたら、私それを探してその方向に必ず手を振るわ」

「俺達も楽しみにしていますよ」

「アンナ様の衣装がどんなものか、わくわくしてますよ」

「任せて！　なんだか、とっても奇抜な衣装だから」

私はそう請け負うと、皆と別れ、ギルバートを伴ってフィリップの別荘へと向かった。

衣装の微調整は2日前にしていたので、あとはフィリップの召使に手伝ってもらってこの大仰な衣装を着るだけである。

着心地は、見た目ほどガサガサはしておらず、内側はつるつるとした手触りになっていた。

「はあ、こういう形で人前に出たことなんてないからなんだか緊張するわ」

人前でなにかをするという経験はないわけではなかったのだが、何分、このような体験は初めてであるので、緊張する私である。

召使に髪を結ってもらって、綺麗に化粧を施してもらって、服に見合った小物を身につけて完成だ。

私は召使に手を引いてもらって、広間へと出てきた。

「あー、ギルバートやフィリップに引かれなにかしら。私じゃ絶対似合わないわよ……」

弱気になった自分を励まして、顔を上げる。

そこには、少しだけ驚いた表情のギルバートと、手を叩かんばかりに喜色満面の笑みを浮かべたフィリップが立っていた。

「アンナさん、よく似合っていますよ!」

「えっ! 本当に?」

「ええ。そう思うでしょう? ギルバート」

ギルバートはごほんとか払いすると降参したような表情を私とフィリップに向けた。

「奇抜な衣装だとは思っていたが、アンナにはよく似合っているぞ」

「それって、私この衣装を着こなせているってこと?」

「ああそうだ。思いのほか違和感なく着こなしているのでびっくりしたところだ」

「よかったあ! ギルバートに駄目出しされたらどうしようかと思っていたところだったの。二人の衣装もよく似合っているわよ」

なんだか体中の緊張が一気に解けたような気がした私だった。

「さあ、あとはこの仮面を選ぶだけです」

召使が沢山の仮面を持ってくる。

私は2日前から決めていた、銀の羽とユウキアの花のついた、小ぶりの仮面を手にした。

ギルバートとフィリップは、蝦茶色の羽とユウキアの花のついた仮面を手にした。

「さあ、これで準備万端です。私たちも御輿へと赴きましょう」

こうして私達一行は御輿に乗るべく、馬車を走らせたのだった。

祭り 7

黄昏時の街中では、悲喜劇が繰り広げられている。

そこそこで交わされる愛の歌。

「以前からお慕い申し上げておりました」

乾燥花束を持ち、ユウキアの花のついた仮面をつけた男性が、とある女性の前に膝をついて告白する。

女性はちよつと迷ったあと、その男性からの花を受け取った。

「私の愛を受け取って下さい」

こちらでは身なりのいい男性が、こぎつぱりとした服装の女性に花束を渡す。

「俺があんたを幸せにしてやる」

あちらでは遊び人風の男性が、しかし顔は真剣そのもので、柔らかそうなドレスを着た女性に花束を差し出している。

「私、一生貴方についていくわ」

そういったのはまだ年若い、元気そうな獣の女性。

白いドレスをなびかせて、花束を渡した男性の腕をぎゅっと掴んだ。

「ごめんなさい、もう私、決めた人がおりますの」

この女性は、何人もの男性からの花束をすげなく断っていた。

「前から好きだったのは、あなただけよ」

こちらは、あの遊び人風の男性から告白を受けた女性の返事だ。

この二人の行く末は神のみぞ知る。

愛が成就するもの、玉碎するもの、次の季節にかけるものと様々だ。

結ばれたものは建物の影で熱烈に愛を交わし、そうでないものは貴族達のパレードを今か今かと待ち望んでいる。

そして、満を持して、三頭立ての馬に引かれた大きな御輿が街道に現れた。

御輿の上には、絢爛豪華な衣装を纏った貴族達が鎮座しており、明かりのついた角灯がその御輿全体を飾っている。

御輿の周りに侍る武官が、しゃんしゃんと鈴を鳴らし始めた。

太鼓の音も混じる。

人が早足で歩く程度の速度で、御輿は進んでゆく。

すると、御輿が通ったあとの路面が、白銀に輝きだした。

「お母さん、見て！ 地面が光り始めたよ！」

「まあ綺麗ねえ！ 次の季節も平穏に暮らせますように」

歓声を上げる人々。

それはまるで一夜の夢のようであった。

「うわあ！ 本当に地面が光っているわ！ なんて綺麗なの！」

私は御輿の上から少しだけ身を乗り出すようにして馬車のうしろを眺めた。

「アンナ、危ないから下がっている」

そういうギルバートの声は優しい。

「御輿から街を眺めると、また違った雰囲気になるわね。こういう仕組みで光っているのかはわからないけれど、これは確かに祭りのメインにはふさわしいわね」

私は光の川のようなその光景に見とれた。

「アンナさん、そろそろ人々の前に出ます。僕とギルバートの間に立ってください」

「はあい、わかりました」

私が二人の間に立ち、角を曲がると、そこには大勢の人々がずらり

と並んでいた。

皆、今回の貴族の衣装を楽しみにしている人達ばかりである。

人々は私の姿を認めると、一様に驚いた表情で話し始めた。

「まあ見て！ あの貴族様のお衣装！ ユウキアの花が見事に再現されていること」

「面白い衣装じゃないか」

「胸の花がとっても綺麗ね」

「意匠が凝っているな」

鈴と太鼓の音に混じり、それらの批評は私のところまで聞こえてきた。

「なんだか落ち着かないわ。みんなに注目されているのって」

「すぐ慣れるさ」

「そうですよアンナさん、何度もやっていけばそのうち楽しくなってきますよ」

治道の観衆に手を上げながらそう話すギルバートとフィリップ。

「ギルバートやフィリップはいいわよねー、堂々としていて。私は元いた世界では一般市民だったから、こういう行事は大抵見る側だったのよ。だから、腹を括ってはいてもなんだかむずむずするわ」

とはいいつつも、人からいい意味で注目されるのにどこか悪い気はしない私だった。

観衆は私の衣装を一通り批評し終わると、今度は両隣に立っているギルバートとフィリップの衣装に目を移した。

「隣に立つ二人の貴族様の衣装も一様に凝っているぞ」

「あのメダリオン、幾らぐらいするのかのう？」

これは男性陣の意見である。

それに対して、女性陣は打って変わってきゃあきゃあと呼び始めた。

「まあお二人とも、衣装がよくお似合いだわ！ それになんて美しいの」

「本当だわ！ あのお二人は今回初めて見るお顔ね！」

「あなたはあのお二人のどちらが好み？」

「どちらも素敵だから迷っちゃう」

「私はあの金色の髪の貴族様がいいわ」

「あらあんだウィリアム様のことが好きだったんじゃないの？」

「えー、でもあそこにいるお方はウィリアム様とはまた違った爽やかな色気があるからなあ」

「金髪好きなんだか、節操がないんだか」

「私は断然あの銀髪の貴族様ね！ あのだとか野生的な感じがたまらないわ！ 今度の祭りのときは私、ユウキアの花のついた仮面をつけるわ」

なんだかファンクラブが出来そうなその勢いである。

確かに、私の両隣に立っている男性陣は見栄えもいいし、堂々としている。

「どうぞご覧ください」と少しだけ鼻が高くなると同時に、なにか得体の知れないもやもや感が胸の中に渦巻く。

それを押し込めて、目の前の行事に集中する。

「あー、手を振り続けるのも結構疲れるものなのね。早くも肩と二の腕の筋肉がつりそうだわ」

しかし三十路間近ならではの肉体の衰えを感じる私だった。

私の張り付いた笑顔と、その台詞を聞いたギルバートがぽんと肩を叩いてきた。

「じゃあ、帰ったら俺が満足のいくまで揉んでやろう」

ギルバートはそう言って少しだけ頬の端をあげた。

「肩といわず、それこそ全身でもいいがな」

「もう！　ギルバートったら、こんなところでなにをいつているのよ！」

「アンナ、ところで緊張はほぐれたか？」

「え？　ああ、腕の痛みとギルバートの軽口で緊張どころじゃなくなっていたわ。どうもありがとう」

私がそういうと、ギルバートはおかしそうに顔を歪めた。

「軽口というわけではなかったのだがな。まあいい、アンナが普段通りになってくれたのであれば」

もしかして、さっきのややもや感を見透かされてはいないわよねと内心ひやひやしながら手を振る続ける私だった。

祭り 8

「ねえ見て！ あそこにいるの、ルウ達じゃない？」

控えめに手を振り続けていた私は、進行方向左側の歩道でルウ達の手招きをしているのを確認した。

「ああ、本当だ。それにしてもアンナ、よく気付いたな」

「だって約束したもの。皆に向かって手を振るって」

私がそちらに向かって手を振ると、ルウやガルデイン、ハティ達が一斉に手を振り返してきた。

中には指笛を吹いたり、両手をあげて飛び上がったたりしているものもある。

「わー！ なんなのあの歓迎っぷりは！ 我に返るとちょっと恥ずかしいかも……でも仲間がいるって嬉しい！ 祭りってこういう楽しみ方もあるのね」

ルウ達のおかげで、なんだか心の底から「楽しい、嬉しい」という気持ちかわきあがってくる。

私は彼らに向かって思いっきり手を振り返した。

「道の反対側にはブルーノやカル口達もいるぞ」

そちらにも思いっきり手を振り返す。

「まあ。そういえばブルーノったら、今回のユウキアの季節は無事乗り切ったみたいね」

「そのようだな」

くすつと笑う私とギルバート。

「水道局」の皆のおかげで、私は腕の疲れも、体に溜まりかけていた疲労も一気に吹きとんだようだった。

「アンナさんもギルバートも、このパレードを堪能してくれたようですね」

私の隣で先ほどの光景を見ていたフィリップが嬉しそうにいう。

「フィリップは？」

私が尋ねると、フィリップは綺麗な笑顔で私を見つめた。

「僕は、アンナさんと一緒にパレードに参加できたことだけで十分満足しているんです」

「わあ、そうなんだ。なんだかフィリップは欲がないのね」

その台詞を聞くと、フィリップは少しだけ目を細めた。

「……欲は、ないわけじゃないですよ。ただ、僕はこの一時を大切にしようと思っているんです。アンナさんとギルバートと三人でこ

の御輿に乗ったという思い出を」

「まあ。フィリップは本当にいい人なのね」

「そうでもないですよ？　でも、アンナさんの前ではいい人でありたいと思っています」

そういうと、フィリップは、さらに透き通った笑みを浮かべた。

こほんと咳払いをしたあと、フィリップは私の耳元に顔を寄せた。

フィリップの吐息が耳にかかってくすぐったい。

そう思っていると、フィリップがとんでもないことをいつてきた。

「実は、アンナさんは、僕の初恋の人なんですよ？」

「ふーん、私が初恋の……。って……？！」

そのときの私の顔は、たいそう間の抜けたものであったのであろう、フィリップはおかしそうに顔を歪めた。

「アンナさん、口、開いてますよ」

「あ、……え、いや、だって、フィリップ、私」

「ほら、笑顔笑顔。観衆が何事かと思えますよ」

フィリップはそういうと、自分はさっさと体勢を立て直して沿道の観衆に手を振る作業に戻った。

……えええええ？！

今の爆弾発言はいったいなに？！

それにしても私が初恋って随分遅い初恋もあつたもんだわ……じゃなくて！！

フィリップってこんな人だったかしら？

私は今混乱の極みにいるわ。

フィリップは何事もなかったように元に戻っているけれど。

一応沿道の観衆に手を振る作業だけはやっているけれど、心の中では、今聞いた言葉でかなり動揺している。

いきなり頭の中が真っ白になっちゃって、何がなんだかよくわからない。

フィリップが私のことを好きですって？

いや、好きなのはわかっていただけだけど、よりによって私が初恋の人だなんて……。

なんですかこの告白は。

うわああ、頭がぐるぐるするわ！

……ええと、神様は私に「自分がもてる」と勘違いしろとおっしゃっているのですか？

私にとってはギルバート一人だけで過ぎた存在だと思っているのに、この前はルウが、それに今回はフィリップが好意を示してくれている。

以前ギルバートが私に教えてくれた「私の魅力」については、理解はしているものの、やはり納得できそうにない。

こういう不器用で頑固なところが、今までろくな恋愛をしてきていなかった所以でもあるのだろうなあとはうすうす感じているのだけれど、それにしたってこの世界に来てから、一生分のモテ期が到来しているようなものだわ。

私の魅力って、もしかしてユウキアの花粉が影響しているのかしら？

いや、そんなわけないか。

とにかく気をとり直して、それからの私はパレードを無事終わらせることだけに尽力した。

御輿はそれぞれの街道をぐるりと回った後、サロンへと到着した。

沢山の御輿から、絢爛豪華な衣装を纏った貴族達が降りてくる。

どの貴族も、誇らしげな、満足げな表情を浮かべている。

最後の団体が御輿を降りたとき、それを合図としたのか、夜空に花

火が打ち上げられた。

どおん、どおんと打ち上げられる花火は、ユウキアの花粉の季節の終わりを告げるとともに、この祭りのフィナーレを飾るにふさわしいものだった。

「わあ！ 夜空に花が咲いているみたい！」

さきほどの告白はひとまず置いておくとして、私はこの光景に見入った。

赤や緑、青にオレンジ、白に紫と、満天の星空を背景に様々な花火が打ち上げられている。

そして街路一面は白銀の光でまばゆいほどに輝いている。

「すごい、こんな光景、今まで見たことないわ。光の川って表現はぴったりね」

私は傍に立っているギルバートを見上げた。

「まあ！ ギルバートの瞳の中に花火が映っているわ」

私がそうって目を丸くすると、ギルバートはふっと微笑んだ。

「アンナの瞳の中にも、夜空が映っているぞ」

「本当？」

「ああ、本当だとも」

そういうとギルバートは私の頬に手を添えて、ゆっくりと顔を近づけてきた。

「さっき、フィリップから告白されていたな」

「え、そうだけど」

「アンナはあいつをどう思う？」

「なんでそういう話になるのよ？」

「……なあ、今日は早めに帰ろう」

そういうとギルバートは有無をいわず私を抱きしめた。

「ちょっと！ ギルバート、どうしたの？ 衣装が潰れちゃうわ」

こころなしか、私を抱くギルバートの腕に力が籠っている。

「今日のアンナは皆のものだった。これからのアンナは俺のものだ」

私を抱いたまま、ギルバートはフィリップに向き直った。

「フィリップ、俺とアンナはこれで帰ることにする。もう貴族の役目は果たしたのだろうか？」

フィリップは、ギルバートの腕に抱かれて困惑している私を見たあと、にこりと微笑んだ。

「ええ。貴族の役目はこれで終わりです。アンナさんのその姿をもう少し見ていたかったのですけれど、帰るというのであれば仕方ありません。僕もこれで退出しますよ」

それを聞き、私を連れてきびすを返そうとしたギルバートに、フィリップは声をかけた。

「ギルバート、僕はギルバートを脅かしたりすることはありません。アンナさんにはあなたが必要なのだとわかっていますから。ですが、僕の気持ちは僕の気持ちとして変わらずに持ち続けています。それぐらいはいいでしょう？」

そういうとフィリップは、今度は私の目を見て安心させるようにいった。

「さっきは混乱させてすみませんでした。でも、今日のアンナさんを見ていたら、どうしても自分の気持ちを伝えたくなったんです。それだけです。だからアンナさんは気にしないでください」

そういつてフィリップは闇夜へと消えていった。

あとに残ったギルバートと私は、しばらくフィリップが消えていった空間を見つめていた。

「あ、……ギルバート？」

「アンナ、このまま誰もいないところへ行こうか」

「ねえ私、何か失敗しちゃったの？」

不安そうにいう私を見て、ギルバートははっとしたようだ。

「違う、そうじゃない。これは俺の気持ちの問題だ」

そういつて、ギルバートは私を横抱きに抱きかかえると帰りの馬車へと足に向けたのだった。

祭り 9

先ほどフィリップとギルバートの間になにが交わされたのかはわからない。

抱きかえられたとき、私は思わず胸の前で祈るように両手を組んだ。

滑らかな肌と彫刻のような腕のどこにそんな力があるのかと思うほど、ギルバートは私を軽々と抱えて居並ぶ貴族達の前を横切った。

私の背中に鍛えた腕の感触が伝わってくる。

ギルバートの胸元にある巨大なメダリオンは、私の脇腹にぶつかってはいたが、厚い衣装のおかげか痛みは感じない。

歩を進めるときの振動はあまりなく、腕の中の居心地はさほど悪くなかった。

……だが。

「あ、あのね、ギルバート、私一人で歩けるから」

私はもうすぐ三十になるというのにこれはなんの仕打ちだ。

「衆人環視の中のお姫様抱っこ」をされた経験なんて元いた世界ではこれっぽっちも記憶にない。

というか、芸能人の結婚式でもない限り、そんなシチュエーション

にお目にかかったことすらないのだが……。

この世界に来てから、テイリウスや危険種の獣に抱きかかえられたことはあっても、こんなに沢山の顔見知りの前でされるとちよつと顔を伏せたくなる。

それと私は体重だってそんなに軽くはない。

どちらかといえばルネサンス期の画家の絵に親近感を覚える体型なのだが、ギルバートはそんな私を実にさり気なく抱きかかえている。

それらを意識した途端、なにかの罰ゲームかと思うほどの羞恥心がわきあがってきた。

しかし私を抱えたギルバートは堂々と歩いている。

まるで大切な捧げものを運ぶかのような仕草で、やっと手に入れたという表情を隠そうともしなかった。

先ほどの私の訴えを華のある笑顔で押し止めると、ギルバートはまた何事もなかったかのように馬車へと足を進めた。

私はなるべく周りを見ないようにして、ギルバートに聞いてみた。

「ねえ、どうしてそんなに嬉しそうなの？」

私を見下ろすギルバートはその台詞を聞いて一瞬きよんとしたあと、ふわりと相好を崩した。

間近で見るその表情の変化に、私の鼓動は別のところでさらに早く

なる。

ああ、男の人の笑顔に「艶やか」という表現が当てはまるとは思わなかったわ。

穏やかな表情で、ギルバートはいった。

「これでやっとアンナとの平穏の日が訪れると思ったからだ」

知らず頬を染めながらも訝しげな表情の私に対し、ギルバートは半ば独白するかのように答えた。

「アンナを誰かと共有するつもりはない。今日、フィリップの告白を聞いてそう思った。俺に万が一にかあったとき、アンナをフィリップに託そうと思ったこともあった。だが、俺の心は、本当はそれすらも望んでいないのだということにやっと思い至ったのだ」

そういうとギルバートは、今度はぐっとなにかを堪えるような表情をした。

私を抱く腕に力が籠る。

「私、ギルバートと離れるなんて想像つかないわ。だって私達は契約者と獣の関係なんでしょう？」

「……そうだな」

ギルバートはそう呟くと、停まっている馬車の前で私の顔を見た。

「アンナは俺がアンナの獣でよかったと思っているか？」

「当たり前じゃない。ギルバートは私にとっては過ぎた存在よ」

半ば驚いた表情で、私はその質問に答えた。

どうしたのだろう、先ほどからギルバートは少し不安定な気がする。

「俺は、アンナのことを常しえに繋ぎ止めたいと思っている。自分の中に巣食うこの感情が、ときに俺自身とアンナを食い尽くそうとしているのだ」

どこか辛そうに、しかし困ったような笑顔でそれをいうギルバートを見て、私は羞恥も忘れて見入った。

ギルバートがそんな思いでいるなんて。

彼がほかの人のところへ行ってしまうないように、契約者という鎖で繋がたがっているのは私のほうなのに。

確かにギルバートは私にとって過ぎた存在だ。

だから失うのが怖いのだ。

私が持つ鈍感さは、自分の心を覆う鎧と同義である。

この過ぎた存在をいつ失っても傷つかないようにと。

この国での生活基盤を作ろうとしていたのも、心の奥底で、いつこの存在を失うかと戦々恐々としていたからなのだと気付いている。

ギルバートがいてくれたおかげで、私はこの世界に段々と順応することができるようになったのだから。

だが、気付いているのと実際に態度で示すのでは訳が違うということもわかっている。

そんな私達だから、あるいは惹かれあったのかもしれないわね。

なんだか似たもの同士なのね、私達って。

ギルバートは今日、自分の不安な心をさらけ出してくれたのだ。

愛の重さなんて知らないけれど、私達は、確実にお互いが必要としている。

それは契約者と獣だからなのだろうか。

ギルバートを失うかもしれないということが、こんなにも私を不安にさせているし、ギルバートと同じ思いでいるようなのだ。

これも皇帝陛下の呪なの？

私を抱えたまま、ギルバートは馬車に乗り込んだ。

私は組んでいた手をギルバートの首に回し、そっと抱きしめた。

「私は、ギルバートとずっと一緒にいるから。なにがあっても離れないから」

「アンナ……」

「だから、ギルバートも私を置いてどこか遠くへ行っては駄目よ。そしたら私、ギルバートを想って泣き暮らすと思うわ」

それを想像したら思わず涙が出そうになった。

「アンナを泣かさないように、常しえに傍にいと誓おう」

「ええ、約束ね」

私達は、馬車の中でしっかりと抱き合ったのだった。

番外編 フィリップの想い

天井にはガラスでできたシャンデリアがいくつも吊るされ、椅子の上にはふかふかとした毛皮が敷き詰められている。

ガラスが反射して、部屋中がきらきらと光り輝いている。

そのシャンデリアの下では、一部の隙もなく豪華に着飾った各地の貴族達が談笑していた。

皆、各地で将来を嘱望された有力な貴族の子女達である。

この外遊は、土地同士の均衡を保つためのものであり、また、各地の貴族同士が強固な絆を結ぶためのものでもあった。

そのために子女たちは外遊のための勉強や稽古事に励み、ひいては貴族同士の婚姻も視野に入れている。

貴族達は皆見目麗しかったが、その子女達の中で、一際目立っている人物がいた。

赤みがかった金髪は、シャンデリアの淡い光に反射して艶やかな輪を作っている。

白磁の肌は滑らかで、たった今名工によって切り取られ、磨かれたかのような様子だ。

青空のような瞳は、真っ直ぐに物事に向き合うかのごとく揺らぎが

ない。

だがその瞳は、今は少しだけ曇っていた。

――興が乗らない。

僕は、なんのために、今ここにいるのだろうか。

15才のフィリップはゴブレットを片手に持つと、貴族達の輪を離れ、ひとりタペストリーの前に足を向けた。

その姿を追ういくつもの熱い視線に、しかし彼は気付く素振りを見せず壁際へと歩を進めた。

壁面一帯にかかる真っ赤なタペストリーには、ユウキアの木立に佇む美しい女神達が描かれていた。

女神達がフィリップに微笑みかけている。

その中の蝦茶色をした髪の女神の前で、フィリップは足を留めた。

銀糸で織られた獣を抱いた女神は、幸福そうな顔をしてユウキアの木立の下で寛いでいる。

その姿は見るもの全てに安らぎを感じさせるかのようにだった。

少なくとも、フィリップはそう感じた。

「……ああ、僕の世界も、このように幸福であつたら良いのに」

その独白を聞いたのはタピストリーの女神と銀色の獣だけであつた。

ほかの人に「幸福か？」と聞かれたら、多分自分は即答で「はい」と答えるのだろう。

有り余るほどの財産、望まぬとも与えられた地位、約束された未来。だがそんなもの、自分にとってどれほどの価値があるというのだろうか。

自分の地位や財産目当てで寄ってくる相手は引きも切らない。

それは、物心ついたときからそうだったように思う。

相手が自分に優しいのは、彼らが皆心根の優しい人であるからだと思っていた。

だが、12才の頃、偶然聞いた召使達の立ち話で、その思いは打ち碎かれた。

「……ほら、あの中流貴族の。フィリップ様に言い寄ってきているあのお方。節操ないわねえ、フィリップ様はまだ12よ？ それにフィリップ様がお優しい方だからって、いくらなんでもやり方が強引過ぎるわよ」

「財産目当ての年増は嫌だわ」

「フィリップ様にはいい人を見つけてもらわなくちゃ。だっていずれ私達の主にもなるお方ですもの。フィリップ様にも早くお気づきになってもらいたいものだわ。自分の周りにいる取り巻きが、皆フィリップ様の財産目当てだってことに」

最初聞いたときは自分の耳を疑った。

召使がこの様な世間話をするのだとは思わなかったし、なにより、自分は全く人を見る目が養われていないことに気が付いたのだ。

足音を立てないように静かにその場から去ると、自分の部屋のベッドに潜り込んだ。

それからの自分は、以前のように盲目的に人を信用せず、相手を観察してから信頼に値する人物かを図ることにしたのである。

幾度も行われた外遊は、そんな自分にとって、人を見る目を養う良い機会だったと思っている。

各国の事情もわかったし、なにより自分の恵まれた立場を再認識することもできたのだから。

そうして自分の未来や立場、この国のありように疑問や憤りを感じた僕は治安部に入った。

市民の生活を守る仕事にはやりがいがあった。

最初は上流貴族の坊ちゃんのだ楽だと思われていたためか、同僚からは奇異と遠慮の目で見られていた。

だがそのうち、自分の瞳に宿る熱と、真っ直ぐな性格が受け入れられ、治安部にも少しずつ居場所ができるようになった。

それがたとえ真には自分の背後にある地位や権力によるものであったのだとしても、僕は構わなかった。

自分はただ、皆と同じ、泥まみれになって、汗して、日々の糧を得る、そんな生活がしてみたかったのだ。

――23のとき、初めて女性を抱いた。

年上の女性だった。

優しい人だったが、あとで、あのとき寝たのは僕の胤が欲しかったからだと風の噂で聞いた。

信じたくなかった。

彼女に直接聞いて、嘘だとその口ではっきり言って欲しかった。

しかし彼女から返ってきた答えは「是」だった。

本当にそれだけなのか、そこに愛はないのかと聞いたが、彼女はいった。

「あなたの愛は真っ直ぐで、私には重すぎるのよ。あなたと添い遂げる気はなかったから、子供ができなくて逆にほっとしているわ。もう金輪際あなたには近づかない。それでいいでしょう？」

彼女はそういうと、僕の前から姿を消した。

それ以来女性に手を出すことは極力避けてきた。

会う女性全てが、自分の利益のことしか考えていないように見え、うんざりしたのだ。

そんな心の傷も癒えた頃、商人連合と銀の獣の話聞いた。

その渦中にいるアンナ・タイラという人物に、僕は会って見たくな
った。

治安部の情報網を使って、彼女のことを調べた。

まだこの国に来て日の浅い、異界人であるとのことだった。

居ても立ってもいられず、僕は彼女のいる宿へと向かった。

心の中では、治安部の仕事として彼女を守るためだと半ば納得させ
ながら。

建物の隙間から見た彼女に衝撃を受けた。

蝦茶色の波打つ髪。

いつか見た、タペストリーの女神とそっくりだった。

甘い香りとともに、彼女は嬉しそうに料理をしている。

なぜそんな顔ができるのだろう。

そう思ったとき、いままで感じたことのない気持ちがわき上がってきた。

これまで出会ったどんな女性にも感じたことのない気持ちに僕は戸惑った。

見るものに安らぎを感じさせるようなあの笑顔。

——ついに見つけたのだと思った。

自分の想いを預けられる人を。

だが、彼女にはすでに銀色の獣が傍に寄り添っていた。

均整の取れた肉体、しなやかな足運び、隙のない気配。

人の姿を取っていても、その内に眠るのは獣のそれだと気付いた。

同じ男として羨ましいと思った。

愛するものが傍におり、そのものを守って日々を穏やかに過ごすよ
うな、そんな彼のことだ。

自分には一生望めないであろうその生き方に、強烈な羨望を感じた。

だが一方で、彼女の傍にるのがあの獣で良かったとも思った。

あの獣ならば、彼女のことを幸せにできるのだろう。

あのタペストリーのように彼女の笑顔を守ることができるのである。

彼女に変わって欲しくない。

今まで出会った女性達のように、自分の地位や権力目当てで擦り寄ってきては欲しくない。

彼女の前では「ただのフィリップ」でありたかった。

それが僕の望み、僕の願いなのだと、そのとき気付いたのだ。

……彼女は今も変わらず、僕を「ただのフィリップ」として扱ってくれる。

地位や権力に固執せず、ただの人間として扱ってくれるのは、この国では、いや、この世界では彼女だけなのだと思う。

上流貴族であるということは、この国を捨てない限り一生ついて回るものだ。

だが彼女のためにこの力が必要なのであれば、いつでも使えるように、僕は貴族でい続けることを誓う。

パレードのときに、はじめて彼女に告白した。

あわあわしている彼女がおかしくて、思わず笑みがこぼれそうにな

る。

そう、僕は喜んでいる。

彼女の態度が変わらなかったことに。

銀の獣を従える貴女。

貴女の心の中には、銀色の獣がすでに居る。

でも不毛な恋などと思わないで欲しい。

僕にとっては、貴女が存在が唯一の安らぎなのだから。

予兆 1 ▲●

ユウキアの花粉の季節が終わった。

町は元に戻り、人々の生活にも平穏が訪れた。

しかし、私の身の回りにはある異変が起こっていたのである。

「アンナ、キスが欲しい」

「またなの？」

——最近、ギルバートが少しおかしい。

何がおかしいかというと、第一にその挙動である。

ここ最近のギルバートは生まれたばかりの雛のように私のあとをついてくる。

私が行くところどこへでも付いてきて、キスをねだるようになったのだ。

しかも、それは深いほうのキスで、必ず口内を丁寧に舐められる。

ギルバートはそうやってキスをするとうろたえるのだが、また少し経つと、私のあとについてキスをねだりにくるのである。

私は、何があったのかと首をかしげる。

キスをするときのギルバートの顔は、なにかに浮かされたような感じで、少し色っぽい。

「ちょうだい」と耳元でおねだりをされると、私はどうしても手が離せないとき以外は「ぐ……」と詰まってしまう。

だからなし崩しにキスをしているのだが……。

今は家の中でのみこういう態度だからいいものの、これが公衆の前で起こらないとも限らない。

「アンナ……」

切ない声で名を呼ばれ、やわやわと首筋やら耳元やらを食まれ、舐められ……って、それって限度ってもんがあるでしょうが！

こう毎回毎回深いキスをしていては、こっちの頭がおかしくなるわよ！

しかもこのキス、どうやら愛情確認のためではなさそうなのだ。

例えるならそう「喉が渴いた」が一番正しい気がする。

そう思わざるを得ないくらいの頻度なのだ。

ねだられてキスをする私も私だとは思うけれど、ギルバートの顔が

あまりにも切なくて、少しばかり困惑しているものだから、ついつい与えてしまう。

これってまるでキスというより口移しで餌付けをしているみたいな感覚ねと思ってきたころ、ギルバートが熱を出したのだ。

「まあ、これって風邪かしら？」

「どうやらそのようだ。今まで風邪というものなど引いたことがなかったのだが」

朝からギルバートの調子が少しおかしかったので、おでこを触ってみたら熱っぽいということがわかった。

体調はどうかと聞くと、少しだるさがあるとのことだった。

そんな体調でサロンへ出向こうとするギルバートの背中をぎゅうぎゅう押して、私は二階の寝室へと追いやったのである。

「アンナはだげさだな、どうして風邪ぐらいで俺が寝ていなければならぬのだ？ アンナにキスをしてもらえれば、元気になるのに」

そういつて首をかしげるギルバートをベッドに無理やり押し込むと、私は腰に両手を当てて胸を張った。

「ここ最近のギルバートは少しおかしかったわ。私が気付いて体調管理に努めなければいけなかったのに、私ったらギルバートが頑丈なもんだからすっかり忘れていたわ。それといい？ ギルバート、

『風邪は万病の元』っていうの。侮ったりしちゃいけないんだから」

「だから、アナのキスをもらえれば良くなるのに。今までだってそうしてきたのだから」

「今まで？　ってことは、もうずっと前から体調が悪かったの？」

「ああ。ユウキアの花粉の季節が終わってからここ最近、どうも調子が優れなくてな」

「……とにかく、今日は部屋で休んで。私お昼はなにか消化にいいもの作ってあげるから」

そういうと私は慌しく部屋を出て行った。

ギルバートの体調が悪いなんて気付かなかった。

ただ、頻繁にキスをねだりに来る以外は、どこも変わったところは見受けられなかったのに。

ギルバートの本当の姿は狼なのだから、自分の体調の変化を敏感に感じ取っていたのかもしれない。

ああ、こういうことに気付かなかった私って最低！

召使にたらいと水、タオルを用意してもらっている間、私は腕まくりをしながら、病人食仕様の、チーズリゾット風味の料理を作ろうと思いついた。

体調の変化に気付けなかったお詫びも込めて、簡単に美味しく食べ

られるものを作ろうと思ったのだ。

材料はバター、米ではなく麦、白ワイン、だし、チーズのようなもの、塩・コシヨウ、パセリである。

本当はタマネギやニンニク、オリーブオイルなども使いたかったのだけれど、手元にある材料がこれだけだったので、風味付けの面では妥協することにした。

ベッドに寝ているギルバートの額に固く絞った濡れタオルを当てにいったあと、私はリゾット作りに取り掛かった。

麦なので、火の通りは早く、バターと一緒に炒めるとすぐにしんなりしてきた。

そこに水に溶かした魚介系のだしと白ワインを加え、アルコールを飛ばして柔らかくなるまで煮たあと、チーズ、塩・コシヨウで味付けをする。

仕上げにパセリを散らして出来上がりである。

「うん、まあまあね」

チーズがいい仕事をしてくれたので、味の面でも妥協できるものとなった。

トレイに水とリゾットと果物を載せて二階へと上がる。

そして部屋に入ると、私は自分の目を疑った。

「あれ？ ギルバート？」

そこには寝ているはずのギルバートはおらず、脱ぎ捨てられた衣服だけが残っていたのである。

トレーをサイドテーブルに置くと、私は部屋の中を探し回った。

ベッドの下も見て回る。

「ギルバート？ どこなの？ 料理冷めちゃうわよ？」

だが、ギルバートの姿は一向に見つからなかった。

——おかしい、なにか変だ。

今までギルバートが私に無断で家を出ることなんてなかったのに。

しかも、衣服が脱ぎ捨てられているということは、ギルバートは獣の姿で出て行ったのだ。

なぜそんな姿で？

というより、なぜ獣の姿にならなくてはいけなかったのか。

どうして？

体調が悪い今、なぜギルバートは自分からいなくなったりしたのだ

ろう。

この前、私はギルバートに離れないでっていったのに。

……でも彼は決して約束を違えるような人じゃない。

だからこれにはきつとなにかあるのだとはわかっていても、ギルバートが無断でいなくなったことと、体調が優れなかったことに対する不安がじわじわと私を覆ってきた。

「どうしよう、こういうときは誰を頼ればいいのかしら？ 『水道

局』の皆は今仕事に出ているし、ティリウスは多分今日も宮殿のどこかで調べ物をしているだろうし、やっぱり今すぐ連絡が取れて、頼れるのはフィリップかしら。でも、ギルバートがすぐ帰ってきたらどうしよう？ 私の取り越し苦労だったら？ ギルバートは汗をかきに外へ出たという程度の理由だったら？ もしそんな理由だったら、フィリップに迷惑かけちゃうわ」

逡巡ののち、私はしばらく待つてみることにした。

「焦って動くよりは、家でギルバートが帰ってくるのを待ってみて、それでも駄目だったら、『水道局』の皆のところへ行こう。皆なら、狼の生態もよくわかっていると思うし、そのほうが確実だわ」

そう決めた私は、まんじりともせずギルバートの帰りを待ったのだった。

だが、日が傾き始めてもギルバートは帰ってこなかった。

黄昏た通りを見ながら、私の不安はさらに募る。

いても立ってもいられず、私は通りに飛び出した。

左右を見回し、ギルバートの姿を探す。

しかし、それらしき姿は一向に見つからない。

「どうしよう、私、対応を間違ったんだろうか。ギルバートが帰ってくるかもなんて思って、家の中でじっとしていたのが間違いだったのかしら。もっと早く、探しに行けばよかったの？」

誰に問うでもなくそう呟くと、私は通りへと駆け出した。

息を切らしながら、道を走る。

今までこんな不安な気持ちで街を駆けたことなんてなかった。

いつも誰かが傍にいてくれたから、独りで出歩くことなんてまずなかったわ。

それが今は、もうすぐ日が暮れようとしている街を無鉄砲に走っている。

自分でも馬鹿だと思う。

あてもなく、ただ闇雲に走り回ってもなんにもならないのに。

そう思いながら、走り疲れて足を止めると、いつの間にか街の広場

まで来ていた。

広場には沢山の人だかりができていた。

息を整えながらその人だかりを見ていたのだが、それはどんどん増え、大きくなっているように感じられた。

ふらふらとそちらのほうへ足を向ける。

周りを見ると篝火がいくつも焚かれ、夜に備えているようだ。

その人だかりの中心に、派手に飾られた馬車と、美しく着飾った人々がいるのが見えた。

その人々の服装は、頭を薄く透けた色とりどりのシヨールで覆い、顔の下半分をヴェールで隠しており、ぴったりとした上半身の上着に対し、ズボンはゆったりと広がり足首できゅっと締まっているというものだった。

両足首には鈴がつけられており、歩くたびにしゃんしゃんと小気味よい音が鳴っている。

それはどこかインドやアラビア風の服装を連想させた。

その中で一際目立っていたのが、金糸で織られたヴェールで顔を隠した一人の人物だった。

シヨールの裾から見える赤銅色の髪と、濃い夕焼けのような峻烈な橙の瞳。

沢山の腕輪をつけた手は飴色をしている。

そしてその瞳は今、真っ直ぐに私のほうへ向けられた。

射抜くようなその視線に、私はびくりとすくんだ。

「おいそこのお嬢さん」

肩を叩かれたので振り向くと、三人連れの男がニヤニヤしながらこっちを見ていた。

「こんなところで悠々と見物かい？　なあ、俺達と一緒にそこの宿屋で遊ばねえかい？」

「結構です。人を探している最中なので」

「なに、そんなつれないことをいうなよ、その人つてのは女かい？　もしそうなら俺達も一緒に探してやるぜ？　まとめて遊ぼうや」

そういうと三人組は急に、それぞれに私の手や肩を掴んだ。

「なにをするの？！　やめて！　離して！」

あっという間にずるずると暗がりへと引っ張られていく。

「嫌！　誰か助けて！」

叫んでも、周りの人々は馬車とその傍らにいる人々に釘付けで、私の声に関心を払う人はいない。

がつつと壁に押しやられた。

男たちの目は血走っている。

なんなのこれ?!

嫌! 私こんなことされに来たんじゃない!

誰か助けて!!

ギルバート!!

そのとき、しゃん、しゃんと鈴の音が聞こえた。

鈴の音は、足音に沿って規則正しく打ち鳴らされているかのようだった。

「あんた達、うちのお客になにやってんの?」

それはあの峻烈な橙の瞳を持った、先ほどの人物だった。

「俺の客を取らないでくれないかな」

女にしては存外低い声だと思ったのもつかの間、今まで私を拘束していた三人の男達がぎゃあっと悲鳴を上げてその場にうずくまった。

見ると、男たちの手にはいつ投げられたものか、小型のナイフが刺さっている。

「ウェルミナ、勝手に出歩くんじゃない」

声のするほうに目をやると、片手に小型のナイフを握り、頭にターバンを巻いた男が近づいてくるところだった。

「アルコ、こいつらが身なりのいい客を取ろうとするから、ちょっと注意しに来たまでだ」

「もうすぐ舞台が始まる。遅れるな」

そういうと、アルコと呼ばれたターバンを巻いた男は、腕組みをしてウェルミナと呼ばれた人物が近づくのを待った。

「その客人、ぼーっとしてないで。俺達の舞台を見に来たんだろう？ もうすぐ始まるから、そんなところから出てきなよ」

「いえ、あの、私人を探しているもので」

「なんでもいいや。俺達の舞台を見ているうちに、その人がひょっこり現れてくるかもしれないよ？」

そういうと、ウェルミナとアルコはうずくまっている三人の男達に向かって一言「去れ」といった。

「おぼえてやがれ！」

「ヌミディアの薄汚い売春婦どもが！」

「せいぜい虐げられろ！」

男達はナイフを抜き、その場に討ち捨てるとそれぞれに捨て台詞を吐き、暗がりへと走り去っていった。

「あの、ありがとうございます」

「うん、で、お礼に俺達の舞台、見てくよね？」

ウェルミナはヴェールの下でにやりと笑ったようだった。

予兆 2 ●

赤銅色の髪と橙の瞳の持ち主ウエルミナと、頭にターバンを巻いたアルコに導かれるまま、私は人だかりへと戻っていった。

心臓がドキドキしている。

危ないところを助けてもらったということと、こんなところで時間を潰している場合じゃないという気持ちがない交ぜになって、みぞおちの辺りがぎゅうぎゅう締め付けられるような感じもある。

だが、夜の帳が下りたその広場の光景は、目を逸らすには惜しいと感じてしまった。

篝火がゆらゆらとゆれ、豪勢な馬車の外側についている金属がその光を受けてきらきらと反射している。

金色と橙色の混じったその光景は、その広間にいるもの全員の心をわしづかみにしたようで、私もその例に漏れなかった。

「どうしよう、こんなところで油を売っている暇はないのに。でも、ギルバートは見つかからないし、下手に動いてはまたさつきみたいに変な人に絡まれるかも知れない……」

私のその逡巡を知ってか知らずか、先を歩いていたウエルミナはくるりと後ろを振り向いて両手を広げた。

「あんたみたいな身なりのいい客は大歓迎だよ。俺達はただで芸を見せにやってきているんじゃないんだから」

ウエルミナがまたにやりと笑う気配が伝わってきた。

随分とまあ、竹を割ったような意見だわと思っていたら、案の定、ウエルミナは隣にいるアルコに注意された。

「ウエルミナ、お前のその態度が客を逃がすのだと気付かんのか」

「だってアルコ、俺は本当のことをいったまでだ。金が入らなきゃ、飯が食えねえだろうがよ。それに、聞かれなきゃどうってことないだろ」

「正直が美徳なのは余裕のある人間の中だけだ」

「へっ、俺は生きたいように生きているだけだったの。誰にも邪魔はさせねえし、俺自身はそれでいいと思っている。それと、アルコたちに大した迷惑はかけてないつもりだけど」

「その迷惑ならとうの昔に忘れた」

「ならいいじゃん」

「お前のしたいようにさせろと族長からいわれている。ただ、お前がそんな危なっかしい体では俺の気が持たん」

ぽんぽんと飛び交う言葉の応酬に、私はぽかんとするばかりだった。

この2人、一体どういう関係なのかしら。

会話から察するに、主とお付きの人のようにも聞こえるけれど、そ

れにしてはざつくばらん感じがする。

いぶかしんだ私はあることに気がついた。

そういえば、さっきからウエルミナは自分のことを「俺」といつている。

よくよく見れば、ウエルミナの上半身は鍛えられた胸板があるばかり。

会話の間合いを縫って、私はウエルミナに声をかけた。

「あの、ウエルミナさんって、その、男性ですか？」

その質問にウエルミナは「ん？」とこちらを振り向くと、あっけらかんと答えた。

「そ。俺美人だからよく女と間違えられるんだ。まあ、男だろうが女だろうが、そいつがやれることを最大限にやるってのが、俺達の流儀なんですね、俺にとっては女装ぐらいどうってことないんだ。ああ、自己紹介が遅れたな。俺はウエルミナ、ヌミディアの流しの一座を率いている。こちらはアルコ。俺の護衛だ。どちらも呼び捨てでかまわねえよ」

そういうと、ウエルミナはその場で優雅に一礼した。

「それではレイディ、今宵の出し物をご堪能下さい」

その広場の中央に、5人の踊り子が後ろに3人、前に2人と並んで

おり、クラウチングスタートに似た格好でうずくまっている。

それぞれの薄いシヨールが夜のそよ風になびき、頭を垂れたその姿からは、どんな表情も窺い知ることはいできない。

その彼らの先頭に人垣を割って登場したウエルミナが陣取り、同じポーズを取った。

瞬間、ジャン！ と大きな音が鳴る。

それが演舞開始の合図だった。

踊り子たちは一糸乱れぬ姿で跳躍した。

空中で両足を曲げ、空を飛んでいる様を表現する。

地面に下り立ったかと思えば、沖縄のカチャーシーのような手の動きをしながら左右にゆらゆらと揺れる。

その間、足首についている鈴が小気味よくしゃんしゃんと鳴る。

その音が統一されていることから、彼らの息が抜群に合っていることが窺える。

次に踊り子たちはシンメトリーに別れ、手を蝶のようにひらひらと動かした。

かと思えば、中央に並んだ3人の上を、もう3人がくるととんぼ返りをしながら飛び越える。

その舞いはまるで飛天が戯れているようであった。

踊り子たちの後ろでは、4人の男達が、それぞれ手に楽器を持って演奏している。

胡弓のような擦弦楽器を弾くものは、曲の旋律を担当している。

シタールに似た19弦の弦楽器をかき鳴らすものは伴奏を担当しているようだ。

あとの2人は、打楽器を担当している。

一抱えほどもある太鼓を脚の間に挟んで、それを叩くものと、小型のシンバルのようなものを打ち鳴らすものがある。

その異国情緒あふれる音楽は、クライマックスに向けて段々と早く、激しくなっていく。

6人の踊り子たちは演舞の最後に大技を決めるようだ。

まず2人が腕で土台を組んだ。

その土台の上に1人が乗る。

3人のピラミッドができたところで、彼らの前に2人が腕を組んで踏切を作った。

ウェルミナがその踏切の前に立つ。

観客に向けて両手を広げると、バックミュージックのテンポが最高潮に達した。

観客からは押し殺した吐息が聞こえる。

次の瞬間、ウエルミナは踏み切りに足をかけると、一気に跳躍し、空中でとんぼ返りをして、ピラミッドの頂点に立つ踊り子の両肩の上に降り立った。

そこでポーズを決めた瞬間、観客からは大歓声が巻き起こった。

「いいぞー！！ さすがヌミディアの踊り子！」

「大技もなんのそのだ！」

ウエルミナはピラミッドの上からひねりを加えて飛び降りると、地面の上でまた優雅に一礼した。

そのウエルミナの横にアルコが立ち、口上を述べる。

「さあさ、お客様方、ウエルミナ率いる一座、今宵の出し物はこれにて終了。明日はもっと面白い芸をいたしますよ。今宵の芸に満足されたお客様はこの箱にお気持ちを入れてください」

そういうと、観客の前を、箱を持って歩き始めた。

すぐにぽんぽんとお金が投げ込まれる。

その間、ウエルミナら6人の踊り子たちは観客に向かって手を振っ

ている。

バックミュージックがスローテンポになった。

今日の出し物はこれで終わりなのだという雰囲気になり、お金を入れ終わった観客は一人、また一人と家路についた。

私は小さな麻袋から銀貨を取り出すと、箱の中に入れた。

それを見たアルコが少しだけ目を丸くする。

「こんな大金を入れてくださるとは」

「さっき危ないところを助けてもらったお礼です。どうぞ受け取って下さい」

「では、遠慮なく」

そういうと、アルコは私の目をじっと見つめた。

「そうそう、あなたにはまだ少し用事があります。観客がはけるまでお待ちいただいてもよろしいでしょうか？」

「ええ、わかりました」

用事とはなんなのだろう？

こうなりやもうヤケだと思って、私は広場に残ることにした。

観客が全て去り、篝火のぱちぱちと爆ぜる音しか聞こえなくなると、アルコは私を馬車へと誘導した。

その馬車に近づくにつれ、馬車の豪華さが改めて目に入った。

壁面には金で作られたすだれのようなものがいくつもかかっており、それはまるで七夕の竹のような様相を呈している。

こんなに豪華な飾りを付けた馬車は狙われないのかしらと思いつつ、馬車の入口に立つ。

「中を見てください。あなたが探しているものが多分あると思います」

いわれるがまま中を覗いた私はあっと短い悲鳴を上げた。

馬車の奥、陰の中にうずくまっているのは獣の姿をしたギルバートだったのだ。

その体には毛布がかけられている。

「これは、あなたの獣ですね？」

アルコが静かに問う。

「ええ！　そうです！　……でもなんで？」

「それは、あんたからこの獣と同じ匂いがしたからだよ」

いつの間にかウェルミナが私の後ろに立っていた。

腰に手を当てて立つその姿は、どこまでも女性的だ。

しかし、にやっと笑う雰囲気がウェルミナという人物が男であるということを物語っている。

「どこで彼を見つけたんですか？」

「西のスラム街でね」

「西、スラム街……」

「甘い匂いがしたなあと思ったら、通りからこいつが出てきてね、俺達の前でぼったりと倒れるもんだから、見捨てるわけにはいかなかったというわけよ」

そういう声がなんだか遠くに感じられる。

ギルバートとたった半日離れただけなのに、もう何週間も会っていないような気分にするなる。

「なあ、銀貨をもう一枚くれたらあんたとかいつを無事に家まで送り届けてやるけど、どう？」

「ウェルミナ、お前というやつは……」

「是非お願いするわ。あなた達だったら信用できると思うし」

返事も上の空で、私はギルバートに近づいた。

すると、ギルバートが低く唸った。

「グルルルル……」

「どうしたのギルバート？ 私よ、アンナよ」

ゆっくりと近づこうとしたが、ギルバートはさらに唸り声を上げた。

「まさか怪我をしているの？」

その言葉には答えず、ギルバートは陰になっている体をさらに隠すように壁へと移動しようとした。

だが、体がいうことをきかないのか、すぐにばたりと倒れてしまう。

「待って！ どうしたの？！」

ギルバートに近づき、彼の姿を見た私は息を飲んだ。

陰と毛布に隠れていたギルバートの半身からは、剣山のようないくつもの銀の針が飛び出していたのだ。

ギルバートが苦しそうな息の元で言葉を吐く。

「アンナ、俺に近づくな、アンナを傷つけてしまう……」

「これは、なんなの？」

この体は一体なんなのだ。

ギルバートにただならぬ異変が起こっているのだと、そのとき私は実感した。

「俺の体は、どうやら『変容』が起こり始めているらしい」

「『変容』って」

「マルコシアスや危険種の獣達と同じものになるということだ」

苦しそうな息の元、言葉を吐き出すギルバートは歯を食いしばりながら私に告げた。

「それが始まったら、契約者の血に惑う。アンナの血を求めるようになるんだ」

こんな苦しそうなギルバートは今まで見たことがない。

だが、聞かずにはおれなかった。

「どういうこと？」

「完全に『変容』してしまったら、俺はただの殺戮兵器になってしまう」

「そんな！ どうして……」

ギルバートは苦しそうにグルルルと唸ったあと、言葉を継いだ。

「以前、俺はラカンの腕をもいだ。それにもう2度、『変容』した獣の血を浴びている。多分それらの因子が引き金になったのだと思

う」

「ギルバートはどうしたら助かるの？」

「それは……いえない」

そういうと、ギルバートはうずくまった。

「なんでよ！？ ギルバート、私にいけないなにかがあるの？」

「そりゃいえないよなあ、『変容』を元に戻す手段が契約者の生き血なんて」

バツと後ろを振り向くと、ウエルミナが神妙な面持ちでこちらを見ていた。

なんでそんなことを知っているのかとか、ウエルミナは一体何者なのかとか、そんなことは今の私にはどうでもよかった。

「『変容』を抑えるには私の血が必要なのね？ どのくらい必要なの？」

私の真剣な眼差しに少しも怯むことなく、ウエルミナは答えた。

「そこまでは俺もわからない。ただ、変容した獣を操る手段が契約者の生き血っていうのを知っているだけさ」

「なんだ、そんなことでギルバートの体を治すことができるのならば安いものだわ」

そういうと私はアルコを見た。

「アルコ、ナイフを貸してください」

「やめろアンナ！」

私はアルコからナイフを借りると、左手の人差し指にナイフの先を当てた。

「どれぐらい必要なのかは見当もつかないけれど、足りなかったらもっとあげるから」

ギルバートは慌てて私のほうへずるずると這いつてきた。

「俺は、アンナを傷つけることをしたくない！　もしかしたら血に惑いアンナを失血死させてしまうかもしれない。そんな危険な賭けにアンナを巻き込みたくはないんだ！」

「ギルバート……」

私は人差し指に当てていたナイフを手元に置いた。

そしてゆっくりと俯いた。

「そうだ、俺がアンナから離れればアンナは傷つかなくてすむ。だからこれでよかったんだ」

私が肩を震わせているのを了承と取ったのか、ギルバートは優しい声で私に話しかけた。

「俺はこれから闘技場へいく。そこで『変容』した獣として生きることにする。闘技場で稼いだ金はアンナに全部送るから、心配しなくていい。俺がいなくなっても、きつとフィリップや、宿屋の皆が助けてくれるだろう。それから……」

「あなた、ばっかじゃないの!？」

「え?」

私の大声にきょとんとしているギルバートに向かって、私は肩を震わせながら声を低くした。

「なんで西のスラム街に行ったのかやっと思当がついたわ。ギルバート、あなた、西へいつてのたれ死ぬか、そうやって運よく見つけてもらって闘技場に運ばれようとしてたのね?」

「……ああ」

「自分ではいい解決方法が見つからなかったといって、こうもあっさり私を切り捨ててるわけ?」

「そうではない、アンナやほかの皆に迷惑をかけたくなかったからだ」

「こんな簡単な解決方法があるのにもかかわらず?」

「それは……」

「それを『傷つけたくない』の一言で拒むわけ?」

私はぐっとナイフを握り直した。

「アルコじゃないけれどねえ、迷惑なんて当の昔に忘れたわよ。私はギルバートに離れないでっっていったわ。それを違えることを私は許さない。絶対に生きて、幸せな老後を迎えて、私よりあとに死んでもらうんだから！ それに私は、弱っているものを放っておけない性分なの！」

そういうと、私は左の手の平にナイフを当てて手を引いた。

「っつ……！！！」

「アンナ！！！」

皮膚がざっくりと裂ける感触がナイフを持つ右手に伝わってきた。

わかってはいたけれど想像以上に痛い。

手が焼けるように痛み、生理的な涙と脂汗がぶわっと溢れてくる。

私はその手をギルバートの口に押し付けた。

「早く舐めて！」

ギルバートは慌てたように私の傷を舐めた。

「くっ……！！ でも平気！」

私のその手をアルコが素早く取り、白い布を当てて、ぐるぐる巻きにした。

「あなたは、無茶な人ですね。これはいくらなんでも切り過ぎですよ。もっと深かったら神経が切れているところでしたよ？」

ハアハアと荒い息をつく私はギルバートの体をじっと見つめた。

変化はすぐに現れた。

体から出ていた何本もの銀の針はすうっと体内に戻り、あれだけ具合が悪そうにしていたギルバートがすくりと立ち上がったのだ。

「よかった、ギルバート」

それだけをいうと、私はぐったりと倒れこんだ。

予兆 3

波間に漂うような奇妙な酩酊感がある。

先ほどアルコに、なにかの薬を飲まされた。

ゆら、ゆらと、体が揺れる。

しばらくすると、左の手の平に焼けるような感覚が起こった。

酸欠にでもなったかのように、空気が上手く吸えない。

遠くでギルバートが呼ぶ声がする。

意識が落ちる寸前、私の目に入ったのは心配そうなブルートパーズの瞳だった。

「アンナ、アンナ」

私を呼ぶ声がする。

眠っていた私はその声に反応してゆるゆると目を開ける。

視界に入ってきたのは、澄んだブルートパーズの瞳。

右手にはふわふわもこもことした感触がある。

見慣れた風景、私はベッドの上にいた。

私の右側に寄り添うようにして、獣の姿のギルバートがうずくまっていた。

起きた私の頬をギルバートがぺろぺろと舐める。

「くすぐったいよ、ギルバート」

そうして体を動かそうとした途端、左手に激痛が走る。

「つつ……!!」

手を見ると、清潔な包帯が巻かれており、その表面には滲んだ赤黒い血がこびりついていた。

ずきんずきんと、心臓の動きに合わせて傷が脈打っているような感覚がある。

「あのあと、アルコがアンナの傷口を縫ってくれたんだ」

ギルバートがぴったりと寄り添いながらいう。

もうどこへも行くまいとするその姿を、私は痛みも忘れてちょっと可愛いと思ってしまった。

「そうだったの。私、アルコ達にここまで運んでもらったのね」

ギルバートが頭を私の首元に擦り付けてきた。

「なんて無茶をしてくれたんだ」

「ごめん、でも、あの時は無我夢中で」

「もう二度とあんなことをしないでくれ」

心の底から懇願された。

「ええ、でも私だってギルバートを助けるために必死だったのよ。ギルバートのほうこそ、一人で勝手に抱え込まないでよね」

ふっと笑うと、私は脱力した。

そういえばとあのときのことを思い返す。

『私はギルバートに離れないでっていったわ。それを違えることを私は許さない。絶対に生きて、幸せな老後を迎えて、私よりあとに死んでもらうんだから！ それに私は、弱っているものを放っておけない性分なの！』

……う、うわあああ。

少々切れていたとはいえ、私ったらなんてこっぴどかしい台詞を吐いちゃったんだろう。

しかもなに上から目線で「許さない」とかいっちゃってんだろうか……。

顔が火を噴いたように熱くなる。

羞恥心を紛らわすためにもぞもぞばたばたしたいけれど、左手の痛

みでそれもできない。

右手を額に当ててあーとかうーとか唸っている私に、ギルバートが心配そうに「どうした？ 傷が痛むのか？」とか聞いてくるもんだから、自分の世界に入っていた私はよけいに羞恥が募ってきた。

「大丈夫、傷が痛むんじゃないの。心配かけてごめんね」

我に振り返って謝るのだが、こんな時間だけはある生殺しの状態で恥ずかしい過去を反芻させるなんて、どこかにいるであろう神様は酷なことをすると思った。

ああ、こんな私は決してお伽話のヒロインにはなれそうもないわ。

あとでウェルミナとアルコに運んでもらったお代をちゃんと払わなきゃなあと思いつつ、私は無理やり目を閉じた。

次に目を覚ますと、体全体から汗が吹き出していた。

「傷が熱を持ったのかもしれない」

ギルバートが心配そうにいう。

これしきの傷で情けないと思う反面、この世界の医療レベルはどのくらいだったかしらとぼんやりと考えた。

私、敗血症のような感染症で死ぬのだろうか。

ああ、でもギルバートの血が体の中に入っているから、それはきつ

と大丈夫なんだよなあ、出会ったときのあれはあとで思うとこの世界で生きるための予防接種みたいなものだったのだよなあとふわふわとした思考で考えた。

ふうふうと汗をかく私を、ギルバートが申し訳無さそうに見つめた。

「アンナ、すまない。あれから幾度やっても人型になることができないんだ。この体ではアンナを介抱することができない」

しゅんと耳を垂れ、大きな体を縮ませるギルバート。

私はそれを聞くと、ギルバートに向かって微笑んだ。

「いいのよそんなこと。私にとって重要なのはギルバートが傍にいてくれるということなのだから。ギルバートの毛皮を触っていると安心するわ」

それを聞いたギルバートは、大きな体をぴったりと寄せ、私の右手の下に自分の頭を滑り込ませた。

「アンナの気がすむまで、いくらでも触ってくれ。それぐらいしか、今の俺にはできない。人型になれないことがこんなにも歯がゆいことだとは思ってもいなかった」

私の手に頭を擦り付けるギルバートを見て、熱に浮かされながら「あー、今幸せかも」とちよっぴり思った。

少し体調がよくなったので、召使に身の回りの介助をしてもらった。

我が家の召使は男女2人である。

どちらも16歳ぐらいの見た目で、獣である。

女の子のほうがカルナ、男の子のほうがソルスという。

カルナは薄茶色のウェーブのかかったふわふわとしたボブで、黒目がちの大きな目、細い手足に似合わず怪力で、力仕事全般を請け負っている。

ソルスは黒髪短髪で少し釣り目ぎみ、家の財産管理や、その他細々とした家計に関することを請け負っている。

2人とも働き者のため、我が家の家計は安泰なのである。

片手が使えないので、お風呂に入るときにカルナに髪を洗うのを手伝ってもらった。

カルナが石鹸をぎゅっと握り締めながら、意を決したようにいう。

「アンナ様、わたくし、精一杯努めさせていただきますっ！」

「カルナ、そんなに気張らなくてもいいのよ、私の髪なんて適当に洗ってくればいいから」

右手をひらひらと振りながらあははーと笑う私に対し、カルナはぐっと身を寄せていった。

「いいえっ！　そういうわけには参りません！　わたくしの主であるアンナ様にはいつだって最高のおもてなしをさせていただきます

っ」

そういうと、カルナは私の髪を水で濡らしたあと、恐る恐る石鹸を泡立てて、私の髪を洗い始めた。

「あー、ありがとうカルナ、片手が使えないから、お風呂どうしようかと困っていたのよ」

そういうと、背後からぐすつと鼻をすする音が聞こえてきた。

「わたくし、光栄ですっ！ アンナ様にはいつもよくしていただいていたので、いつかご恩返しができたらと思っていたんです。アンナ様はまるで姉様や母様みたいに、焼き菓子をくださったり、何くれとなく気遣ってくださるので、わたくしはこのお屋敷に勤めさせていただいてよかったと心底思っているのです。でも、そのお手はとてもおいたわしい……」

振り向かずとも、カルナがその黒目がちの大きな目に涙を一杯溜めている姿を思い浮かべることができた。

「ああ、カルナ、泣かないで。この怪我は多分1ヶ月もすれば、あとは残るだろうけど綺麗さっぱりよくなるわ。その間、面倒だけど身の回りの世話をよろしくね」

「はいっ！」

服の袖で涙をぬぐうと、それからカルナは丁寧に髪を洗ってくれたのであった。

召使のソルスにはウェルミナとアルコに銀貨2枚を渡すようにお使

いを頼んだ。

無表情なわけではないのだが、感情の乏しい彼がそのお使いを少しだけ渋っていることがわかった。

「ソルス、どうしたの？」

私は訝しげに聞いた。

ソルスは最初「主に意見するなど滅相もない」といった体で佇んでいたが、私が「何でもいつてくれていいのよ」と先を促すと、ようやく口を開いた。

「アンナ様、これでは多すぎると思うのです」

「どうして？」

「彼らがやったことは、アンナ様の傷を縫ったことと、アンナ様とギルバート様をこの屋敷に連れて返ってきたということです。その報酬にしては、この金額はあまりにも多すぎると思います」

そういうと、ソルスは俯いた。

それはまるで主からの叱責を待っているかのようにだった。

私は一瞬考えたあと、努めて優しい声で自分の気持ちを述べた。

「そう、ソルスはそんなことを考えてくれていたのね。でも私は、私達を運んでもらうのに銀貨一枚という約束をしてしまったの。その上傷の手当てまでしてもらったので、銀貨2枚は私にとっては妥

当な値段だったのよ。でもそうね、次からはソルスの意見に耳を傾けることにするわ。物の価値をきちんと把握しないと駄目よね。教えてくれてありがとう」

私がそういうと、ソルスははっと顔を上げ、目を丸くしたあと、頬をちょっと赤く染めた。

「いえ、自分のようなものの意見を取り入れてくださってありがとうございます」

そういつて、ソルスは納得した様子で使いに出してくれたのであった。

それから約1ヶ月の間、私の闘病(?)生活は続いた。

サロンに行く傍ら、医者にこまめに傷を見てもらい、2週間後には抜糸をして、そうして包帯が取れるころには傷はあまり目立たなくなっていた。

出歩けるようになった次の日、サロンに行ったときに、フィリップにはものすごく心配されたけれど、名誉の負傷だといって乗り切った。

「アンナさんは本当に無茶をする。その傷は一生残るものなのに、全然動じていないんですね」

「あー、動じていないってわけじゃないのよ。サロンに行ったらフィリップに心配かけるなあとか、皆に気持ち悪がられやしないかしらとか、結構びくびくしていたのよ」

「アンナさんは、人の心配ばかりして、自分の体のことは本当に無頓着なんですね。わかりました。僕がアンナさんの分まで目一杯心配してやりますから覚悟しておいてください」

フィリップに変な闘志を燃やされた私であった。

包帯が取れた傷を見た私は、あることに気付いた。

「なんだか、新しい手相ができたみたいね」

「手相とは？」

獣のギルバートが興味深げに聞く。

「私の世界では『手相』って言って、手の平にできた皺からその人の運命を占うやり方があるの。私の傷がある場所は『ますかけ線』って言って、比較的珍しい手相になるのよ」

「そうなのか。それで、アンナのその手相はどういう意味なのだ？」
ギルバートが尻尾を振りながらきらきらとした目で聞く。

「うーん、この線からすると、私の運命は多分安泰ね。手の平の感情線と頭脳線を繋ぐように、真一文字に線が通っているもの。これって、私の世界では天下を取る手相っていわれているのよ」

「アンナが天下を取る、か。面白い」

「そうねえ。ふふ、でもってその傍らにはギルバート、あなたがい

るのよ……。なんてね。私にはそんな野望はこれっぽちもないもの。ギルバートや、皆と穏やかに平和に暮らせたならそれでいいの」
にこにこ笑う私の顔を、ギルバートの澄んだブルートパーズの瞳が鏡のように映し出した。

傷もすっかり治ったあと、私はサロンへ行く傍ら、ギルバートを引き連れて図書館に通うことにした。

そこで、契約者と獣に関する過去の歴史を紐解く作業に私は没頭したのである。

——契約者と獣。

その存在について、おぼろげながらつかめてきた。

本来身体的に脆弱な人という種が、この世界で生き残るために、そして他国の脅威から自国を守るために、制御できる兵器を手の内に収めた結果が契約者と獣なのではないかと思われる。

獣の『変容』とは、人を喰らったり『妖獣』の血を浴びたりした獣が本来の姿から殺戮衝動を持った大量破壊兵器になるということ。

そして『変容』した獣を止められるのは、その獣の契約者の生き血だけ。

だから皇帝陛下は契約者と獣を厳重に管理しようとした。

今ギルバートは元の獣の姿に戻っているけれど、人型になることが

できなくなっているというのは、やはり『妖獣』になりかけた弊害なのだろうと思う。

契約者のいないただの『妖獣』は、この国では例外なく殺処分される運命にある。

以前であったヤマアラシのような『危険種の獣』達は、審問機関が総力を挙げて狩っていた。

使いものにならない危険な兵器を処分するのは当たり前のことである。

獣の身体能力は計り知れない。

人型のときでさえ塀や屋根など簡単に跳躍できるし、腕力や素早さだって尋常ではない。

ましてや本来の獣の姿に戻ったら、この国では向かうところ敵無しなのではないかと思われる。

獣がこの国で悪事を働こうと思ったらいくらでもできるのだ。

だからこそ、人が主体となっているこの国では獣が差別されるのである。

他国から流れ着いた獣たちはよくまあ西のスラム街で大人しく生活していると思う。

ユウキアの花粉の季節に一般の女性は護衛をつけるが、その護衛はスラム街の獣たちが請け負っているとも聞く。

年に2度、約3ヶ月間あるユウキアの花粉の季節は、西のスラム街の獣たちにとってはかきいれ時なのだ。

でも獣たちはそこまで忍耐を貫き、生活の糧を得るほど、この国で生活するほうが良いのだろうか。

ほかの国ではどんな生活をしているのだろうか。

少なくとも、この国には獣同士の縄張り争いというものはない。

人が住む場所と獣が住む場所はきちんと住み分けがされているし、スラム街といっても、公共設備は整っているため、おどろおどろしい場所では決していない。

他国では獣同士の縄張り争いや小競り合いが絶えないと聞く。

その脅威から逃れるために、皇帝陛下の呪の力に守られているこの国に亡命する獣があとを立たないのであろう。

ほかの国よりも待遇がいいこの国では、たとえ人に差別されようとも、自分たちの身の安全を守りたい獣がやってくるのだと思われる。

しかしだ。

差別は軋轢を生む。

この国は、獅子身中の虫を飼っているのではあるまいか。

いつの日か内側から食い破られないとも限らない……。

そこまで考えて、私は我に返り、ふとあることに思い至った。

「そうだ、セルビアの獣のスコルは大丈夫なのかしら。『妖獣』の血を沢山浴びているはずよね。『変容』しないのかしら」

彼らならば、ギルバートが人型に戻るための対処法を知っているかもしれない。

私はセルビアに会いに、審問機関に出向くことにしたのである。

予兆 4

カラカラと揺れる馬車の中、私はぼんやりと外を見つめていた。

「しかし、セルビアはよく私との面会を許可してくれたわね」

今、私はギルバートと2人で馬車に乗り、審問機関への道を辿っている。

数日前に審問機関に使者を送り、面会を願い出たのだが、あっさりと通ってしまった。

なぜこんなに簡単に面会要求が通ってしまうのかと首をひねるでもないわけではないが、とにかく、ギルバートを元に戻す方法をセルビアが知っているかとも思い、その望みにすぎる私だった。

馬車がああ監獄要塞の様相を呈した建物の前に着く。

「いつ見ても陰気な建物よね……っていつても、来たのはこれで2度目だけだ」

前は、馬車に揺られてグロッキーになったうえに、ちょっとした拷問まがいの面接を受け、拳句の果てに催涙ガスで涙をぼろぼろと流しながらテイリウスの肩に担がれ蛙のような声を上げたというとても悲惨な思いがある。

そうそう、忘れちゃいなかったわ。

あの拷問面接には、名誉顧問のルイウスもとい現皇帝陛下ユリウス

3世かもしれない人も同席していたんだった。

ゆるくウェーブがかった漆黒の短髪に琥珀色の瞳でなかなかの男前の癖に、片眉ひとつ上げたただけであんなにいけ好かない顔になるあの男。

今日セルビアに会ったらギルバートのこともそうだけど、ルイウスのことを詳しく聞いてみよう。

そう思っていると、ちょうど出迎えの人が馬車の目の前に着くところだった。

「今日はセルビア様、ルイウス様兩人との面会となっております」

そういわれた私は少しだけ驚いた。

「ルイウス様？」

「ええ、名誉顧問のルイウス様が特別にご同席なさるとのことです」
願ったり叶ったりというべきか。

この機に乗じて、ルイウスⅡユリウス3世説を暴いてやろうと思った私であった。

案内された部屋で待っていると、程なくして扉が開かれた。

入ってきたのは灰色の艶やかな髪を後ろに垂らした死の侍女セルビアと、名誉顧問のルイウスと名乗る男だった。

私は席を立ててそれらの人物を出迎えた。

この部屋は部屋の中央にソファがテーブルを挟んで対面に置いてある。

セルビアとルイウスは向かい側の席にそれぞれ座った。

私の隣にはギルバートが伏せており、そのことが私にかなりの安心感をもたらしていた。

私は彼らに続いて席につくと、単刀直入に話し始めた。

「本日はこのようなお時間を取っていただきありがとうございます。本日窺ったのは、『変容』しかけたギルバートが人型になれないがどうすれば人型になることが出来るのかということでお話を窺いに参りました。皆様方のお知恵をお貸しいただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします」

私は頭をぺこりと下げた。

私のこの訴えを聞いたセルビアは涼やかな顔を崩さずに返答した。

「契約者の獣の不備を点検するのは我ら審問機関の役目。お答えいたしましょう。ギルバートが人型になれないのは、現在体の中で契約者の血と取り込んだほかのものの血が拒絶反応を起こしているからです。『変容』が収まったというのであれば、契約者の血がほかのものの血に勝ったということです。程なくしてギルバートは人型をとることが出来るでしょう。今人型になることが出来ないのは、体の中にある契約者の血とほかのものの血のバランスが取れていな

いたためであると思われます。期間は正確にはわかりませんが、数日から数週間で元に戻るでしょう」

「よかった、それではギルバートはもうすぐ人型になれるということなんですね？」

「先日の報告を読む限りでは、ギルバートの『変容』が収まってから一月近く経ちますね。それであれば、通常ならば体内バランスが元に戻っているころでしょう」

よかった、ギルバートはちゃんと人型になることができるんだ。

「ありがとうございます、おかげで安心できました。そういえば、セルビアはどうやってスコルの『変容』を抑えているのですか？」

私は加減がわからずに全治一ヶ月の傷を自分で作ってしまいました」

「契約者の血には強い作用があるため、『変容』の初期段階であれば数十滴で効果が現れます」

「ということは、早めに対策を取っておけば、『変容』を抑える際に契約者の血に惑うことはないんですね」

「ええ。その通りです。また『変容』を抑えるための血の投与は早ければ早いほど少量で効果を発揮します。私の獣のスコルには『妖獣』の血を浴びるたびに、そのつど数滴の血を与えています」

「そうだったんですか。だからスコルは『変容』しないでいられたんですね。ところでスコルは人型になることはないのですか？」

私はその質問をすると、セルビアは少しだけ眉根を寄せた。

あ、いかん、何か聞いちゃいけない質問だったのかしら？

「あれを人型にしないのは私の一存です。必要があればそうしますが、現時点に至るまで本来の姿のままにいることになんら不都合はありません」

「そうなんですか。質問に答えていただきありがとうございました」
私がほっと胸をなでおろしたそのとき、私の目の前に座っているルイウスという男がおもむろに口を開いた。

「セルビア、この女、獣の使い方がまるでなっていない」

……え？

思わず目の前の男前を見る。

琥珀色の瞳には少々の侮蔑と、残念がる色が浮かんでいた。

まただ。

この「君には失望したよ」といったような目。

この人は私になにを期待しているんだ？

それに口を開いたと思ったら、第一声がそれですか？

「こんな無知で愚昧な女に銀の獣が扱えるとも思えんが、この女が契約者となってしまうのだから仕方があるまいか」

「ええ、残念ながら」

ええ？ セルビア、「残念ながら」ってなにそれ？

しかも、無知で愚昧な女でもしかなくても私のことですよ？

一瞬ぼかんとしたあと、急に心の中が怒りでざわざわしている私をよそに、ルイウスという男はううんとしばらくなにか考え事をしたあと、手をぽんと叩いた。

「決めた。私が直々にこの女に獣の使い方を教えてやることにする」

「ですが、それはあまりにも」

「口答えは無用。私が決めたことだ」

……ええ？

どうやら、失望がぐるりと一回転して手助けに変わったみたいね。

しかし、なんですかこの勝手な話の持っていきようは。

「女、名はなんといったか」

いきなり話をふられて、おっかなびっくり返事をする。

「あの、アンナ・タイラといいます」

「ではアンナ、今日からお前は皇帝付きの神官になれ。私の元で、

獣のその力、十二分に発揮してもらおうぞ」

「はっ、はいいい?!」

なんなのこの人、「私の元で」って、自分が皇帝陛下であるということに全然隠していないんじゃない?!

「なにか不服か？」

そういうとルイウスは尊大にソファアの背にもたれかかった。

「不服といいますか、いきなりそんなこといわれましても、私にだって日々の生活というものがですね」

「お前には否という選択権も拒否権も無い。この国の貴族である義務を果たせ」

「義務? いや、そう簡単に果たせといわれましてもね……あなた、何者なんですか？」

「鈍い女だな。謁見のときに私の姿を見ているはずだが？」

や、やっぱりこの人はユリウス3世だった!!

驚きと同時に、さっきからこの人から悪口をぽんぽんいわれてそろそろ我慢の限界がきている。

「じゃあ、あなたはその、ルイウスという人ではなく、現皇帝陛下ユリウス3世ということで、いや、ルイウスもユリウス3世で……?」

混乱している私を見るルイウスもといユリウス3世の顔が段々険しくなってきた。

そして、私にとっての止めの一言を吐いた。

「馬鹿と愚図は好かない」

ぶちっ。

私の中でなにかが切れる音がした。

「……はあ？　ちよつと。あんたさっきからなにいつてんの」

思わずどすの聞いた声で返答する。

「私は別にあんたに好かれようと思ってここにいるんじゃない！　さっきから聞いてりゃ、自分勝手に獣の使い方がなっていないだの、皇帝付きの神官になれたのってよくもまあそんなに要求を述べられますこと！　私はねえ、この世界でギルバートや皆と平和に穏やかに暮らしていきたいだけなんです！　あんたが何者だろうが私の知ったこっちゃないわ！」

私の顔は多分憤怒の形相になっていたに違いない。

だが、目の前の男はそれらには全く動じていない。

それどころかこんな台詞を吐いてきた。

「そのギルバートや皆の生活がお前の肩にかかっている、といった

ら？」

ヒートアップしかけた私の心はその台詞を聞いて僅かばかり思い留まった。

「どういうこと？」

「さすがにもう気付いているかと思うが、私は皇帝ユリウス3世だ。私の一存で、お前達なぞどうとでもできる。お前達を今より永久に国外追放にすることも、皇帝の要求を拒否したかどで闘技場で見世物にすることも」

私の心の中は、火に油が注がれた状態になった。

「へえ、そうなんだ……皇帝って、名ばかりの下種だってことがはつきりわかったわ。人質を取るなんて」

私がそういうと、ユリウス3世は不快そうに眉根を寄せた。

「人質？ 心外な。お前のほうこそ血迷って私の要求を吞まず、仲間を無駄に危険に晒している下種ではないのか？」

まあ、よりにもよって暴言を暴言で返されちゃったわ。

ってかこいつよくも女性に向かって無知だの愚妹だの馬鹿だの愚図だのって暴言を吐けるわね。

「いってくれるじゃないの。下種に下種呼ばわりされて黙ってられるもんですか！ 皇帝だかなんだか知らないけれど、売られた喧嘩は買おうじゃない！ わかりました、そうまでいうならその要求

を吞みましょう！ 吞んでやろうじゃないの！」

「なんと横柄な女だ。自分の立場をまるでわかっていないと見える。こんな女に銀の獣を取られたのかと思うと少しばかりはらわたが煮えくり返りそうだぞ？」

「取られたですって？ 人聞きの悪い！ ギルバートと出会ったのは私ですし、あなたから取った覚えもありません！」

「お前は知らないのか？ 4年前、なにがあつたのかを」

「4年前？」

今まで烈火のごとく怒っていた私はその単語に引つ掛かりを覚えた。

「4年前ですって？ ……そういえば以前ギルバートが、4年前がどうとかっていつていたわね」

「ほう、馬鹿かと思っていたが頭はそれほど悪くないと見える」

「余計なお世話よ！ それで、4年前がどうしたのですって？」

「4年前、その獣は私のものになるはずだった」

「どういうことかしら？」

「その獣は、4年前私の獣となるべく作られた特別な獣だということだ。その獣の名は『ギルバート・ファーガス・チェーン』というのだろうか？」

「どうしてそれを？」

私は驚いた。

この男の口から、ギルバートの名前が出てくるとは思わなかったのだ。

私のそんな動揺にもかかわらず、ユリウス3世はなにかを読み上げるかのように言葉を紡いだ。

「その名は、名にして名にあらず」

「ギルバートの名前じゃないって、どうということ？」

私のその疑問には答えず、ユリウス3世は言葉を継いだ。

「その名前にはそれぞれ意味があることを知っていたか？ ギルバートは『輝かしい契約、輝かしい願い』、ファーガスは『人間の選択、有力者』、チェーンは『鎖』、お前がギルバートと呼ぶその獣は、ほかの獣とは出来も理も違うのだ」

「ど、どうということ？」

困惑する私を見ると、ユリウス3世は目を細めてにやりと笑った。

「この話を詳しく知りたかったら、私の右腕として働くがいい」

「ぐっ……」

くそっ、この男、食えない。

私が心の中で悪態をついていると、隣に座っているギルバートが私を見上げていった。

「アンナ、アンナの望むようにすればいい。俺はアンナの決定に従う」

ギルバートはそう言って、頭を私の脚に擦り付けた。

その仕草を見て、ユリウス3世は嫌そうに眉根を寄せた。

「……わかったわ。ユリウス3世、私は、あなたの望むように、働くことをここで誓います。先ほどは失礼な言動をしてしまい申し訳ありませんでした」

「ほう、随分殊勝な態度だな。急に物分りがよくなったか。それはその獣のためか？」

「それ以外になにがあるっていうんですか！」

眉を吊り上げながら怒ると、ユリウス3世は失笑気味に笑った。

「ふん、お前はそちらのほうが性にあっていると見える。まあよい、特別に先ほどの言動は不問にしよう。やっと出来た右腕が、その日の内に闘技場送りではかなわないからな」

その言葉を聞いたギルバートはグルルルと威嚇した。

「皇帝陛下、俺はアンナにしか従わない。それ以外の、ほかの誰も、俺を従えることは出来ない。それをよく覚えておいてほしい」

そういうと、ギルバートはユリウス3世を真っ直ぐに見つめた。

「ほう、面白い。ギルバート、お前はこの女からなにを得たのだ？」

「人を愛するということだ」

その台詞を聞いたユリウス3世は皮肉げに笑った。

「はは、獣のお前が愛だと？ 笑わせる。受肉し、愛を得た獣がこんなにも弱いものになるとはな。お前のような獣に愛など必要ないのだよ」

「ユリウス3世、いい加減にして！ それ以上ギルバートを侮辱したら私が許さないわ！」

「どう許さないと？」

「私が、あなたに、取って代わるわ」

そういった自分の言動にはっとした。

嫌だ、私ったらなにをいって……。

「ははは！！ ははっ！ 今日本当に面白い！ 銀の獣が手に入るだけでなく、私の後継者まで見つかるとは！」

そういうとユリウス3世は席を立ち、私の前まで来ると、私を見下ろした。

「だが、覚えておくといい、お前のその言動、皇帝になるのであれば命取りになるということを」

「いつ、今のは売り言葉に買い言葉というやつで、別に深い意味は……」

そう言葉を濁してユリウス3世から目をそらした途端、ユリウス3世の隣で私を見ていたセルビアの視線がひどく凍っていることに気付いた。

うわああ、私今完全に墓穴を掘ってしまったわ。

今までもものすごく酷い返答をしていたばかりに、セルビアからキツイ視線を浴びていたんだわ。

セルビアのこんな視線に気付かなければよかったよおお！

我に返った私が血も凍るような体験をしている最中、セルビアは視線をユリウス3世に向けた。

「皇帝陛下、このようなものを本当に傍付きにしてもよいのです？」

ところが、皇帝はと見ると、予想外に晴れ晴れとした表情をしている。

さっきまで陰悪といえるような雰囲気であったのになぜと内心で訝しんでいると、ユリウス3世は私の目の前でふっと笑った。

私は思わず目を丸くした。

だって、驚いて当然だわ！

今まで片眉上げたいけ好かない顔やら、不快そうに眉根を寄せる顔しか見せていなかった人の普段の笑い顔なんて。

さっきまで口論していた相手に対する表情としてはあまりにも余裕過ぎる。

ユリウス3世は私を見下ろしたまま腕を組んで静止した。

「私の前で堂々と『私に取って代わる』という発言をしたのはお前が初めてだ。そのようなものを私の右腕として傍に置くのもまた一興だ」

そういつてユリウス3世は、今度は私の頭に手を置き、ぽんぽんと軽く2、3度叩いた。

私はその仕草にぼーっとしていたが、はっと我に返った。

（ぜ、前言撤回！ こいつ、私を餓鬼扱いしている！）

くそっ……うーわー、思い返すと今のはちょっとイラッとしたわ！！

こっちは年相応の精神年齢に達しているという自覚があるだけに、「あんまりヒートアップするなよ、お譲ちゃん」的な態度を取られたら、いくら温厚な人間でも流石にイラッとするわよ。

いや、私だってそれ以前の対応は確かにちょっと大人気なかったかもしれないけれど！

しかしそれ以前に暴言という喧嘩を吹っかけてきたのは向こうだったはずだ！

だめだ、私はどうやらこの人の前に出ると、子供のように感情のセーブが効かなくなるらしい。

……こうして私は大変厄介な相手の右腕となってしまうたのである。

予兆 5 ▲

数日が経った。

本日、宮殿では私にとっての2度目の謁見が行われている。

今度の謁見は、私がユリウス3世傍付きの神官になるということ周囲に了承させるものだった。

以前の謁見でティリウスが「またこんな機会がある気がしてならない」というようなことをいつていたが、それが本当のことになるとは思っても見ない私だった。

「わー、こういうのって成り上がり人生っていうのかしら」

この世界に来てから順調に地位がアップしていることについて、私は感慨深げに呟いた。

これを機に何か事業でも起こしてやろうか、などと企んだのだが、所詮元一般市民である自分にそんな商才が備わっているはずもないと思い早々に諦めた。

だが地位と中身が合っていないなんてことにならないよう、精一杯学ぼうと思った矢先、早速ユリウス3世からの呼び出しがあったのである。

案内人に連れられ、獣の姿のギルバートと一緒に廊下を歩いている最中、私はぼんやりと考え事をしていた。

「ユリウス3世から直々に獣の使い方を教わるっていても、私はギルバートを道具にするつもりはないし、知りたいのはギルバートの出来と理がほかの獣と違うということだから、適当に頑張って適当に教えてもらいましょう」

ある意味呑気に構えていた私は、案内人に連れられた部屋に入って愕然とした。

「な、なんですか、ここは」

その巨大な部屋は、ある種禍々しい様相を呈していた。

壁から突き出た何本もの巨大な斧、振り子のように揺れる巨大な棘付きの鉄球、壁から不規則に飛び出す槍、地面はこれもまた不規則に剣山が飛び出してくる。

「遅かったではないか」

声のするほうを見ると、傍らに金色の毛並みの美しい獣を引き連れたユリウス3世が部屋の一番奥に立っていた。

よく通るその声は、部屋の端にいても十分に聞こえた。

「ここは一体なんなんですか?！」

声を張り上げ聞く私に、ユリウス3世は至極当然のことといったように答えを返した。

「ここは獣の簡単な修練場所だ。今私の獣をそちらに向かわせるか

ら、詳しくはその獣に聞くといい」

そう言うが早いか、ユリウス3世の傍らに控えていた獣は、彼の傍を離れると、金色の毛をなびかせながら部屋をひよいひよいと渡ってきた。

ユリウス3世はというと、部屋の一番奥にあるテーブルに着き、優美なカップを手に持つところだった。

いとも簡単な風情で仕掛けの間を渡ってきた金色の獣は、私の前に出ると礼儀正しくお辞儀をした。

「お初にお目にかかります。私は皇帝陛下ユリウス3世の獣のレーニアと申します」

そう名乗った獣の低く温かい声から、この獣が雄であることがわかった。

レーニアは次に、部屋の隅の壁にかかっているハーネスのようなものを咥えると、私に差し出した。

「アンナ様は、ギルバート様に騎乗され、この仕掛けを渡り、奥のテーブルまで到達なさって下さい。まずそれが小手調べとなっております」

「えっ！ 私、ギルバートの足手まといになるんじゃない……」

「獣であれば主人の身体を守れることは大前提です。ギルバート様はもちろんお出来になりますよね？」

それは疑問というより確認であったのだが、ギルバートはこくりと頷いた。

「もちろんだ。この仕掛けを飛び越えて、皇帝陛下の元に行けばいいのだな？」

「ええ。それでは健闘を祈ります」

そういうと、レーニアはまたひよいひよいと仕掛けの間を飛び越えてユリウス3世の元へと戻った。

「どうしよう……、いきなりこんなハードな展開になるとは思いもしなかったわよ」

そういいながらギルバートにハーネスのようなものをつけようとすると、ギルバートはそれを押し止めた。

「アンナの体格に合わせて変化するからちょっと待ってくれ」

そういうと、ギルバートはあっという間に馬ほどの大きさになった。

「わあ！ 馬と同じぐらいの大きさに！」

「この大きさならばアンナを落とす危険なく運べる」

そういうと、ギルバートは伏せの姿勢を取った。

「さあアンナ、乗ってくれ」

どうにかこうにかハーネスのようなものをつけると、私はギルバ―

トに騎乗した。

こ、これは、もののけ姫のサンの気分になったみたいだわ。

手綱を取ると、私はきりつと前を見据えた。

その瞬間、目の前にある仕掛け達が一斉に動き始めたのである。

「えええ?! 動き出すなんて聞いてないわよー!」

「人一人を乗せ、この仕掛けの間を通り抜けるなど、銀の獣にとってはたやすいことであろう?」

カップを置きながら、ユリウス3世は朗々とした声でいった。

「……てめえ、見世物じゃねえんだぜ」

女性にはあるまじき悪態を心の中でつきながら、私は手綱をぎゅっと握った。

「ギルバート、いつでもいいわよ。私振り落とされないようにしっかりと掴まっているから」

そういうと膝をぐつとしめ、手綱を手さらにぐるりと巻きつけた。

「では、行くぞ」

そういうと、ギルバートはひらりと飛び上がった。

それからのことはあまり思い出したくもない。

ジェットコースターに乗っているかのようなあまりよろしくない浮遊感と、目の前すれすれに斧やら鉄球やら槍やらが迫ってくる感覚はしばらく夢に出そうだった。

それでもギルバートは私に傷ひとつつけることなく仕掛けを飛び越え、一番奥のテーブルへとたどり着いた。

安全な床の上に降り立つと、私はギルバートの背中からくず折れるようにして降りた。

「もう、この仕掛けは嫌です」

ぎゅっと手を握っていたからか、手に手綱のあとがくつきりと残っている。

「そうもいかんぞ。これからは毎日この部屋を通って奥の間へ行ってもらうからな」

そういつてユリウス3世は人の悪い笑みを浮かべた。

「なかなかの見ものだったぞ。さすが銀の獣だ」

へたっている私の前に、レーニアがカップの取っ手を器用に咥えて持ってきた。

「気付けも含まれております。どうぞ」

そのカップに入っている液体を一息に飲み干すと、幾ばくか気分が

しゃっきりした。

「それで、次はなにをするんですか？」

私はレーニアがすすめてくれた椅子に座った。

「ギルバートが獣の姿でいることに慣れろ」

至極簡潔な返答だったが、私はその言葉に食ってかかった。

「どんな姿をとるかはギルバートの自由でしょう？」

私のその意見を聞くと、ユリウス3世は「はあ」とひとつため息をついた。

「我々はいつ何時襲われるやも知れぬ。そのために『力』は常に剥き出しのままに持っているほうが、都合がいいのだ」

そういうとユリウス3世は自分と私のカップにお茶を注いだ。

ふん、『力』ね。

やっぱりこの人獣を道具だとは思っていないのかしら。

私は気付かれないように眉根を寄せた。

あら、それにしてもこの前とは打って変わって随分マシな態度ですこと。

私の分までお茶を入れてくれるなんて。

てつきり相手に対する配慮が出来ない人だと思っていたわ。

「そうなの……。だからセルビアもスコルをいつも獣の姿のままにしているのね」

「ああそうだ。あれは優秀で忠実な臣だからな。お前はどうかかな？」

「どうかといわれましてもね、私は生きたいように生きるだけです」
「そういうながらお茶に口をつける。」

注いでもらったカップのお茶は、元いた世界で馴染みのあるセイロ
ン風の紅茶だった。

一口飲んで、そのすっきりとした風味と、爽やかな後味に私は目を
見張った。

「このお茶、美味しい。この茶葉はどうしたんですか？」

私が目を丸くしながらというと、ユリウス3世は少しだけ誇らし
げに答えた。

「このお茶は私が宮殿内で栽培させている茶葉を乾燥させて作り出
したものだ。気に入ったか？」

そういうと、ユリウス3世はふわりと笑った。

「ええ、気に入りました」

気に入りました、けど、……あなたのその不意打ちの笑顔はいりません！

私は阿呆面をしないように最大限の努力をした。

あの、なんだか、あなたのそういう顔を見ると途端に胸がざわざわします。

どうしちゃったんですか？ ユリウス3世。

この前は暴言三昧、今日はどSな仕打ちをしておいて、笑い顔がなんでそんなに柔らかいんですか？

自分の好きなお茶を褒められただけで、どうしてそう柔らかい笑みなんか浮かべるんですか？

聞きたいことは一杯あるのに、酸欠にでもなったように私の口からはなんの言葉も出てこなかった。

そんな私の表情をどう捉えたのか、ユリウス3世は口を開いた。

「この国の人間、特に貴族以上になったからには、望むような人生を生きることには無いに等しい。望まぬ人生といえば、スラム街の獣たちもあるいはそうであるかも知れぬな」

私ははっと我に返ると、目の前にいるユリウス3世をまじまじと見つめた。

「あの、なんで今日はそんなに穏やかなんですか？ この前は散々よろしくない言葉を述べてらっしゃったのに、今日はなんだか、優

しい、です」

私が口ごもりながらそういうと、ユリウス3世はぼかんとした表情をしたあと、ふっと苦笑した。

「面白いな、お前は。皇帝になってからというもの、私の前でこうもそんなに自分の感情を素直に表現するものはいなかったな。久しく忘れていたぞ。それに、今の私が優しいだど？ お前に先ほどのような仕打ちをしておいてそう思うのか？」

ああ、この仕打ちが尋常なものではないことはわかっていたのねと思う反面、今日のユリウス3世は今まで見てきたユリウス3世のどれとも違う表情をしているなと私は思った。

「この前はお前に対して失礼な言動を数多くしてしまったな。言葉の重さを知るからこそその反動だと思ってくれればいい」

うっ、だが失言を認めても謝りはしないんかい。

「言葉の重さ？」

「ああ。この宮殿内では、私の言葉は拘束力を持つ。だからこそ、私の言葉の及ばない外ではいささか暴言が過ぎるのであろうな」

つまり外に出たからといって羽目を外しちゃったというわけか。

「皇帝陛下の仕事って窮屈なんですね」

私がそういうと、ユリウス3世はまたふっと笑った。

今度は例えるならば、兄が妹を見るような笑みだ。

「お前は素直だな。……そうだ、お前、私と一緒に世界を変えてみる気はないか？」

「えっ？　どういうことですか？」

ユリウス3世は少しだけ身を乗り出すと、まるで秘密を打ち明ける少年のような顔をした。

「銀の獣が私の手元に入った今、私の力の及ぶ範囲はさらに広がったといっいいい。今まではセルビアに多大な負担をかけていたが、これからはお前にも働いてもらうことにするがそれでいいな？　仕事の内容は私の目と耳、手足となり、間違いがあれば正すというものだ」

つまり皇帝陛下は私に水戸黄門のような役をやれといっているのか。

「嫌だといっても断れないのでしょうか？　構いませんが、その代わり、ユリウス3世は私にギルバートの出来と理についてももちろん教えてくれるんですよね？」

私がそういうとユリウス3世はにやりと笑みを浮かべた。

「ああ、教えてやるとも。これでお前は宮殿で私の右腕として働く契約を交わしたことになる」

「えっ！　今のですか？」

「皇帝の言葉の拘束力を甘く見るなよ」

そういうとユリウス3世は席を立ち、壁の一部に手を当てた。

すると今まで壁だった部分が左右に音もなく開いた。

「自動ドア?!」

「ほう、お前の世界にもこれと似たような仕掛けはあるのだな」

興味深げに私を見ているユリウス3世は、私が、ドアが開いたその先の光景にまたも驚愕しているのを見て取った。

「さて、次は礼儀作法の勉強だ。獣とはいっても、お前の獣は貴族だ。これから外交の際にこの国が侮られないように、しっかり学べ。もちろんお前にも参加してもらうがな」

扉の向こうには多分教師陣であろう人達がずらりと並んでいた。

わー、もしかしくなくても、これって絶対スパルタな仕打ちだよねー……。

「それではアンナ様、ギルバート様、みっちりとお勉強していただきますよね?」

「やっぱりスパルタだー!」

私の心の叫びは誰にも聞き入れられることはなかった。

——その日の授業を終え、部屋から出た私は流石にぐったりとして

いた。

「あー……、私は今『マイ・フェア・レディ』のイライザだと思っただけが精神衛生上幾分かはいいいのかしら」

今日の授業はというと、トイレ休憩を挟みつつ、歩き方と美しい所作のレッスン、それに加えて敬語（謙譲語、尊敬語、丁寧語）の使い方である。

「なぜ私がこんな目に……」

「アンナ、大丈夫か？ 顔がものすごく疲れているぞ？」

心配そうなギルバートを見て、私はあわてて取り繕った。

「いやあ、大丈夫。私、まさかこんなことまでやるとは思わなかったから少しだけびっくりしているだけよ。自分の身になると思ったら明日も頑張るわよー！」

拳を突き上げる私を見て、ギルバートはすまなそうな顔をした。

「アンナ、アンナ。俺が自分は何者かということを知っているのか？」

そうやってギルバートはきゅーんと耳を垂らした。

お座りしながら尻尾を丸めて、耳を垂らしてできるだけ縮こまっている。

こ、これは……。

うわあ可愛い！

私はうずうずする気持ちを抑えて努めて冷静にいった。

「あら、そんなにしょげないで。これは私が決めたことでもあるのだから。むしろ、私があんな契約をしちゃったばかりに、ギルバートを付き合せてしまっただけで申し訳ないと思っているのよ」

そういうながらギルバートの頭をわしゃわしゃと撫でる。

ギルバートは最初申し訳なさそうにしていたが、徐々にきゅんきゅんと子犬のような鳴き声を上げ、頭を私の手にぐいぐいと押し付けてきた。

「はは、ギルバートだったら可愛いなあもう。今日は帰ったら久しぶりに一緒にお風呂に入ろうか。また以前のように洗ってあげるわよ」
宮殿の廊下でそうやってじゃれていた私の目の前にひとつの影が落ちた。

ん、と思って顔を上げると、目の前に金髪碧眼の男性が立っていた。

「まあ！ ウィリアムじゃないの！ 久しぶりね！」

夕日が落ちる中、気がつくとその回廊には私とギルバートとウィリアムだけしかいなかった。

日を背にして立つウィリアムの顔は薄暗くてよく見えない。

近づいて、もつとよく顔を見ようとする。

ウィリアムは全くの無表情で私を見下ろしていた。

「どうしたのウィリアム。今日は、リラちゃんと一緒にじゃないの？」

そう聞いて首を傾げる私に対し、ウィリアムはやっと口を開いた。

「アンナさん、あなたは今日皇帝陛下の傍付きの神官となりましたね。あれからなにか変わったことは？」

どうしてそんなことを聞いてくるのだろうと思いつつ、私は今日思ったことを述べてみた。

「いやー、大変だったわ。変な部屋でいろんな特訓をさせられて、今日は今まで使っていない筋肉があちこち痛くなっちゃったわ。これから毎日礼儀作法とかも勉強するのよ？」

「ほかには？」

ウィリアムはまだ無表情だ。

どうしたというのだろう。

「うーん、あとは皇帝陛下下って思っていたよりもずっと人間らしい人だったってわかったぐらいかな。皇帝陛下の獣のレーニアにも会えたし、あとは……」

みなまでいわせず、ウィリアムのキスが落ちた。

「んんっつ……!」

いきなりのことで、全く何も準備が出来ていなかった私は、ウィリアムの深いキスを簡単に許してしまった。

気がつくのと、腰と背中を抱えられ、ぴったりと密着している。

「はあっ……あっ」

最初驚愕に目を見開いていた私は、怖くなって目をぎゅっとつぶった。

息が苦しい。

隣からはギルバートがグルルルと唸る声がある。

口内を蹂躪するその舌は、奥まで余すところなく丁寧に舐めあげていった。

どうしよう、なんでキスなんか?!

やっと離れたお互いの口からは銀色の線がつうと一本辿っていた。

「はあっ、……ウィリアム、これはなに?」

ウィリアムの固く閉ざされた腕の中で、しかしぎゅうっとうと背中を反らしながら私は聞いた。

にらむように見た私の視線を、ウィリアムは真っ直ぐに受け止めた。

「あなたを誰にも渡したくない」

茜色の空の中、ウィリアムの碧眼が冴えたように光っていた。

予兆 6 ▲

「どうということ?」

私はウィリアムに思わず聞き返してしまった。

ウィリアムはほかの何者も目に入らないといったような真剣な視線で私を見つめた。

「言葉通りです。このままではあなたが手の届かない遠いところに行ってしまうような気がして、私は焦っているのです。いや、現にもうあなたは皇帝傍付きの神官となり、私の地位をはるかに凌いでいる。それだけでも脅威に値するのに、あなたは聞くところによると次期皇帝の候補者だと目されているとのことではないですか。そうなるともはや私などでは太刀打ちできなくなってしまう」

そういつて長いこと私を見つめたあと、ウィリアムはやつとというべきか、ギルバートに視線を向けた。

そしてギルバートに向かってこんな言葉を吐いた。

「ギルバート、お前は不甲斐ないな。アンナさんがほかのものの手に渡ろうとしているかもしれないのに、それをみすみす見逃すのか。今だって、私が目の前で手を出しているにもかかわらず、お前はなにもしない。それでアンナさんの獣だといえるのかな?」

そういうと、ウィリアムは酷く不快そうに笑った。

「ははっ、キスキル・リラのいう通り、どうやらいつの間にか私の

中で興味が執着に変わったらしい。あなたを手に入れるまで、私はあきらめません」

そういうと、ウィリアムは「今日はこれで」といい私を開放するとその場を去った。

ウィリアムの姿が見えなくなると、私はその場に立っていられなくなつてすっと尻餅をついた。

「い、いやあねえ、私ったら、これしきのことで腰を抜かすなんて」
そういつつ、にわかに震えだす自身の身体をぎゅっと抱きしめた。

ウィリアムのさっきのあれは暴力だ。

いくら顔がよくても、やっていいことと悪いことがある。

あれは自分に惚れている相手にする分には効果があるのかもしれないが、今の私にはなんの効果もない。

いや、恐怖と嫌悪を植えつけるだけの効果はあったか。

がくがくと震えながら、しかし頭の隅では冷静に事を整理すると、私はギルバートに向かって声をかけた。

「ギルバート、ウィリアムのいうことなんか気にしなくてもいいのよ。もしもウィリアムの血を浴びてまた『変容』したら大変だものね。ギルバートが唸っていてくれたの、ちゃんと聞こえていたから」

私がそういうと、獣の姿のギルバートがブルートパズスの目からつうと涙をこぼした。

「アンナ、俺は、俺は……」

気がつくやうに紫がかった空が、私達を温かく包み込んでいた。

震えながらも気持ちが落ち着いてきた私は、ギルバートに声をかけた。

「ギルバートが泣くことなんてないのよ。あなたは不甲斐なくなんかないし、どんなギルバートでも私の大切な獣であることに変わりはないわ」

そういうながら震える手をギルバートに向かって伸ばそうとした瞬間、董色の空の下でギルバートが人型にゆっくりと変化し始めるのを確認した。

「あ……、ギルバート！」

『変容』の後遺症がまだ残っているのか、以前のように瞬間的に変化するには及ばないが、それでも確実に獣から人へと変化している。

狼の顔が人型に変わっていく様子は、何度見てもCGを見ているかのようにだ。

銀色の鬣が銀色の髪に、鼻と口は人間のそれに、だがその中で瞳に宿る強さだけはブルートパズ色のまま変わらなかった。

一糸まとわぬ姿になったギルバートは身なりに構わず、私をきつく

抱きしめた。

「すまない、アンナ、遅くなった」

ああ、いつものギルバートだ。

「ギルバート、よかった、あなた、やっと人型になれたのね」

背中に手を回すと、ギルバートのなめらかな肌の感触が、自分の未だ震える手を通して伝わってきた。

その手にぎゅっと力を入れると、それに応えるかのように抱き返してきた。

私の耳元では押し殺した吐息が聞こえる。

顔を見ると、ギルバートの目からは透明な涙がいくつもいくつもあふれていた。

「……ウィリアムのいう通り、俺は不甲斐ない。大切な人を守ることにすら出来なかった」

そういうとギルバートは私をさらにきつく抱いた。

私は安堵と共感で涙を目に溜めながら、ギルバートに向かって囁いた。

「いいえ、ギルバート、ギルバートは今こうやって私の心を守ってくれたわ。それだけで、私は十分に幸せなの」

私はギルバートの両頬に手を添えると、ゆっくりと口づけをした。

それはすぐにお互いがお互いを求め合う深いものへと変わり、そうしてギルバートはそのまま、私の震えが収まり落ち着くまで、ずっと抱きしめていてくれたのだった。

次の日、私達を昨日と同じように仕掛けの部屋で待っていたユリウス3世は目を見開いた。

「ギルバート、お前、それはどういうことだ」

私の傍らには人型をしたギルバートがいる。

剣闘士のようなサンダルを履き、膝までのハーフパンツにぴったりとした薄い半そでの上着を着ており、短めの青いトーガを羽織っている。

腰に片手を当て、少しばかりだるそうな風情でギルバートはユリウス3世に向かっていった。

「昨日あなたの獣のレーニアはこういった。『獣であれば主人の身体を守るのは大前提』だと。また、あなたはこういった。『一人を乗せ、この仕掛けの間を通り抜けるなど、銀の獣にとってはたやすいことであろう?』と。俺は銀の獣だ。この姿でも主を無事に守りきれんし、むしろ俺にとってはこの姿のほうがアンナを守りやすいことに気付いたのだ」

しれっと、ともすれば尊大な態度にも見えるギルバートは、堂々とした声でそういった。

「よいのですか？ わが主よ」

レーニアがそういうが、ユリウス3世は意に介さずにギルバートに
応えた。

「ほう、よかろう。ではギルバートよ、その言葉今ここで証明して
見せろ」

ユリウス3世がそういうと、仕掛けがごおんごおんと動き出した。

「アンナ、俺を信じてくれるな？」

「ええ、もちろんよギルバート」

ギルバートは私を片手で救い上げるようにして抱えた。

私はギルバートの首にしっかりと腕を回してしがみついた。

「ふむ、妬けるな、その体勢は」

遠くでユリウス3世が何事かを呟いていたが、今の私にはどうでも
よかった。

ギルバートの腕の中にいることがこんなに安心感をもたらすなんて。

「では、始めよう」

ギルバートと私はふわりと飛び上がった。

ギルバートは獣の姿で初めてこの仕掛けに挑んだときとなんら遜色なく、仕掛けの間を丁寧に抜けていった。

ごおんごおんと動いている巨大な斧は、反り返っている上の部分に上手く乗って、ひらりひらりと飛び移る。

壁や床から出てくる槍は、棒の部分足を足場や取っ手代わりにする。

上からの鉄球と左右、下から突き出てくる槍と剣山の部分は鉄球の上に乗って通り抜けた。

その間、ギルバートの身体はぶれることはなく、私は目をつぶって胃が浮くようなあの浮遊感と圧力さえ我慢していればどうということとはなかった。

そうして、私とギルバートは無事に対岸へと着いたのである。

安全な地面に着くと、ギルバートは私をそっと下ろした。

「これは反則ではないのですか？」

レーニアがユリウス3世に向かって聞くが、ギルバートはあくまでとぼけた表情をしている。

「わざわざ危ない場所を渡る必要もあるまい。この仕掛けの部屋は、主を安全に守りきれるか否かの試験場なのだろう？ それならば文句なしに合格といったところではないのか？」

「はは、確かにそれもそうだな。これは一本取られた」

ユリウス3世が面白そうに笑う。

「人型の姿のお前には一度会ったことがある。確かあれはお前の主を助けに行くための嘆願をしにきたときであったか。お前はあの時も同じような目をしていたな」

そういうと、ユリウス3世はテーブルに3つのカップを並べるとそれぞれにお茶を注いだ。

「ギルバートよ、お前も飲んでみるがいい。お前の主が気に入ったお茶だぞ」

今日のユリウス3世も、すこぶる機嫌がいいようだ。

ギルバートはテーブルの上からカップを取ると、立ったまま匂いを嗅いで飲み干した。

「ああ、これは美味しいな」

そういうとギルバートはカップを置き、私の後ろに佇んだ。

「ユリウス3世、昨日の今日だが、俺の出来と理というのを教えて欲しい」

そういうとギルバートは私が座っている椅子の背もたれに両手を置いた。

「アンナをそのようなもので縛らなくとも、すでにあなたとの契約

は成されたのだろうか？　これは俺自身の問題だから、アンナとは関係ないと思っている。どうかアンナを出来るだけ自由にやって欲しい」

私は思わず後ろを振り向いていった。

「関係なくはないわ！　ギルバートのことは私のこともあるもの」

その真剣な声音を聞いたユリウス3世は驚いたような声を出した。

「アンナよ、ギルバートが人型になれた途端、えらい変わりようだな。それほどその獣のことが好きなのか」

そういうユリウス3世に対し、私は当然といった体で答えた。

「ええ、もちろんよ。それとひとつ訂正しますが、私は人型のギルバートだけでなく、ギルバートそのものをまるごと愛しているんです。だから私も知りたいんです、ギルバートの出来と理を」

私がそういうと、ユリウス3世は少しばかり目を見開いたあと、ふっと笑みを漏らし、私のうしろに控えているギルバートとレーニアのほうに目をやった。

「ギルバート、お前は異界でなかなかいい女に巡り合ったのだな。……なあ、レーニア、残念だがこれでは私達が入る隙などこれっぽっちも無さそうではないか」

「ええ、実に残念ですね」

そういいながら頷き合う一人と一頭を目の当たりにした私はぽかんとした。

「ええ?! お二人とも、なにをいつてらっしゃるんですか?」

「これはただの冗談だ」

さらりというユリウス3世。

くっ……こうやって人を煙に撒くのは相変わらずか。

しかもレーニアまで便乗かい。

契約者と獣は性格も似てくるのだろうかと思った私は、先ほどの質問を再度聞いてみることにした。

「そういうことで、次の部屋へ行く前に、ギルバートのことについてお聞きしたいのですけれど、その時間はありますか?」

「ああ、あるとも。では、お前達の望みどおり、ギルバートの出来と理について教えてやろう」

そういうと、ユリウス3世はカップのお茶を手に取り、ゆっくりと飲み干した。

その空のカップを置くと、ユリウス3世は両手を組んで肘をテーブルの上につき、話し始めたのである。

「もともと、ギルバート・ファーガス・チェーンという存在は、次期皇帝の獣となるために作られる特殊な獣のことを指すのだ。皇帝

が新たに立つと、前皇帝の呪が残っている闘技場に強い獣を集め、そこで殺し合いをさせる。そしてその中で生き残った一番強い獣を皇帝に献上する仕組みになっているのだ。これは祭祀の一環でもある。ギルバート・ファーガス・チェーンは、本来は皇帝を守る最強の盾にして剣なのだ。私の場合はそのときのギルバート・ファーガス・チェーンが手に入らなかったので、変則的にレーニアを自分の獣とした。レーニアは文官と武官が、独自に呪が消えたあとの闘技場で祭祀の真似事を行い、私に贈ってきた獣だ。ちなみにレーニアの意味は『統治者』。そこそこの力はあるが、特殊な環境で作られたギルバートには遠く及ばないだろう」

そういうと、ユリウス3世はギルバートに向かってこういった。

「お前は覚えているな？ 4年前、自分が闘技場で戦ったときのことを」

「ええ。決して忘れることの出来ない複雑な思い出ですがね」

ギルバートは過去を振り返ったのか、少しだけ痛みを堪えるような表情をした。

「自分の呼び名がギルバート・ファーガス・チェーンだと知ったのはいつだ？」

「異界でアンナの血をもらったときだった。それまでの俺は何者でもなかった」

「契約者と獣は血の交換をし、名を呼び合うことで真の契約が成される。お前の主には契約者の資質があったのであろうが、こうも都合よくことが運ぶものだとはい自身思っていなかったぞ」

そういつてユリウス3世は私とギルバートを交互に見つめた。

「アンナは異界にいながら俺に深く関わっている。そのときにアンナの資質が育まれたのではないかと思う」

そういうとギルバートは椅子の背もたれから私の両肩へと手を移した。

それを見たユリウス3世は興味深げに片眉を上げた。

「そして4年後、お前はもう一度異界を渡ってアンナを迎えに行つたのだな。契約を半分済ませた状態でこの世界にいれば、誰にも縛られることなく生きられたものを」

「俺には、アンナが必要だったんだ。ほかの誰でもない、ただ一人の人が。だからアンナを自分の都合で無理やり連れてきてしまった」
そういうと、ギルバートは少しだけすまなそうな表情をした。

「ああ。あれは賭けだった。もう一度アンナに会いたいというただその一心で異界を渡ったのだ。無事アンナを連れ帰ることが出来たのだからよかったものの、もし失敗していればアンナに会うことはおろか、この世界に戻ることもすら叶わなかったのかもしれない。そう思うと、今更ながら震えが来る思いだ」

私は肩に置かれているギルバートの手をそつと握った。

その仕草を、目の前のユリウス3世は幾分か羨ましそうな視線で見ていたが、すぐに話を続けた。

「契約者と獣は通常でも分かちがたい絆を結ぶものだ。特にお前とアンナの場合は、チェーン、『鎖』というとても強い拘束力でもって結ばれている。お前の中には一度契約を結んだものとは離れられない焦燥感のようなものがあるのではないか？」

ユリウス3世にそういわれたギルバートは少し考えたあとこう答えた。

「確かに、アンナに初めて名を呼ばれたときは我をも忘れるぐらいの気分になったし、アンナの姿が見えないと不安になることもある。だがそれと、今アンナを大切に思っている気持ちは同じようではないと思うっている」

その答えに対し、ユリウス3世はどこか楽しげに返事を返した。

「そうだな。お前の目を見ればそのことが伝わってくる。本来盲目的に盾となり剣となるはずのギルバート・ファーガス・チェーンという存在が、こうも自由に振舞ってられるとは、意外だったぞ」

「それは多分俺の契約者がアンナであったからなのだと思うている。異界で暮らしていた普通の人間であったからこそ、俺は自由にアンナを愛することが出来ているのだと思うし、アンナにもそうであって欲しいと願っている」

そういつてギルバートは私の手を力強く握り返した。

「愛、か。最初は愛などいらないと思っていたのだが、お前の回復ぶりを見る限り、その力もあるいは影響しているのかもしれないと思えるようになってきたぞ」

ユリウス3世はそういうと、これで話は終わりといったように席を立った。

「ええと、今の話をまとめると、ギルバートの出来というのは、元は皇帝陛下に献上するために作られた特殊な獣であったということよね。ギルバートの理はチェーン、『鎖』で強い拘束力を意味するということ、あれ？ あとの二つは？」

私は首を傾げた。

「ギルバートは確か『輝かしい契約、輝かしい願い』、ファーガスは『人間の選択、有力者』だったわよね。ギルバートの意味とファーガスの『有力者』というのは皇帝になるにあたって必要なものだと思うけれど、この『人間の選択』って一体なんなのかしら」

「それが、世界を変える鍵なのだと私は思っているのだよ」

そういうとユリウス3世は自動扉を開けた。

「待って！ まだ全部解決していないわ！」

「ここからは私の持論になってしまうので、続きはまた別のときにもすることにして。さあ、今は次の部屋へ行くことが先決だ」

そういつてユリウス3世は私とギルバートを急ぎたてて次の部屋へと送り出したのであった。

予兆 7 ▲

——そこはある種異様な部屋であった。

今が夜だからというだけではない、明かりはあるはずなのだが、独特の暗さがその部屋にはあった。

その部屋の壁面の棚にはなにかの器具やガラス瓶などが所狭しと並んでいる。

部屋のテーブルの上にはフラスコのようなもの、シャーレのようなもの、何枚ものプレートのようなもの、そして顕微鏡に酷似した物体が乗っかっている。

その顕微鏡によく似た物体の前で、一人の男が一心不乱になにかを見つめていた。

男は片手に赤い液体の入ったスポイトを持ち、今まさにシャーレの中に垂らそうとしている。

シャーレの中には銀色に光る粉となにかの鉱物が入っている。

ぽとり。

その粉と鉱物の上に、スポイトの中に入っていた赤い液体がかけられた。

その瞬間、そこにあったシャーレは跡形もなく消えていた。

「……これか、異界渡りのからくりは」

その男がなにかの証拠を掴んだと同時に、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

男の返事も聞かずに部屋に入ってきたのはまだあどけない表情をした少女であった。

少女は部屋の中できるとステップを踏むと、背のない椅子に座っている男の背中にぴたりとはりついた。

「ねーえー、ウィリアムー、もういいでしょう？ 遊んでよー」

「今取り込み中だ、キスキル・リラ。用事は済ませたのか？」

キスキル・リラはぶうと頬を膨らませた。

「ウィリアムのけちー！」

そうやってぶうぶうとむくれていたキスキル・リラは、しばらくすると今度はなにかを思い出したかのように、両手を口に当ててにやにやし始めた。

「うふふ、あっはは！ そうだ、リラ知ってるよ。ウィリアムったらおっかしー、この間切れてアンナに手を出しちゃったのよね？ アンナ可哀想、リラのママになる人なんだから、もうちょっと優しくしてあげてよ」

口では非難しているものの、その表情はまるで面白い見世物を見つけたときの子供のようである。

そう、この部屋にいるのはウィリアム・シルフィードとキスキル・リラであった。

キスキル・リラはウィリアムの背中からぴょんと離れると、スキップしながら部屋の中をウサギのように飛び回り始めた。

「あーあ、早くアンナがママになってくれないかなあ？ そしたらリラ、あの焼き菓子を一っぱい作ってもらうの。それをウィリアムとアンナと、それから獣のギルバートと一緒にお茶をしながら食べるのよ。うふふ、素敵よね？ 食べ終わったらリラ、ギルバートの背に乗って冒険に行くのよ。帰ってきたらアンナと一緒にご飯を食べて、一緒にお風呂に入って、一緒のお布団で寝るの。寝るときにはお話を聞かせてもらうのよ？ ウィリアムは、まあ一緒に寝てもいいよ。でも、アンナの隣は絶対にリラのなの！」

目をきらきらさせて素晴らしいながら、キスキル・リラは部屋をぴょんぴょんと飛び回った。

「楽しみねっ！ 早くアンナがここにこないかなあ？」

「騒がしいぞ、キスキル・リラ」

そういいながらも、ウィリアムはキスキル・リラの無邪気な想像に幾分か毒気を抜かれたのか、作業の手を止め、キスキル・リラに目を向けた。

椅子を壁に付けて座り、キスキル・リラのウサギのようなダンスを見る。

ウィリアムのその姿を見たキスキル・リラははたと手を止めると、両手を横に下ろした。

「ウィリアム、そうやって座っていると、なんだかエランディオールの爺さんみたいね。リラはね、前に檻の中からいつてあげたの。『リラが手に入って、使い道がわかって、よかったね』って。ウィリアムにもあとでいつてあげるね」

そういうと、キスキル・リラはその場で妖艶な美女へと変化した。

美女はつかつかと歩くとテーブルの空いている部分に腰を下ろし、波打つ黒髪をばさりとうしろに跳ね上げると、あらわになった長い脚をゆっくりと組んだ。

「ねえウィリアム、ウィリアムほど私の使い方をわかっているものはいないわ。誇りなさい？ エランディオールの爺さんよりも『私達』を上手く使いこなしているわ」

ウィリアムは無言で席を立つとシャーレやプレートを片付け始めた。

「あら、今日は終わりにするのね、そう、じゃ、今度は私とお話しましょ？」

そういうとキスキル・リラは自分の肌の滑らかさを確かめるようにしながら、組んでいた脚を組み替えた。

「ウィリアムは今まで出会ってきた人間のなかで、一番私の使い方心得ているわよ。私が今までいくら主を変えても、皆結果は同じだったわ。主は皆、汚らしい豚になってしまうの。今まではそんな汚らしい豚どもの手によって、単に欲望のはけ口として囲われ

ていただけだったから、生きるのには正直飽き飽きしていたの。人は私のことを邪悪な存在と呼ぶわ。でもそれは嘘。そうさせたのは人間達だったのよ？ エランディオール爺さんは私の使い道がわかっていたけれど、私に自由はくれなかったわ。だから私、今が一番好きよ」

キスキル・リラはウィリアムが空けたテーブルのスペースにごろりと寝転んだ。

天井を見上げながら、キスキル・リラは何事かを思いついたようにぺろりと唇を舐めあげた。

「ねえ、私、アンナを手に入れると思うだけでぞくぞくするわ。でもそうしたらあの『私』がむくれるかしら。でもそれは些細なこと。ギルバートはウィリアムにあげるから研究でもなんでも好きにして頂戴。ああ、あのいい匂いのする体、どうやって悦ばせてあげようかしら。服の上からでもわかる柔らかい乳房、美味しそうな桜花色の唇、私の愛撫を受けてあの栗色の瞳が愉悦に染まり、蝦茶色の手触りのよさそうな髪が汗ばむのを想像するだけで、たまらなくなるわ」

キスキル・リラがそういうと部屋に麝香のような香りが広がった。

「ふふ、欲情しちゃったわ」

ウィリアムは手を止め、横目で「戯言を」というような視線を浴びせたあと、また片付ける作業に戻った。

「アンナが手に入ったらたまにはウィリアムと三人で楽しむのいいわ。でも私達、お互いに独占欲は強いからきつと奪い合いになる

わね。そうだ、私達が楽しんでいるところをギルバートに見せてあげたら、アンナはどんな顔をするのかしら？ 私達に懇願する？『もう止めて』って？ うふふ、でも止めてなんかあげないわ。あの子の可愛らしい泣き顔を見ながらもっともつと悦ばせてあげるの」麝香の匂いの充満する部屋にキスキル・リラの押し殺した笑いが響き渡った。

しかし、ウィリアムは全く動じないかのように見える。

片付けをひと段落させると、キスキル・リラに向かい合った。

「キスキル・リラよ。そうまでして私を挑発したいか？ まあ、お前のその言、考えてやらぬでもないが、今は全く興味が無い。それよりも今の私には、なににもましてやらねばならぬことがある。近く、出かけるが、それは私の人生を左右するものとなるであろう」

それを聞くと、キスキル・リラは淫乱な美女からたおやかな乙女へと姿を変えた。

乙女は自分の体に向かってしかめっ面をした。

「まあ、『私達』の体を使ってそんな汚らしいことをしないでくださる？ 私、女同士なんて興味はこれっぽっちもありませんのよ。……でも、ウィリアムとだったら私いつでもお相手いたしますわよ？」

そういうとキスキル・リラは恥ずかしそうにうつむいた。

「それで、首尾はどうだった？」

ウィリアムのその言葉を聞くと、キスキル・リラははっと顔を上げてウィリアムに近づいた。

「ウィリアムに頼まれていた商人連合への密書、確かに届けましたわ。それをお伝えしに来ましたのに、私ったらウィリアムに会える嬉しさのあまり子供になってしまっ……」

ほうとため息をつき頬杖をついたキスキル・リラであったが、ウィリアムが「よくやった」というと、ぽっと頬を染めた。

「私、難しいことはわかりませんが、ウィリアムに一生ついていきたいと思っておりますの。ウィリアムは私が愛した、ただ一人の人ですわ」

そういつてキスキル・リラはウィリアムに近づくとその背中にそっと寄り添った。

「だから私、愛する人の幸せを願いますわ。アンナがあなたに必要なとなれば、私、身を引く覚悟は出来ておりますの。アンナの身を守ることだっていたしますわ。でもそれは全てあなたのため。それを忘れないでくださいましね」

そういうと、キスキル・リラはウィリアムの背中に羽のようなキスをしたのであった。

――獣の使い方レッスンは、至極順調に行われていた。

教授陣のスパルタ教育のおかげもあってか、私は宮廷マナーや礼儀

作法、美しいお辞儀の仕方に至るまで、事細かに学ばせてもらった。

ギルバートはというと、最初の仕掛けの部屋では、ギルバートは人型になり、私を連れて対岸まで運んでくれ、次の礼儀作法の部屋では、ギルバートは服を脱ぎ獣の姿になって私に付き添って学んでいるという状況だ。

ちなみに人から獣へと変化する場所は衝立で隠れているので、プライバシーはしっかりと守られている。

ギルバートは、私にとってはいつだって数歩先行く先輩のような存在であり、いつでも励ましの言葉をかけてくれる頼もしい戦友というような感じだ。

あれからユリウス3世は執務が忙しくなったからとのことで仕掛けの部屋に顔を出すことはなくなった。

私としてはギルバートの名前にあるファーガス『人間の選択』の意味をユリウス3世から聞き出したかったのだけど、それは今のところ叶ってはいない。

そうして3週間ほどたったある日のこと、宮殿へ使者がやってきた。

「ダキアとヌミディア両国の王子が皇帝陛下に謁見希望とのことです」

それを聞いたユリウス3世は私を執務室に呼び出した。

「少し早いが、本番がやってきたようだ」

「ええ、そうですね。ああでもどうしよう、私頭の中が真っ白になっちゃったら……」

「お前でも緊張することがあるのか」

「ユリウス3世、心配してくれているんですか？」

私がパッと顔を向けると、ユリウス3世は真面目な顔をしていった。

「いや、ちょっと驚いているだけだ。神経図太そうなお前にも緊張することがあるのだと」

慰めてくれるのかと思いちよつと期待していた私は、ユリウス3世のその言葉にがつくりと肩を落とした。

「ひどいですね……、そのイメージはどこから……」

「いや、最初に会ったときのイメージがまだ残っていてな、あんなに堂々と喧嘩をする女は今まで周りにいなかったものでつい、な」

私のその落ち込みようを見ると、ユリウス3世はぷつと吹き出すのを堪えるように片手を口元までもってきてしっかりと押さえた。

だが顔が変に歪んでいる。

その顔を見た私はさらに落ち込んだ。

「いいんです、どーせ私は図太い女ですから」

その姿を見たユリウス3世は私の隣に控えていた人型のギルバート

に向かって慌てて聞いた。

「気を悪くさせてしまったようだな。ギルバート、こういうときはどうしたらいい？」

「そういうときは機嫌が直るまで放っておくのがよろしいかと」

「まあ！ ギルバートまで！ これだから男って……」

私は頬を膨らめると腕を組んでぷいと横を向いた。

「アンナ様、私もその『男』の中に入っていますか？」

そう聞いたのはユリウス3世の傍で控えていた金色の獣のレーニアだ。

「あら、レーニアはどっちの味方？」

私が横目でレーニアを見ると、もちろんといったようにレーニアが自信を持って答えた。

「もちろん、このレーニアは麗しき淑女の味方ですとも」

「あつ、レーニア、ずるいぞ！ 自分だけいい人ぶりおって」

「俺まで悪者扱いか？ アンナ、先にいったのはユリウス3世だぞ？」

眉をしかめながらいうギルバートにユリウス3世は慌てて言い募る。

「ギルバート、お前男の友情を裏切るつもりか?!」

「アンナの前ではそんなもの、塵に等しい」

そんな話をしていると、扉の向こうからノックの音がして使者が現れた。

「ダキアとヌミディア両国の王子はこのち3日で宮殿に到着するとのことです。また謁見後、晩餐会を開く予定ですので、アンナ様とギルバート様はご用意下さいませ」

ご用意っていうのは、つまり衣装のことよねと思った私は、この前パレードのときに来てもらった衣装屋に頼むことにした。

あの衣装屋、仕事は速いけれど、注文をすっかりいわないと奇抜なものを作りそうで困るわと思った私は使者にドレスコードを聞いておくことにした。

「あの、衣装はどのようなものがよいのかしら? (パレードのときのような衣装は流石に御免被りたいところだけれど) やっぱり派手なものなのかしら?」

「いえ、正装であれば特に衣装の指定はございません。とはいっても、貴族の皆様は晩餐会ときはダンスのしやすい衣装をお選びになっっているようですね」

「ダンス?!」

「ええ。晩餐会ではダンスの時間があります」

「そ、そうだったの……」

これは私にとってもものすごい痛手だった。

約3週間の特訓の中にはもちろんダンスも含まれてはいたのだが、運動があまり得意でない私にとっては苦手分野だったのだ。

ちなみに私は勉強もあんまり得意ではないため、作法のレッスンや、その他の勉強に関しては今のところ全て丸暗記で乗り切っている。

でも多分この先使わなければ、長期記憶の情報としては認識していないであろうこれらのレッスン内容は、教えて下さった先生方には悪いが確実に失われてしまうだろう。

私はどうでもいいことは結構暗記できるくせに、憲法や年号などは覚えた傍からすると抜けていってしまうという残念な頭の持ち主なのであった。

ダンスに関しては、以前「水道局」の皆と踊ったダンスとは格式が違うもので大変苦戦していたのだ。

しかも、ダンスのレッスン中はパートナーであるギルバートはもちろん獣の姿のままだったから踊ることはなかったし、相手を代えて行うものであるから、どうしたって自分の力量がものをいう場所となっている。

「あああ、大変なことになったわ。どうしよう、あと3日で衣装と、ダンスの両方の問題をクリアしなくちゃいけないんだわ。皇帝傍付きの神官ってことはつまり身分的には上流貴族とほとんど同じようなものになってしまったわけだし、衣装はいいとして、ダンスに失

敗してユリウス3世の顔に泥を塗ることは出来ないし、ああもうどうしよう」

顔面蒼白にしている私の肩をギルバートが労わるように抱いた。

「アンナ、そんなに緊張することはないと思うぞ？ アンナはダンスの時間も、ゆっくりとしたテンポのものであれば比較的綺麗に踊れている。毎日見ている俺がいうのだから信用してくれていい」

「ありがとうギルバート、でもユリウス3世の顔に泥を塗るわけには……」

そういつてまた落ち込みそうになっている私にユリウス3世が温かい声をかけた。

「アンナよ、もし無理だと思ったら遠慮せずに壁に控えているがいい。そのことで礼を失することにはならないから安心するがいいぞ」

「そうなんですか、氣遣ってくださいありがとうございます」

少し気分を持ち直した私はふとあることを聞いてみた。

「あ、そうだ、ちなみにレーニアはダンスのときに人型にはならないんですか？」

私がそう聞くと、ユリウス3世はうーんと唸ったあと、なにかの決断をしたようだ。

「本来レーニアは私の護衛のために常に獣の姿で傍に控えている。だが、今回の晩餐会ではレーニアにも人型を取らせることにする」

「えっ?! どうしてですか？」

「お前を驚かせたいと思ってな。それと、私の体面を心配してくれたらだ」

そういうとユリウス3世は悪戯を見つけた子供のような顔をしたのであった。

予兆 8

あれからすぐに、晩餐会で行われるダンス用の衣装を仕事の速い衣装屋に頼んだため、衣装自体はすでに出来上がっていた。

そして、今日はダキアとヌミディアの王子との謁見の日である。

服装に関してはほっと胸を撫で下ろす私だったが、やはりまだそのダンスに戦々恐々としていた。

「うわあ、ついに来てしまったわ。これって私にとっては初・外交よね。ああ、ダンスのときは落ち着いて、テンポに合わせて、相手の足を踏まないようにしなくっちゃ」

頭のなかでスパルタ先生方に教えてもらったことを反芻する。

そんなことをしていると、使者が謁見開始の連絡をしにやってきた。

貴族達は皆、序列に従って優雅にすっと列を作る。

その一部の間もない仕草に、こういうところはやはり貴族なのだなと感心する。

「しかし私の境遇は本当に異例だわ。だって今の私の地位は上流貴族と肩を並べる皇帝陛下傍付きの神官だもの。この国って人材がないわけじゃないのに、どうして私なんかがこんな破格の待遇に預かることになったのかしら」

それはひとえにギルバート・ファীগス・チェーン、銀の獣の契約

者だということがあげられるのだが、それにしただってこの国の地位構造にはいろいろと不思議なところがあると思った私である。

「実力主義かと思うとそういうわけでもないし、かといって年功序列というわけでもないし……」

謁見の間にはもう既にダキアとヌミディアの王子が控えていた。

その後姿を見て、ほかの貴族とともにしずしずと謁見の間に入りながら、私はこの謁見の作法に対して少しばかり首を傾げた。

「そういえばこの国の謁見の作法は、会いに来たものをこちらの体勢が整うまで広間でずーっと待たせる仕様になっているのよね。それは他国に対しても変わらないみたいだけど、それってまるで他国よりもこの国のほうが、位が上って感じがするわ」

これって本当に礼に適っているのかしらとちよっぴりいぶかしむ私であったが、「あ、でも今回は他国の『王子』が皇帝陛下に謁見するという形なのだからこれでいいのか」と思い直した。

自分の定位置について前を見ると、対岸にいるウィリアムと目が合った。

幸か不幸か、私とウィリアムは広間を挟んで、お互い対面している状態になっている。

ウィリアムがじっとこちらを見ているのが気配として伝わってくる。

「うわ、気まずすぎる……この間ウィリアムから強引にキスされて、

私の中のウィリアムの株が大暴落したところだっというのに、なん
でよりによってその本人が目の前にいるのよー！」

なるべく不自然にならないように視線をそらし、広間に立っている
ダキアとヌミディアの王子を観察しようとしてそちらに目をやった
私は、今度はぽかんと口をあけた。

ヌミディアの王子の顔立ちは絶世の美女もかくやと思われるほどで、
その髪は赤銅色、瞳は峻烈な橙色をしていた。

居並ぶ貴族達をもものともせず、小柄ながら堂々とした立ち居振る舞
いをしているその顔にはつい一月半ぐらい前に会ったばかりだった。

「あれはまさか……、ウエルミナ?!」

そう思った私は、隣に立っているダキアの王子の顔を見てもっと驚
いた。

ダキアの王子の容姿はさらに、あまりにもよく見知ったものだった
からだ。

濃度の薄い金色の髪の毛、茶色い瞳、そしてその寡黙そうな顔。

「あれは、ティリウス?!」

声に出さずに心のなかで呟いた自分を褒めてやりたいぐらい、その
衝撃は大きかった。

それはまるで例えるならば有名な舞台を観に行ったらその主演をや
っているのが仲のよい友人だったというような感覚だ。

「ウエルミナはいいとして、ティリウスはなんで教えてくれなかったのー?! それにティリウスは今宮殿内にいてなにかの調べ物をしているはずじゃ……」

いや、確かに宮殿内にいるにはいるはずなのだが、これは全く別物だ。

この二人がそれぞれの国を代表する王子だということに驚くとともに、ティリウスはなぜ以前単独行動をしたりラカン達に雇われたりしていたのだろうかといぶかしむ私であった。

私は二人の姿を思わずまじまじと観察してしまった。

ヌミディアの王子、ウエルミナはターバンを巻き、たっぷりとした布で作られた脛までの長さがある青い民族衣装を着ている。

その衣装は胸の部分、両袖の部分、そして胸から裾にかけての縁の部分に金色の糸で幾何学模様が施されている。

下には足首できゅっとしまった白いズボンを穿いており、靴は先のとがった茶色い皮製のものを履いている。

対してダキアの王子、ティリウスはメリトウスでよく着られている正装をしている。

白い上下の上に茶色とも赤ともつかぬ、いうならば濃い蘇芳色のトーガを羽織り、サンダルを履いている。

派手さでいえばウエルミナの服装のほうが勝ってはいたが、二人の

赤と青のコントラストは、白い大理石の床の上ではよく映えていた。しかし見れば見るほど変な違和感がある。

これってやっぱりドッキリでしょ？ とあわあわと混乱しかけたそのとき「皇帝陛下、ユリウス3世の御成」という声が聞こえたので、私は座っていた椅子から立ち上がった。

頭を下げたまま、ユリウス3世が着席するのを待つ。

以前は謁見する立場にいたのに、今度は謁見するものを見守る立場になるなんて。

元・一般市民の自分は今この瞬間がお芝居なんじゃないかとすら思えた。

だが、今ここにいる感覚も、頭を下げた先にある大理石の床も、サンドルを履いた自分の足も皆現実のものなのである。

覚めない夢でないことを確認するべく、私はそっと自分の手の甲をつねった。

「一同、面をあげよ。着席」

顔をあげ、着席する。

手の甲はやっぱり痛かったので、これは現実なんだと再確認する私であった。

謁見が始まった。

「ではまずヌミディアの王子よ、陳情を述べよ」

着席したユリウス3世から声をかけられたウエルミナがずっと膝を折って話し始める。

「我々の部族は今現在二つにわかれております。族長の甥率いる西の部族と、我が族長率いる東の部族でございます。族長の甥は、メリトウスを掌握しようと兵力を集めており、我が族長率いる東の部族はこの国と友好関係を結んでいるためそれを阻止しようとしております。ですが、今現在力が拮抗し、膠着状態となっているのです。それを打破すべく、メリトウスのお力をお借りしたいと思っております」

そういうとウエルミナは頭を下げた。

「ヌミディアの王子よ、我が国になにを望む？」

そう問うたユリウス3世に対し、ウエルミナは顔をあげ、その峻烈な視線を真っ直ぐに据え置いた。

「この国の武官と、公認された契約者と獣をお貸しいただきたい。メリトウスの武官と公認の契約者と獣なれば、戦力としても十分、さらに我が部族とメリトウスとの絆を相手に見せ付けることも出来るでしょう」

「それに対する我が国の見返りはなんだ？」

ユリウス3世がそういうと、ウエルミナは自分の胸にずっと手を置

いた。

「私が着ておりますこの布を。見事制圧しました暁には、これより先、我が部族で生産しております1級品の布を貿易価格の5分の1で提供させていただきます」

そういつてウエルミナは頭を下げた。

「よかろう。わが国の武官と公認の契約者と獣を貸すことを約束しよう」

「ありがたき幸せにございます」

そういつとウエルミナは立ち上がり、一步引いた。

……へえ、ウエルミナはそんな役目を背負ってこの国へ来ていたのね。

流しの一座は仮の姿だったというわけか。

そういえば契約者と獣のことにもほかの人よりかは詳しかったし、それって隣国の王子だったからなのねと納得する私であった。

「それでは次にダキアの王子よ、陳情を述べよ」

声をかけられたダキアの王子、ティリウスはこれもまた膝を折って話し始めた。

「我が国はメリトウスの経済体制に依存しております。それはわが国の人口の大部分が、獣が人型に変化したものであるため、ユウキ

アの花粉飛来時には国内が混乱してしまうからであります。そこで国の発展のため、我が国から貴族をメリトウスに派遣し、教えを乞いたいと思っている所存にございます。つきましては私以下5名の貴族をメリトウスに長期滞在させていただき、国の仕組みをご教授願いたいと思っっている次第でございます」

それを聞いたユリウス3世はしばしの沈黙のあとこう答えた。

「国同士の友好のために、受け入れよう」

こうして謁見は終わり、私達は謁見の間から退出した。

退出するとき、私は二人を見つめていたが、そのどちらとも視線が合わさることはなかった。

予兆 9

サロンにつくと、私はギルバートとフィリップを探した。

「あ、いたいた。ねえギルバートとフィリップ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「どうしたんですかアンナさん、そんなにそわそわして」

「俺はアンナがなにを聞きたいか察しがつくぞ」

私はそんな二人を図書館まで引っ張ると、そこで一息ついた。

「あのね、まずはギルバートに聞きたいのだけれど、今日会った二人の王子ってティリウスとウェルミナだったわよね？」

「ああ。間違いなくあの二人だ。俺も驚いているぞ」

「じゃあ、次にフィリップに聞きたいのだけれど、フィリップは以前外遊していたっていったわよね？ そのときに隣国の王子には会ったことがある？」

「ええ。ですが僕達が外遊時に会うのは主に隣国の貴族ですので、王子たちと顔を合わせることは滅多にありません。ただあのダキアの王子、以前アンナさんと一緒にいたティリウスという護衛に瓜二つでしたね」

「そう、二人がそういうってことはやっぱりダキアの王子はティリウスで間違いないわね。それでヌミディアの王子はウェルミナ」

「アンナさん、あの二人のことを知っているのですか？」

「ええ。ティリウスはフィリップも知っていると思うけれど私の護衛でしょ？ ウェルミナは私がこの間ギルバートを探しているときに偶然出会った流しの一座の一員だったの」

「アンナさんを助けてくれたっていう人達の一人がウェルミナだったんですか」

「ああ、世界って案外狭いのね」

私はほうと息を吐き出した。

「世界が狭いというのはいえていると思いますよ。僕達人間が多くいる国はヌミディアしかありませんし、ダキアは獣が人型になった国ですからね。ダキアはまだまだ発展は遅れていますが、一応国としての体裁は整っています。あとは国と呼べない集落のようなもの、他には獣の姿で暮らしているものが大部分です」

「そうなんだ。てっきりほかの国の人間もこの国のような感じなのかと思っていたわ」

「この世界では、このメリトウスという国が特殊なのですよ。この国の近くにいる国はこの国を模倣して人型で生活したり、経済活動を行っていたりはしますが、それ以外のものは自然とともに暮らしているのですよ」

それを聞いた私は思ったことを呟いた。

「ふうん、なんだか、メリトウスってどこか置き忘れられた人間専用のテーマパークみたいだわ……あー、叶わないけれど沖方丁の『ばいばい、アース』が読みたくなってきたわ。あとは新井素子の『チギリスとユーフラテス』とか」

「なんですかそれ？ テーマパークとは？」

いぶかしげに聞くフィリップの言葉に我に返った私は慌てて胸の前で両手を左右に振った。

「あ、ううん、こっちの話。そうだ、ありがとう二人とも。わざわざ図書館に来なくても済む話だったわね」

「いや、この話はほかの貴族にはあまり知られないほうがよかったと思うぞ」

腕を組みながらギルバートがいう。

「どうして？」

「隣国の王子との繋がりがあるということで、ほかの貴族達から要らぬ反感を買うかもしれないからだ。あの二人と知り合いであるということを公表するのは控えてもいいと思う。ただ、あの二人が何らかの接触をしてきた場合にはその限りではないがな」

確かに、ほかの貴族からなんらかのやつかみを受けるのは面白くない。

今現在皇帝傍付きの神官になったことで、さすがに表立って私に対し嫌がらせをするものはいなくなったが、それがかえって怖いと思

うのも事実ではある。

裏で何か画策されていても私の感知するところではないからだ。

「そうね、確かにそうだわ。じゃあそうすると、とりあえず私の懸念事項は今日の晩餐会でのダンスを上手くやりおせるかどうかということそれのみといっても過言ではないわ。うわあ、緊張するー……」

「アンナは緊張しいなんだな。俺達がついているから大丈夫だぞ？」

「もしアンナさんが緊張するようならば僕が傍にいてリードしますよ？」

ギルバートが自信ありげな顔をし、フィリップが綺麗な笑みをよこす。

「うう、甘えてしまいそうだわ。けれど、今まで先生方に教えてもらった成果も発揮したいし、どうしてもダメそうなときは二人に助けてもらうことにするわ」

両手をぐっと握って自分を鼓舞する私の姿を見て男性二人はにこやかに笑った。

――夜の帳が下りたころ、大広間で晩餐会が開始された。

広間には着飾った貴族達が続々と集まってきた。

サロンにいる貴族達は見分けがつくのだが、見慣れない人達は他国

の貴族達なのだろうか。

外見だけではどの人が人間でどの人が獣なのか全くわからない。

ただし、ヌミディアの貴族達は一目でわかった。

皆蜂蜜色の肌をし、色とりどりの民族衣装を着ているからだ。

「あの踊り子さんたちも貴族だったのね。スタイルいいわー。以前ウェルミナに向かって『ヌミディアの売春婦』とかほざいた男共を説教したいぐらいだわ」

広間の端には長いテーブルが用意され、そのテーブルの上には色鮮やかなフルーツ、サンドウィッチやカナッペのような軽食、生ハムメロンのようなものであった。

「わー、このカナッペもどき、手が込んでいるわね。なんか小さな白身魚の切り身の上にキャビアみたいなものに乗っている。こっちは丸いビスケットの上にチーズとブルーベリージャムみたいなものに乗っているわ」

広間にはワインやシャンパンを銀のテーブルに乗せた召使達が行きかっている。

私はその一人からシャンパンを受け取ると、とりあえず壁際に寄った。

さて、ここで本日の私のダンス衣装をご披露しようと思う。

3日で作ったとは思えない出来栄えの衣装にちよつとわくわくして

いる自分がいる。

私の衣装はいうなれば「社交ダンス仕様」なのである。

その淡いペールブルーのドレスは、柔らかくて透ける素材の薄物を何枚も重ねたような生地で出来ていた。

スカートの下にはこれまたペールブルーの裏地がついており、透けることはない。

ドレスはホルターネックで、大きく開いた背中、上半身はボディラインに沿った作り、下半身はふわりと広がる作りになっており、胸元には銀色のスパンコールでユウキアの花と枝があしらわれていた。

二の腕まである長い手袋は中指から通す形になっており、その手の甲には、ユウキアの花を模したスパンコールが付けられている。

また手袋の手の平の部分は右手がスカートの裾と繋がっており、左手が手袋の二の腕から垂れている帯のような生地と繋がっていた。

スカートの裾にはこれもペールブルーの生地で花々が縫い付けられており、歩くたびにさやさやと揺れる仕組みになっていた。

「この服は以前作ってもらったものよりもずっと着やすいし、ダンス用だけあって動きやすいわ」

続いて、ギルバートの衣装も披露することにする。

ギルバートの衣装は一言でいうと「チャイナ服」だ。

詰襟の膝丈までである上着は真っ白で光沢があり、両袖と胸から裾にかけて白銀の糸で大輪のユウキアの花と枝とが刺繍されている。

詰襟の部分には銀のспанコールでユウキアの花々が縫い付けられている。

上着の下に穿いているズボンは黒で、靴も黒いハラコのようなもので出来ている。

「なんだか、中華系マフィアのボスみたいね……でも上背があるから似合っちゃうのよね」

フィリップの衣装はというと、衣装屋の粋な計らいなのか、今回もギルバートと対の衣装になっていた。

白い光沢のある生地に着みがかった金色の糸でこれもユウキアの花と枝が刺繍されており、使われているспанコールは金色である。

「こちらはまるで上海や香港辺りにいる身なりのいい外国人みたいだわ」

ほかの貴族の衣装も様々だ。

フラメンコのように段々になっているスカートとひらひらとした袖の衣装もあれば、マーメイドドレスのような形のものもある。

太ももまでスリットの入ったチャイナドレスのようなデザインもあれば、まるでベリーダンスを踊るようなへそだしスタイルもある。

そうこうしているうちに、広場に皇帝陛下が現れた。

さわさわとしていた広場が、しんと静まり返る。

ユリウス3世は広間の端にある玉座に座ると、広間を一瞥した。

「今宵は楽しんでいって欲しい」

ユリウス3世はよく通る声でそう言って立ち上がると、ゆっくりと歩を進めた。

周りにいる貴族達、特に女性は皆ほうとため息をついている。

確かに漆黒の髪と琥珀色の瞳を持った180代後半の身長的美丈夫なんてそうそういないでしょうね。

ユリウス3世は「国の顔」としては申し分ないのではないかと思う。

でも、とはたと思う。

この人は皇帝になるにあたって前皇帝を殺しているのだ。

それが皇帝になる条件の一つだとはいえ、そんな野蛮な人に対しほうとため息なんかつけるか！　と思うのは、やはり私が異界人だから、というか日本人だからなのだと思う。

悶々とした思考に一人沈んでいると、私の周りがにわかに騒がしくなった。

ん？　と顔をあげると、目の前にはユリウス3世が。

皇帝陛下自らが足を運んだその先には、シャンパングラスを片手に持ち、思考に耽っていた私がいたのである。

にやりと笑うユリウス3世。

引きつり笑いをする私。

「晩餐会の主催者が踊らねば、ダンスは始まらぬからな」

そういつてユリウス3世は私の手を取り、グラスを置くと、私の手を引いて広間の中央に躍り出たのである。

……ひ、ひいい！ やめてください！！ まだ心の準備がああ！！
気付けの酒も飲んでないのにいい！！

私の心の声も空しく、広間の中央に陣取る私とユリウス3世。

「こ、これは、いきなりクライマックスよね」

気付くと周囲に上流貴族のグループが何組か現れている。

そして、戦いのゴングもといダンスのゆっくりとした曲が鳴り始めたのである。

予兆 10

弦楽器のアンサンブルが曲の開始を知らせた。

ワルツのテンポで演奏されるその曲はとん、とん、とん、と滑らかに流れている。

私はユリウス3世の左手と右腕に手を添えて、スパルタ先生方に教えてもらったことに気をつけながらダンスを踊っていた。

曰く、まず腰から上部は少し反り気味にして、男性の右肩越しに前方を見る。

また、男性のリードがわかりやすいように、お互いの腹部を軽く接触させる（腹部が軽く接触しないと、男性のリードが伝わらないのでリズムが取りにくく、また体重もうまく乗れない）。

右手は、五本指を揃えて男性に預ける（テンポやリズムに気を使わず、固くにぎらないように注意）。

左手は、男性の右腕の上に添わせる（左手の置く位置によって、前かがみになったり、男性の腕の自由を奪ったりすると、男性は非常に疲れるので、気をつかうこと）。

これらの基本に忠実に守りながら、私はダンスを続けた。

私のその姿勢を見たユリウス3世が小さな声で呟く。

「ふむ、形は綺麗だな」

「ありがとうございます」

そう返事をするが、頭の中はせめて基本姿勢だけでもしっかり取らねばという思いで一杯である。

もちろん周りを見る余裕なんてない。

私の固い表情をどう捉えたのか、ユリウス3世はふと視線をはずしたが、その先になにかを見つけたようで、その瞬間私の手をぎゅっと握り締めた。

私は思わずユリウス3世の顔に目をやる。

「なんで私の集中を途切れさすようなことをする」と、非難をこめた視線を送るが、ユリウス3世は一向に意に介していない。

それどころか自分のほうに注意が向いたのを確認したユリウス3世は、にやりと笑った。

「ほらアンナ、見てみるギルバートのあの顔、私とお前が踊っているのを見て、嫉妬しているのを押さえ込んでいるような顔だぞ」

くすくすと笑うユリウス3世に対し、ステップを忘れまいと必死になっている私は、思いつきり上の空で返事をした。

「へ？ ああそりゃよかったですね」

心ここにあらずといった顔と、間違えないようにとユリウス3世の右手を無意識の内にしっかりと握っている私を見て、ユリウス3世

は、今度は吹き出すのを堪えるような顔をした。

「『へ?』はないだろうが。よく見てみるがいい」

そういうとユリウス3世は、右手を私の背中から腰へと移動させると、自分に密着させてふわりと抱き上げ、曲に合わせてくるりと半回転した。

「わわっ?!」

ペールブルーのスカートがふわあつと舞う。

とん、とその場に下ろされ、私は思わずユリウス3世の顔を見上げる。

「違う違う、見るのはあっちだ」

ユリウス3世の目線を目で追うと、そこには仏頂面をしたギルバートが腕組みをしてむすつとした体で立っているのが目に入った。

すぐに視線を前方に置くと、私はそのままダンスを続ける。

「なんでわざわざ私に見せるんですか」

「いや、面白いと思ってな。仮にも皇帝である私に対してあんな視線を送れるのはあいつぐらいしかおるまい。しかも、嫉妬だぞ? お前は面白いと思わんのか」

「いやあ、私はこの曲を終わらせるので精一杯ですから。ほかのことを考えている余裕はありません」

「そうか、ではつまり今のお前には私しか見えていないということなのだな？」

「もうなんでもいいですので、ダンスに集中させてください」

「ふむ、私のパートナーがそういうのであれば、私もそれに従わねばなるまいな」

ユリウス3世め、余裕こきやがって、一体いつ私があんたのパートナーになったんだこのやろう……と思った私は、「あ、今か」と思い直すとそれ以降はダンスのステップに集中した。

ダンスに少しばかり慣れてくると、周囲の状況を見ることができた。上流貴族達は、さすがにお手の物といった感じで、皆それぞれに優雅なステップを踏んでいる。

様々なデザインの衣装が目にも鮮やかで、それはまるで大理石の床の上に色とりどりの絵の具を置いていったような感じである。

「周りが見られるようになってきたか」

そうユリウス3世が呟く。

「ええ、おかげさまで」

私がそう答えると、ユリウス3世はふっと笑った。

琥珀色の瞳が楽しげに揺れる。

……あ、まただ。

この兄が妹を見るような笑みは。

ユリウス3世は時々私に対して兄が妹を見るような目で笑う。

それはどうしてなのだろうか。

いぶかしんだ私であったが、突如ユリウス3世に関して別の思いが浮かび上がってきた。

この笑顔は、人を殺した人の笑顔とは思えない、ということだ。

ユリウス3世はどうして皇帝になろうなんて思ったのかしら。

前皇帝を自分の手で殺してまで、成し遂げたいことがあったのだろうか。

そう思っていると、いつの間にかダンスは終わり、周囲の貴族達は優雅な挨拶をしていたのであった。

とりあえず無事に最初のダンスを終えた私は、ユリウス3世に手を引かれながらほっとした面持ちでギルバートがいる場所へと戻ってきた。

「アンナさん、綺麗でしたよ」

フィリップが目をきらきらと輝かせながらいう。

「ただいま、まずは無事やりきったわよ」

「お帰りアンナ、上手く踊れていたじゃないか」

ギルバートが少しだけ半眼になりながらも賛辞の言葉を述べる。

「ああ、それはユリウス3世のリードが意外に上手だったからよ」

「意外にとはなんだ」

心外な、というような顔をしたユリウス3世だったが、内心は面白がっているようだ。

「アンナ、次は俺と踊って欲しい」

そういうと、ギルバートは私にすつと手を差し伸べた。

「え?! ……わ、わかったわ」

そういつてギルバートの手を取ると、私はまた広間に躍り出た。

この曲からはほかの貴族達や、ダキアとヌミディアの貴族達も参加することができ、大理石の広間の上はさらに色とりどりになった。

今度もまたゆっくりとしたテンポの曲だったので、先ほどよりは少しだけ余裕を持って踊ることが出来た。

そう思っていると、ギルバートが私の耳元に声を落としてくる。

「アンナ、さっき皇帝陛下となにを話していた？」

その声は思いのほかいい声で、私の背中にはぞわりと鳥肌が立った。

「大したことじゃないわ」

それだけを早口でいうと、私は少しだけしどろもどろになりながらステップを踏んだ。

「皇帝陛下と俺と、どちらのリードが上手い？」

そういつてギルバートは私の背中をぎゅっと抱き寄せた。

ほぼ密着状態になったが、足運びに支障はなく、むしろ抱えられてくると運ばれているような浮遊感があった。

「ギルバート、かな？」

私がそういうと、ギルバートは満足そうな笑みを浮かべた。

次のステップに移ろうと準備しかけたとき、ギルバートがさつと腰に手をやった。

身体を密着させたまま、ギルバートは先ほどユリウス3世がやったのと同じように私を抱き寄せくると回転した。

「きゃっ！」

思わず小さな悲鳴をあげるが、ギルバートはくすりと笑うだけだ。

「皇帝陛下にされていたのと同じことをしてみた」

「再現しなくてもいいのよ」

やっとそれだけいうと、私は気持ちと態勢を立て直した。

まったくもう、なにを子供みたいなのをやっているのよ、と叱りたくもなったが、ギルバートのおかげで先ほどまで僅かに残っていた緊張がすっかり取れたのでよしとしようと思ってしまった私だった。

このダンスも無事終わり、場の雰囲気にも慣れてきた私は、休憩と称して壁際に佇みながらほかの国の貴族達を観察することにした。

まず一目でわかるのがヌミディアの貴族達だ。

ほかの貴族達と比べてやや小柄ではあるが、蜂蜜色の肌と、意志の強そうな瞳と、濃い色をした髪の毛がとてもエキゾチックでエネルギーギッシュだ。

それにダンスにも切れがある。

「小柄だけれど、身体能力はとても高そうね。そうじゃなきゃ以前見たときのようなあんなアクロバティックな技は出来ないものね」

まるで獣みたいねと思った自分がいる。

「謁見のときに族長がどうかいていたし、流しの一座なんかも

やっていたことから、彼らは多分私が元いた世界でいうところのロ
マみたいな人達なんじゃないかしら。そんな人達が国を持って定住
して、そうして派閥ができて二つに割れた、ということだったわよ
ね」

対してダキアの貴族達とは見る。

ダキアから来た貴族達は、メリトウス風の格好をし、ヌミディアの
貴族達と談笑している。

「ダキアのほうは、メリトウスに接している隣国とのことだけれど、
身なりも立ち居振る舞いもメリトウスの貴族と比べて全然遜色ない
わ。こうやってみると、全然わからないわね」

獣といわれても、人型の時点では本当か？ と首を傾げてしまいうく
らいだ。

それはこの国に住む獣たちにもいえることでもあり、ギルバートや
「水道局」の仲間達にもいえることだった。

「そういえば、ルウやガルディン、ハティたちは今頃どうしている
んだろうな」

彼らのことを思い出しながらぼんやりしていると、広間の端からざ
わざわとした声が聞こえ始めた。

どうしたのだろうとそちらを見る。

すると、そのざわざわとする声の間から一人の人が歩いてくるのが
窺えた。

それは「眩い」と形容するのが正しい光景だった。

その男性は金色に輝く長い髪を複雑に編みこんで背中に垂らし、黒地の長い上下に金色の糸で大輪のユウキアの花の刺繍をした衣装をまとっていた。

あちこちから「あれは誰だ」「なんと美麗なお方」などと声がかかっている。

その男性の顔を見た私はぼかんと口をあけた。

「あ、あれは」

例えるならば、「インタビュ・ウィズ・バンパイア」に登場するトム・クルーズ扮するレスタトだった。

貴族然としたその男性はつかつかと歩くと、ユリウス3世が座っている玉座の横に控えた。

「まさか……」

と、声がする。

私もまさかと思った。

「あれってもしかして、レーニア？」

レーニアは澄ました顔でユリウス3世の傍に控えていたが、ユリウ

ス3世から何か耳打ちをされると、にっこりと微笑んだ。

そして、玉座から離れると、確かな足取りでこちらへ歩いてきた。

ええ、確かにユリウス3世は「私を驚かせたい」といつていたし、これが「体面を心配してくれた礼」だともいつていた。

しかしまさか、レーニアがこんな貴族然とした人型になるとは思わなかった私である。

私の前まで来ると、レーニアは私の手をすっと取り、そしてその場で跪いた。

「アンナ様、私と一曲、踊っていただけないでしょうか？」

その仕草があまりにも美しく、私は固まったまま、はい、と返事をするしかなかった。

さすがレーニア、『統治者』という意味を持つ名前だけあるわ。

一つ一つの仕草が洗練されている。

私をエスコートするときも、ごく自然な様子で人垣から私を守って盾になってくれる。

踊り始めたときも、慣れない曲をしっかりとリードしてくれていた。

「レーニアがこんな姿をしているとは思わなかったわ」

レーニアのリードに身を任せながら、私はそう呟いた。

「お気に召しませんでしたか？」

「ううん、気に入らないんじゃないの。それどころか、レーニアのその姿があまりにも立派で驚いているくらいよ。今までなぜ人型で公の場に出てこなかったのかが不思議でならないわ」

私がそういうと、レーニアはふっと笑いながら答えた。

「それは警護の面で獣の姿でいるほうが、都合がよかったからです。我が主の私室では人型を取ることもありますよ。主に掃除のときですとか」

「掃除?! レーニア、人型でそんなことをやっているの」

驚く私に対し、レーニアは至って真面目に返答した。

「いけませんか？」

「いや、その容姿と掃除っていうのが、あまりにもイメージからかけ離れすぎていてね」

そんなことを話しているうちにいつの間にか曲が鳴り終わっていた。

私を元いた場所に返すと、レーニアは微笑みながらいった。

「アンナ様に喜んでいただけて光栄ですよ。人型になった甲斐があったというものです」

そういつてレーニアは玉座へと戻っていったのである。

それからフィリップとも一曲踊った私は、少し気持ちを落ちつけるため、夜風に当たろうと部屋から出てバルコニーへと向かった。

バルコニーに出ると、心地よい風が頬を撫でた。

「あー、涼しい、ダンスで火照った体にはちょうどいいわ」

バルコニーの手すりにもたれながら、私はふうとため息をついた。

空に出ている月を見つめる。

月は静かに明かりを落とし、目の前に広がる庭園を幽玄な雰囲気へと変えている。

私は月を見ながら、ぼんやりと考えごとをした。

「この世界の月は元いた世界の月と同じように見えるわ。太陽も同じ。なのに、獣が人型になったり、皇帝陛下の呪があったり、マタタビみたいなユウキアの木が獣を狂わせたりと、元いた世界とは全然違うわ」

そう、この世界は自分が持っている常識では当てはめられない部分がいっぱいある。

それに成り上がり、というか、なし崩し的にこの国の権力中枢まで上り詰めた私だけれど、感覚としては未だに一般市民の部分がある。

公の場所で何かを成し遂げなければならぬときには思いっきり緊張するし、スパルタ先生方に礼儀作法や教養を教えてもらったからといってもそんなのは付け焼刃でしかない。

自分が大人だという自覚はあるから、公の場では醜態を晒さないようにと気を張ってはいるものの、心の中では「私はしがたい一般市民で小市民なのよ」と叫んでいるぐらいだ。

確かに貴族になってからというものの、生活面においてはなに不自由なく暮らさせてもらっている。

だからこそ、申し訳ないというか、その代償がこういう公務なのだからと変なプレッシャーを自分で自分にかけてしまうというか、そのようなところがあるのだ。

「私がもう少し肝が据わっているか、神経図太ければいいんでしょうけれど、こういうところがヘタレなんだなあなんて思っちゃうわ」
そう思い、はあとため息をついたとき、ふと得体の知れない違和感と鳩尾の辺りに焦燥感があるのを確認した。

「なにかしら。この感じ」

よく周囲を観察すると、遠くのほうで何人かの人達が喋っている声がする。

その声を認知した途端、違和感は消え、鳩尾の焦燥感は一層強くなった。

「まさかこれって、『水戸黄門』の初仕事ってやつ？」

この焦燥感は以前にはなかったものである。

……そもそも人間の聴覚は人間が思っているよりも幅広い音を拾うことが出来る。

しかし、脳が意図的にそれら周囲の音を取捨選択していることによって日常生活を支障なく送れているのである。

これはまるで性能のよいセンサーのようだと私は思った。

私は皇帝陛下の呪について考えをめぐらせた。

「皇帝陛下の呪ってどんな仕組みになっているのだろう。呪の発動条件は決められた場所と、言葉だったけれど、それって一種の暗示みたいなものなのかしら？　音として脳に影響を及ぼすというような。そうすると体内の細胞やらなんやらがそれに応じて作り変えられるという仕組みになっているのかしらね。でもそれだと羊皮紙に浮かんだインクやら物理的に遮断する不可視の壁やら道路の光やらが説明できないわ。それらは超能力のようなものかしら」

そんなことを考えていると焦燥感は一層強くなってきた。

私の体は皇帝陛下によって作り変えられてしまったかのようなのである。

「いずれにせよ、この世界に来てから、ううん、元いた世界でギルバートと出会ってから私の体はどんどん変化している。この世界に適応できるようにと。でも、心はまだ追いついていけないわね。……さて。貴族達はこの晩餐会を楽しんでいるようだけれど、私には皇帝陛下の呪である『水戸黄門』という役目があるのよね。早速

情報収集をしなくっちゃ」

これってスパイ行為なんじゃないのか、と思わないでもないが、とりあえず自分で出来ることは自分でやろうと思った私は動くことにしたのである。

先ほどの声のするほうへ、足音を立てずに歩いてゆく。

近くの暗がりには身を潜めると、私はそれらの声に注意深く耳をそばだてた。

中には数名の男女がいるらしかった。

老若男女とでもいえるのか。

声だけで誰が誰かを判別することは出来なかったが、ここで話が出るというのなら貴族であるという可能性が高い。

「言葉」に反応する呪は、そういう細かなところまではフォローしてくれなかったようだ。

もつとよく聞こうとゆっくりと体をずらす。

すると、言葉がはっきりと聞こえてきた。

「獣が人の姿を取るなんて、全く、汚らしいわ」

「国同士の国益のことがなかったら、このような晩餐会は遠慮しておきたいところですよ」

「まったく、獣風情が人の姿を取るなどおこがましいと思わんのかね」

「しっ、獣は耳がいい、どこで聞かれているとも限らんぞ」

「この国のため、我らの未来のためにくれぐれもそのような素振り
は出さぬように」

「そこは上手くやるとも。なにせ私達人間はこの『褒章地』を与え
られしものなのだからな」

「ああ、それに今年は間引きの年だ。それで、溜飲を下げようでは
ないか」

なにを話しているのか理解が出来ないところもあったが、やはり貴
族達は獣を格下に見ているのだということはわかった。

ギルバートという相棒や、たくさんの獣達に接してきた私は、そう
いった感情がいまいちよく理解できなかった。

きつと彼らは、獣が人間に似ているからこそ異質な部分を嗅ぎ分け、
それに嫌悪するのだろう。

だがそうではなくて、異質だからこそ、同じ部分を見つけて喜びを
感じるということが出来ないのだろうか。

そう思っていると、話が終わったのか、貴族達が部屋から出てきた。

私は元の暗がりにも身を潜め、彼らがいなくなるまでずっと息を潜め

ていた。

全員がどこかへ行き、ほっと一息ついた私はその暗がりからゆっくりと体を外に出した。

「はああ、諜報活動も楽じゃないわねー、見つからないかと冷や冷やしちゃったわ」

私はそういいながら薄暗がりの通路を歩いてゆく。

すると突然うしろから艶のある声がかかった。

「あらあら、こんなところに、迷い猫かしら」

思わずビクツとした私であったが、努めて冷静に振り向く。

そこにいたのは波打つ豊かな黒髪をうしろに流し、胸元が大きく開いたワインレッドのタイトなドレスをまとった妖艶な美女であった。

「あの、どなたですか？」

こんな美女、会場にいたかしら？ と首を傾げる私だが、その様子を見て取った美女は自ら名を名乗った。

「この姿では初めてお会いするわね。私はキスキル・リラ。ウィリアムと行動を共にしているものよ。こんなところでお会いするなんて、なにかの縁かしらね」

そういつて嫣然と微笑んだキスキル・リラはゆっくりと舌なめずりをして私に近づいてきたのである。

始動 1

右手側には青い月明かりに照らされた庭園がぼうつと浮かび上がっている。

象牙色の大理石の上、足音を少しも立てずに、それはまるで水の上でも歩いているかのような足取りでこちらへやってくるのは、ワインレッドのタイトなドレスを見事に着こなした妖艶な美女であった。

「キスキル・リラですって？」

そう尋ねると、キスキル・リラは肩にかかった波打つ黒髪をばさりと跳ね上げた。

「ええ、そうよ。幼女と乙女、そして私が『私達』の人型の全てなの。……知っていて？ 『私達』はこの世界の人型になれる獣とは少しばかり違う種類のものなのよ」

「え？ それはどういう……」

キスキル・リラは私のその疑問には答えず、1メートルほど近くまでやってくるとそこで足を止めた。

彼女は私の姿をじっくりと検分するかのように見回した。

「まあ、そのドレス、よく似合っているわ。アンナの肌の色をよく引き立たせている」

「ありがとう」

少し戸惑いながら礼をいう私。

その姿を見たキスキル・リラは頬を赤く染め、蕩けるような微笑みを浮かべた。

「アンナの戸惑う姿はなんて愛らしいのかしら。今すぐにでも連れて帰りたいところだけれど、今はまだそのときではないわね」

「あの、キスキル・リラ、さん？」

「ああ、私のこともリラと呼んでちょうだいな。統一したほうがわかりやすいでしょう？」

そういうとキスキル・リラは、今度は三日月のような笑みでもってこちらを見やった。

「ええ、わかりました。それじゃありら、どうしてここへ？ それと、連れて帰るって？」

「あら、アンナこそどうしてこんなところへ？」

質問に質問で返された。

「……ええと、涼みにかしら」

「こんな人気のないところへ？ それもひとりで？」

「ええ、まあ……人いきれに少し酔ってしまったもので」

なんとか無難な答えを用意することが出来た。

ほっと一安心していると、キスキル・リラが口を開いた。

「ふうん、それは現皇帝の差し金ね？ 諜報部員など掃いて捨てるほどいるというのに。なぜアンナにそんな真似をさせようというのかしら」

キスキル・リラはことりと小首を傾げた。

一瞬どうしてそのことを？ と思ったが、顔には出さずに努めて冷静に答えた。

「なんだからリラは私が知らないことをいろいろと知っているみたいね」

キスキル・リラを見ると、未だ三日月のような笑顔でこちらを窺っている。

先ほどの私の質問はのらりくらりとかわされていたが、めげずに私は再度問うた。

「リラはまたどうしてここへ？」

今度はキスキル・リラから返答があった。

「あなたに会いに来たのよ。愛しいあなたをこの場から連れに。あ、助けに、といったほうがいいのかしら。それにしてもこんな人気のないところで出会ったのは縁としかいいようがないわね。ああ、アンナにはエランディオールと同じ世界の人間だとは思えないほど

そそられるわ」

キスキル・リラからは香水だろうか、かすかに麝香のような匂いが漂ってくる。

彼女から発する気のようなものが先ほどよりも濃密になるのを感じた私は、それをいぶかしみながらも聞いた。

「エランディオール……？ リラ、さっきもいつていたけれど『私を連れに』ってどういうこと？」

「そのままの意味よ。『私達』はね、アンナをウィリアムの元へ連れて行くとしているの。幼女は喜んでいたわ、アンナがママになるって。私も自分の想い人が手に入ると思うとぞくぞくするわ」

「な、なにをいうかと思えば、とんだご冗談を。それに想い人って……あなたとは今日初めて会ったのに」

私がふっと息を吐きながらいうと、キスキル・リラはそのアーモンドのような目だけをさらに細めた。

「今は冗談だと思っておいても構っても結構よ。ふふ、でもそのうちそれが本当のことになるわ。必ずね」

そういうと、キスキル・リラはさらになにかをいいかけてふと口をつぐんだ。

「あら、短い逢瀬だったわ。あなたのナイトがやってきたみたい」

私が後ろを振り向くと、そこには早足でこちらに向かってくるギル

バートの姿があった。

「アンナ、長く姿が見えないからどうしたのかと思ったぞ。こんなところにいたのか」

「ええ、今キスキル・リラとちよっとお話していたの」

私がキスキル・リラを紹介すると、彼女はギルバートに対し優雅なお辞儀をした。

頭を下げたときに波打つ黒髪が妖しく光り、ドレスの胸元がきわどいところまで見え隠れする。

顔をあげたキスキル・リラは自身の艶めく唇をぺろりと舐めた。

「この姿では初めてお会いするわね。私の後輩さん？」

「なんだと？」

「ふふ、知らなければいいの。せいぜい気張ってアンナのナイトでいてちょうだいね。でないとアンナが泣いてしまうことになるから」

ギルバートが近くに來て、私の肩に手を置く。

私達の姿を見たキスキル・リラは、ふっと微笑んだ。

「まあ、仲睦まじいこと。そうそう、私は普段この姿で人前に出るのはあまり好きではないの。でも、アンナの前では別よ。これからも末永く仲良くしましょう？」

そういうとキスキル・リラは身を翻した。

「アンナ、あなたはいずれ『私達』の元へと来ることになるわ。その日を楽しみにしているわね」

その言葉を残すと、キスキル・リラは闇に消えていった。

その場に残されたギルバートと私は2人してわけがわからないといったような表情をした。

「なぜキスキル・リラがこんなところに？」

「わからないわ。でもリラは私に会いに来たといっていたわ。それから、私を連れに来たとも」

「アンナを連れに来ただと？　どういうことだ」

「なんだか、私がキスキル・リラと一緒にウィリアムの元へ行くとというような話だったと思ったけれど」

「そうか……」

そういったきり、ギルバートはキスキル・リラが消えていった方角をじっと見つめていた。

ギルバートと連れ立ってホールへ戻ると、そこには目にも鮮やかな料理が用意されていた。

「わあ！　お腹空いていたの！　食事に間に合ってよかった」

思わず相好が崩れてしまう。

フロアの半分に新たな長机が用意され、その上に所狭しと豪華な食事が置かれている。

「踊りたい人は踊り、食べたい人は食べるようにするための立食形式なのね」

シャンパンを飲み、スライスされたローストチキンをつまみながら、私は会場内を見回した。

「そうだわ、ティリウスとウェルミナ！ あの2人に挨拶してこなくちゃ」

皇帝傍付きの神官として（といっても神官とは名ばかりの大変俗物的なポジションだけれども）、一応挨拶をしておかねば思ったのだ。

見ると、ティリウスとウェルミナはバルコニーでちょうどよく2人で何かを話し込んでいる。

私はギルバートを伴って2人のほうへ歩いて行った。

どうやって声をかけようかと思いつながら歩いていると、気配を察したティリウスがこちらを向いた。

「ああ、アナ様、お久しぶりですね」

「ティリウス！」

一瞬はしゃいだ私だったが、今日は国の重要ポストとして会っているのだからと思い直した。

「本日の趣向、楽しんでいただけているでしょうか？」

すると、ティリウスは笑顔で私を呼んだ。

「アンナ様、既知の仲なのですから堅苦しい挨拶は抜きにしまし
う」

そういつてティリウスは私達をバルコニーへと誘った。

私とギルバート、ティリウスとウェルミナの4人がバルコニーに並
び立つ。

「ウェルミナも、お久しぶりね。先日はいろいろと尽力していただ
いてありがとう」

私がそういうとギルバートもウェルミナに頭を下げた。

「俺も心から感謝する。あの時助けてもらわなかったら今の俺はな
かったかもしれない」

私達を見たウェルミナは美しい顔をにやりと歪ませた。

「まあ、こちらとしても大金が手に入ったから悪い話じゃなかった
ぜ」

この会話を聞いたティリウスが少しだけ目を丸くする。

「お3人は知り合いだったのですか」

「まあな。それにあんたもアンナ達と知り合いみたいじゃないか」

「世間は案外狭いんですね」

ウエルミナとティリウスはそういつて笑い合う。

「それにしても」と私は口を開いた。

「ティリウスもウエルミナも一国の王子だなんてぜんぜん知らなかったわ。知っていたらもっと違った対応を取らせていただいたのに」

私がそういつとティリウスとウエルミナがそれぞれ言葉を継いだ。

「いえ、あの時は俺も身分を隠していましたからね。だが『無音の獣』という通り名が一人歩きしていたので、あの宿の中間達からは、なにがしかは感づかれてはいたようですが」

ティリウスはそういつて彼にしては珍しくふわりと薄く微笑んだのであった。

「俺のほうもそれは必要ねえよ。俺がアンナと出会ったときは流しの一座を率いるウエルミナとしてだから、対応はあれで正しかったぜ」

美人の顔からぶっきらぼうな口調でそういわれるとなんだか変なギヤップを感じるが、そこは頷いておくことにした。

「アンナ、ギルバート、これからよろしくな」

そういつて手を差し出すウエルミナ。

相手を全然敬っている風には聞こえないが、それがむしろさっぱりした印象を与えるのはこのウエルミナという人の人柄だろうか。

私がウエルミナの手を握ろうと自分の手を差し出したそのとき。

広間のほうがにわかに騒がしくなった。

始動 2 ▲

「なんだ？」

「どうしたのかしら」

見ると広間に突然現れた武官が入ってくる場所だった。

防具は胸当てと肩当てのみ、その下にはワンピースのような服、サ
ンダルという軽装の出で立ちの武官は、ユリウス3世の前に赴き伝
令を伝えた。

「緊急事態です！国境付近にヌミディアの騎馬隊が出没しました！」

その声は小さかったがよく通った。

急にざわざわとする広間。

ダンスの音楽が止み、動揺が次第に広間全体へと広がってゆく。

伝令のその言葉をしっかりと聞き取った私は思わずギルバートを見
上げた。

「今の伝令がいったこと聞いた？」

「ああ。ヌミディアの騎馬隊が出没したとのことだろう」

私達2人の話を聞いていたウェルミナが苦い顔をした。

「ちっ、あいつ、厄介ごとを持ってきやがって」

私はウエルミナに確認した。

「ウエルミナと対立している相手は族長の甥だっっていっていたわよね？　ってことはウエルミナの従兄弟になるの？」

「ああ、俺の親父の弟の息子だからな」

そういったウエルミナはガシガシと頭をかいた。

「まったく、面倒起こすじゃねえっての」

「でも、この国は皇帝陛下の呪で守られているんだから、いくら騎馬隊といっても大丈夫なんじゃないのかしら？」

私がそういった途端、向こうで伝令の話を聞いていたユリウス3世の顔がずっと引き締まるのが見えた。

「なに？　国境を突破しただと？」

「は。相手は巡礼用の衣装に身を包み、恐らく帯剣していないため、『壁』が機能しなかったのだと思われます」

その声は先ほどよりも小さかったが、居並ぶ貴族達の不安を掻き立てるには十分だった。

「まあ恐ろしい！　騎馬隊が国境を突破したですって?!」

「帯剣していないとはいえ、統率された軍馬は脅威になるぞ」

「私達はどうすればいいの？」

右往左往する貴族達。

相手の出で立ちを聞いたウエルミナはううんと頭を捻った。

「侵攻の仕方もういろいろあるだろう。あいつらは本気でこの国を乗っ取ろうとしてきやがったんだ。巡礼用の衣装に身を包んでいるということは、ユウキアの樹がある場所へと向かうつもりだ。聖なる樹に、自分に王の資質があるかどうか試す心積もりでいるらしい。だが解せない。どうして急に侵略方法を変えたんだろう」

「それはうちの仕業だよ」

突然のその声に私達4人はバルコニーから外を見る。

すると十数人ほどの一団がこちらにやってくるのが見えた。

彼らは一様に俊敏そうな騎獣を引き連れている。

月明かりに照らされ、それら騎獣の瞳が怪しく光る。

「お前達！ どこから入ってきた！」

伝令に來た武官が外の異変を感知し、前に進み出る。

「まあまあ、お初にお目にかかりますわね。あたし達や、商人連合のもんです」

ぞろりとした黒い服を着た怪しい一団の中からひとりが口を開いた。

「ウィリアム様からこの晩餐会への直々の招待を頂いたんですがねえ」

「なに?! ウィリアム様からだ?」

驚く武官を尻目に、商人連合の面々は、バルコニーの外側から居並ぶ貴族達とユリウス3世に向かって言葉を吐いた。

「ええ、左様でございます。実はあたし達やね、この平和にいい加減うんざりしているんですよ。戦争用の獣はだんだん売れなくなるし、ここんところたて続けに内部でゴタゴタがあったもんで商売上がったりなんですよね」

その言葉に次いで、別のものが口を開く。

「身内が粗相をしでかして、商人連合自体の株も下がっちゃったしねえ」

「ラカン、ウォルデイ、ライモンド……、ああもう、あいつらときたら商人連合の顔に泥を塗ってくれたよなあ」

はあ、と一斉にため息をつく十数人の人間達。

「ま、そんなことはどうだっていいですよ。俺達やね、この汚泥みたいな平和を守っている皇帝陛下、あんたの首をすげ替えに来たんだよ」

すると、一番最初に口を開いたものがまた発言した。

「えー、これをもって、商人連合は現皇帝陛下に反旗を翻します」
それは実にあっけなく宣言された。

「俺達には新たなお得意様を隣の国で見つけて下さった、ウィリアム様というありがたいお方がついていらっしゃるしねえ」

「俺らとウィリアム様がこの国を変えてやるよ」

「それじゃ、今日はそれを伝えにきたってことで」

そういうと、商人連合の面々は騎獣に乗ってきびすを返し、そのまま闇の中を疾走していった。

「なんなんだ……」

「そういえばウィリアムは？」

辺りを見回すがそれらしき影は一向に見当たらない。

「謁見後は姿を見かけなかったわ。まさか……」

あることに気付いて顔が青ざめそうになったとき、広場から朗々とした声が聞こえた。

「皆、心配は無用」

声のするほうを向くと、そこには玉座の前に立って、両手を広げて皆に語りかけるユリウス3世がいた。

「アンナ、こちらへ」

ユリウス3世に呼ばれたので、なんだか現実感のない中、ふらふらと玉座の前へと赴く。

ユリウス3世の前まで来ると、彼は自ら私の隣へと歩を進めた。

その顔を見ると、先ほどの商人連合からの宣言にまったく動揺していないばかりか、なにかをたくらんでいるような顔をしている。

何事？ と思っただが、恐る恐る横を見る。

そして次のユリウス3世の言葉を聞いて私は仰天した。

「皆、安心して欲しい。我が国には私のレーニア、セルビアのスコル、そしてアンナのギルバートという3頭の優秀な獣がおり、今までに軍功を立ててきた優秀な武官らもいる。だが、私の獣は皆も知っての通り、皇帝が持つ獣としては十分ではない。そこで、ついては、私はこの皇帝傍付きの神官であるアンナ・タイラと婚姻を結ぶことをここに宣言する」

よく通る声で、高らかに宣言されたその内容。

一瞬静まり返る広間。

次の瞬間、広間で一斉にざわざわとした声が巻き起こった。

「……え？」

状況が飲み込めない私は仰天しつつきよんとするばかり。

隣を見ると、なんと、ユリウス3世が笑っていた。

「ウィリアムも商人連合も、よくもまあ派手に動いてくれたものよ。そんなにまでしてこの国が欲しいのか？」

「あの、ユリウス3世？」

引きつった顔で私はユリウス3世に問うた。

「なんなんですか、今のは？」

「ん？ 言葉通り、お前と私の婚姻の宣言だ」

ユリウス3世は満面の笑みで答えた。

「皇帝の呪がこんなところで役に立つとは思わなかったぞ。少しばかり早かったが、これでアンナ、お前は私の后だ」

そういうと、ユリウス3世は皆に向かって笑顔を振りまいた。

「私とアンナが婚姻を結べば、この国に新たな秩序と新しい人と獣の関係が出来上がるだろう。今宵はその前祝としようではないか。皆、盛大に飲んで食べて踊って欲しい」

その言葉を合図としたのか、楽隊が音楽を再開する。

広間はざわざわしていたものの、音楽のおかげか、殺気だった雰囲気はだんだん和らいできたのであった。

私はユリウス3世に連れられ、広間から外へと出た。

外の風は涼しかったが、私のはらわたは煮えくり返っていた。

「いつからそんなくらみを……」

私はユリウス3世をにらみつけた。

「知りたいか？」

「いいえ、酷すぎて知りたくありません。そんなにギルバートの力が欲しいんですか？」

私はわなわなと震えだした。

「それに、勝手に婚姻って」

「向こうが国を変えようというのならば、こちらもそれ相応の対応でもって臨んでやらねば齒ごたえがなからう。レーニアとギルバート、スコルの3頭でことが足りればいいのだが」

そういつて思案するユリウス3世。

「……なにそれ、なんなのそれは！ 一瞬いい人かもって思ってた自分が馬鹿みたい！」

少しだけ、自分にお兄ちゃんがいたらこんな感じなのかなあなどと思い始めていた自分にもものすごく腹が立ってくる。

「婚姻って、后って、私の意志とはまったく無関係に決められたこんな話は無効よ！」

「いったはずだが。『皇帝の言葉の拘束力を甘く見るなよ』と。もうお前は私から逃れられない」

そういうとユリウス3世は人の悪い笑みを浮かべた。

どうしてこうなったのだ。

一体いつからユリウス3世はそんなことを考えていたのだ。

「やはり、あんたは皇帝になるだけあって頭のねじがどっかおかしくなってるんだわ。こんな非人道的な話、受け入れられないわ！それに人殺しも厭わず出来るあなたなんか願い下げです！」

そういった瞬間、私はユリウス3世の腕の中にいた。

「は、離して！」

ぎゅうっと腕で押そうとするが、それ以上の強い力で抱きしめられる。

「煩い小鳥だな。その口、二度と嚙れないようにしてやろうか」

そういうとユリウス3世はくつくつと笑い出した。

「面白いことを教えてやろう。お前は私から逃れられない。その証拠を今見せてやろう」

いうが早いかユリウス3世は顔を落とし、そしてゆっくりと私の首筋を舐めたのである。

瞬間、ぞくぞくと背中に電流が走ったかのような感覚が突き抜けた。

「……嫌っ！ なにこれ！」

思わず目を見開いた。

たった一回舐められただけなのに、なぜだかわからないけれど体が疼いてくる。

顔が朱に染まり、目に涙を溜めながらはあはあと荒い息をつく私を、ユリウス3世は面白そうに見つめた。

「わけがわからないといった顔をしているな？ 先ほどの宣言で前前の体は私が与える刺激に反応するように作り変えられたのだ。后が感じないのでは子も作れぬからな」

「子……？」

ついに涙をこぼしながらも、いぶかしげに聞く私を見て、ユリウス3世は面白い話でも見つけたかのようにいった。

「そうだ」

そういったユリウス3世は、今度は私の頬をゆっくりと舐めた。

また、電流のような快感が背中を突き抜ける。

怖くて、心は嫌がっているのに体が反応しているのが恐ろしくなつて、私は相手に憚ることなく泣き始めた。

「嫌だ！ 離して！」

「アンナ、私の子を孕め。二人で世界を変えよう」

そういうとユリウス3世は私に口付けをした。

「嫌、嫌だってば！ 私こんなの嫌ああ」

ぼろぼろと泣きながら、しかしユリウス3世から与えられる口付けの物凄いほどの快感に我を忘れそうになる。

いつの間にかユリウス3世にしがみつき、自分から求めそうになるのを抑えるのが精一杯の私は、自分の後ろにギルバートが来たことにも気付かなかった。

「アンナ！！」

切羽詰ったその声に、ユリウス3世は顔をあげた。

ユリウス3世のその腕の中にはぼろぼろと泣き、息を切らしながら助けを求める私の姿があった。

「どういふことか説明してもらおうか」

「言葉通りだギルバート。先ほどアンナは私の后となった。これは夫婦の睦事の最中だ。無粋な真似は止してくれるかな」

「ユリウス3世、あなたはアンナになにをした?!」

「私が与える刺激全てを快楽と感じるように作り変えたただけだ。アンナのことで、色狂いにはなるまい。そこがまたいい。これから十分に楽しませてもらうぞ」

そういうとユリウス3世は腕の中にいた私をギルバートがよく見えるように自身の胸の前で抱きかかえた。

「よく見るがいい。私が与えるものをアンナは悦んで受け取っているぞ」

そういうとユリウス3世は私の首筋に軽く歯を立てた。

「ああっ! 嫌! 見ないでギルバート!」

必死に感じないようにと努力するが、瞬間手足の指がぎゅっと丸まり、体の疼きは収まるどころかもっと欲しいと忠実に求めてくる。

「うっ、えっ、えっ」

あまりの快感に腰が抜け、しかし心は拒絶しているため嗚咽を漏らした私をユリウス3世は優しく抱きとめた。

「見ただろう? このアンナはもうお前の知っているアンナではないのだよ。私のものだ。そういうことだから、ギルバート、お前にも私達を祝福して欲しい。新たな国の礎となる私達を」

「誰がするか!!」

ギルバートの怒号にも我関せずといった体で、ユリウス3世は片眉をあげた。

「ギルバート、お前があまり無茶をすると私がアンナにも無茶をしなくなってしまうかもしれないぞ？　なにせ、私の与える刺激全てが快感となるのだからな」

「ひっ！」

思わず怯えた声をあげた私の顔を、ユリウス3世はゆっくりと優しく撫で上げた。

「……アンナ、心配せずともお前に無体な真似はしない。私にそのような趣味はないし、お前を憎からず想っているからな。存分に快楽に溺れさせてやろう。私しか見えなくなるように。お前はきっとよき后になるのだろうな。もちろん、閨の中でも」

そういつてユリウス3世は私を軽々と抱えあげた。

「ギルバート、聡いお前ならば理解できるだろうな？　アンナの幸せを思うならば身を引くことが賢明だ」

怯えて涙が止まらない私の頬にユリウス3世は口付けを落とすと、身を翻して歩き始めた。

「どこへ行く?!」

首だけをこちらに向けると、ユリウス3世はにいつと笑った。

「私の寝室だ。アンナを休ませてやらねばな。私の大切な后なのだから」

そういつて立ち去るユリウス3世の背中を、ギルバートはただ齒噛みして見ているだけしかできなかったのである。

始動 3

——ああ、最悪の気分だ。

気持ちが悪い。

体は火照っているのに、心の奥底はどんどん凍っていくようだ。

今ユリウス3世の腕の中にいることが嫌ではなく、むしろ心地よいとすら感じている自分に嫌悪を感じている。

彼のとくんとくんと鳴る心臓の音が、温かいとすら感じている自分はどうかしていると思う。

ユリウス3世に連れられ、彼の私室にある大きなベッドに座らされた。

彼の腕から離れるとき、物欲しげな顔をしないようにするのが精一杯だった。

「着替えを用意させよう」

そういうとユリウス3世は手を叩き、召使を呼んだ。

どこからともなく現れた召使は、肌触りのよさそうな白いワンピースを抱えて持ってきた。

「私は隣の部屋で仕事の片付けをしているからゆっくりと着替えるがいい」

彼が部屋から出たあと、私はのろのろと服を着替えた。

その膝丈のワンピースはシルクのように柔らかかったが、今の私にはそれを楽しむ余裕は毛ほどもなかった。

私の体はあの「宣言」で、ユリウス3世の玩具として作り変えられてしまった。

「あんな私を見て、幻滅しちゃったよね、ギルバート」

そう呟いた途端、涙が溢れた。

こんなの私じゃない。

ほかの人の腕の中で、快楽に身悶えする私なんて。

まだ心は動揺している。

それを払拭するべく、立ち上がって、部屋をぐるりと一周してみる。

無駄に広いだけのその部屋は、よくいえば質素、悪くいえば殺風景であった。

ベッド、机など最小限のものしかないその部屋は、ユリウス3世の人となりを表しているかのようだった。

部屋をよく見ると、ベッドの端に無造作に立てかけられた剣があるのを発見した。

「よく似合っているじゃないか」

はっと後ろを振り向くと、ユリウス3世がドアにもたれてこちらを窺っていた。

「嫌！ 来ないで！」

とっさに目の前にあった剣を掴み取る。

剣を鞘から抜こうとするが、抜けない。

「……アンナ」

私のその行動を見て、ユリウス3世はにいつと笑った。

彼から発されたその声を聞いた途端、急に足の力が萎えた。

畜生、声まで耳に作用するのかよ！？

……いや、これは自分が動揺しているだけだ、まだ触れられてはいない。

鞘に入ったままの剣を振り上げようとするが、重くてふらついてしまう。

ユリウス3世は私に無造作に近づくと、その剣を片手で下から掬い取った。

「よく見ろ、鍔と鞘に金具が付いているのが分かるか？ これを外さねば剣は抜けない仕組みになっている。実戦や稽古で使う以外は

こうして封じてあるのだ」

「来ないでってば！」

私は剣をユリウス3世に押し付けると後ずさりしようとした。

と、私の手をユリウス3世が素早く掴んだ。

ぐいと引き寄せられ、私はまたユリウス3世の腕の中に閉じ込められた。

「先ほどは驚かせてしまったな」

「離して！」

精一杯の抵抗の声をあげる。

でも。

ユリウス3世の腕の拘束が気持ちいいのも事実だ。

彼は抱き込んだ私の頭をゆっくりと撫で始めた。

「お前は怯えた子ウサギのようだな」

大きな手が、ゆっくりと後頭部を包み込む。

とくん、とくん。

ああ、ユリウス3世の心臓の音が聞こえる。

この人はまったく動揺していない。

それどころか、この状況を楽しんですらいる。

そんな人から与えられる、柔らかく頭を撫でられる感覚に目を閉じてしまいそうだ。

「……落ち着いたか？」

いつまでも緩まない拘束の中、脱力した私はついにユリウス3世の胸に体を預けてしまった。

瞬間、ぎゅうと体を抱きしめられる。

この人は私の心の機微を掌握しているのだろうか。

まるでよくできましたと褒めるかのように抱きしめられたら、心が跳ねてしまう。

「お前は、温かいな。それに柔らかい。ひとり寝も飽いていたところだ。ちょうどよい抱き枕にでもなるだろう」

ユリウス3世は私を抱きかかえたままベッドに寝転んだ。

彼の胸板の上にいる私は、彼の規則的な心臓の音の上に身を投げ出す形となった。

ユリウス3世の呼吸に合わせて上下する胸板の上で、私はぎゅっと手を握った。

悔しいが、だんだんとその呼吸に足並みが揃い、安心し始めている自分がいる。

まるで猫でも撫でるかのように、ユリウス3世はゆっくりと私を撫で上げる。

「アンナ、まずは私の腕の中にいることに慣れろ。私は壊れた人形などいらぬからな」

「そんなの、一生慣れることはないわ」

「……ふむ。口調だけは勇ましい。だが体は正直だな。脈拍も安定してきているし、呼吸も穏やかだ。これからは毎晩私の腕の中で眠らせよう」

その言葉に私は恐怖した。

このままここにいたのなら、なし崩し的にこのユリウス3世にほだされてしまうかもしれない。

ギルバートのことはもちろん大切に思っている。

だが、先ほどの強制的に与えられる快楽と、この温かい腕の中とのギャップが、すでにじわじわと私の心を麻痺させているのだ。

もうこのままこの人の玩具として生きることには半ば諦めに似た気持ちで受け入れそうになっている自分がいる。

……だがだめだ！

いくら体が反応したってそれに引きずられてたまるか！

私が大切にしたいのはギルバートなのだから。

逃げよう、一刻も早く。

でないと、私はこのユリウス3世の張った蜘蛛の糸に絡めとられてしまう。

そのときユリウス3世が私の頬に自分の頬を付け、耳に直接声を送ってきた。

「逃げようなどとは思うなよ」

低く甘い声でユリウス3世はいった。

そのまま耳を甘噛みする。

瞬間、耳の中が痺れたようになる。

「あうっ」

「やはり体は正直だな」

思わずキッと涙目でにらみつけた。

「そんな顔をするな。このまま続けたくなる」

そういうとユリウス3世は私の頭を自分の胸に抱きかかえた。

「お前を手に入れることは銀の獣を手に入れることと同義だと気付いたのは私ひとりではなかった。ウィリアムもお前を手にいれようと動き出している。だが私はお前を手放すつもりはない。私の后として並び立たせるために、神官の地位を与えたり、様々な訓練をさせたりした。もっとじっくり手間をかけて育て上げるつもりであったが、向こうが侵攻を早めてきてしまったので、こうすることにしたのだ」

「そんな、じゃあ今まで親しく接してきたのは全てギルバートを手に入れるためだったの？」

「拗ねているのか？ 私はお前を欲している。そのことになんの違いがある？」

「拗ねているんじゃないわ、ただ、悔しい。一時とはいえ、子供みたいにあんたのことを信用してしまった自分が」

そういうと悔し涙が溢れてきた。

「女を泣かすのは趣味じゃない。だが、アンナが泣いているのを見ると妙にそそられるな」

唇を必死に咬んで涙を堪えようとすると、口元にユリウス3世の大きな手が添えられた。

「咬みたければ咬むがいい。自分を傷つけても何も変わらんぞ」

「やめてよ、いらぬわそんなもの」

ユリウス3世は、今度は親指で私の涙を拭きながら頬を撫でた。

「そうだ、私はその口調も気に入っているぞ。もはや私を敬ってないのだであろうが、そんなことはどうでもいい。いずれそれが気心の知れたものに接するようになるであろうことを想像すると、それもまた楽しみの一つとなるからな」

その言葉を聞いた私ははっとした。

いつの間にか敬語を忘れてしまっていた。

でもそれがなんだというのだ。

今後絶対に、この人には気を許したりなんかしない！

皮肉なことに、ユリウス3世の腕の中で安心した私は物事を冷静に考えられるようになった。

ユリウス3世のこういう精神的な束縛、いくら優しかろうとこれは立派なDVだ。

今後どれだけ体の相性がよくなろうが、今の私の矜持がそれに捕らわれることをよしとしない。

元いた世界では普通の女性として、割と流された生き方もしたし、枯れてはいたが慎ましい処女ですらなかった。

結構妥協した人生を送ってきたとも思う。

でもね、私はこの世界に来てから、ギルバートや「水道局」の仲間

達、ティリウスやフィリップやウェルミナ、いろいろな仲間達に出会って、少しずつこの世界に根を下ろし、自分の人生とはなにか、ということに目覚め始めてきていたのよ。

なし崩しの地位は上がってきたけれど、それは私自身の功績で手に入れたものではないし、未だに周りの現象に流されてばかりだとも思う。

今までだったらそれでもいいかあって思っていたところだったけれど、この世界で生活するようになってからは、それでいいのか、と自問するようになってきた。

それは、精神的な自立の前触れなんじゃなからうか。

ギルバートのおかげで身分は安定したけれど、それが真の自立ではないということに私は気付いてしまっている。

自分の手で掴み取ったものは、ギルバートの『変容』を、体を張って抑えたということだけ。

その印は私の左の手の平にある。

この傷が、私がこの世界で自分の手で掴み取った初めてのものの。

これがあるかぎり、私は迷わないでいられる。

これからいくら揺さぶられようとも、その気持ちだけは変わらないはずだ。

でもこんな考えをする私はこの世界では異質な存在であると思うし、

異物であるとも思う。

自分の常識よりも世界の常識のほうが当たり前の基準なのということもわかっている。

それはまるで世界の狭間に立っているような気分だ。

でも、私は今その狭間でも生きていくと決めたのだ。

この世界に根を下ろし、ギルバートや仲間達と末永く幸せに暮らしましたという幸せな結末を迎えるために、私は頑張るのよ！

私は、今度はこの世界で惚れた男、ただその人を生涯愛し続けたい！

そのためならば、この状況、絶対に乗り切って見せる！

そう決意した私は、ユリウス3世の腕の中でぎゅっと左手を握り締めた。

「ほう、気持ちを立て直したか。やはりギルバートの契約者だけのことはある。だから飽きないのだから」

「なんとでもいえばいいわ。私は私の選んだ道を歩きたい」

「その道は私へと繋がっているのではないか？」

「知らないわ。でも、今日はもう疲れたの。いい加減この腕の中から開放してくれない？」

「やっとお前を手に入れたのだ。誰が離すと思う？」

「私じゃなくてギルバートを手に入れた、でしょう？」

私がそういうとユリウス3世はため息をついた。

「お前はまだ自分の価値が分かっていないようだな。お前とギルバートは分かちがたい絆で結ばれている。お前の価値もまたギルバートと同じものだということを理解しろ。今日はもう休むがいい」

そういうとユリウス3世はサイドテーブルにあらかじめ置かれてあった匂い袋のようなものを私に嗅がせた。

その香りを嗅いだ瞬間、私の意識は遠のき始めた。

「……卑怯よ！ 薬を使うなんて！」

だが抵抗空しく、私はずとんと眠りについてしまったのだった。

始動 4

——だれもいなくなった廊下に、ギルバートはひとり立ち尽くしていた。

半ば呆然と、2人が去ったほうを見つめていた。

「アンナの幸せだと……？ アンナは泣いていた。俺に助けを求めている。それなのに、俺はまたなにもしなかった」

怖かったのか？ 皇帝を殺すことで自分がただの殺戮兵器になるのが。

確かに心の片隅ではそれもあつたのかもしれない。

だが、俺はもっと別のことに對して恐怖を抱いていたのだ。

そうそれは、アンナが皇帝に欲情している、そのことに對して。

その事実がさっきの俺に二の足を踏ませたのだ。

アンナを追って外に出たとき、アンナの甘い香りが濃く立っているのを感じて俺は怯んだ。

アンナが甘い声で泣いているのを聞いたとき、俺は驚愕した。

そしてアンナが自分の元を離れ、皇帝の腕の中にいるのを見たとき、体中の血が沸騰しそうになった。

俺だけのアンナなのに。

あの顔を見られるのは俺だけなのに。

自分以外のものの腕の中で、アンナが欲情し、涙を流していることに俺はどうしようもない敗北感を味わった。

あの体を貪っていいのは俺だけだ。

アンナの契約者である、俺だけなのだ。

そしてアンナの目の中に恐怖が潜んでいたことも俺は感じ取っていた。

アンナは皇帝に捕らわれていたが、その目は俺に助けてほしいと如実に訴えていた。

そんな顔をさせる奴の腕の中なんかアンナを一刻だって置いておけるはずがない。

「……だれが引くか」

そういうとギルバートは獰猛な表情をした。

両の目の瞳孔が大きく開いたあとにきゅっと縦に伸びた。

「俺の元からアンナを奪うものはなんびとたりとも許さない」

これは狩りだ。

アンナという愛しい獲物を手に入れるための。

そう思うと頭の一部がずっと冷えた。

絶対に成功させなければならぬ狩りは、ひとりで言うよりもチームで行ったほうがやりやすい。

「どんな体になっていようが、俺のアンナであることには変わりない。まずは皇帝の下からアンナを取り戻すことが先決だ」

そう呟くと、ギルバートはその場をあとにした。

「ギルバート！」

ひとり廊下を歩いているギルバートにうしろから駆けてきたフィリップが声をかけた。

「先ほどの皇帝陛下の宣言、あれは……」

「あいつは本気でアンナを自分の后にするらしい。あんな奴だと知っていたら、気を許しはしなかったものを」

「どうしたんですか？ さっき廊下ではなにがあったんですか？」

フィリップにそう尋ねられて、先ほどのシーンが頭の中で反芻される。

だが、もう我を忘れそうになることはない。

いくら血が滾っていようが、生来のハンターの気質がそれを押さえ込んでいる。

「フィリップ、狩りは得意か？」

そう聞かれたフィリップはいぶかしげな表情をしながらもその質問に答えた。

「ええまあ、貴族のたしなみ程度ですけど」

それでは、とギルバートが言葉を継ぐ。

「俺の狩りの獲物がアンナである、といったらお前のやる気は変わるか？」

それを聞いたフィリップはずっと表情を改めた。

「……ええ、変わりますよ。特にそれが皇帝陛下のあんな宣言を聞いたあとならばね」

「俺はお前を駒として扱うがそれでもそのやる気は変わらないか？」

「アンナさんを手に入れるためならば、僕はなんだってやりますよ」

「そうか、ならば共闘だ」

そういうとギルバートとフィリップはがっちりと腕を組んだ。

「その話、俺らも混ぜてはくれませんかね？」

声のするほうに目をやると、そこには思慮深げな茶色い瞳の、寡黙そうな顔を崩さないティリウスと、面白そうな表情をしたウエルミナが佇んでいた。

「アンナ様の危機ならば、俺にも手助けさせてください。まだ護衛の契約は有効ですからね」

律儀な、と思ったギルバートであったが、ここはありがたく承諾することにした。

「俺も混ぜてくれよ。こんな面白いこと、首を突っ込まないわけにはいかねえぜ」

峻烈な橙色の瞳をきらきらと輝かせ、ウエルミナが楽しそうにいう。

「ウエルミナ様！ 遊びじゃないんですよ！ これは王子の道楽ではありません！」

そのフィリップの非難に、ウエルミナはやりと笑っていった。

「ああ、あんた、フィリップっていったっけ？ 俺に堂々と意見できるなんざなかなかのもんじゃないか。気に入った。あんたも俺のこと呼び捨てでかまわねえぜ。ときにギルバート、この話、金貨一枚で手を打たねえ？」

「金をせびる奴などいらん」

「俺も仲間に加えてくれたらきつといい働きするぜえ？ んじゃ、銀貨3枚でどうだ？」

男性にしては小柄な、しかも美人の王子ががめつく金額交渉をしているシーンはなかなかシュールであるが、ギルバートはそんなウエルミナを横目で見やると、ふうと息を吐き出した。

「銀貨2枚、それ以上はびた一文も出さん」

「毎度ありっ！」

にいと猫のような笑みを浮かべるとウエルミナはギルバートと拳をぶつけ合った。

これをもって、ギルバート、フィリップ、ティリウス、ウエルミナの共同戦線が出来上がったのである。

――朝、目が覚めるとユリウス3世はいなくなっていた。

頭が少しばかりぼんやりしている。

「昨日は薬を嗅がせられたんだわ。最低の気分よ」

だがそんな手を使われながらも、気を抜くとユリウス3世に懐柔されていきそうになる自分に腹が立つ。

部屋を探検しがてら身支度を整えた私は、テーブルの上に置いてある軽食を摘んだ。

昨日は動揺してしまったが、ユリウス3世の腕の中で私は新たに決意をしたのだ。

きつとまだなにか打開策はあるはず。

ぎりぎりと頭を絞りながら椅子に座っていると、扉がノックされた。入ってきたのは人型をとったレーニアだった。

「レーニア、今日も人型を取っているのね」

「我が主の命ですから。アンナ様になに不自由なく暮らしていただけるように、私が身の回りのお世話を務めさせていただきます」

「それじゃあレーニア、私をここから出して！」

私がそういうとレーニアは首を振った。

「我が主はアンナ様をこの部屋から出すなどの仰せです」

「どうしてそこまでするのよ！」

そう聞いた私にレーニアはことりと小首をかしげた。

「アンナ様、アンナ様は我が主のなにが不服だとおっしゃるのでし
ようか？」

「無理矢理后なんていう役を押し付けたことと、私の体を作り変えたことに対してよ。それに、ギルバートを力としか見ていないところもだわ」

レーニアの目を真っ直ぐ見ながらそう答えると、彼はふっとため息をついた。

「体内の変質に関してならば、ギルバートもあなたに似たようなことをしていますね。彼のことは責めないのですか？　それと、異界人であるあなたの身分の保証は、我が主が代がわりしない限りゆるぎないものとなりました。あなたにとっては望むべくもないことのように思えますが。むしろ我が主に感謝をすべきなのではないのですか？」

「ギルバートのあれは確かに無理強いだったわ。でもギルバートは私をこの世界に無理矢理連れてきたことを心から詫びている。でも、ユリウス3世のこれは違う。あの人がなにをしたいのかは知らないけれど、私のためではなく自分の欲望のために私を通してギルバートを利用しようとしているだけなのよ」

私がそういうとレーニアは眉根を寄せた。

「あなたはなぜあの獣にこだわるのですか？　契約者と獣だからですか？　そうまでして心と体を繋げる必要があるのかが私にはわかりません。人間同士のほうがなにかと都合がいいでしょうに。もしそれが単なる刷り込みであるというのなら、私はあなたに憐れみすら覚えます」

「そうね、確かに最初は刷り込みだったかも知れない。自分を守ってくれる存在がギルバートだったから惹かれたのかも知れないわ。でも今は違う。私を対等に扱い、受け入れてくれる存在がギルバートなの。私は彼の手を決して離しはしないわ」

「ではなぜ我が主を同じように愛することができないのですか？　地位も、環境も、快楽すらも与えられる我が主であるというのに」

「お仕着せに作られたものなんかいらなわ。私は私のものを自分で掴み取るって決めたのよ」

左手をぎゅっと握った私がそういうと、レーニアは「はあ」とひとつ小さなため息を漏らした。

「あなたの意志がそこまで固いというのならこちらとしても少しばかり強引な手段を取らざるを得ません。あなたをこのまま監視させていただきます」

「これで部屋に拘束するだけでなく、ご丁寧に監視までつけられたってわけね。それなら仕方ないわね。私、今からもう一回寝るから邪魔しないでね」

私はベッドによじ登ると、手触りのいい掛け布団の中にもぐりこんだ。

「考えなくちゃ、なにか手があるはずよ」

ベッドの中で、私は頭を捻ったのであった。

――がらがら、ごとん、ごろごろ、ごとん。

「ねえ、ウィリアム、アンナが皇帝に捕まったらしいよ」

広々とした象牙色の丸い天幕の中で、キスキル・リラがウィリアムに話しかけた。

外には蹄の音、車輪がごろごろと轍を作る音がする。

ここはユウキアの木立を守る樹海の手前である。

樹海には濃い霧が立ち込めており、内部を窺い知ることとはできない。

この樹海は訪れるものを選ぶという。

内部の神殿までたどり着くことができるのは次期皇帝の資格を持った者のみであるとされている。

天幕の外では巡礼用の衣装に身を包んだヌミディアの騎馬隊が忙しそうに動き回っている。

幾何学模様のクッションの上で、ウィリアムはなにかの書物を開いていた。

「ねえ、斥候の話だとアンナは皇帝のお后様になるんだって。でも、アンナはリラのママになるんだよ？　早くママを取り戻さなくちゃ」

そういうとキスキル・リラはクッションにもたれて本を読んでいるウィリアムの首に背後から抱きついた。

「異界渡りの秘密、随分わかってきたでしょ？　これもリラが協力したおかげだね。そうだ、リラはね、メリトウスって国をぶっ壊してもいいって思ってるよ。今リラはウィリアムとアンナとそれからギルバートがいればそれでいいかなって思ってるの。だから早くアンナを皇帝から取り戻して。じゃないと、リラがこの国を壊しにくよ」

「この国を無理に壊す必要はない。だが私がこの世界を変える。異

界渡りは切り札に取っておくべきものだ」

「うん、それでいいよ。あーあ、リラ、早くママに会いたいなあ」

そういうと、キスキル・リラは着ていた服を脱ぎ捨てあつという間に虹色の猫科の獣へと変化した。

「リラ、このままママを迎えに行ってこようかな」

キスキル・リラは天幕の中をぐるりとしなやかに歩くと、入口の前で足を止めた。

「うわあ、族長の甥と商人連合の奴らがやってきた」

キスキル・リラが道を開けると同時に、天幕の中に族長の甥と商人連合の面々が入ってきた。

彼らは獣になったキスキル・リラの姿に一瞬ぎよつとしたものの、すぐに元通りの表情を作った。

ウィリアムは読んでいた書物をしまうと、クツションから身を起こし立ち上がった。

天幕の中にある種の緊張感が漂った。

「最終確認をさせていただく。これから樹海に入りますが、お互い恨みっこなしということでしょうか？」

「そうだねえ。ユウキアの枝を持って帰ることができるのは皇帝の資質を持っている純粋な人間だけといわれているけれど、うちの

うち、だれが枝を手にしてもそれは聖なるユウキアの木立がお決めになったことだ、ということでもいいでしょうね？」

「ああ、構わない。それでこの国を変えることができるのならば」

ウィリアムがそういうと、それぞれがそれぞれに目配せをし合い、そして程なくしてその場にいる全員がユウキアの木立を目指すべく天幕を出て行ったのであった。

遁走 1

私の軟禁生活はしばらく続いた。

その間の暮らしは癪ではあるが大変快適なものだった。

無駄に広く殺風景だった部屋には、誰の差し金か日々色取り取りの花がそこかしこに飾られ、テーブルの上には瑞々しい果物などの軽食が常に用意されていた。

部屋に備え付けられている浴室のバスタブには、いつでも温かいお湯が満たされており、入浴し放題だった。

服はシンプルながらも質と品の良いものを取り揃えられており、衣食住の面ではまったくといっていいほど不自由はしていなかった。

部屋の管理も一日一回レーニアの立会いの下、召使がやってきてベッドメイキングから掃除、インテリアの変更まで行うのでいつも綺麗に保たれていた。

ただし、娯楽は一切なく、部屋で一日中レーニアの監視を受けながら、ベランダから外を眺めたり、部屋に置いてある経済や社会の書物を見るときもなしに読んだりする日々が続いた。

流石にこれは飽きる。

日中がそんなものだから、避けるべき対象であるユリウス3世の夜の来訪をいっしか密かに楽しみに思ってしまったている自分がいることに気付いた。

なぜならユリウス3世は話し相手としては実に楽しい相手であったからだ。

私が眠りにつくそのときまで、ラジオDJのようないい声で軽快なやり取りが続くのである。

彼の話題はメリトウスに伝わる伝承から貴族のゴシップまで尽きることはない。

その多彩な情報網と話術に舌を撒きつつ、この夜の語りは今の私にとってなによりの娯楽になりつつあるのであった。

これはなにかの策略なのだろうか。

いくら自分の信念に従おうと思っても、一方でどう頑張っても意志の強くない凡人の自分がいることも確かだ。

こうやって懐柔されれば、遅かれ早かれユリウス3世になびくと思われるだろうことが悔しくもあり、なけなしの意地を張っていることを見透かされているという恐怖もある。

だからこそ、一刻も早くここから逃げ出したい。

そのためには外にいる仲間の誰かとどこかで接触できたら、と思う。

どうすればいいだろう。

と、私はあることに思い至った。

（確かウエルミナは謁見のときに布のことを引き合いに出していた。これを足がかりにしてなんとか仲間の誰かと接触できないだろうか？）

ウエルミナならば、あるいは私とギルバートとの間を取り持つてくれるかもしれない。

わずかな望みを見出した私は、早速、その日の夜部屋に来たユリウス3世に話を持ちかけてみた。

「あの、ユリウス3世、ちょっとお願いがあるのだけれど」

ベッドの上で大きな枕に背を預けながら、私を片側に侍らせて貴族の夫人の服についての話をしていたユリウス3世はこちらに顔を向けた。

「ここでの暮らしは快適なのだけれど、ひとつだけ不満があるの」

「どんな不満だ？」

「外に出られないって事はこの際諦めるわ。私が正式に后になるまで、これは続けられるのでしょうかし」

「そうだな。国民に発表するのはまだ先のことになる。近々ユウキアの花粉の季節になるが、それが過ぎて、祭りの時期になるまで待つことになるな」

そうユリウス3世がいったときに、私はあることに気がついた。

（そうだ！ もうすぐユウキアの花粉の季節が来るんだわ！）

「もうそんな季節になるのね」

これはもしかしたら何かの好機なのかもしれないと私は思った。

「じゃあ、ユウキアの花粉が飛ぶ前に、私欲しいものがあるの」

「お前がなにかを欲しがるとは珍しいな」

そうはいうが、この環境ではいずれなにか娯楽が欲しくなるというもので、ユリウス3世はそのことで私を懐柔する取引材料にするはずだ、と私は思っていた。

それならば、こちらもそれを利用してもらおう。

「ずっとこの部屋にいたとなんだか気分が滅入ってきてしまってた。ねえ、この部屋に大道芸人なんかを呼んだりすることはできないの？」

「大道芸人か。それは面白そうだな。すぐにでも手配させよう。だが、その代わりにお前は私にどんな貢献をしてくれるというのだ？」

「あなたに、もっと心を開くこと。今の私にできることはそれぐらいしかないわ」

これは自分にとっては本当に危険な賭けだ。

ミイラ取りがミイラになってしまわないように、慎重に言葉を選ぶ。

「心を開くというのは、具体的にはなにをしてくれるというのだ？」

「毎晩、ひとつずつ、私に関する事柄を話すわ。私の好きなもの、嫌いなもの、大切にしているもの、自分の過去、そのようなことをね」

「ほう、それは面白い趣向だな。夫婦になるというからにはそうやって分かり合っていくことも必要だからな」

「ええ、そうね。それと私、この間ウエルミナ様が着ていらした服に興味があるの。もしよかったらそれを今度この部屋まで持ってきてくれないかしら？」

「それならば、ウエルミナの一座を手配しよう。彼らは報酬分きっちり仕事をするものたちと聞いているからな」

「よかったわ、ありがとう。感謝するわ」

私が笑みを浮かべると、ユリウス3世は満足そうな表情をした。

「お前はそうやって笑っているほうがいい。そういうお前は美しい」

「え？」

そういわれた瞬間、ぼっと顔が熱くなった。

思わず頬を抑え、顔を背けた私を見て、ユリウス3世は声を出して笑った。

「お前は面白いな。無垢な娼婦というのも男を誘う手であるが、お前はそれを地でいっているようだな」

そんなにさらっと女性に対して美しいだなんて言葉を吐けるのはやはり女慣れしているからだろうに、そのような言葉にいちいち反応してしまう自分が恨めしい。

娼婦に例えられたことを喜んでいいのか憤っていいのかわからず目を白黒させていると、ユリウス3世が声をかけてきた。

「それならば、今日から早速お前に関する事柄をひとつ聞くことにしよう。そうだな、私はお前が過去に恋をしたことがあるのかどうか聞きたい」

「なにそのいきなりつつこんだ質問は！　しかも私が話したいことじゃなくてあなたが聞きたいことになってるし」

「それだけお前に興味があるということだよ」

……どうにかユウキアの花粉の混乱に乗じて逃げ出す算段をつけたい。

そのためには、自分で招いたこの難局乗り切って見せるわ！

「……恋に恋していたことならいくつかあったと思うわ。それと、恋に発展する前に頭の中で終わらせてしまったものもいくつかあったわ。向こうにいたころは、本気の恋というものはしたことがなかったように思う。愛になりそうなものならひとつあったけれど」

「その相手は婚約者かなにかか？」

「ええ、そうよ。こちらの世界に来なければ、私はきっとその人と

結婚して、家庭を作っていたと思うわ」

「そいつはお前には優しかったのか？」

「そう、そうね。とても優しくて可愛い人だったの」

私が過去を懐かしむようにいうと、急にユリウス3世が手を伸ばし、手の甲で私の頬を撫でた。

「こちらを見ろ」

「いきなりなんなの？」

「やはりこの話は止めにする」

「どうして？」

「お前のそんな顔を見ると、手を出したくなる」

私は一瞬きょとんとしたあと、今度は必死で顔を取り繕った。

「……じゃあ、今日はこれで終わり。明日は私の好きなものについて話すから、今日はもう寝ましょう」

ぎこちない雰囲気無理矢理打開すべく、私は掛け布団に潜った。

この調子で本当に大丈夫なのだろうか……。

ユリウス3世に背を向けて掛け布団に入った私は、うしろからふわりと抱きしめられる感覚を感じた。

耳元で、ユリウス3世の低く温かな声がする。

「今日はお前が少しだけでも心を開いてくれてよかった。明日の夜も楽しみにしているぞ」

（私は何も感じない、いくら相手が優しくても、これは錯覚）

心の中でそう念じると私は目をきつく閉じた。

遁走 2

数日後、待ちに待ったウエルミナとの対面の日が来た。

レーニアと部屋で待っていると、ドアをノックする音がした。

「どうぞ」

召使に連れられてきたのは4人の踊り子達とひとりの奏者だった。

その中には女装したウエルミナも入っている。

その5人は私の前に跪くと、ウエルミナが一步進み出て口上を述べた。

「本日は、次期后候補様に置かれましたはご機嫌麗しく、われらを呼んでくださり誠に恐悦至極に存知奉ります」

「ああ、ウエルミナ、堅苦しい挨拶はよしてちょうだい、今日は普段どりのウエルミナ達のすばらしい演技を楽しみにしているのだから」

「ではお言葉に甘えまして」

そういうと、ウエルミナはにやっと笑った。

「アンナ、久しぶりだな」

「ええ。会えてよかったわ」

本当なら今すぐにも逃げる算段をつけたいところなのだが、下手に動き回ってレーニアに悟られでもしたら意味がないと思ってぐっところえた。

ウェルミナは赤銅色の髪を後ろに跳ね除け、その峻烈な橙色の瞳で私を射抜くと、目から下を覆っている薄いヴェールのうしろからこう尋ねた。

「今日は流しの一座の座長としてお前に会いに来た。それとギルバートから言伝を預かっているが、今聞かか？」

予想していなかった言葉に心が跳ねる。

「ギルバートから？」

「ああ。そうだ」

「今聞かせて」

「アンナをひとりにしていてすまない、近々アンナの前に現れるから信じて欲しい、だそうさ」

「それだけ？　ほかにはなにかないの？」

「俺が預かっている言伝はこれだけだな。ああそうだ、俺からアンナに贈り物があつたんだ」

ウェルミナはそういうと手をパンと打ち鳴らした。

するとどこからか大きめの荷物を抱えた踊り子が現れた。

「これはアンナが欲しがっていた俺達の民族衣装だ。乗馬用の装束だから動きやすいぞ」

上半身は群青色の膝丈の包で、それには銀糸で精緻な幾何学模様の刺繍が施されている。

足首できゅっと締まったズボンは黒で、これは無地である。

「これらは俺からの心ばかりの品だ。早速着てみるといい」

すぐに衝立が用意され、私は踊り子達に手伝ってもらいながら仕度を終えた。

「レーニア、これどう？ 似合ってる？」

「アンナ様のお顔によく映えていますよ」

「その服装も新鮮だな」

その声に扉のほうを見ると、そこにはユリウス3世が立っていた。

「今日は公務を早めに終わらせてウェルミナたちの芸を見に来たのだ。期待しているぞ」

そういうと、ユリウス3世はつかつかと歩いてきて部屋のソファーにもたれた。

私もユリウス3世の隣に少しだけ間をとって座る。

そうして、演舞が開演されたのである。

楽しい時間はあっという間に過ぎた。

出し物も終わりに近づいたころ、俄かに邸内が慌しくなった。

荒々しいノックの音がする。

入ってきたのは召使だった。

「申し上げます！」

「どうした」

ユリウス3世が冷静に問う。

「邸内に何者かが火を放った模様、火元は数箇所あり、至急消火致しますが、それまでは部屋からお出にならないようお願い申し上げます」

「この部屋は大丈夫なのですか？」

レーニアからの質問に、召使は少しだけ落ち着いた素振りを見せた。

「幸い出火場所はここから遠く、火の手もこちらまでは回らないかと思われます。皆様はこの場所にいてくだされば避難せずともよろしいかと」

その台詞にユリウス3世は眉をしかめた。

「それは誰の判断だ？」

「武官の方々です」

「私は現場を確かめてくる。それまでアンナ達はこの部屋から出ないように」

そういう残すと、ユリウス3世は召使とともに部屋を出て行った。

残ったのは私とレーニア、ウェルミナの一座である。

と、突然窓の近くになにかが投げ入れられた。

途端に曇る室内。

「なっ、これは煙玉？」

もうもうと焚かれる煙幕の中、驚くレーニアの声がしたと思ったら、私は何者かに手を引かれた。

「きゃっ?!」

すぐさま口に布のようなものが当てられる。

「ゆっくり息をして」

囁かれたその声はウェルミナのものであった。

「この煙は人間には作用しない。獣捕獲用のものだ」

「えっ、それってどういうこと？」

「レーニアを撒くんだよ」

そういうとウエルミナは私を引き連れて窓辺へと寄った。

「下を見んじゃねえぞ」

そういうとウエルミナは私をひょいと抱きかかえて窓から放り出した。

「うわっ!!」

青空とベランダが見る間に遠くなってゆく。

私、死ぬのか？

そう思った瞬間、誰かに抱きとめられた。

「アンナ様、ご無事でよかったですよ」

濃度の薄い金色の髪の毛、茶色い瞳、そしてその寡黙そうな顔がちらに向いている。

その腕の持ち主はなんとティリウスだった。

「どうしてここに?！」

「詳しい話はあとです。俺に口裏合わせてくださいね」

いうが早いか召使が駆けてくるところだった。

「どうしたのですか?!」

「アンナ様は煙に撒かれてベランダから落ちてしまったらしい。幸い私が下にいたから事なきを得たが、アンナ様は混乱されている様子、どこか安全なところに非難させてあげたい。ああ、案内は不要だ」

「畏まりました」

そういうと、召使をさがらせ、ティリウスは邸内を歩き始めた。

今、邸内では火事騒ぎのため、てんやわんやである。

そんな中を悠々と歩くティリウス。

やがて私が軟禁されていた部屋から遠く離れたある一室に着くと、ティリウスはためらいもなくその部屋の中に入った。

「さて。これからだな」

そういうと、部屋の窓を開けた。

「アンナ様、また窓から降りてもらうことになりますが、よろしいですね?」

そういうとティリウスは私を抱えなおした。

「もう、どうとでもしてちょうだい」

「左様ですか」

そういつてにこりと笑うと、ティリウスは窓から外に向かって跳躍した。

「どうやらユウキアの花粉が飛び始めたようだ。力がみなぎってきますよ」

ティリウスは地面に降り立ち、裏手に走ると、停めてあった馬車を拝借した。

そこに私を乗せると自分も乗り込んだ。

すると、それを待っていたかのように次々と周りの馬車も発進し始めた。

「これはどういうこと？」

馬車に乗り込む前に、その御者の顔を見ていた私は驚いた。

「あれ？ 今のってブルーノ？！」

私の視線に気付いたティリウスは窓の外を指差した。

「あれはカルロ？！ 向こうはハティ？！」

見ると「水道局」の面々が手綱を取っているではないか。

そしてそれらの馬車は四方八方に散らばっていったのである。

馬車の中で、私はティリウスからかいつまんだ説明を受けた。

これは私の、いや私達の遁走計画の一環であるということ。

ブルーノ達「水道局」の面々とフィリップはこのあとこの国を捨て、獣の国であるダキアに亡命することが決まっている。

馬車はフィリップが事前に手配してくれていたそうだ。

そしてギルバートは樹海で待っているとのことである。

ウェルミナ達は混乱に乗じてうまく逃げおおせるとのことであった。

「どうしてそこまでしてくれるの？ 私なんかのために」

私がそう聞くと、ティリウスは笑みを浮かべた。

「アンナ様のためだけじゃありません。フィリップとギルバート様達はアンナ様のために動いているのでしようが、俺とウェルミナはしたいことをしたいようにしたらこうなったってところですかね。俺は獣なんです。本当は誰にも縛られずに自由に生きていきたい。だが、それは今の時代容易には叶わない。だからこそ、こんな計画にも乗ってみたいくなった、ということなんです。それにアンナ様の護衛の契約はまだ有効ですから、手助けしないわけには行かなかったんです。律儀なんですよ、俺は」

普段寡黙なティリウスにしてはひどく饒舌になっている。

やはりユウキアの花粉が飛来し始めているらしい。

「これも縁ですからね。それに、皇帝の后にするには勿体無いと思っただけですよ」

そういうとティリウスは両腕を組んで私をじっと見つめた。

「今年のユウキアの花粉は強いらしい。アンナ様を目の前にすると、この俺でも自制心が必要になってきます」

「え？」

ティリウスは真剣な眼差しで射るように私を見つめた。

「このままダキアまで連れて帰ってしまおうか。そうして、アンナ様を私の隣に据えてしまおうか」

「ティリウス？　なにをいつているの？」

「……冗談ですよ」

そういうとティリウスはふっと力を抜いた。

「びっくりしちゃった、ティリウスでもそんな冗談いうのね」

「まあ、ユウキアの花粉のせいだと思っていただけるとありがたいです」

気を取りなおした私はあることに気がついた。

「そういえばティリウスとウェルミナはこの計画に肩入れしてしまっても本当に大丈夫だったの？　だってウェルミナは外交でのお願いで来ていたわけだし、ティリウスだってこの国からなにかを学ぼうと思ってわざわざ5名の貴族を引き連れてやってきたわけなんでしょう？」

私がそういうとティリウスはよくできましたとでもいうような顔をしました。

「ヌミディアのウェルミナ達の件に関しては、親メリトウス派をないがしろにはできませんから、そこまで処遇が重たくなることはないでしょう。私達のほうもこの数週間、いろいろと多くのことを学ばせていただきましたが、その中でわかったことがひとつあります。わがダキアはダキアとしての生き方を模索することが肝要だということです。ダキアはメリトウスになる必要はないのです。そのことを学ばせていただいただけでも十分な収穫はありましたし、私達がこの国に滞在する目的は達成されました。わが貴族達は既に国に帰っているのです、そう大きな影響はありません。それと、フィリップがダキアに亡命することですが、彼の知識は並外れています。彼を迎え入れることによって、ダキアは新たな道を進むことになるのです」

「商人連合はヌミディアの族長の甥率いる西の部族に肩入れしているわけだし、メリトウスとしては親メリトウス派である族長率いる東の部族とは仲良くしておきたいというわけね。それと、中立であるダキアとは事を構えたくないから、今回の処遇も甘いものになるとティリウス達は踏んだわけなのね」

「ええ、ただあの皇帝、どう出てくるか……。とにかく、俺達は樹海へ向かいましょう」

そうして私達はギルバートの待つ樹海へと向かったのであった。

番外編 伴侶とは

「アンナ様、アンナ様は俺達狼のことが好きですか？」

「なに？ いきなり」

今日は部屋に親しい者を集めてちよつとしたパーティーを開いている。

メンバーはギルバート、ガルディン、ルウ、ハティ、フィリップである。

私たちの間では召使のカルナとソルスが忙しく立ち回り、給仕をしてくれている。

ソファでくつろいでいると、白髪のガルディンが声をかけてきた。

「この世界にアンナ様が来てから、いろいろなことがありましたよね」

「ええ。なんだかぎゅーっと凝縮された、密度の濃い時間を過ごしている気がするわ」

「そうですか、それは良かった」

そういうとガルディンはなにかを思い出したかのように言葉を続けた。

それが先ほどの言葉である。

きよとんとした私を見ると、ガルディンは彼にしては珍しく眉を下げた。

「いや、いきなりすいません。ですが、どうしても聞いておきたいことだったんで」

「唐突になにを聞くかと思えば……好きに決まっているじゃない」
少々面食らいつつもそう答えた私に対し、ガルディンはその答えにふっと笑って言葉を継いだ。

「じゃあ、質問ついでに。アンナ様はこの世界のことを好きですか？」

「それは難しいわね。……正直いうとこの世界のことをまだ大好きだとはいえないわ。私が知っているのはメリトウスという国の中で起こっていることだけだけれども、この国の制度や、国民のある種の残虐さ、獣達に対する態度などは今もって受け入れられないわ。でも、そんな国の中でもたくましく生きている獣達や、祭りの時期なんかの人々を見ると、この国もそんなに悪くはないって思えてくるのよね」

考えながらそう答えると、ガルディンはふむと頷いた。

「よかった、アンナ様はアンナ様の視点でちゃんとこの国のことを見つけているんですね。いろんな人に触れて、そういう認識を持ったのであればそれでいいんです」

「どうということ?」

「これは俺達のエゴなんですが……。アンナ様がこの国に来る前から思っていたことなのですが、アンナ様には俺達ではない導き手が必要だと思ったのです」

私がいぶかしむと、ガルディンはごほんと咳払いしてからこう続けた。

「アンナ様は俺達狼のボスの伴侶です。群れを統率するにあたって、アンナ様には俺達が住むこの世界をよく知り、見定めてもらう必要があったんです」

そういうと、ガルディンは窓の外に目をやると頭をわしゃつと掻いた。

「俺達獣の寿命は人に変化できるせいかな、人間とそんなに変わらないんです。大体50〜60年ぐらい生きます。そして狼の群れを率いていくボスには伴侶が欠かせないんです。ボスの伴侶とは、群れを率い、まとめ、道を指し示すものなんです。つまりアンナ様は俺達群れの全員が待ち望んでいた希望だったんですよ」

ギルバートの伴侶になるということは契約者と獣の関係であるだけではなく、そんな重いものも含まれているのだとは知らなかった。

「でも、初めて見たときはこんな女の子が……。ああすいません、最初は『女の子』だと思っていたんですがね、それが俺達のボスの伴侶だなんて、と思っていたのも事実です。だから最初はある程度にも留めなかったんです。けれど、一緒に過ごしていくうちに、アンナ様がギルバート様の伴侶でよかった、この女性が俺達のボスの

隣に立つ人でよかったって思えるようになったんです。そう思い始めたのはアンナ様が最初に審問機関に行くってなったときでしたかね」

ガルディンにしては丁寧な説明に私はほうと頷いた。

「そうだったの。私、ガルディン達に認められてよかったわ。でもそれならばガルディン達がいろいろと教えてくれればよかった気もするけれど。それでは駄目だったの？」

「はい。伴侶の判断とは、俺達がこうできるものじゃないんです。ボスを最終的に正すことができるのは伴侶だけなので、伴侶にはなおさら公平な判断力が必要になってくるんです」

「ということは、私の判断が皆を危険に晒すということもありえるわけなのね」

「ええ。ですがそのことを群れの皆は後悔しませんよ。それがボスと伴侶の選んだことならば」

そういつてガルディンは私を見つめた。

その視線を受けて、私は今聞いたことを心の中で反芻した。

「ガルディン、今日はこのことを教えてくれてありがとう。私、ギルバートの伴侶であるという心構えができたわ。これからはガルディン達狼の皆に恥じないような人間になるわね」

私がそういうとガルディンはふっと微笑んだ。

「それでこそアンナ様だ」

「なーに2人で話し込んでんじやってんの？ 俺も仲間に入れてよ」

私とガルディンが声のするほうを向くと、そこには少しばかりぶうたれた表情のルウが立っていた。

ルウは自身の赤毛をちょいちょいといじるとちらりとガルディンを見た。

「いいなあガルディンは。アンナ様とじっくり話し込んでさ。なんかオトナの会話って感じでさ。俺もアンナ様とそんな会話がしたい！」

「へえ、でもルウもオトナだよなあ？ オトナってのはこんなことでいちいちつけたたりしねえんじゃねえのか？」

そういつてガルディンが勝ち誇ったようにルウを半眼で見やると、すかさずルウが反撃に出た。

「ふん、ガルディンはさあ、いつも余裕ぶっこいているけれど、アンナ様関連になると途端に余裕なくすよね。この間だってさ、アンナ様からこのパーティーの手紙が届いたって言ってかなりご機嫌だったじゃない？ それを俺に指摘されてかなり焦ってたじゃん。なんなのさガルディンは。アンナ様のことがそんなに好きなの？」

「当たり前だろ！ 好きに決まってるじゃねえか！」

そういうとガルディンはルウの頭をはたこうとした。

ところがルウはひよいとそれをかわしてべえと舌を出した。

「俺だってね、伊達に叩かれてないの。ガルディンの次の行動なんて全部お見通しなんだからね」

「ほう、やってくれるじゃねえか」

剣呑な雰囲気をもと始めた2人に私があわあわしだすと、そこへすかさずハティが寄ってきた。

ハティは後ろから私の両肩に手を置くと、そっと耳元でささやいた。

「アンナ様、こういうときは伴侶の権限を使って争いになる前に芽を摘むこともできますよ」

「そうなの？」

「ええ。試してみますか？」

「え、でもどうやればいいの？」

「ただ一言静止の言葉をいえばいいのです」

「静止の言葉って……」

がるるると唸り声が聞こえてきそうな2人を見ながら、私は頭をひねった。

「ルウ、今日という今日は容赦しねえぞ」

「こっちだって望むところだよ」

一触即発の2人が今まさに飛び掛らんとしているところ。

私はとっさに2人に声をかけていた。

「2人とも、お座り！」

そういった瞬間、ぽんと2人が獣に変化した。

「なっ！」

「ええええ！」

これにはルウとガルディンだけでなく私も驚いた。

「な、なんで2人は獣になっちゃったの?!」

「それはアンナ様の『お座り』という指令に相応しい姿に自然になった、というところでしょうか」

ハティの解説を聞きながら、目の前の2頭を見る。

白毛の体格のいい狼と、赤毛の少し細身の狼が仲良く並んでお座りをしている。

「ウォン」

「キュン」

「……わあ！　可愛い！」

私は思わずその場に膝を突くとぎゅうっと2頭を抱きしめた。

「わー！　2人の獣になった姿って初めて見たわ！　ガルディンもルウもとっても格好いい」

そのまま2頭の顎の下を撫でてやると、キュンキュンと気持ちよさそうな声をあげる。

2頭にぴっとりとくっついてモフモフした毛皮を撫でていると、うしろからなにやらあきれたような声がかかった。

「アンナさん、なにやってるんですか」

「あ、フィリップ」

「それってアンナさんの世界でいうところのパワハラとセクハラじゃないんですか？」

「でもこんなに可愛い2頭をほっとくなんてできないもの」

「僕はその姿を見て『可愛い』という単語は思い浮かびませんが……。それよりも2頭と戯れているアンナさんのほうが『可愛い』と思いますけれど」

フィリップがそういうと、連れ立って来ていたギルバートが声をあげた。

「フィリップ、アンナを口説かないでくれるか？」

「僕は思ったことをそのままいったままでですけれど」

「ほう、それならいいんだがな」

こうして、ささやかで幸せな時間は過ぎていったのだった。

樹海 ●

ユウキアの花粉が降り始めた。

白銀の雪のようなそれは、曇天からはらりと舞い降りている。

しんしんと降り積もるユウキアの花粉は、いつもと変わらぬようであつたが。

その光景は、どこか静かで不吉なものであつた。

街では奇妙でおぞましい現象が起こっていた。

西のスラム街では、街道の端っこに何かが崩れ落ちたような物体が見受けられた。

どす黒いイクラ状の粒が何重にもうず高く積もっているような形である。

ちようど人の体積と同じぐらいのそのの近くには、ささやかな献花があつた。

その近くを通った獣の親子連れが献花の前で黙祷する。

「お父さん、あれなあに？」

「『あれ』は獣の成れの果てさ」

「成れの果て？」

「ああ。『あれ』はな、3軒先の爺さんだよ。今年のユウキアの花粉には耐えられなかったか。向こうにある小さな塊は肺を病んでいた子供だ」

「お父さん、私もああなっちゃうの？」

「お前は大丈夫だ。おいしいものをいっぱい食べて、今まで大きな病気をせずに来ているだろう？ 『あれ』はな、重い病におかされているもの、弱っているものがある姿なのさ。体がユウキアの花粉に耐えられなくなっちゃったのさ」

「ふうん、ユウキアの花粉って怖いね」

「ああ。我々獣にとっては本当に怖いものなんだよ。さ、早く家に帰ろうか。今期もユウキアの花粉で狂うものがでるだろうからな」

黙祷を終えた親子は足早にその場所を去った。

あとには風で飛ばされた献花と、もう動くことのなくなってしまうたどす黒い塊があるばかりだった。

——これを、獣の間引きという。

樹海に到着した私とティリウスは、ギルバートと合流した。

霧に覆われた樹海は、まるで人の進入を拒んでいるかのようなのである。

足元には厚さ2センチほどの分厚い苔が一面に敷き詰められており、歩くたびにぎゅっぎゅっと足跡がつく。

私達は馬車を捨てて、最小限の荷物で移動することになった。

私は、獣の姿をとり、馬ほどの大きさになったギルバートの背中に荷物と一緒に乗っている。

ティリウスも巨大な金色の豹の姿になってついてきている。

出がけにヌミディアの民族衣装に着替えていたのが幸いして、動きはとりやすい。

私はギルバートの背中の上から声をかけた。

「ねえ、ギルバート、これからどこへ行くの？」

ギルバートは振り返らずに答えた。

「このまま樹海の中心にあるモネという名の村へ向かい、そこからモネの湖を抜けてユウキアの木立と金色の獣がいる場所へ向かう。皇帝の呪縛から逃れるために、金色の獣の力を借りるのだ」

「へえ、モネの村は樹海の真ん中にあるのね。どんな人が住んでいるのかしら」

「そこに住んでいるものは人間ではないらしい。かといって獣でもないといわれている」

「そうなの。いわくありげな場所みたいね。そうだ、金色の獣って

どんな存在なの？」

「金色の獣は別名金獣とも呼ばれている。六つ目の人面獣で、ユウキアの木立の下で丸く蹲り、木立を守っているといわれている。その血には呪いさえも退ける効果があるといわれている」

私は頷くと、ふとあることに気がついた。

「あれ、でもたしか『その聖所には普段は何人たりとも立ち入ることが許されないのだが、皇帝の素養を持つものは立ち入ることができるという仕組みになっていた』ということだった気がするけれど、私達を入れるの？」

「ああ。アンナは俺の契約者だ。このことから皇帝の素養はあると思っっている。万が一聖所に入れなかったとしても、獣をおびき出せばいいだけのこと」

「おびき出すって、どうやるの？」

「聖所を血で汚せば獣は怒って出てくる」

「うわあ、なんていうか野蛮ね。でもその獣、強いのか？」

「話では金獣は獣の祖なのだそうだ。その力は皇帝の獣をも凌駕するといわれている」

「げっ、そんな危ないものを怒らせるなんて真っ平ごめんだわ！
穩便にいきましよう、穩便に」

そうこうしているうちに、いつの間にか樹海を抜けたようである。

あれだけ立ち込めていた霧が晴れてきたのだ。

そして、樹海と霧を抜けた先に見た光景に私は驚愕した。

「なに、これ……、これが村？」

円形状に立ち並ぶ銀色の建物は、とてもこの世界のものとは思えなかった。

銀色のつるつるとした円柱がそこかしこに立ち並び、その中心にはドーム上の大きな建物が建てられている。

この建物には窓が一切なく、広大な大地にこれら金属を埋め込んだかのような様相である。

「なんていうか、研究所みたい」

今まで見てきたメリトウスの街の光景とは随分とかけ離れているその光景に、私はギルバートの背中ではかんと口を開けたままただ黙っていた。

と、中心にあるドーム状の建物にぽっかりと穴が開いた。

そこから、人らしきものが現れたのである。

その人らは、私達の元へしずしずとやってきた。

近くで見ると彼らは皆女性で、身長が170センチぐらいあることが窺えた。

肌の色は雪のような白。

腰まで長く伸ばした灰色の髪に灰色の瞳。

丈の長いマントのような服を着ている。

「セルビア？」

審問機関のセルビアのようなその容姿に私はびっくりとした。

一様に似通った容姿のその人らは、私達の前まで来ると、一列に並び直し、その場に膝をついた。

「ようこそおいでくださいました。長きに渡り我らが待ち望んでいた異界からの使者よ」

私はあわててギルバートの背中から降りると、跪く彼らに声をかけた。

「どうか頭をあげてください。あの、それって私のことですか？」

すると、その中で蹲っていた一番年嵩と思われる女性が声を出した。

「貴女様のほかに誰がおりましょう。我らをこの地の呪縛から解き放ってくれる使者よ」

そういうと彼らは立ち上がり、私たちに背を向けた。

「使者よ。どうぞおいでください。建物の中で話を進めましょう。」

ほかの方々もあの中におります」

年嵩の女性がそういうと、彼らは来た道をするすると戻っていった。

「ほかの方々って、もしかしてウィリアム達のことかしら」

いぶかしみながらも、私は彼女達についていったのである。

モネの村

建物の内部はこれも銀色のつるつるとした金属でできており、通路は螺旋状になっていた。

なだらかな傾斜があるその道を地下へ向かって降りていく。

やがて、通路の横にある大きなドアの前に立つと、彼女たちの中からひとりが進み出て通路の前に手をかざした。

すると、その扉は音もなく左右に開いたのである。

宮殿にある仕掛けの間の壁にも同じような細工が施されてあったなどと思い出しつつ、私は部屋へと足を踏み入れた。

そこには円形の机に座った数人の男性と、虹色の獣がいた。

藍色のトーガを羽織っている男性、ウィリアムの手には、銀色の杖が握られていたのである。

と、こちらに気付いた虹色の獣が私に向かって喉をごろごろいわせながら近寄ってきた。

ギルバートが低く唸るのもお構いなく、その虹色の猫科の獣は私の周りをぐるぐると取り囲むとピンと尻尾を立てて頭を擦り付けてきた。

突然虹色の雌ライオンのような獣が懷いてきてどうしようかとうろたえていると、ギルバートがすかさず助けに入るかのように割り込

んできた。

しばらくその猫科の獣とギルバートはお互いに毛を逆立ててグルルと唸りあっていた。

ウィリアムが席を立ててその獣に声をかけた。

「戻れ、キスキル・リラ。そこにいられては話ができない」

「はあい」

猫科の獣、キスキル・リラは返事をするウィリアムの元へと戻った。

「リラなの?!」

私が思わず声をかけると、キスキル・リラは尻尾をふよふよと振った。

「そうだよ。この姿でアンナの目の前に現れるのは初めてだね」

私達が円形のテーブルの近くまで来ると、先ほどの女性達が椅子を勧めてきた。

私はそこにいる面々の顔を見てから勧められた椅子に座った。

最初に口を開いたのは族長の甥だった。

「お初にお目にかかる、契約者殿。俺が族長の甥だ。まあ、見てのとおり、俺はユウキアの枝を手に入れることができなかった。まず、

俺の馬ではユウキアの木立の前にある切り立った崖を降りられなかった。自身の愛馬を傷つけたくはなかったのでウィリアムの獣に乗せてもらって下まで行っただ。だが聖所には近づけなかった。体になにかから反発を受けるようで、その先へは進めないのだ。これは諦めるしかないと思ったよ」

次に口を開いたのは商人連合の面々だった。

「いやあ、私らは崖を降りられたものの、騎獣がユウキアの木立にいる金獣を怖がって先に進まなかったのですね。それに族長の甥殿と同じように私らだけでは枝があるところまで近づけなかったのだ」

そういつつ、ウィリアムのほうを見る。

その視線を受けてウィリアムは話し始めた。

「私はキスキル・リラとともに金獣の傍まで歩み寄ることができた。すると、金獣が私に声をかけてきたのだ」

それは奇妙な光景であったという。

まるでなにかからはじかれるような格好をした数人の男性と、すたすたと歩いていくひとりの男性と1頭の獣。

そして彼らの目の前では巨大な金色の獣が、白銀の花粉が降り積もる銀色の巨木の下でまどろんでいた。

金獣の体は上半身が虎、下半身が豹のような姿をしていたそうだ。

その首には銀色の巨大な金属の首輪が嵌められていたという。

六つの目は閉じられ、前足に頭を置き、体を丸くして寝ている。

菩薩のようなその顔には雪のようなユウキアの花粉がはらりと落ちてきていた。

ウィリアムが近づくと、金獣は一对の目を開けてウィリアムとキス
キル・リラを見た。

そして、ウィリアムは問答を受けたという。

「金獣との問答が終わると、真上にあった枝がひとりでに折れ、私の手元に降ってきたのだ」

ウィリアムは自分の手元にあるユウキアの枝を見た。

「この枝を手にしたことによって、私は次期皇帝の資格を得たことになる」

その顔からはなにをも窺い知ることはできなかったが、私は堪らず聞いてみた。

「ウィリアムはユリウス3世を殺すの？」

「いずれはそうなるかもしれませんが。私は皇帝になり、この国を変えると金獣に約束しました。ちなみに先の皇帝であるユリウス3世は権力教化のため、この世界の人間と獣の仕組みを根本から変えるためにギルバートの力を欲していたのです。ファーガス、『人間の選択』という力を使って、ユウキアの花粉に惑わされない人型の獣を作り、国が抱える皇帝直属の私設軍隊とする腹積もりであったと

います」

つまりユリウス3世は力を使ってメリトウスを完全なる人の国家へと変貌させようとしていたらしい。

「私はそれとは正反對の答えを返しました。獣は獣らしく地を這っていればよい。私はギルバート・ファーガス・チェーンを使ってユウキアの花粉の影響を受けずに、家畜や鳥類のように獣のままの姿で一生を終わらせるために、獣を元に戻すと宣言したのです」

ウィリアムのこの言に今まで黙っていたティリウスが口を開いた。

「ということは、ウィリアム殿は自身が皇帝になった暁には我がダキアを滅ぼそうとするおつもりか？」

「ええ、そういうことになりますね」

その瞬間ティリウスはウィリアムに殺気を放った。

それは周りに座っているものに鳥肌を立たせるほどのものであったが、ウィリアムはそれに動じることなく言葉を続けた。

「ユウキアの花粉とギルバート・ファーガス・チェーンの血があれば、この地の変革も可能です。そうだアンナさん、皇帝の代替わりの際に代々のギルバート・ファーガス・チェーンがどうなるのか知っていますか？」

いきなり話題を振られて内心驚いていたが、顔には出さずに首を振った。

確かにそのことは疑問だった。

なぜなら、皇帝の傍に「最強の盾にして剣」という存在がいるのなら、皇帝の代替わりの際にどうやって皇帝を殺すことができるのだろうかと思っていたのだ。

「ギルバート・ファーガス・チェーンの運命は代々の皇帝とともにある。ユウキアの枝が次期皇帝を選ぶと、その時点でギルバート・ファーガス・チェーンは消滅していたのです」

「そうだったの」

私は隣の床に座っているギルバートにそつと触れた。

ギルバートが消えてしまわなくてよかったと心底ほっとしたのである。

「獣がいなくなる」というのは視覚的に力の譲渡がわかりやすい。

そして現皇帝と次期皇帝が闘技場で殺しあうという、人間同士の肉弾戦ならばある意味公平である。

「ギルバート・ファーガス・チェーンは新たな皇帝が立ったあと、闘技場で作られます。その間皇帝を守るのは武官であるといいますが、皇帝の代替わりがつつがなく行われていれば『壁』の機能は継続するので、皇帝の代替わりの期間でも対外的にはそれほど影響はないのです」

そういういつも、ウィリアムの表情は陰しくなる。

「だからこそ、今回の契約は前代未聞なのです。皇帝以外のものがギルバートの契約者となったということは、すなわち代替わりによって失われることのない力が生まれたということなのです。消えない力は権力を持つものにとっては大変魅力的です。皇帝陛下は貴女を求めた。力を手に入れられなければ貴女を排そうとする人も出てくるでしょうが、それはギルバートや彼の群れが全力で阻止するでしょう。貴女は自分ではあまり自覚がないかもしれませんが、今現在途方もない力を手に入れていることになるのですよ」

私は改めてギルバートの契約者とはどういう存在か、ということに思いを馳せた。

「じゃあ、ウィリアムは私が持っているギルバートの力を欲しているの？」

「ええ、有体に申しますと最初はそのつもりでした。ですが、貴女と接していくうちに、自分の中によくわからない感情が芽生えてきたのです。それがなんであるかもわからぬまま、貴女を見ていましたが、あるときそれが『執着』という感情であったことに気がついたのです」

無表情でウィリアムは淡々と話した。

「私の師は異界から来ました。師は異界で細菌学というものに携わっていたようです。師が死んでから、私は師の蔵書を紐解きました。それによって、私はこの世界では得られない数々の知識を会得することができました。でも、まだ足りない。私は貴女の世界に行ってもっと学びたい。そしていつかこの世界の謎を解き明かしたいと思っています。どうやって人型の獣が生まれたのか、どうしてこの地と異界がつながるのか、そのためにはギルバートの力がどうし

でも必要だったのです」

初めて聞くウィリアムの強い思いである。

それに、ウィリアムの問いはこの世界の根幹に関わるものであると
いうことに気がついた。

「異界の扉を開くためには、ギルバートの血とユウキアの花粉が必要だったのです。ああ、単に異界の扉を開くのであれば、このキスキル・リラの血でも事足ります。キスキル・リラは遠い昔に作られた悪鬼、逃げたギルバート・ファーガス・チェーンの後補であるといわれていますが、それはどうやら嘘ではなさそうです。しかしこのキスキル・リラの血には制限があるのです。一定の時間、一定の周期でしか異界の扉は巡ってきません。自分の望む世界に望む形で行くにはやはり現代のギルバート・ファーガス・チェーンの血でないとならないようです。そのため、私は皇帝になり、キスキル・リラをもう一度ギルバート・ファーガス・チェーンとすることにしたのです」

それを聞いた瞬間、私は頭をガツンと殴られたような衝撃を受けた。

「え、私、帰れるの……？」

「ええ。知らなかったのも無理はありません。私は詳しいことをこの女性達に教えてもらいましたがね」

急に足元がおぼつかなくなってきた。

座っている椅子の感覚が分からない。

私は手を伸ばし、ギルバートの艶やかな毛皮を撫で続けた。

その話から考えると、現時点でキスキル・リラの血とユウキアの花粉があれば、私は元いた世界に帰ることができるということがわかった。

頭の中ですばやくタイムラグの計算をする。

元いた世界での約半年がこちらの世界での約4年であるということ
はわかっている。

そう考えると、私が異界渡りをしてから元いた世界ではまだ1ヶ月
も経っていないことになる。

これは意外だった。

てっきり異界との裂け目が閉じてしまえばもう異界渡りはできない
と思っていたのだ。

材料さえあれば比較的簡単に元いた世界に帰ることができるのだと
いうことを知り、私は目を丸くした。

元いた時間には帰れなくとも、タイムラグの少ないうちに帰ること
ができるのではないか。

いきなり帰る方法が見つかったことで、私の心はがくんと揺らぎ始
めた。

ウィリアムはなおも持論を続ける。

「元から、獣が人の似姿をとるなどということが異常であったのです。聞けば獣が人型をとるようになったのはるか昔、この地に降りた先人がそうしたことであったと聞きました。先人は異界渡りをし、この地を『褒章地』と定め、人が住みよい空間へと変えていったということです」

「えっ……」

「褒章地」という単語は以前貴族が話していたのを盗み聞きしたときに出てきた言葉である。

「アンナさんはまだ見たことはありませんよね。この世界で人型を取っている獣にはある奇病があるのです。貴族達は間引きという言葉を使っていますが、獣の体が崩れていくというものです。この奇病はユウキアの花粉に適応できなかったゆえの名残であるとされています」

「そ、そんな」

私はしばらく言葉が出なかった。

「ユウキアの花粉とは一体なんなの？」

「私の知識ではユウキアの花粉は、花粉という名前がつけられているもののその実なにかの生き物であるということ、獣の血に反応すること、ギルバート・ファーガス・チェーンの血に反応して異界の扉を開くということしかわかっていません。そして、それを知る手がかりとなるのはこの灰色の女性達なのです」

そう紹介された女性達のほうを向くと、彼女らは一様に目を伏せ、

神妙な面持ちで立ち並んでいたのである。

ユウキアの木立へ

私は彼女達を見た。

皆、一様に色素の薄い顔立ちである。

そして、僅かな違いはあれど、その顔は驚くほどセルビアに似ていた。

私はそのことについて先ほど気になったことを尋ねることにした

「あの、貴女方はセルビアという女性を知っていますか？」

私がそう聞くと、先ほどの年嵩の女性が口を開いた。

「セルビアはユリウス3世がこの地に来たときに見出したものです。彼女はスコルという強大な獣の契約者であったので、ユリウス3世に引き抜かれていったのです」

聞けばセルビアは、元はこの村の出身であるらしい。

4年前、まだ若いユリウス3世がこの地を訪れたときに宮殿へと連れて行ったのだそうだ。

「市井ではあの子のことを『死の侍女』などと呼び交わしているそうですが、あの子の本質は真っ直ぐで純粋です。あの子はユリウス3世の考えに深い感銘を受け、彼についていくことにしたのです」

そう答える年嵩の女性は、僅かに懐かしむような表情を見せた。

その女性に、横合いからティリウスが質問した。

「貴女にお聞きしたいことがある。次期皇帝というのはひとりだけしか選出されないのでしょうか」

女性は巨大な豹の姿をしたティリウスに向き直ると、ずっと居住まいを正した。

「いいえ。そのような縛りはございません。ですが、毎回選ばれるのはひとりでありました」

「ということは、資格があるものであれば幾人でも選ばれることが可能だということなのだな」

「ええ、理論上はそうなります」

「すると、俺がこの国の次期皇帝候補に選ばれるということも可能なのだな」

「左様です」

ティリウスの言に族長の甥と商人連合の面々は憤慨した。

「なっ、この獣、なにをいいだすのかと思えば、自分がこの国の皇帝になるだと？ 笑わせる」

「お前じゃ皇帝になることはおろか、金獣に近づくことさえできないだろうよ」

そういわれても、ティリウスはどこ吹く風である。

「この国は4年前から少しずつ歯車がかみ合わなくなってきた。ギルバートのこと然り、お前達商人連合のこと然り、ヌミディアの内紛然り。これにひとつ別の歯車が挟まっても大差はないのではないか？」

「まあ、やってみるがいいさ。お前もあそこに行ったら金獣と不可視の結界のことを肌で感じるようになるだろうよ」

その言葉を合図としたのか、居並ぶ女性達がしずしずと退出し始めた。

その場には年嵩の女性だけが残った。

「皆様、お疲れでしょう。今宵はこの宮でゆるりとお寛ぎください。皇帝の試験は明日の朝受けられればよろしいでしょう。客人方、今宵の部屋に案内いたします」

そういうと女性は部屋から退出した。

それを皮切りに皆は席を立ち、扉の向こうへと出て行ったのであった。

案内された部屋は10畳ほどの広さのワンルームだった。

その部屋にはベッドと机のほかには別枠で、陶器でできたユニットバスのようなものでついていた。

灰色の女性のうちのひとりから部屋の使い方を簡単に説明されたあと、私は椅子に腰かけた。

「はあ、疲れた。ギルバート、今日はずっと私を背にさせてくれてありがとう。重かったでしょう？」

獣の姿のギルバートは尻尾をふさりと払うと椅子の前で伏せの姿勢を取った。

「これしきのこと、まったく辛くはない。アンナこそ、長旅で緊張しただろう？」

「ううん、ギルバートとティリウスがいたから全然平気だったわ。それにしても、こんなところにこんな建物があるとは思わなかったわ。ここがセルビアの故郷だったなんて」

うーんと伸びをしながらそういうと、それを見たギルバートは伏せの姿勢から頭をくいとあげた。

「そうだ、明日はアンナも金獣の元へ行こう。ティリウスがどうなるのか見届けたいし、アンナがどうなるのかも見てみたい」

「そうね。私も、自分がそんな大層なものだなんて自覚はまだあるとはいいがたいけれど、……ええ、腹を括ったつもりだけれどもこの期に及んで尻込みしているわよ？　だけど、これはやらなくちゃいけないことだって感じるから、明日は金獣の元へ行くわ」

ギルバートは尻尾をぱたりと振ると、また伏せの姿勢に戻った。

「そうか。それならばよかった」

私はギルバートのその姿を見ながら先ほどのウィリアムの話を思い出していた。

元いた世界に帰れるかもしれない、という可能性は、この世界に根を下ろし、この世界で生きると決めてきていた自分に少なからず衝撃を与えた。

これが未練、というものののだろうか？

できることならこの世界のゴタゴタなんかほっぽり出して、元いた世界に戻って母の介護をしながらの専業主婦状態に戻ってしまいたいと思わないでもない。

元いた世界よりも、こちらの世界にいるほうが責任は重く、望むと望まないに関わらず世界の根幹に関わるような立場になってしまっている。

でも、投げ出すことはできない。

自分の一挙手一投足が今この世界に波紋を投じることになるうとは思っていなかったけれど、例え帰るとしても、それはまだ先の話だ。

今は目の前にある事柄をひとつひとつ片付けていくことが先決だ、と思う。

どうやらOLをやっているときに感じていたモラトリアムの時間というものは、ありがたいことにこの世界に来て変わらずに存在していたようだ。

今また決断のときが来ている。

今度は結婚という決断ではなく、強大な力を手に入れた存在としてこの世界で生きるか否かの決断。

私はなにを選ぶのだろうか。

家族や友人と過ごす世界？ それともギルバートや彼の群れとともに生きる世界？

答えはまだでない。

その日は灰色の女性達から夕食のもてなしを受け、お互いがお互いの思惑を胸に秘め、就寝したのであった。

次の日、私達は切り立った崖の上にいた。

大パノラマの風景である。

地平線一面を霧に囲まれたその場所は晴れていればさぞかし絶景であっただろう。

眼下には銀色のユウキアの木々が果てしなく広がっている。

曇天からは、はらはらと白銀のユウキアの花粉が落ちてきている。

霧の樹海も広大だと思っていんだけど、崖下に見えるユウキアの木

立も地平線いっぱい広がっている。

「これってユウキアの木立というよりもユウキアの森といったほうが正しいんじゃないかしら」

私の呟きに年嵩の女性が答えた。

「ユウキアの木は元々先人がこの地に来たときに植えたものであるそうです。それが長い年月をかけてこのように広がったのだと聞いております」

「途方もない時間ね」

私は崖からこの地一帯に広がるユウキアの木々を眺めた。

「それではそろそろ行くとしよう」

ティリウスがそういうと、私の横をすり抜けて崖下へと飛び降りた。あっという間に豆粒ほどの大きさになり、ユウキアの木々の中に消えていった。

「次は俺達の番だ」

「ええ」

そしてギルバートの背に乗った私は崖からふわりと飛び降りたのである。

最初の胃がひっくり返るようなぞくぞくとした浮遊感が過ぎ去った

あとは、風を全身に受けて一直線に地面へと向かって急降下していた。
った。

途中崖の壁で衝撃を殺すと、その壁を蹴って地面へと降り立った。

ざああっと枝が揺れる感触を体験しながら地面へと降り立つ。

そこは一面の銀世界だった。

降り立った瞬間、地面に落ちていたユウキアの花粉がいつせいに舞い上がった。

私は目を瞑り袖で口元を覆うと、しばらくその花粉に耐えた。

「ギルバートが契約者の獣でよかったわ。こんなにたくさんユウキアの花粉の中にいたら、正気を保っていられるかどうかさえわからないもの」

そのままギルバートの背に乗った私は、奥へ奥へと進んでいく。

随分歩いたと思うころ、開けた大地に出た。

そして私は、金獣と出会ったのである。

金獣 ●

その姿を見たとき、私は圧倒されて声を出すことができなかった。

金獣はまどろんでいた。

巨木の下で、静かに息をし、六つある目を全て閉じている。

巨大な豹の姿をしたティリウスが赤子に見えるほど、金獣は大きかった。

昨日聞いていた通り、金獣は虎と豹を掛け合わせた姿をしていた。

上半身は虎、下半身はしなやかな豹である。

首には銀色の金属でできた大きな首輪が嵌められている。

顔は菩薩像のように穏やかである。

金色の柔らかそうな毛の上には雪のようなユウキアの花粉が降り積もっている。

私達がティリウスの隣に並び立つと、金獣の縦に二列に並んだ六つ目が開き一斉にこちらを向いた。

「これは珍しい。王の資質を持つものよ」

金獣の声は赤子とも老人とも取れる声だった。

しかし不思議と澄んでいる。

金獣は初めにティリウスへと一対の目を向けた。

あとの二対の目はこちらを向いたままだ。

「金色の豹よ、お前はなにを望む？」

そう問われたティリウスは一步前に出るとこう答えた。

「俺は人型になれる獣だ。先に来たウィリアムは人型になれる獣の未来を廃絶させようとしているが、俺はそれを阻止したい。我がダキアは獣の国でありながらそれなりの文化水準に達している。それを衰退させることは断じて認めない。ウィリアムの所業を止め、我がダキアの安寧と繁栄を守るため、私はこの国の皇帝になることにしたのだ」

金獣はしばらくの間熟考しているかのようにだった。

永遠にも思える時が流れたとき、巨木の上でしゃらしゃらと音が鳴った。

はっとして上を見ると、そこから一本の銀色の枝が落ちてくるところだった。

ティリウスはそれを口で受け止めると、一步後ろに下がった。

「なんと！ 純粋な人間だけしか枝を受け取れないのではなかったのか?!」

はるかうしろのほうから驚きの声が聞こえる。

振り返ると不可視の壁に阻まれてこちらにこられない商人連合の面々と族長の甥が枝をくわえたティリウスを見て驚いていた。

「ティリウスの言葉は金獣に届いたのね。それに、なにかが変わってきている」

私はそう呟いてギルバートの毛皮を撫でた。

金獣は一对の目をこちらに戻すと、その三対の目でこちらを見据えた。

「さて、契約者とその獣よ。お前達はなにを望む？」

私は、金獣の顔を見つめながら空唾を飲み込んだ。

隣にいるギルバートが先に答えた。

「俺はこの国がどうなろうとか、世界の根幹などというものにはあまり興味がない。俺はアンナと群れの仲間達との平穏な生活を望む。そのためだったらなんでもする」

金獣はギルバートをじっと見つめたまま、しばらく動かなかった。

「そうか。では契約者よ、お前の望むものはなんだ」

そう問われたとき、私の頭の中では一瞬にして走馬灯のように様々な思いが駆け巡った。

家に帰りたい、元の世界に戻りたい、この世界に根を下ろしたい、ギルバートや仲間達と平穏な暮らしがしたい……。

しかし、出てきた言葉はそれとはまったく違うものだった。

「……ゆり籠でまどろんでいた子供は今目を覚ましひとりで外を歩こうとしている。それを、均衡を保つために無理やりゆり籠に戻そうすれば、子供は窮屈な籠の中で死んでしまう」

金獣はその三対の目をほうと細めた。

「それぞれが三者三様に生きる道はないの？　ダキアはダキアの、人は人の、そして獣は獣の生き方を」

「そうしたいのであれば王の枝を受け取るがいい。だが、まだ言い足りぬようだな」

金獣に促されて私は言葉を継いだ。

「もしもそれができないのならば、ほかの獣をユウキアの花粉による現象と奴隷として扱われる運命から開放してあげて。ユウキアの花粉に耐えられなくて死んでしまう弱い獣もいるの。その獣は果たして本当にそんな姿になりたかったのかしら？　それにこのメリットウスという国で獣だけが住居を隔離されたり、簡単に売り買いされたりする差別を受けるのは間違っていると思うの。獣を本来あるべき姿に戻してあげて。そうすればそのような制度もなくなり、より生きやすくなると思うの」

「それを考えるのは人間の役目では？」

そういった途端、金獣は真ん中の一對の目を残して上下の目を閉じた。

そして、壮年の男性のような声でしゃべり始めたのである。

「開放？　これは異なことをいう。獣は望んでこの国に来ている。人型になるのも、このメリトウスという国で人として働くのもその獣の自由ではないのか？　獣にだって選択の自由がある。人の似姿をとることが利点につながることもあるだろう。むしろ外界から来る獣という存在を受け入れ、居場所まで与えているこのメリトウスという国は大変寛大な国なのだと思わないのかね？　それら自由な選択を決めるのがこの国の皇帝の真の役目ではないのか？」

金獣にそういわれて、思わず私は言い返した。

「確かにそうなのかもしれない。だからといって、外界から来るものを『もの』として扱うのは違うと思うわ。それに全ての獣が望んで来ているわけではないわ。獣商人に連れてこられたり、住処を捨てざるを得なくなったりして仕方なく来ているものも少なくはないのよ。獣にだって全うに生きる権利があるはずよ」

「権利？　権利など、それを受け入れる体制ができている上での話ではないのか？　この国の体制はそうでなかったというだけのこと。そして今、三者、王の資質を持つものが現れた。ひとりは前皇帝、ひとりは虹色の獣の管理者、そしてひとりは獣の王子。三者とも王の資質があるのだ」

そういった瞬間、今度は一番下の目が開いた。

子供のような声で金獣は話し始めた。

「今この仕組みを変える必要がどこにあるの？　今のままでも国はつつがなく回っているというのに、なぜわざわざ引っ掻き回そうとするの？　お前は差別を否というが、獣がいなくなったらそれに代わる階級が出来上がるだけのこと。今だって貴族、文官と武官、市民、獣、と身分には明確な線引きがされているではないの。差別はどこへ行っても生まれるものなのよ。見よ、ダキアという国は獣の国でありながら、人の似姿をとり、階級まで出来上がっているではないか。階級制度、これは差別ではないのか？　それに階級に関しては人よりも獣のほうが過酷ではないかと思うぞ？　自然のなかで生きる獣達は力が全てであるからな。力で階級を決める獣に比べて身分などというものに守られている人間はなんと脆弱な存在なのだろうか。人の似姿をとった獣に支配されぬように『壁』があり、それに守られている身でありながらよくもまあぬけぬけと開放などという言葉が使えるものよ」

私は言葉にぐっと詰まったが、ここで引くわけには行かないと思い、言葉を発した。

「確かに、必ずしも皆一律の平和や平等がいいのだとは限らないわ。人が人である限り、差別や偏見もなくなるのかもしれない。でも、それでも、獣は物じゃない。命と意思を持って生きている存在なのよ！」

私がそう声を張り上げると、今度はまた真ん中の目が開いた。

「詭弁だな。命と意思を持っている存在を大切に思うとするならば、お前たちが家畜と呼ぶ生き物は違うのか？　獣と家畜のなにが違う？　そして、人と獣のなにが違う？　明確な線引きができるのか？　それに、今まで国の内政がそこまで大きな不満もなくやって来ら

れていたというのは、この統治制度が今のこの社会に合致しているからだということの表れでもあると思うのだが」

「でも、人はすでにこの体勢に慣れ、飽き、自ら壊そうとしているわ。この世界に完璧な制度なんてものはない。確かに急激な改革は歪みと軋轢を生むわ。けれどもこのまま無為な時間に飽かせて獣をいいように扱うという残虐さに慣れてしまったらそれは人の所業ではなくなると思うわ」

私のその言葉に、今度は一番上の目が開いた。

老人のようなその声は木々の間に響くようだった。

「綺麗ごとを。人はこのメリトウスという国で永久の安寧を貪っておればよいのだよ。それが『褒章地』、楽園を与えられしものの生き方であるからな」

「褒章地？ 楽園？ 誰から与えられたの？」

「先人だ。私を作ったものだ」

「作った？」

「この世界は元々世界の狭間に位置している。揺らぎを測定する調停者と呼ばれる人々がこの地を見つけた。その中で、人はどう生き、どう暮らすのかという試みがなされている。我はそれを見守るもの。そして、この国の均衡を保つものである。我もまた調停者だ」

そういうと、金獣は三対の目を全て閉じた。

私は全ての目を閉じた金獣に向かって言葉を継いだ。

「今までこの国を見守ってきてくれたことを否定はしない。この国で人は人としての活動を行っていたわ。だけど、囲われたことによって空気は淀み、人の心の中にはいつしか慢心と怠惰が蔓延るようになったわ」

眠っているかのようなその顔に向かって私はなおも言い募った。

「人は進むことを止めてしまったら、ただの獣と同じ存在になってしまう。知能がある分、残虐な獣にすらなってしまう。命がなんであるかもわからない、ただ、生かされているだけの獣に成り下がってしまうのよ。そんな人間を生む場所を果たして褒章地、楽園と呼ばれるのかしら」

この国に住む大多数の人々は平穏無事に暮らしている。

適度な娯楽と、3ヶ月毎に起こる獣の脅威、そう、スリルを乗り越えて、生きている実感を味わう。

だがそれも恒例化されれば、飽いてくる。

脅威でないとわかったら、緊張感がなくなる。

楽園で育った人間は、その好奇心によって楽園を追われる。

商人連合が国を捨てたのは、この国の人間としてごく自然な行動のように思えてくるのだ。

「人間は欲張りなのよ。いくら安寧とスリルを与えても、もつとも

つと欲しがる生き物なのよ。生を自分で勝ち取って、初めてそれを認識できる不器用な生き物なのよ。」

その言葉に、金獣は三対の目を開けた。

金獣の眼力に怯みそうになったが、左手の握りこぶしを胸の前に当てる。私は声を出した。

「ここが『褒章地』であるというのならば、そしてあなたは自分のことを調停者だというのならば、どうしてそれがわからないの？ 人にもいろいろな人がいるわ。ここが『褒章地』であるということを知り、その中で生を全うしようとしているものもいる。この前貴族が話しているのを聞いたもの。それにこの国のありように満足して、その中で一生を終わらせようとしている人達もいる。祭りのときの人々はとても生き生きしていたわ。私はそれを取り上げることができないと思う。でも、今時代は動き始めている。そして今、私の大切な人達が危機に晒されている。私はそれを見過ごせやなんかないわ」

「契約者よ、お前はなにを望む？」

金獣のその言葉に、私は大きく深呼吸をすと言葉を発した。

「皇帝の言葉の拘束を解いて欲しい。私は闘いを行使する力なら持っているし、すでに王は三人も選ばれた。私は今更王や皇帝になんてなりたくはないわ。でも、この世界がどうなっていくのかを見届けたいし、最善の方法を見出したい。だから、いかなる呪縛にも対抗できる体が欲しい。誰にも縛られず、対等に戦いたい」

私がそう言うと、金獣はしばし熟考したあと自分の腕に歯を立てた。

「来よ、契約者の女。私の血を受け取れ」

私は金獣に近づいた。

金獣はその大きな体からは想像できないほどしなやかな動きで、私の前に腕を差し出した。

その腕を捧げ持つようにして触れると、私はそこから溢れる玉のような血の雫に口をつけた。

金気が口の中いっぱいに広がって、喉を通る血は温かった。

瞬間、耳鳴りと頭痛のような感覚が頭の中を駆け巡った。

「アンナ！」

思わず頭を抑えると、ギルバートがすかさず寄ってきて心配そうにこちらを見る。

しばらくすると耳鳴りと頭痛は止んだ。

恐る恐る目を開けると、目の前で一瞬ハレーションを起こしたかのような感覚があった。

ぎよっとするが、それはすぐに元通りになった。

「大丈夫か？」

「ええ、体のほうはなんともなさそうだわ」

金獣は自分の腕をひと舐めして血を止めると、またまどろみ始めた。

「ゆけ、王の資質を持つものよ。我にはもうお前達に用はない」

その言葉を合図に、私達は金獣の前からきびすを返したのだった。

灰色の巫女達

私達がモネの村へ戻ると、そこには灰色の女性達がずらりと並んでいた。

年嵩の女性が私に声をかける。

「異界の使者よ。貴女のことをお待ち申し上げておりました。どうか我らをこの地の呪縛から解放してください」

彼女は手に硝子玉のようなものを持っていた。

「これは予知されていた事象。我らの役目は終わりました」

年嵩の女性がそういうと、今まで黙っていた女性達が次々に口を開いた。

「異界の扉が開かれ、やってきた異界人。そしてそのものがこの地に降り立つとき、我らはこの地を去ることができる」

「これは世界に変革が訪れようとしていることの証。我ら観測者は地上から解き放たれる」

「この世界が次に進むために。我らの手を離れ、新たな円環の中に組み込まれるように」

年嵩の女性は私ものとへ近づくと手に持っていた硝子玉を渡した。

「これを壊してください。そうすれば我らはこのモネの村から、そ

してこの世界から解放されます」

硝子玉を渡された私は少しだけ躊躇した。

「セルビアはどうなるの？」

「あの子には獣がいます。獣の血がこの世界に引き止めるでしょう」

「わかりました。それが貴女達の望むことならば、かなえましょう。でもその前に、ユウキアの花粉のことを教えてください。貴女達しか手がかりがないようですので」

私がそういうと、年嵩の女性はひとつ頷くと話し始めた。

「ユウキアの花粉とはこの世界を管理するもののひとつです。我々と金獣と皇帝、そしてユウキアの花粉は密接につながっています。それはこの世界を把握するためのものであるのです。ユウキアの花粉から得た情報は別の世界へと送られ、そこで解析されます。その副作用が異界渡りです」

「へえ……、つまり、ユウキアの花粉はワープできる生体機械とでもいえるのかしら、そんなもののなのね」

「ええ、その通りです。この生体機械は至るところに応用され使われております。羊皮紙に浮かび上がる文字や、光る街路などは皆そうです。なにせ、生物の体内、無機物の表面にこの生体機械は取り込まれているのですもの。それらのことをこの国の人々は呪いと呼んでおりましたが、それは文明の差で起こった認識の相違というところですね。ウィリアム様はおひとりでこの仕組みに肉薄されておりましたが、貴女であればこのユウキアの花粉の仕組みも難なくおわ

かりいただけるかと思いご説明するにあたりました」

なんだかまるでSF話を聞いているようだと思った。

実際そうなのだろうが、この世界が別の誰かによって管理されているということ、ユウキアの花粉がこの世界の情報を逐一伝える媒体となっているということに驚いていた。

「あの、異界からということは、もし、仮にこの世界の仕組みのことをまったくわからない人がやってきたらどうしていたんですか？

例えば、いるのかはわかりませんが魔法使いとか」

私がそういうと、女性は僅かばかり微笑んだ。

「近似値という言葉はご存知ですか？ 真の値に、実用にさしつかえのない程度の誤差が加わった値のことですが、この世界はいくつもの隣り合った世界に重なるようにしてできあがっております。ですから、異界渡りとは、このことを理解できる異界人がやってくるという認識しております」

ということは、この世界は地球との僅かな誤差でこのようになったというのだろうか。

私は灰色の女性達に問いかけた。

「どうしてギルバート・ファーガス・チェーンの血がこの世界を変える鍵なのですか？」

女性は微笑みを絶やさずに話を続けた。

「それはシステムにプログラムされているから、ということです。ある手順を踏んでプログラムを構築し、かけられたロックを解除することによって、別のロックを解除する鍵が作られるということです。そして、世界を変える鍵とは、この世界を新たなステージへ導くものへ与えられるのです。歴代の皇帝は皆そのことに合致したものがなっております」

「つまり皇帝になれる資格があるものとは、この世界の仕組みにならず気付き、それを背負えるものでなければならぬということだね。そして、この世界をどうするかという鍵がギルバート・ファーガス・チェーンであるというわけなのね」

「ええ。ですから、皇帝の座が空位になることもありました。その際には我らが赴き、次代の皇帝候補を選ぶということもしておりますが」

「そうだったのですか」

すると彼女達はこの世界でいうところの巫女のような存在であったのだということを理解した。

「貴女方は今この世界にとってどのような存在なのですか？」

「我らはこの世界で人が生きていくということを見守り、観測する存在であるのです。ですが、この世界は今まで歩んできた円環から外れました。これは我らの手を離れたということの証。偶然は必然なのです。我らは、あとのことを3人の次期皇帝候補者に託すことにしたのです。この世界はゆり籠から抜け出ようとしている子供そのものなのですから」

そういうと年嵩の女性は右手をすつと差し出した。

「さあ、我らの話はこれでおしまいです。その玉を壊し、我らを解放してください」

私は彼女達の顔を見た。

彼女達は皆一様に穏やかな表情をしていた。

「ええ、わかったわ」

私はそういうと硝子玉を頭上高くに持ち上げた。

「さようなら、灰色の巫女達」

そういつて、私は硝子玉を思いっきり地面へと打ちつけた。

硝子玉は派手に砕け散った。

すると灰色の女性達の周りに光の粒子が現れた。

「ああ、これで帰れる」

そう呟くと、彼女達はその場から跡形もなく消え去ったのであった。

ファース・人間の選択・世界を変える鍵。

この世界は今、変革の時を迎えている。

すべての人型の獣をそのまま人間にしようと目論むユリウス3世。

すべての人型の獣を本来の獣に戻そうとしているウィリアム。

そして、ダキアという人型の獣の国を守るため、今の事象を守ろうとするティリウス。

三つ巴の火蓋が切って落とされようとしていた。

異変 ●

アンナ達が灰色の巫女達と出会っていたときを同じくして、メリトウス本土ではある大きな異変が起こっていた。

大通り、路地裏問わず、あちこちで惨憺たる光景が広がっている。

吐き気を催すほどの血の臭い。

地面に飛び散った肉塊。

千切れた手足のようなもの。

いつもなら護衛付ではあるものの賑わっているはずの大通りには人っ子一人いない。

代わりに、その道路を支配しているのは、十数頭の獣である。

なんの艶か、てらてらと光る毛皮は薄ぼんやりとした空に不吉な印象を与えた。

その獣達の目は爛々と輝き、動ける獲物を見定めているようであった。

と、哀れな市民が路地裏から飛び出てきた。

傍には獣の護衛をつけているようだが、その獣の様子がおかしい。

目は血走り、口から泡を吹いている。

数瞬後、その獣は、人型からいびつな獣の姿へと変化した。

「ひいっ！」

市民は自分の護衛の突然の変化に慄き、よろめきながら路地裏から出てきたところであったのだ。

目の前に打ってつけの獲物が現れた獣達は、目を細め、涎を垂らしながら体勢を低く整えた。

そしてその市民が最後に目にしたものは、暗い歓喜に沸きながら走り寄ってくる十数頭の狂った獣と、自分の喉下に覆いかぶさっている護衛であったはずの獣の頭頂部であった。

夜の帳が下りたところ、西の居住区、スラム街では街路のあちこちで盛大にかがり火が焚かれた。

完全武装した武官達が慌しく行き来する。

「西の居住区の主だった通路を閉鎖するのだ！」

あちらこちらで武官の指示が飛ぶ。

部隊の進捗状況を監督していた武官のひとりがぼそりと呟く。

「獣は火を怖がるが、このユウキアの季節にそれがまかり通るか…

：」

「なに、相手は獣、自然の法則には逆らうまいよ」

武官らが険しい顔をしながらも言葉を交わしていると、伝令が走り寄ってきた。

「配置、完了致しました！」

「うむ、ご苦労」

「それとセルビア様が、スコルを連れて只今到着致しました」

「そうか、お前は持ち場に戻るように」

「はっ」

伝令が去ると、その武官は周囲に悟られないようにそつとため息をついた。

「これで犠牲者はいくらか少なくなるだろう」

程なくして人垣が割れた。

そこから、灰色の艶やかな防具をまとったセルビアと、静かに殺気を放つ白狼の姿のスコルが現れた。

セルビアは灰色の長い髪を頭頂部でひとくくりにまとめており、いつもよりもさらに清冽な印象を与えた。

対照的に、ボディラインに沿った丈の短いワンピース状の皮製の防具はこの状況にあって場違いなほど艶かしかった。

肘まで隠れる長手袋と、太ももまであるニーハイブーツはこれも灰色で、篝火の光を受けて鈍く光っており、その手には三叉の槍が握られていた。

武官らはセルビアの衣装にしばし見惚れると、咳払いをして体裁を整えた。

「火急の参陣、ありがたく存ずる」

「いえ、私は私の役目を果たすまで」

その両目は声をかけた武官を見てはおらず、篝火の陰に隠れた暗い闇を見つめている。

スコルが齒を剥いた。

それはこれから始まる戦闘に歓喜しているかのようだった。

「はは、貴族達は怯えつつも喜んでいるだろう。この期に乗じてスラム街の獣が駆逐されるのだからな」

そういうながら近寄ってきたひとりの軽薄そうな武官がいた。

その武官は近くでセルビアの衣装に目を留めると、ヒュウと口笛を鳴らした。

「こんな近くで麗しの『死の侍女』の戦いぶりを拝めるなんざ、幸

せものだねえ」

武官は頭の後ろで両手を組むと、セルビアの胸元にちらりと目をやった。

「それにしても、従来のユウキアの花粉の季節よりも被害が大きいからといって、獣の住む西の地区を完全閉鎖、出て来るものは全て抹殺するなんて指令を皇帝陛下はよくお出しになられたものだ」

セルビアはその武官を一瞥すると、また視線をはるか先の闇に戻した。

「今回の花粉は今までとは何かが違うようです。間引き現象も以前より格段に増え、なぜか殺戮衝動を持ち、人を喰らい妖獣となってしまた獣が後を絶ちません。このままでは市民の安全が脅かされるため、私達が出動することになったのです」

そういうが早いか、セルビアは三叉の槍を闇に向かって構えた。

「はっ、はは、セルビア様、冗談はよして下さいよ。獣はこのでかい篝火に怖気づいて出て来られるはずがないじゃありませんか」

顔を歪めながらも軽口を叩いていた武官はその顔のまま前面を向いた。

「ひいっ！」

見るとそこにはいつ出てきたものやら、三頭の巨大な獣が佇んでいたのだ。

「い、いつの間に?!」

姿は熊のようであるが、その体軀は通常のものよりもはるかに大きい。

獣の目は篝火に反射しているのか爛々と輝いている。

「死にたくなければ下がちなさい」

セルビアはそういうと、傍らで毛を逆立てているスコルに向かって一言声をかけた。

「殲滅を」

スコルはグウウと一声低く呻ると、その場で体を膨らませた。

あっという間に馬ほどの大きさになると、体をぶるりと震わせた。

それが合図となったのか、三頭の獣はこちらに向かって一斉に駆けて来た。

と思うと、真ん中の一頭を残して、他の二頭は左右へと回りこんだ。

真ん中の獣はそのままセルビアに向かって駆けて来た。

それに対し、横合いからスコルが血のような赤い眼を鋭く輝かせながら飛び出していった。

その場でもんどりうつ二頭。

スコルはその巨大な獣を一撃で仕留めると、さっとセルビアを庇うように立ち位置を変更した。

「……さ、さっすが死の侍女とその獣スコルだ」

そういいながら胸をなでおろしかけたその武官はぽかんと口をあけた。

暗がりから、ぞろぞろと獣が出て来る。

見た目は痩せたコヨーテのようである。

その数、十数頭。

大きさはそれほどでもないが、どの獣も瞳には殺戮の衝動を浮かべ、あるものは血の臭いと恍惚に酔っているかのようだった。

「ひいっ?!」

如何な武官といえども、これほどの獣を相手にしたことはなかったのだろう、腰が引けている。

「ぎゃああ!」

「うわあああ!」

陣の左右では獣の攻撃に苦戦しているのか、悲鳴が聞こえる。

「隊列を組み直せ!」

「仲間が喰われた！ こいつは妖獣か？！ 違ったとしても相手が妖獣に変化する前に仕留めろ！」

指示が飛ぶが、最初の巨大な獣に苦戦する武官らはそれすらもままならない。

ぞろぞろと出てきた獣達は、陣を囲むように散らばった。

あるものは舌をだらしなく垂らし、あるものは何度も地面を掻き、そしてあるものは笑顔のように牙を剥き出している。

そして、篝火がひととき大きく跳ねたのを合図に、その獣達は一斉に襲い掛かってきたのであった。

「メリトウスの闘技場に行きましょう」

ウィリアム・シルフィードが円卓の上に置いてあるゴブレットを手に取りながら、周囲を見渡した。

灰色の巫女達が消えてから、モネの村は一層静かになった。

村の中心にある銀色の建物の中で私達は今後の動向を話し合っていた。

ああでもないこうでもない話し合ったが、結局ウィリアムのいったその言に皆落ち着いたのである。

金髪碧眼の美貌の持ち主は、薄い唇をゴブレットの中身で湿らすと、その場に居合わせた全てのものに目を配った。

「この国を手に入れ、ひいては自らの願いを叶えようとするものがこの場に二人いる。現皇帝を廃し、自らの理念を貫こうとするものがね。私は自らの理念を達成すべく、闘技場では必ず勝つつもりだ」
そういつてウィリアムはティリウスを見やった。

ティリウスは茶色の瞳を嫌そうに揺らすと、ウィリアムの視線から逃れた。

「俺の求めるものとお前の求めるものは対極にある。もちろん現皇帝のものともだ。この場でお前を殺してもいいが、闘技場で殺さねば意味がないのはわかっている。だから単に手出しをしないだけだ。そのことを忘れぬように」

そういつと、話はこれで終わったとばかりにティリウスは席を立った。

「俺は一足先に闘技場へと赴いている。お前達が皇帝をそこへ連れてくればいい」

いうが早いのか、ティリウスはその場をあとにした。

「では私達も行きましょうか」

商人連合の面々と族長の甥もその場を去った。

あとに残ったのはウィリアム達と私達である。

「アンナさん」

ウィリアムが席を立つとこちらに近づいてきた。

「私が皇帝になった暁には、アンナさんとともに、アンナさんがいた世界に渡ろうと思っているのです。私と一緒に、貴女の世界に行きませんか？」

私はとっさに返事ができなかった。

それを気にした風もなく、ウィリアムは続ける。

「きつと楽しいでしょう。貴女の住まう国のことや、その国の生活様式などは事前に教えてもらうことになりますが、向こうに着いたら私はその国の知識を存分に吸収するつもりです。この世界の獣がただの獣に戻りさえすれば、メリトウスやヌミディアに住む人間の生活は今よりもっと危険が減ると思います。獣の縄張りさえ侵さなければ、無害ですから。後顧の憂いを絶った上で、私は異界渡りをすることにしているのです」

ウィリアムは獣の姿のギルバートに目をやった。

「願わくば、全ての獣が本来の姿に戻るとよいのですがね」

グルルルとギルバートが低く呻った。

「それでは私はこれで。アンナさんが闘技場に来るのを楽しみに待っていますよ」

そういうと、ウィリアムはキスキル・リラを引き連れて退出した。

ウィリアムが出て行った扉を見つめ、私は嘆息した。

「私、本当に行かなければならないのかしら」

「アンナ？」

「ここで待っていていちゃ駄目なのかしら……って、駄目だわ、また後ろ向きの思考になっている」

三十路も近いただの凡人は、本当は急激な変化なんか望んじやない。

これは私だけかもしれないが、穏やかに時間が過ぎていくのをなによりも求めているのだ。

「アンナ、逃げようか？」

ギルバートが尻尾をはたはたと震わせながら私に問うてきた。

「今の俺では異界渡りの力は完全ではないので、どこに行くかはわからない。でも、アンナが望むなら、今すぐにでも別の世界に連れて行くことができる。幸い、今はユウキアの花粉の季節だ。俺の血と花粉があれば、異界への扉を開くことができる。なにもかもを捨て、俺と一緒に別の世界へ渡ることできる」

ギルバートは真剣な表情で話した。

「でも、それじゃあ群れの皆や、この世界で出会ったたくさんの人達はどうするの？」

「俺はアンナが幸せならそれでいい」

そういいながらギルバートはじっと私の目を見つめてきた。

その目は真実嘘偽りのないものであった。

私はそんなギルバートをじっと見つめると、ふっと微笑んだ。

「ありがとう……わかってる、ギルバートがそう思ってくれているのは。でもそれはできないわ。だって、ギルバートには大切な群れの仲間がいるでしょう？　生きていくには義務も必要。これがこの世界での私の義務になっているのだとしたら、私は行かなくちゃならないんだわ。それにこの世界で出会った多くの人達を捨ててまで自分の利益のために動くことは今の私にはできない。どこかへ行くのだとしても、少なくとも、これらのことが片付いてからだって思うもの」

「アンナならそういうと思った」

そういうとギルバートはあっという間に人型へと変化した。

ギルバートは部屋にあった大きな布を器用に巻きつけ、ギリシャ彫刻もかくやと思わせるようなその肢体を隠した。

「アンナ、こちらへ」

私はギルバートに手を引かれて、部屋を出た。

私達が滞在していた部屋まで来ると、ギルバートは寝台へと私を案内した。

二人でそこへ座ると、ギルバートはゆっくりと私を抱きしめた。

ギルバートの胸にすっぽりと収まった私は、その温かい鼓動を聞きながらまどろんだ。

ギルバートは私の背中を優しくさすり、頭、額にとキスの雨を降らせた。

「アンナ、アンナ。俺の愛しい人、ただひとりの人。これが終わったら、俺の群れとともに静かに暮らそう。アンナの望むように、穏やかに暮らそう。アンナの周りから不安が消えるように、アンナの周りに幸福が溢れるように。俺はそのためなんなんでもする。なんにだってなれる。俺はアンナのものだから」

抱きしめられているのに、捕らえているのはギルバートなのに、ギルバートはその身を私に捧げるといふ。

「捧げることでアンナを手に入れることができるのなら、俺は喜んでそうする」

そういつて、ギルバートは私をきつく抱いた。

私はその優しい拘束にほうと長いため息をついた。

「私には、もうギルバートなしの人生なんて考えられないもの。私のほうこそ、ギルバートに私をあげるわ」

私がそういと、ギルバートは私の左手を取り、手の平の傷痕をいとおしむかのように口付けた。

「では今、遠慮なくもらっておこう」

そういと、ギルバートは私を寝台に壊れ物でも扱うかのように横たえたのだった。

束の間 ■● (前書き)

※R15相当の描写が含まれています。

束の間 ■●

ギルバートは私が着ているヌミディアの民族衣装を器用に脱がせた。肌があらわになったことで、僅かな羞恥と肌寒さで体がほのかに粟立つ。

強張る私の姿を見て取ったギルバートが顔をほころばせた。

「綺麗だよ、アンナ」

ギルバートは自身がまもっていた布をしゅるりと落とすと、私をふんわりと抱きとめた。

腕の中に囚われた私は、改めて、このギルバートという存在が自分にとってなくてはならないものであるということを感じていた。

ギルバートの腕の中はユリウス3世に抱かれたときのような違和感や不快感、強制的な快楽を呼び起こさない。

どこまでも労わりと愛情が感じられ、私を気にかけてくれているのが感じられた。

「アンナの肌は柔らかいな。いつまでも触っていたい」

ギルバートの体の重みを心地よく感じながら、私は彼の背に手を回した。

強く強く抱き返す。

「好きよ、ギルバート。あなたがなんであろうと」

視線を横に流すと、逞しい肩が顔のすぐ横にあった。

私はその肩にそつと唇を寄せた。

ギルバートは私の首筋にお返しをする。

このままギルバートとの情事に溺れてしまいたい。

だが、これから先のことに對する不安もある。

私は思わず口を開いていた。

「ねえ、もし、ウィリアムが皇帝になったら、この腕とは二度と出会えなくなるかもしれないのよね？」

私がそういうとギルバートは私の耳元に顔を寄せた。

「全ての獣を本来の獣の姿に戻すとすると、契約者の獣も例外ではないのかもしれない、だがそうでないかもしれない」

曖昧な返答に少しだけ不安が増幅したものの、私は続けて聞いた。

「今の皇帝、ユリウス3世は不完全な皇帝だわ。だから全ての獣を人に変えることができない」

「そうだな。だが、どういう方法か、ユリウス3世は勝算があるらしい。だから俺とアンナを手元に置きたがった」

「ティリウスはメリトゥスの皇帝になったら人間達をどうするつもりなのかしら」

「当然支配下に置くだろう」

私がさらに考える素振りを見せようとしたとき、ギルバートがはあとため息をついたあとその唇で私の口をふさいだ。

「国の行く末に関しての話はここまでにしておかないか？ 今度はその口から嬌声が聞きたい」

「えっ」

思わずギルバートを見上げる。

「なにせアンナが皇帝に囚われてからずっとアンナに自らの腕で触れることができなかったのだからな」

そういつてギルバートは少しだけ意地悪そうな笑顔を向けた。

「そ、そうね、いろいろあって気がつかなかったけれど、ギルバートが私の前で人型になるのは久しぶりなのよね。あの、ギルバート達に助けられたお礼をまだいっていなかったわ」

「アンナ、俺がどれだけ焦燥感に囚われていたか知っているか？ アンナのいない日々をどれだけ寂しく思っていたかわかるか？」

私は答えられなかった。

ギルバートの体温が上がり、抱きとめられている腕に力がぎゅっと込められたからだ。

「ちょっと、ギルバート、苦しいわ」

ギルバートは体を僅かにあげ、私の喉元に口付けをし、軽く歯を立てた。

「あっ」

思わず声が出る。

小さな、痺れるような感覚が背中を駆け抜けた。

「このまま血肉残さず食べてしまいたい。そうすればアンナはずっと俺だけのものになる」

ギルバートはそうしてそのまま唇を上へ上へとずらしながら私を優しく齧り続ける。

唇に到達すると、今度は下唇を食み始めた。

そうしている間にも手は体をまさぐり始め、それは本格的な愛撫へと代わっていった。

さっきは壊れ物を扱うかのように優しく触れていたのに、今度は感情の波に飲まれたかのように荒々しくさえある。

私はギルバートに翻弄されながらも、その愛情を愛しく思っていたのであった。

——気がつくと、ギルバートの腕の中だった。

私達の体にはシートがかけられており、二人の体温があるため、それほど寒くはない。

私は彼の滑らかな胸に顔を寄せる。

ギルバートはくすぐったそうに抱き返してきた。

あれから何時間経ったのだろう。

何度も情を交わし、二つの体がどろどろに溶けるような感覚さえ味わったのだ。

外が見えないのでなんともいえないが、多分暗くなっているであろう。

ギルバートの胸に手を置きながら私は唐突に尋ねた。

「私のこと、食べたいの？」

彼はふっと笑うと私の頭に顎を乗せた。

「いつでも食べたいと思っている。さっきまでたくさん味わったが、まだまだ足りない」

「そういうことじゃなくって」

少し怒ったように私がいうと、ギルバートは頭の上でくつくつと笑った。

「わかってる。アンナがいたいことぐらい」

そういうとギルバートは私を胸に乗せたままごろりと仰向けになった。

「そうだな、俺がそう感じるのは身体的な飢えからではない。アンナをだれかに奪われるくらいなら、俺が食べてしまったほうがいいと思っっているんだ。……俺は以前親友を食べたことがあるが、親友は俺の中で今も生き続けている。それが『融合』というものだから人間を食べたら『妖獣』になってしまうが、アンナを食べても『妖獣』にはならない。それはアンナが俺の契約者だからだ。きっとアンナも俺のなかで生き続けるのではないかと思うのだ」

私を撫でながら、一言一言吐き出すようにいう。

「なんだか『融合』ってアニミズムみたいだわ。でも、人を食べて妖獣となってしまうのは人と獣が相容れないものであるからなのかしら」

私はひとりそう呟いた。

「だが、食べたいと思うと同時に、失いたくないという思いも強くなる」

ギルバートは自分の腹の上に私を乗せると、今度はにやりと笑った。

「食べてしまったらこうやってアンナを肌で感じる事ができなくなるからな」

私は一瞬きょんとしたあと、がくりと肩を落とした。

「もう、馬鹿」

思わず悪態をついた私に、ギルバートはふっと息を吐き出した。

「そうだ、アンナのこの声も聞けなくなる」

やわやわと背中を撫でるその手つきに、官能の匂いを嗅ぎ取った私は思わず怯んだ。

「ギルバート？」

そうしてしばらく私の体を撫で回すと、ギルバートは残念とでもいったように大きなため息をついた。

「アンナの体のことを考えたら残念だがこの辺でやめにしておくほうがいいことはわかっている。ああ、だがアンナが俺の腹の上で俺を受け入れ跳ねるのは実にいい眺めなんだがな」

「ちょっと！」

「肌は朱に染まり、頬は上気し、瞳は俺を感じて蕩け、『いい、もっと』とねだるアンナは実に美しい」

睦言を囁くギルバートに対し、私は思わず顔を赤らめた。

「は、恥ずかしいからいわないで、それってなんだか私がものすごく淫乱みたいじゃない」

「アンナは気付いていなかったのか？ 自分の欲望に浸るときの艶かしい表情を」

「意地悪！」

そういつて私はギルバートの上から身を起こすと、寝台の下に置いてあった衣服に手をかけ着始めた。

「もう……。ところでお腹空いたでしょう？ 夕飯をなにか見繕ってくるわ。それを食べたら今夜は大人しく寝て、明日の朝早くモネの村を出発して闘技場へ行きましょう」

私はそういつて部屋をあとにした。

そのうしろで、ギルバートが愛おしそうに私を見つめていたことに気付かぬまま。

「戦況は芳しくない」

朝日が昇ると同時に、その場の惨状が一目で分かった、

地面にはおびただしい量の血が飛び散り、人と、獣の死骸が散乱していた。

「確かに今回出てきた狂った獣は殲滅したが、この国のどこにでも獣はいる。スラム街だけを標的にしていたのでは埒が明かない」

「このまま封鎖を続けていてはスラム街での暴動が起きかねん。また、市民が恐慌によりどんな無茶な行動をとるのかも判断しかねる」
その武官らは手傷を負っていたが、幸い軽症であるようだった。

「セルビア様、お待ちください！」

彼らが声のするほうへ目を向けると、セルビアが殺した獣から槍を抜き取っているところだった。

セルビアの三叉の槍は獣の血に濡れている。

それをひゅんと一振りすると、彼女はスコルを連れ、またスラム街のほうへと歩き始めた。

「セルビア様?!」

武官らが声をかけると、セルビアは足を止めずに振り向いた。

「街の中に入り、目ばしい妖獣をおびき出し、倒してきます」

傍にいた武官が慌てて押し止めようとした。

「いくらスコルを連れているといえど、おひとりの中へ向かうのは危険すぎます！」

だがセルビアは足を止めない。

「あなた方を守りながら戦うほうが、私にとってむしろ足かせとなります。人の味を知った獣はどのみち抹殺対象に入ります。それならばなるべく早く片をつけるべきです」

そういつて足を進めるセルビアを武官達は止めあぐねていた。

「これは酷いねえ」

その声に彼らが振り向くと、騎獣と馬に乗った一団が近づいてくる場所だった。

「あなた方は」

「あれは商人連合、ヌミディアの族長の甥、そしてウィリアム・シルフィード様だ」

ヌミディアの騎馬装束に身を包んだ一団であった。

「あなた方がなぜここに？」

武官のひとりが尋ねる。

その質問に、ウィリアムはユウキアの枝を見せることでもって返答とした。

「そ、それはユウキアの枝?!」

一気に場がどよめく。

「なぜあなたがそれを……」

「私はユウキアの枝に選ばれしものである。この事態の平定に協力し、現皇帝に対し挑戦するものである」

そういつてウィリアムは一同を見渡した。

一瞬しんとなっていた場が、更なるざわめきに包まれた。

「あのキスキル・リラを従えるウィリアム・シルフィード様ならば、次期皇帝にふさわしいのではないだろうか」

「まさか、この異常事態が発生したのが不完全な皇帝陛下がいるためであったとしたら……」

疑惑が飛び交うなか、それを一括したのは彼らの登場により足を止めていたセルビアだった。

「皇帝陛下のなさることに間違いはありません。この国の守護は皇帝陛下あつてのもの。みだりに皇帝陛下を侮辱するものあらば、スコルのあぎとの前に出るがいい」

「ほう、その忠義心は皇帝陛下に対してのものかな？　それともユリウス3世個人に対してのものかな？」

族長の甥が声をかける。

「あなたは、ヌミディアの族長の甥ですね。如何な王族といえど、この国で皇帝陛下を侮辱する発言は私が許しません」

セルビアは族長の甥としばし睨み合っていたが、やがて興味をなくしたようにきびすを返し、スラム街へと向かっていった。

「このような事態ではあるが、いや、このような事態であるからこそ、早急に次期皇帝選出の儀を行うのが我々の務めではないのか？ 皇帝陛下にこのことをお伝えせねば。そして、我々は民衆の安全を守りながら、闘技場に人を集めるのだ」

――闘技場での次期皇帝選定の戦いが近づいてきたのであった。

闘技場

国で随一の大きさを誇るその闘技場は、今熱狂とざわめきに包まれていた。

祭りの季節でもないのに、大量の乾燥花びらが撒かれ、闘技場に彩を添えている。

観衆はそこかしこでそわそわひそひそと何事かを囁きあっている。

彼らは皆これから始まる儀式、いや、一世一代の見世物を今か今かと待ち望んでいたのである。

――狂った獣はあれからセルビアや武官らが殲滅したようで今どこにも見当たらない。

街に広がりかけていた惨劇の急激な収束に、人々はいぶかしみながらも安堵のため息をついていた。

間引きされた獣の、どす黒い粒状の残骸と、殲滅された獣の死骸が残る街路で、数人の人々が寄り集まっていた。

「これでようやく元通りの生活が送れるわ」

「一時はひやひやしたがな。しかしやはりこれは今うわさの皇帝陛下のお力の低下によるものなのではないか」

「きつとそうに違いない。なあ、聞いたか、急遽次期皇帝陛下選定の儀が執り行われるとのことだ。まさか自分の代で選定の儀にお目にかかれるとは思ってもいなかったよ」

「3日後の正午に、闘技場に集合だとのことだよ」

「楽しみだねえ」

人々はそう話しながら散らばっていった。

あとに残ったのは間引きされた獣の残骸と狂った獣の死骸。

その残骸達がぼこりと脈動したのに気づくものはいなかった。

「嫌な臭いがするよ」

桃色のトーガを羽織った少女のキスキル・リラが、空気の匂いをくんと嗅いだあとうええと顔をしかめた。

「死者の臭い。濁った血の臭い。闘技場で戦っているときとは違う、鼻を覆うような臭いがあちこちからたくさんする。リラ、こんな臭いは嫌いよ」

闘技場近くの豪華な宿で休息を取っていたウィリアム達一行は、明日に迫った選定の儀に備えているところだった。

「それに、なんだかわからないけれど嫌な気配がする。逃げたほうがいいって勘がいつてる。まともな獣ならこの気配に怯えているはずよ。ティリウスはもう逃げたかしら？」

眉を寄せながらいうキスキル・リラを見ながら、ウィリアムは少し考えたあと口を開いた。

「いや、あのものどこかに宿でも取って明日の選定の儀に備えているだろう。しかし選定の儀の内容は現皇帝が決めることとなるが、なんにせよ命のやり取りになるのは確実だ。こちらも気を引き締めてゆかねば」

「うん、頑張ってね、ウィリアム！」

キスキル・リラは真面目な顔をして返答したウィリアムを見てそういうと、部屋の窓枠によじよじと登り、そこに腰を下ろすと外を見下ろした。

街には活気が戻っていたが、暗がりではあちらこちらで汚物や獣の残骸や死骸が転がっていた。

「この国、前よりも汚くなったね」

キスキル・リラの表情は見えず、声は平坦でなにを思っているのかはその後姿からではつかめなかった。

「ああ。なにかが変わるときには必ずなんらかの膿が出るからな。……めずらしいな、お前がそんな感想を持つとは」

ウィリアムがそういうと、キスキル・リラはこちらを向いてふうと

頬を膨らませた。

「子供と思わないでよっ？ リラだって、こうみえて一生懸命考えているんだから。そうだ、この間はアンナと出会えて嬉しかったのに、すぐにさよならしちゃうんだもん。ウィリアムのいけず。前に大人のおねーさんの『私』がアンナに会ったときに、私達の元に来ることになるって『予言』していったのに、ウィリアムのせいぢよっただけ外れちゃったじゃない。はぁーあ、残念」

そういつてぷりぷり怒っていたかと思うと、次の瞬間にはなにかを思いついたようにぱあっと明るくなった。

「でもウィリアムが皇帝になったらそれこそアンナとずっと一緒にいられるんだよねっ！ 楽しみ」

キスキル・リラは窓枠からぴょんと飛び降りると、両手を広げ鳥が滑空するような仕草をした。

「ぶーん！」

キスキル・リラはウィリアムの周りを何度かぐるぐると回ると、ウィリアムの目の前ではたと足を止めた。

「あ、今ね、乙女のおねーさんがウィリアムと話したいって」

そういうが早いのか、キスキル・リラはそこでたおやかな乙女へと変化した。

雪のような白い肌をほんのりと赤く染め、服はもはやまっとなにも同然である。

キスキル・リラはウィリアムに近寄ると、その胸板に寄り添い、そっと手を添え、服をきゅっと握った。

「わたくし、少しばかり安心していきますのよ。あなたがアンナに執着するのはどこまでも知識欲からなのだということに」

「どうということだ？」

ウィリアムが眉をしかめると、キスキル・リラは少しだけ悲しそうな表情をした。

「貴方の態度を見て思いましたの。貴方のそれは愛情とは少し違うように思います。わたくし、はしたなくも少しだけ嬉しいと思っていますのです。貴方が心を捧げていないことに。だってわたくしは、そんな研究馬鹿の朴念仁を愛してしまったのですもの」

キスキル・リラはなおも体を寄せる。

金髪碧眼の美貌の持ち主は、今度は眉ひとつ動かさず、キスキル・リラのしたいようにさせていた。

キスキル・リラは潤んだ瞳でウィリアムを見上げた。

そのとき、ドアをノックする音が響いた。

「どうぞ」

ウィリアムが声をかける。

入ってきたのは族長の甥だった。

彼はウィリアム達の姿を見ると少しだけ目を丸くした。

「ああ失敬、お取り込み中だったかな」

「構わない。用件を話してもらおう」

族長の甥はキスキル・リラの肢体を眺めると一言放った。

「眼福だな」

キスキル・リラはさつと頬を染め、ウィリアムの背中に隠れた。

「こんなに美しい女性がああ虹色の獣だなんて信じられないな。しかしウィリアム殿は果報者だな。半裸の美しい乙女に言い寄られて」

「用件はなんですか？」

取り付くしまもなくウィリアムがそう答えると、族長の甥は声を潜めた。

「今ここで取引をしておこうと思ってな。もし明日、ウィリアム殿が勝ち、皇帝になった暁には、我がヌミディアに援軍を送り、我が陣に組するという、そういう取引だ」

「私がそれに乗る利点はなんですか？」

「我らがヌミディアには、代々受け継がれてきた、身体を強化する薬と獣を仕留める薬がある。それをお分けいたそう。もし明日、獣

の王子と現皇帝と戦うことになったときに有効であろうよ」

「そんな薬があるなど、聞いたことがない」

族長の甥はにやりと笑った。

「本当ならば門外不出なものでして」

「使用方法は？」

「おっと、それをお話する前に、我らヌミディアと取引をしようじゃないですか」

ウィリアムの言葉を遮ると、族長の甥は二つの小瓶を空中で振った。

「乗るか、反るか」

ウィリアムはしばし無表情で佇んでいた。

そして、ややしてふっと息をひとつ吐いた。

「約束しよう」

こうして、決戦前夜の夜は更けていったのであった。

――銅鑼が打ち鳴らされ、乾燥花びらが舞う。

人々の歓声が聞こえる。

「ああ、なんとか間に合ったみたいね」

私と人型のギルバートは闘技場へ到着した。

入口に立っている兵士に赤い石の付いた金の指輪を見せると、小走りになりながら中へ入る。

そうして貴族席に出た私はその広さと観衆の多さに圧倒された。

東京ドームが一体何個入るのだろうと思うくらい闘技場内は果てしなく広がった。

そして、その中央に、ウィリアムと乙女の姿のキスキル・リラ、人型のテイリウス、そしてユリウス3世と人型のレーニアが立っているのを発見した。

「ちょうど始まるころみたいね」

手近な席に座ると、私はギルバートの腕をとった。

ぐいっと近づき、耳元で声を潜める。

「私、あの三人が殺し合いをするところを観に来たのでは決してないですからね。どうにか別の方法がないかって考えている最中なんですから」

「今もか」

「ええ。だけどいい案が全然思い浮かばなくって。それにしてもどういう方法で次期皇帝を決めるのかしら」

私のその言葉に反応したわけではなからうが、銅鑼が3回打ち鳴らされた。

それを合図としたのか、観衆はざわめくのを止め、広場中央に注目した。

広場中央にひとりの文官が進み出てきた。

その顔は悲壮な決意を秘めているようにも、それをぐっと堪えているようにも見えた。

文官は片手に拡声器のようなものと、丸められた羊皮紙を持っていた。

広場中央に設置された壇上に上がると、文官は拡声器を口にあてがい、羊皮紙を広げ、そこに書いている文章を読み上げた。

「只今をもって、現皇帝ユリウス3世はここにいる二名の挑戦を受けることを承諾する。三名の首に嵌めてあるユウキアの枝にかけて誓う」

見ると、皇帝候補の三人の首には銀色のわっかのようなものが嵌められている。

それはよく見ると金獣の首についていたものと同じもののように見受けられた。

「あれはなにかしら？ ユウキアの枝っていつていたけれど」

「あれはどうやらユウキアの枝が変化したものであるらしい」

私はその姿を見て違和感をもった。

「あの姿ってなんだか奴隷みたいね。穿ち過ぎかもしれないけれど、次期皇帝になることで奴隷から解放される、そんな風にも見えてしまうわ」

壇上の文官は続けて文章を読み上げる。

「対戦ルールは、いかなる武器の使用も可、自身の獣を戦闘に利用するのも可、相手の首取得をもって勝利者と致します。なお手段は問いません。最後に生き残ったものが次期皇帝となります」

「ひええ、厳しいな」

横合いから声が上がった。

振り向くとそこにいたのはヌミディアの王子、ウェルミナとその従者アルコだった。

「ウェルミナ、それにアルコ！」

「よう、つていつでもそこまで久しぶりでもねえけどな」

ウェルミナは相変わらず飄々とした佇まいで私を見下ろした。

「ああ、悪いが今の俺達はユリウス3世の味方なんでね。理由は国交のためと、買収されたってところかな？」

いくらで？ とは聞かないことにした。

ウエルミナのことだ、きつとうまいことふんだくったに違いない。

彼らは私の隣に席を取ると、どっかと座った。

「聞くところによると、以前ユリウス3世が戦ったときは剣による一騎打ちの戦いだったそうだ。それに比べりゃ、今回の次期皇帝選定の儀は異例尽くめだ」

「そうね、なにせ皇帝候補者が三名、しかも内一名は獣なんですから」

「ああ。もしかしたら、この国に獣の皇帝が誕生するかもしれないんだぜ？」

「もう、ウエルミナったら、本当はだれの味方なの？」

私がウエルミナの飄々とした様子にちよつとあきれて膨れると、ウエルミナはその美女と見まごうような容姿からは想像もつかないほど男らしい表情でにやりと笑った。

「俺か？ 俺はね、金払いのいいもののミ・カ・タ」

「只今準備を致します。なお、次の銅鑼の合図で戦闘開始と致します」

文官がそういう終わって壇上から離れた。

すると、候補者達を取り囲んで、ゴゴゴゴという重苦しい音とともに地面から大きな板が何枚も現れた。

その板には、古今東西、ありとあらゆる武器がずらりとかかっていた。

しばらくせり上がると、その板は止まった。

しんとする場内。

だれもが戦闘開始の銅鑼の合図を、固唾を吞んで見守っていた。

「それでは、始め!!」

ドオオンとひととき大きな銅鑼の音が鳴らされた。

瞬間、割れんばかりの大歓声が場内に響き渡った。

——今この瞬間、皇帝選定の儀が始まったのである。

絆の証

巨大な闘技場のど真ん中、銅鑼の音が鳴り止んだあとも、候補者達
はしばらく動かなかった。

周囲からは、歓声やら野次やらが飛び交っている。

「さあ、存分に殺しあえ!!」

「やっちまえ」

候補者のうち、ティリウスには最初から厳しい罵声が飛ぶ。

「引っ込め獣! お前なんかこの国ではお呼びじゃねえんだよ!」

「尻尾巻いてさっさとお家へ帰りな」

「あ、怖くて尻尾も出せねえか?」

しかしティリウスはどこ吹く風といった様子である。

「ウィリアム様——!! 貴方こそが皇帝にふさわしいわ」

「早くキス・キラをけしかけて下さいな」

観衆の、特に女性からの心証が一番いいのはどうやらウィリアムで
あるようだった。

だが、女性からの黄色い声援とは対照的に男性陣からは容赦ない野

次が飛ぶ。

「よっ、色男、そこにいるきれいな獣とよろしくやってんだろ？
獣の具合はそんなにいいのか？」

「お嬢さん方、残念だったなあ、あそこにいる男は獣じゃねえと勃
たねえんだとよ」

下品な野次も飛ぶが、ウィリアムもまた動じた様子はない。

さらに今まで皇帝陛下を敬う発言しかしてこなかった市民達は、ユ
リウス3世が候補者に戻った途端これも遠慮なく野次の対象にし始
めた。

「ユリウス3世――！ ご自慢の剣の腕を早く見せてみろよ――！」

「出来損ないの元皇帝さんよお」

「候補者が二人も出てきて怖気づいたか？」

観衆の手の平を返したかのようなその態度に、しかしユリウス3世
も動じずその場に泰然と立っていた。

そしてどれだけ経っただろう、それら歓声と野次のなかでまず動い
たのはティリウスだった。

自分の近くにあった板から手ごろな剣を取り、さっと構えた。

それに連動してユリウス3世の隣に立っていたレーニアも剣を取る。

「レーニア、その獣を殺せー!!」

「汚らしい獣め!! 細切れにされろー!」

最下部の貴族席からは、貴族が発しているとは思えないほどの汚い野次が飛ぶ。

貴族の獣嫌いの図が一目瞭然であった。

対して、最上部の獣の席からはティリウスに向けて大声援が送られる。

「我々の希望!」

「新たな時代の到来!」

「獣の皇帝陛下!!」

そんななか、ティリウスはユリウス3世の胴めがけて真っ直ぐに剣を突き出した。

その剣をすかさずレーニアがはじく。

二合、三合と打ち合い、お互いが後ろに飛びのいた。

と、その隙を突いてキスキル・リラが短剣をティリウスの背中めがけて投げつけた。

ティリウスは上体を前に投げ出しうつ伏せに倒れることで背後からの短剣をやり過ごした。

そしてそのまま強靱な体のばねを使って素早く起き上がったのである。

「さすが獣の王子！」

「手練を二人相手にしてもまったく動じていない」

「いいぞー！ キスキル・リラ！」

「レーニア、そのままその獣を倒してしまえ！」

観衆は早く彼らの血を見たくてうずうずしているようだ。

「派手な声援だな」

ウェルミナが片眉をあげながら呟いた。

場内ではしばらく獣同士の戦いが繰り広げられている。

だが、ショーとしては楽しめるものの、候補者達は未だだれも傷を負っていない。

「なあギルバート、この戦況、どう見る？」

ウェルミナは闘技場を見つめていたギルバートに話しかけた。

ギルバートはウェルミナに目をやり、少し思案すると、ゆっくりと口を開いた。

「そうだな……このある意味での膠着状態は妥当だと思う」

「そりゃなんで？」

「実力と条件が拮抗しているからだ」

そういうとギルバートは持論を展開し始めた。

「まず『無音の獣』であるティリウスはユウキアの花粉の影響により、通常よりも力を発揮できる状態にある。単独で考えたらあの面子の中では一番の有望株だ。次点でキスキル・リラ。あいつは契約者の獣のため、ユウキアの花粉の影響を受けることはないが、闘技場での全戦全勝の記録を持つ。いろいろな獣との融合も果たしているようだし、このなかでは一番戦い慣れているといっている。レーニアは獣としてはほかの二頭には及ばないものの、そこそこの実力はあると思っている。『統治者』という名の元、戦況を支配できれば勝算はあるのではないかと思っている」

「じゃあ、だれが勝つかはわからないってことか？」

「ああ、そういうことになるな。それと人間二人の実力はわからないが、ユリウス3世は先の皇帝を破っているため、実戦に関してはウィリアムよりも慣れているぶん有利であると思う。候補者単体で見れば、ティリウス、ユリウス3世、ウィリアムの順で勝敗が決まってくると思う。ただ、あの『エランディオールの弟子』が何の策略も講じずにこの場に来るとは考えられない。さしずめ、商人連合か、族長の甥当たりとなにか有効な取引でもしているのではないか

と思うのだ」

「おもしれえじゃねえか」

そういうとウエルミナはにいつと犬歯をむき出しにして笑った。

「へえ、だから、戦いの最中でもお互いに見合ってしまったてなかなか決定打を打てないのね。ねえ、ユリウス3世の言葉の力はどんなったのかしら？　今ここで使えれば最強なんじゃない？　ああ、でも宮殿から出たら効果はなくなるんだったわね」

私がそういうと、ギルバートが答えた。

「アンナ、そういった皇帝独自の力は多分、次期皇帝候補者が選ばれたときに消滅していると思われる。本来ならばあそこには純粹に生身の人間しか立てなかったはずだ。今回が異例尽くめといっても、さすがにその力が残っていることはあるまいよ」

「そうなのね」

自分がその力に散々振り回されただけに、あっけない幕切れだと肩透かしを食らったような気持ちでした。

「皇帝の呪縛を解いてもらうために金獣から血をもらったっていうのに、これって骨折り損かしら？」

私が首をかしげると、ギルバートがなだめるようにいった。

「いいや、そうでもないと思うぞ。金獣の血のおかげで、アンナは皇帝に限らず如何なる呪縛にも対抗できる体を手に入れたんだ。こ

れでアンナはだれにも縛られることはなくなる」

ギルバートがそういったとき、ウエルミナが「ん？」と眉をひそめた。

「なあ、それってお前達の絆には影響しないのか？」

「え？」

「契約者と獣の関係も言い換えれば呪縛のひとつなんじゃないか？
ということはその金獣の血を受け入れた時点でお前達の絆も切れるのが普通ってモンじゃないのか？」

一瞬なにをいわれたのかわからなかった。

私はぽかんとしたあと、体中の血がさあっと引いていくのを感じた。

「あ……うそ……」

私は内面の動揺をなるべく顔には出さずにウエルミナに聞いた。

「ねえ、そんなのってないわよね？」

ウエルミナは腕組みをしながらうーんと唸った。

「そのことを確認するとしたら、ギルバートが一度人間の血肉を喰い『妖獣』になってみることでわかるんじゃないか？ もしもそのあとアンナの血で元に戻るのだったら、あんたらはまごうことなく契約者と獣だ。それか、だれかほかの奴と契約を結び直してみるとか」

と、ウエルミナは突然なにかを思いついたかのようにぱっと顔をあげた。

「ギルバート、じゃあ今、試しに俺と契約してみるか？」

「ば、馬鹿なこといわないでよ……ギルバートはっ！ 私の獣、なんだから。それにギルバートを二度と『妖獣』なんかにはさせないわよ！」

私は気が動転していた。

どうしよう、私、あのときに我知らず自分からギルバートとの絆を断ち切っていたというの？

「絆が切れた感覚はない」

「え？」

「確かにウエルミナがいうのももっともだ。契約者と獣の関係が今まで思われていたように皇帝の呪であるならばそうなるのだろうと思う。しかし、これは推測なのだが、もしかしたら契約者と獣とは、人と獣が『融合』した新たな姿なのではないかと思うのだ」

ギルバートは穏やかな笑顔をこちらに向けた。

「人と獣の絆、新たな姿……？」

内心うろたえていた私はその言葉にほっと息をついた。

ギルバートのいうことなら信じられる。

「なかなか興味深いことを考えるじゃねえか。でもギルバート、いっぺん俺と契約を結んでみてくれよ」

「断る。俺はアンナ以外のものになるつもりはない」

ギルバートにはにべもなく断られたが、ウエルミナはまったく引く様子を見せなかった。

「なあそういわず、一滴でわかるんだからどうってことねえだろ？
それともお前、俺の獣になるのが怖いのか？」

天上の美女もかくやと思わせるような笑顔で微笑むと、ウエルミナは、今度は私のほうに体を向けた。

「なあアンナ、いいだろ？ アンナはギルバートがいった『人と獣の絆、新たな姿』ってのが信じられないのか？」

「……いいえ、私はギルバートがいったことなら信じられるわ」

「じゃあ決まり！」

ウエルミナは有無をいわずにギルバートの腕をとった。

「お？ 振りほどかれなかったってことは、あんたも承諾したととらせてもらうぜ」

そうしてウエルミナはギルバートの指先に素早くナイフを立てた。

すぐさま溢れ出る血をぺろりと舐めとる。

そのさまはまるで大型の猫のようであった。

ウェルミナは、今度は自分の人差し指にもナイフを立てた。

「ほれ、早く舐めてくれ」

ギルバートは僅かばかり嫌そうな顔をしながらウェルミナの血を口に含んだ。

「次はお互いの名を呼ぶんだったよな？ 『ギルバート・ファーガス・チェーン』 俺はウェルミナ・デイ・ヌミディアだ」

「ウェルミナ・デイ・ヌミディア」

数瞬時が流れた。

しかし、これといって変わった様子は見受けられない。

「……」

「……」

「……あーあ、こりゃ血の流し損だな」

ウェルミナはさほどがっかりした様子もなくそう言い放った。

「ギルバート？」

私が恐る恐る聞くと、ギルバートはたいしたことでもないとうような風情で答えた。

「大丈夫だ、なんともない」

ウエルミナはふっと息を吐くと後頭部で両手を組んだ。

「まあ、あわよくば俺が貴重な消えないギルバート・ファーガス・チェーンの契約者に、って思わないでもなかったけれど、世の中には分相応って言葉があるからな」

そういうとウエルミナはギルバートの肩をバンバンと叩いた。

「よかったじゃねえか。俺のおかげであんたらは正真正銘の契約者と獣ってのが証明されたんだからな」

そういつてどこまでも飄々とするウエルミナに対し、私は無然とした表情で声をかけた。

「一応、ありがとうとはいっておくわ。それと私にもナイフを貸して。今のでギルバートが『妖獣』になったらまったもんじゃないわ」

「はいはい、お安い御用で。ちなみに今回は俺が催促したことだから皆タダで結構。本来なら俺みたいな王族の血や持ち物はものすごく貴重なんだぜ？」

どこまでもがめついウエルミナであった。

私がギルバートに血の玉の浮かぶ指を差し出すと、ギルバートはそれを両手でふわりと包み、押し頂くようにして口に含んだ。

「あ……」

ちゅつと音を立てて指を吸ったあと、艶かしい視線を私に送ってきた。

「アンナの血は甘いのだな」

「あ、俺も♪」

「ええ?!」

いうが早いのか、ウエルミナは私の手を取り、そこに唇をつけた。

「なにすんのよウエルミナ?!」

ウエルミナはきょとんとした表情をつくったあと、人の悪い笑みを浮かべた。

「なにつて、味見? ああでも俺からしたら単なる鉄っぽい味だぜ。甘いつてのはあれか、愛のなせる技って奴なんじゃねえの?」

「もう! からかうのはよしてちょうだい!」

思わず顔を赤くしていうと、ウエルミナはけらけらと笑った。

「ははっ、功労者の役得だと思ってくれるとありがたい」

片手で頭を抑えてため息をつく私を見て、ますます面白そうに笑う
ウェルミナ。

「ウェルミナ、それぐらいにしておけ。二人が困っている」

従者のアルコが取り成して、ようやく笑いが収まったウェルミナは、
闘技場へと目を移した。

「おい、見ろよ二人とも。ユリウス3世とウィリアムが戦ってるぜ」
そういつてウェルミナが指差したほうに目をやると、ちょうど二人
が剣を合わせているところだった。

獣達が場内で華麗な舞踏を見せる傍らで、人間達のほうも戦ってい
たのである。

蠢く影 ●

ユリウス3世とウィリアムは数合打ち合ったあと、ガキンとひときわ大きく打ち合い、その場で鏢迫り合いを始めた。

ぎりぎりときしむ剣。

お互い一步も引かない。

日々鍛錬を積んでいたユリウス3世が剣技に手馴れているのはわかるが、それにウィリアムが肉薄しているのがどうにも解せない。

よくみると、ウィリアムのこめかみには青筋が幾本も浮かんでいる。

普通ならばこれだけ力を込めているのだから顔が赤くなってくるはずなのだが、ウィリアムの顔色は青白いといってもいいくらい透き通っていた。

「ほう、お前、ヌミディアの強化薬を使ったか」

ユリウス3世が呟く。

「だが、あれには副作用としてあとで体への強烈な反動がある。それをわかっていて服用したのか」

「こうでもしないと生身の私ではあなた方のような化け物相手には対抗できないと思いましてね」

「心外だな。ティリウスならばともかく、私は化け物ではなく、剣

技に通じるだけのただの人間だぞ」

そうして二人は剣をお互いに押し合って飛び去ると体勢を整えた。

ウィリアムは剣を、誓いを立てるかのように胸元で抱えた。

「私は私の願いのために、あなた方二人を倒させてもらいます。こんな千載一遇のチャンス、だれが逃すと思うのか」

それに対し、ユリウス3世は剣を片手で軽々と持ち、体の前で柔らかに構えている。

「なに、そう簡単にくれてやる命は持ち合わせてないぞ？ それに私にとってもこの機会は降ってわいた僥倖なのだよ。新たにギルバート・ファーガス・チェーンをつくることができる絶好の機会なのでね」

そういうと、お互い図ったかのように剣を打ち合わせ始めた。

キンキンと刃物がぶつかる甲高い音がする。

と、ユリウス3世がブンと大きく剣を振り抜いた。

とっさに自身の剣で防いだウィリアムだったが、そのあまりの速さと衝撃により、剣が手元から吹っ飛んだ。

「勝負あったな」

そういうとユリウス3世はウィリアムの心臓めがけて剣を突き出した。

きゃああという女性達の悲鳴が聞こえる。

瞬間、ウィリアムは上体をぐいと仰け反らせ、そのまま背面に宙返りをした。

ウィリアムは地面に着地すると、すぐに板のところまで走っていった。新たな武器、ボーガンを取る。

「これで元通りですね」

お互い余裕の笑みである。

「次はこちらから行きますよ」

ウィリアムは懐からなにやら大きめの袋を取り出すと、新たに手に取ったボーガンを空中に構えた。

袋をさっと空中高くに放り投げると、それをボーガンの矢で射た。

パアンとはじける袋。

その袋からは、銀色の粉がばらっと舞い降りてきたのである。

ユリウス3世の体にその粉がつく。

「なんのまねだ？　これはユウキアの花粉ではないか」

「ええ。ですがこのユウキアの花粉にはちょっとした細工を施しました」

そのユウキアの花粉はユリウス3世の髪や衣服、剣などに付着し、
払おうとするとべっとりとしたものになった。

「私は今、あなたにいわゆる『的』を張ったのです」

次にウィリアムが懷から取り出したのは赤黒い液体の入った瓶だった。

ウィリアムはその場で瓶を開けると、ボーガンの矢筒に瓶の中身を
どろどろと入れた。

「この矢であなたを射たら面白いことが起こりますよ」

「その前に、お前の矢は果たして私まで届くのかな？」

「今の私なら、あるいは」

そういうとウィリアムはユリウス3世に矢を向けた。

攻撃を察したユリウス3世は自身の剣を翻し、すばやく防御の体勢
をとる。

数瞬、飛んできたボーガンの矢をユリウス3世が払ったかに見えた。

しかし、剣と矢がぶつかった瞬間、それは起こった。

ユリウス3世が持っていた剣は、手元の部分を残し跡形もなく消え
去ったのである。

「なんだと?!」

驚愕するユリウス3世。

だが素早く我に帰ったユリウス3世は手の中にある剣の残骸をウィリアムに向かって思いっきり投げつける。

第二の矢を番える間、それをうまくよけ切れなかったウィリアムの頬には裂傷が浮かんだ。

ユリウス3世はすぐに新たな剣を手にとると、ウィリアムと向き合った。

「お前、今のはなんだ？」

「ああ、これは異界渡りの仕組みを利用した技です。成功すれば一瞬で勝負が決まります。ユウキアの花粉にこの血塗れた矢の雫が触れさえすればいいのですから。あなたがあの場所に馬鹿正直に突っ立って、ユウキアの花粉を被っていてくれてよかったですよ」

頬から血を流れるに任せて、ウィリアムは微笑んだ。

そのウィリアムに観客席から悲鳴と声援が飛ぶ。

「きゃー! ウィリアム様のお顔が!!」

「これがウィリアム様の力なんだわ!」

今度はユリウス3世にも声援がかかる。

「ユリウス3世―！ そのいけ好かないヤローを叩きのめしちまえ！」

「そのままあんたの華麗な剣技で首をぶった切ってくれー！」

試合開始から初めて血が流れたことで、観衆の興奮は一気に高まったのである。

「……ほう、では私がその矢を全て打ち落としたなら、形勢逆転だな」

「先ほどは手傷を負ってしまいましたが、今度はそうはいきませんよ」

そうして二人が見合ったときであった。

急に場外が騒がしくなった。

「なんだ?!」

「どうしたんだ?!」

ざわざわとした動揺が一気に観衆へと伝わってくる。

「うわああ！」

「ひいっ！ 化け物！」

そのような声が聞こえたかと思うと、貴族席の近くにゆらりとなにかがあらわされた。

それは一見すると半透明の黒い影のようにも、なにかの獣のようにも見えた。

体中がどす黒い粒子でできているかのようにであり、ぼこりぼこりと脈動するそれは、その体内に人を取り込んでいた。

それは影の侵入を阻もうとした兵士達であるようだった。

兵士達は影の中でもがき苦しんでいたが、やがて苦悶の表情を浮かべながら動かなくなった。

「ひいっ」

それを近くで見ていた貴族の婦人が思わず声をあげる。

しかし影はそれを気にした様子もなく、真っ直ぐに場内へと進んでゆく。

その影はそれ一体だけではなく、いくつもいくつも連なって入ってきた。

どの影の中にも、人や獣が取り込まれている。

牛程度の大きさ程度のそれらは、通路をひたひたと進み、柵をよじ登り、ついに場内へと入った。

候補者達は、影の存在に気付くと、お互いに間合いを取りながら戦闘を中止した。

影達は闘技場の各入口から、あとからあとからぞろぞろと入ってくる。

その様はまるで巨大な蟻の行進のようであった。

影達の標的は候補者達であることが否応なしにわかった。

候補者達はすぐに中心に集まったが、お互いを牽制することは忘れなかった。

「あれはなんだ？」

ティリウスがいぶかしげに呟く。

「なんででしょうね」

ユリウス3世を背後に庇いながら、レーニアがそう答える。

「どちらにせよ、我々を狙っているものと見て間違いないだろう」

ユリウス3世がそういった。

「ウィリアム、この臭いとこの気配、昨日宿で感じたものと一緒ですわ」

キスキル・リラがめずらしく怖気をふるような声を出した。

キスキル・リラと並びながら、その影達を観察していたウィリアムははたとなにかに気付いた。

「あれは……もしかして間引きされた獣と狂った獣の死骸が『融合』したもののなんじゃないか」

「どういことだ」

ユリウス3世が問う。

「あの影のようにも獣のようにも見える姿、あれはこの間倒されていた狂った獣にそっくりだ。黒い粒子は間引きされた獣の残骸と似通っている。推測だが、この事態は灰色の巫女達がいつていた『この世界は円環からはずれた』ということに関係しているのかもしれない」

「どちらにせよ、これを倒さないことには選定の儀は続けられないな」

ユリウス3世の言葉に候補者達は頷いた。

「一時共闘だ」

観客達は彼らが共闘する姿勢を見せたことで僅かばかり動揺した。

「皇帝選定の儀はどうするんだ？」

「今そんなときじゃねえだろ！ あの変なものが入ってきちゃったんだから」

ティリウスが皆に聞く。

「どう攻める？」

「こうも数が多いとと攻めあぐねますね」

レーニアが思案しながら答える。

「それにあれらは生き物を取り込む性質を持っているらしい。不用意に近づけば中に囚われる可能性があります」

「矢で射るか」

「そうですね、できれば中・遠距離の武器が戦いやすいでしょう」

そういうと、各々弓矢やボーガン、鉄球や短剣を持ち寄った。

まずレーニアが弓に矢を番えるともものすごい勢いで次々と飛ばしていく。

それらの矢に当たった影は分離し、ぼろぼろと崩れ落ち残骸と化した。

「分解すれば戦闘能力はなくなり、元の残骸に戻るようです」

次にキスキル・リラが短剣を投げる。

それは獣の部分の眉間に深々と刺さった。

獣は断末魔の叫び声をあげるとその場に倒れ、これもまた分解した。

「獣の姿の部分には剣も効くようですわ」

「一体ずつなら各個撃破することも可能であることがわかりましたね」

「それでは、お互いの粹を尽くして戦うとするか」

それから、怒涛の攻撃が始まったのである。

あるものは弓矢で、あるものは砲丸、短剣、果ては長剣、棍棒まで、使えるものはなんでも使って、彼らはその影達を各個撃破していた。

影達は候補者達を取り込もうとしていたが、彼らの俊敏な動きについてこられるものはいなかった。

だがしかし。

如何せん数が多い。

候補者達の顔に少しずつ疲労の影が忍び寄っていた。

「やったか?!」

最後の一体をティリウスが倒した。

その瞬間、会場はしんとなった。

観客達は固唾を吞んで見守っている。

「どうやら、全て片付けたようですね」

候補者達がそうほっと胸を撫で下ろしたそのとき、影達が一斉にぼこぼこ振動し始めた。

影達は急速に中央に寄り集まると、ものすごい速さで融合し始めた。

「なっ！　　どういうことだ?!」

全ての影達が融合し、三階建てのビルほどの大きさになると、融合はそこで止まった。

それはもはや影というよりも巨大な怪物といったほうが正しかった。

「倒したと思ったら、次はこんなに大きいものを相手にしなければならんのか」

ユリウス3世がため息をついた。

「なんとかあれらを分断できればいいのだが」

「あんなに大きいと短剣や矢ではびくともしなさそうですわ」

「ここにある使えそうな武器はあらかた使い尽くしてしまったし、どうしたものか」

口では皆余裕そうに振舞っているが、彼らの息は上がっている。

候補者達の限界が見えてきたのである。

と、そのところに、外から声がかかった。

「ユリウス様！！ その怪物は火を忌避します！！」

声のするほうを見ると、そこに立っていたのは手に松明を持ったセルビアと、スコルであった。

「外は一進一退の攻防です！ 我らの力足りず、闘技場内にこれら怪物を引き入れてしまいました」

セルビアはユリウス3世に向かってさらに声をかけた。

「これ以上の侵入は我々が防いでおりますが、それもどれだけ持つかわかりません、早くお逃げください！」

そういうと、セルビアは近くに座っていた貴族のトーガを引っぺがした。

「な、なにをする?!」

「命に代えはありません!!」

セルビアはその布をもつと、だっと駆け出し、柵を越えて場内へと踏み入った。

候補者達に今しも近づいてこようとしていた影は、火の気配を感じ

るやそれを忌避しようと移動し始めた。

「逃がしません！」

セルビアは布を松明に撒きつけて火の威力を増大させると勢いよく投擲した。

火の玉となったそれは一直線に怪物へとぶつかった。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア」

怪物は悲鳴をあげ、体を揺らしのたうった。

しかし、その火のついた部分が分解されると、僅かばかり小さくなった怪物はまた元の体勢に戻った。

「この程度の火では足りないか」

悔しげに吐き捨てたセルビアであつた。

と、会場がなにやら騒がしくなった。

観衆がざわざわとしている。

それらの声はあるひとりの言葉をきっ
かけに途端に大きくなった。

「おい！ 皆で燃えるもと油を持ってくるんだ！」

その声を聞いた観衆は、我も我もと加勢し始めた。

「こいつを燃やしちまおうぜ！」

それは今まで人事のように怪物と候補者達の戦いに観客席で固唾を呑んでいた観衆とは思えないほどの熱気であった。

「俺達の国の皇帝を決める儀式をこんな怪物にぶち壊しにされてたまるか！」

「おう、候補者達が共闘できて、俺達ができねえはずはねえ」

そういうと、観衆はうおおと雄叫びをあげながらこぶしを突き上げた。

「いくぜ皆!!」

それは観衆が一丸となった瞬間であった。

メリトウスの人々 ●

老いも若きも、男も女も、人も獣も。

貴族も市民も獣も関係なく、奮闘する姿がそこにはあった。

「近くの宿から油をもらってくるぜ！」

「俺は松明になる材木を集めてくる」

こういった分担作業が得意なのは市民であった。

普段から職業に従事しているものは自分の役割をしつかりと把握し、それに沿って動くことができている。

怪物からの襲撃は武官や兵士が守っている。

外にいる怪物と武官達との戦闘をかくぐって材料を取りにいったのは市民と獣であったが、それに協力したのは意外にも貴族と文官であった。

「我々の持ち物を使うがいい。出し渋っているものにはこの指輪や首輪を渡してなんとしてでも持ち帰るのだ」

「わかってるぜ。それと、こんなときにあんたらから渡された持ち物をねこばはするほど落ちぶれちゃいないんでね」

そうして、あれよあれよという間に闘技場の中には大量の油の樽と、火種が用意されたのである。

「へえ、この国のやつらも、なかなかどうして、捨てたもんじゃねえな」

ウエルミナが腕を組みながら感心したようにいう。

「さっきまでは、この国のやつらの容赦のなさと口の悪さに少しばかり閉口していたところなんだがな。見事じゃねえか」

私はこの国の人々の迅速さと団結力に少しばかり驚愕し、また、少しだけ感動してもいた。

「だって、この国の人々は、三ヶ月ごとに来るユウキアの花粉の脅威と、それが終わったあとの祭りの準備でいろいろと手馴れているもの。この国の環境と風習によって、人々は日頃から知らず知らずのうちに有事の際の訓練をしていたのね」

「ああ、そのようだな」

ギルバートも納得したようにいい、私の目を見つめた。

「アンナ、俺も加勢する。俺の力を今使わないでいつ使うんだ？」

ギルバートの目は真剣そのものだった。

私はなぜだかその目を見て泣きそうになった。

「ええ、いつてらっしゃい」

「いつてくる」

そういうが早いか、ギルバートはウェルミナに私を預けると柵を飛び越え場内へと入った。

今まで柵の外に待機していたスコルもギルバートの後を追って場内へと駆けた。

そのギルバートとスコルの飛び入り参加に気付いた観衆は一段と沸いた。

「見ろよ！！ 銀の獣のお出ましだ！！」

「純白の獣のスコルも一緒だぜ！」

「いけー！！ この国を守ってくれ！！」

「ギルバート・ファーガス・チェーンの力を生で見られるぞ！！
こりゃ後の語り草だ」

「俺達が生きてりゃな」

「馬鹿、死ぬはずねえだろうよ、あんな面子が揃ってて」

ギルバートは獣の姿になって怪物と対峙した。

銀の毛皮を奮い立たせ、怪物に対し盛大に威嚇している。

「ギルバートか、ちょうどいいところに来た」

ユリウス3世がいう。

「我々は少しばかり疲れたのでな、あとは任せる」

そういうとユリウス3世はギルバートに道をあけるように数歩うしろへ下がった。

「期待していますよ」

レーニアが声をかける。

「わたくし、一度あなたの戦い方を拝見してみたかったですの。危なくなったら手助けして差し上げてもよろしくってよ」

キスキル・リラが楽しそうにいう。

「ギルバートか、頼もしいな。俺はまだ動けるから、お前のサポーターをしよう」

ティリウスがそういうと、あっという間に巨大な豹の姿になった。

「ギルバート、怪物の目を狙え。動きを封じて市民達が待っている壁際まで追い詰めるんだ。そうしたら、市民達があの怪物に油をかけてくれるだろう」

ウィリアムがそう助言した。

スコルはセルビアの元に走り寄ると、そっと体を寄せた。

セルビアはちょっと驚いた顔をする。

今までスコルがこのような仕草をしてくることは稀であったからだ。スコルとて、今まで外の怪物と対峙していたのだ、疲れていないわけがない。

だが純白の獣はそんな素振りを一切見せず、ギルバートの隣に並んだ。

「ギルバートよ」

スコルの声は伸びやかな低音だった。

「お前の邪魔にはならないようにしてやる。あいつをひきつけておくものが必要だ。俺がやる」

ギルバートを始め、その場にいたものは皆スコルがしゃべったことに驚いていた。

「お前……わかった」

同じ狼という個体、しかも実戦慣れしている彼らにとってそれ以外意思の疎通は不要であった。

瞬間、スコルはだっと駆け出すと、怪物の背後に回りこんだ。

スコルはものすごい跳躍を見せると、怪物の背に飛び乗り、獣の部分に噛み付いた。

「グアアアア!!」

放物線を描いて、スコルの体は宙に舞った。

そのまま地面に激突すると、ゴム鞠のようにボン、ボンと二・三度跳ね、スコルは場外で動かなくなった。

「……!!」

純白の毛皮を真紅の血に染めたスコルは、そのままピクリともしなかった。

「……スコル？」

セルビアの呼びかけにも一切答える素振りを見せない。

「スコル……？」

セルビアの灰色の瞳が大きく見開かれた。

「いやああ!!」

「ちっ！」

ティリウスはそういうと怪物に向かっていった。

あともう少しで壁に密着し、そうしたら油をかけられるのだ。

ティリウスは怪物の獣の部分に体当たりした。

しかし、怪物はびくともしない。

ティリウスは、今度はギルバートがいる怪物の頂上へと向かった。

「まだか?!」

ギルバートが叫ぶ。

「まだだ、だがあともう少しで壁に密着する」

ギルバートは怪物の頭上で馬ほどの大きさになると、怪物の鼻っ柱にがぶりと噛み付いた。

「ガアアア!!」

ギルバートはそのままの体勢で、体から何本も銀色の針を出した。

剣山のような格好になったギルバートは、その針を怪物の体内へと深く深く埋める。

怪物はそれを取ろうと体の両脇から腕のようなものを出した。

それを顔にべちゃりとくつつける。

ぎりぎりど、ギルバートと怪物の攻防が続く。

しかし徐々にギルバートの体がはがされ始める。

ついに、怪物の鼻からギルバートがはがされてしまった。

しかも怪物はギルバートを取り込もうと、握った腕を自身の体にぐいと押し付けた。

そのまま怪物に取り込まれるギルバート。

「ギルバート!!」

私は思わず叫んでいた。

怪物の体内に取り込まれたギルバートは途中で気を失ったようにふわふわと浮かんでいた。

「いやあああ!」

観客席で私は絶叫した。

脳裏に苦悶の表情を浮かべながら死んでいった兵士の顔がよぎる。

しかし、ギルバートは、私の声が聞こえたのかもしれない。

はっと目を開けると瞬時にモグラのような形に変化し、怪物の体の中を掻き分け始めたのだ。

泳いでいるようにも見えるその姿はなんとも不恰好であったが、怪物の体内の粒子を素早く、力強く掻き分け、ごぷりと怪物の体から顔を出したのである。

そのギルバートをティリウスがささずくわえて引きずり出した。

「お前、そんな姿にも変化できたのか」

「ああ。俺はアンナのためならばなんにでもなれるのでな」

二頭はにやりと笑ったようだった。

怪物は目が見えないまま二人を探している。

だが、すぐ近くににいるにもかかわらず二人の気配をつかめないようだ。

「ティリウス、『無音の獣』の真骨頂だな」

中央で彼らの様子を見守っていたウィリアムがそう呟いた。

そして彼は懷から小瓶を取り出した。

「ギルバート！！　これを受け取れ！！」

ウィリアムはギルバートに向かってその小瓶を思いっきり投げたのである。

怪物の足元にいたギルバートはそれを口で受け取った。

「その瓶の中身を怪物の体内へ！！」

その声と、瓶が飛んでくる気配で二頭的位置を察知した怪物は二頭を押しつぶそうと近づいてきた。

乗り上げてきた怪物をさっと避けるティリウス。

ウィリアムのその言葉を聞いたギルバートは、地面にもぐり、下から怪物の体内へと侵入した。

怪物の体内をものすごい勢いで掻き分け、怪物の中心へと向かうギルバート。

そして怪物の中心まで来ると、その瓶の蓋を空けた。

瓶の蓋が開き、中身が出たその瞬間、怪物は苦悶の表情になると、その場で動きを停止した。

「今だ!!」

市民達が「せーの」という掛け声とともに油を怪物にぶちまけ、松明を何本も投げ入れた。

怪物の体に一気に火が回る。

「ギルバート!!」

ギルバートはすぐさま脱出し、地面に降り立った瞬間元の狼の姿に戻った。

「ガアアアアアア!!」

怪物は盛大な悲鳴をあげると、火達磨になったまま闘技場内を駆け回った。

ゴオオオと燃える炎の音がし、油と生き物の燃える臭いがした。

ドスン、バキンという音とともに、場内の柵や壁がいくつも壊される。

「闘技場が壊れる!!」

だが人々は非難せず、その成り行きを見守っていた。

怪物は最後に断末魔の叫び声をあげるとその場で動かなくなり、やがて急速に炭化したのであった。

場内に一陣の風が吹いた。

その風は思いのほか強く、炭化した怪物の一部がぼろりと崩れ落ちたのであった。

その瞬間、しんと静まり返っていた闘技場は大歓声が巻き起こった。

「うおおお!!」

「やったぞー!」

「怪物を倒したんだ!」

怒涛のような雄叫びが聞こえる。

私はいつの間にか詰めていた息をふうつと吐き出した。

「よ、よかったあ」

へなへなとその場に座り込んだ私の背中をウエルミナがぽんぽんと叩く。

「よかったなアンナ、ギルバートが無事でよ」

「ええ、ええ」

そういいながら私の目からは涙がぼろぼろと溢れ出ていた。

そんななか、セルビアが壊れた柵を飛び越え、スコルの元へと向かう。

「スコル!!」

セルビアの目からは大粒の涙が零れていた。

「私を置いていくなんてあんまりだわ！ 子供のころ、ずっと一緒
って約束したじゃない！」

「死の侍女」が人前ではじめて見せる涙であった。

スコルは動かない。

候補者達もスコルの元に集まってきた。

そのままその場に跪いたセルビアと動かないスコルの光景を静かに
見守る。

セルビアはスコルの体にそっと手を触れる。

その体はまだ温かった。

「うそでしょう？ あなたがいなくなるなんて考えられない。あなたがいたから、私は生きてこれたのよ」

「お姉さま! !」

観衆を掻き分けて、セルビアの従者のカエキリアがセルビアの元に駆け寄った。

セルビアはスコルの体をいつまでも撫で続けている。

まるでそうしていれば、いつかはスコルが起き上がると確信しているかのように。

「お姉さま、お姉さま、もういいでしょう？ スコルを静かに眠らせてあげましょう」

そのままセルビアを抱いたカエキリアは子供をあやすようにセルビアに声をかけた。

その場にいたすべての人が、スコルに対して黙祷を捧げようとしたそのとき。

スコルの腹がぴくりと上下した。

「スコル？」

信じられないというように目を見開くセルビア。

スコルが息を吹き返したのだ。

「スコル!!」

だがスコルの脈は弱い。

このままではすぐに息を引き取ってしまう。

「どいてくれ」

そういつてセルビアの隣に現れたのは獣のギルバートだった。

「俺の血を分けてやろう。俺の血と『融合』すれば、あるいは助かるかもしれない」

そういうとギルバートはさっと自分の腕を噛み千切った。

セルビアがスコルの頭を持ち、口元にギルバートの血を流す。

スコルの口元からはぼたぼたと血が垂れているが、それでもお構いなくセルビアとギルバートは血を流し入れ続ける。

「お願い、生きて」

血を飲ませては気道を確保し、飲ませては気道を確保するという作業を繰り返す。

そうしているうちに、スコルの体がびくりと大きく揺れた。

「融合」が始まったのだ。

ぼこぼこ体が脈動し、体内で新たな物質がつくり変えられているようである。

スコルの頭を自分の膝に乗せたまま、セルビアはじっと待っていた。

そしてどれくらいたっただろう。

スコルの腹が柔らかく上下した。

そしてその呼吸はその後も安定して続いた。

「……どうやら、助かったようだ」

ギルバートがほっと息を吐いた。

その瞬間、周りに集っていた人々から安堵のため息がもれ聞こえた。

さらにあちこちからぱらぱらとした拍手の音が聞こえ、やがてそれは盛大な拍手と歓声へと変わった。

そしてその拍手と歓声はいつまでもいつまでも鳴り止むことはなかったのだった。

終わりと始まり 1

——私とギルバートは久方ぶりに自分の屋敷へと戻った。

屋敷の中は召使のカルナとソルスがよく働いてくれているらしく、綺麗に整っていた。

「おかえりなさいませ、アンナ様！ ギルバート様！」

私達が門をくぐると、カルナが、その黒目がちの大きな目に涙をいっぱい溜めながら、今にも抱きつかんばかりの勢いで出迎えてくれた。

しかし勢いよく走ってきたカルナははっと我に返り、私の一步前で立ち止まると、そんな自分の行動をもじもじしながら恥じた。

「あのっ、そのっ、大変失礼いたしました、わたくしったら、アンナ様達が無事お帰りになられたものだから、つい……」

可愛いなあとと思った私は微笑むとカルナをふわりと抱きしめた。

「あっ！ アンナ様?!」

私は子供にするようにゆっくりと背中を撫でながら、落ち着いた声で話した。

「心配をかけてごめんなさいね。もう大丈夫だから、ね。ただいまカルナ」

「はい……」

顔を真っ赤にしながらおろおろとするカルナだったが、私の声にやがて安堵したのか、その大きな目からぼろぼろと涙を溢れさせたのだった。

「え、アンナ様達は、ダキアへ行くのですか？」

カルナがお茶を入れる手を止めながら私にそう聞いた。

「ええ、そうよ」

二階へ上がり、簡単な荷造りを済ますと、私達は階下へ降りてカルナ達からの給仕を受けていた。

「今回のことで、あの闘技場でいくつか決まったことがあるの。そのひとつが力の分散。私達はティリウスと一緒にダキアへと赴くことになったの。それで、本題なのだけれど、私達は、あなた達にも一緒にダキアへついてきてほしいと思っているの。駄目かしら？」

私がそういうと、カルナはその大きな目をさらに見開いて驚いた。

「私達も、一緒に、ですか？」

「ええ、迷惑だったかしら？」

私が内心恐る恐るそう尋ねると、カルナはふるふると思いつきり首

を振った。

「いいえ、いいえ！ ……わたくしはこの国の生まれですので、ダキアがどういったところかはよく存じておりません。ですが、わたくしは今回のことで心に決めたことがあります。アンナ様から任を解かれるそのときまで、アンナ様方が行かれるところへどこへなりともついていきたいと思っていたのです。迷惑だなんてとんでもありません！」

カルナはこぶしをぐっと握りながら少しばかり体を前のめりにしてそう話した。

「ソルスはどうするのかしら？」

ソルスはしばらく考えたあと、耳に心地よいアルトの声で答えた。

「自分もカルナと同じ意見です。むしろ、ついていかせて下さい。これは自分の願いです」

普段自分から要望をいわないソルスが、自分の意志を明確に話したことに、私は驚きつつも喜んだ。

「よかったわ、私はあなた達のことを家族のように思っていたから、一緒についてきてくれたらいいなって願っていたの」

私がそういつて微笑むと、カルナはソルスに小走りで近づき、その両手をぎゅっと握った。

「よかったねソルス！ これでまた一緒にいられるねっ！」

カルナはふわふわとしたボブを揺らしながら、顔に似合わない怪力でソルスの手をぶんぶんと振った。

ソルスは困ったような顔をしながらも、その手を離すことはなかったのであった。

——それは闘技場での出来事まで遡る。

人々が皆で一丸となって怪物を倒した歓喜に沸くなかでのことだった。

候補者達はなにを思ったのか、お互いに目配せし合って頷くと、きびすを返し、ひとり、またひとりと場内へと戻っていった。

ティリウスが、ウィリアムが、ユリウス3世が。

レーニアも、キスキル・リラも続いて足を運ぶ。

彼らのその動きに気付いた観衆は拍手と歓声をやめ、一瞬しんとすると、次にざわざわと動揺し始めた。

「おい、これからまた選定の儀を続けるってのか？」

「闘技場が壊れたってのに？」

「この惨状じゃあ、呪が機能しないんじゃないか？」

「候補者達は皆あの怪物のおかげで疲労困憊だろう？ 日移してもいいんじゃないか？」

「そうですわ！ なにも今、皇帝選定の儀を続ける必要はないのでなくて？」

そんな声に構わず、候補者達は闘技場の中心に集まった。

そしてその場で観衆が静まるまで待機した。

観衆はしばらくざわざわとしていたが、候補者達はその場で動かないのを見て取るとやがて静かになった。

その期を見計らって、最初に口を開いたのはユリウス3世だった。

「私は、皆にいいたいことがある」

ユリウス3世のその声は舞台役者だといっても十分通用するようなよく通る声だった。

「どうか聞いて欲しい」

それは皇帝という立場ではありえなかった観衆への嘆願だった。

「皆も今日にした通り、この国には、いや、この世界には我々にとって新たな脅威が現れた。それは我々が今倒した怪物そのものだ。あの怪物は人も獣も関係なく、生きとし生けるもの全てを取り込む恐ろしい怪物だ。どうしてあのようなものが生まれたのか。皆も気

付いているとは思いますが、それはこの世界が今まで歩んできた道から外れ、新たな道へと踏み出そうとしているからこそ起こった現象なのだ。皇帝であった私がギルバート・ファーガス・チェーンを手に入れられなかったことも、この国に三名の皇帝候補者が現れたことも、モネの村におり、我々を見守ってくれていた灰色の巫女達が消えていったことも皆その前兆であったと思っている。それがよいことなのか悪いことなのかは今この場では判断できない。だが、我々には！ 我々には力がある！ これから起こりうる事象に対応し、それを克服する力が我々にはあるのだ！ それをたった今我々是我々自身の手で証明したのだ！」

言葉の拘束力がなくとも、ユリウス3世のその言葉はその場にいた皆に響いていた。

「幸いこの場には各国の代表者が集まっている。ダキアの王子とヌミディアの王族が。私はこれより各国の代表者に和平条約を申し入れ、手を取り合ってこの難局に立ち向かっていくようお願い申し上げるつもりだ。それがこの国で皇帝として努めたもののけじめだと思っている」

長い台詞をいい終わると、ユリウス3世は観衆の反応を待った。

観衆は、最初は静かに話を聞いていたが、半信半疑といった様子であった。

「おい、皇帝陛下でもない人間がこのようなことをいってもいいのかよ？」

「そうだよなあ、まだ選定の儀は終わっていないのに」

「まだ皇帝気取りか？」

「だがしかし、ユリウス3世がいうことも最もだ」

次に口を開いたのは巨大な豹の姿のティリウスだった。

「我がダキアはダキア独自の道を歩む。この国の、特に貴族の獣嫌いは根深いものがある。そのため、我らは人の国に不用意に近づかないようにすることを約束しよう。それは俺が死ぬまでだ。俺の首に嵌っているこのユウキアの枝にかけて誓う。それは今、人も獣も関係なく、この事態に対処せねば、我らの未来はないと感じているからだ」

ティリウスのこの言葉にも、賛否両論が分かれた。

「獣のいうことなんて信用できるか」

「そうだそうだ」

「だが、獣自体は信じられなくとも、あの獣の王子個人ならば信じることができるんじゃないか？」

「そうだな、なにせ、俺達と一緒に怪物を倒した仲間だもんな」

ひとりと一頭の発言を見て取ったウィリアムは、しばし熟考したあとこのような提案を出した。

「この国の『壁』は、次の皇帝候補者が決まるまでは機能している。言い換えれば、私達が皇帝候補者であるかぎり、この国の『壁』は消滅しないということだ。それならばこうしてはどうか。ユリウス

3世がいったように、国同士で暫定的な和平条約を結び、この国の皇帝を選ぶのを先に延ばしてみてもいいだろうか。この国の仮の皇帝はユリウス3世に勤めてもらい、私はヌミディアへ行き、ティリウスはダキアへ帰るといふことだ。我ら三名が現れたのだから、これから皇帝候補者が出てくる可能性はある。だが今、ここに三名をもって力の分散をしてみてもどうかと私は提案する」

ウィリアムのこの提案には人々はざわめきでもって返した。

「力の分散っていったって、どうするんだ？」

「ウィリアム様がヌミディアに行かれるのなら私もついていこうかしら」

候補者達はそれぞれの発言を聞き、また頷いた。

ユリウス3世がまた口を開いた。

「皆、このことを忘れないで欲しい。この世界に新たな脅威がひとつ増えたのだ。我々は一丸となってそれに立ち向かわねばならない。そのために、ユウキアの枝に選ばれしものを、それぞれの国の使者とするといっているのだ。そして、それを受け入れることがこの国の人々にはできるはずだ。獣と共存し、迅速に怪物を倒した我々ならば！」

ユリウス3世の後押しに、観衆はだんだんと事態が飲み込めてきた。

「そうか、つまりあれだな。俺達は寛大な心でもって、この国の未来を、あの候補者達に託すべきときがきたってことなんだな」

「獣のことを完全に受け入れたわけじゃないけれど、それでも獣という存在は、この国の人々や俺らにとっていろいろと役に立っているもんな」

「獣を虐げればまたあの怪物が生まれる。これは俺達に獣との関係を見直せっていうことなんじゃないか」

「獣にとっても、『妖獣』になっちゃったらあの怪物に変化しちゃうってわけだし、まともな獣なら不用意に人を襲ったりはしなくなるはずだ」

「それに、きっとダキアの獣の王子がそれをさせないと思うぜ」

人々は愚鈍でも馬鹿でもない。

与えられた事柄に対し、求められればしっかりと考え、自分なりの結論を出せるのだ。

そして、観衆の導き出した答えはこうであった。

「この国の皇帝は呪の力を持たないが、それでよいではないか。今までどおり祭りを続ければ、力は供給され、『壁』は機能し続けるのだから」

「皇帝候補者が使者としてお互いを監視し合えば、不用意な争いだって避けることができる」

そしてひととき大きな声が観衆の間に巻き起こった。

「我々はこの三名の候補者の提案を受け入れる！」

その瞬間、この世界は新たな道へと一步踏み出したのであった。

「人と獣がこういうふうに手を取り合うなんて、なんだか夢でも見ているみたいだわ」

私は奮い立っていた。

なんだかこれが現実ではないかのようだ。

私の隣にいたウェルミナは候補者達の演説を聞き、面白いものを見たとしてもいうような顔をした。

「あいつら、うまくやりやがったな。そうか、俺達ヌミディアの使者はウィリアムってことか。ユリウス3世のやつめ、それで強制的に我がヌミディアの権力争いを終わらせるつもりだな。今後権力はウィリアム達のほうに譲渡されることになるうが、それは俺らがさせねえよ。自国のことだもんな。族長の甥の一派は、それはそれで大変だろうな。なにせウィリアムはこのメリトウスの皇帝候補者でもあるんだから。少なからずメリトウスの影響を受けるだろうよ」

そういうと、ウェルミナは場内へと歩を進めた。

と、その手は私の服の袖を握っている。

「ウェルミナ？」

「ほら、ぼけっとしてねえで。これからの話はあんたも当事者になるんだからな。むしろこれからがあんたの出番だ。場内に行くぜ」

私ははっと我に帰ると、姿勢を正した。

「ありがとうウェルミナ。いつ出て行こうかと思案していたところだったの」

そういうと私はセルビアとスコルに付き添っていたギルバートを呼んだ。

獣のギルバートの前足はすでに手当てがされており、びっこを引くようなことはなかった。

「私達の出番よ」

「ああ、行こうアンナ」

そうして私とギルバートとウェルミナは場内へと向かったのだった。

終わりと始まり 2

私はギルバートを引き連れて場内へと入った。

貴族には顔を知られているものの、市民達にはあまりなじみがなかったようで、「だれだあれは」というような声がかかる。

なかには「あ、あの人、この前の祭りで見たことがある」などと覚えてくれる人もいたが、大半は初見のようである。

私は背筋を伸ばし、しっかりとした足取りで場内中央へと向かった。

そこにはこの世界を担うトップがずらりと揃っていた。

私は中央へ行くと、そこにいる候補者達の顔を見渡した。

彼らは一様に私に目を向けている。

そう、次は自分の番なのだということがわかった。

ギルバート・ファーガス・チェーンの契約者としての私の義務。

私はなるたけ声を張り上げた。

「私は、ギルバート・ファーガス・チェーンの契約者であるアンナ・タイラというものです。私からも、皆さんに宣言することがあります」

観衆は突然現れた銀の獣の契約者の動向に注目しているようだ。

「先ほど出た力の分散の話ですが、私の獣であるギルバートの力を、ほかの二国にも分けたいと思います」

私がそういったとき、場内がざわめいた。

「銀の獣の力を分けるだど？」

「なんてことをするんだ?!」

「それじゃあこの国の守りはどうするんだ」

私は観衆がざわめくに任せた。

やがてそれが静まってくるのを見計らって、私はまた言葉が続けた。

「これは力の減退ではなく力の底上げです。ほかの二国にもギルバートの力を分け与え、この三国で、怪物からの脅威に対抗していくというのです。現に先ほど、この国の秩序の代弁者であるセルビアの獣のスコルには、偶然ではあるもののギルバートの血が分け与えられました。スコルはギルバートの血と融合を果たし、新たな力を得ることになるでしょう。さらに私はヌミディアに渡ることになるウィリアムの獣のキスキル・リラにもギルバートの血を分け与えるつもりです。この国にはセルビアの獣のスコルが、ヌミディアにはウィリアムの獣のキスキル・リラがそれぞれ守りの要として立つことになるでしょう」

「それじゃああなたは どうするんだ？」

観衆から声がかかる。

「私とギルバートはこれからダキアへ行き、そこで守りの要としての生涯を送ることとなるでしょう。我らが三国を守っている限り、それが怪物に対抗する力となるのです」

そういうと、私は一呼吸置いた。

「これがギルバート・ファergus・チェーンの契約者である私にとつてのファergus、『人間の選択』という意味です」

それを聞いた観衆は一様に唸った。

「ううむ、力の底上げか……」

「確かに、お互いが同等の力を持っていれば、争いは起こらないだろう」

「こう考えてはどうだ、我々は自分の国の力を分け与えることによつて、頼もしい同盟国を手に入れることとなった、と考えては」

「使者と守りの要か」

思案する観衆であつた。

「いいのかアンナ？」

ギルバートが少しばかり不安げな表情で私に聞いてきた。

「確かに俺の群れはダキアに渡っているし、あちらにはフィリッポ

もいる。だが、アンナまでダキアで生涯を送る必要はないと思うぞ。アンナは元いた世界に戻ることもできるのだぞ？」

しゅんと耳を垂れ、上目遣いに私を見上げてくるギルバートの姿を見て、私は思わず可愛いと思ってしまった。

「はあ……」

わざとらしくため息をついた私は、腰に手を当てると、ギルバートを優しく説教する体勢に入った。

「なにいつてるのよギルバート。確かに、元いた世界には大切なものがたくさんあったわ。大好きな人たちや、読みたかった本や漫画、海外にだって行きたかったし、食べていなかった美味しいものもたくさんある。……でもね、私にとってはそれと同じくらい、ううん、ギルバート、あなたがいるから、この世界は私にとって大切なもの。わかるかしら？」

「……」

「わからないようだったら何度でもいいってあげる。私はギルバートのことが大好きなの。愛してるの。あなたがいない世界なんてもう考えられないの。死が二人を分かるときまで、いいえ、できるならば死んでからだってずっとあなたと一緒にいたいと思っているんだからね？」

「……！」

ギルバートは私を見上げるとキュンと一声鳴いた。

「アンナは……、やはり俺の契約者だ」

「当たり前でしょう？」

「俺も、俺もアンナのことを愛してる！」

「あら、じゃ、相思相愛ね」

「この場で今すぐアンナを自分の腕で抱きしめたい」

「こら、なにをいうかと思えば」

「やらいでか！ もう周りの視線なんて関係な……」

「怒るわよ？」

「すみません」

ギルバートはきゅうと小さく唸ると、その場で反省したように伏せの姿勢をとった。

ギルバートが大人しく伏せの姿勢をとった姿をみた観衆はおおとどよめいた。

「……見よ、アンナという契約者、銀の獣をあんなに手懐けておるぞ」

「ここからではなにをいっているのかは聞こえないが、きっと銀の獣を完全に掌握しているということを皆に示したのかもしれない」

「さっきまで怪物と勇猛果敢に戦っていたギルバートが、あの女性の前だと子犬のように大人しくなっているではないか」

「これが真の契約者と獣の姿なのか。いつそ神々しくすらある」

期せずして、わけのわからない勘違いで観衆に認められた私であった。

「あ、なんだか、周りの視線がなにかを勘違いしているような気がするのだけれど……でもまあ、私の話が皆に受け入れられたのだからよしとすることにしましょう」

私はひとりそう納得すると、改めて場内にいる皆に向き合った。

候補者達は皆一様に満足そうな表情を浮かべていた。

彼らの思惑がどうであれ、彼らは為政者の資質を持った者達である。現状を把握し、それに対処するということに重きを置いた結果このようになったのであろう。

「アンナ、よかったな。観衆に認められて」

ウエルミナがそう声をかける。

ウエルミナはそのまま観衆に向かって声を発した。

「俺はヌミディアの王族、ウエルミナ・ディ・ヌミディアだ。ヌミディアは俺の一存をもって、この闘技場での宣言を承認する。これはヌミディアの国としての総意でもある」

そういうと、ウェルミナは皆に向かってにやりと笑った。

「俺からのお墨付きだ。皆、ありがたく思えよ」

こうして、闘技場での宣言は幕を閉じたのであった。

「カルナー、ソルスー？ もういいかしら？」

「はいっ！ いつでも出発できます！」

自分の背丈ほどもあるトランクを片手にひとつずつ抱えながら、カルナが軽快に階段から降りてきた。

「これで目ぼしい荷物は全部持ちました！あとは馬車に詰め込むだけです」

「カルナ、いつも思うのだけれど、そんなにたくさんの荷物を持つて本当に重くないの？」

私に声をかけられたカルナは天使のような笑顔を向けた。

「はい、わたくしの血筋は力持ちなんです。だから、これぐらいの荷物は本当になんでもないんです。アンナ様が心配なさるようなこ

とはなにもありません」

「そう、それならよかったわ」

そんな会話を交わすと、私達は最後の荷物を馬車に詰め込んだ。

「ふう……、これでこの屋敷ともお別れね」

改めて屋敷を見つめる。

ここで過ごしたいろいろな思い出が浮かび上がり、私は少しばかり感傷に浸った。

「……アンナ様？」

「ああ、ごめんなさい、ちょっとここでの生活を懐かしんじやったわ」

私はそういうと居住まいを正した。

「二人とも、急な出発でごめんなさい。家族ともゆっくりお別れしたかったでしょうに」

私がすまなそうにそういうと、カルナがぶんぶん両手を振った。

「いいえ、そんなことはありません。わたくしはもとより家を出たときから一人前として振舞っているつもりです。家族も、きつとわかってくれます。それに、おこがましいかもしれませんが、わたくしにとってもアンナ様達は第二の家族のようなものになっているのです」

少しだけ照れながらカルナはそう答えた。

「ソルスは？」

ソルスは少しばかり思案したあと、口を開いた。

「自分には家族はいません。それを寂しいと思ったことは今までありませんでしたが、アンナ様達と出会って、少しだけ、そういった感情がわかるようになった気がします」

そう答えるソルスを、カルナが優しい表情で見つめていた。

皆で馬車に乗り込んで、街道をゆっくりと走る。

これからダキアでの新しい生活が始まる。

どんな困難が待っているのか、それと同時に、どんな出会いや感動が待っているのか。

「ギルバート、楽しみね」

「ああ、そうだな」

希望と不安を胸に、私達は新たな地へと旅立っていったのだった。

それからのことである。

暫定的な和平条約を迎えた三国は、怪物の脅威に対抗しながら新たな道を模索していた。

契約者と獣は「対・怪物兵器」として嚴重に保護され、手厚くもてなされた。

彼らは、ギルバートがいていた「人と獣の絆・新たな姿」として、人々の前に顕現することとなったのである。

メリトウスでは、婚礼の儀が行われていた。

ユリウス3世とセルビアのものである。

街はまるで祭りの季節であるかのように二人の結婚を盛大に祝った。

ユリウス3世の思惑は叶うことはなかったが、彼はこの結婚によって「強大な力」を手中に収めることができたのである。

「本当に私でよかったのか？」

民衆に手を振りながらユリウス3世はセルビアに聞いた。

セルビアは純白の衣装に身を包みながら、見るものがうっとりとするような笑みでもって答えた。

「私はモネの村であなたにお会いしたときから、ずっとあなたの忠実な臣下です」

ユリウス3世はセルビアの笑顔をまぶしそうに見つめた。

「では、これからは臣下ではなく私だけの忠実な后となってもらうか」

「仰せのままに」

――これがのちの、常に前線で戦う影殲滅に長けた「死の后」の誕生の瞬間であった。

ヌミディアの天幕内では獣の姿のキスキル・リラがベッドで寝ている人物に向かってひとり会話をしていた。

「あーあ、結局アンナはママになってくれなかったなあ、ほんとうに残念だなあ」

キスキル・リラはいかにも残念そうな声音でいう。

しかしそのすぐあと、喉をごろごろと鳴らした。

「でもリラ嬉しいんだ！ ギルバートとスコルっていう血を分けた兄弟ができたんだよ！ 今度はいつ会えるのかなあ？ あ、それとね、大人のおねーさんの『私』もアンナにもう一度会いたいんだっ

て。まだ影がいっぱい出てきているから無理だけど、またきつと会えるよね？」

その人物は目覚めない。

闘技場での戦闘後、ウィリアムはヌミディアの強化薬の副作用で一
時危篤状態まで陥った。

今は回復しているが、こうやってベッドの上で寝ていることが多くな
った。

だが、少しずつではあるが快方に向かっていることは確かである。

キスシル・リラはなにもしないウィリアムに飽きたのか、ふわあ
と大きな欠伸をひとつ漏らした。

次の瞬間、キスシル・リラは乙女の姿に変化した。

彼女は完璧な裸体を惜しげもなく晒すと、ウィリアムの隣に体を滑
り込ませた。

片肘を付いてウィリアムの寝顔を見守ると、額にかかる髪の毛を愛
おしそうにそっと払った。

「今まで倒れなかったのが不思議なぐらい、昼夜を問わず研究して
らしたのですもの。今はちょうどいい休息期なのですわ」

キスシル・リラはそのまま眠っているウィリアムの額に柔らかく口
付けをした。

「愛しいあなた。わたくしがあなたの代わりにこの国を守りますわ。あなたが起きるその日まで」

と、外が騒がしくなった。

「影だ!!」

その声に反応したキスキル・リラはベッドの上から起き上がった。

「いつてきますわ、愛しいあなた」

そういい残すと、瞬時に獣の姿に変化し、天幕の外へと飛び出していったのであった。

商人連合の面々はヌミディアの水が合ったようで、族長の甥とともに獣を売買する事業を手広く広げているそうだ。

そのことがこの世界に新たな火種を持ち込むことになるのだが、それはまた別の話である。

そして。

——季節は、祭りの時期を迎えていた。

最終回 銀色の狭間で

ガン、ゴン、ガン、ゴン。

ハンマーを打ち付ける軽快な音がする。

突き抜けるような青空の下、ルウやガルディン、ハティらギルバートの群れが、軽業師のように巨大な材木の間を飛び回る。

彼らはメリトウスの水道橋管理で培った技術を使って、ダキアの草原広場の前に巨大なやぐらを建てているところだった。

「まさかダキアで祭りをする日が来ようとは思ってもいなかったわ」

やぐらの下でフィリップとギルバートと一緒に彼らの仕事ぶりを見学しながら私はそう呟いた。

私の隣で彼らの仕事を見守っていた人型のギルバートは、そんな私の感心した様子を見て取ると、ふっと目を細めた。

「ダキアの王宮で『文化交流をしよう』といったのはアンナだ。その案が見事通り、こうしてダキアならではの大規模な祭りとしての初めての試みがなされているのだからな」

「そうね、でもまさかこんなに早く私が出した案が受け入れられるなんてね。これはギルバートやフィリップが王宮で協力してくれたおかげよ」

私が二人に礼をいうと、ギルバートはそのブルートパーズの瞳をき

らきらと輝かせながら微笑み、フィリップは面映そうに青空のような瞳を揺らした。

「群れの皆もアンナが見に来たことで張り切っているのがわかるぞ。俺達は皆、アンナに喜んでもらいたいがために頑張っているのだ」

その純粋な好意の気持ちを、私はまぶしい思いで受け取った。

「そうなの。ありがとうギルバート、私、本当に嬉しいわ」

私はギルバートにそっと寄り添うと、あれよあれよという間に出来上がっていく巨大なやぐらを見つめたのだった。

――ダキアに移った私達は、ゆっくりできるかと思いきや様々な業務に忙殺される日々を送っていた。

まず国に到着して最初に行ったことは、ダキアの上層部に自分達の存在を認めさせるという作業だった。

これに関してはギルバートが上層部の面々の前で、獣の姿になってテイリウスと一騎打ちしたことによってあっさりと認められたのである。

私よりも先に王宮に来ていたフィリップはその豊富な知識を駆使して、王宮内での足場を固めていた。

そのフィリップがいうには、力が全てのダキアでは、力の強いもの

ほど上に立つのが当然であるという風潮がある。

そのため、ギルバートがこの国で「守りの要」として存在することは彼らにとってなんら違和感のないことと受け入れられたのだ。

私はというと、そのギルバートを従えるものとして、概ね一目置かれる存在となっていた。

「概ね」というのは、私自身は脆弱な人間であるため、そのことを蔑む人たちも少なからずいたからである。

知識という武器を持っていたフィリップは、ティリウスの庇護もあり王宮内で受け入れられていた。

しかし私かというと、どのような呪縛も跳ね除ける体質を持っているだけのただの人に過ぎない。

そのため、ほかの二人よりも王宮に馴染むまで時間がかかったのである。

また、そのときはまだユウキアの花粉の季節であったため、血気盛んな一部の獣達が暗殺という名のちょっかいをかけてきたりもしたが、それはギルバートや群れの仲間、ティリウスが全力をもって阻止してくれた。

私は王宮内での自分の役割を模索していた。

そこで思いついたのがダキアでの、メリトウスの親善大使としての役目であった。

メリトウスの文化をダキアに持ち込むことによって、国同士の文化交流を促そうとしたのだ。

元いた世界の歴史を紐解いても、その国に嫁いだ妃が自国の文化を持ち込み、国同士の交流を深め、結びつきを強くするということをしていたではないか。

幸い、メリトウスの詳しい知識はフィリップが持っている。

そのフィリップとタッグを組み、私はダキアの意識改革を行おうとしたのである。

ダキアにもメリトウスにも、お互い学ぶべきところはたくさんある。

よいものはどんどん取り入れ、いつかお互いが気軽に交流できるようにしたいと私は思っていたのだった。

ダキアには今まで市民が楽しめるような祭りらしい祭りはなかった。

あったとしても、村での宴会程度であつたという。

上層部ではメリトウスの文化を取り入れパーティーを開いたりもしたが、それは例外のようである。

国をあげて行う祭りが開催されるというのはダキアの市民にも伝わっており、やぐらの建造を見ようとたくさんの人が集まってきた。

ものめずらしそうに眺めるものが大半だったが、これからなにが起ころのだらうと期待を込めた目で見るものも少なからずいた。

私はそんな市民達を見つめると、うんとひとつ頷いた。

「最初はこんなもんでいいと思っているわ。これから、何年もかけて、ゆっくりとこの祭りを浸透させていけばいいかなって思っているの。ダキアはいいところよね。手付かずの自然がたくさんあるし、地味は肥えているから作物がよく取れるし。観光農業立国としてプロデュースしたらどうかと思っているのよ」

私がそういうと、フィリップが微笑んだ。

「文化が融合することは大切です。それが相互理解にもつながりますから。それにしてもアンナさん、それは壮大な計画ですね」

「ねっ！ 面白そうでしょう？ せっかくいい物をたくさん持っているのだから、それを生かさない手はないわよ」

私達はまるで共犯者のように不敵な笑みを浮かべたあと、祭りが始まるのを今か今かと待ち望んだのであった。

夜の帳が下りたころ、広場には松明が掲げられ、着飾った人々が一堂に会していた。

「わああ、綺麗ねえ！」

広場には多くの獣が集まっている。

どの獣も、まるで映画「ロード・オブ・ザ・リング」に出てくるエルフのような長いドレスを着て、頭にはユウキアの枝を模した花輪をつけている。

獣の子供は妖精のように愛らしく、広場でぼんぽんと跳ねながらはしゃいでいる。

私は松明に照らされたその幻想的な空間を満喫した。

と、私は広場の一角に獣がたくさん集まっている場所を発見した。

「なにかしら？」

私達はその場所へと足を運んだ。

みると、そこには豪華な飾りがつけられた馬車が一台止まっていたのだった。

「あ、この馬車ってまさか……」

「よう！」

馬車のなかから出てきたのは着飾ったウェルミナ達一行であった。

「ウェルミナ！ どうしてここへ？」

顔の下半分を薄いヴェールで隠したウェルミナはその場で優雅に一礼した。

その峻烈な橙の瞳と、燃えるような赤銅色の髪は健在であった。

「あんたらの様子を見に来たんだ。ダキアでうまくやっているかってな。それと今祭りの季節だろう？ かきいれどきなんでね」

そういうとウエルミナはくるりとトンボを切った。

「さあさ、皆様方、ウエルミナ率いる一座のお出ませで！ とくと楽しんでいってもらおうじゃねえか！」

その掛け声を合図としたかのように演奏と演舞が始まった。

「ウエルミナは、本当はああやって自らヌミディアの文化を広めることによって、ヌミディアという国を他国に広めようとしていたのかしらね」

感心する私に対し、ギルバートが片眉をあげながらいった。

「いや、あのがめついウエルミナのことだ、単に荒稼ぎにきたというのが正しいかもしれないぞ」

その返答に一瞬きよんとしたあと思わず噴出した私は、気を取り直してウエルミナ達の演舞を堪能したのであった。

時は経ち。

——このダキアに来て、すでに三年が経とうとしていた。

私達が持ち込んだメリトウスの文化は、この国に少しずつ浸透し始めてきていた。

それと同時に、ダキア独特の文化を発見する驚きと喜びを私は味わっていた。

ティリウスが約束した宣言により、ダキアは人の国と適度な距離感を保って付き合っている。

だが、これからも文化交流が進めば、それが崩される日も遠くはないのかもしれない。

——そして。

このダキアにもユウキアの花粉は届く。

空は曇天。

鬱蒼と茂る森のなか、空からはらはらと舞い降りている花粉のなかを、私と人型のギルバートは歩いていた。

この国から「妖獣」になるものを出すことのないように、また未だ

現れている影を探索するパトロールも兼ねてである。

「またこの季節がやってきたのね」

私はひとり呟いた。

この世界は今どこへ向かっているのだろう。

円環から外れたこの世界は、ちゃんと新たな道へと歩みだせているのだろうか。

私は息をつくと花粉よけに被っていたフードを取った。

ギルバートがふとなにかに気付いたようにいう。

「アンナ、その髪飾り、前に俺がメリトウスの祭りで買ってやったものだな」

私は、今日は下ろした髪を銀の髪飾りで止めていたのだ。

私はそれに手をやると、ふっと微笑んだ。

「ええ、そうよ。こんな日でもなければ、ギルバートとゆっくりできないと思って、それで気分転換につけてみたの」

そのとき曇天からかすかに日が差した。

雲間から、光の梯子が私の上に降り注ぐ。

私は空を見上げて目を細め、手を額にかざした。

「めずらしいわね、光が差すなんて」

ギルバートは私に光が降り注がれているのを見てちょっと驚いた表情をしたあと、立ち止まって私の手を取り、それに柔らかく口付けた。

「アンナ、愛している」

「なあに？　こんなところで」

「ユウキアの花粉にあてられた」

「馬鹿ね、そんなことあるわけないじゃない」

ギルバートは私にそっと寄り添い、私を抱きしめた。

「今、アンナがどこかへ行ってしまうかと思った。びっくりして、思わず引き止めなければと思った」

「やあねえ、どこへもいかないわよ」

ギルバートの腕の中でくすぐすと笑うと、私は彼を抱き返した。

「ギルバートこそ、私を置いて先に逝ってはだめよ？　私はそれだけが心配だわ」

私がちょっと怒ったようにいうと、ギルバートはその顔を見て安堵したようにいった。

「アンナ、俺はギルバート・ファーガス・チェーンだ。だれにも傷つけられることはない」

「そうね、そうだったわね。ね、これでおあいこよ」

そうして私達は二人で微笑むと、また森の奥へと足を進めたのであった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「私の大切な人達へ」

あなた達に対して手紙を書くのはこれが最初で最後になると思います。

どうか悲しまないで下さい。

私はこの世界でしっかりと根を張り生きています。

日本とはまったく違う世界ではあるけれど、それでもここでは、人々が笑い、泣き、そして生を謳歌しているのです。

あなた達に会えなくてつらいと思ったことはたくさんあります。

でも、あなた達のことを大切に思っているのと同じくらい、こちらの世界で、私には大切な人がたくさんできました。

不思議でしょう？

人付き合いに不器用で、心の端っこではどこか冷めていて、本当は臆病だった私が、この世界でもたくさんの信頼できる人達を見つけることができました。

あなた達にはもう会えませんが、私はこの狭間の世界で生きていくと決めたのです。

私は元気でやっています。

たくさん素敵な人達に囲まれ、私は生きているのです。

だから、心配しないで。

今まで育ててくれて、付き合ってくれて、本当にありがとう。

あなた達がいたから、私はこの世界でも生きていけるのです。

皆のこと、愛しています。

それではさようなら。

——この銀色の狭間で、私達は明日を生きる。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7610k/>

銀色の狭間

2010年12月6日00時08分発行